

ジョルノが4部に出るようです

アズマケイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

汐華初流乃の母親がエジプトからディオの仲間を頼って社王町に行った世界線（pixivに投稿済）

目次

第1話	1
第2話	30
第3話	63
第4話	88
第5話	106
第6話	125
第7話	149
第8話	166
出会い編完結	191
ソラリス	210
ソラリス2	231
オールドフィールド	254
ドリーム・シアター1	277
ドリーム・シアター2	299
ザ・ロツク	316
サーフィス1	326
サーフィス2	338
絵描きに会いに行こう	349
ブラックウオーター・パーク	364
レッド・ホット・チリ・ペツパー1	375
レッド・ホット・チリ・ペツパー2	387
ヘブンズ・ドアー	400
メモリー・オブ・ジエツト	413
メモリー・オブ・ジエツト2	422

ハーヴェスト	432
ハーヴェスト2	444
ゴールド・エクスペリエンス	458
ゴールド・エクスペリエンス2	469
コスモス・ファクトリー	484
ハーミットパープル	501
ハーミットパープル2	511
シアー・ハート・アタック	523
シアー・ハート・アタック2	537
アトム・ハート・ファージャー	550
フェイツ・ワーキング	561
ほか	
アンダーワールド1	579
アンダーワールド2	591
リキエルとウンガロ	599
エジプト展覧を見に行こう1	613
エジプト展覧を見に行こう2	623
スーパースター1	637
スーパースター2	649
殺人鬼の家	663
シャドウギャラリー1	674
シャドウギャラリー2	685
マネキンヴィレツジ	699
作業員を探そう	713
作業員を探そう2	726
作業員を探そう3	738

作業員を探そう 4	752
ハイウエイスター 1	761
ハイウエイスター 2	774
ハイウエイスター 3	782
エニグマ 1	793
エニグマ 2	803
インスタント 0 その 1	816
交渉	840
ザ・ブック・オブ・ソウル	855
電波虫 1	861
電波虫 2	877
インスタント 0 その 2	892
インスタント 0 その 3	901
インスタント 0 その 4	913
ダイヤモンドは砕けない	921
ダイヤモンドは砕けない 2	936
最終話 汐華初流乃には夢がある	945

第1話

僕の母親はとても美しい女性であったけれども、決していい母親ではなかったと、彼女のことをよく知る大人たちは誰もが口をそろえていう。実家がある故郷に帰ることもなく、シングルマザーとしてエジプトから帰ってきた彼女は、縁もゆかりもないこの街に移り住んだ。幼い僕を置き去りにして、毎日のように彼女はよく夜の街に遊びに出掛け、男を買いあさり、男を連れ込んで情事に耽るような女性だった。彼女が働いている所は誰も見たことがなかったが、いつでも彼女は羽振りがよかった。

バブルの女性らしく煌びやかな衣装を身にまとい、宝石や貴金属で着飾りながら、ブランド物で身を固める彼女は、シングルマザーにはとても見えなかった。

とても若々しく、美しい女性だった。そのかわり、好みの男が絶望的に最悪な性格ばかりだった。酒が入ると殴る蹴る、タバコの火を押し付ける、ベランダに叩きだす、大声で怒鳴りつける、ありとあらゆる暴力をふるう彼女の恋人。

まだ3歳だった僕は、どうすることも出来なかったことだけ覚えている。彼女がいない時に隠れてするのはまだいい方。彼女の子供である僕に、前の男の面影を感じるといふ理不尽な理由で凄まじい虐待をくわえられたこともある。

他人の顔ばかりうかがう、いつもびくびくしている卑屈な性格は、数えきれない彼女の恋人から生きぬくために生まれたものだ。

延々に続く暗闇のような生活の中で、いくら恐怖しても絶望してもどうしようもないと悟った僕は、泣くことは無駄だと悟るのも時間の問題だったように思う。ただひたすら震えていることしかできなかった。

彼女のことをよく知る大人たちは、僕が今こうして生きているのは、奇跡だとみんな口をそろえて言う。僕もそう思う。僕にとっての世界は新興宗教のように飾られているイギリス人の父親の写真があ

り、彼女が雇ったベビーシッターの人が用意するものが雑多に並べられた六畳間だけだった。

ベビーシッターの人たちも二度と会うことがなかったのは、きっと彼女にお金を渡していた人たちのせいなんだろうとは思う。僕は3歳になるまで、一度も外に出してもらえなかった。理由は簡単。彼女は僕の出生届を役場に出していなかった。

だから僕は3歳になるまでこの世界には存在していなかったことになる。予防接種も健康診断もできないし、体調を崩しても保険証がないから病院に連れて行ってさえもらえなかった。

過度なストレスと劣悪な環境にさらされ続けたせいだろうか、1987年の12月下旬から2月上旬の50日間、僕は原因不明の高熱にうなされて生死の淵をさまよっていた。

カレンダーもテレビもない世界で、日付だけが印象に残っているのは、もうこの世にはいないベビーシッターの女性が教えてくれたからだろう。彼女はとても僕によくしてくれた。朦朧とした意識の中で、抱きしめられた記憶だけがぼんやりと残っている。

彼女はいろんな話をしてくれたけれど、僕は何一つ覚えていない。彼女が来なくなった日から僕はゆっくりと死にかけていく。病院に連れていってもらえず、市販の薬や熱さましなんて用意してもらえず、フラフラになりながら大人用の薬を飲んだせいで症状が悪化したことだけ覚えている。

たしか、このころだったと思う。僕の身体にイバラの蔦がまきついて、育つことに気付いたのは。種ごと食べてしまった果物が体の中で育ってしまったんじゃないかって、恐ろしい妄想に取りつかれてしまった僕は、とうとう我慢できなくなってしまった。

彼女と彼女の恋人に助けを求めても、どうやら僕が錯乱して幻覚を見ているようにしか思えないらしい。どんどん身体を覆い隠していく蔦に絡まれて、転んでしまった僕を見る二人は、まるで頭がぱーんとなつてしまったかわいそうな人を見るような目をして、僕を見下ろしていた。

そして、ヒステリックに陥った彼女が僕に手を上げようとして、薦にふれた瞬間、なぜか彼女の頬は真っ赤に染まり、変な方向に飛んで行ってしまった。その日からいよいよ彼らは僕のことを存在しないものとして扱うようになった。

でも、わけのわからない力に目覚めてしまった僕に対する恐怖心はあったのかもしれない。気が付いたら子供用の市販薬とよく冷えたスポーツドリンクが転がっていたり、すぐに食べられる小さな子供用の食べ物置いてあったりした。

扉の向こうで彼らが言い合うことが増えた気がするけれど、僕はよく覚えていない。もうその頃には、僕のことを食べようとしていた植物はなくなっていた。

そして、12月ごろだったと思う。彼女が原因不明の病に倒れて、彼が救急車を呼ばなければ、1か月近く放置されていた僕はきつと死んでいたに違いない。その日はとても騒がしい日だった。

遠くから聞こえるサイレンがどんどん近づいてきて、僕の住んでいたマンションにとまった。たくさんの人たちが押しかけてくる音にして、僕は毛布にくるまって震えていた。金の無心に来る彼女の恋人はたくさんいた。怖い人たちが押しかけてくることもあったからだ。

でも、彼女の恋人が制止するのを振り切って、外側からしかかけられない錠の落ちる音がしたとき、僕の世界は終わりを告げる。僕の世界をこじ開けたのは、驚いた顔をした救急車のおじさんたちだった。

子供がいると叫ぶ誰かがみえたとき、僕のことだつて気づくにはずいぶんと時間がかかったように思う。担架で運ばれる僕が見たのは、拘束される彼女の恋人とぐったりとしている母親の姿。そして、がりに痩せ細った今にも死にそうな3歳の男の子を見て、絶句している野次馬の人ばかりだ。

もう大丈夫だよ、とおじさんに言われた。生まれてはじめてまっすぐに僕を見てくれた人に会えた気がして、僕はしっかりと握りしめてくれた手を握り返すことしかできなかった。もうこのころには、僕の身体は、無駄な水分を消費できない体質になってしまった。

僕が目を覚ましたのは、2月上旬のことだ。生まれて初めて見る大きな鏡に映る僕は、父親となんで似なかつたのだと罵声された黒髪ではなく、金髪になっていた。驚いている僕を見かねた看護師さんが、何度も洗わないとその綺麗な金髪は現れなかつたのよと教えてくれた。

僕が黒髪だったことを知っているのは、母親と彼女のたくさんの人たちだけだ。誰も僕が黒髪と黒い目を持っていたことを知らない。どうして黒髪から金髪になったのか分からないまま、僕は看護師さんに世話を焼いてもらった。彼女は死んだと教えてもらったのは、数日後のことだ。

原因はわからない。ただ分かるのは、頭の中がすつからかんになっていたことだけ。数年かけてゆっくりと進行していた病は、一気に彼女の脳みそを食い破ってしまったらしい。

1日目、最初は疲れているだけですぐに治ると思った。2日目、症状がだんだんひどくなる。3日目、高熱や頭痛、吐き気に襲われ、意識障害に陥って救急車に運ばれる。

4日目、懸命の処置もむなしく死んでしまったらしい。彼女がエジプトに渡航履歴があることから、もしかしたら未発見のウイルスにでも感染して、潜伏期間の果ての発症じゃないかって疑われた。

なんでも似たような日程でエジプトに渡航履歴をもつ人たちが、似たような症状で死んでいることが、世界中で起きているらしかった。致死率は100%。発症するとわずか数日で命をおとすとしてもない病気だったらしい。

予防接種もろくに受けていない上に、瀕死状態で免疫力皆無なはずの僕が生き残ったのは、まぎれもない奇跡というわけだ。是非とも研究に協力してくれと、たくさんのお医者さんたちにいわれて、僕は頷いた。だって、僕にとっては生まれて初めて出会う大人たちだった。

母親でもない、母親の恋人でもない、ベビーシッターの人たちでもない、ろくでもない大人ではない、まともな人たちだった。たくさん検査をうけた。たくさん注射を打たれた。頭のとっぺんから足のつ

ま先まで調べつくされて、世界中に僕のサンプルを使った研究がすめられたと褒められた。

いくらでもがんばれた。だって、母親の恋人は逮捕されて、刑務所に送られて、きつと僕が大人になるまでは出てこないだろうと教えてもらえたからだ。ここで僕はようやく「いい人」と「悪い人」の区別がつくようになった。

僕が児童養護施設に迎えられたのは1988年の4月16日、春の日のことだ。無国籍状態だった僕は、家庭裁判所の手続きの過程でようやく誕生日を与えられることになる。そして僕は、10年間勝手に生える植物や突然姿を変えてしまう小さな生き物たちに悩まされることになる。

僕の名前は汐華初流乃。戸籍上の誕生日は1985年4月16日の14歳。165cm、AB型、好きな物語はレ・ミゼラブルと青い鳥。好きな食べ物はチョコレートとプリン、そしてタコのサラダ。嫌いな食べ物は鶏肉、特に鴨の肉だ。

1998年10月下旬、ある男が施設を訪ねてくるところからこの物語は始まる。

それは僕が10歳のときのことだ。あいかわらずランダムに発生する超常現象に僕は頭を悩ませていた。無意識のうちに発生する小さな生き物たち、突然空間に出現する植物たちは、僕がふれた物体が変化したもの。

どうして僕が起点になっているかわかるのかというと、たいてい僕がその物体に触れていた時に考えていたものが出現するからだ。そ

これに物体をもとにもどす時間は僕の意志が反映されていた。このころは触れた物体が生き物に変化する時間と生き物が物体に戻る時間にはタイムラグがあった。

おかげでうつかり植物に変化させてしまうと、枯らす前に大きな樹木に成長させてしまうことが度々あった。生き物凶鑑を片手に物体から生まれた生き物を観察したところでは、生まれたものは本物の生物と変わらない習性や特徴を持っている。でも、この時の僕はいまいち行動を制御することができなかつた。

施設に入り込んだ蝶を追いかけまわしていた僕は、ようやく捕まえた最後の一匹を虫網で捕まえた。薄い褐色の縁取り、黒い斑点が小さくある山吹色が鮮やかな蝶が窮屈そうな虫かごに収まった。羽を閉じれば地味な赤褐色で、疲れたのか休憩している蝶は枯葉みたいだ。まるで蛾と間違えてしまいそうな地味な蝶だった。季節が許せばモンシロチョウやアゲハチョウにシフトできるんだけど、あいにく今の季節は冬をまじかに控えた秋である。不自然に季節外れの昆虫が大量発生すれば大騒ぎになってしまう。

興味本位での実験だった。施設では子供たちがもらえるお小遣いは金額が決まっている。小学生の僕は月に1000円しかもらえない。だからこういった実験に使えるようなものを買う余裕はどこにもない。壊してしまったら大騒ぎになる。

だから今まで僕の私物でしか試したことがなかった。今回は中学に進学した仲間がお下がりとして文房具を一つくれたのだ。本来の持ち主のいる部屋の数歩先でようやく捕獲した蝶は、隙あらば本来の持ち主のところに戻ろうともがいている。

やっぱり僕が作り出した生き物は、その物体の本来の持ち主のところに戻る習性があるらしい。これでまたひとつ、僕の持っている力を知ることができた。いつか制御できる日がくることを夢見て、踵を返した僕はかちやりというドアノブの音を聞いた。ふりかえると、誰だ、と生気のない瞳がこちらを見下ろしていた。

「なんだ、ジヨルノか。なにしてるんだ」

ジヨルノ、は僕の通称だ。汐華初流乃は、シオバナハルノとよむ。これはいなくなつた人たちが教えてくれたことだから、僕はしっかりと覚えてる。でも、ハルノ、という女のような日本人の名前と僕の外見は、どうもしっくりこないらしい。

初めてみて、読むことができない名前、音の響きを優先して漢字を当てはめた名前であることも拍車をかけた。母親が生きていたらいくらでも後付をしてくれただろうが、彼女は故人だ。

だから、生まれも育ちも日本人なのに、外国人の名前を日本風と呼んでいるだけなのだろう、と認識されてしまう。数えきれないほどの訂正を繰り返した僕は、とうとう折れてしまった。施設の中だけならともかく、学校や社王町の人たちすべてに説明しつづける労力を思うと、気が遠くなつてしまったのだ。だから、3つ上の彼も僕のことをそう呼んでいた。

「こいつが迷い込んだんで、捕まえたんですよ」

僕は虫かごをゆらした。ふうん、と目を細めた彼は、思案顔だ。いつもの彼らしくない。いつでも学生服をきている彼は、基本的に部屋から出てこない。このころようやく落ち着いていたけれど、衝動的に自分を傷つけるほど情緒不安定な彼は、僕も含めて施設の人間とは大きな心の隔たりがあった。

「ジヨルノ、ちよつとこい」

「え？・なんでです？」

「ひとつ、いいことを教えてやるよ。この蝶は今の時期いないはずの蝶なんだ。

似たような種類がいるから間違えたんだろうけど、秋にこいつがいるのはおかしい。

どうせ上手くやるなら、もうちよつと理科の勉強しろよな」

膨大な量の書物を一回読んだだけですべて記憶し、それらをすべて逆から読み上げることできる、常軌を逸脱した才能を持った少年が笑う。僕はしまったと思った。かたん、と虫かごの中で、彼の名前が入っている文房具がころがった。僕は観念して彼の部屋に入った。

ぱたん、と扉が閉まる。もともと感情の起伏が少ない人ではあったけれども、常人離れた現象を見ても驚きもしないことに驚いていると、彼はベッドにおいてあった本を手を取った。みえるか？といわれて頷くと、そういうことだ、と彼はいう。彼が言うには僕以外にその本をみた人はいないらしい。どうやら僕と彼には共通点があったようだ。

「なにしてたんだ？」

「実験してたんですよ、コイツで」

「おれがお前にあげたやつか、ふうん。持ち主のところに戻ってくるんだな」

「そうみたいです。条件がまだわからないけど。」

名前がいるのか、いらぬのか、とか」

「じゃあ、協力してやるよ」

「なにか貸してくれるんですか？」

「ああ」

学習机の引き出しから取り出されたのは、化粧品。中学1年生の男子生徒がもつには不自然極まりないが、なんとなく僕は察した。彼は捨て子だ。天涯孤独で両親の顔も知らない。ころがる化粧品をにぎりしめた僕は、それをさつきと同じ昆虫に変えた。

「いつまで生きてるんだ？」

「僕が死ねと思うまで」

「なら、明日、出掛けるぞ」

「明日ですか」

「ああ、オリオン座流星群を見に行こうぜ。明日は土曜日だから午前中は学校に行つて、午後から休みだ。夜の10時が一番の見ごろらしいから、早めに寝なくちゃあだめだ。夜空を光がよこぎるんだぜ。鳥よりも早く、馬よりも早く。きつとこの世が終わる時の光景に似てる。おまえも見るべきだ」

なんでもないように彼はいう。何も知らない僕は、うなずいたのだった。

そして、僕は目を覚ます。

養護施設は、社王町の北西部に立っていた。2歳から18歳までの様々な理由を抱える子供たちが、100人くらい職員の人たちと一緒に暮らしている。僕が住んでいる施設は大きな建物の中がいくつも区切られていて、その中に必要な設備がある。

キッチンもダイニングルームも浴室も脱衣所もスタッフルームも完備。だいたい1グループに少なくとも13人、多いと20人くらいが共同生活してることになる。好奇心から生活実態を聞いてくるクラスメイトは、規則だらけの息苦しい生活が可哀想と同情めいた視線を向けてくる。僕に言わせればだからどうしたという話で、普通ってなんだろうと不思議に思う。

僕はこの生活しか知らないから比較対象がないし、すっかり馴染んでしまっているから、どう思うと聞かれても困ってしまう。だから僕はこの話はしないことにしている。無駄な説明は嫌いだ。

この施設は小学生以下の子供たちは和室で雑魚寝、小学生以上になると2人部屋、3人部屋に移動できることになっている。僕は13さいだから、2人部屋にいるのだ。

ずいぶんと懐かしい夢をみた。時計を見ると、まだ起床時間にははやい。下段のルームメイトはまだ寝ていた。はあ、とため息をついてもなにもかわらないのはわかっている。でも気分が重いのは事実だ。あのときのことを夢に見たのは、今日が3年前のあの日と同じ10月21日だからだろう。

それに、今の僕は彼が羨ましいに違いない。今の時代、高校に進学するのは義務といってもいい。中卒で就職できる時代はどうにすぎている。だから僕もいつかは高校に進学すると思う。でも選択肢は公立のみだ。児童養護施設の子供が私立の学校に行くにはどうしても資金面での問題がでてくるのだ。奨学金をあてにするのも限界がある。どうしても家族の援助が不可欠になる。

でも、夢に出てきた彼は違った。彼は天才だったし、何らかの事情で学資を確保して、私立の中等部に入った。それからはエスカレーターで高等部に通っている。一人暮らしの許可が下りるのも前例がない待遇だ。もちろん、彼のたどってきた経緯はまじかで見てるから嫉妬を覚えるわけではない。この施設から離れられたことが羨ましいのだ。今の僕にとっては。

1998年10月21日水曜日。憂鬱の一日が始まった。今日から僕は施設のスタッフ同伴で公立の学校に通うことになっている。具体的には、僕の安全が確保されるまでの無期限。服役中の僕の養父が、死刑囚の男と共に刑務所を脱走した。きっと全国紙の三面記事を独占する大ニュースが杜王町を駆け抜けるのも時間の問題といえる。

下校時刻のチャイムが鳴る夕暮れ時、車でスタッフの男性が迎えに来てくれた。施設の名前が入っていない普通車は、とてもきれいにしている。どうやら彼の私物らしい。感心したのもつかの間、車のトラックにはごちやごちやといろんなものが放り込んである。

あわてて片づけたのが窺えた。僕の視線に気付いたのか、彼はバツ悪そうに笑うと、さあ乗った乗ったと僕を後部座席に放り込んだ。あんまり人の車の中を観察するんじゃないやありません、と茶化して笑うルームミラーが笑う。傍らに学生鞆をおいた僕は、シートに体を預けてみる。

でも気分的に落ち着かないせいで視線がせわしなくあたりを見渡してしまふ。彼は、僕がシートベルトをつけたことを確認して、ハンドルを握った。ぶうううん、と車が動き始めた。施設でみたことはないけれど、どうやら彼は喫煙家らしい。車のケースは満杯だ。

シートに染み付いた煙草の匂いとヤニくささを打ち消す強烈な香水の香りが、脳天を直撃する。僕はすぐに窓を開けていいかと聞いた。車酔いと勘違いした彼は、鼻が曲がっているのか、バカなのかのどちらかだ。きつと。

後部座席の中途半端に開いた窓にはほつりほつりと水滴が流れていく。雨の匂いがする。風は吹いていない。うつすらと山をきめ細かい雨が、まるで雲のように横切っていくのが見える。冬に向かう社王町は朝からどんよりとした雲に覆われていて、気が滅入りそうになる。

憂鬱な表情をしている僕をルームミラーで確認した彼は、どこかによるかきかきと内緒話をするように囁いた。児童養護施設にいる子供たちは、基本的にすべてが共用である大前提があるため、一人が鼻屑されることは非常に稀だ。内緒はとっても心惹かれる言葉なのはいくつになってもかわらない。でも、僕は首を振った。今はそんな気分じゃないからだ。

「なんだってあの人は僕のことを捜しているんでしょう？」

僕の杞憂はそこにある。施設長曰く、養父の代理人を名乗る弁護士が僕を訪ねてきたことから、この送り迎えは始まっている。弁護士会に連絡してみれば、架空名義の実在しない氏名だったから、警戒

するのがあたりまえだ。

このところ、僕のような境遇でもう一度引き取られた子供が、母親や父親、恋人あたりに殺害される事件が表面化してきているから、スタツフはみんなピリピリしている。世間体や謎の介入、圧力による断念、報復を恐れての引き取り拒否と僕の場合は、驚くほどの偶然が重なってこの施設にいるわけだから、迎えに来る人間がいるわけがないのだ。

だから、今さら養父が引き取りたいと申し出る理由がわからない。汐華家は寄付金を施設にいれるくらいは、僕のことを気に掛けているようだが、汐華家の子供として引き取る気がない時点で遺産の問題は無縁といってもいい。

母親が持っていた資産は大半が養父によって吸い上げられ、たくさんの恋人たちが大挙して押し寄せたせいで、強盗に遭った被害者の家のように、僕の家はすっからかんになっていた。なけなしの貴金属や宝石、ブランドものはすべて彼女の葬儀と埋葬、そして僕の長きにわたる入院生活で底を尽きてしまった。

だから、僕が持っている自由に使えるお金などないのだ。僕に利用価値があるとは到底思えない。だから、不思議でたまらないのだ。

ぼつりとこぼした僕に、彼はそうだなあとうなずいた。

「子供でもお金を稼ぐことはできるんだと言ってたよ。まったく。

せめて刑期を全うするくらいの誠意は、みせてほしかったなと思う。

「ただただ残念だね」

親身になって代弁してくれる彼は、施設の中でも子供たちに慕われている。僕はなんとなく手持ち鞆からはみ出していた財布を引っ張り出した。お札がずれていたのだ。綺麗に整えて再びしまう。僕に残されたのは、財布に入れている父親の写真だけ。

新興宗教の教祖のように、異様に装飾された額縁に飾られていたこの写真は、まるで新品のように綺麗なままである。ディオ・ブラン

ドーと書かれているイギリス人の男。半裸な金髪の男の写真はどういう状況で撮影したのか考えると、非常に複雑な心境に陥るので考えないようにしている。

正直に言うと僕はこの男に全く興味が無いのが現実だ。額縁もお金に変えてしまったので、行き場をなくした写真が帰ってきただけだ。僕の数少ない私物の中で、入れられるのが財布だけだった。わざわざ写真たてを買って飾れるほど、施設はプライベートが保障されていない。きつちりと仕舞われた財布がある。きちんと管理しないと手癖が悪い子供が持つて行ってしまう。

「あ、きつっきの話は施設長には内緒にしておいてくれるか。

初流乃にはいわないことになってるんだ」
「わかりました」

僕もつられて笑った。少し、雨が強くなった気がする。雨音にまぎれながら飛び込んでくる光景を僕は眺めていた。車はまっすぐに施設に向かって走っている。今の時期はあつという間に暗くなってしまう。

ぼんやりとうつる鏡写しの窓ガラスをながめつつ、僕は顔をしかめた。酷い顔だ。理由の分からない不安を抱えている僕は、酷く乾いた顔をしている。のどがかわいたなあ、となんとなく、僕は思った。

「なら、ちょうどあそこに自販機があるな。休憩するか」

つい口にしてしまったようだ。ヘッドライトが自動販売機を照らしている。ゆっくりと右に曲がった普通車は、駐車スペースに収まった。口止め料だ、受け取れよって茶化す彼が小銭入れ片手に車から降りた。

傘も差さずに横着なひとだ。少し眠そうだから、コーヒーでも買うのかもしれない。きつと僕の方も甘ったるい缶コーヒーだろう。鍵はつけっぱなし、暖房を効かせているからだ。窓の向こうから、僕は

自動販売機に移る影をみつめた。僕が見ていることに気付いたらしい。彼は僕を見て笑っていた。そして、自動販売機に小銭を入れた。

またこつちを振り返る。そして、なにか言ってる。輪郭がうごいてる。

なんだろう、と目を凝らす。雨粒が邪魔して輪郭があいまいだ。薄暗い外はよく見えない。彼の影が動かない。どうしたんだろう、自動販売機は商品が選べるよう緑色のボタンがすべて点灯しているのに。さつきから何かおかしい気がする。

なんとなく違和感を覚えてしまう。いいようのない不安が胸を込み上げてくる。僕は後部座席のドアに手を掛けて考える。見つからない。何かがおかしいのに、おかしいはずなのに、その何かがわからない。

いつだったか、生まれて初めてイバラに蝕まれている自分に気付いた時と似ている、歯がゆい感覚が僕を襲った。そして、僕はようやく気付くのだ。彼の表情が、彼の調子のいい笑顔が消えていた。そこにあったのは沈黙だった。不自然なまでにこちらを向いたまま微動だにせず直立不動のまま彼は立っていた。

口だけが動いていた。いや、口だけしか動けないのだ。何かに囚われてしまって、あるいは想像を絶する恐怖に遭遇してしまって、脳内が現実を拒否しているせいで行動に移せないのだ。それがさらに不気味だった。

い、のくち。え、のくち。お、のくち。何度も繰り返される3つの音。かつて母親と養父に向けられた眼差しだったから、僕はすぐに分かったのである。そのまなざしは僕ではなく、僕の真後ろの窓方向に向けられているということに。僕は迷うことなく鞆を握り締めて車を飛び出した。

「逃げろ、初流乃っ！」

それが僕が聞いた最期のニンゲンの言葉だった。その次に聞こえたのは、ニンゲンがペしゃんこにつぶれる音だった。ざあざあざあ、と空から降り注ぐ雨が、町中を洗い流していく。黒く分厚い雲は頭の上を広がっている。曇天だ。

今日はオリオン座流星群は見られそうにないなど僕は思った。冷たい雨に冷やされた空気は霧になり、空気よりも軽くなって空に昇って行つて、雨雲になる。あたりは酷く視界が悪い霧雨に包まれている。真つ黒な影が、大きな影が揺らめいていた。その傍らに、養父はいた。彼の頭を踏みつけていた。にい、と養父は笑った。

僕は走った。

走つて、走つて、走つた。

目指すのは、いつかオリオン座流星群をみた大きな川が流れている土手だ。連日の雨で水位が上昇し、濁り切った土の色をしている濁流の泡立つ第一級河川だ。すっかり息が上がっている。

「もう追いかけてこは終わりか？初流乃」

「誰のせいだと思ってるんですか、アンタは」

びしょ濡れの前髪を掻き上げる。養父は忌々しげに舌打ちした。

「捜すのに苦労したぜ。まさかここまで綺麗に髪が突然変異するとは思わなかった。

今さら血に目覚めたつておせえんだよ。出来損ないが」

「なんのことです？」

「白い羊膜に包まれてない時点でクルースニクでない、クドラクでもない、

ダンピールですらないただのニンゲンだったつてのになあ？

出来損ないだから見捨てられたんだよ、お前はよ。

だからせめて3年育ててやった義理をきっちり返してくれや。なあ？

それが子供から親への恩返ししてもんだらう？こっちは金に困ってんだ。

つべこべ言わずについて来い」

「なにを訳の分らないことをいっててるんです、アンタは。

刑務所ではなくて鉄格子の刑務所の方がよかったみたいですね。

親の権利だともいうつもりですか？バカバカしいですね、聞いてあきれます」

僕は慎重に養父との距離を探った。足を止めることは出来ない。ぐっしより濡れた運動靴から伝わる地面の感触と養父の背後に迫る濁流の間隔、すべてを頭の中で冷静に処理している。僕はこの上なく激昂していた。よりによって、寄りにもよってこの男は僕の目の前で彼の命をあんなにもたやすく奪って見せたのだ。

命の尊厳を踏みにじり、汚い土足で蹴飛ばして見せたのだ。たかだか金のために。何も出来なかったあの頃の僕ではないのだと反響する叫びが川の濁流でかき消されていく。険しい顔の養父は、これ見よがしにため息をついて、肩をすくめた。

「誰に口を利いてんだ、てめえは。あ？」

聞き分けのないガキを相手にするのはつかれた、これはしつけど、と言いつい聞かせるたびに養父がしてきた言い訳がそこにある。どこまでも根性が腐っている人間は10年刑務所の中にいようと変わることは無いのだと僕は強烈に認識する。

「やれやれ、大人しくついて来ればいいものを。これだからガキは嫌いなんだ」

「なんのつもりですか」

「お前は昔からそうだな。ずいぶんと聞き分けが悪い上に、頭も悪い。しかたなくオレはしつかけをほどこした。13にもなつて恥ずかしく思わないのか？なんて報告を赤の他人にする恥ずかしきときたらないぜ、まったく」

養父は言い終わると同時に、ものすごいスピードで僕目掛けてなくりつけてきた。僕は目をそらさなかつた。冷ややかなまなざしで養父を見上げた。あれだけ大きかつた恐怖の存在は、ほんの少ししか身長差がないちつぽけな存在になり果てている。

僕の身体に茨のついた植物が張り巡らされていく。その拳を弾き返し、強烈な一撃を回避した僕は、駆け出した。養父は再び拳をふるう。あつたはずの間合いはいつの間にか消し飛んでいた。生み出された生命は与えられた苦痛を相手にそのまま返す作用がある。

おそらく強靱な粉砕力はそのままカウンターを食らつて悶絶しているはずだ。養父は忌々しげに舌打ちをする。

さきほど見えた黒い影の正体がようやく僕の前に現れた。見上げるほどの巨漢。まるで重戦車のような禍々しい装備をした巨人が養父の意志に従つて攻撃を仕掛けていたのである。

「ずいぶんとアンタにはもつたいたいな従者ですね」

「出来損ないの悪童よりよっぽど役に立つ可愛い奴だぜ、こいつはな」
「いつから大道芸人になつたんです？サーカスにでも就職したらどうですか？」

「ふん、吸血鬼の息子の癖に、生命を生み出すとは皮肉なスタンドを使いやがる。なんだつてクリエイティブなスタンド使いばかりなんだ。めんどくさいことしやがつて」

「スタンド？なんです、それ」

「お前は知る必要はないんだよ」

聞き慣れない単語を繰り返した養父は、僕でも知っている洋楽の題名を叫んで、重装備の巨人を呼び出した。あのスタンドとかいう巨人

は、僕の持っている力と同じものだと言った。僕の父親は吸血鬼だとも口走った。

本気で気がふれたのだろうか、この狂人は。一瞬の思考の停止が隙を生んでしまう。ぐふ、と鈍い息が漏れた。急所目掛けて放たれた養父の右手が巨人の腕と重なり、ありえないほどの質量を持って巨大化したではないか。

あまりにも歪な形をした剛腕は気持ち悪くて目をそらしたくなる。間髪で受け止めてくれた植物が僕を届かない間合いまで後退させてくれる。まるで生き物が先導してくれるような感覚があった。

でもあの洋楽の名前をした巨人のような明確なヴィジョンは見えてこない。何か足りないのだろうか、僕にもそのスタンドとか言うやつはいるらしいのに。もどかしさを抱えながら、僕は養父を仕留めるための思考を再開した。養父があんなに簡単に彼をペしやんこにしたのは、巨大化した右手が原因のようだ。

これが養父の能力だとすればずいぶん脳筋だが、シンプルで分かりやすい分たちが悪い。いちいち繰り出される一撃が重いのだ。僕のことを守ってくれているスタンド？の防衛が間に合わなければ、間違ひなく僕はビルの上階から突き落とされたも同然の惨事に見舞われる。

強力な打撃を防衛してはカウンターダメージを叩き込み続けている僕だったが、体格差とスタンド？同士のパワー差から出てくる体勢の崩れまでは阻止できない。アスファルトの堤防まで吹き飛ばされた僕は、凄まじい勢いで叩きつけられてしまった。

一瞬呼吸が止まる。だから吐き出される鉄の味が気持ち悪い。ずるずると落ちていく僕に、養父が容赦なくスタンドを叩き込んでくる。

アスファルトが粉みじんになる音がした。すぐ後ろの堤防が挟まれていく。僕はひたすら逃げ延びるしかない。僕は片っ端からダメージを軽減するための植物を作り上げ、養父の進行を妨害した。

まわりついてくる植物で組み敷いても、すぐにありあまる腕力は

鳶を弾き飛ばしてしまう。堤防が植物に代わる。地面が植物に代わる。ばらばらになった生命の残骸を踏みしめて、養父はぼくに迫ってきた。

「どこを狙ってんだ？初流乃よお。これじゃあじり貧だぜ？少しは楽しませろよ」

けたけたと養父は笑う。はたから見れば防戦一方だろう。僕はひたすら防衛陣をひいては逃げ回り、養父はすべてを粉碎して回るのだ。僕がいくら鳶で動きを絡め取ろうとしても、動きを制御できるほどの拘束力となるパワーを僕は持っていない。

止めたところで決定打が与えられるほど僕はパワーがない。どうしても養父が捕らえられない。攻撃と回避を繰り返す養父と防御と回避を繰り返す僕では蓄積するダメージ量が段違いだった。3歳の頃と同じぼろぼろの身体に鞭打って、僕は必死で戦っていた。

身体のうちこちにできた打撲の跡は痛々しい。切り傷も酷いものだ。きつと骨の何本かは折れているだろう。でも、僕はあの時とは違うから、養父をまっすぐに見上げて笑ってみせた。頬を伝う雨か汗か涙か分からない水滴を乱暴に拭い去り、僕は堤防に手をかけた。

はたから見れば立っていられないほどフラフラで、辛うじて堤防に掴まっているように見えるだろう。養父は笑う。

「オレに拉致される用意はできたかよ、初流乃」

「僕はもう自由です。アンタの道具になった覚えは、一度たりともありませんよ」

ばん、と僕は乱暴に堤防を叩きつけた。すさまじい地響きがあたりにひびきわたった。耳をつんざくような濁流の音が近付いてくる。堤防から泥水が流れ込んでくる。ばきばきと音を立てて、ひびが入っていく。僕は何も言わなかった。絶望に染まった養父が僕を見る。

スタンドすらかまえない。必要ないからだ。もう養父は終わった。

僕がここを戦う場所に選んだ時点ですべてが終わっていた。養父と僕の足元が決壊した。僕はひたすら硬いコンクリートに生命を打ち込み続けた。

養父は足止めの小賢しい真似と断じていたが、雑草は根っこまで取り払わないと何度でも生えてくるように、一度張り巡らされた樹木はコンクリートを突き破って大地まで伸び、やがては地下までもぶち抜くともない隙間となる。こじ開けるにはこれで十分だった。

5メートルにわたって堤防が決壊する。堤防を洗う濁流の勢いはとどまるところを知らなかった。あつという間に僕と養父は濁流にのまれてしまったのである。養父は必死で手を伸ばしたが、激しい水流に押し流される不安定な体勢では力が入らないのだろう、支えになるはずだった木々をへし折るだけで終わった。

僕の身体が川に流れ込む。どんどん加速して、濁流にのまれていく。一気に首まで飲み込まれた水位が唇のところまで上がってくる。逃げ道は無かった。養父にはもう自ら這い上がるチカラは残されていない。養父はあまりにも重装備だった。浮くにはあまりにも重すぎる。

もし登れるとしても僕が許さない。立ち泳ぎ状態の限界がやって来るのはお互い様だ。この世界の終りとも思える濁流が空から降り注ぐ。僕も養父もそのままみえなくなってしまった。広がるのは泥みみたいな水の濁り。オリオン座流星群が見えないことだけが残念だった。

「げほっ、げほっ、ごほっ」

僕はなけなしの力を振り絞り、辺りの地面に転がっている石ころを木の葉に変えた。そして、どきっとそのまま横になる。一か八かの賭けだった。生み出した生命が元の持ち主のところに戻ろうとするのなら、壊れゆくアスファルトから生み出された植物はまっすぐに地面

を目指すだろう。

ただの地面ではなく、人工物である頑丈なアスファルトの地面を。堤防に絡みついた鳶に引き上げられる形でひきずられた結果がこれだ。ぐったりと横たえている先には、さすがに持ち上げきれなくてずるずると堤防から落ちつつある養父の姿がある。

悔しいかな、僕が必死の思いで作り上げた生命線は、僕と養父の足元に転がっていたものだ。悪運の強い男である。鳶の進行方向に養父はいた。巻き込まれたのである。殺してもいいと思う。僕は少なくともあの時本気でこの男を殺すつもりで堤防を決壊させた。

突き落してしまえば濁流にのまれて養父は死ぬだろう。あるいは体を支えている鳶に死んでしまえと命じれば、たちまち枯れてしまった鳶がちぎれて養父は沈没する。もしくは窒息死するまで締め付けろと命じれば一瞬でこの男は死ぬ。頭の中ではいくらかでもその方法が思いつくというのに、体に力が入らないのが悔しくてたまらない。

これが今の僕の限界だった。濁流にさらされる養父の身体を見つめながら、僕はそのまま気を失ってしまったのである。堤防が決壊したというサイレンが鳴り響く中、本格的に降り始めた雨は、すべてを洗い流していった。

気が付くと清潔なシートにくるまれた僕は、ぱりつとした患者服をきて、ベットに横たわっていた。身体の至る所に目が付く白、白、白、隅々まで治療が施されているのがわかる。

包帯が巻かれ、ガーゼが固定され、体を動かさそうとすると痛みが走るの、おそらく骨が折れているか、筋肉部分が悲鳴を上げているか、酷い内出血を起こしているからだろう。きつとすべて同時に起こっているはずだ。

固定化されているおかげでろくに寝返りが打てないありさまであ

る。右腕には注射針が突き刺してあり、透明な管が透明な液体を僕の身体に点滴として注入されているのがわかった。おそらく栄養剤かなにかだろう。ずいぶんと体がだるい。

意識がぼんやりとするのは、ずいぶん長い間眠っていた証である。僕はとりあえず手の届く範囲に置いてあつたナースコールを鳴らした。看護師の女性が2人とんできた。僕が辛うじて動く首を回して、そちらに顔を向けると、あからさまに表情が明るくなっていくのがわかる。

につこりと笑った主治医の先生を呼びに行つた年配の女性を見届けて、僕はその場に残つたニコニコとしている若い看護師の女性に質問をすることにした。

ずいぶんと発音がしにくいのは、きっと僕の身体が発声方法を忘れてしまっているからだろう。大丈夫ですか、と彼女は冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出して、僕に渡してくれた。小さな冷蔵庫には、スポーツドリンクの他にも僕の好きなコンビニのプリンやチョコレートのお菓子が詰め込まれている。

親切にもペットボトルの口には青いストローがついたキャップが収まっている。どうやら僕が目覚ますまでずいぶんと世話を焼いてくれた人がいたようだ。今はいないようだけれども。きっと施設の誰かなんだろうな、と想像がつく。僕は左手で受け取ると一口含んでのどを潤した。

「ここはどこですか？病院ですよね？」

「ここはTG大学病院にある個室ですね。部屋番号は×になります」

「今日は何日ですか？」

「今日は24日の土曜日ですね。もうすぐ夕ご飯の時間ですけど、汐華さんはどうなさいますか？食欲はありますか？身体のことを考えると、普通のお食事は早いので、消化のいい献立になりますけど」

「いえ、まだいいです。今日はまだなにも食べたくない」

「分かりました。では、点滴の方になりますね」

彼女はカルテを広げて、胸ポケットからボールペンを取り出すと、かちりと音を立ててさらさらと何かを書きこんだ。そして、ちよつと失礼しますね、と点滴が提げられているローラーを動かして、凹み気味の袋を取り換えはじめた。

専門用語が書かれているので分からないが、これが本日の食事ということになる。今日はなにも食べないほうがいいだろう。主治医の先生から聞く話のあとで、食欲がわくとは到底思えないからだ。そして、その予感は的中することになる。

ようやく到着した主治医の先生は、丸椅子に腰掛けると、僕が入院するまでの経緯を説明してくれた。21日の夕方、予定時間を過ぎても帰ってこない僕たちを心配した施設のスタッフたちは、事態を重く見て警察に通報、下校通路を手分けして捜索しはじめた。

ヘッドライトがつけっぱなしの不審な自動車が自動販売機付近にあると近隣住民から連絡が入り、別の警察官がそちらに向かうと陰惨な状態で亡くなっている彼を発見する。このあたりで野次馬がただならぬ雰囲気を感じ取って集まり始め、それに気付いたスタッフたちは最悪の事態が発生した事を把握して、必死で僕を捜し始めた。

学生鞆や僕の所持品が捨てられている道をたどると、その先には決壊した堤防と凄まじい勢いで氾濫し始めた川が待ち構えていた。危険水域を超える寸前だった。このあたりから警察は事態を重く見て、数百人体制で僕のことを捜す一方で、緊急警報を発令した役場の放送で近隣住人達は避難を余儀なくされる。

川の堤防を越えると水位より下にある住宅地に流れ込む危険性があつたため、浸水を防ぐための土嚢を積み上げる作業に追われる。大規模化していく作業のせいで僕の捜索にさかれる人数は少なくなつてしまい、施設のスタッフは賛同してくれた住人達と共に僕のことを徹夜で捜してくれた。

やがて川の中流あたりで自力で這い上がりながらも低体温症と出血多量で衰弱死寸前の僕を発見、この病院に緊急搬送された。そし

て、幸いにも緊急治療室で手術を終えた僕は、一命を取り留めてこの一般病棟の個室に移されたとのことである。

まだ未成年の僕は個人情報伏せられているものの、社王町で突然起きた陰惨な事件として僕の養父は犯人にあげられた。その被害者として誘拐未遂事件に巻き込まれたかわいそうな中学生はワイドショーをにぎわせている。連日押しかけるマスコミの対応に追われている大人たちは疲れた顔をしているが、僕の前では気丈に笑顔を見せている。

目が覚めたばかりの僕に余計な気を遣わせたくない、まともな大人たちがいる。いい人たちがいる。ありがとうございます、と僕が微笑むと、それだけが救いだと大人たちは笑った。

全治三か月、と先生はいう。診断結果を教えてください。はつきりいって、殺意しかない。養父は僕が生きてさえいればどんな状態であろうともかまわなかったのだろことが窺える。両手、両足を執拗に攻撃していた畜生が脳裏をよぎり、僕はちいさくため息をついた。

最悪だるま状態にしても拉致するつもりだったことが予想できる。一体どこに連れていくつもりだったのだろうか、あの男は。稚拙な犯行計画を企てて、単独犯人で強行に及ぼうとするほど多額の金を積まれたとしか思えない。背後がまるでみえない。

ぞつとした悪寒に僕は身体を震わせた。僕の心境を察してか、先生はもう大丈夫だから安心するといい、ここは警戒態勢が一番嚴重な特別病棟だからと教えてくれた。どうやらよほどひどい顔をしていたらしい。僕は静かにうなずいた。別のことを考えよう。

全治3か月、と先生は言った。リハビリも含めると来年の2月ごろ退院することになる。どう考えても出席日数が足りない。進級できるか心配になった僕に、子供らしい発想をみて心底安心したらしく、この病院内にある学校に通うことを提案してくれた。

施設側もある程度対応は考えているらしい。代替処置でもしてくれるんだらうか、とのんきに考えていた僕に、先生はなにもいわない。いやな予感がした。

はるか遠くの淡い空に、ゆつくりと雲が流れていった。

先生たちが退出する。施設のスタッフの女性と一緒に入室してきたのは、凜とした男性だった。提示されたのは警察手帳である。養父に関する事情聴取だろうか。あの日の出来事を証言できるのは当事者である僕だけだ。

目撃者は先生の話を聞く限りいないようだし、生き証人も僕だけになる。普通に考えて警察の人が僕の話を書くのは当然といえた。養父のことか、と聞いてみると、少しだけ驚いた顔をした彼は、彼女を見つめた。彼女は肩をすくめる。

「ずいぶんと冷静なんだね。淡々としているというか、客観的に物事を判断しているというか、13歳にしてはずいぶんと大人びておどろいたよ」

「無駄なことは嫌いなんです。何度も説明するのは頭の悪い人間のすることだから。僕はそうしないと生きてこれなかった。それだけです」

「そうか、なるほど。つまらないことを聞いたね。すまない」

「いえ、あなたはいいい人です。僕の方から切り出したとき驚いたということは、僕のことを考えて、どうやって事情聴取を始めようか悩んでいたってことでしょうか？それなら僕もその期待に応えないといけません。僕は大丈夫です。始めましょう？」

「そう言ってくれると助かるよ。じゃあ、はじめようか」

はい、と僕はうなずいた。でも、僕は彼の期待に応えることはできない。スタンドという超常現象が密接に絡み合っている今回の事件について、彼が真相に辿り着くことはおそらく不可能だ。

未解決になることは目に見えている。状況証拠を積み上げれば養

父を犯人にできるだろうが、物的証拠はおそらくない。有能な弁護士を付けられたら証拠不十分をつつかれて最悪の場合執行猶予になってしまう。日本の警察は優秀だから勝訴の見込みがなければ立件しないだろう。

おそらく彼はスタッフの男性を殺害した複数犯が僕を誘拐しようとして、僕が誤って川に転落したと考えている。堤防の決壊は無関係と結論ありきで動いている。真相に気付いているなら僕にここまで友好的な態度は見せないだろう。

堤防の決壊によって近隣住宅は洪水による被害が多数出ているようだし、死者やけが人はいないようだが、ライフラインの寸断が深刻らしい。そういう意味では僕は立派な犯罪者だ。でも、僕は死にたくなかった。これ以上の犠牲を払う前に養父の魔の手から逃れるにはそれだけしか手段がなかった。それだけだ。

だから僕は正直にいうのだ。せめて複数犯というノイズだけは取り除かないといけない。彼のしてくる質問はあきらかに事実とずれている。普通に考えて一人の人間が大人の男性をあんな状態にできるわけがないという常識が真実から彼を遠ざけているから。

僕は概要を説明した。自動販売機にて養父と遭遇した僕は、目の前でスタッフが殺害される瞬間を目撃して、必死で誘拐しようとする養父から逃げた。川の堤防まで追い詰められた僕は、養父を殺すつもりで川に突き落としたが、濁流が予想以上に大きくて僕まで巻き込まれた。

自力で這い上がったあと、気を失った。込み上げてくるものがこらえきれなくて、僕はずっと目を閉じて話をしてきた。すべてを話し終わった時、スタッフの女性が顔を覆い隠すと、僕の頭をなでて抱きついてきた。

え？どうして？普通なら恐れおののいて立ち尽くすところだろうに。あまりにかけ離れた行動に呆然としてしていると彼は僕の目線に降りてくると首を振った。

「まだ記憶が混乱しているんだね。無理に話をさせてしまったせいで、事実とはことなる記憶が出来上がってしまったようだ。大丈夫だ、汐華君。君はそんなニンゲンじゃあないさ」

何を言っているんだろう、彼は。僕はありのままを告げただけなのに。瞬きをして硬直する僕に、彼は笑った。

「あの堤防は老朽化が進んでいたことが調査の結果明らかになっているんだ。委託先の企業が規定未満の水準で建設したせいで、劣化が著しかったんだね。だから君が主張するように川に突き落とすことは物理的に不可能だ。追いつめられたのは事実だろうし、どういったやり取りがあつたのかは想像できるけど、濁流にのまれたのは偶然にすぎない。それに君は自力で這い上がったようだけど、普通、殺そうとする人間まで助けようとするかい？あの鳶はずいぶんとしつかり絡みついていて。濁流があそこまで激しくなければきれなかつたはずだ。君は助けようとしたんだよ、13歳の子供である君が、40代の男性をだ。体格的にも体重的にも無謀だ。もしかしたら君まで死んだかもしれないのね。君は無我夢中だったから覚えていないんだろうが、最後まで助けようとした痕跡が何よりの証拠だ」

励ますように彼は僕に語りかける。僕はなんとも不思議な感覚でそれをみていた。一般的な感覚を持つ人間には、こういう風にみえるのか、と認識させられた気分だ。ほうけている僕を抱きしめるスタツフの腕の力が強くなる。

こういうとき、涙の一つも流せればいいんだろうけれど、体は震えるだけで水分を失うまいと懸命にこらえている。涙を流したところで脱水症状で死ぬ危険性があるという事情で、泣きわめくことを体が諦めてしまった地獄の生活。

終わりを告げて10年になるのに、もうこの体質は治らない。彼は優しく笑った。そして、静かに表情を引き締める。どうやらここからが本番のようだ。

僕は途中までしか記憶がない。でも、彼ははっきりといった。蔦がきれたと。ありえない。ありえるはずがないのだ。あの蔦は僕が一番使い慣れている植物であり、濁流に長時間さらされたぐらいで引きちぎれるような軟なものではない。

僕の能力を上回る力を秘めていた彼のスタンドが自らの意志で引きちぎらなければ絡みついた糸はほどけない。養父は気絶していたはずだ。スタンドは使えない。やっぱり僕の殺意は深層意識深くまで根付いていたようだ。

もしくは僕の施しはうけないという彼の無意識の執念がそうさせたのだろうか、遠回しの自殺を。どのみち後味の悪い結果になってしまった。でも、彼の話はそこではないらしい。

「捜索には2日かかった。昨日の正午過ぎだ。みつかったよ、あの川の下流で」

そして彼は僕を見た。

「結論から言おう、他殺だ。犯人は今も逃亡中。凶器のナイフから指紋が見つかったんだ」

そして、彼は懐から写真を僕に見せてくれた。凶悪な死刑囚がうつっている。

「男の名前は片桐安十郎。きみのお義父さんだった男と共に脱獄した死刑囚の男だ。1964年生まれの34歳。12歳から凶悪犯罪に手を染めて、そのうちの20年は刑務所行きだった犯罪史上最悪の男だ。私たちは君の誘拐事件は複数犯だったと考えている。この男が犯行に及んだ理由は仲間割れ、もしくは誘拐事件の失敗による口封じの可能性が高いんだ」

僕は沈黙するしかない。養父が突然スタンド能力に目覚めた理由がここにあつたからだ。

「君は施設を出る必要がある。学校も転校する必要がある。片桐が捕まるまで私たちの保護下にはいるのが一番なんだが、君はまだ中学生だ。義務教育だから休学は難しいだろう。どうかな。この男をよく知る警察の家にお世話になるっていうのは？」

第2話

1999年2月上旬、TG大学病院から退院した僕は、生活拠点を警察官の家族が入所する公務員社宅に移ることになった。官舎は会社の寮のようなもので、すべての住人が警察官である。

僕が目覚めた最初の日に説明に来てくれた刑事が、今の僕の保護者になった。家族がいない独り身であることが大きな要因らしい。どうもこの官舎は旦那の年功序列で奥様方の序列も決まってしまうようだ。それに嫌気がさした妻に当たる人はもういないようだ。だから実質2人ぐらしになる。

僕たちが住む部屋には警察からの直通電話が玄関にあって、直接召集がかかることもあるのを何度か目撃している。管理人室もあるが、人が集まる場所だ。僕の事情はすでに知れ渡っていたようで、父親や母親の顔をした人たちによく声を掛けられた。独身者や単身赴任の人も混じって、一緒に食べたり飲んだりしたこともある。

官舎では、どうやら僕が一番年上のようで（おそらく子供が大きくなると官舎から出て、マンションや一戸建てに移るからだ）、子供の面倒をみたり、一緒に遊んだりすることが多くて、感覚的には施設にいる時とあまり変わらなかった。一緒に相手をしてくれたのは、休みの警察官だった。

いつもいるのは警察官だった。官舎は警察署と非常に近いこともあり、数週間もすれば僕はすっかり制服姿の警察官に見慣れてしまった。転校の手続きが終わったと彼に聞かされたのは、昨日のことである。今日から僕は、官舎から一番近いぶどうヶ丘学園の中等部に転校することになったのだった。

杜王町は東北地方にしては温暖で、あまり雪が降らないし、雪が一週間以上残っていることは少ない。晴れの日が多いから日中は暖か

いけど夜になると急激に気温が下がってしまう。この寒暖の差によって生み出される濃霧の通学路は、一段と冷え切っていた。

吐き出される息は真つ白で、霧の中にきえていく。すっかり凍り付いている歩道を歩くより、踏み固められていない雪道を歩く方が安全なのはどこも同じようだ。さくさくと雪柱を踏みしめながら歩いてきた僕は、ちりんちりんと軽快な音を立てて近付いてくる自転車のベルに思わず立ち止まる。

振り向くと霧の中でぼやけていた明かりがまっすぐこつちに向かってきた。おはようさん、としわがれた声が僕を呼ぶ。おはようございませ、と返すと、初老の警察官が僕に会釈した。この人は夜勤明けのはずだから、今日は休みのはずだ。自転車から降りた巡査は、自転車を押しながら僕のところへ歩いてくる。

「おうおう、今日から初登校か？わしの孫も中等部に通ってるからなあ、道はよく知ってるぞ。案内してやろう」

「大丈夫ですよ、転入試験を受けた時にあの人と一緒に道を確認しましたから」

「行きはよいよい、帰りは怖いっていうだろう。片桐がいつ現れるかわかったもんじゃあないんだ。どうせ送り迎えをしてもらおう約束をしたきながら、ちやつかり内緒で出てきたんだろう。また犠牲者を出すのが嫌だから、一人でなあんで、いらぬ気遣いしなくていいんだよ。ちつとは大人を信用しろ」

帰ってきたら覚悟しろ、官舎のヤツラにドしかれされちまえ、と意地の悪い笑みが浮かんだ。夜勤明けの老体に鞭打って正解だった、まだまだわしは現役だと巡査は笑う。なんで分かったんだと問いかけたところで、刑事の勘だとか顔で返ってくるに違いない。

僕は肩をすくめて観念することにした。東方巡査は僕がぶどうヶ丘中等部に転校することを進めた警察官だ。施設の子供が公立から

私立に転校する前代未聞の提案には、ずいぶんと関係者のあいだで意見が分かれたらしいけど、僕に制服を提供してくれた蓮見っていう先人がいたからわりとすんなり話は通った。

僕が片桐から身を隠すなら同じ公立より私立の方が欺けるのは事実だ。それに期間限定の転校だ。養父が死んだことで司法に没収されていた彼の資産が僕に相続されたことも後押ししたことになる。資金面の問題が解決した時点で、ある程度の態度の軟化は予想できた。

東方巡查には僕より2つ上の孫がいるらしく、なにかと僕のことを気に掛けてくれた警察官でもある。同じ敷地内にある高等部に進学が決まっていると話に聞いている。東方は珍しい名字だ。どこかで会うこともあるかもしれない。僕を引き取ると名乗りを上げた人でもある。

さすがに家族がいる人間が僕を引き取るのはあまりにも危険だから即刻却下されたけど、東方巡查は最後まで渋っていた。世話焼きな性分なのだろう、わざわざ中等部まで同行しようとするくらいには。

「学生服に着られてるじゃあないか。わしの孫はこれくらいあるぞ、お前は小さいなあ」

けたけたと東方巡查は笑う。右手の位置からすると195センチくらいあるらしい。いくらなんでも盛りすぎだろう。成長期が過ぎたとはいええ、日本人でそこまで身長がある人間はなかなかいないだろうに。

高等部に進学した先人から譲ってもらった学生服は丈が長いが、成長期ならいちいち気にする必要はないだろう。すこし大きめの学生服をきているのは事実だから、なおさら身長が強調されるのかもしれない。僕は肩をすくめた。

「いいんですよ、これでも半年で5センチ伸びたんだ。まだまだ成長期だから伸びますよ。僕の父親は195センチあったらしいので」

もう顔さえおぼろげな母親の口癖のようにつぶやかれていた言葉のひとつだ。今となつては信憑性はまるでない。息をするように嘘をつく人だった。きつと僕にも下地としてその性質は受け継がれているに違いない。

そうかそうかと東方巡査は頷いた。絶対に信じていない目だ。今に見てろと思いつつ、僕らは誰もいない進学路を進んでいく。定年まじかの巡査とぶどうヶ丘中等部の学生という奇妙な組み合わせを訝しむ通行人は、今のところ一度もすれ違っていないかった。

「そーういや、カッコいいブローチ付けてるじゃねえか。どうした、それ。前の制服じゃあ付けてなかったろ？」

東方巡査が指差したのは、僕の学生靴や制服、結わえている髪、いたるところに付けているテントウムシをモチーフにしたアクセサリーのことだろう。胸ポケットに付けていた一つを外して僕は手のひらにのせた。

「施設長がくれたんですよ、お守りだって」

「テントウムシがお守りだ？」

僕は小さく笑った。施設に入ったばかりのころ、スタッフが読んでくれた絵本は宗教の逸話が題材にとられた絵本ばかりだったことを思い出す。聖書の一端や賛美歌くらいなら片手間で歌えるくらいの教養はある。施設をでてから日曜日のミサは無縁だ。

施設長の出身国ではテントウムシは宗教的な意味合いを含んでいる。昆虫は悪魔だと断じる人たちは、天国の席を予約しに行ってくれる、太陽に向かって飛ぶ神の使いだけは昆虫扱いしたくないから、特別扱いしている。

聖母マリアの使いなんて、仰々しい名前が施設長の国では付けられ

ている。だからテントウムシモチーフのアクセサリをくれたのだろう、体にテントウムシがとまると幸せがやってくるらしいから。

僕の好きなジェフ・ベックを悪魔の音楽だからと許してくれなかった人たちの言葉をうのみにできるほど、僕は子供じゃない。まあ、いいじゃあないですか、と僕は東方巡査にいった。

「テントウムシはおてんとう様の虫です。幸福をよぶんですよ」

「目をつけられないようにしろよ。お前が通ってたところと違って、ぶどうヶ丘は素行が悪い奴らが多いからなあ。こつちにきたばっかの時は、大人しい格好だったつのに、ずいぶんと派手な格好になったな、おい」

「あんまり触らないでください。セットするの大変だったんですから」

「たあく、ガキが一人前に色ボケやがって。わしが若いころはみんな丸坊主だったつのに、野球やってるやつですら五分刈りにもしやがらねえ。つまらんなあ」

横着にも静電気をはらんだ手袋越しに、わしゃわしゃしようとしてくる老人に辟易しながら、僕はひたすら覚えたばかりの道を歩いていた。中学生は施設から月に5000円の小遣いをもらえる。今の僕は養父の遺産があるから、散髪屋から美容院に切り替えるくらいの経済的余裕がある。施設にいるときと官舎にいるときで振る舞いが違うのは当たり前だろう。

ただでさえ僕はイギリス人の父親の遺伝を後天的に受け継いだ、外国人のような外見をしている。日本人のような恰好をしているとかえって不自然だと、違和感しか感じないとクラスメイトや施設の仲間に言われ続けてきた。外国人の振る舞いを強いているのはあちらである。便乗してなにがわるいんだろう。

ブレザーだった前の学校はともかく、学生服をきっちり着込んだ僕は、保護者役の大人が肩を叩いて慰めの言葉をかけてくるほど絶望的に不似合なのだ。ぶどうヶ丘中等部は校則がゆるめだ。大丈夫だろう。

どいつもこいつもかわいげがないのう、と孫にも反抗期が来ているらしい心配性の老人がため息をついていた。おちやらけている割に、時折この人は眼光が鋭くなる。伊達に30年以上警察官をしてきたわけではないのだろう。僕は自転車を止めた東方巡査に合わせて足を止めた。忠告に耳を傾ける。

「1998年の10月下旬から、お前の養父みたいな死に方しやがる奴が多すぎるんだよ、この街は。目と耳が内側から破壊されて死んじゃう。病気が事故かとマスコミ連中は騒いでるが、わしらは犯罪とにらんどる。ナイフでトドメをさしたのはお前の養父だけだったからな。あれで味をしめたんだろうさ。死んだあとから内側を食い破られてたのはそいつだけだ。生きたまま食い破る方法でも思いついたんだろうさ、アンジェロをとつと捕まえて吐かせねえとやばいことになる。頼むから捕まるような真似はしてくれなよ」

「わかってますよ、約束だ。僕は死なない」

「そのわりに体張るような真似しやがるから困るんだ。頭も回るし、まわりのこともよく見てる。直観力や推理力はびつくりするくらいだったのに、なんだってそこだけ抜けてんだ、お前は」

東方巡査は呆れている。今さらだ、と僕は笑った。人を食ったような笑みをしやがって、かわいくねえなとぼやかれる。命の尊さを学んでこなかった子供が生命を生み出す能力に目覚めることの残酷さを知っているのは、きつと僕だけだ。

僕にとって命そのものとはとても軽いんだ。路傍の石と変わらない。命が尊くて大切だと思うのは、僕が大切だと思っている人間だけに向

けられるものだ」と14年間生きてきた中で僕は自覚している。

神様を信じる宗教によって設立された児童養護施設で生きてきたことで、それを自覚するのがあまりにも早かったのは幸福なのか不幸なのか僕には分からない。僕のこころもちなんてしらない東方巡査は、さあいくぞとふたたび歩き始めた。

ずきいん、と首の付け根にある星形の痣がうずく。またか、と肩を抑えた僕は眉を寄せた。母親が唯一褒めてくれた痣だ。父親と同じ位置にあるというくだらない理由で、はしゃいでいた。まただ。

東方巡査と会うたびにこの痣がうずくのはどうしてだ。ざわざわしていて気持ち悪い。初めは気のせいかと思っていたが、こっちに引越してきてから違和感が顕著だ。時折ひどくうずくときがある。近くに何かがいることを警告しているようにずきずきするのだ。

しばらくじつとしているとなくなる。でも今回はずいぶんと反応がよくなってきている。そのうずきの原因の距離や方角まで感覚的に分かる異質さは初めてだ。なんだろう、これ。

いつまでたっても歩こうとしない僕をみて、どうした？と心配そうに東方巡査が振り返る。すると、どごつという音がして、東方巡査のにぶい呻きが聞こえた。驚いて顔を上げると、かわいらしい布に包まれた箱が布製の袋から飛び出した。

どうやらお弁当箱らしい。東方巡査の脳天に直撃したそれは、自転車もろとも盛大に音を立ててひっくり返ってしまった。絶句して振り返った僕は、思わず硬直してしまった。見上げるほどの巨体が僕を見上げていた。

「ごんのバカくそじじいっ！」

耳をつんざく罵声が響き渡った。今にも死にそうな声で、じょうす

け?!という声が地を這っている。

「おふくろのこと、とやかくいえないじゃあねえか!朝っぱらから何してんだよ、おい!」

さっぱり事情がつかめない僕は立ち尽くすしかなかった。ただわかるのは。

「おい、そのてめえもだ!うちのじじいになにしやがった、てめえ!警察官の癖に中学生に手を出すとか何考えてんだあつ!」

なにやら盛大に誤解されているということだ。

東方巡査が突然お弁当箱を投げつけてきた家族を、必死で仲裁しようとしているのだが、じじいは黙ってるの一点張りで取り付く島がない。じょうすけ、と東方巡査によばれた彼は、180センチくらいある中学生とは思えない体格に恵まれた青年だった。

3年間使い込まれた学生服は独自のアレンジがなされており、高等部に進学しても継続して愛用されることがうかがえる。制服の左袖にある♂マークと♀マークが組み合わされているイカリは、プリンスと呼ばれていた男が改名前に好んで使ったマークのはずだ。

洋楽が好きなのだろうか。リーゼントという典型的な不良の格好をしていなければ、その違和感は無かったに違いない。東方巡査の孫なら日本人だと思うのだが、ずいぶん目鼻立ちが整っている。顔立ちや顔のパーツからして親近感がわくのは、どこか異なる国の雰囲気を持つているからだろう。

僕が後天的な変異をする前と同じ、ハーフ特有の黒髪とのミスマツ

チ感がどこか似ているからかもしれない。その額に浮いている青筋がなければ、もつと温厚に話ができたと思うのだが、残念だ。僕は日が昇り始めたことで、ゆるやかに解け始めたアイスバーンを踏みしめて、ゆっくりと後ずさりした。

転校初日からトラブルに巻き込まれるのは不本意だ。なぜ彼がここまで激高しているのか、さっぱりわからない。見当違いのトンでもない勘違いをしていることは分かったが、どうしてそういう結論に至ったのか、聞いてみようと思った矢先だった。

世間話程度の話題として、一言二言交わしたつもりだったのに、ぶちっという堪忍袋の緒が切れる音がしたのは、気のせいではなかったらしい。ちよつとこいよ、と人目につくのがいやなのか、彼は僕を裏路地と呼んだ。

僕は思わずテントウムシのブローチを手にしていった。彼の背後からスタンドが出現したのである。養父のもつ洋楽を模した人型のスタンドと系列が同じなのかはわからない。ただわかるのは、彼が敵意を持って僕に攻撃しようとしていることだけだった。頭部には数本のパイプが突き刺さっていて、身体のいたる所にハートマークがあらわれたデザインが目を引いた。

「ララララララアア！ ドラアアアッ！」

そこに躊躇は微塵もなかった。周りが見えなくなるほど逆上した彼は、容赦なくスタンド能力を見境なく発揮して、僕に殴り掛かってきたのである。無数の拳が僕に向かって繰り出された。そつちがその気なら僕も応戦せざるを得ない。

スタンドにはスタンドでしか対抗できないことは、半年前に嫌というほど学んでいる。生まれろ、生命よ、生まれろ。そして僕を守れ。僕と彼の間にイバラの防壁が生まれる。スタンドに絡みついたイバラが動きを拘束する。本体に動き回られても困るので、同様に拘束させてもらった。

僕を殺そうと悪意を持って攻撃してきたなら、あつけなく鳶はずたずたに破られるだろうが、純粹にぶんなぐろうとしただけらしいスタンドの動きなら辛うじて抑え込める。これが養父と彼の違いだ。あの時の死闘の影響か僕の作り出す生命は、ずいぶんと強靱で頑丈になったように思う。

瞬発力とスピードだけなら段違いで向上している。スタンドは成長するものだ。僕は10年間この力との付き合いで学んできたから知っている。彼はスタンド同士で戦ったことがまだないのだろう。心の奥底では手加減をしているあたり、優しさが垣間見える青年である。

間髪で攻撃を防ぎ切った僕だったが、あまりの爆発力を伴ったパワーのゴリ押しに負けて後退せざるを得なくなる。さいわい僕のスタンドの方がスピードが上のようで、展開するのはこちらの方が早かった。まさか寸前に止められるとは思っていなかったらしく、スタンドと彼の瞳孔が大きく開かれる。

ほう、と一息。優しさが垣間見える分、なんで攻撃されるのか僕はさっぱりわからなかった。東方巡査に言わせれば、人当たりもよくて親しみやすく温厚な性分だと聞いていたのだが。

「落ち着いて、僕の話聞いてくれませんか？僕は君と戦うつもりはない」

僕の言葉に肩を震わせた彼は、るせええ！と唾を飛ばして怒鳴りつけてきた。

「てめえ、なあにけろつと自分は関係ありません、みたいな澄ました顔してやがんだ、ああんっ!？」

「だから話を聞いてくださいと言ってるでしょう？無駄なことは嫌いなんだ、何度も言わせないでください」

「今俺の頭のことなんつったああ！けなしやがっただろうがあ！俺はなあ、俺のグレートな髪型にケチ付ける野郎は、ぶちのめすって決め

てんだよオ！お前が何モンだろうとせって、ゆるさねえー！お前がなんだろうが関係あるかあ！」

「は？」

「コンのやろお！鼻で笑いやがったな、ぶこらあ！」

「……僕はただ、君より僕の髪の方が整っているなといったただけ。このあたりではその髪型がまだ流行っているのかと確認しただけじゃあないですか。悪気があっていったわけじゃあない」

「だあれの頭が絶滅危惧種だつてえ!?遠回しに古くせえつつつてんじゃねえっ！」

植物がスタンドによって弾き飛ばされてしまった。そして、なぜか煽りに煽る結果となつてしまった彼の猛攻が開始されることになる。僕のスタンドは射程範囲が2メートルが限界の近距離タイプであるにも関わらず、パワーは遥かに彼に劣っている。

実体を伴わないスタンドである以上、純粹な殴りあいを持ち込むことは不可能だ。体格的に考えても170をぎりぎりこえたばかりの僕の細身な体では、純粹な殴りあいなんてかないっこない。パワー負けするのは目に見えている。隆々とした肉体を持つ人型のスタンドはまっすぐに僕に向かって突撃してくるのだ。

たまったものではなかった。ラッシュしてくる拳。威力を高めるために叫ばれる咆哮は彼の怒りをあらわにしているようだった。これ以上はぼくも受けきれない。本気を出すことは気が進まないのだが。僕は彼の射程から逃げるために飛びのいた。

「忠告はさせてもらいますよ。これ以上、僕に攻撃は加えない方がいい。特に体は、絶対に攻撃しないでください。2度はいわせないでくださいよ」

防戦一方にしても仕切り直しは必要だろう。彼のスタンドは僕にしか見えていないあたり、あの人の本と同じだ。でも僕が生命を注ぎ込む対象である物質は誰もが目に出来るモノであるためか、僕が育む

命は誰もが目にする。目立つのは間違いなく僕の方だ。

これが朝方で良かったと今さらのように僕は思う。大きく振りかぶってくるスタンドを間髪でさけた僕の視界が一気に上昇する。冬の間は植物の成長速度が格段に悪くなる。春から夏にかけてならもつとイキイキとしているのだが、バランスを保つには虚弱だ。

移動するだけなら十分だ。ぐおん、と行き場をなくしたスタンドの強烈な一撃が大木に叩き込まれた。それと同時に崩れ落ちる彼に僕はため息をついた。

「1度でいいことを2度いわなけりやいけないうってことは、そいつは頭がわるいんだ。何度も言わせないでくださいよ。言っただしよう？僕に攻撃しないでくださいと。何もしなけりや無害なんだ。こいつは自分の意志を持っている生き物なんだ。自分で考えて生きている。そいつに危害を加えたから、アンタは危害を被った。それだけだ」

雪玉でもぶつかれば頭が冷えるだろうか、と思いつながら、僕は彼を見下ろした。舌打ちをしながら彼はうめいた。ご自慢の髪形がずいぶんと変わってしまったようだ。セツトするのも大変だろう。

木々は生い茂り、季節外れの花が咲く。目立つのは嫌いだ。さつさと枯れてしまえ、と僕は過剰に生命エネルギーを足場に注ぎ込む。枯れ木は石になればいい。何事もなかったかのように雪道の通学路には、やたら綺麗な石が残る。

「だからやめろっていったんだ。こいつは僕に忠実で、アンタの攻撃はそのままアンタに返って来るんだ。もうやめてくれませんか？命取りになりますよ。」

一瞬僕を見失ったらしい彼は、あわててあたりを見渡している。そして影が伸びていることに気付いて、まぶしそうに僕を見上げた。ぐらり、と足場が揺らいだのは僕の予想以上に枯れ木がしおれ始めたか

らではない。なんだ、これは。みるみるうちに質量を失っていく木々は圧縮されていく。

僕は校舎の塀に飛び乗った。真っ白な通学路に真っ黒な石ころがしみのように転がっている。僕はあまりの衝撃に動揺を隠しきれない。僕はまだ死ぬとまでは命じていないのに。元に戻ってしまった。僕が生み出した生命が元に戻ってしまったのだ。ただの石ころに戻ってしまったのだ。

唯一の違いといえば、彼の人型のスタンドにぶん殴られたことだけだ。どうやら彼のスタンドはものを直す力があるらしい。まいったな、これじゃあ時間稼ぎができないじゃあないか。いくら僕が攻撃したところで自分で自分のケガを回復されてしまっただけは意味がない。

僕のスタンドはあの人や養父、彼のように実体を伴っていないのだ。一考しないとあまりにも相性が悪すぎる。僕は彼を注視することにした。さいわい彼はここまで登ってくる手段がない。しかし、数分経ったが、彼は立ち上がる素振りをみせない。

「もしかして、君のスタンドは自分のケガは治せないんですか？」

「……ああ、スタンドってのがこいつのことならそうだけ。オレは自分のスタンドで自分のケガは治せない。くっそ、だいぶん効いたぜ」

声色が大分落ち着いてきている。どうやら冷静になったらしい。僕はテントウムシのブローチを植物に変えて、そのまま彼の前に降りた。

「そういえば、まだ名前を名乗っていませんでしたね。僕はジオルノと呼んでください。××（今の保護者の苗字だ）ジオルノです。今日からぶどうヶ丘中等部に転校する1年です」

「……まじかよ、中等部？ てつきり俺くらいかと思っただぜ。外人は大人数びてんのな。おれは東方仗助っつーんだがよお、3年だ。いや、なんつーかよ、俺も悪かった」

「はい、僕も悪気はなかったんですけど、すいません」

「ジヨルノっていったか、おまえなあ、そういうところが……」

「老け顔で悪かったですね」

「あー、いや、なんでもねえ。頭のことになると、我を忘れちゃうつーかあ、なんでだろうなあ、はは」

バツ悪そうに頭を搔いた彼は、急所に打ち込もうとした渾身の一撃を、勝利を確信して無防備だったところに叩き込まれたわけだから、こんな状態になるのも無理は無かった。常人なら死んでるはずだ。スタンド使いの所以たるや。恐ろしいものだ。

「つーかよお、コロナのお前にだけはいわれたくねえぜ」

僕は微笑んだ。

「アナフィラキシーってご存知ですか？あれってハチだけじゃないんだ」

「冗談だよ。つーか植物だけじゃないのか、お前が造れるの」

「今は冬じゃあないですか。冬眠したり、寿命が尽きたり、動きが鈍かったりするからだめなんですよ。春になったらカエルとかカメとか作りたいんですけどね」

「カメは止めろ」

爬虫類は苦手らしい彼は、今が冬で良かったと心底安心したように笑った。

「ところで、どうして僕と東方巡査に怒ってたんです？」

「あー、ありやじいちゃんが悪いんだ。去年の10月くらいから、あからさまにおかしかったからよオ。若いねーちゃんが好きそうなたざートをひっきりなしに買ってきたり、テイクアウトの差し入れを職場に持って行きだしたトコから怪しかったんだ。2月に入ってから召集かけられたわけでもないのに帰りが遅かったり、早番でもない

のに出勤が早かったりしたからなあ」

「……それはすいませんでした。まさか僕のことをあの人が話していないとは思わなかったもので」

「昔っからじいちゃんの仕事の話はしないからな」

「東方巡査は僕が3か月ほど入院してたときに、よくお見舞いにきてくれたんですよ。僕がこのあたりに引越してきたのは2月なんです。ちよつとストーカーに狙われてまして。巡回のついでによくご一緒させてもらってたんです。そうか、東方巡査つてもてるんですね。50代ですよね？」

「ちげえよ、気持ち悪いこというもんじゃあないぜ。ただの枯れたじじいだ。おふくろが60代の爺さんに惚れて今の俺がいるんだ。他の女だつてほつとかないかもしれないって、おふくろが考えるのも無理ないんだよ。あれでも結構男前だからな、じいちゃんは」

「ああ、なるほど。なんかすいませんでした」

かまわねーよと東方仗助は笑う。ふらふらの足取りで立ち上がる。お弁当を元に戻さなくてはいけないとぼやいている。もうスタンドの姿は無い。僕は追いかけてきた東方巡査にどう説明したものかと頭を悩ませることになったのだった。

「それよりジョルノ、そろそろスタンド引込めてくれねえか？殺気がみなぎってて怖いんだけどよお」

「なにを言ってるんです？僕のスタンドは人型じゃありませんよ？」

「は？本気で言ってるのかよ、俺のスタンドは見えてるのに？ほら、悲しそうな顔してるじゃねえか。冗談でもそんなこというもんじゃあねえぜ？」

彼に言われて振り返る。今まで気配を感じるだけだった亡霊が、ほんの少しだけ輪郭がわかる程度のヴィジョンとして写っているのが見えた。とはいっても、具体的な造形はもっぱら彼だよりになるのだ

けれど。黄金色のテントウムシがモチーフとなっているらしい人型のスタンドが、どうやら僕のスタンドのビジョンらしい。

僕を優しく抱きしめている半透明の腕の持ち主は、彼が言葉を交わすたびに攻撃を仕掛けようと殺気をみなぎらせているらしい。輪郭を視線でなぞれば、細い腕がある気がする。見えてるわけではない。彼曰く温かく包み込むようによりそっているスタンド。なんだそれは。それじゃあまるで。その先は僕は紡げなかった。11年間共にいたスタンドを誰かと重ねるなんて滑稽なことがあっていいわけがない。

「仗助は僕の敵じゃあない。だから戻るんだ」

名残惜しそうに、黄金色の風が僕の頬をなぞる。気配が散見した。

「2つも下なのに呼び捨てたあい度胸じゃねえか」

納得いかなさそうな仗助に僕は笑った。

「外国ではファーストネームが普通なんですよ」

「そっぴやぶんと日本語が上手だな、ジョルノは」

生まれも育ちも日本だし、苗字は違うし、僕の本名はハルノだけど、いちいち説明するのが面倒で僕は勘違いを訂正することはなかった。東方巡查が僕のことを話していないのなら、余計なことを言っただけ。ジェロの件に巻き込むわけにはいかないだろう。

「仗助、アンタ今日どっか出掛ける予定あったっけ？」

「んー？あー、今日はべつにこれといった予定はねえけどよー、それが？」

「あたし、今日は新年会の集まりがあつてねえ、帰ってくるのが遅いのよ。父さんも今日は夜勤で遅いみたいだし？アンタのためだけにご飯作つとくのも面倒だから、何か適当に買ってきてくれる？」

「別にかまわねーけどよおー、今月の小遣い使っちゃまったから、もう金ないぜ？」

「そんなこつたらろうと思つたわよ、全く。お金なら渡すわ、はい、これ。カメユーの惣菜でいいから、適当につくろつといて。よろしくね」

「そんぐれーならかまわねえけどさ、おつりはどーすんだよ？」

「それくらいお駄賃にあげるわよ」

「よつしや、やりい。なんか喰いたいもんあつかな、じーちゃん」

「さあねえ、夜勤だから適当にすませて帰ってくんじゃあないかしら？あんたに任せるわよ。じゃあね、行ってくるわ」

おう、いつてらつしやい、とひらひら手を振つてお袋を見届けたオレは、くあ、と大きく欠伸をして、今にも折れちまいそうな音を立てる首を回した。昨日の帰りに取りに行ったばかりの予約していたカセットは、ゲーム機に刺さりっぱなしだ。

朝飯、昼飯を食べる以外はズーっとリビングのテレビとソファを独占してぶっ続けでやりっぱなしだからか、ずいぶんとゲーム機が熱を持っていて。これはちよつと冷やしてやった方がいいかもしれないねえな。

大変お気の毒ですがセーブはお亡くなりになりましたっていうトラウマBGMを流されちゃあ、12時間のプレイ時間が台無しだ。今日は早く寝ろとせっついてくる爺ちゃんの時代劇にテレビを占領されないとなれば、早く晩飯を買いに行った方がいいに決まってる。

シナリオ的に佳境に入ったことだし、すっかり充血しちまつてる目を休ませるのもいい頃合だろう。カセットをゲーム機にさしっぱなしにして、踏んづけられないように所定の位置に戻したオレは、おふくろが残していったお札を財布に入れて出掛ける準備を始めた。

よっしや、やりい、万札じゃあねえか。手持無沙汰だったのか、ずいぶんと太つ腹な出費だ。これは安い惣菜を適当に買い集めて、残りの取り分を大きくした方が臨時収入も大きくなるつてもんだぜ。これなら来月まで我慢しなきゃいけねーかなあ、とがっくりきていた新作のゲームも手に入るつて寸法よ、やったね。思わぬ臨時収入に上機嫌になったオレは、さっそくカメユーに出掛けることにした。

社王町駅前にある東日本最大のチェーンデパートにやって来たオレは、食品売り場に直行すると適当にカゴの中に好きなものを放り込む。ありがとうございますー、と営業スマイルなパートのおばちゃんを通過したオレは、カメユーとプリントされた袋をひっさげてデパートを後にした。

さあてどうすつかなあ、せつかく懐があつたけえつてのに、お札を崩さないといけないっていうのは、無性に無駄な出費になっちゃう気がして困る。タクシーが楽だけ高いんだよなあ、というわけで結局オレはいつもの通学路に使つてるバス停に直行した。

3番のバス亭に並ぶことにする。持つててよかつた定期券。こういう時は学生つていいもんだぜ。休日と平日は時間編成が微妙に違うもんだから注意しないといけないとはいえ、中学校3年間通い続けた通学路だ。さすがにバスが来る時間なんて感覚的に分かつてるもんだ。オレが並び始めて間もなく定禅寺行きのバスがやって来た。よっしや、どんぴしゃ。

サラリーマンやOLの姉ちゃん、買い物帰りの婆ちゃんたちにまぎれて、そそくさと乗り込んだオレは、たまたま開いていた席に乗り込んだ。どさつと足元に買い物袋をおいたオレは外を眺めることにする。たちっぱなしは地味にきついから助かつたぜ。

しばらくするとバスは走り始めた。社王町を象徴する並木道は、イベントの会場になることも多い道路だから、歩道が広々と整備されて歩きやすい。散策しながら帰るにはもつてこいの場所だ。北に延びている駅前通りを進んでいくと、この並木道はS市の真ん中から杜

王町を東西に貫いている定禅寺通りにさしかかる。

そこをまっすぐに通って西公園通りを走ると広瀬川を渡る。そうすつとオレが住んでる住宅地が見えてくる。さあてついでに買った攻略本でも読むかねとビニル袋を探ったオレは、素知らぬ顔で集中し始めた。

しばらくバスに揺られていると、ぴんぽんと下車を知らせるベルが鳴る。何度目になるか分からない停車。ちらと先頭の電光掲示板を見上げると、これからある春先のイベント情報が流れていく。えーつといまどのへんだ？降りて行った人たちと入れ替わりで、同じくらいの人数が乗ってくる。

ようやく今いるバス停の名前が表示されて、ネクストが表示された。まだまだ先だな、と時間を確認したところですいぶんと目立つ金髪が目に入る。どこか空いてないかと視線が泳いでいた。美術室に飾ってある石像がしれっとした顔で服を着て歩いているのはずいぶんと人目を引くもんだなあ。

「よう、ジヨルノ」

突然名前を呼ばれて驚いたのか、びくつと大げさに肩を揺らした後輩は、こつちだこつち、と軽く呼ぶとオレを確認して、ほつとした様子で顔をほころばせた。なんだってそこまでビビってたんだ、こいつ。私服であうのはお互い初めてとはいえ、こいつのコロナ三連結はそうそう見間違うもんじゃあねえ。三つ編みでテントウムシの髪留めで結い上げてあるとなれば、間違いなく外人の後輩しかない。まあグレートな髪形をしてるオレも一発でわかるのは同じだけだな、あはは。

どっかに出掛ける途中らしいジヨルノは、オレの近くに寄ってきた。もう座る席がねえからたちっぱだな、こりゃ。

「あれ、仗助じゃあないですか。どうしたんです、どっかにお出かけですか？」

「オレか？オレはお袋に買い物頼まれちまってよお、もうカメユーで済ませたところだぜ。今から帰るとこなんだ。そういうお前こそなにしてんだ？」

ほら、とカメユーの袋をぶら下げると、このバスが通学路なんです
ねとジョルノは笑った。

「ちよつと調べものですよ、図書館で本を借りてきた帰りなんです」
「図書館だあ？勉強なんかかよ、真面目だねえ、お前。なんだってせつかくの休日をわざわざ図書館で過ごさなきゃなんねーんだか。なに借りたんだ？」

「たいしたものじゃあないですよ」

見せてくれたのは、ずいぶんとファンタジイ趣味な題名ばかりだ。小学生以下の子供が読みそうな絵本とか、ヨーロッパの翻訳された童謡とか、とりあえず題材はぜんぶ同じだ。ヴァンパイア。吸血鬼。なんだそりや。

中学生の男子が読むような本じゃない。えー、意外とお前そういう趣味なわけ、と笑ってやるとジョルノはしれつとした顔で笑いやる。

「僕の知ってる話を搜したら、こういうのしかなかったんですよ」

原文で書かれた吸血鬼の話をみせられて、うへえとオレはげんなりした。つまりこの英文で書かれた吸血鬼の話を元ネタに書かれた日本語のファンタジー小説を片っ端から借りてるわけか、こいつ。

なるほど、ジョルノは外人だもんな。日本語で書かれた祖国の伝承とか気になっちゃうお年頃なわけだ。それはわかった。言いたいことはわかった。でもなんで英語で書かれたファンタジーを見せられなきゃなんねーんだよ、とあからさまに嫌がって見せると、ジョルノは何がおかしいのか声を上げて笑った。

吸血鬼の伝承を考察してる論文とかまで借りちやってるのをみるとさすがに引くぞ、どんな中学生だよ。茶化しながら指摘するとジョルノは表情を落っことして、ぞつとするような真顔で返してきたから、返答に困ってしまった。

僕にとつては大事なことですよ、君にとやかく言われる筋合いはありませんよね、つていきなり突き放すようなことを言われてしまうと、どつかで地雷を踏んだんだろうなあとは思うけど、さっぱり分からん。なんでそこでマジ切れするんだよとちよつと焦ると、まあ嘘ですけど、としれつと笑いやがった。なんだこいつ。

とりあえずおちよくられてるのはわかったので、一発お見舞いしてやった。いきなりはなしですよ、いきなりはつて生意気な後輩はその場に沈んだ。

しばらくして復活したジョルノは、ちらりと電光掲示板に目を走らせる。そう言えば、図書館の帰りつてことは、これからジョルノも家に帰るつてことだ。この路線沿いに家があるつてことだよな。なんだよ、通学路同じなのか、知らなかったぜ。

もしかして、案外家が近かったりしてな。ちなみにオレはジョルノが通学してるところを見たのは転校初日の一日だけだ。いつだつてこいつは保護者の兄ちゃんに車で送り迎えしてもらつてる。本人曰く厄介なストーカーに付き纏われているせいで、学校や住んでいる場所まで変えなきゃいけないつちまったらしい。

おかげで部活もアルバイトも出来ないし辟易している様子のジョルノは、放課後のチャイムがなると速攻で帰ってしまうらしい。あわただしく校門を走っていく金髪は3年の教室からもよく見えるから噂はかねがねつてところだ。転校初日に保護者の兄ちゃんに内緒で一人で行動したことがよつぽど響いてるらしい。まあ、自業自得だな。

ぶつちやけこいつの場合、そこまで過保護にならなかつたつて、スタンドがあるからそのストーカーつてやつもぶつ飛ばせる気がするんだけど、それは大人の事情つてやつなんだろう。詳しい話は何も教

えてもらってないが、ジオルノはもともとあんまり自分のことは話さない。

「お、もうそろそろか？」

「そうですね、僕は次のバス停で降ります」

「へえ、こちらへんに住んでんのか、ジオルノって」

「……………いえ、僕は大手町のあたりなので、もつと先ですね。これからちよつと寄る所があるんですよ。じゃあ、失礼しますね」

「へえ、大手町か。川を越えた先の住宅地がオレんちなんだよ。案外近いんだなあ」

「そうなんですか？ああ、だから東方巡査は……………。そうだ、今日ここであったことは内緒にしてもらえませんか？実はこつそり出かけてるんですよ。みんなの気持ちは有難いんですけど、ずつとこの調子だと窮屈でしかたなくて」

「おいおい、まーた怒られるんじゃないのかよ、大丈夫かあ？何の用事は知らねえけど、はやく帰れよ？」

「分かってますよ」

じゃあ、また月曜日に学校でつてジオルノはそのまま鞆を片手に降りてしまった。またなーって手を振ってるオレに気付いたのか、軽く頭を下げたジオルノは、きよろきよるとあたりを見渡して誰かを捜してるみたいだった。友達と遊ぶ約束でもしてんのか？

降りる人間は少ないエリアだからか、あつという間に人の入れ替えは終わってしまい、バスの扉が閉められる。アナウンスが流れ始めて、バスは出発してしまった。ジオルノはようやく目的の人間を見つけたらしく、ゆっくりと歩みを始める。同じ年くらいの男子生徒だ。

あの制服はたしか結構金持ちの中学校の制服だった気がする。ジオルノがどつから転校してきたのかまではさすがに知らなかったこの時のオレは、転校前の仲のいい友達との再会を喜んでんのかと呑気に自己完結して、攻略本をよむ作業に戻ったのだった。

バス停から降りて、いつもの通学路を通つて家に帰ってきたオレ

は、ぶっ通しでゲームをしていた。もちろんジョルノのことなんかすっかり忘れていた。

保護者の兄ちゃんから電話がかかってきたのは、その日の夕方のことだ。ジョルノが家に帰っていないんだけど、行方が分からない。なにか知らないかと電話が入った。もちろんよぎるのは昼間の出来事だ。どんだけ過保護なんだよ、この兄ちゃん、と思いつつ、オレは知らないっすねーとジョルノとの約束を守る方向でしれっと嘘をついた。

なんか思い出したら連絡するっすよ、と約束だけ取り付けて、受話器を置いた。ちようどスタツフロールがおわったゲーム画面が目に入る。最速クリアを達成した高揚感と前の日から徹夜でゲームをしていたことで、妙なテンションになっていたのは事実だ。

こういうとき、無性に自慢したくなるのはゲーマーの性ってやっだ。ダイヤルを叩いて友達に長電話を決行しようとしたんだけど、何度か前科があるせいでろくに話を聞いてくれない。面白くねえなあ。あらかた友達の電話番号を並べ終えてしまったオレは、ちよつと意地になっていた。

どうすつかなあ、と思った時、またジョルノの保護者の兄ちゃんから電話がかかってきた。今度こそ、いよいよ狼狽しているのがわかる。この兄ちゃんとジョルノの関係まではしらないけど、親類なんだろう、全然似てないけど。さすがにこうも何度も電話を掛けられると困ってしまう。うぜえなあもう。

こつちのイライラなんかお構いなし。3度目の電話がかかって来た時には、どうやら爺ちゃんにまで連絡が行ってしまったらしく、ジョルノを捜してくれと頼まれてしまった。はああああ？なんで中学生が夕方家に帰らないくらいで捜索届を出すくらい大騒ぎしてんだよ、こいつら。

さすがにここまで来ると、事情を聞かないと動く気になんかなれっこない。そう思つて興味本位で詳細を問いただしたオレは、ジョルノがおかれていた状況があまりにもぶっ飛んでいて閉口せざるを得な

くなる。受話器をおいたオレは、青ざめていた。バス停に向かうことになったのは、いうまでもない。

1994年（平成6年）て言やあ、オレはまだ10歳だから、小学4年生だったころの話だ。地元の小学校は自由登校だったのに、その年からどういいう訳か保護者同伴の集団登校になっちまって、ずいぶんとメンドクサイことになった覚えがある。

今までだったら遅刻すれすれまで家でだらだらしてたのに、決まった時間にお袋と一緒に集合場所まで行かないといけなくなったから、さっさと準備しろって発破かけられる日が続いた。

放課後なんて一緒に帰る友達がいないと先生から苦い顔をされたし、4時と5時の下校時間帯が決まっていて、その時間帯を過ぎると次の時間帯まで勝手に下校することができなくなっちまった。低学年はたいてい4時に帰る。高学年は5時や6時にみんなでまとまって帰るのがうち習慣化した。

近所の人たちや保護者たちが見守り隊なんてのを結成して、横断歩道や人目の付きにくいところに立ってるのが当たり前になった。どうせ一時的なものだろうと気楽に考えていたら、結局オレが卒業するまでその奇妙な方向転換は続いたように思う。

時々通ってた小学校の下校時刻にかち合うと、ランドセル背負った小学生が集団下校をしながら、さよーならなんて笑顔で歩いていくのが目につくときがある。どうやら集団登校だけじゃなくて、集団下校まであたりまえになっちまったらしい。

なんだったって自由に友達と帰ることができなくなっちまったんだろう、と思つたもんだつたが、まさか5年ごしのその疑問が解決するたあ、思わなかった。

ジョルノの保護者の兄ちゃんが重い口を開いたのは、ちょうど小学生の下校時刻を告げるチャイムの音がオレの家まで響いてくる夕暮れ時のことだ。片桐安十郎、通称アンジェロという極悪非道な殺人鬼がジョルノを狙っているというぶっ飛んだ事実を聞かされたオレは、もちろん理由を聞いた。

日本犯罪史において破られることがないと思われた犠牲者の数を現在進行形で更新し続けている連続殺人犯。ニュースで死刑囚が脱獄したと連日報道されてるのを、苦い顔をして爺ちゃんが見ていたから名前だけは知ってる。

1964年生まれはこの男は、この杜王町で生まれ育つたらしく、目撃情報や監視カメラの映像から、実はこの町のどこかに潜伏している可能性が高いことを知らされた。なんだって爺ちゃんがジョルノにあんだけ入れ込むのかといえば、理由は簡単だ。

アンジェロの初犯は12歳、小学校6年生つー筋金入りの悪党だ。当時は少年法の関係で未成年は逮捕もされないし、実名報道もされないけど、それすら生ぬるいと言わしめるほどの重大犯罪をやらかしたアンジェロを補導して施設送りにしたのは、他ならぬ爺ちゃんだった。

これで品行方正な人間に生まれ変わればよかったけど、実際は20年間を刑務所と犯罪のどっちかで過ごすとしてもねえ人生を送りやがった。日本全国を転々としながら、あらゆる犯罪に手を染めるでしょうもない、胸糞悪い野郎になっちゃった。

そして、1994年の3月、S市内の子供たちが集団登校を強いられることになった事件をこいつは起こしやがった、というわけだ。

1994年3月、3人の中学生たちを誘拐したアンジェロは、そのうち2人を口に言うのも憚られるような所業で惨殺して、金品を奪う。そして、3人目の少年を殺害した後に、その親が金持ちであると知ってから、身代金誘拐に見せかけて両親に電話を掛けるという悪魔のような行動を起こしやがった。

身代金を受け取るときに逮捕されたアンジェロは、犯行を自供したものの、バラバラにされた3人目の少年の遺体はまだ見つかってないらしい。このアンジェロも逮捕されるまでには、いろんな騒動を起こしたらしく、そのさなかに警察官の一人が刺殺されている。

「同僚だったんだ。正義感の強い、いいやつだったのに」

5年前の事件だというのに記憶が風化しないのは、きっと初めて担当した事件だったからだろうとぼやいた兄ちゃんの声は、今にも泣きそうな位震えていた。ジョルノの保護者役をかって出たのは、その罪滅ぼしでもあるんだと懺悔室にいるみたいに告白は続いた。

「私たちが悪いんだ。あの時、あの男を殺していれば、あの子はバカげた妄想に囚われることなんてなかったのに」

引き金を引けなかったことを後悔するように、苦悶の声は受話器越しに震えていた。1998年10月、絞首刑が執行されたアンジェロは、20分間生き続けるという異常事態に見舞われて、死刑執行が延期された。

その翌週、ある男と共に脱獄して今に至る。ここまで話されたオレは、嫌な予感がした。ジョルノは3か月ほど入院してたと云ってなかったか。沈黙するオレに、お察しの通りだよと兄ちゃんは苦笑いする。

「10年前に実の母親とその恋人である男から虐待とネグレクトを受けていたあの子は、戸籍すらもらえない瀕死の状態で保護されたんだ。それに加えて、その恋人はベビーシッターの女性を殺害してる上に、数えきれないほどの犯罪に手を染めてたもんだから、そいつも服役してたんだ。アンジェロと同じ監獄に。そして、脱走した。去年の10月21日、あの子は誘拐されそうになったんだ。そのせいで、今みたいに送迎してた児童養護施設のスタッフを目の前で殺された。」

その時のショックで、あの子は養父を殺したのは自分だという捏造した記憶に苦しんでいるんだ。本当は共犯であるアンジェロに刺殺されたんだ。何度言っても話を聞いてくれない。仗助君だったよな？仲良くしてくれてやることはあの子から何度も聞いてるんだ。これからも仲良くしてやってほしい。そして、これは友達である君にしかできないお願いだ。絶対に一人にならないでくれと伝えてくれないか？」

オレが青ざめるのは時間の問題だった。あわてて今日の昼ごろ、図書館帰りのジョルノとバスの中であって、途中下車したことを白状したオレに、やっぱりそうかと中堅警察官はためいきをついた。刑事の勘は敵に回すといいいことないぜ。

他に気になることはないかと告げられたオレは、ジョルノが中学生のトモダチと会ってみたいだとバス亭での光景を思い出しながら告げると、それはありえないと断言されてしまった。

ジョルノがぶどうヶ丘学園の中等部に転校したことは、前通っていた公立の中学校には伝えていないし、その危険性はジョルノが一番知っているからありえない。その中学校の名前を告げられたオレは、悪寒に背筋を凍らせた。オレが見た金持ち中学校とは全く違う名前だったからだ。

じゃあ誰だ。あのバス停でジョルノと会ってた中学生は誰だ。オレがその中学生の着ていた制服を必死に思い出しながら告げると、絶句する警官の声がある。そんな馬鹿な、ありえない、と今にも崩れ落ちそうな声が聞こえてくる。辛うじて聞き取れたのは、その制服を着ている中学生は、この世に存在しているはずがないということだった。

「5年前の事件のせいで、風評被害を恐れた中学校側が設立50周年という名目で、制服のデザインを男子生徒も女子生徒も大きく変更しているんだ。私立の学校だから定期的にデザインを変更しているものだが、5年前のあの日からあそこの中学校は一度もブレザーを採用

していないんだよ」

「じゃ、じゃあ、ジヨルノが逢ったのって、誰なんだよ」

「わからない。でも、あの子がそのバス停で降りたのは、多分アンジェロの事件について調べるつもりだったんだろう。すぐ近くにある公園の森の奥が3人の少年たちが犠牲になった事件現場なんだ。ありがとう、仗助君。あの子の居場所がわかった。これからそっちに急行するから、君は家にいるんだ」

「ば、ばっかやろー！ダチが危ない目にあってるってのに、そんなことできるか！」

「君のいうことはわかるよ。でもアンジェロは連続殺人犯なんだ。君はまだ中学生だろう、無茶をするもんじゃあない」

「うるせえー！」

あ、ちよ、おい、という制止の言葉すらイラついて、乱暴に受話器を置いたオレは、うちを飛び出した。時計を見たら、ジヨルノが降りた停留所に向かうバスの発車時刻が迫っていたからだ。

オレがバスに飛び乗った時にはすでに傾き始めていた太陽は、一人で停留所に降りたところにはすっかり西側の高層ビル群に沈んでいた。青色や紫色が溶けるように消えていき、赤色や黄色が散乱しはじめる。

空も山も川も道路も森もすべて真っ赤に染めていく夕焼け空は、薄く広げた雲がぼんやりと灰色がかかった赤色に染まっていた。ジヨルノのことは見かけなかったか、と通りがかりの人に声を掛けてみる。やっぱりコロネに三つ編みのポニーテール、そしてテントウムシのアクセサリを付けた学ランはとっても印象にのこるらしい。何人かに話を聞いてみると、すぐに目撃情報は集まった。あっちにいった、

こつちにいった、とこの辺りに詳しくないオレに、わざわざ指差しして説明してくれる人もいる。

警部の兄ちゃんをそれとなく待ってみたけど、やっぱり来ない。じれったくなつて、オレは一足先にジヨルノを捜しに行くことにした。戻つてこないという不穏な情報まで得ちまったのは誤算だった。ジヨルノはアンジェロの事件の舞台になった公園を目指して出掛けたらしい。

不気味なのは、誰もいなかったことだ。誰かつて？オレが目撃したジヨルノと一緒にいた中学生のことに触れてくれる人のことだよ。

どんどん伸びていく黒い影がオレを追い越していく。部活帰りの学生たちの話し声が遠い。通学路からわざとらしく外されている歩道は、近所の人たちからも倦厭されているらしく、人通りが極端になくなった。

どうやらアンジェロが脱走したニュースのせいで、5年前の悪夢を思い出す人たちは自然と憩いの場を避ける傾向にあるらしい。不審者注意の古ぼけた看板。今にも真つ暗になりそうな、ちかちかしている蛍光灯。むらがる小さな虫たち。薄暗い公園。真つ黒な森は人通りがあつてもわからない。

ろくに整備されていない、雑草が生え放題の路地を曲がれば、それこそ公衆トイレのあたりは格好の死角になっている。こりゃあ、確かに近付きたくねえよなあ、不気味なことこの上ない。想像を絶するスポットにちよつとだけびくびくしながら、オレは先に進んでいった。

警部の兄ちゃんが言つてた事件現場はこの先にあるはずだ。しかし、雰囲気あるなあ、もしここで肝試しがあるならこの上ないスポットだろうぜ。真つ黒な髪の毛の長い女が立っていたら、それこそちびつちまう自信がある。あちこちに潜む闇が余計にこつちの不安を掻き立てる。

どうでもいいことを考えながら、オレは先に進んでいった。ジヨルノのやつも勇気あるぜ、よくこんなところこようと思うもんだ。昼だつていやだぜ、こんなところ。

空を見上げれば、一番星が見えていた。気付けば、すっかり日が落ちて、あたりは文字通り真っ暗になっていた。おーい、ジョルノ、と叫んだものの、森に吸い込まれてしまう。まあ聞こえる訳ねえか、と苦笑いしたオレが前をみると、薄い光の下に誰がいる。

「……………っ!？」

思わず足が止まっちゃおう。びくっとして後ずさりしたオレは、ジョルノ曰くスタンドを呼び出すことにする。幽霊にスタンドが有効なのははしらないけど、いないよりはましだろ、ずっと。オレの傍らで警戒しているスタンドをみると、ちよつとだけ安心するってもんだ。

もう一度前をみると、そこにはしやがみ込んで泣いている女の子がいた。えぐえぐ鳴咽がきこえてくる。かわいそうに、体を震わせている。ペたん、と白いソックスと赤い靴をなげだして、スカートが汚れるのなんて気にしないで、両手に顔を当ててなきじゃくっているのがわかった。

こつちのことなんか気にしないで、わんわんないている。さすがにちよつとかわいそうになったオレは、ちよつとバツが悪くなって頭を掻いた。なんだってこんな時間にこんな小さな女の子がこんなところでないんだ。オレの脳裏によぎったのは、刑事の兄ちゃんが教えてくれたジョルノの過去だ。

このあたりに公衆電話は見かけない。これはバス停がある停留所まで戻って、警察に通報した方がいいんじゃないかな。幽霊と見間違ってしまった罪悪感から、オレはすっかり恐怖心が抜けていた。スタンドを退散させて、オレは女の子に声を掛けた。

「どーしたんだ？こんなところでよお」

真っ赤な顔をした女の子が顔を上げる。ひく、ひく、としゃっくりしながら、オレを見上げた女の子は、ぞつとするほど色の無い目をした外人の女の子だった。

「あたし、×××
×××」

最初は日本語だったのに、舌足らずな割に流暢な英語が飛び出した。ぶつちやけ英語が大の苦手なオレ。リスニング能力なんて期待されるのがおかしい。全く聞き取れない。

リスニングの小テスト並みにびっくりするほど、女の子が言っていることがわからない。オレはあいまいな返事しかできなかつた。

「ねえねえ、お兄ちゃんたち、どこから来たの？」

「おにいちゃんたちい？」

「だって、そうでしょ？お兄ちゃんがおんぶしてる、変なお兄ちゃん」

指差す先にはスタンドが待機してた場所がある。まさか見えてんのか？この子。

「ねえねえ、お兄ちゃんたち、どこから来たの？」

「お、オレはその、定禅寺のあたりから」

「ふうん、そうなんだ。おにいちゃんの名前はなんていうの？」

「仗助、東方仗助っすよ、よろしくな」

「仗助お兄ちゃんね。仗助お兄ちゃんはこの公園気に入った？」

「え？」

「あたしね、ここでよく遊んでるの。だあれも遊んでくれないからつまんないの。」

「ねえ、仗助お兄ちゃん、あたしのお友達になって？ね！いいでしょ？」

子どもの気分はころころ変わる。さっきまで泣いていたのに、すっかり忘れてしまった女の子は、にっこりわらってオレに近付いてきた。

「まあ、それくらいならいいっすよ」

「ありがとう、仗助お兄ちゃん」

これでまた×のお友達がふえたの！と女の子は大喜びで跳ね回る。よかった、これならなんとか言いくるめれば警察への連絡も楽そう
だ。

「なあ、ジヨルノってやつみなかったか？」

「じよるの？」

「そうそう、ジヨルノ。×ジヨルノ。オレア、そいつを捜しに来たんだよ。いつまでたつても帰ってこないって、みんな心配してつからさ、迎えにきたんだけどよお。金髪で、くるくるしたものが3つ並んでる前髪したやつ、しらねえ？これくらいの身長なんだけどさ」

きよとりとした女の子は、にぱって笑った。

「ジャックのことね。仗助おにいちゃん、ジャックのお友達なのね」

「はあ？ジャック？」

「うん、そう、ジャック。お伽噺にでてくる悪い巨人を倒した男の子に似てるから、ジャックってよぶことにしたのよ。小さなお豆からお空まで届く大きな樹を造つちやう男の子だから」

「あー、もしかして、ジャックと豆の樹か？」

「うん、そう！ジャックがいうには、悪い巨人をダビデっていう男の子が倒しちゃうお話がもとなんだっていつてたわ。ダビデでもよかつたんだけど、ジャックの方があってるもの。だから、ジヨルノはジャックなの」

「その様子だとジヨルノがどこ行ったか知ってるって口ぶりっすね。よかつたら教えてくれないっすか？」

女の子がオレの学ランの袖を掴んで見上げてくるので、どーした？って声を掛けた。

「いいよー、そのかわりに、××のお願い、聞いてくれる？」

「なんすか？」

「えっとねー、あのねー、ふふ」

女の子はわらった。

「あのねー……お兄ちゃん、死んでくれる？」

世界が暗転した。

第3話

むせかえるような花の匂いに目を覚ましたオレの前には、信じらんねえ光景が広がっていた。見渡す限りの蒼い空と綿菓子をちぎったような白い雲、青々とした緑のアーチには、むせかえるようなバラの大群がひしめき合っている。

いろんな色のバラがある。蒸し暑い夏の日差しが照りつける。太陽は真上だ。かさかさの口の中に違和感を覚えて、ぺつと吐き出すと、葉っぱが飛び出してきてぎよつとする。

オレがぶつ倒れていたところは、どうやらユリの花畑のようで、数えきれないほどのユリが延々と咲き誇っているのが見えた。なだらかな丘に広がる花畑。寝ところがついていたオレの形通りに、ぼつきぼきに折れている、見るも無残な形になっているユリがある。

いつもの癖でスタンドを呼び出したオレは、いつものように傍らに姿を現した相棒にほつとする。よかつた、スタンドが使えなくなつちまつたわけじゃあねえんだな。元通りの形に復元してくれたスタンドを退散させて、とりあえず、そそくさと芝生が続いている遊歩道に移動した。

ずいぶんと整備されている庭園だ。区画ごとに迷路のように背の高い緑色のアーチが道を作っている。こんなところ、小学校の遠足いらいだぞ、なつかしいな。でも、今はそつちに脱線するわけにはいかないんだよ。

すつかり土っぽい私服から砂ほこりとユリの葉っぱ、花粉を乱暴に払いながら、まだまだ頭がぼんやりしちまつてるオレは、一体何があつたんだよ、全然わかんねえぞ、と頭を抱える羽目になった。

「……………どうなつてんだよお、くっそ」

絶叫する気力すらわかねえと、口元が無意味に笑つちまうことを今知つた。オレはこんなところに来た覚えはねえし、行かされた覚えもねえ。気付いたらここにいたんだ、わけわかんねえぞ、なんだよそれ。

足元にあった石ころを思いつきり蹴り飛ばしながら、はああ、と大きくオレはため息をついた。ぼんやりとした記憶がやつこのことで目を覚ました。いや、あった。ここに連れてこられる理由がたった一つだけあったこと、たった今思い出したんだよ。

「スタンド使いだっただのかよ、あの子」

思えばオレの傍で待機してたであろうスタンドをまつすぐに指差して、おにいちゃんたち、と口にした時点で警戒すべきだったのかもしんねえなあ。オレがおんぶぶしてる変なおにいちゃんと口にした時点で、おかしいと判断するべきだったんだろうなあ。

オレのスタンドに気付いたのは、今のところジョルノとあの子だけだったわけだから。でも、生まれて初めてオレ以外にスタンドが使える奴にあっただばっかだっけ言うのに、ああそうですか、気を付けます、なんていう訳にはいかねえだろうがよ。

ジョルノもオレもスタンドが何なのか、なんてはつきりと知ってるわけじゃあねえ。スタンドが使えなくても、スタンドは見えるっていうやつがいたって、あーそうなのか、って信じちまうレベルなんだから。

その結果がこれだけだな、笑えねえ、笑えねえよ、くそが。オレの頭の中では、うわああああんって大泣きしている女の子の悲鳴がリフレインしていた。

お兄ちゃん、死んでくれる？なんて、とんでもねえことをほぎきやがった女の子。あまりにもぶつとんだ発言に頭がオーバーヒート起こして、理解することを全面拒否やがったせいで、状況把握すんのがおくれちまった。

どういう意味だー？と問いかける前に、女の子はおやつまだー？とでも聞くような気軽さで続けやがった。

「わーい、わーい、うれしいなー×××のお友達になるってことは、死んで
!×××

くれるってことだもんねえ！仗助お兄ちゃんもずーっと一緒にいてくれるんだー。ねえー、早くー早く死んでよー、ねえねえ早く死んでよー、ねえ早くー。ねえ、なんで死んでくれないのー？あたしの言うこと聞いてくれないんだー！仗助お兄ちゃんもうそつきい！」

女の子はジャックには×のお友達しか会わせてあげないんだからって頬を膨らませて怒る。もちろんオレは断った。速攻で断った。なんだって死ななきやいけねえんだよ、意味分かんねえから。

あたりまえのことをいっただけだつてのに、まるで意地悪したこつちが悪い、みたいな態度で女の子のきらきらした大きな目がうるうるになっていく。あたしのいうこと聞けないの!?やだやだやだやだ、そんなのやだあ！つておもちゃを買ってもらえない子供みたいなダダのこね方するもんだから、そのあたりでようやくオレはこいつは普通じゃあねえと気付いた。

女の子はわんわん泣きわめく。まるでパパとママでもよんで、怒ってもらうんだから、とでも言いたげに、思いつきり声を上げて泣きわめいた。薄暗い公園の中で女の子のわがママが溶けていく。

「うえーんっ！仗助お兄ちゃんが意地悪するー！ひどいよー、ひどいよー、仗助お兄ちゃん酷いんだよー！仗助お兄ちゃんがねー、あたしが死んでねっていったのにねー、死んでくれないのー！うえーん、うえーん。仗助お兄ちゃんとずっと一緒にいたいのにね、だからお願いしたのでー！」

お兄ちゃんもうそつきいー！というリフレインがとまらない。ぐるぐる回る女の子のわがままに、いいかげんプツツンとしちまいそうになった時、あたりが真っ暗になっちゃったってわけだ。

そして気付いたら、どっかの植物園にいた？いやいやいや、意味分かんねえぞ、なんだよこの脈略の無さ。見た目は子供頭脳は大人の名探偵だつて、じつちゃんの名に懸けて頑張る高校生探偵だつてもつきつちり伏線はるだろ、普通。なんだよ、この超展開。打ち切り寸前

の漫画じゃあねえんだぞ。

てつきりジヨルノのときみたいに、スタンドが攻撃してくるものだとばかり思っ、スタンドを出そうとしたけど暗闇に飲まれるのが早くて間に合わなかったんだよ。感覚的にはそんな感じだ。

たしかに女の子の爆発した感情に従って、暴走気味なスタンドらしきものがオレに襲い掛かってくる感覚は確かにあったんだ。でも、その暗闇の先には初夏の植物園が広がっている。

なんだそりゃ。あー、だめだ、さっぱりわかんねえ。どういうことだ、オレは死んだのか？ いやいやそんな訳ないだろ、こんなかたちであの世にいくなんてまっぴらごめんだぜ。死ぬのは布団の上でひ孫に囲まれて死ぬって決めてんだから。

さあて、どうすつかねえ、とオレは蒸し暑い初夏の日差しの中で、途方に暮れた。ぼーっとしても埒が明かねえ。とりあえず、誰かいないか探してみるとすつか。迷路のセオリーと言うことで、緑色の壁に手を当てたオレは、その先をずんずん歩いていくことにした。

そういやこれって迷路の入り口からやらねえとてんで意味がないんだっけか。まあいいや、そんな時はそんな時だ。オレにできることは、目についたバラの花をぽつきり折って、芝生に落つことすことだけだ。

迷路はどんどん中央に近付いていった。ようやくたどり着いた真ん中には、ログハウスが立っていた。どんどん！ ドアを叩いてみる。呼び鈴はついてない。がんがん叩くタイプの板もないし、鉄製のライオンの口や金具もない。つつーことはだ、こうやって呼び掛けるしか、ないわけだな。

「ノックしてももしもおーし、誰かいませんかあー！」

ドアノブをぐるんと回すと、かしゃりという音がした。ドアには鍵がかかってない。不用心だなあー、と思いながら、こそつとだけ部屋の中を覗いてみると中は真つ暗で誰もいない。真昼間だつてのにカーテンが閉められてる。しつかたねえなあ、と何のためらいもなくオレはログハウスに不法侵入を決めた。

怒られたらそんな時はそんな時だ。見慣れない光景でも、ここにいるのは事実なわけだし、周囲の状況がどうなつてのかわを確認しないことには始まらない。情報を得るには人を捜すのが一番だからな。ちやつかり正当化しながら、オレは思った。爺ちゃんだけは勘弁な！

「鍵もかけないでお出かけなんて不用心だぜー、アンジェロが社王町を徘徊してるかもしれないつてのによお。強盗が入ったらどうすんだ。つっわけでえ、オレが守つてやるから心配すんな」

誰もいないのはわかつてるけど、ついつい口に出してしまうのは後ろめたさが消えないからだ。驚きの白々しさに浮かんでくるのは苦笑い。

もしオレがこのログハウスの住人だったら、てめえ人んちに堂々と侵入してくるたあい度胸だなあ、こんなところで何してやがる、ふざけたことぬかしやがったらタダじゃあ置かねえからなあ！つて怒鳴り込むに違いない。

殺気びんびんでスタンド使つて殴り付けて、速攻で警察に電話だな、間違いない。願わくばここの住人達が温厚な人でありますようにつて思いながら、オレはしつっれいしまーすつて勢いよく扉を開けた。

「あー」

オレは扉を閉めた。何だ今の。ホラー映画やホラーゲームなんか

でよくある、声を出さないでのごだけ震わせると出てくる、地を這うようなおつそろしい声が聞こえた気がしたのは気のせいかな。意を決してオレはもう一度だけ扉を開けた。

「あー」

「すんませんでしたあ！」

ばたあんと大きさに扉を閉めたオレは、明らかにこっちに向かって歩み寄ってきていた黒い影とぼつちり目が合ってしまった、必死でそいつがログハウスから出てこないよう扉を外側から押さえつける。なんだよ、今の。

目がなかったぞ、目が。あるべきところが真っ黒で、底なし沼が2つ並んでたんだが、あれはなんだよ。口も鼻も真っ赤にこびり付いた血がだらだら流れ流しなんだけど、なんだあれ。まるで内側から出血したように、ありとあらゆる穴から出血している凄まじい光景だった。

やっべえ、夢に出るぞ、あれ。スプラッタ映画も真っ青だ。マジモンを見ちまったと悟ったオレはどんどん血の気が引いていく。真昼だったのにどうしてゾンビがここにいるんだよ。ああそうか、太陽の光を浴びると蒸発するから、わざわざカーテンをしめてガムテープで目張りするほどの徹底ぶりを見せてるわけですね、どうでもいい伏線回収ありがとうございます。

はあ、とため息をついたオレはどうしようと頭を抱える。スタンドで殴ってみるか？ゾンビでも一応は人間だったわけだし、スプラッタ顔だって元に戻れば見れるようになるかもしれないねえよな？そこまで考えて、ゾンビに触れなきやいけないことを思い出したオレは首を振った。

無理だ無理。いくらオレでもさすがにあれは無理。噛みつかれたら死ぬ。主にオレの精神が。そうこうしている間に、内側からだむだむと叩いてくる音がする。勘弁してくれよおー。

唯一の救いは今が昼間ってことくらいだろう。もしこれが夜だっ

たらと思うと身の毛がよだつ。今回ばかりは意味の解らない空間に感謝した。その時だ。ちようど反対側の方から、声がしたのは。

「やっと見つけた」

オレは即座に戦闘体勢に入った。かすれながらも叫ばれた声は、もとの声色が分からないくらい疲弊している。

「中にいるんだろう?」

問いかけてはいるものの、確信に満ちている。最悪だ、今度は何だよ、くそ。オレは舌打ちした。

「先に行っておくけど、誰もいないふりをするのは無駄だからやめるんだ。誰かがいるのは既に解っているんだ。僕以外にいるのは君しかない。チエツクメイトだ、諦めてくれ」

まじかよとオレは思った。はったりにしてはずいぶんとドスの利いてる嫌な言い回しだ。そうとうイラついているのがわかる。はったりにしても事実にしても、きつと声の主は迷うことなくこつちに直進してくるだろう。

何をされるかわかったもんじゃあねえ、どうする、逃げるか? ログハウスの住人が開け放たれてしまうけど、奇襲を掛けられるよりはずっとましだ。心の中でカウントを始める。5. 4. 3。

××
「×、今度は君が鬼です。かくれんぼは終わりにしよう」

オレは思わずそつちに顔を出した。

「ジオルノ!? ジオルノじゃあねえか、どうしたんだよ、お前!」

「なっ、ど、どうして君がここに!? そんな馬鹿な、どうして、てつきり

「×だと思っただのに！」

「×なんであの子とかくれんぼなんかしてんだよ、ジョルノ」

「それはこっちの台詞ですよ、仗助。なんだってログハウスの扉にへばりついてるんです？」

「そりゃあ、あれだよ、このログハウスにとんでもねえ奴がいるんだよ！だから」

「ああ、君も見たんですか」

「って、へ？」

「僕はかれこれ半日ここにいるんです。多分、君より状況把握が出来ると思うんだ。だからいいですけど、大丈夫ですよ、仗助。ログハウスにいる彼は無害です。なにもしてきません、いや何もできないんです。ほつといても大丈夫ですよ」

「いや、いやいやいや何言ってるんだよ、ジョルノ、お前」

「僕だって知りたくなかったけど、知っちゃったんだから仕方がないじゃないですか。彼は×の父親で、見ての通りすでに死んでいるニンゲンなんだ。普通の死に方じゃあない。仗助も東方巡查から聞いてるんじゃないですか？内側から爆発するみたいに、ありとあらゆるところから血を吹き出して死ぬ、変な死に方をしてる人が多すぎるって」

「そーいやあ、そんな話も聞いた気がするけどよお」

「だから彼は僕たちに何もできないし、僕らも彼には何もしてやれないんです。彼は幽霊だ。僕たちと同じようにこのガーデンに閉じ込められているんです。僕がここに連れてこられた時、×はかくれんぼをしようって言ったんだ。だから僕は×と×を捜して隅々まで探したんですよ、出られるところがないかの確認もかねて。まあ、このザマですけどね」

「かくれんぼかあ、ずいぶんとかわいらしいお願いじゃあねえか。こっちなんか友達になってくれって言われたぜ、死んでくれる？ってな」

「それはずいぶんと情熱的なアプローチですね、仗助。しかし、困ったな。僕のスタンドは建物や乗り物内部にいる生命を感知することが

できるんですが、誰かまで特定することができないので早合点してました。このガーデンは一見外の世界に見えるんですが、僕が生命探知を使えるあたり、どうやらとても広い空間のようなんですよ。×はど
うやらこのガーデンがスタンドのようなんです」 ×

「そんなことまでできるのかよ、便利だな。しかし、確かにそれはやべーぜ、オレたち以外に生きてる奴が一人もいないってことじゃあねえか」

「そうなんですよ、今このガーデン内に×は×はいないようですよ。自由に出入りできるみたいだし、どうやって会え×ばいいんだろう」

「はあ、とオレとジオルノはため息をついた。」

「そういうえば、どうして仗助はここにいますか?」

「どうもこうもねえよ。おめえの保護者さんに頼まれて、はるばるここまで助けに来てやったんじゃあねえか。なあにがストーカーだよ。アンジェロなんてやっべえやつに狙われてんなら、なんだってオレに相談してくれなかったんだ。ダチを助けんの理由があるかよ、ぼかやろうが」

ジオルノはあつけにとられてぽかんと口を開けた。なおさらイラついてオレは舌打ちする。安く見られたもんだぜ、東方仗助って男をよ、侮辱する気かてめえ、とうなるように睨みつけると、ジオルノは観念したように大きく肩を落とした。君って人は、とあきれ顔が苦笑いに代わる。

「今度はオレの番だぜ、ジオルノ。てめえ、あの公園に何しに行った。ついでにあの中学生は誰なんだよ」

僕の負けですね、とジオルノはぼやいて、すぐ後ろを振り返る。

「紹介します。TG大学附属中等部の元生徒であるKさん。みてのとおりに、幽霊です。アンジェロにバラバラにされて、まだ見つかってないらしいんですよ。だから地縛霊といった方が正しいのかもしれない

せんがね」

オレはいよいよ言葉を失った。

はっはっは、と荒い息を吐きながら走ってくる動物の影に目をやると、雑種の野良犬が生垣の向こう側から姿を現した。くうん、と鼻を鳴らしてオレとジョルノに近付いてきた茶色の野良犬は、よく見ると歩き方がいやに不自然だと気付く。

怪我してやがんのか？もとは飼いだったのか、古ぼけたさびている首輪をしている野良犬が、こっちに尻尾を振ってやってきた。すすん、と足元の匂いを嗅いで確認してるのを見下ろした。野良犬がたどってきた足あとにだらだらと赤い跡が続いている。

ぼたたと犬から滴り落ちる流血は緑の芝生に血だまりをつくってしまう。ぎよつとしてよくみると、そいつは生きてるのが不思議なくらい、目を背けたくなるような大けがをしていた。尻尾のあたりから抉り取られた肉がのぞいている。骨や皮がだらりと垂れさがり、ずるりと体の内部にあるものがずり落ちそうになりながらゆれていた。

思わずしゃがみ込んだオレはそいつを直してやろうと手を伸ばす。なんで普通に歩き回ってんだ、こいつ。普通ならあまりの激痛に歩けないだろうに。オレの力だとすでに失われているところを補完することは出来ない。むりやり空いている大穴を塞いで、不自然な形でへこんだ体に茶色の体毛が覆ってくれるくらいの応急処置しかできない。

出血多量で死ぬことはなくなるはずだ。大人しいそいつは逃げようともせず、オレが手を伸ばすのも気にしないでわんわんと鳴いていた。よし、いい子だ、と抱き上げようとしたオレの手は、そいつを

するりと通り抜けてしまった。

あれ、と一瞬固まったオレを貫通する野良犬。興奮気味に体を揺らして飛びかかろうとするが、何度やってもオレから通り抜けていく。ぼかんとしているオレに、さつきからずっとオレと犬の様子を見つめていたジヨルノが静かに笑った。

「これでわかってくれました？ 仗助。僕がさつき言った意味。僕と仗助以外にこのガーデンには生体反応がないってのは、こういうことなんですよ」

彼は僕たちに何もできない代わりに、僕たちは彼に何もしてやれないという言葉の意味をようやくオレは理解する。×の父親もこの野良犬も死んじまったときの姿のまま、死んだことに無自覚なのか、それともここから出られないせいなのか、ふらふら彷徨ってる幽霊つてわけだ。

いくら触れたものを治す力があるオレでも、さすがに実体がない幽霊やスタンドを直すことはできっこねえ。目の前で血みどろになってる野良犬を見つめるオレは、伸ばしかけた手を膝に当てた。見てるだけしか出来ねえつてのは歯がゆい。

ぷちりと咳き込むような、強烈な香りを放つバラのアーチから、一輪ぶちりとへし折ったジヨルノの手からアゲハチョウが生まれた。ひらひらと飛び始めた遊び相手を発見した幽霊の犬は、オレの身体をすり抜けて、一目散にアゲハチョウのもとへと飛んでいく。

わんわん、と元氣よく走り回る野良犬なんて気にすることもなく、アゲハチョウはジヨルノがへし折ったバラの群生に止まって羽を休めている。お、おう、と頷いたオレは立ち上がった。冷や汗をぬぐいながら、オレは乾いた笑いをこぼした。

なんつー涼しい顔してとんでもねえこと言いやがるんだ、こいつは。しれっとした顔でジヨルノは、感想はどうです？とでも言いたげに腕を組んで生垣に背を預けている。

「とんだホラーハウスだなアー。まじで幽霊しかいやがらねえってか？」

「ええ、そうです。こいつの他には、首が飛んでる猫とか、足がちぎれてるイタチとか、ペしやんこにつぶれてる癖にうるさいカラスがいましたね。きつと交通事故で死んだ動物たちなんだ」

「なあんか、あれだな。ここまできると笑っちまうぜ。×はなんだって幽霊ばっか閉じ込めてんだ」
×

「ニンゲンの幽霊は父親だけのようすしね、他には誰もいないみたいだ」

「まあゾンビよりよっぽどましだぜ」

「ゾンビならきつと治せますよ、仗助のスタンドで」

「ばっかいうなよ。ケガは治せてもゾンビ状態は治せねえだろ、多分」

「そうですか？なんにもできないよりはいいって顔してますけど？」

「まあそりゃーそうだけどよー、触りたくねえよ」

「たしかにそうですね。ゾンビだったら、こいつらの匂いはバラの匂いだってきつと誤魔化せない。でも、ゾンビの方が僕はよかったですよ、正直。死体を捜す手間が省けますからね」

しれっと公園に向かった理由を口にしたジオルノに、まじかよとオレはつぶやいた。ジオルノがいうには、アンジェロの犠牲者であるバラバラにされて埋められた少年の遺体を探し出すことが目的で、事件現場に足しげく通っていたらしい。

ジオルノのスタンドは物体に生命力を与えて、生き物にすることができる能力を持っている。その生き物は本来の持ち主のところに向かう性質をもっていて、遺体を見つけたら一度すべて生き物にしてみて、どこか遠くに行こうとする個体だけを捕獲するつもりだったらしい。

遺体の主はすでに土に還っているため、普通なら今こうやって野良犬の幽霊とじやれているアゲハチョウみたいなのに、その場所から動くことはない。その生き物にとって本来の主は大地と同化しているからだ。もともといたはずのところに納まろうとする個体の性質からか

んがえて、空に舞いあがる個体はアンジェロのものを媒介にして生まれたと考えるのが妥当だ。

言ってることはわかる。でも、なんで死体からアンジェロのもので出てくるんだよ。指紋とか足あとなら雨に流されてきえちまつてるかもしれないし、骨だけになってんじやねーの？5年前だろ？5年間も放置されている死体なんて見たことないけどよ。

「13年たつても、髪の毛が残ってたりするんだ。5年しかたつてないなら、残ってるもんですよ。それに骨や歯は残るんだ。アンジェロは結構ムゴイことをして、バラバラにしたみたいだし、アンジェロに繋がるものなんて、捜せばいくらでも出てくる。だから隠したと僕は思ってます。2人の犠牲者はあつさり見つかったって聞いているので」

「おつそろしいこと考えるなあ、おめー。よくそんなスタンドの使い方思いついたな。まるで死体を見たことがあるような口ぶりじゃあねえか。まあ、証拠を見つけてやりてえ気持ちも分かるけどさ、いくらなんでもぶつとびすぎだろー」

「そうですか？僕はアンジェロの行方が知りたいだけです。聞きたいことがいろいろあるんだ」

「義理のトーちゃん殺された上に、スタッフの兄ちゃんまで殺されたんだ。ジョルノがそう思うのも無理ねえけどよ、そう思い詰めんなよ」

「……仗助はなにか勘違いしてませんか？僕は復讐なんて考えてませんよ。警察に捕まってしまう前に聞かなきゃいけないことが山ほどあるんで困ってるんです」

「ほんとかあ？今のおめーの顔、はつきりいってマジヤベーぜ？正直、ここにきてよかつたつて心の底から思えるくらいにな。もし目の前にアンジェロがいたら、何の躊躇もなくスタンド使ってぶつ殺しちまいそうなくらい、殺気だつてるぞ、ジョルノ」

「……否定はしません。無駄なことは嫌いなんだ。でも、そうですね。僕にそのつもりはなくても、きつとアンジェロはそのつもりで来ると

思います。そしたら今度は言い逃れできなくなりますね」

「おいおい、何言ってるんだよ、ジヨルノ。ちつとは落ち着けて、な？」

ジヨルノはなにもいわないまま目を細める。君は優しいんですね、とこぼしたあと、静かに言葉を紡いだ。これを聞くとアンジェロから命を狙われる可能性があります、とわざとらしい前置きが入る。

これを聞いたら戻れなくなりますよ、なんて言い訳がましい牽制をしてくる後輩に、オレは笑い飛ばしてやった。ジヨルノは笑う。僕はずるい人間なので分かっています。心で嬉しそうに顔を上げてやがるくせに、うそぶいた。

「去年の10月21日、僕はスタンド使いになつていた養父に襲われました。目の前でスタッフを殺されて、土砂降りの雨の中、ようやくたどりついた堤防で殺し合いをしたんです。養父は僕を誘拐する気でした。仗助のスタンドみたいに、近距離型のパワータイプで、僕のスタンドは防戦一方でした。だから、堤防を決壊させて、僕と養父は濁流にのまれました。ここから記憶は曖昧なんです。分かるのは、10年前の養父は普通の人間だったのに、スタンドが使えるようになっていたことくらいだ。スタンドっていう言葉を聞いたのはその時です。間違いなく養父はスタンドという力を誰かからもらった。そして、情報を得ていた。そうとしか考えられない。仗助、君ならどうします？普通の人間は太刀打ちできないスタンドを持った相手がこの町に潜んでいるとして、バカげた妄想に苦しんでいる可哀想な中学生として、大人たちに護ってもらうことが一番だと思います？」

「……おいおい」

「スタンドが使える君だから話すんですよ、仗助。そうじゃなかったら、誰が話すもんですか。頭がぱーんってなった人扱いされるじゃないですか。僕はアンジェロは養父と同じように、スタンドが使えると思ってます。警察は僕の誘拐事件は二人が共謀してて、僕は狙われていると考えている。間違いない。スタンドが絡んでることを除けば完璧にあつてる。だからあの人たちが僕を守ろうとしてくれるのは正し

いことです。あたりまえのことをしてるだけだ。だから、どうしろつていうんだ。ただ見ているだけなんてまっぴらごめんなんですよ、僕はね」

「……マジで言ってるのか、ジヨルノ」

「ええ、もちろん。養父が包丁で殺されたと聞いてから、僕は確信したんだ。いくら濁流から這い上がった瀕死寸前の状態でも、自力で這い上がる精神力が残ってる以上、養父はスタンド使いです。普通の人間に殺されるほど軟な男じゃありません。でも殺された。アンジェロがスタンド使いと考えるのが自然です。体の内部から爆発したみたいに、体のあらゆる場所から出血した状態で見つかった。アンジェロは実験したんですよ、養父で。味を占めて、町中でさわぎを起こしてる。今日でたしか3人目ですか×の父親を含めるともつと、いそうな気がしますけど。だから、僕は知りた[×]いんだ。なんだって今さら僕を誘拐するなんて馬鹿げたこと考える奴がいるのか、知りたいんですよ。何もわからないままなのは絶対に嫌です」

たったひとりでここまで突き止めたあげくの行動だったとは思わなかったぜ、とオレは心の中でぼやいた。大人しそうな面してるくせに、ずいぶんとぶつとんだ野郎だ。これでホントに13歳なのかよ、中学1年生とは思えねえぜ。にい、とオレは笑った。

わかった、わかった、お前が言ってることはよくわかった。ホントに聞いてましたか？といぶかしげな表情に、おう、とさっきの話をかいつまんで繰り返してやると、そうですけど、と納得いかなさそうにジヨルノは口をとがらせている。

きつと想像していた反応と違ったんだろう。肩透かしを食らったような顔をしてる。さっきまでびっくりするくらい大人びてたくせに、若干すねてるあたりは13歳らしい表情が垣間見えるあたり、まだまだガキだなと思えてなおさら笑えた。

普通だったら父親と母親の家族とのつながりは、どんな両親だったとしても思い悩むもんだと思うけど、ジヨルノは恐ろしいほど自分と他人をわけて考えることになれてやがる。自分は自分、親は親、だか

らなんですか？とでもうそぶいてそんなスタンスをもってるのは間違いなさそうだ。

だから、損得勘定なしに動いてくれる人たちがいるとそのスタンスだけじゃ処理しきれなくなつて、どうしていいのか分からなくなつてしまふんだらう。美術室の肖像でも、そういうところは違ふんだ。だからオレは言つてやった。

「じゃあオレも噛ませろよ、せつかく話をきいちゃまったしなあー、ほつとけねえだろ」

ばしばしジオルノを叩いてやると、気管に入ったのかげほげほと激しい咳き込みが聞こえた。なんでそんなに嬉しそうなんですか、あんた、とジオルノは涙目で呻いている。付き合つてやるよ、死体捜し。あれだな、線路の上とか歩くんだろ？と聞いてみると、スタンド・バイ・ミーじゃあるまいし、とジオルノは大きいため息をついた。

「で、そのKつてやつとはいつ逢つたんだよ」

ガーデンにいる幽霊は、死んだときの姿のままだ。身体×のあらゆるところから出血したせいで、言葉を話す器官が死んでしまった×の父親がよい例だ。さつきからオレたちのあとをゆつくりとついてくる足元が透明に透けている中学2年生の少年は、さつきから一度も口を聞かない。

ジオルノ曰く、歯が全部抜かれてる上に、のどが酷い状態だから、喋りたくないそうだ。口を開けると失神しかねない状態がこんには、だと聞いたオレは即答でジオルノに通訳をお願いすることにしている。

ジオルノと一緒にいた時は、ありえないほど平然としていたから話したけど、オレはふつうの感覚をもってる人間だから、怖がられたくないらしい。オレがみるといつでも真正面しかみれない。真後ろはちよつとお見せできない状態。トラウマになって、悪夢に出てもおか

しくないレベルの大惨事が広がってるらしい。

ますますジヨルノが死体を見慣れてる疑惑がわいてきたぞ、おい。ジヨルノは首をかしげて疑問符をとばした。いらねえところですよ、てやがるぞ、こいつ。

「僕が休みになると現れるので、もしかしたら、と声を掛けてくれたんですよ。これならすぐに見つけられると思った矢先に、×と会ったんです。どうやら×はKに用があったらしいんですが、僕が見える分かるやいなや僕に標的を変更したらしくて。スタンドで逃げようとしたんですが、間に合いませんでした。展開のスピードだけなら僕以上ですね。攻撃性能が皆無なのが唯一の救いです」

「ジヨルノのスピードで間に合わねえんなら、オレなんて無理にきまつてるだろー。あー、だからオレがスタンドを見せても驚かなかつたわけだ。ついでにジヨルノでスタンド使いは幽霊が見えるかもしれねえって学んじまったわけか」

「そうみたいです。すいません、仗助」

「そうそう、これだよ、これ。なんだ、ジヨルノもちやんと謝れるんじゃないか。いいぜー、これでチャラにしてやるよ」

どういう意味ですか、と不機嫌になったジヨルノをさておいて。さあ、本格的にこのガーデンから脱出できる方法を探すとするか。オレ達は迷路の庭園を抜け出すべく、ひたすら外側の道を歩き続けた。しばらくすると、ジヨルノのスタンドでは突破できなかったという重厚な扉を備えた洋館が現れたのだった。

「ジヨルノのスタンドもやっぱラッシュユ出来るんじゃないか」

「仗助のスタンドを見て、僕も出来るんじゃないかと思って、練習がてら頑張ってみたんです。なんだか不思議な感覚ですね」

「そーかあ？何にもないところで、いきなりベっこべこにドアが潰れちまうより、スタンドがラッシュシユしてるのが見えてる方がいいだろ。何が起こってんのか分かりやすくもいいじゃねえか」

「僕は何も見えてない方が慣れてるんだ」

洋館の重厚でレトロな扉が、ベっこべこに潰れていた。全体的にオレのスタンドが打ち込める回数以上のへこみがあるのは、きつとジョルノのスタンドがスピードに特化してるからだろう。へこみが浅いのはきつと単発の威力は大したことないからだ。

パワーがなくてもスピードと回数があれば補える。ラッシュシユは得意みたいだな。まーオレのスタンドのラッシュシユには負けるけど？ラッシュシユのスピードとパワーの単純な掛け算だけなら圧勝だからな。ジョルノのスタンドを真っ向勝負の殴りあいをしたことはないけど、多分オレのスタンドが勝つだろうなあと思うと笑つちまう。

ジョルノの場合、そういう状況になる前にきつと距離取るために逃げちまうような気がするけどな。それでも、今のジョルノのスタンドが持つてるパワーは、せいぜい腕をへし折るくらいの威力しかない。全体的にゆがんでるけど破壊できるほどの威力はない。

隙間さえできれば大木に変化する植物によって破壊できるから、今はこれでいいんですとジョルノは悔しそうだ。

仗助、あとはお願いしますってすっかり白旗を上げたジョルノに、おー、いいぜ、と笑ったオレはスタンドを呼んだ。じゃあ見てろよ、これがお手本ってやつだ、と自慢げなオレにスタンドもやる気十分、勢いよくドアを玄関フロアまで吹っ飛ばした。

おまけ効果でジョルノとオレのスタンド攻撃で原形をとどめないほど破壊されたドアは、もう二度と役目は果たせないような歪な形にゆがんで修正される。ぜってえ玄関のスペースとあわねえな、これ。オレのスタンドの力はそんだけ器用な真似はできねえんだよ。

もちつと慎重にやればできるけど、ぶつちやけめんどいからやらね

え。さすがですね、とつぶやいたジオルノは、オレとスタンドをみて軽く拍手しながら入ってくる。コツとかあるんです？と聞いてくるから、感覚的なことしか言えないオレは、どう説明すっかなあ、と頭を掻いた。

初めて会った時、ジオルノはスタンドを知ってたくせに、自分のスタンドが見えてなかった不思議な奴だった。今でも相変わらずジオルノはスタンドがぼんやりとしかみえてない不思議な奴だ。オレはスタンドが見えるようになってから、この力が使えるようになった。

だからオレからすると、ジオルノが物体を生き物に変えるたびに、スタンドがその物体をぶん殴ってるのが見えている。でも今のところジオルノはその実感がわかねえらしい。オレが指摘して初めて、そうなんですか、と気付くような有様だ。てんでちぐはぐだろーそれ。

どういう経緯でスタンドが使えるようになったんだか。スタンドに話しかける時も見当違いの方向を向いたあとで、なぞるように視線が泳いで、ようやくスタンドのいる所を把握してるみたいだから、ぼんやりとしかみえてないんだろう。

金色のテントウムシがモチーフになってるスタンドは、無表情ながら本体の様子をみているのは、オレの感覚でいうときびしそうに見えた。オレのスタンドは見えるし、後ろからついてくる無口な中学生幽霊だって見えるくせに、なんで自分のスタンドだけみえてないんだか謎すぎるぜ。

なあ？本体に認識されてないって不思議な感じがするだろ？と投げかけるオレの視線に気付いたのか、さつきからずっとジオルノの傍らに佇んでいたスタンドがゆるりと姿をけした。ジオルノの意志とは無関係に姿を現してるときがあるのはなんでだろうなあ。

ジオルノはスタンドを制御出来るし、使い方はオレよりずっとうまいってことは、暴走してるわけでもなさそうだ。やっぱわかんねえな、スタンドってのは。オレのへたくそな説明に耳を傾けながら、ジオルノはなんども頷いている。

洋館は無人大った。幽霊の一人も居やがらねえ。こんなにかいシャンデリアがゆれてる洋館なら、お抱えのメイドさんとか執事のおじさんとかいそんなもんだけど、ただっぴろいだけで何も無い変な館があるだけだ。

グランドピアノがある防音の音楽室、豪華絢爛な食堂、見たこともない石造りの大浴場、お雇いのコックが腕を振るってそうなキッチン。螺旋階段の向こうは両親の寝室と子供部屋がひとつ、あとは客人用の部屋がいくつか。

それでスタッフ用の部屋があるだけだ。かつんかつんと二人分の足音が響く洋館を巡っていたオレたちは、ようやく最後の部屋に辿り着く。

「問題はここですね」

「ここだけカーテンが全開だったもんなあ」

ひらひらと真つ赤なカーテンが翻り、内側にある白いレースのカーテンが揺れていた二階中央のリビングと思われる部屋が扉の向こうにある。ここ以外のドアや窓、すべての出入り口は丁寧に施錠されていたのに、ここだけわざとらしく鍵が開けられてた上に、窓が全開だったのが外から見えたわけだ。明らかにおかしい。ぜってーないかある。

これで何も無かったら肩すかしもいとこだ。オレたちはあたりを警戒しながら、慎重にきしみを上げる扉を開いた。目に入った光景に、思わず僕たちはあわてて駆けだす。無駄と思いつつも人工呼吸をしようとして、空を切った右手にオレは舌打ちをした。

「……………なんだよこれ」

「……………知りませんよ、そんなこと。知りたくもない」

「同感だぜ、まったくくよおー！」

瓦礫に覆われた床に仰向けで横たわり、ぐったりとしているのは女

性だった。口からは血が流れている。傍には薬の空瓶があった。目立った外傷はない。あつたとしてもオレたちは何もできない。この女の人も幽霊だ。

きつと薬で死んでしまったから、ぼんやりとしたこん睡状態でずっと目覚めないままここでぐったりとし続けているんだろう。永遠に。さすがに気分が悪くなったオレたちは、窓から顔を出して深呼吸した。すると、その窓から見える庭園の真下に、オレたちがずっと探していた女の子がいる。

「××！」
×××

ジオルノが叫ぶ。やあつとみつけた！と大きく響き渡ったジオルノのこえに、驚いた顔をして××はこつちを見上げた。隣にオレもいることに気がついた××の顔はどどん曇っていく。あーあ、ととっても残念そうに口をとからせて、肩をすくめた。

「上がればいいのね」

××は、勝手知ったる我が家とでもいいたげな身の軽さで飛んでは、大きな屋敷の一番外側の部屋の窓から入って裏庭にでて、ガタが来ていた勝手口から屋敷にはいつていった。しばらくすると××がきやがった。さすがにオレとジオルノが階段のところまで止める。××ガキが見えていいもんじゃない。

「今は入っちゃだめだぜ、×××」

「大丈夫よ。仗助お兄ちゃん。ママが死んじゃったことは知ってるもの」

「ホントですか、×××」

「ええ、知ってるわ××」

××は笑っている。
×××

「ママがいなくなってきたきびしい？ママがいなくなってきた泣いたの？いっぱい聞かれたけど、あたし、知ってるの。ママは事故じゃないこと知ってるの。お巡りさんはお薬を飲みすぎて死んじゃったって言ってたけど、あたまで血が出るって言ってたわ。息が詰まって死んじゃったのよ、ママは。首はきれいだったから、首を絞められたんじゃないって言うの。うそばかり。だからうそつく人はきらいなの。だってパパだもの」

「パパってあのログハウスにいた人っすか」

「×のパパは、ママを殺すまでのパパなの。ログハウスに閉じ込めてある人はパパだけどパパじゃないわ。だってパパじゃないんだもの。うそばかりつくの。変なことばかり言うの。だからきらい。死んじゃった人は棺に入れられるんだっていったのに、ママはずっとここにいるんだもの。だあれもお墓に入れてくれないの。かわいそう」

×はログハウスを見つめて、あつかんべーしたあと、オレたちの方×
×は話してくれた。パパは「わたし」って言うのに、ママを死なせたパパは「おれ」っていつてたこと。「くそっつたれ」「きをつける」「しぬげやろう」「まぬけ」「ぼりこう」「またころしにくるぞ」って乱暴な言葉ばかりを×に投げつけてきたこと。

×がきれいにしてあげたけど、ママを死なせたパパは、草や紫色の葉×
×をママの上にはらまいて笑いながら、ママの鼻にハサミでひっかけ傷をつけたこと。ママの唇が紫色で、指でなぞりながら面白かったって笑ったこと。

おまえは汚れているから、ごみクズだといわれたこと。ママを死なせたパパのことを誰かに話したら、ベルトでひっぱたくといわれながら、殴られたこと。

おれまがつて、折れているハサミは女性の足元から見つかった。×
×のいうところから切り傷がでてきて、オレとジョルノは×にかける言×
×の葉がみつからなかった。×の×の×の×の×の間は何があつたのかはし

らねーけどよ、×はちつちやいくせに賢すぎる。×

子供が見るもんじゃねえのに、それを止めてくれる人がいなかったってことは。もう嫌な予感しかしなかった。ぎりど手の平に力が入る。女性は皮膚が裂けるくらいちつちやな傷がたくさんあって、どんな扱いをされたか嫌でも分かる。

ずっとひとりぼっちで、誰も聞いてくれない話を来てくれる相手がいてくれてよっぽど嬉しいらしい。×はしゃべりまくっていた。×

「あたし、みたのよ。パパがママにお薬を無理やりのませてたの。それでね、あたしものまされたの。くらくらしちゃって気を失っちゃった。気が付いたらね、ママはずっとこうなってるの。パパは真っ赤になって死んじやった。あたしのおうち、たくさんの人がいたのに、みんな死んじやった。パパからへんなお兄ちゃんが出てきたの。それでママの傷の中に入ってきたのよ。ママがお耳が痛くなっちゃやうよ。うな大声で、暴れてたの。おかげでこんなにならなかつた。それからママは目が覚めないの。あたしの中にも入ってきたのよ。とっても痛かった。痛い痛いって泣いたのにやめてくれなかったのよ。ひどいでしょう?」

× そうですな、とジョルノはいう。よくがんばりましたね、と笑うと、×はえへへ、えらいでしょー、泣かないの、女の子だからってママに×いわれるもの、と胸を張る。きつとパパがスタンド使いに体に乗っ取られた状態でスタンドを使ったことで、×のパパは一時的にスタンド使いになつたんだらう。×

× そんなもつて、×はパパの影響でスタンドを使えるようになったまつたというわけだ。アンジェロとジョルノの義理のトーちゃんの話聞く限り、スタンド使いつていうのは周りにいる人もスタンド使いになるらしいからな。×

× 死にかけた×がスタンド使いになるのはありえることだ。オレもスタンドが使えるようになったのは、死にかけた時だからな。えらいつすねと褒めてやると、うふふと×は笑う。×

「ねえねえ、ジオルノ、仗助お兄ちゃん。どうしても死んでくれないの？死んでくれたら、ずーっといっしょにいられるのに」

むう、とほほを膨らませて拗ねている××に、オレとジオルノは首を振った。×

「さすがにまだ死にたくないっすよ、わりいな、××。××。せめてじじいになるまで待つてくれよ」×

「僕もまだ死ぬ予定はないんです、残念だけど」

ジオルノは静かに笑った。

「Kもちょっと待つてもらえませんか？僕たち、まだ彼に用事があるんですよ。それが終わったら、Kと相談してください」

「つまんなあーい、ジャック、つまないわ。あたし、ここからでられないのにい。このガーデンの入り口近くからうごけないのに。どうして意地悪するの?」

「幽霊がいる所にランダムでジャンプするスタンドを扱えるようになってからまた来てください、××」

「むー、ジャックの意地悪。あたしもガーデンがどこに行っちゃうのか分かんないの、知ってるのにそんなこというのね?」

「ええ、だからまた逢えたら遊びましょう。かくれんぼでも、鬼ごっこでも、いくらでも遊んであげるさ」×

「ちよつと待つてくれよ、ジオルノ。×のスタンド暴走してんじやねえか、どうして助けてやらねえんだよ」×

「君だつて分かつてるんじやあないですか？仗助」

「そりや、そうだけだよ。でも×はオレの袖を掴んだんだぜ？信じられねえよ」×

「スタンドからの感覚は僕たちにも伝わるんですよ、仗助。×が掴んだのは君の学ランの袖じゃあない。その部分に位置する君のスタン

ドの腕なんですよ。スタンドの暴走を何とかするなら、本体である×
を気絶させるなり、制御する手伝いなりできますけど、本体が死んで×
るとなるとどうしようもないじゃあないですか。×の努力しか道は×
無いですよ」

そんなにいうなら、××を撫でてあげたらどうですか？なんて鬼畜な
煽りをしやがるジョルノ×に、くすくす××は笑っている。オレがのぼし
た手は、××の頭をすりぬけた。××

サウンドガーデン

本体：7歳の金髪少女

破壊力：E

スピード：A

射程範囲：B

持続力：A

精密動作：E

成長性：E

西洋庭園の空間型スタンド。彼女の父親がアンジェロのアクア・
ネックレスの効果で操られ、一時的にスタンド使いになったことで、
血の発露により死後スタンド使いになる。支配下に置かれた父親は
突然発狂し、洋館の人々を惨殺し、一家心中を図った事件として大騒
ぎになるのも時間の問題。スタンドは自立型の空間スタンドとして、
幽霊の彼女を現世に縛り付けている。孤独が嫌いで友達を求める彼
女の心に反映してか、ずっと一緒にいてくれる幽霊がいる所にアトラ
ンダムで出現する。ここから出るには、彼女とかくれんぼをして見つ
けてあげることが条件となる。

第4話

彼の遺体を発見した僕は、白骨化している全ての部位を懇切丁寧に
かき集めて、季節外れのホタルを生み落した。すっかり暗くなった公
園に舞い上がるホタルだけを捕まえて、元の姿に戻してやると、つか
の間の幻影は消え去って、真つ黒な暗闇だけが広がっている。

ぼろぼろに崩れ落ちそうな骨をハンカチでくるんで、ポケットに仕
舞い込んだ。どんだけ準備万端なんだよと僕が手渡した手袋とビニ
ル袋を返してきた仗助に、警察に引き渡すんだから僕らの痕跡が残つ
ちやダメじゃあないですかと苦笑いする。

モグラに変えた遺体を思い思いのところに潜らせて元に戻したあ
と、仗助のスタンドで土の状態を掘り起こす前に戻してもらった。わ
ざとらしく風化した土から遺体の一部が隆起するように、歪な土盛り
ができている。

Kは待ちわびている×のところにいくために、ペこりとお辞儀をし
て姿を消した。成仏するかどうかは彼次第、僕たちが口出しすること
じゃない。

さあ、これからどうしよう？仗助と顔を見合わせた僕は、はあ、と
大きいため息をついた。今頃必死で探しているであろう警察官に連
絡を入れるため、バス停にむかって歩き出した僕たち。パトカーに
乗って探し回っていた保護者に連行されたのは言うまでもない。

交番に連れていかれた僕たちは、東方巡査も加わって奥の部屋で
こっぴどく叱られた。拘束時間は3時間くらい。かつ井は出なかつ
た。自腹だなんて知らなかった。気づけば真夜中になっていた。パ
トカーで送り迎えをもらった僕たちの証言によって、5年間誰に
も見つけてもらえなかったKの遺体は無事に発見されたと知ったの
は、翌日の朝刊とニュース番組から。

世間はもちろん警察も報道機関も大騒ぎになっている。もちろん
東方巡査と保護者の彼は召集にかけられて不在だ。今のうちにアン
ジェロの行方を捜すために、調査に出掛けようと約束していたのだ

が、さすがに昨日の今日で監視の目がゆるくなるわけもない。

そのうち卒業式の時期に入ってしまった。中学生と高校生だと生活サイクルが微妙に異なってしまう。春休みは大人たちの監視の目を掻い潜ることができない。結局僕は具体的な行動に移せないまま、ぶどうヶ丘学園中等部の2年生として、学園生活を迎えることになってしまった。

一人で勝手に調査を始めようとするたびに、仗助から一人で行動するなど再三ブレーキをかけられたせいでもある。保護者にチクリの電話を入れるのは止めてもらいたい。若干後悔もにじむ中、大人たちの監視の目もゆるくなってきて、時期を窺っていた僕のところへ電話がかかってきたのは、ある日の夕方のことである。

ホント、マジでわるい！と申し訳なさそうに言ってきた仗助は、ずいぶんと沈んでいる。

「ガツコから帰るときによお、空条承太郎っつー人がさ、オレのこと訪ねてきたんだよ。お袋が恋した爺さんの話はしたことあんだろ？その、つまり、あれだ、オレの父さん？話には聞いてただけどよ、その人はあれだ、アメリカに奥さんと子供がいたわけだ。その人の親戚で、オレの甥にあたる人がさ、遺産相続がどーたらって話でうちに今度くるから都合付けてくれっていうんだよ。やべーよ、やべえだろ、どうしろってんだ。今でもおふくろはジョースターさんのことが好きで泣いてんによお、そんな話できるわけねえじゃねえか」

「……………ずいぶんと突然の訪問なんですな」

「なんかよお、79歳になっから遺産の配分のために調査をしてたら、オレたちのことがジョースターさんにばれちゃったらしいんだ。お袋はジョースターさんにも内緒で、真剣に恋した人の子供が欲しいからって、オレのこと生んだって聞いている。オレも納得してるつもりなんだぜ？でもよお、大騒ぎになってるらしいんだ」

「なるほど、それでですか」

「わしは生涯妻しか愛さないって聖人みたいなことってたらしい。

でも、61歳の時に21だったお袋との間に出来たのがオレだろ？面と向かって言われるとやっぱきついもんがあるぜ、ほんとに」

「……仗助、残念ですけど慰めてほしいなら他の人に当たってくれませんか。僕は話を聞くことしかできないし、気の利いた言葉を掛けられる性分でもないことは、君がよく知ってるはずだ。なんだって僕に電話をかけてきたんです？」

「おめーなあ。まあジョルノが正直どうでもいいって思ってるのは知ってるぜ。そっちの方が返って楽なんだよ。それはともかくだ、ちよつと面倒なことになっちまったんだ。さすがにおめーの確認も取らないで、べらべらしゃべる訳にはいかねーしと思ってるな」

スタンドという非日常が自分だけじゃなくなった瞬間から、怒涛のように起こる突拍子もない修羅場の数々に、すっかり頭がパンク寸前だと仗助は根を上げている。どうやらいろんな出来事を一度整理して、落ち着きを取り戻すためのはけ口になって欲しいようだ。

拒否権はないとばかりに、仗助は思いつく限りの言葉を並べ立てて、どんだん話を進めてしまう。僕は黙って聞き役に徹するしかなくなってしまう。そして、話が進むにつれて、僕はあまりのややこしさに沈黙することになる。

まず、空条承太郎という人は、仗助の父親であるジョセフ・ジョースターの一人娘である空条ホリイを母に持つ、いわゆる孫にあたる男性である。空条ホリイ、彼女が仗助の異母姉になるわけだ。彼は×大学院に籍を置く28歳（1年留年しているのだろうか）の海洋冒険家志望の男性であり、仗助の一回り年上の甥という奇妙な関係の代理人らしい。

問題は彼もジョセフという人もスタンド使いであるということだ。リーゼントをけなされてマジ切れした仗助がいうには、人型のパワータイプで、近距離型のスタンド使い。尋常じゃないスピードとパワーをもち、精密動作もできる規格外なやべー、グレートなスタンド使い。なにか能力をもっているけど、それを判断できるほど手の内を見せ

るまで追い詰めることは叶わなかったらしい。

ビックリするほど仗助のことを詳細に調査されてからの接触だったようで、仗助が4歳の時に50日間の原因不明の発熱をしたあと、スタンド使いになったことまで把握していた。でも、念写された写真にはアンジエロがうつった。

彼がこの町に訪れたのは、アンジエロの調査をするつもりらしい。宿泊先の高級ホテルの連絡先を控えている仗助はやっちまったとため息をついた。

結論から言うと仗助は、何か知っているのではないかと勘付かれてしまったらしい。同行していた広瀬康一という同級生の反応と仗助の反応は、びっくりするほど違っていった。まず、アンジエロに反応した。

つぎに、スタンドという言葉に反応しなかった。そして、スタンド同士の対決を経験していたから、慣れていった。学んでいた。だから考えられるし、対処もできるし、油断していた彼が本気になりかけるほど真っ先に狙いにいった。間違いなく、彼の予想を超える実力を仗助は持っていた。

違和感を覚えるのも無理はない。無言の圧力に抵抗するのは骨が折れたと仗助はぼやいている。ご愁傷様です、と同情した僕に、誰のせいだと思っただよーという声はなぜか笑っている。思い出し笑いする仗助に僕は眉を寄せた。

「アンジエロの写真におめーがダブってんだよ、二度見すんだろ、普通よお」

「心霊写真みたいなものですか」

「ちげーねーな、ぶどうヶ丘学園の高等部にアンジエロとスタンドがうつってた。その上におっかぶさるみたいにしてよ、おめーの金髪とくるくるしてる巻き毛が重なってんだよ。それに、その外人のパーツが上から塗り潰されたみてーになってるんだ。あの人はアンジエロ

は金髪じゃないし、巻き毛でもないはずなんだがって、すっげー真面目に悩んでるんだ。心当たりはないかって聞かれたけどよ、言えるかよ、いえねーだろ？吹き出さなかったオレは褒められてもいいと思うんだよ。なんだってオレを念写したのにアンジエロとおめーがうつるんだ」

げらげら受話器の向こうの仗助は笑っている。ジョセフという人は、社王町にいるスタンド使いは仗助だけだと算段付けて念写したはずだ。さすがにもっとたくさんのスタンド使いがいるとは思わないに違いない。

どうして仗助じゃなくて僕とアンジエロが優先されたのかは不明だが、アンジエロと因縁があるのが僕だから一緒に念写されたんだろう。アンジエロが仗助より強いスタンドをもっているからなのかはわからない。ジョセフという人がどういう能力で念写ができるのか僕は知らないからだ。

アンジエロの凶悪な殺人鬼の面構えと凶悪なスタンドがうつる心靈写真に、僕の後天的な遺伝である外人のパーツが合成された写真はさぞ不思議なものになっただろう。タチの悪い合成写真になったに違いない。

仗助曰く実物よりかなり美化されたアンジエロ。残念ながらその写真は空条承太郎、その人が持っているので僕は見る事がかなわなのが残念だ。

「そんでよお、へんなこと聞かれたんだ」

「へんなこと、ですか」

「兄弟はいねえかって聞かれたよ」

「兄弟？仗助は一人っ子ですよ？シングルマザーでしょう？」

「あつたりまえだろ、お袋が生涯愛した男はジョセフ・ジョースターさんだけだったの。でもよお、あの人がいにはいるかもしれねえっていうんだぜ、オレの兄弟が」

「……兄弟ってまさか、ジョセフ・ジョースターさんの子供って意味で

の兄弟ですか？まさか社王町にいるっていうんですか？仗助以外に？」

「本人はちげーって否定してるらしいんだけどよお、ボケが始まっ
てっから、信用できねえらしいぜ。なんで社王町にいることまで分か
るのか、教えてはくれなかつたけどよ」

「そうですか、と相槌をうった僕は、ちよつと気になったことがある
ので話を戻すことにした。」

「仗助がスタンドを使えるようになったのは、4歳の時なんですか？」
「あー、そうだけ？1987年の冬のときだったかな、すっげえ雪が
降ったことがある？その時に、原因不明の発熱で50日間ほど生
死を彷徨ったことがあるんだよ。ずっと入院してたんだけどな、その
後に気付いたんだ。スタンドが使えるってな。っつーかよ、いきなり
どうした？」

「奇遇ですね、仗助。僕もそうですよ」

「はあ？なにがだよ」

「1987年の11月下旬からから2月上旬にかけての50日間、僕
は原因不明の発熱で死にかけてたことがあるんです。スタンドらしき
ものが見えたのは11月くらいですけど、実際に使えるようになった
のはその後ですね」

「まじかよ、お前もか」

「ええ、そうです。凄い偶然ですね」

「……なんかこえーな」

「奇遇ですね、僕もです」

「まさかとは思うけど、お前の実の父親の名前はジョセフ・ジョース
ターとか言わないよな？」

「違います。ジョセフって人はイギリス系アメリカ人なんでしょう？
僕の父親はイギリス人だし、僕が4歳になる前に死んだんだ。僕は一
度も会ったことはないけど、母がいった名前はもちろん、姓だって
全然違う。馬鹿なこと言わないでください」

無神経な発言を詫びる言葉が聞こえてきて、僕はためいきをつい
た。不毛な言い合いは止めた方がいい。僕は露骨な方向転換を提案

した。仗助もおうと笑った。

「つまり、空条承太郎って人に、僕のことを話していいか聞きたくて電話してきたってことですね？」

「味方になってくれるなら心強いと思うんだよ」

「実際に会ってみないとわからないですね。きみの話は主観が入り過ぎていてから、どうともいえないです」

「だろうと思っただぜ。ホテルの連絡先は聞いているからさ、明日の夕方でも訪ねてみねえか？ 丁度明日は爺ちゃんがいないんだよ。アンジェロの行方を調べるついでに、ホテルに行ってみようぜ」

「分かりました。明日の放課後ですね。それじゃあまた」
「おう」

受話器をおいた僕は、思案を巡らせた。アメリカは訴訟大国だ。弁護士の多さは日本の比較にならないほど多く、副業を兼ねないと稼げないほど一般化している国でもある。遺産相続の話となれば、間違いなく弁護士案件なのが普通だろう。

日本人じゃあるまいし、弁護士も立てないで身内で済ませようとしている思考がよくわからない。ジョースターって人たちは、隠し子が日本人だから日本人らしいやり方で話を付けようとしているんだろうか。

それとも、一人娘のホリイって人が日本人の父親と結婚したから、日本びいきなんだろうか。普通に考えて仗助の用事は二の次で、本件はアンジェロの方なんだろう。食いつき方が全然違ったようだから。保護者の書斎に置いてあるパソコンに向かいながら考えてみるけどさっぱりだ。

とりあえず、空条承太郎って人は大学院生なのに、行方も分からないうんジェロを捜すために高級ホテルに長期宿泊ができるお金持ちの人間だったことくらいしかわからない。空条、空条、どっかで訊いたことがある名前だった。パソコンを起動させて、ネットにつないだ僕は空条と打ち込んでみた。

ただいま、と玄関で声が聞こえる。お帰りなさい、と返事だけした

僕は、エンターキーをうちつける。足跡が近付いてくる。ずらずらと空条という言葉がヒットした。

「パソコンしてるなんてめずらしいな、学校の宿題かい？」

「仗助から電話があつたんですよ。明日、杜王ランドホテルで父親の代理人と会うんだっていつてました。東方巡査たちには内緒にしてくれって言われたので、秘密にしてくださいね。途中まで送ってあげようかと思うんですけど、いいですか？」

「そうか、仗助君が……。まだ15歳だもんな、父親とは会いたいもんか。わかった、明日は仗助君に付き合つてあげるんだね。時々は連絡を入れるようにするんだよ」

「わかりました」

「杜王ランドホテルの地図でもみてるのかい？」

「いえ、空条承太郎って人が代理人らしいんですけど、空条って珍しい名字でしょう？どこかで聞いたことがあるんですけど、思い出せなくて」

「空条承太郎？本当にそう言ったのか？」

「え？ええ、仗助がいつてました。仗助の父親のお孫さんだそうです。28歳で海洋冒険家だそうですけど、もしかして知りあいの方ですか？」

いや、知らないよ、と彼は首を振る。

「でも、28歳で空条ならたぶんジョウサダのお子さんだろうな」

「ジョウサダ？」

「空条貞夫、愛称はジョウサダ、私くらいの年代なら確実に知ってるジャズ・ミュージシャンの一人さ。1970年代後半にジョウサダブームを巻き起こして、日本で初めてジャズを一躍有名にした第一人者でもある。アルトサクスの名手だよ。アメリカの不動産王の一人娘と結婚したってニュースが流れた時には、大騒ぎになったもんだ。あのころはマスコミもいい加減なものだったからね、三流記事ではお子さんの名前も出てたと思うよ。東京の高校で結構やんちゃをしていたらしいから、そのたびに記事に書かれてたみたいだ。どこま

で本当だかは分からないけどね」

「へえ、そうなんですか」

「きつと初流乃君が見た覚えがあるのは、私の机に山積みにしてるからだろうね。ジェフ・ベックを引つ張り出す時にでも見えたんだろう。たまにはジャズもいいもんだ。CMでよく使われてるからね、気が向いたら聞いてみるといい」

「ありがとうございます」

「しかし、そうか、ジョウサダの息子さんも28なのか。わたしも年だな」

未だに僕はこの人の実年齢を知らない。

片桐安十郎は悪運の強い男だった。まず、刑務所に侵入した学生服の男が凶悪な囚人に向けて片っ端から打ち込んだ聖なる矢によってスタンドを発現した。翌日、収監されている囚人の大量自殺が見つかって、大騒ぎになったことで、スタンドに目覚めなかったものたちは死んだことを知った。

つぎに、それが死刑執行の半月前だったことで、アクア・ネットワークの特性を完全に把握して、絞首刑から逃れることができた。そして、スタンド使いが社王町にいることを予め、イタリア人の囚人仲間からしることができた。食欲や睡眠欲、性欲と同じように、犯罪を行なうことはこの男にとって生きていくうえで、絶対に止めることができないライフワークである。

恐ろしい程の知能指数を誇るこの男に発現したスタンドは、この男の精神由来のものであり、初めは戸惑いこそしたものの馴染むのは当たり前だった。趣味である犯罪を妨害しうる存在がいることを予め知らされていたこの男が、その状況を打破するために講じたのはとて

も効率的なものだった。

それは、アクア・ネックスによって駒にした人間に、犯罪を代行してもらったことである。

片桐の潜伏先は、去年の集中豪雨に伴う堤防決壊によって壊滅的な被害を受けた湿地帯そばにある工業地帯、浸水被害を受けて移転を余儀なくされた倉庫群のひとつ。入札条件が難航し、買い取り先がなかなか決まらない無人の倉庫は、ホームレスのたまりばである。

わけありの人間たちが段ボールの家で暮らしているので、片桐がひとり紛れ込んだところで案外ばれないものなのだ。片桐は休日になるとゴミを集めるふりをして、川沿いを歩いた。今の時期になると魚釣りが解禁され、休日になると川釣りにやって来る人が川沿いに竿をつるしている。

アクア・ネックスを川に潜ませて、カモになりそうな出で立ちの男を見つけたら、標的にするのだ。操り人形になった釣り客は、まず財布に入っているカードを使って、銀行から小分けに金を引き落とし、鞆に現金を詰めて駅のロッカーに放り込んだ。

そして、鍵をわざとらしく置き去りにして去っていく。こうして片桐は活動資金を溜めこんだ。操り人形は片桐が飽きるまで遊び倒される。自分の欲求ばかり優先して犯行に及ぶと、イタリア人の囚人仲間のようにそれきりになってしまう。

次がいつになるかわからない。それなら、その人間になり切ったまままで家族や会社に近付けば標的は増える一方だ。

片桐安十郎という男はゲテモノ食いの男だった。腹がふくれればそれでいいのだ。犯罪の種類は問わないし、犠牲者になる人間が大人だろうが子供だろうが老人だろうが、男だろうが女だろうがえり好みがない。だからなおさらたちが悪いといえた。

アクア・ネックスは操り人形の中で暴れるだけでいい。だからその凶悪性は増すばかりだった。リスクがゼロだ。犯罪を立証する手段はない。どう転んでも片桐の満足いく結末しか用意されていない

現実がここにある。

ある者は執事や家政婦、家族を巻き込んだ無理心中をやらかして死に、ある者は銀行強盗で立てこもり事件を起こし、射殺されて死んだ。釣りから帰ってきた途端に豹変した操り人形に動揺する人間を観察して、その行動によって犯罪の手法を変えるのはなかなか楽しいものである。

身の毛もよだつような犯罪をしでかしたり、万引きのような小さな犯罪を繰り返して捕まった途端に意識を操り人形に戻したりした。アクア・ネックレスに意識を乗っ取られている操り人形は、釣りに行った時から記憶が飛んでおり、仕出かした犯罪について何も覚えていない。

現行犯逮捕で冤罪の余地はないにもかかわらず、人が変わったようにオレはやっていないと叫ぶのはなかなか滑稽だった。普通の人間は万引きすらしたことがない真つ当な人生を歩んでいるため、確実に初犯であり、動機なんてものはいくら検証しても出てこない。

心身虚弱を理由にしないと説明がつかないこともある。警察は困惑しきりだろう。いくら聞き込み調査をしても計画的犯行であり、手口が巧妙で余罪も視野に捜査しないといけない事案なのに、容疑者はあまりにも善人なのだ。

精神的な病の兆候もないし、薬に手を出したこともない。そんな容疑者が行った凶行は何十件にも及ぶ。不起訴になったのはどれくらいなのか、皆目見当がつかなかった。

ゴミ箱に捨ててあった地方新聞には、高級住宅街の一角で外国人一家が無理心中をしたことがようやく明るみに出ている。絵にかいたような上流階級のエリート一家であり、宗教上の理由から自殺は許されていないはずなのに、どうして、と嘆く教会の神父の話がのっている。

順風満帆で絵にかいたような幸せ一家の無理心中は、ありもしない想像を掻き立てるらしく、噂話を近隣住民は口に行っている。借金が

あつたとか、新興宗教に嵌っていたとか、ヒステリーだったとか、あまりにも不謹慎な話題にほとんどが匿名だが、その一家へのうらやましいと感じていた感情が下地にあることがうかがえる。

片桐は思わずあくどい笑みを浮かべた。すぐ下には黄色いテープが張り巡らされた××公園の山中と青いビニルシートで覆われた中に、捜査員が入っていく写真が大きく掲載されている。発見された白骨化した遺体が5年前の殺人事件の被害者のものであると断定されたニュースもまた、大々的に報じられている。

片桐は笑いが止まらなかった。どちらも片桐が行ったことなのに、誰もそのことに気付いていないのだ。自己顕示欲が満載なこの男は、もうそろそろ新しい遊び道具が欲しくなってきたところだった。新聞をホームレス仲間の薄汚いおっさんに渡した片桐は出掛けることにする。

いつもきれいな新入りに、ホームレスたちはあくどい商売に手を出してどこにも行く場所がない成金の男だと信じ込んでいる。あんちゃんも悪い男だねえ、と笑うホームレスは、おこぼれにあずかろうとタダで利用できる生活拠点をいろいろと教えてくれるのだ。

ガソリンスタンドにある長距離ドライバーのために用意されているコインロッカーやシャワールームは、会社ロゴ入りの作業服を着ていれば案外ばれない。犯罪がらみと知りながら買い取ってくれる中古屋は、横流しされた衣服の入手場所である。

海外に拠点を持つ外国人のグループホームは、日本では手に入らない物品の入手先である。数えきれないものが片桐の脱獄生活を支えている。片桐は日課である朝の散歩に出かけた。

目の前に立っている間抜け面をした男は、半開きに口を開けている。舌の上に乗っているアクア・ネックレスが男の体内に消えた。さきほどまで穏やかな笑みを浮かべていた表情は一転して、憑依した片桐にしか出せない凶悪な犯罪者の笑みを濃くする。

抜きとった財布から入手した情報によれば、個人タクシーの運転手

のようだ。名刺は繁華街のスナック客や女性ばかり、どうやら金持ちの道楽あたりを周回するタクシーをやっているようだ。スタンドから見える視界は良好、片桐は間抜け面を送り出した。

トイレから帰って来るなり、突然帰り支度を始めた操り人形に、釣り客はもう帰るのかい？と不思議そうに眺める。スナックの姉ちゃんから 遠方送迎が依頼されたとにやつけば、そりやよかつたじやないか、と肩を叩かれた。いつてらっしやい、と気前よく送り出す男はきつと元同僚なのだろう。

タクシーの運転手は独立するには、10年間の勤務歴と独立前には3年間の無事故無違反という厳しい条件があるのだ。職場を転々としてきた経験のある片桐には大した事のない情報である。完全犯罪を達成するにはそれなりに回る頭と記憶力がなければならぬのだ。操り人形はタクシーの中でスーツに着替える。衣装を整える。そして出発した。

停留所でタクシーを捕まえるふりをして、素知らぬ顔で乗り込んだ片桐は、いつも持ち歩いてるカバンから地図を広げた。この先の目的地を品定めする。どちらまで？とアクア・ネックレスが笑う。片桐は安全地帯から駒を使って趣味をたしなむために、拠点とするビルを捜した。

社王町は12歳まで育った故郷である。半年間潜伏したことで地の利はある。地形を使って罫にはめる、かつて得意とした犯罪方法を最大限に生かしながら、観察できる場所を捜した。狡賢い眼差しが前を向く。× ホテルに行けと片桐は命じた。タクシーは回送だ。

× ホテルに到着した。タクシーから降りた片桐は、駒に先導させて支払いをさせる。売店で花粉症の薬を売っているかと尋ねれば、マスクと透明なゴーグルをしていても受付嬢は同情めいた視線と一緒に首を振るだけで不審には思わない。

死刑囚の名前と顔は知っていても、声まで知っている人間はいないのだ。名簿には駒の名前と住所を記入させる。受付嬢がカギを差し

出し、それを何食わぬ顔で受け取った駒は、荷物を抱えてエレベーターに乗り込んだ。片桐もそれに続く。

誰もすれ違わないまま部屋に入った。出て行くアクア・ネットワークス。片桐は部屋に鍵をかけて、窓を開けた。下には交通量の多い道路と行きかう人々が見える。鞆から望遠鏡をとりだし、覗き込んだ片桐は時計を見た。

スタンドの視界をたよりに、計画していたところにタクシーをおいて、バッグ片手に操り人形は目的地に入っていく。

サンマートの看板が笑っている。

自動ドアがあく。いらつしやいませ、とアルバイトとパートの店員が愛想笑いを浮かべて頭を下げた。立ち読みする学生、買い食いにやって来たOL、カードをサーチしている小学生、トイレに並ぶ中年のサラリーマン。思ったよりも人が多い。

いくら警備がザルで強盗には金を渡せとマニュアルで教えられるほどのずさんさとはいえ、白昼堂々するには分が悪い。今回は下見に來ただけだ。コンビ二強盗は真夜中と相場が決まっている。陳列している女性店員がすいませんと山積みの商品を避ける。

操り人形はトイレにはいるふりをして中年の後ろに並んだ。スタンド越しに商品棚を見回す。監視カメラの位置を確認する。素知らぬ顔で店内のBGMを聞いている操り人形。來店を知らせる放送がなった。どうやら学生のような。

最近の学ランは片桐がガキだったころに比べてデザインがかっこいいのはきつと気のせいではないだろう。校章からしてぶどうヶ丘学園、つまり私立の中高一貫学校だ。制服のデザインも洗練されている。け、と舌打ちしながら操り人形は一向に動かないトイレの列に苛立った。

リーゼントの男はずいぶん身長が高いので、こっちからでも確認できるくらいたっぱがある。もう一人はパツキンだ。中学生の癖に染めてやがる。やっぱ不良か、相変わらずぶどうヶ丘学園は荒れてや

がると片桐は思った。

「モズねえ、どんな鳥なんだあ？」

「20センチくらいですね。僕が扱えるギリギリの大きさなんだ。全体的に淡い茶色をしていて、尾っぽと翼が黒がかった。広瀬川にいますよ」

「なんだってそんな微妙なやつにしたんだよ。どうせならもつとキレーな鳥でもいいじゃあねえか。鳥なんて全然わかんねえけどよ」

「いつだったか、高い所から僕のカエルに襲い掛かって、あつという間に木の上に持つていったことがあるんです。あわてて追いかけて行ったら、捕まえたカエルが木の枝に突き刺さって、モズも木の枝の間に挟まって死んでるじゃあないですか。モズのはやにえつていうんですけど、そいつのおかげで僕は知ったわけですよ。さすがに自分じゃ試せないので実験には苦労しました」

「へえ、そうなのか」

「知るまでが大変ですよ、こういうのって」

「だよなあ。一度やって上手く行かないと、変な形になるだろ、オレの場合。直そうとしてもう一度やったらもつと変な形になったんだよ。いらつとして何度もやってるうちに地面と同化しちまったことがあるぜ。どうもムラがあんだよなあ、オレの場合」

金髪はジョースケらしいですね、と声を上げて笑った。んだとこら、とジョースケと呼ばれたリーゼントが小突いた。ようやくトイレの列から親子連れが去っていく。すこしずれた片桐は、来訪のチャイムが鳴る自動ドアの開閉を見た。

どうやらぶどうヶ丘学園の女子生徒のようだ。そいつは、春のパン祭りをしている松島奈々子のポスターを横切り、ミッフィーのシールが貼つてある小さなドーナツが小分けに入ってる袋に手を伸ばした。不良たちを避ける足取りは迷っている。ちらちら視線が金髪の方に向かっているのが分かった。

金髪の方は身長が低いせいでこつからだどどんな奴なのかイマイ

子見えない。たむろしている不良学生たちは、一向に女子生徒の視線には気づかない。リーゼントなんてどう見ても不良だ。なにもてんだよ、とガン付けられるなら避けるのが普通だろう。

にも拘わらず、見るからに普通の学生である改造制服とは無縁の大人しそうな女子生徒は、会話のチャンスを伺っているようだ。青春しやがってこいつと片桐はイラついた。約束の時間まではまだ1時間もあるしなあ、時間つぶそうぜとリーゼントがぼやいた。

ちよつくらジャンプ立ち読みしてくるわ、と金髪に別れを告げる。金髪はサンマート印のデザートを何にするか延々悩み続けている。女子かてめえは。するとようやく女子生徒は金髪に声を掛けた。高等部の女子生徒が中等部の男子生徒に声を掛けている。

「あの、すみません、ちよつといいですか？」

「……ああ、邪魔でしたか、すみません」

不自然な沈黙のあと、金髪はデザートコーナーから横にどいたらしい。普通に考えて初対面の女子高生にこんな状況で声を掛けられたら、デザートコーナーを占拠している中学生は邪魔に違いない。ようやくトイレの列がずれた。一番隅の棚に金髪の三つ編みが揺れている。

女子生徒は不審がる金髪にいえ、違うんです、と首を振った。思った以上に声が出たのか女子生徒の声が響き渡った。はつとなった女子生徒は顔を赤らめて、すみません、と小さくなる。金髪はいぶかしげに眉を寄せた。女子生徒をいぶかしげに金髪は見下ろした。

「なんです？」

「……あたし、双葉千帆つていいいます。ぶどうヶ丘学園高等部の1年生」

「………で？」

「質問があるんですけど、1度会ったことありませんか？3年前の10月21日なんですけど」

金髪は考え込む素振りすら見せなかった。胡散臭そうに女子生徒を見つめている。その意味するところを悟った女子生徒は、だんだん自信がなくなってきたのか、意を決して発言したのに迷いが出始めた。とどめを刺すように金髪は静かに言った。

「残念ながら、僕はあるたを知らない。誰かと間違えてませんか？」
「そうですか、すみません」

女子生徒はためいきをついた。

「蓮見先輩って知りませんよね？蓮見琢馬」

「さつきからなんなんです、あんた。琢馬のことが知りたいなら、本人に聞けばいいだろ。僕は無駄なことは嫌いなんだ」

「え、でも、さつき知らないって」

「あんたのことは知りませんよ、初対面なんだから。でも琢馬は知ってるよ、仲間だからな。あんたが琢馬の何を知りたいのかは知らないけど、僕からいうことは何もない。本人に聞けばいいだろ。だいたい僕がイバラの館で琢馬と話してるの見てるんだ、知り合いだってことはあんたも知ってるはずだろ。なんだって僕に話しかけてきたんです？僕は便利屋じゃあない。あんたの恋煩いに付き合う暇はないだよ」

女子生徒はほのかに顔を赤らめると、気付いてたんですか、って消えてしまいそうな声でつぶやいた。耳まで真っ赤になった女子生徒に金髪はため息をついた。冷ややかに見つめる。女子生徒はいよいよいたたまれなくなったのか、うつむいてしまった。

どっちが年上だかわからない会話だ。そのうち金髪と女子生徒に気付いたのか、リーゼントがやってくる。にやにやしていることに気付いた女子生徒は、ごめんなさいさようならって去ってしまった。リーゼントは意味深に笑って金髪を小突いた。

「なんだよ、ジョルノ、おめーも隅に置けねえなあ」

「どう見たらそうなるんです、仗助。知り合いを紹介してくれって頼まれただけです。それどころじゃないので断りましたけど」

「なんだ、つまんねえ」

「なんでそんな楽しそうなんですか、あんた」

ジョルノ、だど？片桐は顔を上げた。今この金髪はジョルノつつつたか？片桐の脳裏に学ランの男がよぎる。これは予定を変更しないといけねえなと舌なめずりした。ようやくトイレの順番が回ってくる。気付けば下校時刻や帰宅時刻を微妙に過ぎた時間だからかかざいぶんとあたりは暗くなっている。

人もまばらになり始めた。シフトの時間なのか店員の数が減り、新しい店員がスタッフルームに入るのが見える。予定は変更だ。片桐は適当にトイレを済ませて一度外に出た。そしてアクア・ネックレスに操られた人形はタクシーに戻る。

鞆を持ち替えたタクシードライバーは足早に元来た道に戻り始めた。さつきまでいた店員はすべて出て行った。新しい店員が配置されている。いけ、と片桐はスタンドに命じた。望遠鏡を覗くのに夢中な片桐は、茶色い野鳥が電信柱ぐしにこちらの様子を窺っていることをしらない。

数分後、女性店員の悲鳴が響き渡ることになる。

第5話

来店を知らせる音楽が聞こえてきて、いらっしやいませ、と営業用の笑顔を入り口に向けた女性が、そのままの笑顔で凍りついた。みるみるうちに青ざめていく表情。はっとした表情で固まっている。

会計の列に並んでいた僕は、カウンターにいる数人のお客と一緒につられてそつちをみた。そこにいたのは、異様な格好をした男だった。黒のサフアリハット、顔が隠れるくらい大きなサングラス、無地のタオルを首に巻いている。

そして、社員証を外したから穴の開いたポケットをもつ黒いスーツ、黒の革靴、軍手、真つ黒なシオルダーバックを抱え、ウエストポーチまで付けている重装備で入ってきた。ずかずかところちに向かつてやってきた男は、竹刀や木刀をしまう剣道部の布袋にいた細長い袋を抱えている。

慣れた手つきでその布袋を取り払った瞬間、黒々とした猟銃が姿を現したのだった。きいやあああ！と絹が裂けるような悲鳴が響き渡ると同時に、男は咆哮した。

「うるせえぞ、女あ！動くな、動くんじゃあねえぞ！下手な真似しやがったら、脳天ハチの巣にしてやつからなあっ！」

ずがががが、と威嚇射撃で打ち込まれた弾丸がフローリングの床を悲惨な状態に変えた。すっかり縮こまってしまった女性は、カウンター越しに力が抜けてしまったのか、へなへなと座り込んで見えなくなってしまうた。

「てめえらもだ！さあ今すぐその場に伏せやがれ」

立ち読みをしていた仗助を含めたサラリーマン数人と、僕の前に並んでいた中年の作業員の男性数人、そのままフローリングに座らされた。つかつかつかとこつちに歩いてきた男は、持っているポーチを開

けて僕たちの前に差し出してきた。

「まずはてめえからだ。携帯、P H S、ポケベル、財布を中に入れて」
かちりと脳天に銃口を向けられたらどうしようもない。僕は学生鞆から財布を取り出して、そのまま男のポーチに放り込んだ。携帯は、とイラついたように催促されて、僕は持ってないですと首を振った。学生鞆の中を見せてやる。

筆記用具とファイルと教科書、ノート類しか入っていないのがわかる。後ろで手を組んでろ、といわれて、素直に応じた。ち、と舌打ちをした男は隣の作業員たちに視線を移した。

似たような過程を経て男は背を向けようとしたが、後ろから抑え込もうと視線だけたぎらせている作業員に気付いたのか。にいと笑った男は余計なこと考えんじゃあねえぞ、と銃口をつきつけた。本棚の方に男は消える。

はあ、と小さくため息をついた僕は、ミラーになっている奥の棚の天井付近を見つめた。数人の黒い影が固められているのがわかった。

カウンターの向こうから物音がする。幸い男は気付かない。隣にいる作業員がちよつと嬉しそうな顔をした。そつちに目を向けると、どうやら異常事態を商店街のある店外に知らせる真っ赤なランプを店員の女性が点滅させたらしい。

幸いまだ日が明るいおかげで、傾きつつある西日は夕焼け色に外を照らしていて、男が気付くには時間がかかりそうだ。できれば男が気付く前に誰か110番してくれればいいんだけど、さすがに110番して詳細を知らせると男が気付いて逆上する恐れがある。

ごくりとつばを飲み込んだ。電気がついていないのに誰もいないように見える店内に、ちらりとこちらを窺う人だかりができはじめ。点滅する音の無い赤ランプと異様な雰囲気のスーマートに、どうやら商店街の人たちも気付き始めたようで、見たことがある顔が様子を伺っているのが見えた。

何人が携帯電話やPHSで連絡しているのがわかる。これなら警察が来るのも時間の問題だろうか。僕たちは顔を見合わせてうなずいた。でも、こつこつこつと足早に男が帰ってくる足音がして、張りつめる緊張感に体を震わせた。

男は舌打ちをしただけで、動揺する気配がない。警察に包囲されるのも時間の問題だというのに、ずいぶんと冷静だ。なんだ、この異様な精神は。どういう思考回路をしてるんだ。コンビ二強盗だったら、さつさと金を請求して逃げればいいのに。

逃走経路を包囲されたらそれだけ難しくなるのに、男は平然とパートの女性にカウンターを開けさせて、女性の携帯と財布を回収した。わけがわからない。まるで警察が来るのを待っているかのように、男はすっかり重くなったポシェットをどさりと置いた。そして猟銃を女性に突き付けると、不気味な笑みを浮かべた。

「たしかこのサンマートは24時間営業が始まる前からやってたよなあ?」

「わ、わかりません、わたし、パートなので」

「うっせえぞ、ボゲエツ! わかんなくても、はいつってればいいんだよおー!」

「は、はいいつ」

「つつーことはだあ、あんだろ? あんだろ? がよお、さあ閉めるんだ。今すぐシャッターを閉めやがれ!」

「わ、わかりました!」

死にたくないと今にも泣きそうな顔をしている彼女は、どたばたとエプロンを翻してカウンターの奥に引つ込んでいく。うそだろお、と絶望するつぶやきが聞こえた。がががが、と重苦しい音が聞こえる。だんだん大きくなっていく黒山の人だかりの目の前で、灰色の壁が外と僕たちを隔てるためにじわじわと幕を下ろしていくのが見えた。

きつと災害時に店内を守るために設置されているそれは、コンビニの立てこもり犯が密室を作り上げるための手段として使われてしまったのだ。がしゃあん、という錠の落ちる音を聞いた。カウンターに背を向けて立った男は、僕たちから回収した財布をひとつひとつ確認しはじめた。

奇妙なことに、男は現金やクレジットカードに手を付けることはなく、学生証や社員証、保険証、名刺といったコンビニ強盗とは思えないものばかり集めて抜き取る。そして、価値のないものとばかりに一銭も手を付けないまま財布を足蹴にして踏みつけた。

これ見よがしに家族や大切な人間の写真を入れていた人間の目の前で、それをびりびりに破いてしまうような所業を見せて、人質になっっている僕たちの心をぼきぼきに折っていく。何が目的なんだと地を這うような作業員に、そういう顔を見るのがさいつこうなんだよお！と男はげらげら笑った。

「でもよお、気に食わねえぜえ！」

男が不機嫌になって僕を見下ろしてきた。影がおちる。あと5メートル。

「ディオ・ブランドーってのは、てめえの父親なんだろう？ガキの癖に写真をボロボロにしたところで、眉の一つも動かしやがらねえ！ガキならガキらしく、止めてくださいとでも泣き叫べばいいのによお！その石像みてえな顔が気に食わねえぜえ！」

男の足元には無残に散らばった、実の父親の写真だった物体が泥だらけになって散らばっている。何とか言ったらどうだ！と唾が飛んできて、僕は眉を寄せた。あと4メートル。

「うるさいな、あっち行けよ」

「おい、君！なに言ってるんだ、今すぐ謝れ！」

「んだとごらあっ！綺麗な顔をハチの巢にしてやろうかあ！」

銃口を僕の頬に向けてきた男は不細工な面を僕に近付けてくる。あと3メートル。表情一つ変えない僕に、ぶつつうんときたらしい男はずかずかかと近付いてくる。

絶対的な優位に立ったうえで、対象になる人間を精神的に散々いたぶってから、苦悶の表情を浮かべて悲鳴を上げるのを見るのが好きらしい。だからこの男にとって、今の僕の対応は一番むかつく態度だろう。

淡々と僕は男の足元を見つめていた。とうとう沸点の低い男の堪忍袋の緒がきれたらしい。まっすぐに僕の顔面目掛けて銃口を突き付けてきた男は、躊躇なく引き金を引いた。この瞬間を待っていたんだ。

僕は初めて表情を崩す。弧を描いてほほえんだ。スタンドを呼んだ僕は、黄金色の拳が自動式散弾銃を貫いたのを見た。

一瞬の出来事である。自動式散弾銃は引き金を引かれた状態で別の物体に変換されて、姿を変える。仗助に言わせればタチの悪いマジックを見せられたようなものだろう。さっきまで男の手に握られていた自動式散弾銃が質量保存の法則を無視してジャガイモに代わってしまったのである。

ごろごろと転がったそれ。僕はすばやくそれを拾い上げた。僕のスタンドは生命を生み出す能力がある。果物や野菜といった食用になる部分を単体で作り出すことはまだできないし、反射能力が問答無用で付随してしまう性質上代用品にすることはできない。

でも、間の抜けたマジックを披露するにはこれで十分だ。ジャガイモは単体で発芽するから作れる数少ない野菜の一つ。

「てんめえ、オレの猟銃になにしやがったああ！蔦を扱っただけじゃあねえのかよお、聞いてねえぜっ、くそがああ！」

「なんですって？今、なんて言いました？」

「蔦を生み出す能力じゃあねえのかよ、くそがつ！めんどくせえ、スタンド使いやがつて！気に入らねえええつ！」

武器を失ったことを好機と見て、飛びかかろうとしていた作業員たちを振り払いながら、男は発狂した。ショルダーバックから鈍色にきらめいたのはナイフだった。ぶんぶん振り回す男から距離を取るために後退した僕の頭は混乱していた。

どういうことだ。僕がスタンドを使えることをスタンド使いじゃないこの男がどうして知っている。しかも蔦を作り出すという能力の一端まで割れているなんておかしい。僕が人に対してスタンドを使ったのは数えるほどしかないのだ。

僕はこの男のことを知らない。それに蔦しか使わなかったのは、たった一人しかない。僕の養父しかいない。こいつ、まさか片桐安十郎なのか？半年の間に整形したのか？いや、でも、ここには偵察用に放ったモズは帰ってきていない。それに僕が感知できる生命反応はまだ遠くで健在だ。

片桐を追いかけていったモズはココではないどこかで片桐を見つけて寄生木で羽を休めている。方角的にもまだまだ遠いはず。つまりここにいる男は片桐の協力者に違いない。僕は大きなナイフをぶん回して近づけない人たちから距離を取る。

「ぎゃあああああー！」

女性の悲鳴が響き渡った。パートの女性を羽交い絞めにして男は首元にナイフを突きつけている。うごくなああ！と叫ぶ男にみんな一瞬動きが止まってしまった。僕はテントウムシのブローチに手をかけた。

しかし、それに目ざとく気付いた男が特にそのためえもだ！と叫んだ。女性にナイフが強く押し当てられ、つうう、と赤いものが首元を伝う。他の客にこれ以上男を逆上させないでくれと腕を掴まれてしまう。放してくれと囁いても懇願されて首を振られる。僕は舌打

ちした。ダメだ、完全に僕の能力の発動方法がばれている。

「動くな、動くんじゃあねえぞ、この女の首をかき切ってほしくなかったらなあ！」

じりじりと近寄ってきていた人間。気付けば男の周りには客が集結していた。ようやく大人しくなった僕に、ほっとしたのか堪えてくれよとサラリーマンが腕を放した。僕はジャガイモを握り締める。黄金色のスタンドが再びジャガイモを殴り付けようと振りかぶった。やめとけ、と声がする。スタンドでしかスタンドは触れられない。僕の右手をひねる感覚が襲った。僕は舌打ちした。ちよつと遅かったようだ。残念だ。ジト目で振り返ると、あつぶねえなあ、と冷や汗たらしてひきつっている仗助がいる。

ああよかった、間に合った、と仗助は胸を撫で下ろした。油断も隙もねえな、おめえは、と小突かれる。ジャガイモは自動式散弾銃が引き金を引かれた状態で変換されたものである。僕が能力を解除しながら投げつければ、指紋ひとつ残らない以上、きつとはたから見れば自殺だ。

実の父親の写真をごみクズにされたんだ、おめーの気持ちはわかる。わかるけどな、と仗助は落ち着けと囁いてくる。

「ありや、ヤバい目をしてるぜ。逆上したらぜってえやる目だ」

「気を付けてください、仗助。あの男はただものじゃあない」

「ああ、わかってるぜえ、グレートじゃあねえか。オレたちのスタンドが見えてねえくせに、スタンドのこと知ってやがる。でもなあ、限度つてもんがあるんだぜ。おめーがそのつもりならオレが止めてやるよ」

僕は観念してスタンドを引っ込めた。

「なあにさつきからこそこそ、ひそひそしゃべってんだよ、くそガキど

もがあつ！そののへんな頭してるガキいつ！そのの生意気なくそガキつれて、前に出てこいや！そんでもつてえ、お互いに耳を切り落とせ！そしたらこの女は解放してやるよお！」

「あ？」

仗助の堀の深い顔に影が落ちる。思わぬ返答に男はぎよつとして、なんだ、てめーはあ！と叫んだ。

「今てめえ、なんつった？」

仗助が進み出る。

「ちくしよおお！あつたまきたぜえ！今からこの女にナイフをぶち込むことに決めたぜえええ！死ねええええ！」

気付けば僕の手握られていたジャガイモがない。あ、ちよ、仗助！と僕が言うのは遅かった。

「あたまにきたのはオレの方だぜ、ドラァツ！」

仗助によって分投げられたジャガイモが男の顔にクリーンヒットする。男がふらついた隙について、女性はあわててみんなのところに飛び込んだ。スタンドの力によって元の自動式散弾銃に戻ったまま、宙を舞う。銃口は上を向いている。

ずががががが、と天井めがけて放たれた閃光。ぱりん、ぱりん、と電気が壊れ、ガラスが割れる音がした。サイレンの音がする。どうやら警報装置やスプリンクラーが発動したようだ。天井裏を走るスプリンクラーの配管が壊れて、一気に水があふれ出した。

火災と勘違いした店内に、一斉に水が散布される。みんなの悲鳴が響き渡った。いつもは手加減している仗助のスタンドは、マジ切れすると相手が死のうが関係ないとばかりに全力で猛威を振るうのだ。

普通に考えてぶん殴られた人間はまともでいられるわけがない。

もつとも回復するから、よほどのことがない限り死なないだろう。どっちが落ち着けだよ、と僕は小さくつぶやいた。

「うああああああっ！銃が、銃があつ、オレの手に生えてやがるううう！」

真つ暗闇の中で男の声が響き渡る。

「あ、あ、アーミーナイフが腹の中にあるうっ!?なんでだあーっ！」

「外科医に取り出してもらえよ、刑務所ん中だな」

さすがに体の中にナイフと自動散弾銃を植え付けられたのは気持ちが悪かったのか、男の嗚咽が聞こえた。べちゃりと何か吐き出される音がするが、真つ暗闇で何も見えない。悪魔の笑みを浮かべたスタンド使いは、多分僕の隣にいる。

ざあざあと土砂降りの雨のように降り注ぐスプリンクラーは、どうやら古いタイプのようです。すべての水が出るまで垂れ流しのようだ。ひたひたになり始めた学生靴がきしんで気持ち悪い。

「シャワー貸してもらえますかね」

「まずホテルにいけるかあ?このザマで。今は来てなくても、帰ったらぜってえ爺ちゃんたちにばれちまう。承太郎さんには悪いけど、迎えに来てもらうか?」

「まあ、片桐の手下がいるってわかっただけでも手土産になるんじゃないですか」

「そうだなあ、半年も捕まらねえってことは協力者がいるってことだ」

どうやら完全に戦意を喪失したらしい男は、大人たちに羽交い絞めにされた。女性が回収した携帯電話の灯をたよりに、手探りでカウンターの向こうにあるシャッターのスイッチを押してくれた。ゆっく

りと真つ暗な壁から光が差し込む。

ふあんふあんふあん、と真つ赤なライトがまぶしい。外はすっかり夜になっていた。どうやら警察のパトカーや救急車がたくさん商店街沿いに止まって、僕たちの安否を心配してくれていたようだ。これじゃあますますこつそり逃げることもできないだろう。

あーあ、と僕たちは肩をすくめた。いつのまにか踝まで水浸しになっている。きっと商品は全部破棄だ。すっかりびしょぬれになった前髪はせつかくセットした巻き毛がほどけている。乱暴に搔き上げた僕は、だらりと残念なことになっているリーゼントを見た。

ひつでえな、と仗助が笑う。お互い様でしょう、と僕は苦笑いした。振り返れば気絶してしまつたらしい男がだらりと体を投げ出している。おい、と呼びかけても返事がない。諦めた作業員が背負つて外に出た。さつき吐き出されたものはずいぶんと大きなものな気がしたのに、真つ赤なライトに照らされる店内にはなにもない。

吐いた音ではなかった。大きな塊、血反吐のような塊を吐き出す時に似た音がしたのに。きよろきよろとあたりを見渡す僕をよそ目に、仗助が駆けだした。あわてて僕も追う。仗助の足取りは、店内のスプリングラーの欠損を見上げていた。

「どうしたんです、仗助」

「やられた」

「え?」

「やられたぜ、ジョルノ。×が言つてた変なお兄ちゃんに逃げられた。承太郎さんの写真にあつた×アンジェロのスタンドだ、滴る水を伝つてあんなどころから逃げやがった。どうやら水と同化できるスタンドのようだけ」

「……だから僕たちの情報を集めていたつてわけですか」

「ああ、そういうことだ」

「どうします?」

「まじでどうするよ」

最悪だ。学校も住所もばれてしまった。片桐が襲い掛かってくるのは時間の問題だ。これからのことに頭をぐるぐる巡らせていると、ばしやばしやという音が聞こえてきて、僕たちは振り返った。警察の人たちだった。パトカーの中でタオルを借りて、事情聴取をされた僕たちは、詳しくは後日ということで1時間ほどで解放してもらえた。そして、30分後。

「約束の時間になっても姿を現さないと思ったら、こんなところで油を売っているとはな。テレビで見えて驚いたぜ。一体何があつたのか、聞かせてもらおうか、仗助」

僕たちの保護者の代理として現れた彼によって、僕たちは社王グランドホテルに向かうことになる。

東北の美術館ホテルと名高い社王グランドホテルは、欧州から収集された白色と金色を基調とした、美術品や調度品が落ち着きと気品に満ちた空間を演出している国際ホテルである。

よく言えばモーツァルトを建築したような空間。悪く言えばナチュラルメイクとは程遠い厚化粧で、装飾が無駄に施された空間。ホテルマンにお帰りなさいませと会釈された仗助は、間の抜けた返事をしたあと軽く会釈する。そして、とても居心地悪そうにきよろきよろとあたりを見渡して、カウンターで手続きをしに足早に向かう白学ラウンを慌てて追いかけた。

洗練された心地よい空間を演出しているのはわかる。でも、僕は違和感と不自然さしか感じない。仗助とは別の意味で落ち着かなかつた。施設で定期的に行われていた宗教的なイベントは、いつだって口

ココ建築の教会が舞台だったからなおさら。刷り込み的な感覚で宗教とロココ建築は複雑に絡み合っているんだろう。

天井にはまぶしい3重構造のシャンデリア、大理石の床を進むとガラス細工の台には白と黒の彫刻が並べられている。春の花がふんだんにあしらわれた高級なツボを抱く女神像を中心に、真っ白な社長椅子が半円に並べられている。

中央には昇りと下りのエスカレーターがあり、金色の手すりぐるりと取り囲んだ吹き抜けの二階が続いていた。そして、その真正面には金縁の世界地図に白い大陸が彫刻されていて、デジタル時計が現地の時間を表示しているフロントデスクがあった。

仗助の渾身の一撃を叩き込まれた名残で、奇妙なデザインにさせってしまった帽子と一体化した黒髪が見える。一人じゃ落ち着かねえから早くこいよ、と手招きする仗助に僕は肩をすくめてそちらにむかった。

数分後、ありがとうございます、と受付嬢がお辞儀をすると手続きが終わったらしい彼は、ちやりと鍵をポケットに仕舞い込むとぶつきらぼうに言った。

「325号室だ、いくぞ」

寡黙な男だ。うーす、と舎弟のような返事をして仗助は上京してきた田舎者のように忙しなく視線を泳がせている。はい、と静かに頷いた僕を確認してから、帽子を目深にかぶり直して、白い学ランがエスカレーターに向かった。

見上げるほどの身長差にも関わらず恐怖心を感じないのは、この人が持っている風格と知性を宿らせた日本人離れした目と物静かな態度が中和しているからだ。190以上はありそうな男だ。ディオ・ブランドーは、生きていたらこれくらいの身長差があったのだろうか、とぼんやり僕は考えた。エスカレーターと階段をいく。

先陣をきる左手の薬指に鈍色に光る指輪を見つけた。僕は、28歳

だという海洋冒険家志望で、すでに大型海洋生物の生態調査で実績があるこの男が1年留年している理由を悟る。結婚しているのに大学院生とは変わった経歴の持ち主のようだ。下世話な詮索はしないことにした。

「そういうえばよお、コンビニ強盗がバラバラにしゃがったおめーのオヤジさんの写真って返ってくるのか?」

「さあ、どうでしょうね。現場検証をしてる人たちがピンセットでかき集めてましたから、物的証拠ってことで警察にいくんじやあないですか」

「つつーことは、やっぱ返ってこねえってことかあ。ごめんな、ジョルノ。こんなことならかき集めとくんだったぜ。そしたら直してやれたのによお」

「気にしないでください。だいたい踝まで浸水した店内でどうやって集めるって言うんです。他の人の写真も一緒くたになって、あちこちに流されてたんだ。君のスタンドじゃあ、欠けたところは埋められないはずだ。間抜けなモニタージュになるからいらんよ」

「でもよお、財布に仕舞ってたってことは大事なもんなんだろう?」

「まあ、僕が持つてるのはあの一枚きりでしたからね」

「まじかよ!?!くっそ、アンジェロのやつ!なんつーことしやがんだ、あのゲス野郎。今度はぜってえ逃がさねえ」

いきり立つ仗助に僕は苦笑いを浮かべた。気付けばずいぶんと離されている。空条さんが待っているフロアに駆け足で向かった僕たちは、325号室に到着した。ビジネスホテルを1.5倍ほど広くした室内は、ずいぶんとゆったりとした印象の部屋である。

創業60年だからか全体的に古めかしい印象を与えるが、オーナーのアンティークの趣味がいいのかあまり気にならない。空条さんはルームサービスを頼んでいるのか、電話をしている。足の低いガラス張りのテーブルが置かれた真っ白なソファにどかりと座った仗助は、はあ、と大げさにため息をついた。

僕も向かいのソファに座って、学生鞆を置いた。空条さんがやつてくる。ソファに座った彼は、やれやれだぜ、とぼやいた。僕らを見つめる目はこれ以上なく冷ややかだ。僕と仗助は顔を見合わせて、乾いた笑みを浮かべるしかない。

「とりあえず、君たちの知ってることを話してもらおう。もちろん全部だ。いいな。おれの考えている以上に、ことは深刻で悪化してることがよく分かったぜ」

観念した僕らは、半年にも及ぶアンジェロの追跡を説明することになる。頭が痛いとはばかりに眉を寄せた空条さんは、まずはスタンドというものについて教えてくれた。俺が説明する側になるとはな、と感慨深げなのはなぜだろう。

一言でいうと、スタンドは超能力が具体化したヴィジョンである。空条さんという。持ち主の傍に出現し、様々な超常現象を巻き起こすものであり、他人を攻撃したり本体を守ったりする守護霊のような存在を指す。

スタンドを使いこなすことができる人間のみスタンド使いという。スタンドは一人につき一体であり、複数種類のスタンドを同時に持つことはできない。スタンドを見ることはできるのはスタンド使いだけである。スタンドに触れるのはスタンドだけである。

スタンドは本体の意志によって働く、スタンドが傷つけば本体も傷つく。本体から離れて行動できる距離には限界がある。スタンドは特殊な能力を一つもつ。そして、スタンドは成長する。感覚的に分かっていたこととはいえ、こうして具体的に言葉で説明されると可視化される。

とてもわかりやすい説明だ。ちなみにスタンドという言葉は、ある男がスタンドバイミーという言葉からとり、それが組織内で広がりを見せ、空条さんたちも使うようになったとのこと。

「スタンドに目覚めるには、いくつか条件がある。1つめに俺や仗助、
×という少女のように、親族に強いエネルギーを持ったスタンド使い
×がいて、その影響を受けること。2つめは、生まれつきのスタンド使
いであること。これは俺の友人にいたから確かだ。3つめは、ある分
野で長年にわたって修行を続けた結果、昇華された技術がスタンドと
いう形で発現したケースだ。ジョルノ、君はどれだ」

突然投げかけられた質問に、僕は思案を巡らせる。

「2と3じゃあないことは確かですね。1987年の11月下旬から
2月上旬にかけて、僕は正体不明の高熱にうなされて、死にかけた。
そのあと僕はスタンド使いになったんだ。養父も母親も僕のスタン
ドが見えてなかったから、きつと父親がスタンド使いだったんでしょ
う、きつと。残念ながら一度も会ったことはないです。もう死んだと
しか聞いてない」

「……………本当なのか？」

言葉を失っている空条さんの瞳が困惑と動揺で揺れている。不自
然な沈黙ののちの問いかけに、ええ、そうです、と僕は頷いた。いよ
いよもって絶句する空条さんに、そうっすよね？と仗助が便乗する。
仗助と僕のスタンドが発現する時期が一致しているのは、空条さん
にも想定外の奇妙な事実のようだ。唯一の証拠である写真はアン
ジエロによって失われてしまった。空条さんに見せることができな
いのが残念だ。

×
×
「たしか、×病院に入院してたと思うので、僕のお世話になってる児童
養護施設に連絡してみてください。記録が残っていると思いますか
ら」

「……………あらためて聞くが、本当に時期は間違いないんだな？198
6年じゃあないんだな？」

「なんで1986年なんです？さすがに1歳で50日間も生死を彷徨

徨つたら、間違いなく死んでますよ。いくら生年月日が戸籍上とはいえ、僕の見た目を病院が間違えることはないと思います。母親が奇妙な病にかかったせいで、僕も感染してるんじゃないかって、あらゆる手段を使って調べつくされたんだ。大学の先生がこぞって参加してたみたいなので、さすがに間違えることはないと思いますよ?」

「そうか、なるほど。命拾いしたな、ジョルノ」

「ええ、ほんとうに」

「病院に記録が残っているのなら、そつちを調べた方が早いかもしれないな。そしたら、君がスタンドに目覚めた理由がわかるかもしれない」

「ほんとうですか?」

「ああ、俺が保障しよう」

妙に確信に満ちた頷きだった。わかったのは、空条さんが僕を見る目つきが明らかに変わったことくらいだ。大きな方向転換である。仗助が連れてきたただのスタンド使いの少年から、劇的なまでに変化を遂げた先にあるものまでは、僕はまだ見出すことは出来なかった。

空条さんはいろんな感情をはらんだ瞳をしている。案外落ち着いたのは最近で、仗助みたいに激情家なのだろうか。案外、高校時代はやんちゃをしていたという三流記事の噂は本当かもしれない。胸倉をつかまれるくらいの凄みを感じながら、僕は淡々と質問を続けた。

「もしかして、僕の父親を知ってるんですか?」

僕の問いかけに、空条さんは否定も肯定もしなかった。ただ、唇を噛むだけだ。今の時点ではなにもいえない。調査結果を待たないと空条さんの独断では動けない事案が絡んでくると言葉少なに語るだけだった。

それが高校時代と現在の立場の違いなのか、家族を持ったが故の選択したあり方なのかはわからない。とりあえず、めんどくさいことになりそうだとだけ直感した僕は、会わなければよかったと後悔する。

そして、わかりました、とだけいって、僕は笑った。空条承太郎さん、とりあえず、僕はあんたが嫌いだ。もちろん口にはしない。言及を避けた僕に安堵した空条さんがいる。

空気の読めないルームサービスがやって来る。重苦しい空気に耐えかねて、仗助はそつちに向かった。コーヒーが3つ並ぶ。それぞれ思い思いにミルクと砂糖を入れた僕たちは、一息ついた。

「ところで、ジヨウサダってご存知ですか？」

ぶふ、と空条さんがコーヒーを吹いた。仗助が大丈夫ですか!?とぎよつとする。そして、あわてて布巾でガラスを拭いた。何気なく振った話題のつもりだったので、真顔のまま僕は固まった。気管に入ってしまったらしい。

げほげほと豪快に咳き込んだ彼は、コーヒーをおいてしばらくソファに沈んだ。乱暴に目頭をぬぐった空条さんは、いきなり何だどこつちを見る。張りつめていた緊張感はすっかりどこかに飛んで行ってしまったようだ。

「なんで中学生がジヨウサダを知ってたんだ」

「僕がお世話になってる刑事さんがジヨウサダのファンなんですよ。空条っていうから、もしかして親戚なのかなと思って」

「ああ、空条貞夫は俺のオヤジだ。今頃チベツト辺りを旅行してるだろう」

「サインとかってお願いできますか？」

「知るか」

「それは残念。そうだ、空条承太郎さんですよ？ジヨジョって呼ん

でも」

「断る」

まだ全部言っていないのに即答で断られてしまった。呼ぶなど顔に書いてある。呼んだら殺すと書いてある。物騒な男だ。ジヨウサダはいいのにジヨジョはだめなのか。よくわからない基準だ。

大げさに肩をすくめる僕に、肩を震わせている仗助は、おまえ、おまえ、と声が震えている。くひひひひ、と無理やり笑いを抑えている仗助は腹筋が崩壊して死にそうになっている。ぎろりと僕たちを睨んだ空条さんは、舌打ちをした。

どうやらジヨウサダ世代の真ただ中で育った保護者の子供たちに囲まれて育った彼は、問答無用でジヨジョというあだ名を付けられる運命にあつたようである。苦い思い出でもあるのか、拒否反応が顕著だ。それとも一回り年下の僕にニツクネームで呼ばれるのが嫌なのだろうか。反応を見る限りそうなのだろう。きっと体育会系のノリの人間に違いない。

「ならオレもジヨジョじゃねーか？」

「なんでです？ジヨウジヨでしよう？」

「ジヨジョとも読めるだろ？」

「なるほど。空条さんには断られたし、仗助のことジヨジョって呼んでもいいですか？」

「でもよー、俺の父さんでもあるジヨセフ・ジョースターさんもジヨジョなんだよな」

「そういえばそうですね。なんです、君たちの家系はそういう縛りでもあるんですか？」

「お前ら、いい加減にしろ」

ジヨジョから離れる、ややこしい。ジヨジョって単語が出るたびに反応している空条さんが静かに怒鳴りつけたので、僕たちは茶番を辞めることにする。すっかり冷めてしまったコーヒーを飲みほした僕

は、すくなくても仗助の名前はジョセフさんにあやかってるんだろ
うなどは思った。もちろん、空条さんの娘の名前は今の時点では知る
訳がない。

「そういやあ、承太郎さんのスタンドって、スター・プラチナって
ですよ？かっこよくねえか？ジョルノ」

「スタンドに名前ですか、考えたこと無かったですね」

「だろお？星の白金ってグレートっすよ。どうい理由で付けたん
すか？」

「俺にスタンドの存在を覚えてくれた占い師が付けてくれた名前だ。
タロットカードで引き当てたカードが星だった」

「へえ、そうなんすか。じゃあ承太郎さんの知り合いにはもう使われ
てそうっすね。タロットカードはダメかあ」

「養父は僕も知ってる洋楽の名前を付けてましたね。あの人は朝でも
夜でもプログレばかり聞いてましたから由来はわかります」

「洋楽かあ、そっちもありだな」

「空条さんも好きなんですか？洋楽。プリンスのアクセサリ付けてま
すけど」

「え、あ、マジっすか？おー、プリンス好きなんてうれしいっす！っ
かジョルノも好きなのか？」

「僕が好きなのはジェフ・ベックです。あの人がプリンスが素晴らし
いって言ってたから、アルバム聞いたことがあるだけですよ」

久保田利信だなんて知る訳がない。の信の字が違います、利伸です
ぐだぐだになってしまった流れの中で、スタンドの名前を空条さん
がつけるという約束になってしまったのは、今思えば凄まじい無茶ぶ
りだった気がしてならないのである。

第6話

325号室にある電話を借りて、ジョウサダフアンの彼に連絡を入れた僕は、社王グランドホテルに迎えに来てもらうことになった。仗助は僕から受話器を受け取ると、どうすっかなあ、と延々頭を悩ませている。

普通なら東方巡査か母親の朋子さんに迎えに来てもらうところだが、そもいかない。空条さんがジョースター家の代理人としてきている都合上、まだ空条さんのことを話していない仗助は家族とあわせるわけにはいかないようだ。

仗助曰く、空条さんはジョセフ・ジョースターさんを連想させる風貌をしているから、たとえ嘘をついても東方の人々には一発でばれてしまうらしい。待ち受けるのは修羅場である。

男手ひとつで東京の大学にやるまで育てあげた一人娘が、自分より年上で家庭を持つている男性と恋に落ちて愛を育んで、一度だけの過ちとは言え不倫で子供を宿した。仗助はよく知らねえといってるから詳しく語ったことはないんだろう。

東方巡査の経験した修羅場は想像を絶するものだろう。たった一度、とはいうものの、下世話な話、朋子さんはジョセフ・ジョースターさん以上に小細工に熱を上げたことをぼそりと語られたことがあると仗助はいう。

恋する乙女はなんとやらだ。15年間の沈黙を経て突然現れた代理人の空条さんを目の前にしたら、朋子さんはともかく東方巡査がどんな反応をするのかはさすがに予測ができなかった。仗助が必死に取り繕おうとするのも無理はない。東方家とジョースター家の問題なので、僕は首を突っ込む気はなかった。

写真を見たことがあるのか、映像が残っているのかは知らないが、父親の顔を知っているらしい仗助はずいぶんと躊躇している。

ここだけの話、オレがおめーの父親をちよびっただけ疑ったのは、

もしおめーが黒髪で、そのセットしてる髪を降ろしたら、承太郎さんと面影が似てると思ってるからなんだぜと言われたときには、どうしようかと思った。

僕はジョセフ・ジョースターという人を知らない。僕はため息をついた。空条さんは調査結果が届き次第、すぐに連絡を入れるからと名刺を渡したので、それを財布の中に厳重に保管するしかないだろう。DNA鑑定なり、詳細調査なりすればすべてが明らかになる。

僕の後天的な金髪と癖の強い髪質は突然変異で生まれたものだ。先天性の髪の色は黒だったし、髪質は仗助や空条さんたちと似通っていたことを知っているのは僕だけだ。それが何を意味するのか、僕は未だに知らない。

今の仗助に告げられるほど僕は意地の悪い性質はしてないから黙っていた。そんな僕の隣で仗助はどうやってしらを切ろうか悩んでいる。僕と遊ぶ約束をして帰るのは遅いと自己申告したから、遅い時間の帰宅は大丈夫だけど、どうやって帰ろうと悩んでいる。

普通に考えたらもうすぐやってくる彼の車に、ついでに乗せて帰ってもらうのがいいと思うんだけど、仗助の反応は鈍い。どうやら今日はひとりになりたい気分ようだ。ナーバスから復活したらまた長電話をかけてくるだろうからほっとくことにする。

エントランスに彼の車が到着する。僕は空条さんと仗助にまた明日と告げて車に乗り込んだ。助手席の窓を開けようとボタンを探った彼だったが、仗助がいいすよ、と手を振ったので、その手をハンドルに持ち替えた。ルームミラーで僕を窺うので、僕も頷いた。行きましようって笑うと、うなずいた彼はウインカーを出して車を発進させる。

「おかえり、初流乃君。ずいぶんとかかったね」

「仗助だけじゃあ納まりが付かなくて、気付いたらこんな時間になってたんです。遅くなってしまいました」

「と、いうと?」

「世間は狭いですね。空条さんは僕の父親のことを知っているっていうんだから」

「ほんとうなのかい?」

「ええ、驚きました。詳しくは話してくれませんでした。ディオ・ブランドーが実在の人で、あの人の空想じゃないとわかっただけで十分です。やつと実感がわいてきました。僕をみるとデッサンやクロッキーを思い出すといわれるのももううんざりなんだ。どうも突然空から降ってきた存在のように思えていけない。いろいろ調べたいから手伝ってくれと言われたんで、わかりましたっていう話をしてたんですよ」

「そうか、なるほど。初流乃君がいいなら私は何も言わないがね、そういう大事な話は施設の方にも通しておくことをお勧めするよ。ところで、仗助君はよかったのかい?」

「ええ、いいんです。仗助は乗せられない。だって僕たちはこれからホテルに泊まるんだから」

頬杖をついて、対向車のライトが前方から後方に流れていくのを見つめながら、僕はいう。神経を研ぎ澄ませて、精神を集中させる。スタンドを呼び出すまでもない。僕が生み出した生命は、まだサンマー卜近くの方角にとどまり続けているのがわかる。

やはり具体的な行動に移すのは朝なのだろうか、はじめてくる土地を深夜に歩き回るのは指名手配犯である死刑囚にはハードルが高すぎる。でもコンビ二強盗の時のようにスタンドによって操作された人間と視界を共有できるのなら、話は別だろうか。

とりあえず、注視する必要があるのは変わらない。彼の目が大きくなるのが、鏡になっている窓ガラス越しにうかがえる。彼のハンドルを握る手が白んだ。

「アンジェロに会ったのかい?」

「財布から学生証を見られたんです。ぶどうヶ丘学園に転校したことも、あなたのところにお世話になってることもばれました。施設には

戻れない。学校はいけない。官舎にはいけない。どこにも帰れない
じゃあないですか」

彼は少しだけ嬉しそうに笑った。

「空条さんのところにお世話にならないで、私に連絡してくれたということは、それなりに信頼してくれてるというわけだ。そのまま行方不明になるつもりだったところに比べたら、ずいぶんと歩み寄ってくれたじゃあないか」

「そうですね？」

「ああ、少なくとも私はそう思うよ」

アクセルを踏むスピードが速くなる。信号が黄色になったので、強引に横断歩道をつきつたのである。警察官なのにずいぶんと乱暴な運転をする男だと思う。いつだって気分がドライブの乗り心地を左右するのはいかがなものか。だから奥さんに実家に逃げられて離婚の紙を郵送されてくるんだと思いつつながら、僕はどんどん遠ざかるモズの気配に意識を集中させていた。

かすれていく生命の気配。つかえばつかうほど射程が伸びていく生命探知のレーダーでも、さすがにどんどん距離が離されると把握が難しくなっていく。ホテルは彼にまかせた以上、とやかくいうことはできない。明日から学校を無断欠席する理由を説明しないといけないなど思った。

でも、彼の苗字を使うことと名前の読み方を僕の通称であるジョルノにすることを許可してくれた学園側にはそのまま真相を伝えた方がよさそうだ。とりとめない話が浮かんでは消えていく。彼はビジネスホテルの名前を告げて、車を走らせる。

「そういえば、仗助君はタクシーで帰るのかい？」

「いえ、東方巡査たちが迎えにくるとおもいますよ」

しれつと答えた僕に、なんだって?、と彼は声を上げた。彼は東方
巡査と付き合いがあるため、僕たちが知らない話をたくさん聞してい
るのだろう。東方家の事情に内通している分、僕が口走った事実がと
んでもないことにすぐ気付く。冗談だろう?と彼は聞く。僕は首を
振った。

「帰れないんじゃないか? 仗助君」

「ええ、朋子さんが突撃したら、東方巡査が夜勤明けに帰ってくるま
で、社王グランドホテルに缶詰めでしょうね」

彼は絶句しているようだ。

「仗助もアンジェロに学生証を見られているんです。ぶどうヶ丘学園
の高等部に通っていることも、住んでいる場所も、家族の連絡先もば
れたのは同じなんだ。5年前は新米警官だったあなたの名前があつ
てもアンジェロは警察だとすぐには気付かない。でも東方巡査はア
ンジェロの初犯を現行犯逮捕した実績がある上に、最後の事件にも大
きく関わってるんです。東方家の修羅場なんてしつたこっちゃない
ですよ」

僕は彼がどこにいるのかわからない、という名目のもと、所轄の直
通電話や官舎にある自宅の電話、よく利用している店、と電話を重ね
た。今日ここにきたばかりの空条さんは電話番号を並べられてもど
こがどこだかわからない。

見覚えがある仗助は目の前に迫る危機に頭がいつぱいで、フレンド
リーファイアする気満々の僕の行動に全く気付いていなかった。そ
のうち一つにヒットしたのが今日夜勤だという東方巡査の勤めてい
る交番だ。

ジョウサダの息子さんと会ったから、サインを貰えないか粘ったけ
どダメだったと社王グランドホテルに突撃した野次馬の世間話をし
ただけだ。嘘はひとつもついてない。でも東方巡査は生意気な坊主

めと笑ってた。やっぱり朋子さんが可愛いんだろう。

ジョースター家の親戚筋のことはすでに調べ上げているようだった。あとは想像にお任せするというやつだ。

仗助も空条さんも、僕がどこにいるのかなんて、星の痣で把握できるのだ。二人を撒いて、アンジエロから話を聞くにはこれしか方法がないんだから仕方ない。

僕たちはビジネスホテルをチェックアウトした後、まだKEEP

OUTが張り巡らされているサンマートのある通りに車を付けた。タクシー運転手だったというコンビニ強盗が止めていた車は既に移動していて、その付近に付けることができた。

逃走経路に路上駐車するにはずいぶんと人目の付きやすいところという印象だ。いくらスタンドで遠隔操作するから、本体は捕まらない自信があるとはいえ、アンジエロにしてはずいぶんと軽率な判断だと思う。もしコンビニ強盗がそのまま逮捕されてパトカーに押し込まれでもしたら、コンビニ強盗の中にあるスタンドと本体はほとんど距離が離れてしまう。

空条さんがいうにはスタンドには必ず射程範囲があるとのことだから、その範囲を超えたらスタンドを回収する手段はなくなってしまうのだ。仗助が気付いたにも関わらず、襲い掛かってこなかった、逃げの一手を選択した時点でスタンドの持つ力は皆無、僕のスタンドより攻撃力はないと思われる。

つまり人体を内側から破壊する威力はあっても、パトカーを破壊して脱出する手段はない。あの死刑囚が最悪の事態を想定していないとは考えられなかった。もしかして、アンジエロはスタンドの射程範囲のルールを知らないんだろうか。

遠隔操作できるスタンド使いは本体が無防備なのが定石だと空条さんは言っていたから、潜伏先に慎重になるのは当然だ。どこに潜んでいるのかわからないから気を引き締めていかないと。少なくともこの辺りには既にもいないことは確定しているので、それだけは安心だった。

ぱたんと後方座席のドアを閉めた僕は、行こうか、と手招きする彼についてく。報道陣が黄色いテープギリギリに陣取って、物々しい雰囲気現場検証をしている警察関係者にフラッシュをたいている。野次馬の人だかりをよけて、僕たちは向かいのビジネスホテルに向かった。

真正面がコンビニ強盗になったことで、報道陣の特需に恵まれている受付嬢やスタッフは忙しそうだ。取材を求められて対応に追われているのか、忙しく社員証を付けた人間があちこち走り回っている。

それでも、宿泊客を送り出した受付嬢は、彼が懐から取り出した警察手帳をみるやいなや真っ先に応対してくれた。事件当日の証言を求められると思いきや、現行犯逮捕をされている人間について聞き込み調査をされるとは思わなかったらしく、え？という顔をした受付嬢だったが、傍らにいた年配の女性が僕に気付いて驚いた。

どうやら僕と仗助がコンビニから警察に保護されるのを野次馬がてらみていた人だかりの中に紛れ込んでいたらしい。僕の証言の裏付けのためだと勘違いした彼女たちは、彼に言われて事件当日の宿泊者名簿を見せてくれた。

案の定、そこには代表者としてタクシー運転手であるコンビニ強盗の名前がある。記入された同行人は住所、名前、電話番号にいたるまですべてでっち上げなのは彼にとって想定範囲だったらしい。個人タクシーを営んでいる地元民の男がビジネスホテルに泊まるなんてありえない行動だ。

差し出されたコンビニ強盗と逃走中の死刑囚の写真を2枚並べられた彼女たちは、スタッフルームから出てきた支配人に話をしに行

く。しばらくして、事件当日にシフトで受け付けをしていた女性が支配人と一緒にやって来た。写真の確認を促された彼女は、目を丸くして間違いないと大きく頷くのだ。

同行人はすでにチェックアウトを済ませてホテルを後にしている。宿泊客が既に入ってしまったのでさすがに入ることには出来ないが、部屋番号からしてコンビニ強盗に襲撃されたサンマートを見下ろせる部屋であることがわかる。知らないうちにコンビニ強盗の共犯者を泊めていたことにホテルの関係者たちの顔色はどんどん悪くなっていく。

彼は淡々とした様子でホテル入口に設置された監視カメラの開示を請求するのだ。もちろん、音声のない白黒画像の向こう側で、変装しているとはいえ、片桐安十郎と思しき男とコンビニ強盗の男が共にチェックインする様子が映っていた。そのテープを回収した彼は、慎重に透明な袋にいれる。

そして、どこかに電話しているようだった。しばらくすると、サンマートからいかつい体格をした刑事がやって来る。官舎で何度か挨拶をしたことがある男だ。どうやらコンビニ強盗の担当をしているようだ。学校もいけねえとは大変だなあ、坊主、と同情めいた眼差しとともに、まあ心配سنナや、とばんばん背中を叩かれる。

僕は咳き込んだ。初流乃君のおかげで片桐の行方がつかめそうだと彼はテープを渡し、スタッフから聴取したメモを男に渡した。目を通した男はうえという顔をした。どうやら共同捜査になることを予感したらしい。彼とこの男は相性が悪い。ちなみに僕はモズが寄生木にしていた場所からこのホテルを割り出して、アンジエロと会ったとでつち上げただけである。

「これで管轄外の人間が何をしているんだとどやされることもない。アンジエロの犯行に共犯者がいることを証明できる物的証拠が入手できたわけだ。感謝するよ」

彼はありがとうと笑う。

「できればここで待っていてほしいところなんだがなあ」

「そんなのゴメンですよ。あなたが僕をおいていくのなら、僕はタクシーを使うだけだ」

「わかったよ。ただし、絶対に車から出るなよ」

「ええ、あなたもね」

彼は肩をすくめた。けたけたと彼の同僚は笑っている。お呼びがかかったのかすぐに事件現場に戻ってしまった。無理スナよ、坊主、とわしゃわしゃされたせいでぐちゃぐちゃになってしまった前髪に、恨めし気なまなざしを向けると不敵な笑みを返されてしまった。

ビジネスホテルに髪形をセットできる道具などあるわけもなく、コンビニで買った安い整髪料で誤魔化してもちよつと気を抜くと癖のある髪は飛び跳ねてしまう。うまいことまとめるのに苦労した労力を無駄にした気分だ。

崩れたセットは治らない。やっとまとまった巻き毛が不細工になっている。気に入らない。はあ、とため息をついた僕は、ため息をつきたいのは私の方だと小突かれながら、車に戻った。

僕たちは片桐安十郎を乗せたというタクシー運転手が在籍している運営会社に連絡を入れ、その男が幸い無事だと知らされて、安堵する。どうやらコンビニ強盗一色のニュース番組は逃走後一切足取りが分からない死刑囚のことはすっかり風前の灯。

カーラジオが主な情報入手源であるタクシー運転手は片桐だとは思わなかったようだ。故郷に帰ってきた脱サラ組のような顔をして、みよようにきよろきよろとしながら色々と聞いてきたという片桐は、久しぶりの友人たちを訪ね歩く人のように、いろんなところを頼んだらしい。

その人が降ろしたという場所を聞いた僕たちは顔を見合わせた。まずは母校だというぶどうヶ丘学園高等部。ぶどうヶ丘学園はミッション系でもあるから、宗教的な繋がりで神父と親しかったという児

童養護施設近くの教会。

その教会に向かうために指定したルートは僕のかつての通学路だ。次は中学時代に通っていた公立の中学校。そして、僕がお世話になっている官舎を横切り、定禅寺通りで降りたらしい。古くからの知り合いがいるという片桐は、古くからの商店が並ぶ商店街からちよつとはずれた道に進んでいったとのこと。

定禅寺通りは仗助の家があるはずだ。彼ははやる気持ちを抑えて、無線機を手にとった。刑事ドラマで訊いたことがある常套句が交わされる。最前線で見せられると彼が現職の警官であることを改めて感じた。しばらくして、彼は車を発進させる。彼が調査から導き出した片桐の所在を確認した捜査本部は、応援を寄越してくれるようだ。個人的な会話を意図して彼は通信をきった。

「君と仗助君の通学時間帯を狙ったようだが、当てが外れて別の作戦に移ったようだね」

「なんだって仗助に狙いを定めたんですかね」

「君が私たちに警護されているのは察したようだ。それにあの男は普通の幸せを感じている人間をみると、いい気になっていると感じて踏みつけたくなる衝動に駆られるような男なんだ。ちよつと特殊な事情があるとはいえ、東方家は普通の家庭だし、仗助君はごく普通の高校生だ。朋子さんも東方巡査にも愛されて育った子だ。それをみて虫唾が走ったんだらうさ。誰かに君を誘拐するよう金を積まれたとしても、そつちを優先するような男だ。片桐安十郎という人間はね」

通信のスイッチを入れた彼は、個人的に×の一家心中事件にも片桐の匂いを感じているためか、言葉のはし×が刺々しいように思う。なんで通信をきった、先走るなよと彼の上司と思しき男の声がある。上辺だけの言葉が通り過ぎていく。

呆れたように上司はため息をついた。とんだ似た者同士だよ君らはと不名誉な言葉を賜った僕は、なんだって一緒くたにするんです、と身を乗り出して抗議した。そうですよ、と彼は不満げに言った。唯

一の救いは東方家は全く別次元の修羅場に巻き込まれていて、自宅は今の所もぬけの殻であるということだろうか。

とんだ肩すかしもいい所だろう。もちろん当人たちにとっては15年越しの修羅場が現在進行形で起こっているわけだから、抗議されそうな話だが。事情が事情なだけに今回は東方巡査は意図的に捜査員から外されているようなので、今頃夜勤明けで社王グランドホテルに殴り込みをかけている所だろう。

血を見なければいいのだが。今度仗助と空条さんに会うのを想像するのは、脳内が審議を最大に拒否をしているため、棚上げ状態なのだが結果的にはこれがよかったのだと押し切るしかないだろうなと僕は思った。

「シートベルトを締めてくれ、初流乃君。舌を噛みたくないのなら」

僕は大人しく後部座席のシートベルトを伸ばした。そして、少しだけ窓を開けて、どんどん速度を増していく対向車を眺めながら、静かに目を閉じた。僕のスタンド自体は空条さんや仗助と同じ、近距離タイプに非常に強力なパワー型に分類される。

だから攻撃自体の射程範囲は2メートルがいいところだ。しかし、僕のスタンドによって生み出された生命はその限りではない。僕自身はその存在を感知できる範囲は最大半径5キロメートルが今のところ限界だけれど、僕のスタンドから離れたところでその生命は死なない。

もとにはもどらない。僕がその生命に死を命じなければ、基本的にその生命は擬似した種族と同じ人生を歩むことになる。仗助の能力で強制解除されるという相性最悪な展開はともかく、僕の予想するところでは片桐のスタンドはその種類のスタンドではない。

だから延々と追尾し続ける擬似生命は、渡り鳥のように片桐を近くで見つめていることだろう。星の疼きはない。社王グランドホテルから程遠い。まだ彼らは動けないようだ。僕にできるのは、すっかり片桐の身体の一部になってしまったKの骨は片桐を追い続けるとい

う事実を確認することだけだ。

なんで遺体が片桐を追っかけるんだよ、おめーの生み出せる生き物はその恨みつらみを記憶してるわけじゃあねーんだろう？といった仗助の言葉を思い出す。そんなオカルトチックなものじゃあない。もつとシンプルだ。

仗助の想像以上に片桐安十郎という男はサイコパスな男だったというだけだ。僕らのやり取りを聞いていた空条さんが、喰ったのか、とぼそりと呟いたときの歪ませた顔をありありと思い出せる。便所のネズミもげろを吐くようなどす黒い気分になるぜ、と学生帽のつばを掴んで吐き捨てた空条さんは怒っていた気がする。

言葉を失った仗助はうつそだろお？と僕を見て、だからいいのかなかったし、巻き込みたくなかったんだ、とぼやいたら、そう言う意味じゃあねーぞ！と怒られたのはご愛嬌だ。おめーはKと同じ年じやあねーか、下手したらおめー、アンジェロの餌食になってたかもなんだぞ、わかってんのかよ？と言われた。

空条さんが世界で一番やさしい能力と称するだけはある。何を今さら、と笑いたくなってしまうのは内緒だ。僕は頭を振った。集中しないといけない。少しずつではあるが生命探知のレーダーに微弱ではあるが反応があったのだ。

「どうしたんだい？」

「今、どの辺りです？」

「もうすぐ定禅寺通りだ」

僕は目を開けた。突然何かを追い払うようにかぶりを振った僕を心配そうに、ルームミラー越しに見ていた彼だったが、僕が窓を全開にするのを見て、気分が悪くなったと思っただけらしい。少しだけ速度を落としてくれた。

社の都、社王町を象徴するケヤキの並木道が広がっている。中央分離帯にも両脇の遊歩道も整備され、設置されている3列の並木道は、

閑静な住宅街と相まってとてもきれいな光景だ。道路標識や信号機が葉で隠れないように、わざわざ下を向く枝は刈り取られ、天井の高い緑のアーケードを潜り抜ける気分になる。

多少の雨でも濡れないのがいい。時折見かけるビルや商店はガラスを使った外観をしているためか、ケヤキの並木道や太陽の木漏れ日を映して実際の道以上に広く感じた。遊歩道には、時々有名作家の彫刻が設置され、噴水があるのがわかる。ケヤキを囲む柵はすべてパイプベンチになっていた。

イチヨウの並木道が姿を現したところである。もうそろそろ仗助の家につくだろうというところで、僕たちは水の柱を目撃した。大きく立ち上がる水の柱。どうやら花壇の水やりに設置されている水道に設置されているホースが上を向き、大きく裂けてしまったことで破裂寸前の洪水になっているようだ。

モズはまだ遠い。距離的に考えてもスタンドの限界範囲を超えている。もう片桐はもつと先にいるだろう。でも、僕たちはそこを横切れることは出来なかった。染み入る水が白い遊歩道を通り抜け、やがて僕たちの通っている道路にまで流れ出している。

もしものことがあったら困るとスタンドを出現させていた僕は、思わず息を飲んだ。その水は真っ赤に染まっていたのである。彼の車が急停車した。ランプを点灯させ、動く意思がないことを明示した彼はあわてて車から遊歩道に向かう。僕もあわてて後を追った。

水に薄められた絵の具のようにすじを見せていた赤がどんどんその面積を広げていく。やがて、僕たちは出しゃばなしの水の先で、ぐったりと倒れている中年の男を発見した。近付こうとした僕を彼が止める。首を振った彼は、事件現場を荒らさないようにと事務的な言葉で制した。

僕はスタンドを展開したまま、辺りを見渡した。アンジェロはいない。ほんの数メートル先では、中年の男が死んでいた。鼻を食いちぎられたブルドックが、だくだくと真っ赤な血を流しながら死んでいて、そのすぐ横で両耳から大量に出血をしている男がいるのだ。異様

な光景だった。

ひしゃげた眼鏡には黒い点がこびり付いている。ありとあらゆるところから出血している男。僕の脳裏に×の父親が過った。まったく同じだ。彼は携帯を取り出してどこかに連絡している。こうなるとどこにも行けない。現場を引き継ぐ人間が現れるまで、彼と共にいなければいけないだろう。

もどかしい気持ちで僕は空を見上げた。ようやく近付いたモズの気配が遠ざかっていく。スタンドの気配まで探知できないのは残念だが、空条さんの見立てでは200メートル範囲にスタンドはいるはずらしい。少なくとも今ここで彼が襲われる可能性はないわけだ。少々来るのが遅かったようだが。

「これで7人目だ。アンジェロの仕業だと立証できないのがもどかしいな」

はあ、と彼はため息をついた。そういう意味では、養父が片桐によつて殺害されたのは唯一の立証事件だから、唯一養父が世間にとつて役に立った瞬間なのだろうか、と僕は思った。僕の考えていることに気付いたのか、そんなこと考えるもんじゃあない、と彼が咎める。僕はうなずいた。

「しばらく長くなるよ。初流乃君は車で待っていてくれないか」
「わかりました」

放り投げられたキーを受け取る。彼の無断駐車している車がレッカー移動されないように、事情を説明する役を買って出るべく、僕は引き返す。気付けば手の平に汗をかいているようだ。乱暴にぬぐった僕は車に引き返す。ちらほらと通行人が異様な雰囲気気付いて近付いてくるのが見える。

余計なことに巻き込まれないようにしようと足早に僕は車に向かって歩いた。どこか遠くでぶどうヶ丘学園の授業を開始する予鈴

が鳴り響く音がする。日常が遠い。時間帯が時間帯だからか、ブランチに向かう小さい子供連れの母親か専業主婦か、のんびり散歩をしている老人、私服の人はバイトかパートか非常勤か。そんな感じの顔ぶればかりだ。

目を合わさないように遊歩道を歩いた僕は、ようやくたどり着いた車に乗り込もうとして、彼からもらった鍵を探った僕は、近くに座っていた若い少年に声を掛けられた。

「あんた、ぶどうヶ丘中等部だろ？学校は休みか？」

僕は舌打ちした。相手も学ランを着ていたからだ。校章からして仗助と同じ高等部の人間だろうけど。明らかに不良の風貌だ。因縁を付けられてはかなわない。こんなときに。僕は無視した。少年はさもあらんと肩をすくめる。

「オレは待ってたんだぜ、この時を。この瞬間を。ディオ・ブランドーの置き土産に会えるのをなあ、汐華初流乃、てめえをな！」

気付いた時には遅かった。スタンドを呼び出そうとした矢先、ぎく、という音がした。ぎよつとして振り返ると少年は矢のようなもので僕のスタンドを刺していた。スタンドの痛覚が僕に逆流する。

すぐ背後で何かが大爆発する音がして、僕の何かははじけ飛ぶ。スタンドが暴走したような感覚に陥った僕は、鍵を落っこす。少年はそれを拾い上げる。僕はそのまま気を失った。

真っ赤なサイレンを回転させながら真っ白な車体が社王グラウンドホテルにやって来たのは、すっかり夜も更けて空が白み始めた明け方

のことだ。くあ、と欠伸をかみ殺してまぶたをこすっていたオレは、救急隊員の人たちに運ばれていくお袋の付き添いで救急車に乗り込もうとしたところを爺ちゃんに止められた。

なんでここにいるんだよ、爺ちゃん!?と大声を上げたオレに、そりやこつちの台詞だ、大馬鹿と今にもきれそうな顔をしていいやがる。腕を掴まれてひねられて、いででで、と悲鳴を上げたオレは、爺ちゃんに屈むよう無言の圧力をかけられて、そのまま視線を落とした。

「二体全体どーいうつもりだ、仗助。なんだって自分の母親にそのけつたいな力を使いやがった」

さあ吐け、今すぐ吐きやがれ、馬鹿野郎、とつかんでいる腕がみしみし悲鳴を上げるもんだから、オレは顔をゆがめた。やっぱりばれちまったようだ。爺ちゃんはスタンドが見えない一般人だけど、30年以上の警察官としてのキャリアがある分、刑事の勘は半端ねえ。

だから嘘をつくのが得意なおレでも爺ちゃんの前でだけは隠し事は昔から苦手だった。父親代わりだったっつーこともあるし、男っつーのはこういうもんだと学んできた象徴でもあるから、どうしても甘くなっちまうんだ。

ましてや、スタンドっつーもんがイマイチよくわかってなかったころに、壊れちまったモンを片っ端から直しては爺ちゃんにすっげーだろ!とわざわざ見せに行つてたこともあるくらい、その力に対して無頓着だった時期もある。不思議な力に目覚めた、特別な人間だって舞い上がった時期もあるし、調子に乗っているくらいとやらかしちまったこともある。

爺ちゃんがいなかったら補導歴がどうなつてたかなんて考えたくもない。そういうわけで、爺ちゃんはスタンドは一切みえないけど、オレの力についてはある程度把握してるところがあった。オレがスタンドの力を使う基準を教えてくださいるのは、或る意味爺ちゃんといつても過言じゃあないわけだ。

でも、何で分かったのかさっぱり分からないオレは、何のことだか、としらばつくれた。爺ちゃんは全てお見通しとでも言いたげな顔で笑いやがった。

「コンビニ強盗にも包丁と猟銃埋め込んだのはてめえだろう。派手に暴れやがって。鑑識が見せてくれた写真にあるコンビニ強盗の腹はみよーに抉れてるじゃあねえか。調べてみたら、肉んとこ、骨んとこ、臓器、へんな感じで捻じ曲がってやがる。まるで穴が開いたところを、無理やり塞いだみたいに繋がってやがる。結んでみたら抉り込んだ拳の形がまんま残っちゃってたよ。もしかして思っただけで、こっそり調べたらコンビニ強盗の身体からおめーの指紋が出てきやがる。しかも手の形状が完全に一致しちゃった。誤魔化すの大変だったんだぞ。なんだって素手で殴りやがったんだ、その変な力はやっちゃえばなんも残らねえってのに。もっと慎重にやりやがれってんだ。そんな矢先に朋子の腹んとこに、まあ似たような形状のへこみがあるじゃあねえか。無関係って考えるほどオレは無能じゃあないんだよ」

オレは白旗を上げるしかなかった。壊れたものや怪我した生き物を元通りに直す、治す力は、今のところ自動的に発動するもんだから、オレがそれを操作することはできねえ。承太郎さんによれば、スタンドが成長すりやそのうち治すかどうか選べるようになるらしいけど、今のオレにはまだ無理だ。

オレの力ってのは、元に戻すんじゃないやなくて治す力だ。だから無くなっちゃったもんを元に戻すことはできねえし、あるもんだだけで治すことになる。他の部分が自動的に引き寄せられて、元の形状に戻ろうとする。ひきのばされて、壊れたところが塞がる。

でも、さすがに完璧に元通りってわけにはいかないもんだ。たくさんのパーツがある人間の身体となると、細胞を一つ一つ治すなんてまどろっこしいこと出来る訳がないから、それこそもとに戻る確率なんてゼロに近い。まあこんな感じだろって感覚で治された人間はた

まったもんじやあないはずだ。

筋肉の形状、骨の位置、臓器の状態、何かしらのゆがみは残っちゃう。逆をいえばそれだけだ。死んでさえなけりや、死なないように治してやれる。どんな感じに治っちゃうのかまでは保証しないけどな。専門的な治療ってやつは医者に任せればいいんだよ、オレアお医者様じゃあねえんだからな。

オレは白状することにした。

「でもよお、仕方ねえだろー？アンジエロがお袋を人質にとりやがったんだ。何とかしてひきずりださねえと、お袋が死んじゃまうところだったんだよ」

「あんの野郎、爆弾でも埋め込みやがったのか」

「もつとタチ悪いやつだつての」

「で、そいつはどこにあんだ、仗助」

「え？あ、あー……つと、その、あれだ。専門家んとこに」

「ほーお、警察以上の専門家がいるんか、ぜひとも会わせてくれや、仗助」

「だから、爺ちゃんは見えねえんだろーが。あぶねえからやめろ」

なるほど、そういうことか、と爺ちゃんは舌打ちをした。道理で片桐安十郎の捜査が難航するわけだ、と苦々しげに空を見上げている。どうも常識では説明することができない力の存在を感じることもあったみたいで、大げさにため息をついた爺ちゃんはじとりとオレを見上げた。

「話はあとでゆっくり聞かせてもらうからな、仗助。空条承太郎つー人ともじっくり話をしなきゃいけないからな、今度家に連れてこい」

まじかよお、と心の中で絶叫したオレに、にやにやと爺ちゃんは

笑っている。逃げるなよ?、とささやく目は全く笑っていないかった。嫌な汗が伝う。ようやく腕を放してくれた爺ちゃんは、お袋が乗せられた救急車に付き添いとして乗り込むと、そのまま救急車に運ばれていった。

あー、くそ、無駄に疲れたぞ、おい、と安堵のため息をついてその場に座り込んだオレは、しばらくして高そうな革靴がこっちに向かつてやって来たのを確認した。さっきまで国際電話で異国語を話していた承太郎さんは、難しい顔をして遠ざかっていく救急車を見つめていた。

「帰っちゃったのか?」

「お袋が救急車にのっちゃまったんで、付き添いつすね。今度家に呼んで来いっつわれましてんで、とりあえず、あれっすね。この件が片付いたら案内するっすよ」

「ああ、そうしてくれると助かる。こっちも覚悟は出来てるからな」

「……治しましょうか?」

「甘んじてうける。それがけじめってやつだ」

やれやれだぜ、と承太郎さんはぼやいた。どこまで話した?と聞かれたオレは首を振った。ほんのさわりだけっすよ、と告げると、それもそうかと承太郎さんは言った。いえるわけがない。

承太郎さんが手配したタクシーを待っていたら、いきなりフロントから連絡が入って、東方朋子様がお待ちです、なんて呼び出しをくらったこと。まさかと思っただけで、みたらホントにお袋が立っただけ、さすがにフロントでさわぎになったらヤバいと承太郎さんの部屋に戻ったら、シヨルダーバックに仕舞われていた包丁でぶっ殺されそうになったなんていえるわけがない。

多分、どこかでアンジェロのスタンドに意識を乗っ取られたお袋は、そのままスケープ・ゴートとしてここまでアンジェロを案内する役を強いられちゃったわけだ。その瞬間、高級ホテルの一室は戦場と

化した。お役御免になったらお袋が死ぬ。

×の父親が脳裏をよぎったオレは、頭の中が真っ白になって無我夢中でお袋の中にいるアンジェロのスタンドを引きずり出したってわけだ。今思えば腹を殴って気絶させ、オレのスタンドをお袋の頭めがけて貫通させるなんてとんでもない芸当をよくぞまあできたと思う。躊躇なんてなかった。している暇がなかった。アンジェロがスタンドで人間を操っている間は、その人間の感覚を共有していることはコンビニ強盗との戦闘で分かっていたから、思ったわけだよ。アンジェロのスタンドは頭にいるってな。

気付いたら今までになく精密動作でやってのけていた摘出手術は、やればできるじゃねえか、とすっかりゆがんでしまったロゴの帽子を指差して薄く笑う承太郎さんを見て、成功だとわかった。

ルームサービスに頼んでいた酒のボトルはカラになっていて、そこに押し込めようとした時、オレのスタンドに捕獲されていたはずのアンジェロのスタンドが消えた時にはマジでどうなるかと思っただぜ。まさか液体だけじゃなく、気体になることができるなんて思わなかった。

ルームサービスで用意していたコーヒーマシンの湯気にまぎれて天井に逃げ込んだあいつは、あろうことかスプリンクラーを発動させて、すべての部屋を水浸しにしやがった。それからはあいつの独壇場だった。加湿器があたりを覆い尽くす。

ライフラインの街中で威力を発揮するタイプのスタンドだと悟った時の恐怖はもう二度と味わいたくないもんだ。逃げようにも気絶してお袋を庇いながら、ドアを開けたら、連動式のスプリンクラーは廊下や階段にも浸水の被害をもたらしていて、悲鳴を上げて出てくる泊り客に被害が出るとなれば迂闊に動けなくなった。

唯一勝ってるスピードとパワーでこっちの身体を乗っ取ろうとしてくるスタンドを返り討ちにして、ひたすらモグラ退治を強いられたわけだ。承太郎さんが液体と同化するタイプのスタンドと戦闘した経験がなかったら、きつと全滅していたに違いない。

基本的に姿を目視できないタイプのスタンドは、同化している対象に不純物が混じってしまうと見えるようになるつていう言葉がなかったら、きつと負けていた。まさかアンジエロも部屋中に消火器をぶちまけられるとは思わなかったに違いない。

アンジエロのスタンドが感覚共有型だったこともプラスになったと思うんだよ。蓄積してたダメージに加えて、火を消すためにぶちまけられた白い粉によって同化できる液体が粘土化して身動きが鈍くなった瞬間に、そのどろどろの塊のままビンの中に捕まえられたんだからな。

あいかわらず承太郎さんのスタンドの力はよく分からないけど、瞬間移動してた。目視できないスピードだった。すっげえ、としかいえない。窒息死しそうな位真っ白な石灰と一緒に密封されたビン。思いつき振ってやると気分が悪くなったのか、げえげえしていたけど、石灰が器官に入って窒息しそうになったのか苦しそうに呻いていた。

ちなみにそいつは今、承太郎さんの研究資料と一緒に密封したトランクの中に転がっている。飛び込んできたスタッフの真っ青な顔はちよつと申し訳なくなっちゃった。申し訳ございません！となにからなにまで用意してくれたスタツフによって、承太郎さんが借りるはずだった部屋はランクが上がって宿泊予定の料金のままという破格の設定になったらしい。

スプリンクラーと消火器の誤作動による大惨事だもんな、きつとトップニュースはこれだろう。そういうわけで、きつと何も覚えていないお袋は救急車に運ばれたというわけだ。

「じゃあ、行きますか、承太郎さん」

「ああ、そうだな。アンジエロが窒息死しないうちに話を聞きださねえといけねえ」

思い込みつてのは怖い。目隠しされて、スポイトで滴らせた水を血

だと聞かせると、出血多量で死ぬと勘違いした本人が死んでしまうこともあるくらい、思い込みの力つていうのは恐ろしいもんだ。

スタンドと感覚が共有しているアンジェロにはいまんとこ、似たような状態が迫っているわけだからなあ、おつそろしいもんだぜ。スツフが手配したタクシーに乗り込んで、オレたちは半径200メートルから承太郎さんの部屋を覗くことができる高層ビルの建物をしらみつぶしに当たることにしたのだった。

感謝して欲しいくらいだよな。もしここにジョルノがいたら、きつとおめー、なんの躊躇もなくぶっ殺されてたとおもうぞ、アンジェロ。案外、理性よりも先に体が動くタイプだと思っただよ、あいつつてさ。白み始めた夜明け前の社王町をオレたちは進んでいった。

アンジェロがいそうなところでタクシーを止めては、目印になるはずのジョルノのモズを捜した。餌付けしてある野鳥みたいに、姿を見つけると寄ってくるくらいには懐かれてたから、しばらくたっても来なかったらいないってことだ。たまに死んだカエルとかが枝に挟まっているのを見かけたから、いるっちゃーいるんだらうけどなあ。どこにいるんだか。

「あの野郎」

さつきから難しい顔をしてファックスから送られてきた英文を流し読みしている承太郎さんは、ちよつと不機嫌になりながら舌打ちをした。え？と反応したオレに、あ？と顔を上げた承太郎さんは、ああ、独り言だと明るくなり始めた社王町に目をむけた。

ちよつと怖かったのは内緒だ。手間取らせやがって、とイラつきながら承太郎さんはためいきをついた。さすがに気になって、どうしたんですか？と聞いてみると、承太郎さんは静かに言った。

×「ジョルノ、と名乗ってるようだが、どうやら本名は汐華初流乃というらしいぜ」

「しおばなはるの？え、ジョルノがっすか」

「ああ、[×]は保護者の苗字を名乗っているんだろう。ジヨルノは通称か？[×]アンジェロから身を隠すためとはいえ、なんだって隠すんだ」

「まじっすか、おもいっくそ日本人じゃあないですか」

「生まれはエジプト、育ちは日本。今まで一度も外国にいったことがない日本人だな」

「まじかよ、おい。ウエンツかよ、てめー」

「あの時、汐華と名乗っていれば調査する必要もなかったんだがな、とんだ無駄足を踏んじまったらしい。どうやらおれはずいぶんと警戒されちまったようだな。まあ、無理もねえが」

承太郎さんは目を細めて資料を見つめた。

「まさか日本にいたとは思わなかったぜ。11年探しても見つからねえと思ったら、まさか死んでるとはな」

「ジヨルノのおふくろさんのことも知ってるんすか？」

「ああ。汐華という日本人の女がジヨルノの母親なら話は別だ」

うなずいた承太郎さんは、資料を膝に置いた。その口ぶりからして、期待できるような人間じゃあなかったんだろうことだけは把握したオレは、いたたまれない気分になった。

「汐華初流乃はディオ・ブランドーの子供だ。もっとも、遺伝子上の父親はジョナサン・ジョースター、ジョセフ・ジョースターの祖父にあたる、とつくの昔に死んだはずの男だがな。つまり、ジヨルノは仗助、君の大叔父にあたるというわけだ」

突然投下された爆弾発言に、思わず舌を噛みそうになったのは言うまでもない。月までぶっ飛ぶ衝撃とはこのことをいうんだらう。デザイン・ベビー、もしくは試験管ベビーという言葉が浮かんだオレに承太郎さんが語ったのは、もっと壮絶なジョースター家とディオ・ブランドーという男の一世紀にも及ぶ因縁の対決だった。

終止符を打った男が目の前にいることを知らされたオレは、正直口を閉じることを忘れていた。

「ジョースター家は日本人の血が混じると、スタンドが人型になるらしいな」

皮肉めいた物言いは、うつすらと笑みが浮かんでいる。

「これは俺の仮説だが、ジョルノはジョナサン・ジョースターの身体がD I Oに馴染む前に誕生したことで、ジョースター家の影響が色濃くなったんじゃないかと考えてる。そうでなければ、D I Oがスタンドを使えるようになった直後にスタンドが使えるようになるはずだ。眷属を作って操るのは吸血鬼の力によく似てるが、その源は生命エネルギー、ジョナサン・ジョースターが得意とした波紋に通じるエネルギーだ。もしこんなスタンドだと気付いたら、D I Oが生かしておくわけがねえ。吸血鬼にとって波紋は天敵だ。もしくは使えろと判断して洗脳したはずだ。俺にとって、D I Oという男はそういう男だったはずだ。だから、正直あの男がどうしてジョルノを生かしたのか皆目見当がつかない。そして、D I Oを殺したのは俺だ。そのことに関して謝る気は一切ない。俺は間違ったことはしていないからな。だが、おそらくこの街にいる誰よりもD I Oという男を知っているせいで、俺はどうしてもジョルノを色眼鏡で見ってしまう。そこで聞きたいんだが、仗助、ジョルノはどういうやつだ？君の意見を聞かせてくれ」

第7話

一枚の写真がある。そこには見たことのない男の額がズームアップで納められていた。小さな楕円形のそれはまるで縦にした豆だった。

そのてっぺんから真っ赤な筋が根元まで伸びている。その筋はてっぺんからみると上下左右に均等に4つ走っていた。そして、根元の部分から針のように細長い突起物がでている。そして、その突起物を囲うように4本の触手がうごめいている様子が写真越しにみえた。

外国人の額に張り付いているそれは、根本から差し込まれた針が人間の脳を持続的に刺激し続けているようで、振動しているためかブレが生じている。生気のない男の無表情さと相まって怖気が走る、奇妙な光景である。まじまじと写真を見つめている僕の表情がだんだんこわばっていくのを見下ろす青年は、皮肉めいた笑みをたたえている。

「これが肉の芽だ、汐華初流乃」

「にくのめ？」

「文字通りD I Oの細胞が主成分の洗脳装置だからな。配下の人間を集めていたD I Oが個人的に信用できない部下に対して、裏切ることができないように埋め込んだシロモノってやつだ。いつでもD I Oが必要なきに対象の精神に干渉して、服従心を植え付けるものもある。栄養源は対象の脳みそだ。こいつを植え付けられた人間は数年で脳みそが食い尽くされて死んじまう」

なんだって、と僕は弾かれたように顔を上げた。知っている。僕は知っているのだ。僕はディオ・ブランドーという男のおぞましさを実際にこの目で目撃していたという事実には絶句するほかない。そこには気づいたかと鼻を鳴らす青年がいる。

僕はごくりとつばを飲み込んで、脳裏をよぎったおそろしい想像を振り払えないでいる。いや、でも、ともう顔さえ覚えていない母親の

面影を必死で捜しながら、僕は伝う汗をぬぐうことができなかつた。思い出せないから分からないのだ。

僕の母親には肉の芽が植え付けられていたのかどうか、風化してしまった記憶からはぼんやりとした輪郭しか分からない。もう彼女が死んでから12年の時が流れている。でも、彼女の不可解な死因は間違ひなく肉の芽によるものと合致した。数年、と青年は言った。

2、3年と青年は言った。彼女が死んだのはいつだった？僕が何歳の時だった？わすれもしない、僕が死にかけた1987年の12月ごろのはずだから僕が2歳の時だ。まさか、そんな、ありえるのか？動揺と困惑で写真を持つ手が震えているのを見て、青年は声を上げて笑った。

僕はそれによつて考えるのもおぞましい想像が事実であると確信せざるを得なくなる。写真を持つ手は生気を失つて真っ白になりつつあつた。血の気が引いているのだ。

「肉の芽には2つ種類があることがわかつてる。ひとつはお前が今見てるもの。もうひとつは、こいつだ」

差し出された写真は直視するにはあまりにも陰惨なものだった。はやくうけとれ、とずいとおぼろげに差し出されてしまうと受け取らざるを得なくなる。しびしび写真を受け取った僕はまじまじと見つめることができず、目を逸らした。子供が見ているものではないことは確かだった。

愕然としている僕を尻目に、青年は写真を収めている人間がいたという事実の方が絶句する案件だとせせら笑う。たしかにそうだ。どちらの写真も撮影者はおなじで、おなじ場所で撮影されていることがわかる。この撮影者は慈善団体の人間でないことはたしかであり、この被験者たちを助ける気は全くないことだけはわかつた。

どこまでも実験動物に対する興味しか写真からは伝わってこない。青年が入手したのは、肉の芽を研究する情報機関に潜んでいたDIOの信奉者を經由するというのだから驚きだ。空条さんの後ろ盾であ

るといふ、青年の情報が正しければSPW財団よりも先に独自のルートを開拓して様々な情報を入手したことになる。

仗助と同じぶどうヶ丘学園高等部に在籍しているのであろう。学生服の青年は、僕より少しだけ年上であるにもかかわらず。僕は慎重に言葉を選んでいった。なにせ青年に発現している群体型の近距離型スタンダードに完全包囲されていて、ろくに身動きが取れないのだ。

ハチの巣にされたら最後、仗助のように治癒能力がない僕は間違はなく死ぬだろう。危険極まりないスタンダードが発現した彼の境遇を垣間見た気がした。ちらりと僕は写真を見た。僕が渡された写真には、女性がうつっている。有害図書に指定されているであろう類の雑誌を連想させる女性だ。

しかも無修正版。でも思春期の子供にはおすすめで済めるものではない。なにせ、形容しづらいところに肉の芽が埋め込まれているのだ。あまりにも不快感をおおる写真である。持っていることすら嫌悪感を覚えた僕は、二つの写真をそのまま青年に突き返した。丁寧に揃えやがれと青年は几帳面に隅をそろえて受け取るとファイルに仕舞い込んだ。

「DIOの拠点には、たくさんの家畜がいたわけだ。すべてをささげる女が。実験には事欠かなかっただろうよ。スピアの身体を確保したかったのか、眷属を増やしたかったのか、今となっては分かんねえが、こうやってお前は生まれたわけだ、沙華初流乃」

「受胎って聖母の真似事でも気取ってたのか、あの人は」

「もつとも、ちゃんとこの世に生を受けることができたのは、お前が初めてのようながな。肉の芽つてのは脳みそを養分にしてるが、妊娠させるために用意されてる肉の芽はなかなかにえぐい養分の摂り方をしやがる。子供を産むまでに死んじまう女もたくさんいたようだ。この世に生を受ける時点でお前は選ばれた人間ってわけだ。あのDIOが肉の芽を植え付けずに母親と一緒に日本に返しやがったんだからな。どうだ、出生の秘密を聞いた感想は」

「ちがいますね、無関心あるいは気まぐれが妥当でしょう。いつまで

たつてもスタンドが発現しなかったから、母親と一緒に日本に送ったんだ。念写できるなら僕のスタンドはいつだって把握できたはずでしょう。吸血鬼である以上、僕のスタンドは無視できない。言いなりにならない上に脅威になるなら、生かしておく理由にはならないから、殺しに来たはずだ。あんたのいうジョースターの血統を危険視してたなら、僕は間違いなく殺されていたはずだ。肉の芽も埋め込まないで何を考えていたのかなんて、僕が聞きたいくらいですよ」

「生かしておく理由なんざ、お前が生き残っているという事実だけで十分だ」

「なんでですか？」

「肉の芽ってのはD I Oの細胞が主成分だと言っただろう？つまりお前は母親に直接D I Oの細胞を寄生させた状態で生まれてきたわけだ。普通に考えてD I Oの細胞が己の肉体と同化しちまってるって考えていい。そいつは普通じゃあねえ。なんでかわかるか？D I Oが死んだとき、こいつはどうなったと思う？」

「少なくとも、死んだってわけじゃあなさそうだ。それじゃああんたが僕を拉致する理由がない。復讐ってんなら、あの時僕はハチの巣にされていたはずだ。僕に利用価値があるとするとするなら、D I Oの息子であること以外にかんがえられない。そうだな、吸血鬼になるとか？おてんとうさまに顔向けできない体質になったなら、普通の人間である僕に憎悪を抱いても不思議じゃあない」

「おてんとうさまに顔向けできねえ体質ってんなら、大正解だ。だが、吸血鬼じゃあねえ。もつともつとおぞましい何かだ。ついてこい、汐華初流乃。みせてやるよ。そして、自分の幸運を噛み締めるんだな。お前の母親があと2か月死ぬのが遅かったら、きつとこうなってたんだってことを」

スタンドアップ、と群体型のスタンドに急かされて、僕は鈍い痛みを覚えながらふらふらと立ち上がった。スタンドを射られて生きていたのはお前が初めてだと青年は忌々しそうにつぶやいた。スタンドを発現させる矢を所持している青年は何のために社王町の人間を

スタンド使いにしているのかいまだに僕には分からない。

ただわかるのは、スタンド使いになれたのはほんの一部であろうことだけだ。青年曰く、スタンドの矢に射られる形でスタンドを発現するにはなんらかの適性がないと発現しないという。普通に考えて順風満帆の平凡な生活を送っている人間が矢にいられたところで、適性があるとはとてもおもえない。

きつとその結論に達するまで、この青年はたくさん人間をその矢で射ったはずだ。適性がなかった人間はそのスタンドの矢のエネルギーに耐え切れず死に至る。その死体の処分場はまだ高校から帰ってきていないらしい。それまで僕は生かされるだろう。

この男はとても几帳面で潔癖症だ。不必要に流された血で館を汚すのはお望みではないらしい。かつかつと革靴が響く。ぎい、と開かれた扉を見た僕は言葉を失った。

ぐちやぐちやにした粘土がうごめいている。ドアの音に反応して、崩れきっているゆがみから覗く瞳が僕たちを見上げる。かろうじて青年が変えてやっているよれよれの洋服で腕と胴体と足はわかるが、髪の毛はすっかりぐちやぐちやになった皮膚と同化してしまい、すっかりわからなくなっている。

青年が世話をしているようで、不潔でなく清潔な方だとおもうが、なおさら悲壮感をあおっていた。沈黙する僕に、よく目に焼き付けろと青年は言う。これがお前の父親のやったことであると見せつける。

きつとこうやることをずっと夢見ていたのだろう、僕が良心の呵責に苛まれて表情を暗くするのを確認しては、青年の表情はずいぶんと愉悦を帯びている。それでも、鎖に繋がれた吸血鬼の細胞と同化した不死身の怪物と化した父親の経緯を説明する青年は、込み上げるものがあるのか声が震えている。

表情を伺うことは出来なかった。僕たちの目の前で、奇声を上げながら青年の父親はガラクタ箱をひっくり返している。醜い面をしてやがるぜ、と自嘲気味に笑った青年は、父親がずたずたに引き裂かれた紙を必死でかき集めているのを見ると、イラつくらしい。

せつかく片づけた箱の中のを散らかすなど名前すら呼んでくれなくなつた生きている肉の塊に話しかけている。何度も言つただろうと呆れながら青年はしつけと称した暴力をふるつた。絶叫が響いている。

長男の暴力すらものともせず、発狂しながら父親は紙くずを集めようとしてはそのボコボコだらけの指先に零れ落ちていく紙くずを見て泣いている。やめろつていつてるだろうが、と青年はなおさら絶叫した。ぶよぶよの肉の中にめり込むような不快な音がした。

痛みを感じる気配はない。何をされたのかすら理解できていないようだ。僕の意識の海の中で泳いでいる水影がちらつく。養父の暴力の記憶がちらつく。さすがにいたたまれなくなつた僕は青年のところに向かつた。群体に包囲されているため、下手に動くことができないのがもどかしい。

抵抗したところで外に乗り捨てられている悲惨な状態の車になるのはごめんだつた。とりあえず青年の興味は父親から僕に戻つたよううで、肉の塊から右手が出てきた。

「こいつはよ、何をしても死なねーんだ。ガソリンをまいて火をつけたこともある。風呂に沈めたこともある。生き埋めにしたこともある。おれのスタンドでハチの巣にしたこともある。あいつのスタンドで削り切ろうとしたこともある。急所とよばれるところをいくら破壊したところで、あつという間に肉の塊に戻っちゃうんだ」

青年の悲痛な叫びが胸をえぐつた。

「汐華初流乃、おまえは特別な存在じゃあないんだろう？ じゃあ聞きたい。教えてくれよ。なんでこいつは、動くだけの肉塊にすぎないこんな化け物がおれの父親なんだ？ おまえとこいつでなにが違うんだ？ 母親の養分を糧にして寄生した肉の芽から受胎した、D I Oの遺伝子を直接注ぎ込まれたって意味では、細胞と同化しちまつたこいつより、お前の方がD I Oが死んじまつた時点で化け物になる確率は遙か

に高いじゃあねえか。実際、D I Oが死んじまったせいで、こいつみたいになつた赤ん坊が何人もいることは分かつてんだ。なんだつてお前は普通の人間なんだ。ふぎけんのもたいがいにしるよ。理不尽極まりねえだろう。お前が吸血鬼だったり、こいつが可愛いぐらいの化け物だったりしたら諦めもついたつてのによ、こんなことあっていいのかよ、ふぎけんじゃあねえぜ」

それでも、僕は冷徹に青年を見つめるのだ。彼はおしやべりがすぎる。しばらくつきあつていたけれど、いつまでたつても本筋が見えてこない。僕は大きいため息をついて肩をすくめた。

「だから何です。さつきから聞いてれば、僕にとつてどうしようもないことばかりじゃあないか。知つたこつちやないですよ、僕にとつてはね。なにせ僕は今のところ、あなたの話を聞いて同情することしか出来ないからだ。でもそれはあなたの望むことじゃあないはずだ。なにをしたらいんです？それがあなたの目的のはずでしょう？」

「頭のいいガキは嫌いだぜ」

「僕はあるの駒じゃあないからな」

青年はからつぽなガラク夕箱を抱えて泣きわめいている父親を見下ろした。

「おまえの力は吸血鬼の苦手とする波紋とよく似てる。もしかしたら、溶かせるんじゃないか」

「生きているやつ対象に生命エネルギーを注ぎ込んだことはないから、どうなるかなんてわからない」

「ならやってみろ。今度こそその綺麗な顔をハチの巣にすんぞ、てめえ」

僕はしぶしぶ青年の父親のところに向かった。見慣れない少年に気付いたのか、驚いたように僕を見上げている父親の手を取り、僕は

いぼだらけの手に生命エネルギーを注ぎ込んだ。さきほどまで大暴れしていた父親が嘘みたいに大人しくなる。

ぎよつとして見つめると、いや、大人しくなったわけじゃあない。口がうごく速度が極端に遅いのだ。動きが鈍いのだ。僕を払いのけようとしてもその動作があまりにゆっくりなので、力が全く入っていないことが分かる。まるでスローモーションの映像を見るみたいだった。

青年の父親は僕の力をあからさまに嫌がって見せた。でも、全く変化はない。ただ生きている人間に生命エネルギーを注ぎ込むと動きがゆっくりになるようだった。青年は舌打ちをする。

「汐華初流乃、お前、生命を生み出せるスタンドだったな」

「ええ、そうですね」

「人間をつくることはできるのか」

僕は言葉に詰まってしまった。

去年の10月から脱獄して行方不明だった死刑囚、片桐安十郎が逮捕されたというニュースが日本中を駆け巡ってから一夜明けた今日、あつという間に世間は大騒ぎになった。下校途中に駅前で号外が配られたところに遭遇したから、いやでも大ニュースは僕の耳にも入ってきた。

すべての放送局が予定していた番組編成を大幅改変して、日本犯罪史上最悪の犯罪者といわれている死刑囚の逮捕劇を特集する番組が組まれていて、どこにかえても同じような内容が垂れ流された。新聞の三面記事はもちろん、雑誌もこぞって特集を取り上げるほどの出来事だから当たり前だ。

季節外れの朝の朝礼という名前の全校集会が開かれて、マスコミには興味本位で証言をしないようにと釘を刺されたのは、もちろん片桐安十郎が我らが社王町で逮捕されたからに他ならない。なんでもぶどうヶ丘学園の敷地内に侵入しようとしたところを目撃した警備員がいたというんだから、証言を得ようとしてマスコミが押しかけるのは無理もないことだった。

母校でもないのになんだって標的にしようとしたのか、僕はしらないけど、片桐安十郎の犯罪歴を見てると予想できるというやつだ。

誘拐を企てて失敗したイタリア人の死刑囚の男を殺害し、サンマーのコンビニ強盗を教唆したあげく、仗助君の住んでる住宅街の男性を恐らく目撃者になったためにブルドックと共に殺害した容疑がかかっているらしい。これでもわかっている事件であり、目撃者や物的証拠があつて立件できるものに限られる。

余罪を厳しく追及されると身柄を確保されてるS市の警察署前のレポーターは忙しそうに原稿を読んでいたっけ、と朝のニュースを思い出す。承太郎さんが言つてたアンジェロに気を付けろつてのは、こういうことだったのか、つて今さらながらに僕は気付いた。

今日は放課後のHRが終わつたらさっさと帰れと担任の先生から言われたのは、きつとマスコミの対応に追われている先生たちの都合上仕方のないことなんだろう。ぶどうヶ丘学園高等部の門を陣取っている報道陣から逃げるように僕は下校する。

フラッシュがたかれる中、急いで通学路に向かった僕は、アナウンサーらしきひとたちのギラギラした視線から逃げるようにその場を後にした。いつもは少ない通学路もぶどうヶ丘学園のマンモス校から一斉に生徒たちが下校するものだから、どこをみても僕と同じ制服を着た生徒たちばかりが目に入る。

これは電車通学やバス通学の人たちは大変そうだ。僕はマウンテンバイクだから関係ないけど。すいすいと黒山の人だかりを縫うように走り抜けながら、僕はいつもの通学路を抜けていった。しばらく

道なりに進むと、見覚えのあるリーゼント姿の学ランが見えた。僕はマウンテンバイクを飛ばしてその後ろ姿に一気に追いついた。

「あれッ、仗助君!!」

「おう、康一か」

おーっす、と笑顔で返してくれた仗助君が止ってくれたので、僕はマウンテンバイクから降りてそのまま押して歩くことにした。

「なんか久しぶりだねッ！今までなにしてたのさ、全然学校来ないから心配してたんだよ?」

「それがよおー、学校どころじゃあなかったんだ。昨日、やあつと片付いたんだよなあ」

「ふーん、そうなんだ。あ、それってもしかして、アンジエロのことだったりする? 承太郎さんが気を付けろって言ってたじゃあないか」
「(そーいやあ康一もあんどき聞いてたの忘れてたぜ。つーかオレんちの家庭事情もばれてんだっけかあ。どうすっかなあ。でも康一はスタンド使いじゃあねえし、仕方ねえ。嘘つくのは苦手なだけだよお)」

「?」

仗助君ははああと大きくため息をついて、肩を落とした。あれ? 違うのかな?

「康一はあん時いたからオレん家のややこしいこと知ってると思うけどよオ、承太郎さんはジョースターさんの代理人として来てんだ。おれんちに案内するっつーわけにもいかねえから、いつにしようかって相談をホテルでしてたんだよ。そしたらさ、おふくろがきやがった」
「えっ、仗助君のお母さんが?」

「空条承太郎さんはいますかってフロントのおねーさんに取次ぎたのみやがってよお、電話が来た時はまじヤバかった。まじでヤバかった。帰りにえって思ったのはあんどきが初めてだぜっ。なんだって承太郎さんのことがばれちゃったのか、オレはよく知らねーんだけど

よ、ドーも爺ちゃんが一枚かんでる気がすんだよなあ」

「……………大変だったんだね」

「結局、そのあと大騒ぎだったんだ。アンジエロのせいですっかり流されちゃったけど、社王グランドホテルのスプリンクラーがぶっ壊れて部屋中びしょ濡れになっちゃもうし、パニック状態になった人たちに巻き込まれてお袋が倒れちゃうし。脳溢血寸前だったから入院することになっちゃもうしよつ。なんでまだギリ30だったのに脳卒中になるんだか。興奮しすぎて頭に血が上っちゃまったってけらけらしてんよ。しかたねーから昨日は一日お袋のわがままに付き合うついでにお見舞い行ってきたんだ」

「ホントに大変だったんだね。お疲れ様」

「ホントの修羅場はこれからなんだぜ？お袋が退院したら、爺ちゃんが承太郎さんを家に呼べていいやがったからよお。笑ってるくせに目が全然笑ってなかった。ありやあ思い出すだけでブルっちまう。あーもー、オレが何をしたってんだ！いろんなことが起こり過ぎだろ、ちつくしよう」

仗助君は、事後報告になってしまった無断欠席について、家庭の事情という恩赦はあったものの、ペナルティである課題が大量に課されてしまったことを嘆いている。高校に入学してから一日の授業数が増えたせいで、2, 3日休んでしまうとその分遅れてしまうのは仕方ないよ、カバーしてあげようっていう先生の好意だから頑張らないと。

そんな好意うれしくねえよと仗助君はがっくりしている。苦笑いした僕は、仗助君を慰めた。提出期限を考えると結構厳しいものがあるらしい。勉強は得意じゃないと仗助君の表情は暗い。

手伝ってあげたいけど僕も塾の課題が残ってるしなあ、とつぶやいた僕に、なんだって学校から帰ってから勉強しなくっちゃあいけないんだと仗助君は信じられないという顔をして驚いている。

一応ぶどうヶ丘学園は進学校なんだけどなあ、きつと仗助君は中等

部で思いっきり頑張った代わりに高等部に入った途端燃え尽きたタイプなんだろうなあと思って思った。マウンテンバイクを押しながら、僕たちはまばらになり始めた通学路をいく。

いつもと違った時間帯に歩く通学路はなんだか変な感じだ。月曜日でもないのに早く帰れるのは違和感がある。でも早く帰れるんだから全然問題は無いはずだ。まだまだ高い太陽のもと、夕暮れには程遠い社王町は明るい。

「ところでさあ、あの承太郎さんはどーしたの？部屋が水浸しになっちゃったんだろ？」

「ホテルのスタッフが土下座してたっけなあ。なんかワンランク上の部屋に、今までの宿泊料金で泊まれるらしーぜ」

「社王グランドホテルって高級ホテルじゃなかったっけ」
「オレはよく知らねーんだけどよ、あの人はオレン家のことが終わっても泊まるつもりらしーぜ。宿泊料金は一括で前払いしてるらしい。なんでも、いろいろ調べることができたからってな、朝から忙しそうだぜ」

「ふーん、そうなんだ」

からからから、とマウンテンバイクを回しながら、僕たちは仗助君の家がある定禅寺通りをまっすぐ進んでいった。いつもならこの並木道をまっすぐにいけば仗助君の家がみえてくるんだけど、相変わらず現場保存に努めている警察が出入りする物々しい雰囲気の黄色いテープが見えた。

ブルドックを連れとおじさんが片桐安十郎の犠牲者になったことで、このあたりの住宅地の憩いの場であるはずの噴水広場は立ち入り禁止になっている。おかげで中央に位置する広場を突っ切ることができないので、遠回りしていつもは通らない道に曲がらなければいけなかった。

報道陣の車がたくさん路上駐車しているのがみえる。テレビで見

たことがあるマイク片手の男性や女性がカメラに向かって実況をしているのが見える。さすがに堂々と映り込みをねらいにくく勇気はないので、僕たちは素直に彼らに気付かれないように足早にその場を去った。どういうわけかマスコミ関係者はぶどうヶ丘学園にご熱心だ。僕たちに気付いたら報道陣が殺到してしまう。

なぜか中等部の男子生徒と間違われて声を掛けられたこともあったという嫌な出来事を思い出してしまった僕は、それだけはごめんだと足を速める。失礼な話だ。

そりゃあ180センチの仗助君と比べたら、僕はとっても小さいだろうけどさ、失礼にもほどがあるんじゃない？勝手に間違われたのに、勝手にがっかりされて期待外れっていう顔をされるのが一番むかつくと思うんだ。中等部と高等部は校章のデザインが違うんだからそれくらい調べてからくればいい。

そもそも同じ敷地内にあるとはいえ、入り口が同じだけで立地場所は全然ちがうんだから僕が歩いてきた道の先の校舎を見れば高等部だって分かるだろうって話だ。それにしても社王町には中学校も高校も他にたくさんあるのになんでぶどうヶ丘学園はこうも人気なんだろう、とつぶやいた僕に、仗助君は何故か気まずそうに目を逸らした。

がしがしともみあげを掻いている仗助君に疑問符を浮かべつつ、僕はいつもは通らない道の先に、大きな屋敷をみつけた。よほど前の家主がお金持ちだったのか、成金趣味の人間だったのだろう、権威を象徴するように日本の閑静な住宅街に突然豪邸があらわれた。

「そう言えば仗助君、たしかこの家って4年くらい前からズウーツと空き家だよな」

「ああ、こう荒れちゃあ売れる訳ねーぜ、ぶっ壊して立て直さなきゃあな」

立ち入り禁止の看板の向こう側に人影を見た気がして僕は目をこ

すった。もう一度見ると蠟燭が揺らめいて、こちらを窺っていたような気がした人影はもうそこにはいない。外側から木製の板であらゆる窓が打ち付けられ、整備する庭師が不在の庭園から発生した蔦が洋館をすっかり覆い尽くしてしまっている。雑草だらけの空き家だ。どうした？と仗助君が首をかしげる。

「いや、誰か引越してきたんじゃない？さつき蠟燭もった人がこっちを見てたよ？」

「そんなはずはないけどなあ、オレンちあそこだろ？引越してきたつツーンなら、すぐにわかるぜ？それにホームレス対策で不動産屋がしょっちゅう見回ってるのよ」

「いわれてみれば南京錠がおりてる。おかしいなあ。ひよつとして幽霊でもみたのかなあ、僕」

「おいおい、変なこと言うなよおー、幽霊は怖いぜ？オレンちのまえだしよオ、こんな真昼間から見えてたまるかってんだ」

よつぽど幽霊屋敷が嫌なのか、近付きたくないのか、なあ、早く帰ろうぜ、と一刻も早く離れたいのか仗助君はあんまり乗り気じゃあない。でかい凶体をして意外と小心者な仗助君がおかしくて、僕は逆に乗り気になってしまった。

だってなんだかおかしい。けたけた笑う僕を見て、馬鹿にされていると直感したらしい仗助君は、ちよつとムツとした様子でおい康一つて睨んできた。僕は気付かないふりをする。

南京錠が降りている鉄格子の向こう側は雑草だらけでよく見えな。仗助君よりも高い塀に覆われている洋館は、きつと夜には肝試しに最適な雰囲気たつぷりの不気味な屋敷に早変わりするだろう。

今でさえ結構薄暗いし。不動産屋が出入りするなら見つかったら怒られるけど、ちよつとだけ見るくらいなら怒られないんじゃないかなって僕は鉄格子の向こうをよく見ようと目を凝らす。よく見れば南京錠は壊されていて簡単に開いてしまった。

おいおいまじかよ、マジで行くのかあ？と仗助君は冷や汗をかいていた。仗助君のおじいさんは警察官だ。不良の格好をしてるとはいえ、素行は結構厳しいんだろう、不良とケンカになったことがばれてしばかれたってぼやいていたことを思い出す。ちよつとだけだよって僕は鉄格子を押しした。

ぎいいいい、と悲鳴のような甲高い音が上がる。僕たちはびくつとして辺りを見渡した。よかった、ただの鉄の音だった。ほつとして視界が広がった雑草だらけの入り口を覗き込んだ僕たちは、不自然にへこんだ雑草を見つけた。僕たちは顔を見合わせた。

ぺちゃんこになっていいる丈のある雑草たちが延々と続いている。2つ、いや4つ？これはタイヤの跡だった。さすがに不審に思った僕たちは、屋敷に足を踏み入れた。

しばらくその車跡を追っていくと、突き当りの壁でべっこべこに潰れている車を発見した。ごくりと僕はつばを飲み込んだ。車のナンバーがあるし、さびてない普通の自家用車だ。それなのにそこだけまるで治安の悪い過激派のテロ集団の配下にある街のように、暴動の跡が色濃く残る映像が脳裏をよぎる。

銃や爆弾なんかを使わないとここまで破壊されないだろう車体。ガラスは砕け散り、すっかりしぼんでしまったエアバックがある。むりやり何かを引きずりおろして屋敷に引きずったのか、泥が玄関まで続いていた。これはあきらかにおかしい。

ヤバいと本能がつけている。犯罪の匂いしかない。心臓の音がうるさい。脈打つ速度が明らかに早くなってきた。僕はどうする？と仗助君に声を掛けようとして振り返ると、その車体ナンバーを見て絶句している仗助君がいた。その表情はだんだん険しくなる。ひきつっていくのがわかった。

「仗助君？」

「まじかよ、やべえだろ、なんでこんなとこにあんだよ、この車がつ」

「どうしたんだよ、仗助君。もしかして、仗助君の知り合いの車？」

「ああ、そうだけ。昨日から行方不明になつてた車だっ」

「つてことは盗難車?!でもみつかつてよかつたじゃない。べっこべこだけど」

「車なんざどーでもいいんだよ、康一。問題はその中身だ」

「中身？」

「この車を盗みやがったやつ目的は、車に乗つてたやつなんだ。てつきりどつかに隠れてるとばかりおもつたのによお、オレたちのこと頼らねえからそうなるんだよ、馬鹿野郎」

「仗助君、話が全然見えないんだけど、その、もしかしてあの車が盗まれた時誰か乗つてたの？」

「ああ、乗つてたぜ。オレのダチがな！」

「ええええっ!?!ど、どうするの、仗助君!そ、そうだ、警察!あそこの広場の警察にこのこと知らせた方がいいんじゃない？」

「そうだな、ここに誰かいるのは間違いねえみたいだし、気付かれねえうちに急ごうぜっ!」

「うん!」

一目散に駆け出した僕たちは、がああああん、と鉄格子を乱暴に蹴り上げて閉じてしまった轟音を聞いた。ぎよっとして立ち止まると、僕たちと同じぶどうヶ丘学園高等部の学ランを着ている人相の悪い少年が僕たちの前に立ちふさがった。

「ひとの家をのぞくだけじゃあ飽き足らず、勝手に忍び込むなんざ一番やっちゃあいけないことなんだぜ、くそガキい。おいー、いきなり何してんだ、てめえらあ。学校から帰ってみりやはずけと入つてきやがつてよオ、殺されても文句いえねえよなあ?」

「いかれてんのか?さっさとどけよ」

「こ、ころっ!?!じゃあやっぱり仗助君のトモダチを拉致つたのはっ」

「ああ、間違いねーなあ」

「おいおい、なにごちやごちやいつてんだあ?この家はオレのオヤジ

が買った家だ。妙な詮索はするもんじやあねえぜ、2度とな」

「んなことは聞いてねえつすよ。しらばつくれてもオレたちはもう見たんだからなあ、無駄だぜえ」

「おいおい、人んちのまえで、しかも初対面の人間に向かっててめーたあ、いい度胸してんじやあねえか。口の聞き方しらねえのか？さすがは不法侵入者だなあ、おいしい？」

「ごきごきと骨を鳴らしながら、心底ブチ切れている少年は僕たちをここから出す気はないらしい。減らず口を黙らす方法は知ってるがねと吐き捨てた仗助君は、一気に畳み掛けた。僕はさっぱり見えないけれど、仗助君はスタンドという超能力が使えるから心強い。

ただの腕つぶしが強い不良くらいなら一発KOだ。僕は今のうちに急げって右手で合図してくれた仗助君に頷いて、急いで少年の脇を通り過ぎた。待ちやがれと言われて待つ奴なんかいない。そして、ぎぎぎぎ、と重い鉄格子の扉をひく。

そのことに一生懸命になっていた僕は、仗助君の奇襲を突然ゆがんだ空間によって瞬間移動した少年によって不発に終わったことに気付かなかった。そして。

「康一っ！」

鈍い痛みが背中を焼いた。ざくつと皮膚を貫通して、肉を裂き、挟まれる音がする。悶絶する僕は視界が真っ白になる。悲痛な仗助君の叫び声が遠ざかる。どういうわけか、驚いた様子で僕を射抜いた窓の人物に理由を問う少年の音がする。僕はそのまま意識を失った。

第8話

「いち、康一、しつかりしろよ、康一！」

がくがくと揺さぶられて目を覚ました僕を心配そうに仗助君が覗き込んでいる。ぼんやりとした痛みは残っているけれど、反射的に手を当てたところにはすつかり傷はなくなっている。それでも、垂れ流された流血のあとはぼんやりとした湿り気として残っていた。

学ランだからわからないだろうけど、掌にはかすれた赤がこびり付く。どうやら仗助君がスタンドっていう超能力で僕の傷を治してくれたらしかった。きよろきよろとあたりを見渡すと知らない天井が広がっている。貧血なのか、気絶していたからか、ちよつとふらつきながら体を起こした僕に、ほつとした様子で仗助君は安どのため息をついた。

「よお、グレートに危なかったなあ、康一。気が付いてくれてうれしいぜ。ところでよお、指は何本に見える？」

「え？あ、えと、5本？」

「そうだ、5本だけ。大丈夫そうだな、たてつか？」

「う、うん。あれ、僕、たしか入り口のところで矢を刺されたんじゃあなかったっけ」

「あんときのやつべえ状況から、思いつきり悪化しちまったのよ。今はその屋敷ン中だけ、康一。さっさとトンずらしてえとこだが、逃がしてくれっかなあ、億泰の兄貴は」

いつてえなあ、くそ、と仗助君はぼやいた。億泰君はたしか僕たちの前に立ち塞がった少年に命令していた屋敷の住人が叫んでいた名前のはずだ。仗助君の言葉から察するにお兄さんだったようだ。

なんだって僕たちはここにいるんだろう、と仗助君を見上げて、仗助君はわけわかんねえと思うけどオレから離れるなよと教えてく

れない。痛みをこらえるように傷を庇う仗助君の腕から、ぽたぽたと血が滴っていることに気付いた僕は、ようやく仗助君が僕を助けるために一戦交えたことを悟った。

なんてことだ、僕が好奇心から屋敷に近付いたりしたばっかりに。後悔が顔にでてたらしい。ごめんよ、と謝った僕に、仗助君はなつきけねえ顔すんなよ、男だろと笑った。さつきからあたりをしきりに気にしている仗助君は、懐からライターを取り出した。そして、しゅぽ、と点火する。

あたりが煌々と明るくなった。ネズミでもいるのか、さつきから物音がする。僕は身を固くした。仗助君はもう位置がわかっていられしく、まっすぐに手をかかげる。古ぼけた屋敷のすすけた壁を何かが通り過ぎて行つた。さがつてる、といわれて僕は邪魔にならないよう距離を取る。仗助君の背後から、突然何かが出現した。

「うわあっ!?!」

思わず声を上げてしまった僕に、ぎよつとした様子で仗助君とその何かが振り返る。僕はますます驚いて飛びのいてしまった。拍子につまづいて転んでしまう。いたたた、と僕は尻餅をついた。大丈夫か康一?と仗助君が聞いてくる。なにかあつたのかと心配してくるのはありがたいんだけど、仗助君が近付いてくるとそいつも僕を見ってくるからちよつと怖い。

仗助君の傍らで戦闘体勢を崩さないままあたりを警戒している人型の半透明な幽霊みたいなそれは、僕を不思議そうに見下ろしている。なんとも奇妙な幽霊だった。人型だ。身体の至る所にハートマークがあしらわれていて、あごに数本のパイプが刺さっている。

強烈な色をしているから、目がちかちかした。僕の視線が仗助君じゃあなくて、隣にいるやつだと気付いた仗助君は驚いた顔をして僕を見下ろした。手を差し伸べられて、僕はおそろおそろ立ち上がった。

「もしかして、こいつが見えてんのか？康一」

「う、うん、みえるよ。いきなり仗助君から現れたから驚いたんだ」

「なんてこった、今まで見えてなかったのにいきなり見えるようになったのか！」

「あの、もしかして、それが承太郎さんのいつてたスタンドつてやつ？」

「ああ、そうだぜ、康一。こいつがスタンド。stand by me そばにいるモノっツ―意味があるらしいぜ」

「つてことは承太郎さんにもあるの？」

「っつーかよお、虹村兄弟も使えるみてーだぜ。見えるんなら話ははえーや、もし怪しい影があったら教えてくれ。見えねえやつを守んなきゃいけねえつてのは面倒だからよー！」

わかったよ、と頷いたものの、突然見えるようになった理由がさっぱりわからない僕は疑問符をうかべるしかない。スタンドという言葉自体は承太郎さんと仗助君が初めて会ったところに遭遇したときに、耳にしたから知ってはいたけれど、僕は今までみたことがなかった。

仗助君たちがスタンドで殴りあいをしたときも、はたから見ると承太郎さんの帽子に一瞬で亀裂が入ったり、ロゴやデザインそのものがゆがんでしまったりする超常現象がおきていた。それに突然承太郎さんが瞬間移動したり、凄まじい勢いで承太郎さんと仗助君が殴りあいをしているようにしかみえなかった。

今までとの違いは僕があのだ矢で射られたかどうかだけだと思う。もしかして、僕もスタンドつていう超能力が使えるようになったらいいのか、という淡い期待がよぎって、僕はあわてて打ち消した。今はそれどころじゃあない。

仗助君の誘拐された友達を助けるのと、ここからなんとか逃げ出すことが先じゃあないか。何を考えてるんだ、僕は。情けない妄想に駆られている間にも、仗助君は必死で闇の向こうに潜んでいる何かを捜している。僕もそろりそろりと階段に急ぎながら、追っ手の気配に神

経をとがらせることにした。かすかな音が耳を掠める。

「仗助君っ、あそこに何かいるよっ！」

「なんだかすばしっこい奴がいるみたいだな。あんだけちっちゃいやつなら、オレのスタンドで一発だぜ」

隠れてろ、と階段に押し込まれた僕は、転がるように踊り場まで降りていく。仗助君がスタンドを出現させて、ライターの火であぶりだされた小さな追っ手めがけて攻撃を仕掛けた。天井に潜んでいたそいつは、迷彩柄の服を着た重装備の軍人だった。

人形サイズの拳銃を構えたかと思うと、スコープをのぞいて僕たちめがけて発砲してくる。サイズこそ小さいものの、思いのほか威力があつて、ぶれた銃痕が床を焦げ付かせる。影が蠢いていることに気付いた僕たちは青ざめた。一体じゃなかった。

たくさんいるのだ。たくさんライフルを持っている！そして仗助君の持つている唯一の光源めがけて一斉に発砲してきたではないか。仗助君！と声を荒げた僕に気付いてくれた仗助君のスタンドは、あいつらよりもずっとスピードが速かった。仗助君からもぎ取ったライターが宙を舞う。

一瞬でハチの巣になったライターが消し炭になった。流れ弾がこつちにまで飛んでくる。僕たちはあわてて下に降りた。

「おいおいおい、あんなのありかよっ?! スタンドつてのは一人に一体じゃあないのか?! ありやあ反則だぜ！これが億泰の兄貴のスタンドなのか?! G・I ジョー人形みたいな兵隊しやがって！しかもM16のカービン・ライフル?! マジモンのライフルなんか使ってるじゃあねーぞ、どんだけアブねえスタンド使いなんだよおっ！」

どういう精神構造してんだ、こいつつと仗助君はまくしたてながら僕に急げ急げと急かしてくる。転がるように階段を駆け下りながら、仗助君のスタンドは僕たちに危害が及ばないようにと片っ端から小

人サイズの重戦車を薙ぎはらう。

それでも、飛び道具を扱うスタンドに仗助君の近距離でしか攻撃できないスタンドは相性が悪いようで、どうしても防ぎきれずにスタンドが被弾する。ダメージが返ってきてるようで、仗助君の身体が次第に傷だらけになっていく。仗助君のスタンドは自分を直すことは出来ないはずだ。

どうしよう、このままじゃあ仗助君が死んでしまう！僕は歯がゆさをにじませながら、必死で逃げ場所を捜した。窓を蹴破って逃げようと思つたら、無数のヘリが待ち構えていた。その先には戦車。まるで誘導されてるみたいだった。けど、それしか逃げ場がない。

僕たちはじわじわと追い詰められていった。足を止めたら、下半身が吹っ飛ばされる威力の銃撃が僕たちを襲うのは目に見えている。破壊されていく二階。瓦礫だらけのハチの巣という惨状、たちあがる砂埃を掻い潜りながら、僕たちはどんどん部屋の奥へを進んでいった。

そこには虹村形兆という少年が待っていた。バッド・カンパニーという極悪部隊を率いる司令官は、容赦なく僕たちを追い詰める。この屋敷に立ち入ったものは誰であろうと生かして返さないという冷酷な指令を突き付けて、鉄壁の守りをもつ幾何学模様の行進が僕たちに迫りくる。

仗助君のスタンドが何人も破壊したはずなのに、本体である彼には全くダメージが無いらしい。グレートな能力だなおいと仗助君は舌打ちした。スタンドがみえる僕にきづいた彼は、僕がスタンド能力に目覚めていることに驚きこそしたものの、能力を見せて気にいったら生かしてやると挑発してきた。

なにかの能力を捜しているという彼は、仗助君のスタンドの弱点である射程距離を指摘して、一定の距離を保って僕たちのところには近寄ってこない。でも、完全に包囲されている。仗助君は気丈にふるまっているけれど、その体がぼろぼろなことは僕が一番よく知っている。

僕を庇っているせいだとしっている。挑発になんか乗るんじやあねえぞ、と仗助君は僕を庇うように立ち塞がってくれるけれど、彼は仗助君の能力がお気に召すものではないらしく眼中にないのか容赦なく威嚇発砲をかましてくる。弾き飛ばした弾丸がそれで窓ガラスが割れた。

それでもなおやめようとしないう仗助君にイラついたらしい彼は、僕の目の前で仗助君目掛けてすべての軍隊に一斉砲撃を命じた。やめろおーつと僕は声を上げた。僕の中から何かが爆発する感覚が生まれる。何かが生まれた気がした。ごとん、ごろごろごろと、と僕たちの前に白い煙を上げている卵が転がった。

「な、なんだ……たまご?」

「へ?」

「ありがとよつ、康一!よくわかんねえが助かったぜつ!」

仗助君のスタンドが僕から生み出された大きな卵を投げてよこす。一斉砲撃を受けてひびが入ってしまったとはいえ、まったく傷ついていないそいつは僕の腕の中に納まった。どうやらこいつのおかげで仗助君は九死に一生を得たらしい。

僕の腕の中でひび割れた穴の向こう側で何かがうごめいているのを感じて、僕は息を飲んだ。卵はまったく動かない。仗助君のスタンドやバッドカンパニーみたいな人型ではないから、どんな能力を持っているのか僕はさっぱりわからなかった。

おそろおそろ彼を見ると、食い入るように僕の卵のスタンドを見つめている。僕はタマゴを守る親鳥のようにそいつを抱きしめたまま後ろに引き下がった。攻撃が通用しない頑丈すぎる卵を前に、バッドカンパニーは警戒体制のまま沈黙を保っている。仗助君はスタンド使いはスタンド能力を把握するまでが大変だから気にするなと笑った。

「これで終わりだよ。期待してもらって悪いけど、これ以上は僕だつ

て分からないんだから」

僕は彼を見上げた。仗助君がゆらりと立ち上がる。そして不敵に笑った。

「康一に拾ってもらった命だ、易々とくれてやるわけにはいかねーぜえ。億泰の兄貴よお、この家ぶつ壊すくらい派手におっぱじめてもいいんなら、受けて立つつすよお？」

危ないから康一は絶対にそこから動くなよと仗助君は言った。そこからは僕は全く感知できない戦いが繰り広げられていた。耳をつんざく轟音、爆音、銃声、戦争映画ですらお目にかかれない凄まじい攻撃の集中砲火が仗助君に襲い掛かった。

ただでさえ満身創痍の仗助君の脚を集中攻撃する部隊。ガードしようとした腕を吹き飛ばそうとする無数の敵意。そして、仗助君の脳天を吹っ飛ばすと予告した彼の言うとおおり、バッドカンパニーの猛攻が続く。完璧な作戦だった。

大切なトモダチを誘拐された挙句、僕たちまで危険にさらされた。これは後から聞いたことだけど、その友達を誘拐するためにたくさんの人が犠牲になった。しかも父親のいない仗助君にとつて大切な家族であるお母さんまで犠牲になりかけた。積み重ねられた激情のくすぶり。

それがここで大爆発を起こした仗助君がいる時点で、遂行が不可能だったという点に目を瞑ればの話だけれど。

仗助君のスタンドは凄まじいラッシュですべての猛攻をしのぎ切ったのだ。すごい、と言葉さえ憚られるような気迫があった。まるでモーゼの海渡りのようだった。バッドカンパニーの軍勢が仗助君のスタンドによって弾き返されて破壊され、形状が記憶合金のように戻って軌道を変える。まるでビデオの逆再生のようだった。

弾丸は銃の中で爆発した風を軌道に発射されるものだから、どうし

ても発射される前にどこかが欠ける。仗助君の能力を受けた弾丸は元に戻ろうとして、元にあつた場所に吸い寄せられるように飛んでいく。

本来発射されるべき銃口にそれらがそっくりそのまま吸い寄せられたらどうなるか。しかも速度は保つたまま。バッドカンパニーたちの悲痛な悲鳴が響き渡った。奇妙な集中砲火の花火が巻き散る。

そうはさせるか、と彼は仗助君の機動力を奪うために足を狙った。仗助君のスタンドはその腕力が最大の武器だ。どうしても目線よりはるか下方からの攻撃は注意が散漫になる。うぐ、と仗助君は片膝をついた。

あわてて駆け寄ろうとした僕は、来るんじゃないやあねえぞ、と先を制されてしまい歩みを止める。仗助君はにいと笑った。ぼたぼたぼたと仗助君の腕から抉られたへこみが見えてしまい、僕は見ていられなかった。それでも、来るな康一と怒気を当てられてしまう。

仗助君のスタンドも一気に精度が鈍くなる。やっぱりスタンドは本体である仗助君が満身創痍なせいで上手く能力が発揮できなくなってきたのだ。このままじゃあ仗助君が死んでしまう！僕は一向に沈黙を守っているスタンドの卵にイラついて、そのままぶつけてしまふかと振りかぶった、その時だった。

無情にもバッドカンパニーのミサイル、砲弾、射撃の一斉攻撃が敢行される。だめだ、間に合わない！卵を投げつける暴挙に出ようとした僕は、力任せに投げつけた。仗助君は笑った。

「忘れたのかい、億泰の兄貴よお。オレのスタンドは破壊したもんを直せるんだぜえ？」

仗助君自身の腕にスタンドが貫通する。それによって生じた傷は蘇生しないまま、一気に仗助君が苦痛にゆがむ。そのかわり、吐き出されたのはさつき動きを封じるために打ち込まれたミニマムのミサイル。粉碎された破片がすべて蘇生される。

そして、渾身の力を込めてぶんなぐられたそれは、一気に形状を元に戻し、かつてたどった軌道に戻る。発射される瞬間に置き忘れた欠片とひとつになるために、発射された記憶を頼りに逆再生となったミサイルは凄まじい勢いで彼のところに飛んでいった。

勝利を確信していた彼の慢心さ故の敗北だった。調子に乗って前に歩んでいたからだ。仗助君が口笛を吹く。

「几帳面な割に忘れっぽいなら、メモツとけよなあー。おめー、そのミサイルどつからうつたか覚えてるか？今、おめーが立つてるところにいたアパッチだろうがよおー！」

どごおん、と凄まじい爆音が響く。直撃は免れたものの、超至近距離からの爆風に吹っ飛ばされた彼ははるか遠方に弾き飛ばされる。僕たちは今の隙を狙ってあわててその場を後にした。

「康一、早いところそのスタンドひっこめろよっ！もし億泰に見つかったら、ガオンってされちまったらおめー死んじまうぜっ！」

「ひっこめる？ひっこめるってどうやるの？」

「どうって、その、あれだ、気合で何とかしろよおっ！」

「そんなむちゃくちゃなっ！」

とつても大きなスタンドの卵を抱えながら、僕は必死で仗助君たちと共に後を追った。さいわいバッドカンパニーは本体である彼が気絶したおかげで忽然と姿を消している。今がチャンスだった。

早い所この屋敷からおさらばしたいところだけれど、虹村兄弟の危険性を身を以て体験した今となつては、誘拐されてどこかに監禁されてると思われる仗助君のトモダチのことが心配だ。それに僕を射つたスタンドを発現させる矢も気になる。

どっかに隠されてしまったみたいだから、捜さないといけない。仗助君は血相が悪い。血を流しすぎちまったかなあと冷や汗を浮かべながら、仗助君は虹村兄弟には父親がいるということは今思い出した

らしくて青ざめていた。

家族の誰かがスタンド使いになると、適性がある人間は自然とスタンド使いになるみたいだから父親がスタンド使いの可能性が固い。虹村兄弟のスタンドを説明してくれる仗助君から察するに、よっぽど凶悪な能力を持つてるにちがいない。

僕たちは虹村兄弟の父親に会わないことを祈りながら、まだ足を踏み入れていない三階に足を進めた。

そして僕たちは、屋根裏部屋にて、バッドカンパニーに監禁されていたジオルノ君を発見することになる。突然消えた監視役の兵隊たちに戸惑いながら、ふらつく足取りで逃走を試みていた彼と鉢合わせしたのである。

憔悴しきった顔で僕たちを見たジオルノ君は、まるで美術室に飾つてある石像のようだった。血の気が失せていて、今にもぶっ倒れそうな位疲労困憊している様子がうかがえる。身体を引きずりながらもりやり歩いてきたらしく、安心したせいで緊張感がきれたのか、そのまま崩れ落ちるように壁をずると伝って座り込んでしまった。

目立った外傷はないし、暴力を振るわれていた形跡もない。ただ精神的に追い詰められていたようで、酷い顔をしていると仗助君は心底驚いた顔をした。何をされたんだ、と聞いてもジオルノ君は口と閉ざして首を振る。言いたくないようだ。

弓と矢を知らない？ときいた僕に、ジオルノ君は瞬きをした。仗助君が僕についてかいつまんで説明してくれる。そして、ようやく僕はジオルノ君がぶどうヶ丘学園中等部の2年生であり、僕より2つも年下なのになんと身長が高い少年だと気付いて愕然とするのだった。

「見かけによらず結構度胸があるんですね、君。やる時はやるという

か、無謀というか」

肩を担がれて弓矢を隠してある場所まで案内してくれたジヨルノ君は、どこかあきれた様子で僕を見た。お前が言うなとすかさず仗助君が茶々を入れる。ジヨルノ君はどういう意味です、とにらむけど、よく考えてみるよと仗助君は意地悪に笑った。

僕はいつままで説明を受けているから、ジヨルノ君がひとのこと言えないのはよくわかった。

ジヨルノ君はため息まじりに説明を始めた。虹村形兆が所持している矢は、ある隕石によって矢じりが造られている。その隕石に触れた者は大半が高熱からくる昏睡状態に陥り、最終的に死に至ったため、未知のウイルスが付着しているのではないかとの噂がたえない。

真相はそのスタンドの矢が行方不明のため検証することができないため仮説にすぎないが、生き残った者は例外なく超能力に目覚めた。それがスタンドである。だから、隕石に存在するウイルスと共存できた者が、そのウイルスによってご褒美としてスタンドを発現させるのではないかといわれている。

基本的にスタンドは「闘争心」や「自分の身を守る」といった意志に反応して現れるため、性格が穏やかな普通の人間がスタンド能力を得てしまった場合、ウイルスに適応して共存関係になったとしても、普通はそのまま死に至る。

仗助君にジヨルノと呼ばれた少年は、虹村形兆本人から聞かされたのだという情報をそっくりそのまま、つらつらと僕に説明してくれた。さすがにここまで懇切丁寧説明してもらえれば、僕がどんな状況に置かれていたかなんて嫌でもわかる。

今さらながらにどばつと吹き出す冷や汗をぬぐいながら、僕は背中合わせだった死という恐怖に体を震わせた。

「誇っていいと思いますよ、君の強運を」

それは主に「なおす」という特異な能力を持つ仗助君と友達になっていたこと、そして今ここに仗助君がいることについてなんだろう。すぐに分かった。こくこくと僕はうなずいた。緊張感に体が固まってしまつて、のどがすっかりからからになつてゐる。

スタンドの矢に射られた時、発熱したり、意識が憔悴したりする症状すらなかった僕は、そのままゆるやかに動脈を抉られたことで出血多量で死ぬはずだった。僕はスタンドの矢を射られた時点で、死ぬことが決まっていたはずなんだ。

つまり、僕はスタンドを発現できるだけの資格がなかったことを意味する。でも、仗助君が助けてくれた。虹村兄弟の囷に使われた僕を奪還して、ここまで連れて来てくれた上に、スタンドの力で治してくれた。おかげで僕は今ここにゐる。スタンドの矢に射られたことで発生する死の結末が抹消された状態でここにゐる。

「きつと仗助が瀕死寸前の康一を助けたことで、ウイルスが君に適性があると勘違いして、中途半端な形で覚醒したんじゃないですか」「つつーことはよお、康一もスタンド使いつつーことになんのか?」

「ええ、そうでしょうね。スタンドを目視できるのはスタンド使いだけのはずですから。もつとも、使いこなせるかどうかは本人次第だと思いますけど」

「だつてよ、康一。あのな、スタンドの使い方ってのは簡単だぜ。自分の身を守ろうとするとか、アイツを懲らしめてやりたいって気持ちになりゃあいんだよ。そうすりゃあ、あとは本能だぜつ。おまえの精神力独特の能力がばーんつと出るはずだ」

「そ、そんなあーっ、んなこと急に言われたつてわけが分かんないよっ！」

「こればかりは僕も仗助も似たようなものです。幼少期に発現したせいで発動するのは、呼吸するくらい簡単なんだ。感覚で覚えるせいで説明するのが難しい。承太郎さんに相談した方が良さそうですね」

「えー、そうかあ?そんな難しくねえだろ」

「ばばーんとか言われてもわかんないよ、仗助君！」

ジオルノ君は静かに笑った。さらつと呼び捨てにしないしてほしいな、と不満を告げると、仗助君も便乗して抗議する。

生まれは海外でも育ちは日本で、日本国籍を持つているれつきとした日本人であるとばれてしまったジオルノ君はバツの悪そうな顔をした。わかりましたよ、先輩、と投げやりにジオルノ君は指をさす。

「ここです。ここにスタンドの矢と弓がある」

逃げるのに精いっぱいまで頭がまわらなかった、とジオルノ君はぼやいている。仗助君はぎよつとした。しれつとした顔をして抜け目ないのがジオルノ君の性質だとよく知っているせいだろう、ありえないポカをやらかしたジオルノ君の精神状態がますます心配になったらしい。

大丈夫かよおめーと覗き込んでいる。そして、ひでえことしやがるぜとうなった。中学生らしいしまったっていう顔を垣間見た僕は、むしろ人間離れたした外見を持つ石像が人間なんだと認識出来て安心できただけだなあ。

さすがにいわないでおいた。がちやりとドアノブを回すジオルノ君が立ち止まった、どうした？と仗助君が聞く。

「僕のスタンドは、生命を作り出す能力です」

「へえ、そうなんだ」

「そりやしつつるぜ。いきなりどうしたんだよ」

「いつだったか、どうやるんだと仗助先輩がいったじゃあないですか。いい機会だから説明しますけど、まずは植物や動物をイメージするんです。そしてイメージを、その卵の殻みたいに型にするんだ。そして、そのなかに生命エネルギーを注ぎ込む。水風船みたいに満たすんです。基本的に僕から離れたそいつらは、相手にされたことを返すスタンドをもった生き物として独立して、生きていくことになる。僕が

スタンドを引つ込めても、もうそいつらは死にません。でも、満たしている水がなくなったら死ぬ。もしくは、僕がわざとその水風船に針をさすイメージで、そいつ単体の能力を解除したら死ぬ。元に戻るんだ。僕がここに連れてこられた時、虹村形兆という人は、僕にこう言っただけです」

がちやりと音がして、ドアが開く。ぎいぎい、と悲鳴を上げた古びたドアの向こうにほっそりとした腕を見つけた僕はぎよつとした。ジオルノ君は何気なくそいつを拾い上げて、金色に光るスタンドを発現させてふれた。

ほっそりとした、どんどん腐りといっていく運命の男の腕はもとの姿に戻った。驚かせんなよお、と仗助君はぼやいた。ジオルノ君の手には木材が握られている。

「人間をつくることは出来るのか」

余りにも倫理的にタブー視されていることを問われたジオルノ君の心情は察するに余りある。ひとつ、ひとつ、バラバラになった死体のように、部分ごとに造られた人体を回収してはもとの物体に戻していくジオルノ君は真顔だった。

あまりにも無機質だった。表情はうかがえない。どうやら精巧なものが出来るまで延々造らされていたようだ。僕たちは顔を見合わせた。

「結論から言うと、NO、でした。今の僕の能力の限界ですね」

淡々とジオルノ君はいう。そして、木材がたくさん山積みになつているところに乱雑に投げ入れた。

「正しくは、ニンゲンの身体は出来ました。出来るようになりました。でも、それは赤ん坊といった方が正しい。僕のいうことを聞く生きた

人形にすぎませんでした。それは人間じゃあない。人間の形をしたもつとおぞましい何かです。でも、そいつはあつという間に死にました。僕の精神が耐えられなかったから。スタンドが問答無用で水風船を割りました」

おぞましい実験だったとジョルノ君は言った。

「人間を造れるのか、とあの人は言ったんです。僕は必死で作りましたよ。死にたくはなかったのです。でも、つなぎ目同士がどうしてもくつつかないんです。バラバラのままくつつかない。生命エネルギーがなくなつたあとも、中を満たすものが調達できないとそれぞれ部分が緩やかに死んでいくんです。なんだって僕は死体を作っているんだらうと発狂したくなりました。できない自分がもどかしいです」

僕たちはかける言葉が見つからなかった。

「あの人がいうには、スタンドは思い込みつてのが大事なんだそうです。僕が出来るんだと思ひ込むことができるほど無知なら、こんなに苦労はしなかつたでしょうね。僕は宗教的な団体が母体の児童養護施設で育つたんですよ、先輩。人間は神によって創られたと考えている人たちに育ててもらつたんですよ、僕は。人間をつくることは神になり代わろうとする愚か者のすることだ、と幼少期から刷り込まれてきた僕にできるわけないじゃあないですか」

「もういい、もういいんだぜ、ジョルノ。聞いたオレが悪かつたよ。ここであったことは見なかつたことにする。だからさ、お前も忘れろよ、な?」

「そうだよ、ジョルノ君。君はなんにも悪いことなんか、しちやあいないんだよ。心配なんかいらなくて。さ、行こうよ」

ジョルノ君から表情はうかがえない。僕はジョルノ君の精神が異

常をきたしやしないかとちよつとばかり心配になったのだった。ありがとうございます、優しいんですねと他人事のように笑うジヨルノ君に一抹の不安を覚えながら、僕たちはスタンドの矢を発見することになる。

お前はここで待つてると屋根裏の階段付近にジヨルノ君を待たせて、僕たちはスタンドの矢を無事に回収したのだった。その矢先、さらに奥の隠し部屋にじゃらじゃらという鎖の音を見つけた僕たちは立ち止まった。動物のような蹄の音がする。なんだろう、と立ち止まった僕は、突然現れた肉の塊に引きずり込まれてしまった。

1987年、日本はプラザ合意をきっかけに発生した円高を生まれて初めて体験した。誰もが日本経済の実力だと錯覚した。冷静さを欠く、浮かれた10年が始まった。あまったお金が土地や株につき込まれ、土地や株が値上がりし、資産が増えて、みんな気が大きくなった。消費も増えた。バブル経済のはじまりだ。その波に乗り切れなかった運の悪い男の成れの果てがここにいるのだと彼は言う。

今から12年前、虹村兄弟が6歳、3歳だったころに遡る。会社経営の父親と共に暮らしていた虹村兄弟は、東京に住んでいた。2年前に病気で母親がなくなっていたため、二人は母親をアルバム越しでしか覚えていないらしい。

経営していた会社はうまくいかなくなり、倒産し、膨大な借金をかえることになった虹村兄弟の父親は自己破産、すべてを失った。にもかかわらず、或る時からろくに仕事もしなくなった父親は、急に羽振りがよくなった。

宝石類や貴金属、札束が転がり込んでくるようになった。そして、虹村兄弟は父親に連れられて、縁もゆかりもない東北地方のこの街に大豪邸を建てて、まるで逃げるように東京を後にすることになる。

当時、世界中からスタンドの才能がある人間を集めていたDIOに魂を売った虹村兄弟の父親は、今となっては分からないスタンドの能力を持って、なにかの任務を遂行していたらしい。金のために雇われたはずの虹村兄弟の父親になぜ肉の芽を埋め込まれたのかは不明のまま。

肉の芽を埋め込まれたスタンド使いは大きく弱体化する傾向にあり、DIOは極力避ける傾向にあったようだから、おそらく戦力的なスタンドでなかったことは確かである。

しかし、裏切り行為を警戒せざるをえない、凶悪なスタンドだったのか、二人の子供を抱える父親がもつ家族愛がDIOによからぬたくらみを予感させたのかもしれない。いずれにせよ、ジョナサンのスタンドであるハーミットパールを使っていた以上、虹村兄弟の父親が肉の芽から逃れる術は無かった。

日本には波紋使いがない。それに波紋は一般人が耐えられないため、よほどの熟練した使い手でなければいずれにせよ、待っているのは死のみだった。虹村兄弟の父親も肉の芽を植え付けられた数年後には死ぬことが分かっていたのだろう、資産はたくさん残していた。

仗助君とジョルノ君が原因不明の高熱から生還したその日、虹村家はそれ以上の悲劇に見舞われた。

1987年の2月上旬、小学校への進学を控えた彼は説明会から帰宅したとき、泣いている億泰君を発見して、父親の暴力を察知して身構えた。でも、そこにいたのは台所の隅でこの世のものとは思えない絶叫をしながら、苦しみぬいている父親。

DIOが死んだことで、額に埋め込まれていた肉の芽が暴走して、虹村兄弟の父親と同化しはじめ、僕たちの目の前にいる不死身の怪物

に姿を変えてしまった。

12年間、屋根裏部屋の一室で鎖につないだまま、誰にもばれない様に隠し続けることになった虹村兄弟は、必死で父親を元に戻す方法を捜した。そして10年間、すべてを調べ上げた二人は、スタンドの矢と弓を入手することになる。

絶対に渡さねえと息巻いている形兆先輩は、凄まじい殺気を僕たちに向けてきた。治すスタンド使いを捜すためにか、と悲痛な顔をしている仗助君が直したばかりの写真を抱いて泣いている肉の塊に手を伸ばす。僕は声を殺して泣いている形兆先輩に気付いて、目を逸らした。

おめーが治してくれるってか、と半泣きの声は諦めに満ちている。仗助君のスタンドがふれる。仗助君の視線の先には4人家族の虹村家がある。ゆるやかに皮膚が伸びていって、本来あるべきところまで戻っていき、髪の毛と同化していた醜い顔の輪郭がはつきりわかるようになった。

すごいや、と歓声を上げようとした僕だったけど、仗助君の表情は暗い。やりきれない顔をした仗助君は静かに首を振った。仗助君がスタンドの力をやめた途端、ぶくぶくとふくれあがった肉の塊があったという間に虹村兄弟の父親を化け物に変えてしまう。

再生能力が早すぎるんだ。だろうな、と形兆先輩は初めから期待していなかったようで、乾いた笑を漏らしている。二人がスタンドを発現したのは、父親を殺すため。でも、バッド・カンパニーの最新鋭兵器は全く役に立たない。億泰君のザハンドは手のひらサイズの削りを延々に繰り返さなければならず、再生能力と相殺してしまい、堂々めぐり。

つんぎく悲鳴と父親を殺そうとしている事実には億泰君が耐えきれず、途中で心が折れてしまった。永遠に醜い肉の塊として生きていく運命にある父親は、いつか虹村兄弟が死んだあと一人ぼっちになってしまう。それだけは避けたい。せめて目の前で死んでいくのを見届けたいというゆがんだ愛憎を抱えながら、形兆先輩は泣いていた。

「殺すスタンド使いよりよお、治すスタンド使いを捜すつツーンなら、手伝ってやってもいいぜ？そっちのほーがいいんじやあねえか？なあ？」

優しい仗助君の言葉に、きつと睨みつけた形兆先輩は低い声でうなった。てめえらに何が分かる、と差し出された手を弾き返し、形兆先輩はふらふらとした足取りで立ち上がる。

「そりやあオレたちがとつくの昔に通ってきた道だ。治癒能力つっーのは精魂が優しいやつじゃあねえと発現しねえんだよ、あほんだらア。始めこそ、同情してくれたやつらに頼んでスタンドの矢を射つたぜ。みんな死んじまったがな。結局スタンドを発現すんのは精神的に確立したもんがあるやつに限られちまう。善良なやつらより、犯罪者のやつらの方がよっぽど確率がたけえんだよツ。甘ったれたことぬかすんじやあねえぜツ」

あまりにも残酷な事実には僕たちは絶句するしかない。打ちひしがれたんだろう、きつと。だからあまりにも残酷な方法をとるしか残されていなかった。それほどまでに、虹村兄弟は追い詰められていたんだ。

「今年に入ってから、この街の行方不明者は何人だと思う？81人だ。異常な数字だぜ。平均の8倍もある。常態化しちまつてるせいでこの異常な数値に特別な関心を払うやつらはいなかったが、お前らは気付いちまった。そうだ、そのうち何人も手をかけたのはオレたちだ。オレは何があらうと後戻りすることは出来ねえんだよ。スタンド能力がある人間をみつけるために、何人の命を奪ってきたと思ってやがるツ。今さら遅えんだよオツ！」

「そんなことやってみなくちゃあ分かんねえだろうがよお。承太郎さ

んのこと知ってるみてえだし、なんならオレが掛け合つてやってもらいんだぜ？だから、その弓と矢をこっちに渡しなよ、億泰の兄貴」

「空条承太郎と繋がってる時点で、てめえらは信用ならねえんだよ、ふざけんじゃあねえぜっ！あの男の背後にいるSPW財団が慈善団体じゃねえことは、東方仗助、おめーも見てるはずだぜ？アンジエロの件でな。勘違いしてんじゃあねえぞ、てめえはよオっ！」

「ああ、よくしってるぜ。でもな、あの人がDIOの手下だったからって理由で、助けを求めてきた人間を拒否するような人間じゃあねえってことくらいはわかってんだ、こっちはよー！」

仗助君がいうには、SPW財団はアメリカの石油王が巨万の富によって設立した財団であり、主に医療に力を入れている。その中には超常現象を扱う部門があり、ジョースター家とDIOとの因縁を憂いた創始者が、過酷な運命を背負う彼らを助けるためという遺言によって設立されたものらしい。

原因不明の病気で苦しむ人間の治療や介護をしながら、新しいスタンド使いの情報をジョースター家に提供して、バックアップしているとのこと。

承太郎さんがこの街にやって来たのは、スタンド使いが急増しているからであり、アンジエロからスタンドの矢の存在が明らかになったから。SPW財団は6本あるはずのスタンドの矢を血眼になって探しているらしい。

形兆先輩がいつてるのは、アンジエロが逮捕されたのは自動操縦型だったスタンドを脱出不可能な容器に入れて冷凍保存されたからだってことらしい。アンジエロはスタンドと本体の感覚が共有しているから、精神だけが窒素によって冷却された空間に監禁された状態にあるのと同じ。

低体温症と壊死する身体を延命し続けるため、病院から出られるこ

とは二度とない。はつきり言って死刑囚には生ぬるい最期だとおもうけど、そのSPW財団に関わっている人間の大半がDIOの犠牲者を家族や友人、同僚に持っているとなれば形兆先輩が危惧するのは無理もないなあって思った。

SPW財団は各地に支部がある一枚岩とはいかない、あまりにも大きな組織だ。

かつてDIOに魂を売った人間が助けを求めたところで、人道的な支援を派遣された人間が行えるのかまでは保証できない。世話をするのも人間だ。奉仕者じゃない。肉の芽についての研究結果をSPW財団が握っていると言うことは、その研究の被験者になった人間がたくさんいたってことになる。

創始者が暗黒街の出身者で、勢力を拡大するためにマフィアみたいな暗部ともかわりをもっていたみたいだから、仗助君が承太郎さんから教えてもらってない大人の事情も形兆先輩は知っているようだった。

10年もの間調べ上げてきた中で、形兆先輩が入手してきた確かな筋の情報では、少なくとも父親を預けられるような環境じゃあなかったってことだろう。

虹村兄弟は天秤にかけて、父親を生贄に捧げて保護下にはいるという選択肢を選ぶことができなかったんだ。監視下に置かれることが我慢ならなかったんだ。たった二人だけで完結してしまった世界では、どうしても思考回路は硬直化するし、視界は狭くなっていく。

じりじりと追い詰められていった末の凶行だと思うと、僕は言葉にすることができなかつた。ばたん、と音がして、僕たちは振り返る。そこにはぐしぐしと涙をぬぐう億泰君がいた。いたのかよ、とバツ悪そうに仗助君はつぶやいた。どかどかと歩いてきた億泰君は、形兆先輩の弓をひいた。

「もうやめようぜ、兄貴」

「億泰、てめえ」

「なあー、こんなことはよおー、もうやめにしようぜ、もうやめようぜ、なあ。仗助のいうとおり、おやじは治るかもしれないねーなあ、肉体は戻らなくてもよー、心と記憶は戻るかも知れねえぜ?」

「なに掴んでやがるんだ、億泰」

「兄貴い」

失望する眼差しを向けられて、億泰君は尊敬するお兄さんに拒絶されたと悟って表情を曇らせた。

「バカだ、バカだとは思ってたが、ここまで馬鹿だとは思わなかったぜ、この野郎。進歩なき人間は生きる価値がねえと何度も言ったよなあ? 億泰。どけ、億泰。おめーはおれに刃向つたな。この瞬間からおめーはおれの弟じゃあねえ。躊躇なくオレはお前を殺せるんだぜっ」

乱暴に押しつけられた億泰君はよろめいた。その隙をねらって、弓から億泰君を振り落とした形兆先輩の弓ひく先にはジオルノ君がいた。それでも億泰君は食い下がる。しばらくの押し問答、小競り合いがつづいた。

「動くんじゃないぞ、汐華初流乃。てめーもこれで終わりだな。DIOの息子でありながら、ジヨースター家の血をひくてめーをSPW財団がほっとくわけがねー。汐華家がおめえを引き取らなかつたのは、つまりはそういうことだ。売られたんだよ、てめーはよ」

え、と思わず僕たちは目を丸くした。ジオルノ君がDIOの子供だって!? ジオルノ君は形兆先輩直々に教えてもらったから、ととんで

もない爆弾を投下しながら、静かに予想はしていましたよ、とつぶやくのみで口を真一文字にむすんだ。

仗助君は大慌てで耳を貸すなど声を張り上げている。形兆先輩は自棄になったのか声を張り上げている。彼の手元から億泰くんがスタンダードの矢を奪い取ったのだ。

「いいことを教えてやるよ、汐華初流乃。空条承太郎は、お前の父親であるディオ・ブランドーを殺した男だ。一番の理解者が仇とは笑えるな」

「億泰の兄貴、てめえ、なんつーことをっ!!」

「オレは事実を教えたただけだ、何を怒ってやがる。いずれはわかることだろうがよ」

ただわかるのは、虹村形兆という人は、心の底からDIOを憎んでいるんだということだけだった。もちろんそんな男に魂を売った父親の自業自得だし、逆恨みもいい所であり、ジオルノ君はむしろ犠牲者といつてもいい立場だと分かっている。

この人はあまりにも頭がよすぎた。いつでもメリットとデメリットを考えられる上に、リスクを最小限にしようとするあまり、希望を抱く前に頭が理解をしまい、すぎることはできない。それでも、人の心は理解と一番遠い所にある。

それが唯一人間らしいところとして残ってるんだとしたら、あまりにも悲しい現実だ。ジオルノ君は目を伏せて何も言わない。ジオルノ君は表情があまりにも乏しい、もしくは意図的に隠している。

それでも、まだ14歳の中学生だ。それなのに、涙腺は死んでしまったかのように、全く水分がわいてこないし、顔の筋肉は凍りついたように能面のままだ。それでも形兆先輩は心底満足そうに笑った。ジオルノ君は静かに目を向けた。

「空条さんが僕の父親であるDIOを殺したのであれば、仇なのは事実でしょうね。しかし、空条さんがDIOを殺したことで、僕が生き残ることができたのは事実です。奇妙なことですね。復讐に値する人間でありながら、命の恩人なんて。」

しばらく、嫌な沈黙がおちた。

「おい、おめーらよ、ちよいとばかりしききてえんだが、いいか?」

ふと天井を見上げた仗助君がつぶやく。みんなの視線が集中した。

「おめーらの他にまだ身内はいるのかよ?」

「身内?!おれたちは3人家族だぜ!」

「窓に指紋!誰かい……コンセントの中から……まさかレッド・ホット・チリ・ペッパーか?!?くそつ、億泰、どけえっ!ぼさつとつたつてんじゃあねえぜっ!」

「あ、兄貴っ!」

「ぐあああああああああああああああつ!!」

兄貴いいいいと億泰君の悲鳴が響く。あわててみんな向かおうとするのだが、コンセントから出現したスタンドは、凄まじい発光と熱をまき散らしていて近づけない。目をやられた僕たちはまともに直視することすら出来なかった。

がふ、と真つ赤な液体が散布した。形兆先輩の形がどんどん曖昧になつていく。これは電気だ。電気と同化していくんだ。ジオルノ君と仗助君、億泰君がスタンドを出現させるのはほぼ同時だった。

なんとか引き離そうとするも、くるんじゃあねえつと形兆先輩のバッドカンパニーが僕たちを近づけまいと威嚇射撃をしてくる。どういうつもりだよ、と億泰君は叫んだ。引きずり込まれてえのか、このダボガアツ、どこまでも足手まといしやがって、くそガツと形兆先輩は怒鳴りつけた。

「この弓と矢は頂くぜ、利用させてもらおうじゃあねえのっ！あんたにこの矢で貫かれたことで目覚めたスタンド使いのこのオレがなあっ!!」

耳をつんざく悲鳴が聞こえてくる。あつというまにコンセントに吸い込まれていった形兆先輩を追いかけて、億泰君は屋上に繋がる隠し階段に一目散にかけていく。僕たちも慌てて後を追った。け、ちよ？とたどたどしい言葉でつぶやかれた言葉が耳に痛い。

すっかり暗くなり始めた屋上に辿り着いた僕たちは、打ちひしがれた様子で崩れ落ちている億泰君を発見した。震える指の先には電線に絡まって逆さ吊りにされている感電死した遺体。仗助君は肩を叩いた。あまりにもあつけない幕切れだった。

足手まといといわれたけれど、最後の最後に億泰君のお兄さんとして、あの人は億泰君を庇つたんだ。きつとあの人は億泰君を殺せない人だったんだと僕は思いたい。男泣きする億泰君を慰める仗助君を見つめながら、僕はジオルノ君とともに立ちつくしているしかなかった。

出合い編完結

葬式はこれで3度目になる。1度目は僕の母親。2回目は……。

オリオン座流星群は明るい流星群のひとつで、毎年10月19日から23日の間に東の空で見られる。オリオン座の中でふたご座との境界付近に放射点があり、比較的速度が速いため、明るい流星が多くみられる。

母天体はハレー彗星で、約3000年前のハレー彗星の塵による。なお、5月に見られるみずがめ座エータ流星群もハレー彗星を母彗星だ。

国立天文台の情報によれば、流星群ピークである「極大」を迎えるのは10月21日の20時頃とされていた。S市天文台の公式ホームページにも、同じことが書かれているので、全国とほぼ同じだと考えて大丈夫だと彼はいった。「どこに行くんですか?」

極大、一番星が見える時間帯、となる10月21日の夜に月が見えないので、月明かりに邪魔されることなく流れ星を楽しむことができ、1時間に15個ほど流れると予想されている。

流星がくる期間だけで考えれば、10月2日〜11月7日の約1ヶ月間は観測が可能だが、ただピーク時と比べると、流星の数は確実に少なくなってしまう。できれば「極大」がくる日に観測できるよう、準備しておくことが大切らしい。

よく「オリオン座流星群を見るためには、東の空を見たほうがいい」と解説されているサイトが見受けられるが、これは間違い。基本的にはどの方角からも観測することは可能だ。

特にS市のような「都市部が明るい」地域だと、夜でも街から放たれる光が尋常ではない。最初から「東の空だけ見上げていよう!」として方角を定めてしまうと、簡単に見失ってしまう。

S市天文台でも紹介されているように、寝転がって空全体を眺める

ような場所をさがして観測するのが一番。また、流星群は放射点を中心に全天に流れるので、放射点のある星座の方を見ているだけではいけない。寝転がって空全体を眺めるようにしなければならない。

天体観測を行うために必要である「鉄板の場所」の原則は、以下の通り。

街の明かりがこない、真つ暗な場所。ある程度、他より高いところ。できるだけ視界が広い。これに沿った場所を選んでいくようにすれば、S 駅中心から行くようところであっても観測することが可能になる。まあ、要は街明かりのない所に行け！ってことだ。

S 市近郊から行けるオススメの穴場スポットはいくつかある。

まずはスキー場からも近い、泉ヶ岳。定番のスポットなので人は多いが、やはり夜空を眺めるのにいい場所であることに違いない。駐車スペースも広く、ここから観測することも可能なので、車で行く人にとっては絶好のスポットになる。

次は泉ヶ岳に行く途中にある、七北田ダム。その近くにある展望公園が、星の観察スポットとして挙げられる。周囲が暗い道が続くので、天体観測できそうな場所を探りながら行けるのもポイント。

また、釜房湖周辺にある釜房ダムもよさそうだ。中心街から車で30分ほどで行くことが可能なので、そこまで遠くに行きたくない！って人にもおすすめできる。

夜空も夜景も楽しむことができることでオススメなのが、名取市にある「海の見える丘公園」。夜景の光を一望できる場所がある一方で、奥の方ではゆっくり夜空を鑑賞できる「オイシイところ」だけを取ったスポットとなっている。

だが彼が僕を案内したのはいずれでもなかった。

人っ子一人通らない早寝の暗い横通りには、狭く咽喉のようになって

た往来がある。小広く引込んだ道には、高いアパルトマンの間の谷底のような狭い露路、街道のほうから閑静な住宅街にはいる白い道すじがある。

そこを横切り進んでいくと、よそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあつたりがらくたが転がしてあつたりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが姿を表す。普通の通行人のための路ではないような暗い星の冴えた小路がある。

大きな通りを外れて街燈の疎らな路へ出る。月光は初めてその深祕さで風景を照していた。横に切れた路地は大通りから一本入ると、めまいのように夜が暗かった。

僕は彼に促されて、化粧品を蝶に変えた。夜でも見栄えがする大きな蝶だ。ふわりと舞い上がった蝶を追いかけて、僕と彼は歩き始める。

僕は庭のブロック？をのりこえて「路地」に下りた。「路地」とは言っても、それは本来的な意味での路地ではない。正直なところ、それは何とも呼びようのない代物なのだ。正確に言えば道ですらない。道というのは入口と出口があつて、そこを辿っていけば然るべき場所に行きつける通路のことだ。しかし「路地」には入口も出口もなく、それを辿ったところでブロック？か鉄条網にぶつかるだけのことだ。それは袋小路でさえない。少くとも袋小路には入口というものがあるからだ。

近所の人々はその小径をただ便宜的に「路地」と呼んでいるだけの話なのだ。

道幅は一メートルと少しというところだが、垣根がせりだしていたり、いろんなものが路上に置かれていたりするせいで、体を横に向けないことには通り抜けられないところも何カ所がある。通りと通りを結ぶ近道のような機能を果していた。

高度成長期になってかつて空き地であつた場所に家が新しく建ちながらぶようになつてからは、それに押されるような格好で道幅もぐつ

と狭くなりその道はまるで放棄された運河のように人知れずとりのこされ、利用するものもなく、家と家を隔てる緩衝地帯のような役割を果している。

路地をはさむようにして建った家々は、まるで比重の異なる液体を混ぜあわせたみたいには、はつきりとしたふたつのカテゴリーにわかれていた。ひとつはゆったりとした広い裏庭を持つ昔からの家のグループで、もうひとつは比較的最近建てられたこぢんまりとした家のグループだった。

その先に蝶が舞い降りる。

「これは……」

10歳の僕には刺激が強すぎる陰惨な光景が広がっていた。そこには湿っぽい臭いを放っている死体があった。腐敗した杏の匂いに近い死体の臭気は新聞紙を通して触れる死骸の硬さがあわれだった。

彼は何も言わず縄を渡してハシゴを下ろし、ぎいぎいさせながら降りていく。僕も続いた。

僕は目を閉じて、自分が死んでいくところを想像してみる。すべての肉体機能が停止し、最後の息がすうっと肺から出ていく。最後の息というのは、思っているよりもずっと硬い。まるで軟式のテニスボールを喉から吐いているみたいなきずくを感じる。

何かを言おうとして口を動かしている。しかし、かすれた声は不鮮明で、ほとんど理解することができない。

吐き気をもよおすほどの死肉の腐臭が立ち込め、全身が丸太のように硬直した死体は柔らかい作りかけの粘土細工のように生々しい。目や鼻から一筋二筋、血の流れている凄惨な死体はきたならしい漆喰の人形のような女のむくろだった。

黒焦げの死骸はどこにさわってもぼろぼろと毀れる灰の人形に過

ぎない。彼女は凍りついた無感動とでもいったようなものを身に纏っているだけだった。

化粧品がかたりとおちる。

彼は静かに拾い上げる。

「ありがとう、ジヨルノ」

聞こえてきたのは鼻声だった。後ろからは肩を震わせる彼しかわからない。僕はじっと見ていることしかできなかった。

「僕が探していたものがようやく見つかった。僕の記憶ではどうしても場所が特定できなかつたんだ、君のおかげだ。君のその不思議な力のおかげで僕は」

「……………！」

僕は目を見開いた。彼の、琢馬の目には、煌々とほの暗いものが浮かんでいたのである。

それは宿題を終わらせるために通っていた図書館での出来事だ。

淀んだ紙の匂いがする図書館では、学生の大半が積み上げた本の影でまどろんでいる。閲覧室全体が、一斉のまどろみに襲われているのだ。書架が林のように並び、僕と彼を覆い隠している。

彼の横にはさほど大きくはないがずっしりと重たい本、かび臭い革表紙の重い辞典、本の紙が粗末で、六十年余りの歳月に朽ち葉色に変色している文庫本が伏せたまま置いてある。

映画化が決まったばかりのインクもおい立つような新刊本、話題の肩の凝らない気楽な読み物の横では黄ばんだページをめくる生徒がいる。僕の記憶が正しければ、教科書みたいに偉そうに分厚い説明書だ。中身も面白くない。

周りから距離を置くために一番奥のテーブルに僕らは移動したは

いいものの、所在なげに黙ってしまった。図書室は底のほうに気持ちの悪い暗流を潜めながら造り笑いをし合っているような不快な気分を満たされた。

長く続く沈黙が当然ひき起こす一種の圧迫を僕も感じてうろたえたらしく、なんとかして彼との間の気まずさを引き裂くような、心の切なさを表わす適当の言葉を案じ求めている。

要点を心の中で整頓するらしくしばらく黙っていた。彼は絶え入るように声を細めて言葉を結ばぬうちに口をつぐんでしまった。そのあとには沈黙だけがふさわしいように口をつぐんでしまった。

「見つからない？見つからないって、あの？なにいつてるんですか、琢磨」

深淵よりも深いため息と沈黙の先で彼は頷いた。

「これを頼りにもう一度いつてみたが、ダメだった」

彼の瞬間記憶能力を凝縮したような追体験装置を片手に彼はいうのだ。これを読むと彼の記憶を読者は追体験できるらしいので、僕とあの夜に遺体を探しに行ったことが詳細に載っているはずなのにだ。これと逐一確認しながら追尾すればいずれ目的地にたどり着くはずだったのに。

「どうやっても辿り着かない。おかしい、おかしすぎる」

僕も頷いた。唇がからからだ。

「だから僕はひとつの結論に辿り着いた。彼女は自殺したわけでも事故で死んだ訳でもない、出られなかったんだ」

「スタンド能力に目覚めなければ突破できない密室ですか」

「彼女は見殺しにされたのだ、餓死するその瞬間まで。これは殺人だ。」

そう考えれば僕が生まれた瞬間から捨てられるまでに周りから聞こえてきたすべての音の説明が矛盾なくできる」

彼がスタンドの本を握る手が白んでいる。

今、彼の中にはとどろくような思いが胸のなかに渦巻いている。降りつもって、この街をうめつくして、窒息するほど降りつもるほどに。この憎悪は一生忘れないぞと思う顔がある。笑顔で窒息しそうになる気持ちを幸福な人間は知らないだろう。僕は感化されて胸の中では呼吸のとまりそうな窒息感におそわれる。

彼の目は恐ろしい催促をやめない。それにその目の恨めしそうなのがだんだん険しくなってきた。とうとう敵の顔をでもにらむような、憎々しい目になっていく。

あの死体にはたしかに身の毛がよだつほど邪悪な悪意が存在していた。彼がそれほどまでに固執する女性に僕は検討も付かなかったが、なんとなくわかった。

「だからジョルノ、頼みがある」

「なんですか？」

「彼女を運んで欲しい」

僕は頷いた。この掃き溜めのような密室から哀れな彼女を救い出さなくてはならない。舞い上がった蝶の先には、オリオン座流星群が見えた気がした。

花にたわむれている蝶は粉雪のように軽い。むやみにせっかちに飛び回る。頭に白い羽毛をつけ、銀粉を全身にぬって片脚をかるく上げて、今、空中に飛び上ろうとする美しい踊子を想わせた。ロバみたくに大きな蝶や白い蝶のむれは白い花畑のように数を増して来た。

黒い蝶はぴたりとまり、ぴたりと、はねをとじた。あるいは弓弦のように引きしぼった大きな蝶の羽が浮遊する。二本の触角だけが絹糸のように白かった。ふらふらと宙をさまよってきて、彼女の青いワークシャツの肩にとまった。

蝶は恐れることを知らないように、そこで眠り込んだ。たくさんの蝶が、初めも終わりもない意識の流れを区切る束の間の句読点のよう

に、あちこちに見え隠れしていた。見たこともない南国の蝶が花にとまった。蝶はカラフルな大きな羽を折り畳み、安心して眠り込んでいる。

役目を終えた瞬間にすぐ近くの生垣に遺体の断片たちが転がっていった。

この時の僕はこれで名前も知らない女性が報われると思っていた。彼の大切な人が救われたとばかり思っていた。だがそういうわけはないらしい。

入れかわり立ちかわりやってくる弔問客は、晩骨のそばで通夜をして、それからすぐ忘れて、さっさと自分の日常にかえってゆく。昆虫のような強靭さを持っているように、僕には見えた。影のようにひっそりとした参列者に紛れて僕は葬儀に参列したのだ。焼香の先で初めて見た女性は彼とよく似ていた。

肅々と進む行列の先で、僕は彼と対面した。

遺体は、棺桶に窓がない。

長きに渡る失踪ののちの発見だ、本体は警察に最初に運ばれたからだという。今は目立たない一画にある、死体安置部屋の目立たない小部屋に安置されているらしい。移動式のベッドの上に仰向けに寝かされ、白い布をかけられても、腐敗はごまかしようがなく、初めて対面した両親は卒倒したという。

彼はたんとんと教えてくれた。窓のない真四角な部屋で、白い壁を天井の蛍光灯がいつそう白く照らしていた。腰までの高さのキャビネットがあり、その上に置かれたガラスの花瓶には、白い菊の花が三本さしてあった。花はおそらくその日の朝に活けられたのだろう。壁には丸形の時計がかかっていた。埃をかぶった古い時計だが、指している時刻は正確だった。

それは何かを証言する役目を担っているのかも知れない。そのほかには家具もなく装飾もない。たくさんの老いた死者たちが同じようにこの簡素な部屋を通過していったのだろう。無言のままここに入ってきて、無言のままここを出て行く。

その部屋には実務的ではあるが、それなりに厳粛な空気が大事な申し送り事項のように漂っていたと。

彼によれば実際の火葬は数ヶ月後らしい。大往生ならば煙となつて空に立ち上り、雲に混じり、そして雨となつて地表に降り、どこかの草を育てることを喜ぶかもしれないが程遠い。

「人が死んだ後の手続きはあつけないほど簡単だった。でもこれが葬式というものだったんだな」

彼は参加者を見つめながらいう。生前に何があつたとしてもすべてを忘れて、その場を共有している全員が悼んでいる、惜しんでいる、心から悲しみ、冥福を祈っている。

両親はもう年老いているのにさらに老け込んで見えた。悲しみは喪服の全身から淡く立ちのぼり、ある種の覚悟したことを感じさせた。2人の喪服は茶器のうわぐすりのように2人の迫力ある悲しみと決心の文様を彩っていた。

頭を下げ、声を小さく僕は耳を疑うような話を聞き返した。

「……事故死？」

「そうだ、事故死だ」

「これだけ不自然な遺体なのに事故死？」

「ああ、出産した形跡があるのに赤子の遺体が発見されず、出血多量ではなく餓死で死んでるのに事故死だ」

僕は沈黙するしかない。おかしい、あまりにもおかしすぎる。なにかの圧力を感じざるを得なくなる。それは彼も同じようで難しい顔をしている。ただでさえ乏しい顔が石像のようになっていた。

密室のことを説明できなければ無駄だと僕は悟った。

僕にできることは何も無かった。ただ13年間行方不明だった一

人の女性の死を発見したことを年齢より老けこんだ両親から感謝された。

「僕がぶどうヶ丘高校に進学できた理由がわかったんじゃあないか？」

参加者が少ない葬式にて慰問ではなく親族側にたっていた彼を見れば嫌でもわかった。

それから4年の歳月が流れている。

「急にどうしたんだ、ジョルノ」

「実は……」

一連の話を聞いた彼は冷ややかに僕を見た。

「スピードワゴン財団か……」

しばし考え込んだ彼だったが小さく首をふる。

「考えさせてくれないか、ジョルノ。なかなか愉快なことになってるのはわかったが、さすがにすぐ答えは出せそうにない」

「わかった」

僕が話し終わると、しばらく二人のあいだに沈黙が下りた。未解決が確定した殺人事件についての殆んど何のとりかかりもない話のあとにいったいどんな種類の話題を持ちだせばいいのか、僕にも彼にも見当がつかなかった。彼はスタンドの本の縁を指でなぞる。僕はやはりスタンドの話なんてするべきではなかったのだ。

そして3度目の葬式がはじまる。

首謀者である虹村形兆という青年の感電死によって、あっけなく幕を閉じた半年にも及ぶ僕の連続誘拐未遂事件の真相は闇の中に葬られてしまった。主犯格がぶどうヶ丘学園高等学校の3年生であることを証言できるのは、実行犯である片桐安十郎。

でも、アンジエロはスタンドが所在地から200メートル圏内の建物を買上げたSPW財団によって厳格に保管されている。普通ならアンジエロはスタンドを使つての脱走はできないから、刑務所に送致されて裁判を受け、今度こそ死刑が執行される。

そのスタンドの管理方法が結構えげつないせいで、感覚共有しているアンジエロは仮死状態に置かれている。そのせいで病院から出られないため、刑が執行されることはないかもしれない。寿命が尽きるのを待つ方が早そうだ。だからまともな証言ができる状態ではない。

目撃者である仗助先輩、康一先輩、そして被害者である僕だけだ。でも、僕たちは警察の取り調べに対して、スタンドや虹村兄弟の父親のこと、どうして形兆先輩が僕を誘拐しようとしたのか、という真相には一様に口を閉ざした。

しらない、わからない、としらをきりとおした。その結果、形兆先輩は僕の保護者の車を盗難して、僕を虹村邸に監禁していたという警察が把握していた事実だけが残る。死人に口なしという形で容疑者死亡のまま書類送検、不起訴処分という形で事件は決着することになった。

犯行動機や行動に関しては警察側が勝手に補完したので、僕の養父と片桐安十郎が主犯格、虹村形兆先輩はそれに加担した共犯者という位置づけになった。億泰先輩は、僕が虹村邸に監禁されていた時間帯は、ぶどうヶ丘学園高等部に登校していたことがアリバイとして成立したことで、今回の件に関しては無関係ということですぐに釈放された。

ほとんど形兆先輩の指示通りに動いていただけの億泰先輩は、その

行動の意味を全く理解していなかったこともあって、警察はどうやら億泰先輩の関与を見い出せなかったらしい。形兆先輩がスタンド使いを量産するために、刑務所に侵入した証拠はスタンドを使ったため残っていないし、億泰先輩がザハンドで抹消したから、物的な証拠は全く残っていないのが現状だ。

だから、真相とは程遠い立場で形兆先輩は書面に事実として残ることになったのだった。形兆先輩の感電死も不審死極まりない状況であるにも関わらず、一刻も早く事態を収拾したい警察の思惑が働いたらしく、自殺という形で決着したのはさすがに驚いた。

容疑者が死亡している以上立件できない警察が捜査を続けるのはドラマや小説の話だけの話らしい。保護者の彼は苦い顔をしていたから、SPW財団あたりから圧力がかったのかもしれない。

僕たちが沈黙を守ったのは、僕たちの連絡を受けて駆け付けた空条さんの指示だ。一連の事件がスタンドという超常現象が複雑に絡み合っている以上、非現実的な現象を目視できない人間に物証としてスタンドを提供することは不可能との判断だった。

スタンドの矢と弓が形兆先輩が生み出したスタンド使いに奪われたこともあって、SPW財団側はますます表ざたにすることができなくなつたのだろう。一夜明けて、保護者の彼に迎えに来てもらった僕は、大事を取ってそのまま警察病院に数日入院する羽目になった。

わたしは、結局、一度も君を守ることができなかつたな、すまないと頭を下げられた時にはさすがに堪えた。カウンセリングをうけたおかげで、精神的には回復したから、翌週には中学校に復帰した。久しぶりに登校した僕を校門前で待っていた仗助先輩と康一先輩がつけたのは、形兆先輩のお葬式の誘いだった。

虹村家は父親が自己破産したとき、親戚筋に相当迷惑をかけたことで、完全に縁がきれてしまったようだった。この10年間億泰先輩は、一度も親族とあつたことがないらしく、物心ついたころにはこの街にいた億泰先輩は、全く連絡先を知らないありさまだった、とは仗

助先輩の談である。

みんなで虹村邸を懸命に探し回ったらしいが、形兆先輩がひとつ残らず処分してしまったようで、なしのつぶて。肉の芽と同化してしまった父親のことを考えると、その方が結果的によかったのは悲しいところだ。

それでも、せめてお葬式くらいはしなさいといけない、と思った仗助先輩は、東方巡査を頼ったらしい。朋子さんが子供のころに奥さんを亡くしている東方巡査くらいしか、お葬式の段取りなんてわかるわけがなかったからだ。

事情を聞いた東方巡査は快諾、いろんな段取りを代行してくれて、お通夜とお葬式と火葬をこの街の風習通りに行うことになったらしい。こうして僕は生まれて初めてお葬式に参列したのだった。とても小さな式だった。

そして、その数日後、僕は仗助先輩と一緒に社王グランドホテルに向かったというわけである。アンジェロが派手に暴れたせいで、空条さんが宿泊していたシングルルーム階層が絶賛改装工事中だ。僕たちが案内されたのは、ダブルルームをデラックスシングルとして格上げしてもらった部屋だった。

社王グランドホテルも赤字覚悟とはいえ、行方不明になったスタンドの矢と弓を回収するまで長期滞在するつもりの上客を逃す気は全くないらしかった。ルームサービスを頼む電話を終えた空条さんが、僕と仗助先輩が座っているソファの向かいにどかりと腰を下ろした。

「……………スタンドをあの矢で貫かれたというのは、ほんとうなのか？」

僕は静かにうなずいた。まじかよー、と仗助先輩がぼやく。

「まあ、そりゃそうか。ジヨルノに限って、なんのメッセージも残さねえで、無抵抗なまま拉致されるわけないもんなア。おかしいと思ったぜ」

「アンジェロの背後にいるのは、もっと大きな組織だと思ってましたから、気付くのに遅れたんです。まさか高校生だとは思わなかった。正直、残党の過激派が僕を祀り上げるために画策してたか、SPW財団あたりが僕を殺しに来たのかと思ってたもので」

「さらつとんでもねえこといなよ」

「DIOという男はそれだけのことをしたってことですよ、仗助先輩」
「そりやそうだけど、おめーには関係ないじゃねーか」

「ほんとですよ、いい迷惑です」

「形兆からすべて聞かされたらしいな」

「ええ、あなたが僕の命の恩人であり、親の仇でもあるという奇妙な関係であることを最悪な形で暴露されました。僕は仗助先輩にとっての大叔父であり、空条さんのひいお爺さんだってこともね。でも、正直、僕にはどうでもいいことだ。DIOは死んだ、それまでの男だった、それは運命だったってこと、それくらいしか僕にはわからない。DIOという男から受け継いだものは、僕のために使わせてもらおう。それだけです」

「そうか」

「ええ」

「それがおれたちに立ちふさがるものじゃあねえことを祈ってるぜ、汐華初流乃」

「そうならないことを祈ってますよ、僕もね。あなたたちを相手にするのは骨が折れそうだし」

「頼むからこっええ会話をにつこにこしながらしないでくれよー、逃げたくなっからよー」

空条さんがにやりと笑った。この人が仏頂面を崩して、喰えない笑みを浮かべるのは初めてな気がする。案外ノリがいいのかもしれない。くだらないブラックジョークの応酬に応じてくれるくらいの余裕はあるようだ。僕も唇の縁をつりあげる。

静かに弧を描いた僕に、空条さんはふんと鼻で笑った。仗助先輩はもーやだぜこの人たちとでも言いたげな顔をして、ようやくやってき

たルームサービスの応対をするために、そそくさと腰を上げた。

「スタンド使いにスタンドの矢が刺さるとどうなるんだ？なにか気付いたことがあるなら教えてくれ」

「まずは、スタンドを初めて発現したときのような状態になりました。原因不明の高熱に襲われて、昏睡状態になるんです。そのあと、スタンドが暴走状態に移行しました。僕の場合は、スタンドがうまく制御できないころみたい、生命エネルギーが逆流するんです。スタンドの力が僕に跳ね返ったんです。すべての感覚が何十倍にも過敏な状態になって、しかもすべてがゆっくりになるんです。虹村邸に連れてこられるまで、無理をして戦闘をしたんですが、何十倍も痛みが増幅された上にゆっくりになってるくに戦えなかった。その間、僕は無防備なままだったので、バット・カンパニーのサンドバック状態でした。あのときは本気で死んだ方が良かったです。もっとも、これは僕のスタンド能力の暴走の仕方です。他の人の場合はちがってくるんじゃないですかね」

「そのあと、どうなった？」

「スタンドの能力に変化が生じました」

「変化？進化したわけじゃなく？君のスタンドは発現する時期こそ仗助と同時期だが、スタンドを認識したのはここ最近だろう。そのせいかまだまだ成長の余地があるように思う。それとはまた違うのか？」

「ええ。成長という意味では、たしかに反射機能が任意で付けられるようになった。でも、これとはまた別の能力ですね」

「仗助が言ってたパーツの作成か」

「ええ、その通りです。今まで僕のスタンドは、生命そのものを生み出すことはできませんでした。でも、その一部分だけを作成することは出来なかつたんです。簡単にいうと、バナナの樹をつくることで、バナナの樹と葉と果実はできるけれど、バナナ単体はどうしてもつくれなかつた。バット・カンパニーに包囲された中で、人体作成を強要されるという極限状態に置かれていたとはいえ、まさか出来るとは思わなかつたんです。不思議なことに、バナナの木は反射機能を任意でつけるこ

とができるんですが、パーツであるバナナの果実にはそれを造るのは不可能です。反射機能は僕が生み出した生命が本能としてもっているものですから、持たないやつは生命とはいわない。もつとなにか、生きている人形のようなものですね」

「なるほど。能力の延長上にしては、ずいぶんと変質するようだな」
「ええ、完全なる物体ですね。なにせ、僕のスタンドによって、違う生命を生み出すことができました。僕のスタンドが生命を生み出せるのは、物体のみです」

「その気になればキメラを造れそうだな、D I Oがそうしたように」
「僕が児童養護施設で暮らしてなければ、が付きますよ。無意識のうちに刷り込まれた価値観は、今の僕を為していることにはかわりない」
「なるほどな。やれやれだぜ、もし君がD I Oのもとで育てられていたらと考えると未恐ろしくなるな。間違いなく、君はおれ達の前に立ち塞がったにちがいない。殺さなきゃいけなかったかもしれない」
「そうですね、その場合、きつと僕は肉の芽を植え付けられているか、D I Oに精神を乗っ取られてスペア扱いだっただしようから。きつと救いはないですよ。たればはやめませんか。無駄なことは嫌いなんだ、無駄だから」
「まったくだ」

空条さんはプリンスのロゴがはいっている帽子を目深にかぶって笑った。仗助先輩が歪に変形させたうえに、ぱっくりと真つ二つにしたつばの帽子ではなく、真新しい。どうやら新しい帽子をお取り寄せしたようだ。もしくは帽子屋で買ったのだろうか。

仗助先輩の弁償というわけではなさそうだ。おわりっすか？と仗助先輩が僕たちに流れる雰囲気を感じて戻ってきた。並べられた3つのカップに、思い思いに好みのミルクと砂糖を入れた僕たちは、ブレイクタイムに入った。

「そーいやあ、一応、ジョルノの事件は解決したわけだけどよー、おめーはいつまでぶどうヶ丘学園にいれるんだ？」

「とりあえず、夏休みまでだから、一学期いっぱいはこちらに通うつもりです。中途半端な時期に転校すると、成績を付けてもらえなくなるんですよ。僕が通ってた公立は2年生の成績を重視する学校だったので、3年生に進学するときに困りますから」

「へー、そりやよかった。てつきりすぐにも転校しちまうのかと思っただぜ」

「施設の人たちはすぐにでも帰って来いって言ってるので、時々顔を見せなくっちゃあいけないんですけどね。さすがに施設からぶどうヶ丘学園は遠すぎるから、しばらくはあの人のお世話になるつもりです」

「じゃあ、しばらくは遊べるってわけだ。改めてよろしくな、ジョルノ」

「ええ」

僕はコーヒーを一気に飲み干した。仗助先輩の期待に満ちたまなざしが空条さんに向かう。僕たちが空条さんのところに訪れた最大の理由が、ここにある。もともと僕たちはスタンドに名前がなくても不自由さは感じていなかった。別になくてもいいものを、改めて考えるのも面倒で億劫になってしまふ。

それは良くないことだと指摘したのが言い出しつぺの空条さんだったのだ。スタンドは精神の力、名前を付けることでより強い意志をもつスタンドとすることができるともっともらしい理由を上げられる。

空条さんが出会ってきたスタンド使いはスタンドに名前を付けている。僕たちが少数派であることを強調されると、日本人気質な仗助先輩はあっさりなびいた。何でもいいから付けてみる、といわれたはいいものの、急にそんなことを言われてもどうしようもない。

あーでもない、こーでもない、と延々悩み続けた僕たちは、ダメもとでお願いしてみたのだ。そう言うの苦手だから承太郎さんが名付け親になってくれ、かつてあんたのスタンドの名前を付けてくれたという占い師のように。そしたら、案外乗ってくれたのである。

今日、僕と仗助先輩のスタンドに、名前が付くのだ。空条さんはもったいぶってニヤニヤしている。今日は機嫌がいいらしい。

「仗助、お前のスタンドの名前が決まった」

「そうっすかあー、やった！なんかうれしいっすねえ。なんつー名前なんすか？」

「クレイジー・ダイヤモンドだ。今日からお前のスタンドは、クレイジー・ダイヤモンドだぜ。お前の性格はついていけねえほどに、クレイジーだからな。同じ血統の者同士、スタンドの名前に共通点があった方が良さそうだと思うんだ」

「かつけー！ありがとうございます、承太郎さん！よっしや、今日からお前はクレイジー・ダイヤモンドだぜ。さすがは承太郎さん、こいつがピンクだから、ピンクフロイドにも掛けてるんすね！プログレもいいなあって言っというてよかった！」

喜んでもらえてうれしいらしく、空条さんは満足そうにコーヒーを飲んだ。そうか、空条さんはピンク・フロイドみたいなプログレバンドが好きなのか。じゃあ、僕のスタンドの名前もピンク・フロイドからとられるんだろうか、と考えてみる。

そんなバンドがあるのか、と他人事のように考えている空条さんがいるとは知らないまま、TUTAYAによっていいかと聞いてくる仗助先輩に僕は頷いた。

「ジオルノは、ゴールド・エクスペリエンスでどうだ。おれにとつて、その金髪はDIOの子供だと強烈に意識させるものだ。なにせ、ジョナサン・ジョースターは黒髪、日本人の母親との間に生まれたなら、普通は金髪は生まれるわけがない。だが、仗助から聞く限り、ジオルノはたしかにジョースターの血統でもあるらしいからな。君がどういう人間かを判断するのは、君がこれから開拓していく道をもって判断することになると決めただぜ」

「なるほど、わかりました」

「プリンスの名盤じゃあねーか！しかもジョルノにぴったりだぜ、こいつあグレートだ！」

「え、そうなんですか？」

「プリンスのアルバムにはな、カムっていうアルバムとゴールド・エクスペリエンスっていうアルバムがあつてな、「死と再生」つってテーマがコンセプトなんだよ。もちろん、ゴールド・エクスペリエンスは再生がテーマのアルバムな。プリンスは所属先の事務所と対立して、カムを発売してから、プリンスって名前を捨てて死んだことにしちまうんだ。そんで、このマークでしばらく音楽活動することになるんだけどよ、その第一弾がゴールド・エクスペリエンス、プリンスって名前を捨てて、新しい自分として作り出したアルバムなわけだ。ジョルノのスタンドは生命を生み出すだろ、ぴったりじゃあねえか」

よかったな、って仗助先輩が笑う。僕は空条さんの意図をようやく把握して、ありがとうございますって笑った。もちろん、空条さんがそこまで考えてなかった、たんなる恐ろしいほどの偶然の一致だっただけだなんて僕たちは知る由もないのだ。

いよいよ邦楽しか聞かないんだと言い出しにくい雰囲気になってしまった空条さんは沈黙するけれど、もともと口数が少ない人だから僕たちは全く気づかなかつたのだった。

ソラリス

25メートルの大木が続く並木道は、新緑がまぶしい。空を見上げると、先がとがっていて、ぎざぎざが曲線状になっている変わった葉っぱがたくさん生い茂っている。定禅寺通りや青葉通りのケヤキ並木は、天然のアーチとして青々とおいしげっていた。

いつもなら木漏れ日の温かな日差しを浴びながら、下校するところだが、残念ながらそういうわけにもいかなかった。

天気予報が外れたことを悟ったのは、放課後のチャイムが鳴り響く下校の途中だった。ぽつり、ぽつり、と降り始めた雨は、あつという間にアスファルトを真っ黒に変えていった。どんよりとした分厚い雲に覆われている空は、不安げに見上げていた仗助をあざ笑うように激しさを増していく。

弾かれた雨粒は道路のへこみにたまり始めて、あふれ出した水の流れば両脇に設置されている用水路の中に流れ込んでいった。その水たまりから跳ね返る泥水で指定靴と制服の裾が汚れてしまうのもものともせずに、みんな大慌てで走り始める。

このままだと学生服はもちろん、学生鞆の中にまでびしょ濡れになってしまう。ロッカーに放置している置き傘を回収すればよかつたと後悔しながら、仗助は大急ぎで最寄りの雨宿りができるサンマートまで走った。みんな考えることは同じようだった。

指定靴から入り込んだ雨水をたっぷり含んだ靴下が気持ち悪くなり始めたころ、ようやく仗助は自動ドアをくぐる。いらっしやいませー、と店員の女性はうれしそうに笑う。雨宿り特需に恵まれているからだろう。

仗助が到着したころには、もうすでにぶどうヶ丘学園の制服を着た高校生や中学生が、迷惑そうな顔をして空を見上げている。

雨がやむまでサンマートで時間を潰すことにしたらしく、ゲーム雑誌や漫画を手に立ち読みを決め込んでいるひと。ちよつと高めのコ

スメの新作をチェックしているひと。100円均一のお菓子をどれにしようか、延々と悩み続けているひと。

サンマートの新商品ラインアップを手当たり次第に確かめて、購入しようか悩んでいるひと。長蛇の列になっていているトイレまでの行列に並ぼうとするひと。いつもより混んでいた。

さあて、どうすつかなあー、とお目当ての雨具コーナーに視線を向けると、すでに大きなサイズの傘は売り切れていて、小さなサイズの傘しかのこっていない。小学生じゃあるまいし、カップはダサくて格好悪いから却下することにして、仗助は迷うことなくその傘から比較のきれいな包装のやつをぬきとった。

そして、あんまり並んでない方のレジの列に並んだ。ちよつとはやまねえかなあ、なんて考えながらサンマートの向こう側をみた。一向に止む気配を見せない雨にいら立ちを感じながら、どんどん進む列を詰めていく。

学生鞆から財布を取り出してしばらくすると、仗助の番がやって来た。ぴ、とレジカウンターのバーコードを当てた機械が音を立てた。値段が表示されるので、仗助は小銭入れのところから硬貨をきっちり支払った。

「すぐお使いになりますか？でははがしますねー」

慣れた手つきで店員さんが透明なビニル包装から半透明な白い傘を取り出してくれる。どうぞー、と手渡された仗助は、レシートを手渡そうとする店員さんに首をふった。にっこり笑った店員さんは、ありがとうございましたー、と笑って会釈する。

いつもだったら店員さんの視線に耐えながらゲーム雑誌で新作をチェックして、ジャンプの立ち読みをするところだ。しかし、今日はそういう気分じゃなかった。びしょびしょにぬれてしまってる状態で雑誌を読むほど仗助は厚顔無恥になれない。

学ランで手をぬぐっても、雑誌やジャンプにしわが寄ってしまった

ら買わなきゃいけない。一回億泰がそれをやらかしてるのをみてるから気が引けたのだ。傘を買ったせいで、お小遣い前の財布はびつくりするほど軽かった。それに今日は早く帰ってさっさと着替えてしまいたかった。

自動ドアが開いて、さつきより激しくなった気がする雨の中に練り出そうとした時、声を掛けてくる人があつて仗助は足を止める。

「おーつす、仗助じゃあねえか。今日は出てくんの遅かったな、てつきり帰ったと思つたぜ」

「だからいったでしよ、億泰くん。もうすこし待とうって」

「仕方ねーだろ、康一。下駄箱すつからかんだつたんだから。ふつふうもう帰っちまったと思うだろー?」

「おれだつて、好きで居残りやつてるわけじゃあねーんだぞ、億泰! それもこれもアンジェロのせいだ、クツソ! つつーかよお、なんだよ、速攻でおわらせつから待っててくれっていったじゃあねえか。なんで先帰っちまうんだよ、薄情だなあ」

「居残りだあ? なんもん、普通にサボればいいじゃあねーか」

「それがよー、ふけやがったら、単位はやらねエツて言われちまったんだよ。さすがに留年したら、じーちゃんとおふくろにどやされつから」

「ああ、そつか。仗助くんのお母さんは先生だし、良平さんは警察官だもんね」

「きびしーんだなあ、仗助んちは」

「ま、仕方ねーだろーがよ。つつーか、本当におれの下駄箱みたの
よ、億泰。おれ一回も外でてねーぞ?」

何番の下駄箱をみたんだ、と聞いた仗助は、出席番号とは程遠い番
号をいわれてしまい、億泰う、とじとめでにらみつける。あれ?そう
だっけ?と冷や汗な億泰に、ばかだなあ、億泰くんは、と康一は苦笑
いである。

やっぱなあ、と呆れた。罰としてなんかおごれとせびられた億泰
は、しぶしぶアイスをお買い上げである。じゃあ、そろそろ帰ろうぜ、
という仗助の言葉に康一たちは頷いた。

「仗助君、濡れてるよ、それ」

「ああ、これか?このサイズの傘しか売ってなかったんだよなあー」

「でもよ、さすがにそれはちとおかしくねえか、仗助」

「仕方ねーだろ、もともとちっちゃいんだからよー」

「いや、そうじゃなくって。風邪ひくよ?」

「いいんだよ、びしょ濡れになっちまったら、それこそ大惨事になっ
ちまうからな」

康一と億泰は顔を見合わせた。180センチもある仗助のリーゼ
ントの上にはあまりにもちっちゃすぎる傘がゆれている。もともと
サイズが小さいから、肩のあたりが濡れてしまうのは仕方ない。しか
し、仗助が傘を傾げる先は、朝早くにおきてセットするというリーゼ
ントに大半がもっていかれてしまっている。

つまり、仗助自身がすごく濡れてしまうさし方をしていた。髪形
をけなされただけでマジ切れする仗助らしいこだわりとはいえ、もう

ちよつとましなやり方をすればいいのに。よくわかんないなあと康一は思う。億泰が説得した方がいいのか、と小声で訊いてくるので、康一は首を振って肩をすくめた。

仗助との付き合いの長さはほんのちよつぴりだけ康一の方が長いから、億泰は時々こうやって僕に聞いてくるときがある。もちろん、その逆もあるだろう。康一がみたことがないだけで。突っ込みを放棄した康一は、ほんのすこしだけ雨脚が弱まった空に安堵しながら、仗助君と通学路に繰り出した。しばらく歩いたときのことだ。

「あれ？」

「どうした、仗助。なんかいんのか？」

「あそこにパトカー止まってねえか？」

「え？あ、ホントだ。黄色いテープがあるね。何かあつたのかな」

「さあ？」

サイレンの音こそ鳴らしていないものの、強烈な赤が一定のスピードでくるくるとあたりを回ってるのがわかる。まるで何かを取り囲むようにパトカーが何台か止められていて、警察の人たちが立っている場所を覆い隠すように黄色いテープが張り巡らされていた。

黄色い旗を持った警察の人が行きかう車を誘導している。みんな考えることは同じだ。なんだなんだと人だかりの山が出来始めていて、通行の邪魔になっっている黒山をさばく作業に追われていた。すると仗助がその中に見知った顔を見つけたみたいで、つかつかつか、と誘導している警察の人に話しかけた。

「やっぱそうだ、おーい、爺ちゃん。なにやってんだよ」

仗助の声に気付いた警察の人がこつちをみた。そして、仗助だと気付いたその人は、KEEPOUTの黄色い線を潜り抜けたことで、苦笑いした。東方良平。仗助の祖父である。警察を前にして、背筋を伸ばすことしか出来ないのは何故なのか、いまだに答えが出ない高校生組である。

後ろめたいこともないのに緊張するのは何故なのか。きつとそれは永遠に分からない。康一たちもこんにちはー、と軽く会釈した。おう、いま帰りかあ、と良平はくしやりと笑った。ちよつと困った顔をしているのは、いまが仕事だからだろうか、と思いきやどうやら違うらしい。良平は警察の人と会話を交わしてから、こつちに近付いてきた。

「よう、仗助。この道は通つたらだめだと聞かされてなかったのかー？」

「あー？そんなこと何にも聞いてないぜ？」

「あんのバカ校長。ここは誰も通すなつったのに、これだ。ちやあんと仕事してもらわねえと商売あがったりじゃわい」

「なんかあつたのか、爺ちゃん？」

「なあに、たいしたことじゃあない。わしが駆り出されたのは、もっぱら交通整理とお前らみたいなの野次馬を追っ払うためじゃからな。ほら、帰った、帰った。そんなに知りたきゃ帰ったらニュース番組でも見るんじゃない」

「ちえ、ケチ」

「ケチで結構、コケコッコーってな！そうそう、朋子には今晚遅くなりそうだから、メシはいらんっていつといてくれんか。どーやら今日は

帰れるかどうかも怪しいもんだ」

「わかったけどよ、せめて何してんのかくらい教えてくれないだろー?」

「だーめだ、だめだ。ガキが見るようなもんじゃあない。ほら、さつさと帰った、帰った。多分明日も交通止めになると思うからな、明日の通学路は迂回してくんじゃぞ。遅刻しても知らんからな」

「へーへー、分かったよ。じゃあな、爺ちゃん。がんばれよー」

「言われなくてもやったるわい。じゃあな、広瀬君に虹村君。うちのバカ孫を頼んだよ」

「だあれがバカ孫だ、くそじじい」

けけけ、と笑った良平は、東方巡查とスーツ姿の刑事らしき人に呼ばれてそのままKEEP OUTの黄色いテープの向こう側に消えてしまった。ブルーシートに覆われている向こう側をうかがい知ることとはできない。諦めた仗助たちは、大人しくいつもの通学路とはちよつと違う道を通ることにしたのだった。

「仗助お兄ちゃん?」

仗助たちがその子に出会ったのは、ぱっぱぱと不規則に点滅する街灯が目立ち始めた道でのことだ。今にもきれかかりそうな白色やオレンジの明かりに照らされる女の子がぼつんとひとり、傘も差さないで立っている。

不思議なことにその女の子の肩くらいまである金色の髪の毛は、さらさらとひるがえっていた。カチューシャのように頭のでっぺんで結ばれている青いリボンも濡れている様子はない。たまた、と足音も

なく一目散に駆け寄ってきた女の子は、綺麗な白い襟のある真っ青なワンピースを翻して、仗助のところへやって来た。

こしのあたりに巻かれている白いリボンが、うしろで蝶々結びになっていた。白い靴下と青い靴をはいた外国人の女の子は、とても上手な日本語で笑いかけている。

「よお、アリス、久しぶりだなあ」

「うん！ねえねえ、仗助お兄ちゃん、うしろのお兄ちゃんたちは仗助お兄ちゃんのおともだち？」

「え？ああ、そうだけ」

「ほんと!？」

ぱつと笑顔になった女の子が、康一たちのところにやってくる。人懐こい無邪気な笑顔を浮かべて、アリスとよばれた女の子は笑った。

「はじめまして！あたし、アリスっていうの。あなたは？」

「僕？僕は広瀬康一だよ。よろしくね、アリスちゃん」

「俺ア、虹村億泰だけ、よろしくなあ」

「うん！康一お兄ちゃんに、億泰お兄ちゃんね！あら？！そういえば、仗助お兄ちゃん、ジャックは？」

「あー、ジヨルノか？タイミング悪かったなあ、アリス。今日はあいつ、児童養護施設っていうところに用があるんだって言ってたぜ。放課後になったら、保護者の兄ちゃんが迎えに来るっつってたからよお、さっさと帰っちゃったらしい」

「えー、つまんなあい。せつかくまた会えると思つてたのにー」

「こればかりはおれでもどうしようもねえからなあ、ごめんな、アリス。ところでよお、おめーがここにいてるってことは、あれか？新しいお友達でも見つけたのか？」

うん、とアリスは花咲くような笑みを浮かべてうなずいた。

「えっとねー、えっとねー、仗助お兄ちゃんとお別れしてから、たくさなお友達が増えたのよ。ねこさんでしょー、わんちゃんでしょー、ウリ坊ちゃんでしょー、それからそれから」

指折り数えてお友達つてやつを覚えてくれるアリスは、無邪気にころころ表情を変える女の子だった。仗助は一体どうやって知り合っただらう、と康一と億泰は顔を見あわせた。二人の反応に気付いた仗助がにひと笑った。

「ランド神父つて聞いたことねえか、康一。知ってるはずだと思うんだけどよオ」

「知ってるも何も、あれだろ？ニュースに出てた………つてまさか」

仗助が出したヒントは、そのものずばり答えだった。なにせ社王町でその外国人の苗字なんて、一件しかないのだから。疑問符がとんでいる鈍感な億泰は、どんどん青ざめていく康一に驚いて、アリスと仗助を見比べている。なんだよ、教えてくれよー、と呑気に言われた康一は、どもる口調に苛立ちながら、なんでわかんないんだよおつと叫んでしまった。

いきなり耳元で怒鳴られた億泰はぎよつとした様子で後ずさる。いきなりなんだよーと困り顔だ。ああもう、怖がつていいんだか、驚

いたらいいんだか、あきれたらいいんだか分かんなくなってきたぞ?! 康一ははあとため息をつくしかなかった。億泰がニユースを見るような人間じゃあないことはここにいる誰もが分かってる事である。

「億泰君、ランドっていう外国人一家がね、2週間ほど前にみんな死んじやった事件があったんだよ。億泰君の家よりでっかい洋館だから、結構有名んだけど知って……いや、知らないよね。ごめん。とにかく、アリスちゃんは、死んじやったんだよ、2週間前に。つまり、この子は幽霊なんだ」

数秒遅れて、ようやく億泰の絶叫が響いたのだった。この様子だと幽霊屋敷に行っても出てきた後の方が腰ぬけて立てなくなってるタイプな気がしてきた。めんどくさいなあ、もう。

すっかり驚き損ねてしまった康一は、アリスが幽霊のイメージとは全く違って、足もあるし普通の人間にしか見えないことに驚いた。アリスは康一を見上げて瞬きした。

「なあに?」

「ほんとに幽霊なの? そうはみえないなあ」

「ほんとよ、ほら。仗助お兄ちゃんのお手で、すりぬけちゃうでしょう?」

「でも、幽霊って足がなかったり、宙に浮かんだりするじゃあないか。でも、君は普通の人と変わらないよね」

「おばけにはおばけのルールがあるのよ、康一お兄ちゃん。おばけになっても空は飛べないし、おうちに入るにははいっていいですよって言うてもらわないと入れないの。すりぬけることは出来ても、そんなにいっぱい遊べないのよ? だあれも気付いてくれないんだもん、つま

んない。お友達も死んじゃったら、急いであたしのおうちにしまっ
ちやわないと、お空にとんでつちゃうんだもの」

「えっ、もしかして、そのお友達って死んじゃった動物のこと!？」

「うん、そうよ。だってあたしのおうちは、それ以外のことはなんにも
してくれないんだもの。つまらないわ」

「アリスは死んじまってからスタンド使いになったんだよ、康一。ス
タンドって精神的に成長すると暴走気味でも扱えるようになるらし
いんだけどよ、本人が死んじまったせいで制御すんのがすっげえ難し
いんだ。おかげでアリスはお友達を求めて社王町をランダムに出現
するあのでっかい屋敷に振り回されてんだよなあ?」

「うん。いろんなところに行けるのは楽しいけど、新しいお友達をし
まっちゃうたら、新しいお友達が出来るまでどこにもいけないの。突
然とばされちゃうんだもの、なかなか仗助お兄ちゃんたちに会えなく
て寂しかったのよ」

「へええ、なんか大変なんだねえ」

「でも、今日は康一お兄ちゃんと億泰お兄ちゃんと会えたからいい日
だわ!」

久しぶりに会えた会話が通じる相手がよっぽどうれしいらしく、今
度はいつごろこの道を通るのかと熱心にアリスは聞いている。これ
くらいかわいい幽霊だったら、怖くないかもしれない。社王町のどこ
かで誰かが死んじゃったら、ここからいつの間にか姿を消してしまう
女の子。

噂になってる気がする。すっかり怖くなくなったのか、億泰はよう
やく復活して、明日もまたここを通ろうぜと笑った。ほんと!?!とアリ

スはうれしそうに笑った。ジヨルノがなんでジャックなんて呼ばれてるのか知らないが、ジヨルノに知らせておかないといけないねって康一は仗助にいった。

「そーいやあ、アリス、カズヤはどうしたよ？」

思い出したように、仗助が言った。アリスは寂しそうに笑った。

「お空に帰っちゃった」

「そっかあ、成仏しちゃったのかあ」

「うん。ほんとはね、一緒に行こうって言ってくれたから、手を繋いでせーのってしたんだ。でも、だめなの。だめだったの。あたし、あのうちから離れられない。気付いたらカズヤお兄ちゃんいなくなっちゃった。あたしだけ、あのおうちに戻されちゃったの」

「え、でも、いまここにいるんじゃない？」

「あたしのおうちがすぐに飛んでこれるところまでだったら、お外に遊びにいけるのよ。50メートルくらい。お友達をしまっちゃうのはあたしのおしごとだから」

アリスのスタンドは、射程範囲が50メートルってことだ。つまり、アリスが本気になったら、仗助たちはあつという間にアリスのおうちに引きずり込まれてしまうことになる。でも今のところ、アリスはおしやべりするのが楽しくて、一緒に遊んでほしい気分じゃあないらしい。

ほっとした康一たちを尻目に、仗助はまた今度かくれんぼでも鬼ごっこでもして遊ぼうかとアリスを誘って喜ばせていた。子供の相手が上手だなあ、仗助君。よせよー、と照れながら仗助は交通止めの

曲がり角を振り返った。

「なんだよ、爺ちゃんのやつ、驚かせやがってえ。アリスがいるってことは、オトモダチを迎えに来たってことだろ？わざわざ思わせぶりなことというから、何だと思ったら、心配して損したぜ」

「そうなの？」

「うん、そうよ。あたし、今日、あたらしいオトモダチをしまつちやつたの」

「でっけえ鹿でもひいちまったんじゃあねえか？」

「クマかもしれないぜ？」

「あー、そっか、なるほどね。あれだけいっぱい人がいるってことは、アリスちゃんのお友達はよっぽど大きなオトモダチなんだね」

「うん」

「気になるなあ、教えてよ、アリスちゃん」

「だめー、教えてあげない」

うふふ、とアリスは意地悪そうに笑った。仗助たちは顔を見合わせで笑った。30分ほどおしゃべりに夢中になっていると、ぶどうヶ丘学園から完全下校時刻を告げるチャイムが鳴り響いた。

もうこんな時間になってしまったらしい。また明日、同じ通学路を通って帰ることを約束した仗助たちは、ようやくやみ始めた雨の中、アリスに別れを告げて、家路を急いだのだった。

「つつーことがあったんだ。明日、アリスんここに遊びにいかねーか？ ジョルノ」

時計は夜の8時をまわっている。仗助はジョルノたちが施設から帰ってくる時間を見計らって電話をかけた。帰りに中等部でジョルノを拾えばアリスのところに直行できるからだ。しかし、ジョルノの反応が思いのほか悪い。魅力的な提案ですね、とジョルノは笑うが言葉をごこした。

『残念だけど、僕は明日、アリスのところにいけそうにないです。3日ほど忌引で学校休むことになったので』

「え、き、忌引?! なんだよ、施設でなんかあったのか?」

『いえ、違います』

「じゃああの刑事さんになんかあったのか?!」

『ええ、あの人の娘さんが亡くなったんですよ』

「え、あの人独身じゃなかったのか?」

『どうやら3年前に奥さんが実家に帰って以来、別居状態だったようですよ。僕のこととはあらかじめ相談して、許可はもらってるみたいです。家族だけでするそうなので、僕も手伝おうかと』

「そっか、わかったよ。残念だけどアリスにはそう伝えとくぜ」

『ありがとうございます。そうだ、アリスに聞いて欲しいことがあるんですが、いいですか?』

「なんだよ?」

『テレビ、みてます? NHKみてもらった方が早いんですが』

あー、わかった、と仗助はテレビのチャンネルをかえた。

社王町の公立小学校で行われた春の交通安全運動を特集していたアナウンサーの和やかな表情が一転する。すつと表情を引き締めたアナウンサーは、デスクから回ってきた原稿を手にとると、カメラ目線にまっすぐ突然飛び込んできたニュースを読み上げた。

今日の午後4時ごろ、交通事故があつたというニュースだ。近くの小学校に通う低学年の女の子が速度違反で走行していた白いワゴン車にはねられ、病院に運ばれたらしい。それだけならアナウンサーの上の方に字幕だけ流せば事足りるのに、なんでわざわざ速報が流れるんだろう、と思つていると、どうやら事件はかなり複雑なようだった。犯人が行方不明なのではない。女の子をはねてしまったサラリーマンの男性は、あわてて車を停止させて女の子のところに駆け寄り、出血していることに気付いて、119番通報しているからだ。現場に急行した交番勤務の警察官は、良心の呵責に耐えきれず、あつさり飲酒運転を自白した彼をそのまま現行犯逮捕した。

事実上の出頭だ。現場には雨に流される血痕と黄色い傘、が放り出されたままだったから、彼の見間違いということはない。目撃者こそなかったが、とどめにべこりとへこんだワゴン車とくれば、狂言はありえない。

もちろん警察官は、女の子の行方を尋ねる。彼はいう。なにかをひ

いたという感覚しかなかった彼が女の子を自覚したのは、金切声をあげて発狂したように駆けてきた女性がいたからだ。唯一の目撃者だったという女性は、ぐったりとして動かない女の子を抱えあげ、何度も何度も名前を呼んでいて、彼は母親の目の前で女の子をひいてしまったと思つたらしい。

血相変えて睨みつけてきた女性は、救急車と警察を呼ぶという男性の謝罪を信頼できないと跳ね除けた。女の子は病気なのだと言った。普通の病院に緊急搬送されても、たらい回しにされたら女の子は確実に死ぬ。もしかしたら、証拠を隠滅するために殺されるかもしれない。

だから女性が女の子をかかりつけの大学病院に連れていくと一方的に怒つたらしかった。もちろん彼は女性が女の子を乗せて車が走り去るのを見送り、警察が来るまで待つていた。

警察官は応援を要請して、交通事故現場を整備するための手続きに入った。パトカーに彼は乗せられ、現場待機していた。警察官はさっそく女性が向かったという大学病院に連絡を入れる。目撃者である母親から事情を聞かなければならない。女の子の病状も気になったからだ。

しかし、そこから事態は思わぬ展開を迎えることになる。大学病院側は重症の女の子を連れて駆けこんできた女性などいないというのだ。いやな予感がした警察官は、近くの病院に片っ端から電話をかけまくり、女の子の名前と女性の特徴を事細かに伝えたが、そんな女性と患者は受け入れていないという返事が揃ってしまった。

蒼白になった警察官は、現場に到着した応援のパトカーに駆け寄り、女の子が誘拐されたという事実を報告。それから現場は大騒ぎになった。

女の子の目撃情報や行方を知っている人が問い合わせる電話番号が表示される。事故現場は見覚えがありすぎる道だ。おいおいおい、まさか、と仗助は息を飲む。

「その子が刑事さんの娘なのか?！」

『違いますよ』

「え、じゃあ、なんで」

いかけた言葉はアナウンサーのニュース速報に押し流される。事故現場のすぐ近く、アリスと出会ったあの道で女の子の遺体が見つかったというのだ。仗助は絶句した。

表示される刑事と同じ苗字の女の子。体育祭の写真なのか、紅白帽子に体操服姿の女の子がピースサインをしていた。今回の誘拐事件と酷似した状況で行方不明になった女の子らしい。3年前に行方不明になった女の子が、今、見つかったというのだ。児童連続誘拐殺人事件の幕開けである。

『実は今回誘拐された女の子は、施設に預けられてた子なんですよ。僕もよくしってる子でした』

ここまでくると行動を起こしたいと思うのはあたりまえだよなあ、と仗助は思った。

ジオルノがお世話になっている施設は子供の手の届く範囲では、ハサミやカッターといった刃ものを保管することは禁止されているらしい。スタッフルームにまとめて保管してあるそれを使うには、必ずスタッフの許可証がいるし、時間と名前をシートに記録しなければならぬ。

そして、使う場所はスタッフの目が届くこの大広間か、スタッフルームだけに限定されている。事実上のスタッフ同伴じゃないと使えない。めんどくさいな、と仗助はいうが、無理もないですよとジヨ

ルノはいう。ちよつとでも目を放すと死のうとした子どもがいたからと。

自殺は禁忌とされている宗教が母体となっている施設でだ。スツツはその子を救おうとした。でもできなかった。結局、その子は自分で解決してしまった。できたのは、その子がたったひとりであるため、特例として一人部屋を用意したことくらいだ。

児童養護施設で一人部屋は特例中の特例だ。それが使われたってことは、普通じゃあない。徹底的にモノが排除された一人部屋なのだ。そこには寝るためのベットと机だけが置いてある。首をつらないように落下防止の柵すら取り外された、シンプルなるつくりのベッドだけが休める場所だ。

まるで独房のような部屋だ。普通の感性を持つている人間は間違はなく発狂しそうになる。でも、だからこそ安らぎを覚える人もいる。そのための部屋だ。そこに入るようになるのは、衝動的に自分を傷つけてしまうようなものを抱えている人間だけだった。

仗助はニュースに映った、今回誘拐された女の子の表情を思い出す。7歳くらいの女の子なのに、ぞつとするほど無表情だった女の子、無機質だった女の子。感情が完全に死んでしまった青白い顔だ。テレビで報道するなら、せめて入学式用の写真を用意するものだし、笑顔にならないとカメラマンは仕事にならない。

どこから入手したのかはお察しというやつだ。あの写真の女の子が来ていた洋服は、明らかに年齢以下が対象のものだった。女の子は、7歳なのにその部屋の住人だったというわけだ。

「信じらんねえな、ひつでえことしやがる親もいたもんだ」

『父親が引き取りにくるのを楽しみにしてたんですけどね、あの子』

小学校の名前を聞いた仗助は、口を挟んだ。

「しっかし、どうして嫌がったり、逃げたりしなかつたんだろーなあ。知らない人と一緒に誘われても、車に乗っちゃいけませんって教えてもらったんだろ？」

さっきのニュースでやっていた交通安全教室。その小学校に通っているジョルノが口にしたので仗助はつぶやいた。うれしかったんだと思いますよ、とジョルノは静かにささやいた。

悪夢の始まりは、単身赴任で北海道にいる父親と離れ、この街で暮らしていた母親が、妻に先立たれて子供がいる男性と浮気したこと。母親は自分の子供がいるにも関わらず、浮気相手に熱をあげてその子供にも間違った愛情を注ぎ始めた。

いくら頑張っても褒めてくれない母親は、いつもいつも浮気相手の子供ちゃんはお母さんがいなくて可哀想だから、と勝手に自分の子供の私物を与え始めた。しかも、自分の子供の世話は完全に放棄して、学童保育に任せ切り、しかも平気で迎えを忘れる。

浮気相手の子供にばかり構う母親の愛情を受けようと必死になった女の子は、自分が可哀想になることで母親の愛情が戻って来るとはならないかと勘違い、わざとケガをするようになる。でも、母親にとってはかわいそうなことじゃなかったようだ。

やがて女の子の可哀想な子になろうとするけなげな行動はエスカレートして、その異常性に気付いた近所の人々が動いたようだ。有給を取って飛んで帰ってきた父親は、母親との離婚が終わるまでこの施設に女の子を預けることにしたらしい。

さすがに母親と父親の動向まではわからないらしいが、父親と一緒に北海道に行くことを夢見て、少しずつ女の子は元気になっていった矢先の出来事らしい。

なるほど、知らない人とはいえ、母親と同じくらいの女性に必死で介抱されるのは、泣きたくなるくらいうれしかったに違いない。仗助はひっつでえなとつぶやいた。悪質にもほどがある。

『僕が今日、施設にいったのは、あの子のお別れ会に参加するためだったんですよ。主役がないお別れ会なんて冗談じゃない。仗助、お願いできますか』

「ああ、アリスに知らないか聞いてみるぜ」

『お願いします。くれぐれも注意してください。相手はスタンド使いかもしれませんから』

「はあ？なんでだよ」

『スタンド使いじゃなかったら、死体愛好家の変人ですね。最初の被害者であるあの人の娘さん、遺体がおかしすぎるんですよ。形兆先輩に散々死体を作らされた経験が生きたとは思いませんでした』

自嘲したジョルノはいうのだ。変わり果てた娘さんとジョルノは面会している。最低でも3年が経過しているあの人の娘さんは、普通なら白骨化していないとおかしい。でも、まるでついさつきまで生きていたかのような状態だというのだ。しかも死因がわからない。謎の突然死。検視解剖してもわからない不可解さ。

実家から病院に駆けつけた刑事さんの奥さんは、娘の変わり果てた姿に卒倒したという。無理もない。3年前に死んだ人間は、3年分成長した姿で発見されたのだから。介抱したジョルノに、刑事さんの奥さんはうちあげた。もし冷凍したら解凍したとき、体積の変化でえらいことになる。

まるで仗助の能力のように、なおしたとしか思えない。でも3年前に娘さんは死んでいる。まるで生きているのに死んでいる、ゾンビ状態である。こんなスタンド使いしか思いつかないのだ。なぜ犯人がこんなことをするのかはわからない。

でも刑務所を襲撃し、凶悪犯にスタンドの矢を片っ端から打ち込んだやつがいたことを仗助は知っている。何があってもおかしくはな

いのだ。ごくりと仗助は息を飲む。ああ、わかったぜ、と仗助はうなずいた。

ソラリス2

アリスのスタンド、サウンド・ガーデンは、いつでも真夏である。なぜならこの空間型スタンドのモデルは、太平洋に面した外国人専用避暑地にあるからだ。ここに別荘をもつには、夏の1ヶ月間はそこにすまなければならないルールがある。

そのため、アリスは毎年8月になるとこの別荘を訪れていた。だから、むせ返るようなバラの香りが広がる庭園付きの洋館は、アリスにとって夏への思い出なのだ。アリスがS市にやってきたのは去年の4月である。

宗教関係者である両親の都合で、移住してきたのだ。S市在住のアメリカ人宣教師によって明治期に建てられた別荘は、邸宅になった。

しかし、3週間前に起こったアンジェロによる陰惨な一家心中事件のせいで、アリスは死んだ。アクア・ネックレスに操られ、一時的にスタンド使いになった父親の影響で血の発露が起こり、スタンドが発現した直後に死んだ。邸宅で死んだ。

スタンドのヴィジョンは、本体の精神が大いに反映されている。死にたくない、と彼女は思った。だから逃げるための彼女だけの世界が生まれた。最愛の両親と夏の1ヶ月を過ごす別荘というイメージの中で、スタンドは誕生した。この時点では、ただの空間型スタンドだった。

主と決めた人間のために、いつでもどこでも出現する真夏の別荘である。でも彼女は死んでしまった。本来なら本体が死亡した時点でスタンド能力は失われるのだが、不幸にもアリスのスタンドは、本体の死後に自立型のスタンドに移行してしまったのだ。

もうこの時点でアリスの意思とは関係なく、主のためだけに存在する意志ある別荘である。不幸にもスタンドの中で死んでしまったアリスが、このスタンドの初めての住人になったものだから、サウンド・ガーデンは幽霊となったアリスを主と認定した。

そのせいでアリスはどこにも行けなくなってしまった。サウンド・

ガーデンの外に出ても、主の不在を感知した別荘が迎えに来てしまう。一人にしないで、というアリスの叫びに応じて、最愛の両親の幽霊までそこにいる。幽霊の姿は死んだ時の姿である。

アリスを守ろうとして、悲惨な最後を遂げた人たちがまともな状態で幽霊になっている訳もなく、アリスと意思疎通できる幽霊は皆無だった。幽霊になってしまったアリスは、誰も見つけてくれない世界にひとりぼっちになり、寂しい、と思うようになる。

友達が欲しい、と思うようになる。主のお願いを聞き入れた瞬間から、サウンド・ガーデンは主と同じ存在である幽霊を探して、S市をアトランダムに移動するようになったのだった。

「だからよー、ここは幽霊だらけなんだぜ」

な、アリス、と笑う仗助に、バラの庭園の主であるアリスは、にっこり笑って、うん、と頷いた。そ、それは見ればわかるよーつと康一は悲鳴をあげる。さらつというなよ、こえーだろ、と億泰が体を震わせた。かわいいでしょ？つて笑うアリスの足元では、車に轢かれて死んだと思えない犬が、わふわふとじゃれついている。

抱き上げてニコニコ笑うものだから、ぞぞぞぞつとしてしまうのは無理もなかった。ぽたぽたたれている赤いインクはなんだ。だらりとおなかからのぞいてるモザイク必須のグロはなんだ。そもそもおぞましい音はどこから聞こえてくるんだ。いろいろツツコミどころはあるのだが、そんな大怪我をしている犬を前にしても治療しない仗助が意外だったのだ。

聞いてみれば、さすがに幽霊までは直せねえよ、実体ねえだろー、と仗助はいう。なんでそんな平気なの、と康一はいう。もうなれちまっただよ、数時間もここにいればよ、と仗助はどこか遠い目をしていった。

アリスは3人のお客さんを案内できてよっほど嬉しいのか、ずっとはしゃいでいる。それだけなら微笑ましいのになあ、と康一はためいきだ。見慣れないお客さんに興味津々の幽霊の動物たちが跋扈する

庭園である。

和製ホラー映画もびつくりのモンスターハウス、ホラーハウスになっっているのに、なんでアリスは平気なんだあ？、と億泰は思った。というか、このアリス・ランドという女の子は、敬虔な宗教家の一人娘だったにもかかわらず、あまりにも幼すぎる女の子である。

純粹というか、無邪気というか、いい意味でも悪い意味でも子供であり、7歳とは思えないほど真っ白な女の子である。どういう環境で生きてきたらこんな精神性が生まれるのか、考えるだけでゾツとするのは気のせいか。アリスがいうお友達は、7歳の女の子がお友達というには、あまりにもぐろすぎる。

このサウンド・ガーデンに連れてこられるお友達は、基本的に死んでしまった動物たちである。交通事故とか、いろんな理由でS市で死んでしまった動物たちが、幽霊になった瞬間にそれを探知したサウンド・ガーデンが出現し、アリスが回収する。幽霊の姿は死んだ当時の姿だ。

おかげで見た目がものすごくグロいことになっている。スプラッタ映画も真っ青な光景が、夏真っ盛りなバラの庭園で繰り広げられているのだ。げんなりしないほうがおかしい。それを慣れですませるってどういうことだ。億泰と康一は顔を見合わせた。

億泰の家を幽霊屋敷と勘違いしていた時には、自宅前が幽霊屋敷とか怖くて寝れなくなるだろ、勘弁してくれよって怖がってたのに。あー、と頭を掻いた仗助はアリスを見た。なあに？ってアリスはこてんと首を傾げる。

「つつーか、前より増えてねえか、アリス」

「うん！お友達、どんどん増えてるんだよ、仗助お兄ちゃん。今度、教えてあげるね！」

うふふ、とアリスは笑う。犬をおろしたアリスの服は、汚れひとつない。幽霊どうし、やっぱり触れているわけではないようだ。でも、今日は違うの、ってアリスは笑う。ついたよーって前を指差した。目

の前には洋館がある。見上げるほど大きな屋敷にみんな口を開けて固まった。

「いこいこ、お兄ちゃん、と手招きするアリスは青いスカートを翻しながら、軽快な足音を立てながら真っ白な階段を上っていく。獅子の顔をした銅の呼び鈴が鎮座する扉は、盛大にブツ壊れていた。強行突破した跡がありありと残っている。」

「あ、これお兄ちゃん達が遊びに来た時のだね、とアリスは笑う。何があつたんだろう、と二人は思った。あ、と声を上げた仗助は、やっべーって顔をしながらアリスを見る。気まずそうにごめん、と言いながら、クレイジー・ダイヤモンドを発動させた。」

「とりあえず、チェーンロックがかかる程度には復元された扉である。すつごーい、仗助お兄ちゃん、やっぱり魔法みたい！と無邪気に喜ぶアリスを見てみると、さっきのギャップが薄らいだ気がして、ほっとしてしまう康一なのだった。」

「そんなこと知るはずもないアリスは、はやくはーやーくー！と催促は止まらない。どんだん先に行ってしまう女の子は、螺旋階段の向こう側に消えてしまう。レッドカーペットを3人は慌てて追いかけた。」

扉をあけると、清楚で上品なデザインの子供部屋が広がっていた。ベッドやカーテン、机、洋服ダンス、ランプに至るまで、すべてがしんと水色、そしてピンク色のパステルカラーで統一されたやわらかな雰囲気部屋である。どうやらここはアリスの部屋のようにだ。

「高校1年生の野郎どもが入るには少々勇気があるファンシーな空間に足を踏み入れた仗助たちは、中央に置かれているベッドに人形が寝ていることに気がついた。仗助たちがやってきたことに気がついたアリスは、ベッドのシーツを折りたたむ。そこには60センチはありそうな大きなお人形が寝かされていた。」

「ミカちゃん、ミカちゃん、お客様がいらしたわ。起きて？」

まるでおままごとをする女の子である。微笑まじさがここにある。

「昨日お話ししたでしょ？ 仗助お兄ちゃんよ。なんでも直しちゃう魔法が使えるすごいお兄ちゃんなの。それでね、今日は、億泰お兄ちゃんと、康一お兄ちゃんも来てくれたんだ。いつしよにあそびましょ？」

とんとんと肩を叩く。アリスはあれ？と首をかしげた。

「ミカちゃん、寝てるの？ 起きて、起きて」

一見するとお母さんごっこをしているアリスである。かわいいなあと見ている二人がいる一方で、アリスがミカちゃんつて言うたびに、驚いたような顔をしてお人形をじいつと見る仗助である。もしかしてアリスが紹介したい新しいオトモダチってのは、この西洋人形のことだろうか。

散々グロテスクなオトモダチを見せつけられてきた億泰と康一はほつとする。なんだ、アリスにも可愛いところがあるじゃないか、まだ子供らしいところがあるじゃないか、と安堵する。しかし、アリスが幽霊であることを知っている仗助は、ここに西洋人形がある意味を悟って、おいおい、とつぶやいた。異彩な予感しかしないのは、きつと気のせいではない。

「なあ、アリス」

「なあに？ 仗助お兄ちゃん」

「なんでここにこの人形があるんだ？ 前まではこんなのがなかったよなあ？」

「うん、そうよ。だってこの子、昨日、私がしまつちやつた子なんだから」

「……アリス」

「なあに？」

「お前、いつからものを触れるようになったんだ？」

「なにいつてるの？ 仗助お兄ちゃん。私はお化けだよ？ 死んじやつてるんだよ？ 仗助お兄ちゃんたちにサワレナイのは、変わらないわ」
「じゃあなんで、こいつが、ここにゐるんだよ」

仗助はベッドに寝かされている西洋人形を注意深く見つめた。おままごとをしているのか、一緒に寝るために置かれてゐるのかは知らないが、このベッドに寝かされているのは、ビスクドール、陶器人形である。

仗助の言ってる意味がよくわからないのか、康一は首をかしげる。億泰は、おい、どう言う意味だあ？ って聞いてきた。仗助は人形を見つめたまま言うのだ。表情は真剣である。警戒感をにじませていた。

「アリスから聞いたんだけどよー、幽霊つてのは、おれたちが考えてる以上にめんどくせえもんらしいぜ。空を飛べるわけじゃあない。壁をすり抜けるわけじゃあない。たしかにおれたちにアリスは触れねえが、こういうベッドなんかに触れねえらしい。幽霊には幽霊のルールがあるんだつてよ。じゃあ、聞くがよー、人形に触れることができねえアリスが、どうやってこいつをここまで持つてきたんだ？」

あ、と二人は声を上げる。どういうことだろう？ って聞いてくる三人に、アリスは不思議そうにいうのだ。

「なんかねー、このお人形、だつこでできたの！ だから連れて帰つてきちゃった。昨日ね、見つけたのよ。とつても綺麗だったのに、捨てられていたの。かわいそうだからね、寝かせてあげているのよ。この子ね、ペンキでいたずらされていたのよ」

「いたずらつて？」

「このあたりがね、真つ赤なペンキで汚れていたの。それにとつても趣味の悪いお洋服着て、雨でびっしょりよびしょになってたから、そのお洋服捨てちゃった。このお洋服もリボンも、ママがお人形さんのおめかしするの好きだったから、そこから持つてきたのよ。真つ赤なペン

キ、よごれてたから、落とすの大変だったんだから」

「……なあ、その洋服つてのは、まだ近くにあんのか？」

「え？うん、あるよ？そのゴミ箱」

ゆびさされた先には、パステルカラーのゴミ箱がある。覗き込んでみれば、どこかで見たことがある小さな洋服が突っ込まれていた。

「ところでよー、なんでその人形、包帯なんかしてんだ？」

「そういえばそうだよね。どうして？アリスちゃん」

「やっぱ、あれか？怪我してるから？」

「それなら、その場所を包帯でまいてやるだろ、ふつー」

「もちろん、そこもくるくる巻いてあげたわ。ちよつと壊れてたから。おててと足まで巻いてるのはね、このお人形、とつても壊れているからよ。きつと、前の持ち主に、いじめられていたんだわ」

アリスはかわいそうなお人形さんと怒っている。見せてくれ、と言われたので、彼女はお人形の右手にまいてある包帯をとってみせた。

それはとても不思議な光景だった。陶器で出来ているはずのお人形の手のひらから腕に当たるところまで、たくさんの小さな穴が空いているのだ。その穴の周りはブツブツのように膨れ上がり、真っ赤になっている。まるで予防接種のあと腫れ上がる腕のようだ。

それが複数箇所である。なんだか蓮の花を見てしまったような、気持ち悪さがあった。どうしてこんな小さな穴がたくさん空いているのに、陶器で出来ている腕が割れないのか理由はよくわからなかった。これは包帯でまいてあげたくなる。

「お兄ちゃん達を連れてきたのはね、この子、ミカちゃんって言っただけど、おしゃべりできるのよ。今は寝ちゃってるみたいだけど。だから、お話させてあげようと思ったのになあ」

残念そうにアリスはミカちゃん人形をみる。どこかにボタンが仕

込んであつて、それに触るとおしやべりする機能でも付いているんだろうか。でも、どつからどう見ても、かなり年季が入っているビスクドールである。陶器人形である。アンティークといつても差し支えない。

プラスチック製の安物だったら、ボタンが入つてゐるんだらうなあ、で済んだのだが、どうもそれは違うらしい。ミカちゃんミカちゃん言つてゐるが、アリスは外国人だ。人形に名前をつけるなら、もっと外国人っぽい名前にするだろう。ましてや、この人形はフランス人形なのだから。

聞いてみれば、やっぱり人形が名乗つたらしい。助けて助けてと泣いてゐるから、連れてきたらしい。時間を聞いてみれば、昨日の4時頃だったようだ。

「なあ、アリス」

「なあに？」

「その人形、貸してくれねーか？治してやるよ」

「ほんと!？」

「おう、そんなに怪我してちゃ可愛そうだもんなあ」

「ありがとー、仗助お兄ちゃん！よかつたね、ミカちゃん！」

アリスは喜び勇んでミカちゃん人形を抱き上げる。7歳の女の子が抱きかかえると、大きく見えるそれは、60センチもある白亜の西洋人形。ふわふわとした金色の長い髪。絹のように白い陶器の肌。抱き上げられたことで、透き通るように青い瞳が目覚めます。

その頭のとっぺんを青いリボンがカチューシャのようにちようちよ結びざれている。そして、真つ青なワンピースを着ている。白い靴下と青い靴を履いていた。まるでアリスの生き写しのようである。60センチはありそうな大きな人形を抱っこするアリスは、微笑ましかげれど、全く同じ洋服を着ているせいで不気味に見えしまう。

お気に入りなの、つてアリスは笑った。受け取ると、結構な重さである。やっぱり陶器製は重い。仗助はスタンドを発動した。

痛々しい注射のあとが消えた。

「ありがとー、仗助お兄ちゃん！あれ？お腹のところ、直してくれないの？」

「おれの能力じゃあ、ないものを元に戻すことはできねーんだよ、ごめん、アリス。もし直しちゃったら、こーう、無理やりくつつけちゃうんだ。そしたら、きつと、コーンなふうにまがつちまうぜ。それじゃあ、かわいそうだろ？」

「じゃあ、なくなっちゃったところがあつたら、くつつけられるの？」
「おう」

「じゃあ、じゃあ、今からお外に行きましよう、仗助お兄ちゃん！このかけら、いっぱい転がってる場所、アタシ知ってるわ！」

「おー、そりゃいい。じゃあ、行こうぜ」
「うん！」

仗助からアリスに渡ったミカちゃん人形は、ふたたびベッドに寝かされる。そんな様子を傍目に、康一は仗助を見上げた。

「仗助君、さつきからどうしたのさ。なんか様子がおかしいよ？」

「この際だから話しくけどよー、注意したほうがいいぜ」

「え？なにを？」

「だからよー、あの人形のことだ」

「ミカちゃん？」

「ああ」

「なんでだよ？ただの人形だろ？」

「あの人形、普通の人形じゃあねえ。おしゃべりできる上に、アリスがさわれるってことは、スタンドかなんかだぜ、きつと。おれの力じゃあ、怪我は治せても、病気は治せねえからな。いきなり喋らなくなったのは、あの人形が弱っちゃまってるっていう証だ。それに、ミカちゃんってのは、昨日誘拐された女の子とおんなじ名前だぜー、二人共。」

しかも、そこに突っ込まれてる洋服は、その子のガツコの制服だって爺ちゃんが言ってたんだ。こりゃー、やべーぜ」

アリスに案内される形で、仗助たちは一旦、サウンド・ガーデンから外に出た。

アリスがミカちゃん人形を発見したその場所は、仗助たちがうすうす感じていたとおり、事故現場と目と鼻の先にある裏路地だった。ミカという女の子が誘拐された事故現場付近は、黄色いテープで張り巡らされ、たくさんの警官たちが出入りしている。パトカーが置かれていて、交通整理におわれている。

物々しい雰囲気は相変わらずだった。無理もない話である。このちようど反対方向、100mもない距離の先は、10歳の女の子の遺体が路肩に遺棄されていた現場である。こちらもまた黄色いテープが張り巡らされ、パトカーがたくさん止められている。

こちらは大きなビニルシートで覆われていて中を伺うことはできない。こちらにはまだ野次馬やマスコミの姿が見えるから、近づかないほうがいいだろう。人目を縫うようにアリスに案内される形で裏路地にたどり着いた仗助たちは、嫌な符号を見つけ出す。

どちらも7歳の女の子が標的になっている。しかもひとりで帰っていたときを狙って行われている。どちらも誘拐犯は女性である。極めつけに、児童誘拐事件と児童殺人事件が100mもない距離で発生していることになる。これは同一犯とみて間違いない。

タチの悪い凶悪犯が近くにいるかもしれない。それを悟った康一は、その凶悪犯がスタンド使いかもしれない、という最悪の事態にならないことを願うしかなかった。アリスに案内された、ミカちゃん人形が放置されていた場所を考えると、どれも虚しい願いになりそうで

はあつたけれども。

「こんなに近くだと、もう回収されちゃったんじゃないかなあ？」

「ここいらにはゴミ収集車はこねえぞ？ 康一」

「ちがうよ、警察にさ」

「警察にかあ？」

「うん、そう」

「大丈夫だろーよ。それならその人形も回収されてると、おれは思うぜえ」

「そう言われるとそうなんだけどき、真っ赤なペンキに、白い陶器のかけらでしょ？ 場所が場所だし」

「それなら大丈夫だと思うぜ、康一、億泰」

「なんでだよ？」

「どうして？ 仗助くん」

「あの人形は普通じゃあない。普通の人間には見えてねえはずだぜ。きつと、あの人形はスタンドで作られたもんだと思うからよー、今もそこにあると思うぜ」

ここよ、というアリスのあゆみが止まった。よく手入れされた生垣のそばに立っている電信柱を指差す先には、粉みじんになって散乱する陶器の破片がちらばっていた。ミカちゃん人形に塗られていたという赤いペンキは、そのあたりから流れ出たように水溜りになった形跡がある。

どうやらミカちゃん人形から出てきた液体も、スタンドの一部にみなされるらしく、一般の人は見えないようだ。普通なら後片付けをする警察官に見つかって、ゴシゴシこすられているだろうから。たまた、とミカちゃん人形を抱えたままアリスが走り出す。

そして、近くにしやがみ込むと、ひとつひとつ粉末になっているものまで拾おうとしたので、仗助が制した。大丈夫だぜ、と仗助は笑う。お願い、ミカちゃんを元気にしてあげて、ってアリスは人形を抱っこしながらお願いした。まかしとけて、と笑った仗助は、スタンドを

発現させる。

スタンドが触れた白い陶器の破片は、すべて、もとの形状に戻ろうと動き始めた。驚くべきことに、真っ赤なペンキもその中に吸い込まれていく。しばらくして、青いワンピース越しにラインを確認したアリスは、とっかかりもなく、すべてキレイに戻っていることを確認して大喜びする。

よかったね、ミカちゃん！と抱っこする。心なし、ミカちゃん人形の顔色が大分よくなった気がした。微笑ましい光景に和んでいると、さきほどまでされるがままだったアンティーク・ドールに変化が現れた。

体を持ち上げると、自動的に瞳が開く構造だったビスクドールが、寝かせたわけでもないのに、目を閉じたのだ。ぱちぱちぱち、と数回瞬きをする。それを目撃してしまった康一は、え、と一瞬動きが止まる。気のせいかと思っても、今度はあたりを確認するように首が左右にゆれている。

う、う、うごいてるーつと反応した康一の声に驚いたらしく、ミカちゃん人形は康一を見上げた。どうした？とすぐ隣の億泰が聞いてくるので、ミカちゃん人形が動いた、てる、つていうか動いてるよ、いま！、とひきつった顔で伝えるのだ。

つられてみた億泰は、不思議そうに見上げるミカちゃん人形を目が合ってしまった、カエルが潰れたような声を出して距離を取る。二人の反応に気づいたアリスが、今度こそ大喜びで仗助にお礼を言うのだ。ミカちゃんが元気になったよ、ありがとう！

ま、マジで生きてんだな、それ、と引きつってるのは仗助だけじゃないはずだ。ミカちゃん人形はアリスに抱っこされていることを理解したのか、その腕を握り返す。アリスは笑顔で話しかけ始めた。ミカちゃん人形の視線は相変わらず周囲をきよろきよろしている。

「はじめまして、だよ、ミカちゃん。みんな、アリスのオトモダチなの。このお兄ちゃんがね、仗助お兄ちゃん。ミカちゃんを治してくれた

の、仗助お兄ちゃんなんだよ。すごいでしょ。それでね、そのお兄ちゃんが康一お兄ちゃん。あのお兄ちゃんが億泰お兄ちゃん。仗助お兄ちゃんと一緒に、こうこーってところにかよってるオトモダチなんだって」

ほら、ほら、あいさつしよ、ってアリスは仗助たちのところにミカちゃん人形を寄せてくる。無邪気な女の子幽霊の好意を無下にすることもできなくて、みんなひきつった顔のまま、よう、とか、おう、とか、やあ、とかいいながらひきつった笑みを貼りつけた。

こくり、と頷いたミカちゃん人形は、仗助たちを見上げた。陶器越しに発せられる声は、思った以上に幼い。アリスくらいの幼さを残した女の子の声である。

「ミカ、です」

紡がれた言葉はそれだけだった。ミカちゃんは恥ずかしがり屋さんなんだよね、とアリスは笑う。言葉が通じることにはほっとする。言葉が通じないと、未知への恐怖が大きくなるから、会話ができるのは大事なことだ。ぱちぱち、瞬きをしたミカちゃんは、いうのだ。

「こい、どい？」

「ここかあ？ここはおめえが捨てられてたっていう道路だぜ」

「億泰くん、そんな直球な」

「え？だってよー、ほかに言い様がないだろ」

「でもさ、言い方って大事だよ？ほら、今にも泣き出しそうじゃないか」

「え？あ、わ、わりい。おれもそういうつもりで、言ったわけじゃあないんだぜ？」

あわてて弁解する億泰だったが、ミカちゃんが今にも泣きそうな顔をしているのは、どうやら別のことが要因らしかった。

「ご、いや、かえる、いや、いや、いや、かえして、おうちかえして」

アンティーク・ドールの瞳ににじむものがある。透明な液体がつう、と頬を伝った。ごめんね、ごめんね、ここミカちゃんのイヤな場所だったのね、おうち帰りましょう、とアリスが赤ちゃんをあやすように抱っこする。

よしよしと慰めながら落ち着かせようとする。でも、ここが捨てられていた道路だと気づいてしまったミカちゃんの悲痛な叫びは止まらない。かえして、おうちかえして、とわんわん泣き始めたフランス人形に、アリスは困った顔をした。おうち、かえろっか、とスタンドを呼び出す。サウンド・ガーデンが暗闇の扉をあけた。

「いやあーっ」

ますますぐずり始めてしまったミカちゃん人形である。アリスはますます困ってしまったようだ。おうちってどこなの？サウンド・ガーデン、わたしのおうちじゃだめなの？と聞いても、ミカちゃんはふるふる首を振るだけである。

身長がおおきい仗助と億泰をみると、あきらかに怖がっているのがわかるため、ちよっと近づくのも気が引けた。ばたばた暴れるミカちゃん人形に、話しかけたのは、康一だった。

「山本ミカちゃん」

ぴたり、とミカちゃん人形の動きが止まる。

「もしかして、って思ったけど、あたりみたいだね。君の名前は、山本ミカちゃん。ちがう？」

あれだけ暴れていた人形がおとなしくなる。こくり、とうなずいた

ミカちゃん人形は、わあん、と泣き出した。今度はアリスにすがりつくような泣き方だ。康一は仗助と億泰をみた。あたってしまった。できればあたって欲しくなかった。行方不明の女の子の名前は、山本ミカちゃん、7歳の女の子である。

サウンド・ガーデンに引き返した仗助たちは、アリスの部屋で詳細をきくことにした。

土砂降りの雨の中、一直線に突っ込んできた白いワゴン車にはねられた少女は、数メートル先に飛ばされた。黄色い傘が飛ぶ。ランドセルが転がり、教科書とペンケースが散乱する。骨がわれ、肉がさけ、だくどくと赤色が広がっていく。

どんどん冷たくなっていく体を優しく抱き上げてくれた腕の中で、彼女は目を覚ました。何度もミカとよんでくれたのは、みたこともない、知らないおばさん。たくさんのタオルを押し当て、応急処置をしてくれた。今から病院に連れて行く、と白いワゴンの男にまくし立て、大丈夫よ、だからがんばって、といいながらおばさんは少女を載せ、車で走り去った。

彼女の母親とおなじ、妙齢の女性だった。お母さんとダブってみえた。しかし、おばさんは、白いワゴン車が見えなくなるところまで走ると、急に車を止めたのだ。そして、鍵をポケットに入れ、傘をさして車から出る。

もうろうとする意識の中で、彼女が覚えているのは、ドアを開ける音。土砂降りの雨粒がふりかかり、冷たいなあという感覚だけがあつ

た。そのとき、彼女は何も見えなかった。ただ、透明な何かに首を掴まれる感覚だけが襲ってきた。ぎりぎりぎりりと締め上げられる。

呼吸ができないほど、締め上げられたという。おどろいて目を開けると、満面の笑みをうかべて微笑んでいるおばさんがいる。傘をさしたまま、少女を見てわらっている。透明な腕に締め上げられ、クラクラとし始めたころ、その圧迫感に掬い上げられた。首を絞められたまま持ち上げられた、とそのときは思った、と少女は言う。

違和感に気づいたのは、くるしい、いたい、たすけて、という感覚がなくなったこと。そして浮遊感だった。そして彼女は気づくのだ。ぐったりと体を投げ出して、後部座席のシートに横たわる7歳の女の子に。目を閉じて、まるで死んだように眠っている自分が真下にいることに。

体を見た少女は気づくのだ。体がすけている。すべての風景が体越しに見える。幽体離脱を強制された少女は悲鳴を上げた。しかし、幽霊体になった少女の声を聞く人は、おばさんしかない。ここでようやく、少女はおばさんの横にいる真っ青な服を着たアンティークドールに気づくのだ。

年季の入ったビスクドールは、土砂降りの雨にもかかわらず、濡れもしない。ただじいっとこちらを見つめていた。そして、その人形から伸びる異形を目にした時、おぞましい何かがにたりと弧を描いた。体が作り替えられたのは、その時だ。

上から型でもとるように、どろどろな何かが降ってきた。それは幽霊になっていく彼女にまわりつき、すっぽりとおおってしまった。まるで上から蓋をするみたいに、隙間なく覆われてしまった。気がつけばぞっとするほど冷たくなっている自分の体に置かれた人形になっっていた。

そして、彼女はみていた。女の子の体に入っていく、もうひとつの幽霊体を。やめて、やめて、かえして、といくらすがっても許してもう、彼女が人形の姿のまま、おばさんの家に連れて行かれたという。

そして、放り込まれたのは、たくさんの西洋人形が並ぶ部屋だった。真つ赤なカーペット。黒いグランドピアノ。家族の写真が飾られた一室である。人形にされたのが自分だけではない、と悟ったのは、すぐだった。話しかけてくれた女の子の人形があつたからだ。

不思議なことに、その子もミカという名前だった。7歳の女の子だった。ボロボロだった。にげて、とその女の子はいった。人形が傷つけられると、体も傷がつく。体に傷がつくと、人形も傷がつく。だから、もうすぐ私はしんじやうの、と悟つたような笑みを浮かべる女の子だった。

体と精神があんまり離れてしまうと、体は死ぬ。だから魂は人形にして、家においておく。すると死なない。逃げないとずっとこのままだつて、いわれたという。犠牲者はわたしだけでいい、と言い残して、人形の歩き方を教えてくれた。

走り方、歩き方、ジャンプの仕方を教えてくれた。窓の鍵を開けてくれたのはその子だった。あとは、言われた通りの道のりで歩いていくだけだった。

「おと、お、さんに、あいたい、よお。まだ、しに、たく、ないよお。おねが、い、たす、け、て」

仗助たちは立ち上がる。その家に案内ヨロシクなど言われた人形は、こくりと頷いた。さあ、出かけよう。扉を開けた仗助たちを待っていたのは、バラ園に広がる無数の人形たちだった。

霧ヶ峰涼子は、生まれながらにして常に自分が周りから注目を浴び

ていなければ発狂する性質を持って生まれたスタンド使いである。

発現するに至った契機である彼女のもつヒステリーは、子どものときの性的な事象が関係していると精神科医には言われた。その時の診断によれば母親との愛着関係に失敗したあと、父親を求めにいき、そこで性愛的な情緒が刺激された。

もともと神経の発達に問題があったところに愛着障害、夫婦が不仲であるがゆえの機能不全家庭という境遇、そこに性的外傷などの外傷体験を受けることにより、恐怖に凍りつくトラウマを負ってしまい、ヒステリーに罹ってしまった。

彼女はそこまでズタズタに客観的な自分を見せつけられ、真正面から受け止めることを拒否して、狂言癖が悪化した。結果として最後のチャンスだった療養を失い、解離症を併発。

彼女は、衰弱、頭痛、視覚障害、感覚喪失、麻痺、意識の途絶、幻覚、言語障害などに苦しんでいた。彼女は、二つの意識状態を持っており、それは突然切り替わり、一方は、悲しげで不安そうで、品の高い教養がある、あたかも正常にみえる人格。他方は、幻覚があり、品な態度や卑猥な発言をする病的な人格がいて、交互に出てくるようになった。

半端な時期に精神科に通うのをやめたため病名は付かなかったが、おそらく特定不能の解離性障害、あるいは境界性パーソナリティー障害と呼ばれる精神疾患をかかえていたのである。

取り繕うことを覚えた彼女を止める人間はいなくなってしまうた。

独身時代は身体の内側に情動的な人格部分を持っているせいで、あたかも正常に日常生活を送ろうとしても、外からの精神的ストレスにより、自分が自分であることを保てなくなる。最初のうちは相手に合わせようとしていても、やがて無理に合わせていることに耐えられなくなる。

ストレスが高まり、交感神経系が過剰になると、内側の激しい怒りの感情のコントロールができず、攻撃的になり、自分の意志に反して

四肢が動くなど、人間関係をことごとく失敗していく。そのため、あまりよくない状況が安心で、嫌な結果になっても想定通りで、自分は幸せになれないという結末を演じていた。

金持ちな境遇がその失敗を全てなかつたことにしてきた。

結婚してからはこの結末を抑え込むために子供に衝動を向けるようになっていく。ただでさえ他者を思いやれる心の余裕がなく、相手と自分が違うことが脅威で、自他の区別があまりできていない幼い精神をもつ母親が、まともな育児など出来るはずもない。

自分を理解してくれないと適当に扱われているように思っ、子供を罵る。また、子供が自分の思い通りに動いてくれないと、イライラしたり、話を聞いてもらいたくて、自分のことを分かってもらえていると安心できたりする極端な行動ばかりになっていった。

何からも汚染されずに、自分と同一視する子供を守ろうとして、徹底的に何でもやり、完全無欠さや高みを目指した。

自分であつて自分でない部分や、衝動や本能により、自分でない自分に動かされたりしても、いつも標的は子供だった。理性的に振る舞う自分に対して、勝手に手が動いたり、勝手に口が暴言を言ったり、内側の衝動をコントロールできなくなるのだ。

霧ヶ峰は今、まさにヒステリーに陥っていた。ヒステリー性の癩癪や感情の爆発は、交感神経系に乗っ取られて、過覚醒のときに生じる。このとき、理性で情動的人格部分や四肢の身体反応をコントロールしようとしても、頭と身体が別々の方向を行動しようとするので、ストレスがかかり続けて、身体が耐えきれず苦しくなる。

頭と身体が合致してしまうと、ゾワゾワするような不快な身体感覚が取り憑かれ、過覚醒から凍りつく瞬間は、最悪な出来事が起きていたり、嫌な記憶が蘇っているときなので、ヒステリー性の金切り声を

あけて騒ぐしなくなる。

フラッシュバックや悪夢などで、過覚醒や凍りつく間を生きている人は、自分が自分でなくなる狂気や錯乱状態のなかにおり、社会生活を送るだけの技能を欠き、不適切で無力な行動をとる。

今、彼女の中にあるのは、献身的な介護の対象である我が子を失うことへの恐怖だけだった。目の前の高校生たちが我が子を取り上げようとしていることしか分からない。どうしてそう思うに至ったのかすらわからない。自分のことがよく分からない。

「返して」

些細な刺激に対しても、興奮しやすく、感情が激変して、自分で感情をコントロールできなくなる彼女は、今、まさに限界にいた。

「かえしてよ、ねえ」

感情が昂ぶりすぎて気分の振幅が大きくなり、金切り声をあげる。もはや警戒心の過剰さが視野狭窄を引き起こし、危なっかしい行動を取るしかない。

「いじわるしないで、おねがい」

だから声が幼くなる。身体の痙攣や手足の痺れ、運動麻痺により、うまく行動できずに駄々を捏ねて泣き叫び始める。

「もうわるいことしないから、やめて、やめて、いじめないで」

やがて彼女は逃げ場所がなく、選択肢もなくなると、頭が真っ白になって、身体は凍りつき、悪魔が取り憑きはじめる。

この悪魔は、痛みを食べて成長してきたものだ。悪魔の方が本来の自分にとって代わって生活を送るようになり、悪魔は痛みによって成長するため、自分を満たそうとせず、自分を傷つけたり、人に軽蔑されるようなことをする。

明るい世界を見ることが辛くて、喜びを与えず、自分の得た幸せを壊そうとするのだ。そこにはもう霧ヶ峰涼子の姿はない。

「返せっていったらだろうが、誘拐犯!!通報するぞ、コノヤロウ!」

ここまでネジ切れても断じて自分は狂ってなどいかなかったのだと霧ヶ峰涼子はいう。一瞬間といえども、狂った事は無い。狂人はたいてい自分の事をそう言うものであるとしても。

「返してちょうだいよ、ねえ、ミカちゃんを返してちょうだいよ。あの子がいないと私は、わたしは、わたしはああああ!!」

人形から這い出してきた異形に仗助達は顔を引き攣らせた。

「やっべえ、なにがなんでも人形に近づくんじゃねえぞおめえら!ミカみてえにお人形さんになりたくなくなかったらなあ!」

「言われなくてもわかってるよ、仗助くん!」

「いくらなんでも数が多すぎねえか!」

そこからは大乱闘である。

やがて敵と味方は、見る見るうちに一つになって、気の違ったようにわめきながら、人形たちをめぐって、無二無三に仗助達は打ち合い始めた。

静かな月の下ではあるが、はげしい音と叫喚の声とが、一塊になった敵味方の中から、ひっきりなしにあがって来る。殺戮し合う人形の団塊は叫喚しながら不気味な色をこびりつかせながら延び、縮み、揺れ合いつつ次第に小さくすり減って行く。全身に謎の液体を浴びて仗助達は人形たちを倒してまわった。人影と見れば、双方からぶつかって退治した。

蹴りを入れるにあたって何よりも大事なのは、ためらいの気持ちを排除することだ。相手のいちばん手薄な部分が無慈悲に、熾烈に電撃的に攻撃する。一瞬のためらいが命取りになる。

「お、おい見ろよ、億泰!」

「どうしたの、仗助くん?」

「ありや、なんだ?」

仗助が一番最初に気づいた異変が感染するように広がっていく。異形がなにかをとりにこみ、大人しくなっていくのが見えたのだ。

「お兄ちゃんたちに意地悪しないで!!」

「アリスちゃん!」

「ありやあまさか……」

「その、まさかみてーだな、はは」

乾いた笑いがもれてしまう。バラの庭園を我が物顔で闊歩している不気味なアリスのお友達が人形に取り込まれることでただの人形

に戻っていつているのだ。いや、中にいるのが低俗幽霊の寄せ集めだからだろうか、うようよと自由気ままに歩いたり走ったり空を飛んだり呻いたりし始めたのである。

所詮は動物の幽霊だ。生前の行動以上の知能は持ちえないらしく、女がいくら命令しようとも微塵も聞きやしないのだ。

「そ、そうか、あのスタンドは魂を閉じ込めるスタンドだから、幽霊も有効なんだ！ありなんだよ、仗助くん！」

「あー、なるほどー！つまりここはあのスタンドにとって天敵ってわけか！」

「つまり…… えーつと、ぶっ飛ばせばいいわけだな！」

「そういうことだ！」

仗助と億泰は腕まくりした。触れてはならない脅威のスタンドも本体を防御してくれるはずの人形たちがただの呪われた人形に成り下がった瞬間に役に立たなくなる。つまり、今、目の前のヒステリックに叫ぶ女は無防備そのものだった。

「よくもあんな小さいやつをひでー目に合わせやがったな、このゲスが！」

「そうと決まれば話かはええ、ここからは俺たちに任せろ！」

3人の間には、ほとんど人間とは思われない、猛烈なつかみ合いが始まった。打つ。噛む。髪をむしる。しばらくは、どちらがどちらともわからなかった。

女の断末魔が響き渡った。

本体 霧ヶ峰涼子

スタンド能力 ソラリス

「破壊力」 E

「スピード」 A

「射程距離」 D

「持続力」 A

「精密動作性」 D

「成長性」 E

戦闘不能（リタイア）

対象の魂をビスクドール（陶器人形）に閉じ込めることで、肉体と魂を分離して管理出来るスタンド。霧ヶ峰涼子は病弱な娘、霧ヶ峰ミカを介抱する献身的な母親でいるためにわざと病気にさせていた。その病気により娘が死ぬことで社会的立場が失われることを恐れた霧ヶ峰は娘の魂を似たような背丈、年齢の少女の体に閉じ込めることで延命していた。

人形が破壊されると肉体の持ち主は死ぬため霧ヶ峰は保管している。肉体への損傷は人形となった本人に向かう。人形は自律型で触れたものや近くの魂を閉じ込める効果があり、幽霊とは相性が悪い。増えるにつれて射程範囲が狭くなる。

サウンドガーデンにいるたくさんの低俗霊を人形が取り込んでしまい無効化され、仗助たちに倒された。

オールドフィールド

三連休を終えた最初の登校日、今にも死にそんな顔で億泰先輩がやってきた。

「どうしたんですか？」

「聞いてくれよオ……俺、ホームレスになるかもしれねえ……」

おいおいと泣き始めた億泰先輩は鼻水と涙をダラダラ流しながら震え声で話し始める。

「実はよオ……俺ん家が……俺んちが、売れちまうかもしれねえんだ、」

僕はギョツとした。

「売れるって、あの家がですか？」

億泰先輩は頷いた。思わず2度見する。あのお化け屋敷が売れるだって？そんな馬鹿な。

「広い庭がいいんだってよ……」

世界は広い。あんな荒れ放題の広いだけの庭がいいだなんて。物好きにも程がある。

「もし売れちまったら俺どうすりゃいいんだよ……」

「それはお気の毒に」

「ジヨルノ冷たくねーかあ？」

「なんていえばいいのかわからない」

億泰先輩のおさまらない嘆きに仗助先輩たちがなんだなんだとよつてきた。そして笑いが広がる。

億泰先輩の家が売られるかもしれない。とんでもないニュースだ。形兆先輩が事故死したことになっている事故物件なのに、億泰先輩が住んでいるため報告義務がないらしい。

億泰先輩曰く、不動産屋が教えてくれた次の住人候補は未亡人の女性。家庭菜園のスペースが足りなくなり、自分の力で快適な空間を手に入れたいとのこと。海外で有名な人らしい。

「庭だけでも買わせていただけないかしら」

訪ねてきた女性に億泰先輩は思わず目が点になったらしい。

「ワタクシが気に入ったのは、この広い庭なの。お仕事のない日の息抜きに自然を相手するのがいいと思って、気づけばもう20年になるのね。今の家の庭はもういっぱいになってしまつて、困っているのよ」

「は、はあ……」

億泰先輩がいうには森野と名乗った彼女が今住んでいるのはアリスの住んでいた邸宅だというではないか。

「あんなに広い庭がもういっぱいになるとか相当好きなんですネ、園芸」

僕は最近綺麗になつたと評判の事故物件を思い出す。

「なんでもよお、この街を花だらけにする活動をしてるらしいぜ」

「ああ、通学路によく咲いてる話とか？」

「あー、今の時期綺麗だよネ」

「幼稚園や小学生たちとよくやってますね、イベント」

なるほど、事故物件にすでに住んでいるならば問題ないだろうか。

「だーかーらー！どうかしてくれよ！」

「庭だけでもつて話なんでしょう？なら問題ないのでは？」

「そうだけ、億泰」

「不動産屋のジジイ、家ごと買わせようとしてんだよ！出てけつてこないだから圧力すげえんだつて！」

「億泰くん不法侵入だもんね」

「元々は俺んちだ！」

ぎゃいぎゃい騒いでいるとチャイムがなる。慌てて僕たちは校門をくぐつた。

放課後億泰先輩たちに会いに行こうとしていた僕は、校門前で彼と出会つた。

「手伝つてくれないか、ジヨルノ」

「アンタから相談なんて珍しい」

「そういう時もたまにはある」

「……見せてもらっても？」

文房具屋にある合成布の手帳だ。

「……？」

「こいつの持ち主を探してほしい」

「どうしてか聞いても？警察に届けるべきでは？」

「それじゃ遅いからだ」

「？」

「明日までに探さないと双葉千帆が死ぬ」

僕は目を丸くした。

「意外か？」

「正直に言えば」

「僕の目的のためにも双葉千帆にはまだ死なれちゃ困るんだ。断じて色恋沙汰じゃない」

「言われなくてもわかってますよ、アンタが向ける目はそんな生半可なものじゃないことくらい」

彼は静かに笑った。

そこには半年前から話題の行方不明事件の首謀者しか知りえない情報が沢山載っていた。犬、猫、そして鳥、外に飼われているペット、あるいは地域猫が行方不明になっている。連れ去りもつもり積もれば凶悪事件の兆候だと誰もが経験則で知っている。みんなピリピリしていた。

普通の日記でありながら連れ去り、誘拐、そして生き埋めにするまでの過程が詳細にかかっている。趣味やその日の出来事と同じタツチで書かれているのが不気味だ。

「まずはこの手帳が本当に犯人のものか確かめた方がいいんじゃないですか？」

「たしかにそうだ」

僕達は1番新しいペットの飼い主宅を訪れることにした。外に飼われていた犬はさくの中にいたはずだが、首輪から繋がっていたはずの鎖ごと切り離されているのがわかる。いくつか、張り紙あたりで特

定出来たペット誘拐犯は土地勘のある人物だと分かった。

「おそらく女性だ。ペットたちが警戒しないあたり、明らかに顔見知りか犬の性格をよく知る人間の犯行に違いない」

「ペットシヨップ？」

「ブリーダーの線もある」

近くの小学校で下校時刻になったことを知らせるチャイムと見守りをお願いする放送が流れ始めた。ぼんやりとそれを見つめていた彼は目を見開いた。

「そうだ、通学路だ」

「通学路？」

「ジヨルノは知らないだろうが、どの家にも見守り隊のシールが貼つてあった。なにかあれば小学生がかけこんで助けを求めてもいいというあれだ」

「見守り隊の人達が狙われているということですか」

「いや、違う。じろじろ見てもバレないということだ」

「まさか小学生が？」

「主犯かもしれないし、親にやらされているのかもしれない。だがこの手帳が誘拐犯のものだと確定した以上、大人が関わっているはずだ」

「………… たしかにそうですね。わかりました、貸してもらえませんか、それ」

僕は手帳を受け取ったのだった。

「で、どこで拾ったんです？」

彼に連れてこられたのは、コーヒースタンドだった。店内はシンブルで座席数は多くないがイトインスペースもあるこんな隠れ家のような雰囲気のコーヒースタンドだ。この街で、気軽にこだわりの

コーヒーが楽しめるお店であり、可愛らしいドーナツが大人気らしく、女子高生たちが目立つ。テイクアウトした子達とすれ違い、一人で静かにコーヒーブレイクしているOLの横に座った。

注文したハンドドリップのコーヒーが運ばれてくる。自分の一杯のためだけに手間をかけてもらっているので、ちよつと特別な気分を味わえる。もちろん、季節に応じた豆を自家焙煎のようだ。苦味が癖になるエスプレッソは、ドーナツとよく合う。

トッピングもコーティングも、惜しげなくたっぷりとあるぜいたくなドーナツは、デパートなどで臨時に販売されているのを見たことがある。小さなサイズのものや茶色いクマのドーナツが人気のようだ。彼が迷うことなくクマのドーナツを選んだのに驚きつつ、僕はデコレーションをこれでもかと施したゴテゴテなドーナツを選んだ。これから頭も精神も使うのだ、しこたま甘いものが食べたいと体が欲している。

「最近の行きつけがここだ」

間違はなく双葉と来たんだろうなと僕は思った。彼の趣味とはかけ離れている店だ。

「ここで昨日閉店の18時半まで居座っていた。トイレには3回立っただが、2回目の時にトイレに落ちていた。犯人は生活圏が重なっているに違いない」

「なるほど、だからここからスタートなワケですね」

「ああ」

「ところで双葉の私物じゃなくていいんですか？」

「おかしなことを聞くな、ジョルノは。なんだって僕がそんなものを持つていることが前提になる?」

「…… そう言うことにはしておきましようか、今はまだ」

「ああ」

しれつといつてのけた彼に呆れながら僕は空のコーヒーカップと皿をマスターに返しに行く。そして外に出た。

空は春によくある不安定な空模様である。

「ところで琢馬、なにかリクエストはありますか？」

「ミヤマカラスアゲハのオスにしてくれ」

「ミヤマ……？」

「ミヤマカラスアゲハ。蛹で越冬する蝶だ。春型は大体4 から5月ごろに羽化した後、活動する。色彩が派手だが小さい。終見日は7月まで。後翅裏面に白い弓状のラインが現れる。花以外に吸水にも来る。オスは湿地に集団で吸水に来る性質があり、それを狙って採集する人も多い。水分補給は水分だけでなく微量の塩分も摂取するためだと思われるが、吸水に来る理由や吸水集団を形成するのがオスに限定される理由は解明されていない」

カバンから出した図鑑の写真を見せながら彼は言うのだ。

「手帳を見る限り、誘拐犯は園芸を趣味としている。今は柑橘系の植物を植える途中らしい。ミヤマカラスアゲハが好むミカン科のキハダ、カラスザンショウ、ハマセンダンが植えられてる可能性が高い。普通なら栽培種はあまり好まないからミカン科野生種の生えている深山に多く見られるらしいが、そこまで厳密にしなくてもいいだろう？」

夕焼けが迫ってなお霞んでいるような春の空は、四月半ばにもかかわらず晴れたまま潤んだ青に溶ける。頭上高く白黄色を帯びた無限の天空には、冬の間腐ったような灰色を洗い流して、日一日緑に冴えていく。

空の色がめつきり春めいて、紫がかつたつやつやした色を帯びる。

空には雲ひとつない。それでいて全体がぼんやりとした春特有の不透明なヴェールに被われていた。その捉えどころのないヴェールの上から、空の青が少しずつ滲み込もうとしていた。日の光は細かな埃のように音も無く大気の中を降り、そして誰に気取られることもなく地表に積った。

遠山にかかる白雲が、散った桜の形見のように見える。花曇りの空が林の上に眠っているように静かだ。

蝶に導かれてたどり着いた先には、アリスの住んでいた邸宅があった。僕は目を丸くする。

昔小屋だったところや一部の庭園が潰され、更地になっている。新しく花を植えるつもりのようなのだ。お茶会といった前の家族が好んでいた要素をことごとく潰しているのがもったいない。掘り返された土の周りには機材がそのままになっているのがわかる。

「一家心中なんていわく付きの家だから変な買い手しかつかなくなっちゃったのさ」

柵の向こうを見ていた僕達を野次馬だと思ったのか、隣で暇を潰していた老人は聞いてもいないのに喋り出す。前の一家との思い出、今の主人の不気味さ。

「奥さんが可哀想で可哀想でならなかったね、ぐるぐる巻きのミイラみたいな格好で車椅子に乗ったり車に乗ったりする主人なんて不気味でしょうがなかった。最近は誰かに苦情を言われたのか、外を歩くとことはなくなったがね」

強烈な性癖を持つ夫をもつ女主人だったようだ。

「いやだわ、亡くなったらしいわよ」

「そうなのか!」

「そりゃそうよね、全身拘束されても寝返りなんかしたら打ちどころ悪くて死ぬわよ」

趣味の悪い笑顔で中年女性が笑う。

嫌だわなんて言いながら、いつかやらかすとは思っていたと男はう

なずくのだった。

近隣住民に話を聞くと婦人は土日祝になるたびに夫をミイラにして日向ぼっこさせたりドライブに付き合ったり甲斐甲斐しく世話を焼いていたらしい。園芸をしながら柵越しに談笑していると屋敷から怒鳴り声が聞こえてきて悲しそうな笑顔で一礼したあと去っていく姿を何度も女性は見ていたらしかった。

「信じ難いことだが、そういう性癖があるらしいな」

「ミイラに憧れる？」

「拗らせているんだ。しかも周りに布教したがる」

片っ端から本を読み漁っている彼は蓄積した知識をたんたんと並べる。

新たな屋敷の主人は包帯フェティシズムという異常性癖の持ち主らしい。他者、または自分自身を包帯でぐるぐる巻きにして身体の自由を奪うことに執着する性的嗜好で、SMプレイでは医療系プレイに分類される。

包帯により手足を縛られることで、その部位を動かさづらくなる。しかし包帯にはある程度の伸縮性があり身体に密着した拘束感が味わえる。また、包帯は怪我をした人に対する手当の記号であり、包帯を巻かれた人はすなわち怪我をして弱っている、もしくは無力な患者という社会的な役割が与えられる。そうしたステータスも含めて包帯による拘束に対して著しい性的興奮を覚える性的倒錯を指すらしい。

欧米ではミイラのことであり、エジプトのミイラのように全身をくまなく包帯で覆い身動き出来なくするものである。日本でも一部でこのラップなどによる拘束プレイが行われている。また包帯ではなくラップやPVCテープなどの素材を使用することで同様の拘束感を楽しむことが出来るとされる。ただし素肌に直接これらの素材を貼り付けると引き剥がす時に激痛を感じる場合もあるので、注意が必要。

ベッドや診察台への拘束に包帯を用いたり、手足や頭部だけを包帯で巻くなどした姿を好む性的嗜好もこの中に含まれる。全身を覆う感触はラバーフェティシズムや全身タイツフェティシズムに通じる所があるが、通気性の高く、解放されづらい包帯を用いることで長時間の拘束が可能という特徴がある。全身を包まれた場合の拘束感が高く、圧迫系プレイの究極であるバキュームベッド（2枚のゴムシートに挟まれ中の空気を抜かれるもの）に並ぶとされる。

「……？ミイラとは違うんですね」

「僕達にとつては似たようなものだ」
「たしかに」

蝶が一角にとまった。長いつつのようなものが埋まっている。なにかの支柱だろうか。気づけば一定間隔に並んでいるのがわかる。

筒の中からはすすり泣くような男と女の声がする。

「双葉が誘拐されたなら、生き埋めにするための穴があるはずだよな」
「そうだな」

先の尖った棒で蜂の巣みたいな穴をあける途中な形跡がある。犬のようにあちこちには穴が黒々と大口をあけている。ダンプカーが通り抜けられるくらいの大きな穴もある。新幹線が突き抜けたほどの穴だ。まるでアリ地獄のようなすり鉢状の穴である。もし入れられたが最後、底無しの井戸みたいに、まっさかさまに落ちてゆくに違いない。全てを呑みこんで陥没させたかのような、庭に掘られた深い穴が点在している。近くには穴が空いた棒がある。

「ツボがありますね、花壇の？」

「いや、違うな。このツボは見たことがある。エジプト展覧会で飾られていたミイラのツボだ。エジプトでは臓器をそれぞれ違うツボに

入れてミイラの近くにおくらしい」

「なんのつもりですかね？」

「布教……いや、違うな。ここから聞こえてくるのは自ら望んで生き埋めになった気配がする。だがこれらの穴はすべて違う。明らかにミイラにするための準備だ」

「ミイラになりたいから？」

「いや、ミイラになりたいというより、動けなくなりたい性癖だ。ミイラになって死にたいわけじゃないはずだ」

「そのわりに生き埋めになってますよね」

「ああ、この穴から水なり致死するガスなり入れたらそれだけで終わるだろうさ」

「……一体誰が……？」

彼もわからないのか静かに首を振った。

双葉用に用意されていると思われる

土葬の準備は万端とあってよかった。土葬はそのまま遺体を土の中に埋めるというイメージがあるが実はそうではないらしい。

埋葬の直前まではドライアイスで冷やされたり、薬による防腐処理がされるようで、近くに置かれたクーラーボックスに詰め込まれている。

また、遺体は丈夫な棺がすでに穴の中におさめられていた。空っぽだから一安心である。

手帳によれば、全身の消毒・洗浄を行い、髭・髪を切ったり、表情を整える。次に、遺体の一部を切開して静脈から血液を抜くのと同時に、動脈から防腐剤を注入する。さらに、腹部に穴をあけて腐敗しやすい臓物・残った血液を吸引し、防腐剤を注入する。最後に切開した部分を縫合するなどの修復を行い、洗浄後に遺体に衣服を着せる。

これにより感染症の予防や遺体をきれいなまま保てる効果が期待できるとのこと。使われる防腐剤にもよるが遺体は数日〜2週間程度保存することができらしい。さらに、防腐剤の定期的な注入など、メンテナンスを行うことで保存期間を伸ばすことができるのも特

徴。この手帳の持ち主はどちらかというミイラに対する崇拜じみた狂気が感じられる。

「双葉を探しましょう」

「そうだな、行こう」

「手帳の持ち主はなんだって落とされたのに犯行に及ぼうとしたんですかね?」

「僕が警察に届けなかったからだろう、拾った人間が気味悪がって捨てたと思ったんだ」

「だから今までペットたちで練習していたのを実行にうつした」

「きつとそうだ」

「僕達のせいで新たな犠牲者が出てしまったらどうするんです?」

「いたたまれないな」

これ以上はないほど白々しい返答だった。彼は双葉に死んで欲しくないが、言うほどそこまで切羽詰まってはなさそうである。

双葉千帆は絶望していた。

コーヒースタンドで知り合った女性は小学生の頃からの顔見知りだったのだ。久しぶりね、大きくなって、と声をかけられているうちに親交を深め、綺麗な花で有名な邸宅に遊びに行くようになっていた。

「ここだけ花がないんですね」

「ええ、ここからみた花達がいちばん綺麗に見えるように設計しているから」

「なるほど」

計算し尽くされた花々はとても綺麗だった。

「双葉さんに見せたいものがあるんだけど、今度来てくれないかしら」
教えてもらった住所は一家心中があったことで有名になったいわく付きの邸宅だった。彼女は不動産屋の令嬢だ、花達が枯れていくのは家主にとってもやるせないだろうからと引き取って世話をしているのだという。

「誰も見に来てくれなくなってしまつたら花達が可愛そうで可哀想で仕方ないの。だから双葉さんだけでも見に来てあげてくれないかしら」

いつもいる彼氏さんと一緒にと言われて赤面したことを覚えている。今思えば一緒に来ればよかつたかもしれない。

「あの、これはなんですか？」

「なんのことかしら？」

「どうしてこんな所に穴があるのかなと思って」

彼女の顔が強ばったとき、双葉は触れてはならないことに触れてしまったことに気づいた。

「そう、双葉さんにも見えるのね？」

「え？」

底冷えした声の先で、双葉は強い力でその穴に向かって押されたのだ。

それはさながら蟻地獄だった。

軒下等の風雨を避けられるさらさらした砂地にすり鉢のようなくぼみを作り、その底に住み、迷い落ちてきたエサに大顎を使って砂を浴びせかけ、すり鉢の中心部に滑り落として捕らえることで有名な、あの蟻地獄である。

悲鳴を上げた双葉は、常闇が迫る穴の中央部に捕らえた獲物に消化液を注入し、体組織を分解した上で口器より吸汁しようとするおぞましいなにかをみた。肌に触れたその異臭がする液体は人体に深刻な毒性を示すようで、瞬く間に昆虫病原菌に感染したかのように黒変していったのだ。

本を貪るように読んでいる彼なら冷静な対処が出来たかもしれないが双葉には到底無理な話だった。双葉にとって幸運だったのは、その化け物が後ろにしか進めないことに気づいたことである。

穴の奥に近づくにつれて細かい砂ばかりになり、細かい砂の方が、より急なアリジゴクを形成している。落ちたら終わりは文字通りだ。消毒液や砂をどんどん投げつけ、アリジゴクから脱出しようとするのを妨害する化け物から逃れるために双葉は懸命にあがいた。

上には笑顔の彼女がいて、下にはバケモノ。ただ、たまたま脱げてしまった靴が変な方向に飛んでいってしまった時、バケモノはそちらに気を取られて背を向けてくれた。どうやら目が良くないらしい。その隙について反対側に飛んだ双葉は、突き出していた黒い木製のものを足場にした。双葉の体重によりそれは傾き、バケモノの蓋になるような形で倒れたのだ。

「ぎゃああー！」

それは木箱というよりは黒い箱を引き伸ばしたようなまさに棺桶というに相応しいものであり、双葉はその中にバランスを崩して倒れてしまう。あやういバランスのまま止まった棺桶の上で座り込んでいると彼女が笑った。

「自分から入ってくれるなんて、さすがだわ双葉さん。やはりワタクシの見込んだ通りのお方だわ。今から準備をするから、少し待っていてももらえないかしら」

「えっ、ちよっ、ちよっと待ってください、やめて、やめて、きやあああ！」

双葉の頭上が真っ暗になる。自分がどうなっているのかさっぱりわからない。ただ上からさらに蓋をされてしまったのだと気づいた双葉は悲鳴をあげた。

(どうしようどうしようこのままじゃこのバケモノに食べられちゃう!!)

双葉は助けを求めて叫ぶしかなかった。

恐怖による何かに引きちぎられるような、裂かれるような、とんでもない不安に声が震える。ぎよつとしたような悪寒に体が震える。

意を決して双葉は最後に残った悲鳴を体から押し出す。声を出し切ってしまうえば、一切の声はなくなってしまっただろう。泣き叫ぶ声、さながら地の底から湧き上がって来るように響く。いったん耳にしてしまえば二度と忘れることのできないだろう悲鳴だ。一度聞いたら心にそのまましみ込んで、きつと一生忘れることができないうな、悲痛な叫び声を双葉はあげた。

断末魔のような絶叫が鳴り渡った。それは長く長く尾を引きながら消えていった。

誰もが息を呑み、場内が静まり返り、一呼吸置いたような緊張感につつまれる。まさにそれと同じように、周囲はしんとして、それから足音が上から聞こえてきた。

悲鳴はもう出し切ってしまった、すぐには出ない。誰かの無言が無音の圧力となり、双葉は懸命に祈る。

視界が一気に開けた。

「蓮見先輩！」

へたりこんでしまったせいで双葉の押し込められている棺桶が砂の坂をずずずと沈みこんでいく。

「そのままじつとしてるんだ、双葉。こいつは動きを感知して引き込もうと攻撃してくる」

「……む、無茶いわないで、ください……」

「喋るな」

なんてむちやくちやなことをいうのだ、この人はと双葉は泣きたくなかった。

「塚馬の言う通りだ、今から引き上げてやるからアンタは黙っていた方がいい。舌をかみたくないのなら」

まさかの声に双葉はひどく動揺した。いつぞやのコンビニで冷た

くあしらわれた少年がこちらを覗き込んでいるではないか。助けるってどうやってやるのだろうかといいたかったが、男二人して一言でも発したらその瞬間に見捨てると顔に書いてあるものだから双葉は言葉を飲み込んだ。

「~~~~っ?!」

突然の衝撃が双葉を襲った。浮遊感は大きくなり上に視界が高くなっていく。訳の分からないまま穴から脱出することが出来た双葉は、誰も手を伸ばしてくれないのでおずおずと棺桶から降りた。

「やればできるじゃないか」

「懸命な判断でしたね」

なんでだろう、助けられた気がしない。ものすごく扱いがひどい気がするのは気の所為だろうか。腑に落ちないながらも二度とここから出られないかもしれない恐怖からようやく逃げることが出来た双葉はその場に座り込んでしまった。

「後ろを振り返るなよ」

「今のうちに逃げるから、ほら、はやく」

手を掴まれた。そのまま四の五の言わずに逃げるために走り出す2人に気圧され、引きずられるように双葉は走った。走って、走って、走って、走った。地区大会の数合わせのリレーより走った。遅刻しそうな通学路より頑張ったかもしれない。気づいたらバス停の近くにぜいぜいいいながら座り込んでいた。

「あの……」

「ああ、忘れてた」

蓮見先輩から手が離れてしまう。名残惜しく感じつつ、次のバスの時間を確認している少年に双葉は声をかけた。

「あの…… その、助けてくれてありがとう」

「…… お礼は塚馬に言ってください。僕は頼まれただけですから」
「えっ?」

「…… ジョルノは余計なこと言わなくてもいいんだ」

「それは初耳ですね」

「ジョルノ」

ジヨルノと呼ばれた少年は肩を竦めた。呆れ顔である。どうやら双葉が事情を聞いたそうな顔をしていることに気づいたらしい蓮見先輩は険しい顔で牽制にかかる。肩を落としたジヨルノは双葉に尋ねたのである。

「残念ながら次のバスまで45分もあります。君になにがあつたのか、教えてもらえませんか？そして悪いことはいわないから今日のことは悪い夢だったと思つて忘れてください。それが君のためでもある」

聞いてもいないのに女は双葉に歌うように話しかけたという。恍惚とした酩酊状態で目に焦点は合わず正気はすでに失われてしまつているようだ。

女は花を育てるのが好きではなく穴を開けるのが好きなのだという。穴を掘ってから何を植えるのか考えるものだから庭は不自然に柔らかくなり、掘つては埋めてを繰り返しているうちに大規模化していく穴を元に戻すだけでは勿体なくなつていく。そのうち花を植えるようになった。世話をしている間は気分が紛れた。やがて見栄えを気にするようになり自由にできるスペースが花が庭を占拠するようになり減つていく。やがて衝動を抑えきれなくなつた女は通学路に花を植えるようになった。その花が評価されて団体が立ち上がり人が集まるようになる。また自由に出来なくなつた。そして学校の花壇などにも手を伸ばしたが満足できなくなるを繰り返し、やがて女は新たな庭を手に入れた。奇妙な性癖をもっている夫婦だつた。庭に興味がないようだから婦人の相談に乗るついでに思う存分穴を掘るようになった。花壇でも作ろうと肥料を準備していると夫婦がいったのだ。

「よかつたら穴を掘つてくれないかしら」

言われたところに穴を掘ると二度と掘り返されないように上からモニュメントを置かれてしまった。また自由にできるスペースが減っていく。イライラがつかさなるうちにそのモニュメントをどかして穴を掘るようになってしまった。その先で女はミイラ化した犬を掘り当ててしまう。

社王町を騒がせているペット誘拐事件の犯人がこの夫妻だと気づいてしまった女はミイラの研究をするためにしていたのだと気づいてしまう。そして共犯者に成り下がってしまった。

そこで女は生き物を埋める、埋葬すること、土葬することに魅力を感じるようになっていく。だんだん大きくなっていく動物。やがて女は最後の一線を越えることになる。

完全拘束される性癖はあってもミイラに憧れはあっても自分が本気でミイラとして死ぬ気は無い夫妻とミイラにしたい女は決裂した。

初めて得た理解者に拒絶されたとき、女は我を失うほど怒り狂い、気づけば夫妻を棺桶に閉じ込めて生き埋めにしてしまったのである。

「そしてわたくしは最大の理解者をえたのです」

女はそういつて微笑んだ。

「……なるほど、いつからスタンド使いになったのかはわからないけど被害者は夫妻だけか」

「出してくれと叫ばないあたり諦めたのか？」

「いや、互いに名前を呼んですすり泣くような声がしているから、互いに動けない状態なんだろうさ。自分が今どこにいるのかすらわからないらしい」

「…… 助けます？」

「なぜ？」

「僕は構わないけれど、双葉千帆はまた首を突っ込む気がしてならない」

「……………」

彼は眉を寄せた。どうするのか考え込んでいる。沈黙が僕達の間
に降りた。

「僕の友達の家を庭を買わせてくれと森野は言ってるらしい。困って

いるようだから情報を流しても？」

「以前ジヨルノが言ってたやつらか」

「はい」

「なら、名前や素性は出さなくてくれ。それが条件だ。本気で調査されたらどうにもならないが勝手に探られるのは不愉快だ」

「わかりました、なにかありましたらまた連絡しますね」

「ああ、よろしく」

億泰先輩はどういうわけか、僕の話聞いた途端、涙目である。どうしたんですか？と聞いてみると

睨みつけてきた。失礼な先輩だ。

「あのよオ、ジヨルノ。おめー俺になにか恨みでもあんのかあ？よりよってなんで今？なんで今いうんだよオ！森野さん今日くる予定なんだぞおめー！こえーじゃねえかあ！これでまともに見れないぞどーしてくれんだ!!」

「それは申し訳ないことをしましたね、間が悪かったかな。でも断る方法を探してくれと言ったのは億泰先輩じゃあないですか」

「そりやそうだけどよお……くっそう」

「それ、ほんとなのかジヨルノ？違ったらわりとシャレにならなくね？」

「いえ、それは間違いないですよ。施設から養子にいった子が久しぶりに来てくれたとき、ペットが居なくなっただけというから気になって調べた結果ですからね」

「ジヨルノの生体探知はホント便利だよなあ」

「うえー、まじかあ……」

「土に止まったのですでに死んでると思うんだけどさすがに不法侵入することは出来なかったから……」

「あー……なるほどな。なにか決定的な証拠になるもんがありやいいんだな」

「そういうことです」

「現行犯か、決定的な証拠かあ……結構ハードル高くない？」

「何とかして捕まえないと億泰先輩の家が土葬専門の葬式場になりますよ」

「やだ、ぜってえいやだ！寝れなくなるじゃねーかー！なんとかしてくれよ!!」

泣きついてくる億泰先輩をなだめる仗助先輩を眺めながら、僕はどうしようかと思案する。

「こないだみてーにさ、ジオルノのスタンドで庭に遺体を出しちゃうのはどうだ？」

「私有地でペットを土葬しても法律に違反しませんからね……一体くらいじゃ警察は動かないんじゃないかな」

「それもそうか……ジオルノくんのスタンドの力はいくつもペツトの持ち物がないと掘り返せないもんね」

「探偵でもないのに、さすがに知り合い以外から拝借するのは難しいと思いますよ」

「うー、どうすりゃいいんだよオ！」

億泰先輩はいよいよ頭をかかえはじめた。

「とりあえず1度いってみませんか？」

「それもそうだな」

「億泰くんが行きたいっていったら、入れてくれるんじゃないかな？」

「おーたしかに」

「頼んでみたらいいんじゃないかな」

億泰先輩はそれもそうだなと頷いた。やる気になってくれてなによりである。

別れを告げた僕はそのまま億泰先輩たちと離れて官舎に向かうことにしたのだった。

「…… あったな」

「あったね」

「うあああ、前の主人が死んだ建物ぶっ壊して平地にするとか何考え
てんだよオツ！」

「いゝっ!？」

「気づきたくなかった!気づきたくなかったよ、仗助君!もしかし
てーとは思ってたけどさあ、なんで言っちゃうんだよオ!!」

「しかも僕の飛ばしたアゲハ蝶、あの竹筒の真上に止まってるんです
よね、見えますか康一先輩」

「見えるよ!すっごい見えるよ!?!なんで僕にだけ内緒話するみたいに
いったのさ、ねえ!」

「うわあ…… よく見りやあの辺竹筒多すぎじゃね…… ?まさか
この下に全部…… ?」

「ま、ままままさかあ!こんなわかりやすいくらい目立つのする訳な
いじゃないか!ね、ジヨルノ君!」

「…… さあ」

「そこは嘘でも頷いてよ、ねえ!？」

「いや、ね?先輩方がどうしてここまでビックリしてるのか、正直わか
らないんだ。一家心中の屋敷ですよ、そもそもここ」

「アリスちゃんで慣れてるからいいんだよ!直接現場見たわけじゃな
いし、テレビや新聞の話だろー?」

うんうん頷く仗助先輩たちに、ふうん、といいながら僕はチャイム
を押した。

「ちよっとおおお!」

「待って待って待ってくれ心の準備があ!」

「埒が明かないじゃあないですか。ほら、億泰先輩」

「押すなっば、うわあああ!」

自動的に扉が開き、仗助先輩たちは口を開けたまま固まる。ぎこちない足取りで入っていく。

ちら、とみた僕は一部の隙もないようびったりと塞がれている土を見た。穴に死体を入れたのだろうか。それともまた埋め直したのだろうか。なんとなく土の零れる音がした。あの巨大な蟻地獄が土をかけはじめ、土の降りかかる音は乱暴でまるで雨が降るような迷惑さがありそうだ。

でも家庭菜園やバラ園の中では全く目立たない。巨大な穴があったところで違和感はない。

(さて、どうするか)

仗助先輩たちと目配せする。

ピンポンとチャイムを鳴らすが誰も出ない。

「おかしいですね、億泰先輩と約束の時間ちようどなのに」

「まさか入れ違いかあ?」

「扉はあいたからいるんだよな?」

「でもああいうのって、機械の設定でどうとでもなるよね?」

「…………… お前ら、庭にいかねーか?」

ものすごく嫌そうな顔をして、みんな互いの顔を見つめていたがめんどくさくなってきた僕が先に歩き出すと追いかけてきた。どつちが年上なんだかわかったもんじゃない。

「昨日、こんなのがなかったんですが……………」

「まじかよ……………」

「誰が覗く?」

しばしの沈黙。

「じゃんけんぽん!」

「よっしやあ!」

「やったぜえ!」

「康一先輩お願いします」

「ええええ……………」

渋々と言った様子で康一先輩は竹筒に耳をすませた。そして、その顔がますます血の気かうせていく。

「こ、こ、声が聞こえるよ、みんなあつ！助けてくれってえええ！」
「まじかよ、生き埋めっ?!」

「うわあああ、とうとう人間にまで手を……って、ありゃ?」
「どうしたんです、億泰先輩」

いよいよ億泰先輩が悲鳴をあげた。

「森野さんの声だああああつ！はやく、はやく救急車ああああつ!!」
ぎよつとした僕達だったが森野さんに間違いないと億泰先輩がい
うものだから、あわてて近所に電話を借りに行く。

「ど、どどうしよう、掘り返さなきゃ!?!」

「下手打って死んじまったらやべえ！竹筒倒れないようにしようぜ
!」

「う、うん!」

「僕は他のところから声が聞こえないか見てきますね」

「おう！頼むぜー!」

僕はひとつひとつ確認するふりをしながら本来の屋敷の持ち主の
ところに向かった。竹筒に耳を傾けると助けて助けてと発狂したよ
うに叫んでいるではないか。こないだの自己陶醉にまみれた自殺志
願者の声とはとうてい思えなかった。

「今助けますからね、ちよつと待っていてください!」

僕が呼びかけると縋るような声が聞こえてくる。どうやら僕の声
は覚えられていないようだった。

そしてしばらくすると辺りは救急車とレスキュー隊だらけになっ
てしまったのだった。

結局、生き埋めにされていた人達は完全に正気を失っていて話にな
らない。指紋などの物的証拠はペットの連続誘拐犯と生き埋めの犯
人が逮捕されることになった。僕がみたあの化け物は忽然と姿を消
してしまったのだった。

(まさか穴掘るスペースがなくなったから移動しただけだったりし
て)

まさかな、と思いながら、立ち退きが未遂で終わった祝いで喫茶店
に行くことになった僕たちは通学路を外れて交差点を渡ることにし

たのだった。

本体 なし

スタンド能力 オールドフィールド

「破壊力」C

「スピード」B

「射程距離」E

「持続力」D

「精密動作性」A

「成長性」B

旧ランド邸に出現した家庭菜園の庭限定で出現するスタンド。家主は穴を掘ってなにかを埋めたくなり、段階的に生きている小さいものから大きいもの、やがては人間を埋めたくてたまらなくなる。用無しになると家主が自分から埋まってしまう。埋めるスペースがなくなるというのまにかいなくなってしまう。サウンドガーデンに引き寄せられてきたが、本物のスタンド使いがいなかったため仗助たちがぐるまえに移動してしまった。

ドリーム・シアター1

「昆虫博士か爬虫類研究家か、それとも植物学者にでもなるつもりか？ ジョルノ」

「海洋冒険家の線も捨てがたいですね」

「最近そればかり読んでいるな、お前は」

「人というのは成功や勝利よりも

失敗から学ぶ事が多いんですよ、琢馬」

「なるほど、なにかしらの再現ができなかったのか」

「より複雑な動きを可能にするにはその生命を理解する必要があるからですね。君のようにシャッター記憶法が使えればよかつたんですが」

「お前らしくない冗談だな」

「せっかくお目当てのページを探り当てたのに取り上げられたからですよ、返してください。それ。貴重な文献だから持ち出し禁止なんですよ」

「……毒蛇？」

「最近なにかと物騒ですからね、自衛の手段は多いに越したことはない」

「なるほど。なら、付き合ってやろうか」

「どういう風の吹き回しです？ いつもつまらなさそうな顔をして断るのに随分とやる気があるじゃあないか」

「ジョルノのいうことも確かだと思ったただけだ」

「自衛の手段は多いに越したことはない」

「そうそれだ」

「それでこの間の借りはチャラというわけですね、わかりました。なら、この辺りからリクエストはありますか？」

「アマガサヘビ、インドコブラ、カーペットバイパー、ラッセルクサリヘビ？…… ジョルノ、僕はお前にそんなに不快なことを仕出かした覚えはない」

「さすがに知っていましたか」

「あたりまえだろう、この辺りは新書以外は小学生の時に読破している」

彼はつまらなさそうに本棚を振り返る。

インドには危険な毒蛇が多いが、上の4種は毒が強く、人家近くや農地など人の関わりが深い地域に生息するため、咬まれる被害が多いという特徴がある。彼らが捕食するネズミなどは人間の居住地域で繁殖しやすい。彼らは夜行性であり、多くの被害者は夜間に裸足で歩いて彼らを誤って踏みつけてしまい咬まれるに至る。

アマガサヘビやカーペットバイパーは近縁種が多く生息するため、それらも一緒に含まれていることが多い。

なお、同じインド周辺に生息し毒が強いキングコブラは、四大毒蛇には含まれない。相対的に小さい種である四大毒蛇と比べてキングコブラは遥かに多くの毒を注入するが、キングコブラは比較的臆病な性質を持ち、ジャングルの奥に住むため人間との接触が少ない。

またキングコブラが捕食するのは他の蛇などの爬虫類だけで、ネズミは飼育環境下など特殊な状況でない限り基本的に捕食しない。

インドでは四大毒蛇のために作られた血清が開発されている。これは広く用いられており、四大毒蛇のどれに咬まれてもこの血清で治療が可能である。だがこれ以外にも恐ろしい蛇はたくさんいる。

「血清があれば死にはしませんよ」

「生成できるようになってから言え。それに確実性を高めるなら映像で確認できるものじゃなきゃあな」

「冗談ですよ。責任をとる道は身投げのような行為の中にはない。責任をとる道はもつとずーっと地味で全うな道ですからね」

「適切に処置をすれば蘇生できるものにしてくれ。お前の治療能力向上にも貢献してやるんだから一石二鳥だろう」

「なにを企んでいるんです?」

「あるとしても言う義務はないな」

「たしかにそうだ」

「ちなみにどちらをリクエストするんです?」

「決まってるだろう、どちらもだ」

僕は彼から指定された毒蛇について読み込む。そして、通学路近くの一級河川において雑草だらけの橋の下に潜り込んだ。そして、来いよと手招きする彼目掛けてゴールド・エクスペリエンスを発動した。足元から一気に成長する木から跳躍し、逆光を陣取る。

「産まれろ、生命よ」

投げつけられた石ころが毒蛇に変化し、彼に襲いかかった。痛みに彼は呻くが蛇を捕まえてしまった。

「君のリクエスト通りどちらも準備してみました。やめろといってくれたら治療に入りますね」

「ああ」

冷や汗をだくだく流しながら彼は頷いた。

ヘビ毒は神経毒と出血毒、筋肉毒に大別される。複数のタンパク質で構成され、多くの種では消化液が毒腺に溜まった物。一部の種は、餌として捕食した動物の毒を再利用している。

神経毒は主にコブラ科のヘビが持つ毒。毒の作用部位から神経伝達を攪乱し、骨格筋を弛緩或いは収縮させ、活動を停止させる。横隔膜が麻痺することで呼吸困難に陥り絶命する。

出血毒は血液毒とも呼ばれる。主にクサリヘビ科のヘビが持つ毒。血液のプロトロンビンを活性化させ、血液を凝固させる。その際に凝固因子を消費する為、逆に血液が止まらなくなる。さらに、血管系の細胞を破壊することで出血させる。血圧降下、体内出血、腎機能障害、多臓器不全等により絶命する。特に腎臓では血栓により急性腎皮質壊死を起す。

治療には出血毒の場合、抗毒血清の投与、血清投与によるアレルギー反応の治療。呼吸管理、腎機能の管理が必要だ。

「はじめますか」

彼が噛まれた局部に焼き火ばしを当てられたような激痛がある。局部が腫れ上がりだんだんとひろがる。毒は毛細血管壁を侵すので局部に内出血が起こり、そのために局部が打撲傷を負った時のように紫色を帯びてくる。白血球、赤血球が毒により破壊され筋肉組織

に十分な酸素が与えられないので局部的にネフローゼ（筋肉組織が死ぬ事）がおこる。

また、血液の殺菌能力も落ちるので二次的化膿の危険も非常に大きくなる。頭痛を起こす事があり、一時的に視覚障害をおこすこともある。ときどき内臓が出血して尿あるいは大便と一緒に血液が出る。唇、歯茎、爪の下、局部に出血することがある。

この毒蛇は小型種のヘビであり注入される毒量も少ないのでハブ毒より毒性は高いものの死に至ることは稀。

彼の言われたとおりの時間放置したのち、僕は彼を休ませる。噛まれた傷口を動かさないように固定した。

傷口の上部をタオルなどであまり強くない程度で縛る。止血・緊縛は体の中心部に毒の侵入拡散を防ぎ遅らせる事ができる。しかし、あまり強い止血はかえって悪い結果を招く事もあるので少なくとも10分おきに1分程度ゆるめる必要がある。

すみやかに傷口から毒を吸い出す。吸引器があればそれを使うのが一番である。出血する血液と共に毒液を吸い取り、捨てることを何回も繰り返す。速やかに吸引処置を行えば後々の治療効果が大きい。手足など自分で処置できる部位は自分で処置するのが良い。

また、2〜5%のタンニン酸で洗浄するとヘビ毒を不活性化する効果がある。口で毒を吸い取った後は水か渋茶などで口をすすぐのが良い。血が出なくなったら塩水で熱い湿布をする。そしてさめたら、また吸い出す。

毒や血液を吸い出した後は他の菌による混合感染を防ぐため消毒剤による処置は必ず行う。氷などで患部を冷やささない。

可能な限り安静に保つ事。救急車の応援を求める事。水分を摂取すること。血液中の毒素濃度を薄め、毒素排出にもつながることとして水分を多くとらせ利尿促進を計る。タンニン酸溶液の活用をする。蛋白凝固剤のタンニン酸とヘビ毒（出血毒）が直接触れあうとヘビ毒は中和分解される。

タンニン酸は薬局にも売っているが含有する物として渋茶や渋柿

がある。

「どうです？」

「だいぶん気分がマシになってきた、ありがとう」

「それはよかった。さあ、病院に行きましよう、琢馬。医師に処置報告をして、一刻も早く医師の診断・治療を受ける事が一番大切ですからね。今度会ったらどんな感じだったか教えてください」

「いきなりどうしたんだよ、ジョルノ。おめーが来るなんて珍しいじゃねーか」

「実は億泰先輩にお願いがあつてきたんです」

「んんー？わかんねーな、なにもつたいぶつてんだよ。教えろつてば」

「君のお兄さんは随分と僕のことを調べていたじゃあないですか」

「…… おお、そうだなあ」

「そう暗い顔しないでくださいよ、僕は気にしちやいないんだ。むしろこれからのために知る必要があることがわかつて感謝すらしているんですよ。だからここを訪ねたつてわけです。君のお兄さんはおそらくディオの信奉者たちのつてを使って僕について調べあげたはずです。あのとき見せられた資料、見せてもらえませんか。空条さんがきつと根こそぎ持つて行つてしまふと思うので、それまでに控えておきたいんですよ」

「あー？なんでジョルノが調べるんだよ？承太郎さんに調べてもらえばいいじゃあねえか」

「あのですね、僕はD I Oの息子なわけですよ億泰先輩。世界中にはまだまだたくさん残党がいて、僕のことを誘拐したりして第2のD I Oにしようとするかもしれないじゃあないですか。あるいは君のお兄さんみたいにD I Oに対する復讐のつもりで僕を酷い目に合わせ

ようとすることだつてあるかもしれない。だから知りたいんですよ、僕は。なにも知らないなんて冗談じゃない」

僕の話聞いて、形兆先輩のことを思い出したらしい億泰先輩は否定したくてもできないらしく唸りながら目を逸らしてしまう。僕を前にしてそんなことない、考えすぎだ、と言いたいのは山々だが、他ならぬ形兆先輩がやらかしているのを目撃した経緯があるのだ。僕も形兆先輩も否定したくない億泰先輩は困り切ってしまっている。嘘をつけない優しい人だと僕は思った。

「勘違いしないでくださいよ、億泰先輩。これはこの上なく前向きなことなんです。僕は今まで何者かなんて考えたこともありませんでしたが、わかつたことでようやく前に進むことが出来るんです。あまり恵まれた幼少期じゃありませんでしたがね、これはいわばマイナスからゼロに戻すための作業なんですよ。どうかわかつてください」

僕の言葉を聞いて億泰先輩はそんなにいうならと渋々家に入れてくれたのだった。そして形兆先輩の部屋から僕に関する調査書を受け取る。不愉快な写真やスクラップブックも合わせると人を殴って殺せてしまいそうな厚さになった。

「これ、借りてもいいですか、億泰先輩。必ず返しますから。コンビニなんかでコピーを取りたいんですよ」

「おう、いいぜえ。ただし、ぜつてー無くすなよジョルノ。そりや兄貴の遺品なんだからよお」

「はい、もちろん原本はお返ししますよ。ただ、空条さんが調査のためにとアメリカに帰国する時がきたらこれごと持って行ってしまいそうな気がするんですがどうするんです?」

「アメリカかあ……. そこまで考えてなかつたな」

「空条さんに1度聞いた方がいいですよ、億泰先輩。大切なものは自分の手からこぼれ落ちないようにしないと」

「おう、そうだな! わかつた」

「それはよかった。あ、すいません、さっそくコピーを取りたいので失礼しますね。いきなり押しかけてすいませんでした」

「いいってことよ。俺たちの仲だろ、ジヨルノ」

じゃあなあ、と見送ってくれた億泰先輩の屋敷を後にした僕はそのまま帰路につく。億泰先輩にいったのは半分本気で半分嘘だ。僕は僕について知らなければならぬ。形兆先輩にどうしてお前は俺の父親のようにならなかつたのだと問いただされたとき、なにひとつ答えることができなかったのがなによりも悔しかったのだ。

僕について暴力的なまでに調べ尽くし、情緒も干渉もなく容赦ない調査結果だけを羅列している報告書。読むだけでだいたい精神を削られる心地がしたがなんとか耐えた。

僕が最初に調べようと思っていたベビーシッターの女性についての情報を見た気がしたのだ。

「…… あった」

ぼやけながらもたしかに僕の中にあつた根幹の記憶が鮮明になっていくのを感じる。履歴書などを閲覧していくうちに僕はひとつの紙切れに視線を奪われた。

「…… 子供がいたのか!」

シングルマザーが我が子を育てるためにベビーシッターをしていたら殺された。これだけでドラマがひとつ出来そうな悲劇だ。その名前を指でなぞる。

「僕と同じくらいの男の子…… か」

じわりと汗が滲むのがわかる。住んでいる場所なども詳細が載っていた。

自然と足が向く。なにがしたいのかはわからない。ただなんとなくすぐにでも会いに行かなければならない衝動に駆られたのだ。

それは古びた映画館だった。よくいえば昭和のレトロな雰囲気、悪くいえば映画館ごと焼き払ったらさっぱりするだろうなと思うような雰囲気がある。大学サークルの自主制作映画やマイナーな映画を公開しているようだ。僕は意を決して歩き出した。ここの支配人が彼女の父親なのだ。

「いらっしやい」

煙草をくゆらせながら老人がチケット売り場で新聞を広げながらこちらを見つめてくる。僕を見て物珍しそうにジロジロみたあと、にやりと笑った。

「映画、好きかい？」

「内容によりますね」

「はっはっは、そりやそうだ。正直だね坊主」

いきなり尋ねるよりはなにか見てからの方がいいだろうか、と考えた僕は適当に目に入った映画のチケットを買うことにした。

「もうすぐやめるんですか」

横に張り出された手描きのお知らせには今年をもって閉鎖すると書いてある。

「ああ、そうだよ。やっぱテレビの時代にや勝てないね」

道楽特有のお気楽さがちっとも暗く感じさせない。僕は支配人に好感を抱いた。彼女の父親だからというのもあるのかもしれない。

「まさかこんな若い子がくるとは思わなかったな。さあ、ごゆっくり」僕は教えてもらった通路を抜けて貸切状態のシアター席に座った。

暗幕の向こう側はぬくもりをおびた人工の闇を、襟巻のようにしっかりと掻き合わせている。全盛期にはこの小さな劇場では毎日のように、様々な興行が開催されてきたようだ。劇場の歴史分の笑い声が、この薄汚れた壁には吸収されているような色合いに感じる。映画館は、長い無限につづくトンネルのようだった。

かつては観客の熱気が館内に充満していたのだろう。照明は落ち、ライトはステージを明るく照らし、人々はぼそぼそと話し込みながら開演を待っていたころを容易に想像出来る。

生まれて初めてみるジャンルの映画だ。こんなことでもないともず見ないだろう。やがて真つ暗になった世界が知らない世界を映し出す。独特の音が響く。僕は前をみつめた。

不思議な映画だ。芝居は、実体のない神がかりの恍惚境を招き出す媒体のようで、舞台の荒つばい興奮に巻き込まれ、出演者が喚声をあ

げる。カラフルな安っぽい照明がチカチカと舞台を照らし、ステージはまるで積み木の見本みたいに様々なアンプやスピーカーが並んでいる。音にあわせて揺れ、巨大な一つのざわめきを作る。空気の振動を一身に集めて反り返りまた前へのめる。

巨大なスピーカーからの音はステージで動いている連中とは関係ないように聞こえる。これに初めから音があつて、それに合わせて化粧した女優が踊っているように見える。

「……？」

違和感を覚えたのは、その女性が誰かに似ていたからだ。何度も目をこする。いやまさかそんな馬鹿な、こんなことがありえるのか？僕はまた凝視した。

「……かあ、さ、ん……？」

その瞬間、僕に女優は微笑んだ。ゾワツとした僕はスタンドを発動する体勢に入るが遅かった。

「しまった、この中全体がスタンドなのか……！」

僕はそのまま意識を失ってしまった。

気がつくとも僕は倒れていた。白骨が雪の降ったように、あたりが白くなるほど転がっていて、周りは惨憺たるありさまだ。息が凍るような恐ろしい情景が広がる。目の覆いたくなるほどのあまりの惨状の現場をひと目見るや言葉を失う。慌てて僕は立ち上がった。

ここで起きたであろう悪夢のような事件に心を引き裂かれる。その光景のリアリティのなさに叫ぶこともできず、ただ放心する。終わりのない悪夢を見ているようだった。僕はこの光景を知っている。

「なにもてんの、ハルノ。見世物じゃないのよ？」

ゾツとするほど暗く、憂いに満ちた瞳だった。とんでもないものを見てしまったと直感した。

僕は施設で教わった「地獄」の絵がそのままこうであることを思い出した。このままではシエークスピアお得意の「悲劇」が起きてしま

う。薄い暗黒。天からともなく地からともなくわき起こる大叫喚。ほかにはなんにもない。

目の前にいる母親の目は報告書にあったまさに肉の芽に苛まれた女の目をしている。

「……………億泰先輩の能力がなければあの屋敷もこんな状態だったのか……………」

余りの酷さに、眉をひそめた。

「何度も引越すわけだ。ベビーシッターの女性も恋人もすぐにいなくなつてすぐに補充するわけだ」

僕は母を見た。母は僕を見ていない。その向こう側には虚無しかない。いや、母の目を通して誰かが見ている気がする。

「僕がどこにいようと変わらないというわけか……………DIO、あんたって人は僕が考える以上のやつだったんだな」

母はなにも言わない。

なるほど、どうあがいても激しい家庭内暴力が繰り返されることになつたわけだ。僕の中にあるジョースターの血が覚醒することを余程危惧しているように見受けられる。

たしかに僕は徐々に自尊心と自信を失い、追いつめられ、鬱状態に入り込んでいった。自立する力を奪い取られ、アリ地獄に落ちたアリのように、そこから抜け出すことができなくなった。

家庭内で妻や子供たちに激しい暴力を振るうのは、決まって弱い人格を持った男たちといわれている。弱いからこそ、自分より弱い人間をみつけて餌食にせずにはられないのだ。さぞ操作しやすかつたに違いない。

僕は母を無視して後ろのアパートに入った。アパートには電話がひとつ、テレビがひとつあり、それらは玄関のわきにある共同のホールに置かれていた。ホールにはまた古いソファ・セットとダイニングテーブルがあった。僕は一日の大半の時間をその部屋で過ごしていた。

しかしテレビがつけられることはほとんどなかった。テレビがついていても、音量は聞こえるか聞こえないかという程度だ。僕はベ

ピーシッターの彼女に本を読んだり、新聞を広げたり、編み物をしたり、額を寄せて誰かとひそひそ声で語り合うことを教わった。一日絵を描いていることもあった。

今思えばそこは不思議な空間だった。現実の世界と死後の世界の中間にある場所みたいで、光がくすんで淀んでいた。晴れた日にも曇った日にも雨の日にも、昼間でも夜でも、同じ種類の光がそこにはあった。

僕達は額を寄せ合うようにして、小声でひそひそと話し合っていた。それは現実の風景には見えなかった。

「心象風景なのか……？あまりにも現実から離れている……」

僕達は架空のドラマの登場人物みたいに見えた。呼び鈴もなしにドアが開かれる音がした。ああ、悪夢の再来だ。

「……………誰だ、この男はっ！僕はこの男を知らないっ」

僕の目の前で、ただ男は立っているだけ。そこに立っているだけだった。それがこの男を証明する物の1つだ。母の恋人が帰って来るとばかり思っていた僕は幾人もうる覚えな男たちとは似ても似つかない男に驚くのだ。若い、若すぎるのだ。

状況を端的に表すならば、一般人という括りになるのだろう。そう、彼は有態に言っただけだ。この空間に帰ってこれる異質さを除けばだ。

「誰？」

彼女も知らないのか、不思議そうに見上げる幼い僕を抱き上げたまま男に問いかける。

「やっと見つけたぜ……シオバナハルノはこいつか？」

「ええ、そうだけだ」

「依頼主の女から聞いてはいないか？今日来客があると。シオバナハ

ルノに用があると」

「もしかして、あなたが奥様が言っただご主人様からのお使いの方ですか？」

「そう、まさしくその通りだ。合鍵は依頼人から預かっている。それがなによりの証拠だ」

「……………」

彼女は幼い僕を離そうとしない。

「どうした？貸せ」

「なにをするの？」

かれこれ1時間になる。僕は彼らの不毛なやりとりを聞いていた。やがて彼女は男に僕を引き渡し、不安そうな顔で幼い僕を見て見送っていった。

「これでいい、これで……………なあ、かあさん」

「!!」

この瞬間僕は鳥肌が立つのがわかった。すでに手配していたタクシーが集合団地の安アパートの前に路上駐車しており、幼い僕は男に連れられて乗り込んだ。

僕は思わずその道を通り過ぎ、タクシー乗り場に向かう。並ぶ長蛇のタクシーの列が混雑しては解消され、また混雑しては解消される繰り返しを見つけ、そこに乗り込んだ。

運良く捕まえられたタクシーで追跡したその港は、海の匂いというより無機質のさびた鉄の匂いがしていた。波止場に停泊している船の灯かりが花のように煌いている。埠頭に並んでいる巨大なガンブリーグレーンの列も、夢の地平線上に立ったまま死んだキリンの骸骨の列のようだ。

小さな造船所、倉庫などが目白押しに並ぶ先を行くと、栈橋のコンクリートに砕ける波が足元を揺らす。

遠くには巨大な港があった。何本ものクレーン、浮ドック、箱のよ
うな倉庫、貨物船、高層ビル、そういつたものが見渡せる。右手には
内側に向って湾曲した海岸線に沿って、静かな住宅街やヨット・ハー
バー、酒造会社の古い倉庫が続き、それが一区切りついたあたりから
は工業地帯の球形のタンクや高い煙突が並び、その白い煙がぼんやり
と空を被っていた。

防波堤を打ち、コンクリートの護岸ブロックのあいだを縫うように
引いていく冬の波が僕の髪を揺らす。

赤い太鼓腹をはば広く浮かべている汽船や、積荷最中らしく海の中
から片袖をグイと引張られてでもいるように、思いつ切り片側に傾い
ているものがある。

黄色くて太い煙突、大きな鈴のようなブイ、南京虫のように船と船
の間をせわしく縫っているランチ、寒々とぎわめいている油煙やパン
屑くずや腐った果物の浮いている何か特別な織物のような波。風の
工合で煙が波とすれずれになびいて石炭の匂いを送った。

ウインチのガラガラという音が、時々波を伝って直接に響いてき
た。

「今とはだいぶん違う雰囲気だな……」

僕はあたりを見渡した。

視界の隅に焼き付けたナンバーのタクシーが乗り捨ててある。こ
こで逃走車を変えるつもりのようなのだ。逃がしてたまるかと無人の漁
港に向かう。

埋め立てでほとんどの海岸線を奪われたあと、辛うじて残った小さ
な漁港には、小型の漁船が数艘停泊している。波止めで囲まれた湾内
はおだやかで、漁船を繋ぐロープの軋む音だけが、ときどき思い出し
たように辺りに響く。

強い潮の香に混って、油の匂いが濃くそのあたりを立ちこめてい
た。もやい綱が船の寝息のようにきしり、それを眠りつかせるよう

に、静かな波のぽちやぽちやと舷側を叩く音が、暗い水面にきこえて
いる。

夜の港は舷の触れ合う音、とも綱の張る音、睡たげな船の灯、すべ
てが暗く静かにそして内輪で、柔なごやかな感傷を誘った。南の海の
色や匂いはなにか荒々しく粗雑だ。

波止場には船がついたのか、低い雲の上に、船の煙がたなびいてい
た。汐風が胸の中で大きくふくらむ。

「……は………」

今にも発進しそうな車が1台こちらに向いているのがわかる。あ
まりに眩しくて僕は目を細めた。

「……までの追跡御苦労様だな、シオバナハルノ！」

ジョルノは咄嗟に気付く。男はただの一般人ではない。この世界
ではどういうわけか、幼い僕やベビーシッターの彼女は僕の存在に気
づきもしていなかった。なのに、この男は僕の存在に気づいている。
このふてぶてしく自信家な態度といい、後ろで構えている拳銃の引き
金を引く音といい、どうやら僕を殺す気なのは間違いないようだ。

「そう、俺は虹村の出番を奪った！肉の芽を埋めたところでお前のス
タンドが、生命の波動が、その発芽を邪魔しやがるからなあ！」

「君は……… きみはまさかっ！クソッ！」

僕は咄嗟に飛び出し、発車寸前の車のフロントガラスに銃痕が染み
る。とつきの判断で、後頭部への直撃を避けた。

「スタンドも使わず早いな、凄じやあないか………」

男も車から出て、ジョルノを見やる。逆光が眩しくてよく見えない
がそこには拳銃が握られているに違いない。

「さすがはDIOの息子にしてジョースターの血を引く者だな！そ
う、俺はお前を守ろうとしててめーの義理の父親に殴り殺されたベ
ビーシッターの息子だ！善人を殺すのは気が引けるが悪人なら関係
ない！ここで死んでもらうっ！」

僕はため息をついた。

「……… ふうん。ずいぶんと直球な八つ当たりですね。そうやって
僕の心を折るつもりなんだ………」

ジョルノが報告書で目にしたことがそのまま語られる。ジョルノは底冷えするほどの感情を抱いた。

「この奇妙な世界の正体は……あなたですか？」

「ご名答っ！そのために俺はスタンド使いになっただけだからな！」

「なるほど。でも、残念ながらそれは今回が最初で最後になりますね……。アンタはミスを犯したっ！僕を利用する……。！利用してしまった事がミスだったッ！」

「へえ……。言うじゃないか！」

男が拳銃を構える。しかしそれよりも速く、ジョルノはゴールドエクスペリエンスを発動する。

「生まれろ、生命よ!!」

沈黙がおちる。

「なん、だ、これはっ……。！」

なぜかスタンドが発動しない。男は高笑いした。

「あたりまえだろう！この時代、この時、この瞬間の汐華初流乃はこのクソガキだからなあ！まだスタンドに目覚める前の、しばしば暴走してろくに操れない、能力に振り回されるだけの、クソガキだあ！」

「ぐあっ！」

タクシーから引きずり出された幼い僕が男にぶん殴られた瞬間、僕にも衝撃が襲いかかる。

「お前は、そう、ただの観客！上映される映画になにひとつ干渉できないまま、殴り殺される自分を見ているしかできない、ただの観客なんだよお！」

まるで津波に飲み込まれるようだった。顔面に鋭い衝撃が走り、視界がぐらりと揺れる。すぐ続けて2発、3発と蹴りや拳が飛んできた。男は殴り疲れてくると、罵声を浴びせてくる。

そして4発、5発、6発。殴られた数を覚えていたのは、30発くらいまでだった。口の中が鉄の味でいっぱいになり、少しずつ意識が薄れていく。全身から力が抜けていく。自分が立っているのか、寝ているのかわからない。

とうとう僕はコンクリートに倒れこんだ。それでも男は手を休め

ない。幼い僕の腹を何発も蹴り上げる。とうとう幼い僕はぐったりして動かなくなった。男は我に返ったように、その場から慌てて離れていく。

「……………ぐふっ」

血が出た。

「ハルノ」

幼い僕は動かない。

「ハルノっ！」

僕は激を飛ばした。

「なにを怖がっているんだ、シオバナハルノ！君も汐華初流乃だといふのなら、スタンドを呼べ！叫べ！助けてくれと！死にたくないと呼べ！この能力は生きるために生まれたはずだ！忘れたのかっ！いつだってゴールド・エクスペリエンスは！僕の傍にいたはずだ!!」

幼い僕が目を覚ます。そして前を見据えた瞬間に、僕はゴールド・エクスペリエンスが発動できることに気がついた。

「やればできるじゃあないかッ……………！」

僕は地面から木を生やす。その高さを利用して一瞬で宙へ舞った。男の放った銃弾は空を切る。木に突き刺さる。反射して男に襲いかかるが、防弾ジョッキでもしているのかビクともしない。その隙を逃すまいと僕は上空から握りしめた石を投げつけた。そしてその石はゆっくりと生命となり、男に牙をむく。

「なんだこいつは！ママシ……………いや違うッ……………毒蛇だとッ!」

蛇へと姿を変え、男に喰らいつこうとする。だが払われてしまった。まだ実験途中だったから症状を見たかったが仕方ない。銃弾を再装填する時間はない。銃の反動での一瞬の硬直故避けることは不可能だった。

「面白いじゃないか……行けエエエエ、ドリーム・シアター！」

乾いた音が響いた。2つの銃声だ。しかし、男は銃を一つしか握り締めていないにもかかわらず、銃声は2つ。間髪で避けた僕は冷や汗だ。

「なぜ銃が……まさかッ！」

僕が振り返るとタクシー運転手が立っていた。そう、先ほどの銃声はその僕をここまで連れてきてくれた運転手だった。これで2つの拳銃となる。

「ご名答だ！俺もスタンド使いだからな！奥の手はとっておくものだろうッ！この世界では！お前以外の人間は全て俺の言うがまま！操ることができるのさあッ！」

言うが早いのか、男の号令にあわせてここが職場と思われる男たちが次々と飛び出してきた。

「なるほど、これが君の部下つてわけですか」

「そうだ！さあいけええ!!」

男の号令と共に拳銃を持った男たちの攻撃が僕へ襲いかかる。

「クソッ！ゴールドエクスペリエンスッ！」

僕は地面からツタを生み出す。それはカーテンとなり、拳銃を防御した。カウンターを食らった男たちはあちこち負傷するが平気なのか微動だにしない。血はダラダラ流れているというのだ。

「残念だなあ！それじゃあナイフはかわせないぜえッ！さあ、あのツタを掻っ捌いて腸まで突き刺さしてぐっちやぐちやにしちまええー！」

号令と共に男たち再び動き出す。今度はナイフだ。僕に突進し弾丸を防いだツタを切り刻んだ。

「ぐあっ！チイツ……」

まさかナイフによる反射すらたじろがないとは思わなかった。僕は対応しきれず銃弾はかわしたもののナイフを腹部に許してしまふ。

「おいおいおい隙だらけたぜえッ！ あっけねえなあー！俺がどれだけ楽しみにしてたと思ってるんだよ、この日が来ることをよオ！さあ総攻撃だッ！」

5つの拳銃を構えた男たちが僕へ近づき、一斉に構えた。同時にカチリと銃弾が装填される音が響く。

「撃ち抜けえええっ！」

男の号令のもと、一斉に引き金が引かれる。

しかしそれ以上に発砲音が聞こえる事はなかった。

「……何！」

僕はにやりと笑った。気付いた時には男たちの銃は一丁残らず蝶となつて舞っていた。

「危なかった……。君が……。君が猪突猛進のバカで……。助かった。どうやら僕を殺すために何度も何度もシミュレーションしたようだが、裏目に出たなッ！」

僕は息を荒げて、先ほどまでナイフが刺さっていた位置で舞う蝶を逃がす。そして、睨みつけるように前に向き直り、にやりと口角を

上げ、笑って見せた。

「無知……だと……ッ!?」

「ああ、君は知らなかったんだろ? 僕以外のスタンド使いに会った事が無いんだ。だから知らなかった。スタンドによって発動する時間はちがうんだ。君のスタンド、ドリーム・シアターはこの空間全体。だが命令してから人間たちが動き出すにはタイムラグがあるッ! それは僕より遅いッ!!」

「めんどくせえことやがって! この国でこんだけの武器を入手するのにどれだけ苦労したと思ってるんだあ!」

男は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「やりたかなかったんだがしかたねえ!」

男は叫んだ。

「さあ、こいつを爆死させろお!!」

「それは……爆弾かッ!」

「ご名答だぜえ! さあ、てめーら、シオバナハルノもろとも消し飛ばしちまえ! さあ、特攻しろおッ!」

「ふうん……そうか……君はどこまでもゲスな奴なんだな……」

僕は笑う。

「君の部下たちはたしかに優秀だ……。自爆テロなんてとんでもない命令にも絶対に逆らわない従順なやつらなんだ。でも、だからこそ、この勝負……僕の勝ちだッ!」

僕は男達目掛けて突進した。襲いかかり、もろとも自爆しようとする部下達を回避しながら、ひたすら前に進んだ。

「何ッ！」

弾丸も僕に迫るが、ゴールド・エクスペリエンスがそれを許さない。そして男が逃げるよりはやく僕は男に特攻した。男は新たにも部下に号令する。いくつものナイフが僕に突き刺さったが、無視した。

「無駄だッ！」

僕は突き刺さった腕をそのままに走り抜ける。たしかに彼らは優秀だ。この上ない忠実な部下だ。だがそれだけだ。柔軟な思考力がそこには存在しない。

「チッ！ならばッ！」

「もう遅い……ッ！」

男が拳銃を装填するよりも速く、ゴールド・エクスペリエンスが男の胸ぐらをつかむ。そして、男たちの中に投げ飛ばした。

「アンタが悪いんだッ…… アンタを避けろと、攻撃は僕だけにしろと命令しなかったアンタの…… 負けだッ！」
「ぐあああああ！」

耳をつんざく轟音と衝撃。連鎖する大爆発。男は巻き込まれて吹き飛ばされた。

世界が崩れ去っていく。

「クソッ……クソックソッタレエエエエッ！ハア……ハア……」

「ずいぶんと元気じゃあないですか」

ダラダラと血を流しながら、四肢がえげつない方向に曲がってしまっている男は僕を見るなり威嚇してくる。爆撃を直撃して、骨のいくつかが折れ、既に歩く事すら困難な状態で映画館の椅子に倒れている。

「どうしますか？まだ戦いますか？」

僕が腕に刺さったナイフを抜きながら、首をかしげて尋ねると男は舌打ちをした。

「もう映画は終わってるぜえ、お客さん」

僕は振り返った。

「親父ッ！今だ！さあ！コイツの脳天ぶち抜いてくれよお！」

「バカいっちゃいけねえ、自分の手で落とす前つけるっていったのはお前だろクソガキ。ピンチになってから親に縋るんじゃないやねえよ、みっともねえ」

「アナタは…… なにもしないんですか？」

「巻き込まれてわいいねえ、お客さん。コイツの頭が冷えりやいと思っただけ巻き込まれた」

「あんまり効果はなさそうですが」

「これでいいんだよ、ろくに家に帰らねえでいきがってるクソガキ縛り付けるにや充分だ。救急車呼んだからよ、厄介事になる前に逃げな」

「なんでだよ、親父イ！」

「うっせえ、黙ってる！…… たたく、誰に似たんだか……」

「…… また、来てもいいですか？」

「ああ、いいぜえ。今度はゆっくり家族愛の映画でも見に来てくれや、アンタならいつでも歓迎するぜ」

「それはよかった…… でもスタンド使いでもない息子を主演させ

るなんて、コネでねじ込む監督みたいで好きじゃあない」

「あつはつは、これはやられたな。いつわかった？」

「ドリーム・シアターの特徴を1番わかっているはずの使い手が映画の中にいるわけがないって思ったんですよ。この男とはあまりにもか離れた性質だ」

「さすがだなア…… さすがは俺の女房が命に替えても守ろうとしただけはあるぜえ……」

「…… ありがとうございます。僕はなにか大切なことを思い出した気がする」

「そりゃあよかった。久しぶりにアンタを見た時、どうにも女房が生かしたに値しない目をしてたもんだから心配してたんだよ」

「……。ひとつ聞いてもいいですか」

「あん？なんだ」

「あの人が幼い僕を渡さなかったのは、アナタの命令ですか？」

「支配人は静かに首をふる。」

「俺の愛した女がんな不義理なことするわけねーだろうがよ。あいつが選んだ道をねじ曲げるのだけはこのクソガキにだってさせやしねえさ」

「…… そう、ですか」

「ああ、そうさ」

僕はまた来ることを約束して、映画館を後にしたのだった。

ドリーム・シアター2

「琢馬、君に質問があります」

「なんだ」

「赤ん坊っていうものは、お腹の中から外の音や母親の声なんかを聞いているものなんですか？」

瞬きをした彼はゆっくりとうなずいた。

「なるほど、僕以外に答えようがない質問だな」

「はい。世間では胎教なんてものが流行ってるようですが、君に聞いた方がいいと思っただんだ」

「これは僕の主観でしかないし、お前は信じるも信じないも自由だが僕にとっては事実だ」

そう前置きした上で、彼は語り始める。

赤ん坊は母親のおなかの中にいるときのことを覚えているという神秘的で素敵な話がある。胎内記憶というそうで、3人に1人の子どもが覚えているのだとか。どうやら、4歳以降になると、徐々に忘れていってしまうため、言葉が話せるようになってくる3歳くらいの頃に覚えているか尋ねてみるのがいちばん聞きやすいそうだ。

「僕も聞いたことがあります」

「先生たちの常套句だったな、神は見ている」

「宿命論というやつですね」

彼はうなずいた。

3歳の男の子がパパとママの結婚式を上から見ていて、「このうちの子どもになりたいと思ったから、ママのお腹の中に来たんだよ」と言ったのだそうだ。なんと母親の心を震わせてくれるロマンチックなお話だろう。もし自分の子どもが「ママの子になりたくて来た」なんて言ってきたらと思うと、柄にもなく泣いてしまいそうだ。

「僕には夢物語ですらないな。実感とは別にして、0歳の初期の、親が2時間おきに起きてミルクをあげねばならない死ぬほど苦労したときの記憶はきれいさっぱり忘れておきながら、胎内の記憶はあるなんて変じゃないか」

子供を産んで産婦人科から退院するとき、お祝いとして、息子の手形と写真がのったアルバムと、赤ちゃんが生まれてくるまでを描いた可愛い絵本をもらう。こうした大人の描いた絵本こそ、元凶だ。

こうした絵本の中には大体、赤ちゃんがママのおなかの中ですくすくと育ち、産道を通って出てくるまでのストーリーが描かれている。おなかの中で水にぷかぷか浮かびながら、一様に「あったかいなあ」「気持ちいいなあ」というようなことを言い出す。

終盤になると、耳が発達してくるので「パパとママの声が聞こえるぞ」とか言い始め、最後は、狭い産道を頑張ってぎゅうぎゅうと通り、誕生。

大多数の子どもは、3歳になるまでにそういった絵本を読み聞かせられる。そうした「親が話す子どもが生まれるまでの過程」が頭に残り、自分の胎内記憶として刷り込まれるのではないかと彼はいった。「客観的に観測できる僕から言わせれば笑い話にもならないな」

彼は憶測する。そもそも、生まれたての赤ちゃんは「眠い」という感覚さえ自分ではわからない。眠る前にぐずるのは、眠気を不快に感じるためだ。それより小さな子が、「冷たい」「温かい」という言語も知らずに、当時の体の感覚だけを3年間も覚えていられるものだろうか。

「ジヨルノは覚えているのか？」

僕は首を振った。

「まさか」

「僕は話を耳にしたことがある」

「どんなです？」

3歳になった息子にママのおなかの中にいたときのこと覚えてる？と聞いている母親を見かけたことがあるらしい。すると、返事は覚えてるよ。どんなだった？ママの声聞こえた？と質問を続ける母親に、息子はママは、まーくん痛い痛いって言ってたという答えがあつたかかった？冷たかった？と聞くとすごい冷たかったと。

「それで？」

おなかのトンネルを通り抜けるとき、どうだった？と聞くと大変だったという答えがあったが、母親は笑っていた。それはないね！まーくんは帝王切開って言って、ママのおなかをチョコチョコ切って生まれてきたから、狭いトンネル通ってません！ひよいつと抱かれてラクチンして出てきましたー！と得意顔で本当のことをバラすと、あ、そうなの。じゃあ、それだねと適当に返されていた。

「絶対には言えないが、やっぱり、子どもってのは、大人が話していることを胎内記憶という自分の経験として話しているんじゃないか」「3、4歳くらいの子どもは、純粋な上に想像力が豊かなので、きつと何事も本当のことと思うことができますしね」

「謎のまがいものの記憶が強く刷り込まれ、確立されているということだな」

「回りが真実を言っていたのなら、あながち間違いでもないというわけですか。なら、もしも、赤ん坊が……2、3歳の子供がなにかを見たり聞いたりしたことというのは、忘れないものなんでしょうか」「答えはイエスだ、ジョルノ。ノーなら僕はスタンドの力に目覚めちゃいけないし、頭の暴走に振り回されたあげくに自殺してるし、復讐なんざ考えるわけがない。僕の頭が特異な性質を持っているだけかもしれないが、人間リミッターがあるから忘れてるだけで本来記憶というものは限界がないんだ。そう、僕はリミッターが生まれたときから故障してるだけで、みんなそうだ」「なるほど」

僕はうなずいた。

「謎のまがいものの記憶が強く刷り込まれるとしても、それが客観的で信憑性あるものばかりだとすれば、再現が可能というわけですね」「理論上はそうだな」

「ありがとうございます」

「ジョルノ」

「はい」

「僕がスタンド使いだと知ったときみたいな顔してるな」

「億泰先輩、資料お返しします。ありがとうございました」

「よお、ジオルノ。上がつてくかあ?」

「はい、実は億泰先輩にお願いがありました」

「またかよ」

「はい、またです」

「なんだよ?」

「実は僕の父親、ディオ・ブランドーについて調べたくなりまして。空条さんはまだ資料持つていつてはいないですよね?」

「おう、こないだ聞いてみたけど、まだ時間がかかるからって保管しとくよう頼まれたぜえ」

「そうですか、よかった」

「……気持ちわかるぜ。オヤジさんのことやっぱり気になるんだろオ? 仗助がいつてたからよ……」

「…… 人に無断でなにを勝手に話してるんだ、あの人は」

「んん? あ、やっべ、ジオルノには内緒なって言われてたんだった。アンジエロの野郎に写真をビリビリに破かれちまったこと、忘れてくれよオ」

「嫌です」

「ジオルノ…… お前……」

「だから空条さんには秘密にしてください、DIOに関する資料を僕が見ていることは。それでチャラでいいですよ」

「わかったぜ、こいよ」

「はい」

「一回承太郎さんが来てたんだけどよオ、だいぶ多いらしいぜ。ほら、な?」

書庫に案内された僕はこっからここまですと大雑把に説明されて目を丸くした。形兆先輩の執念が垣間見ることが出来る所蔵量だ。いや、虹村が観測ができるスタンド使いだったが故に僕の母親と僕の

監視を兼ねていたからこそ、なおのこと報告書のやりとりが膨大になり、結果としてこれでも精査されたものばかりが残っているようだった。

「億泰先輩」

「んー？」

「しばらく通ってもいいですか？」

「おう、いいぜえ。どうせ俺と親父しかいねーからなア、いくらでも来ていいぜ」

「ありがとうございます」

僕はこの日から億泰先輩の屋敷に頻繁に出入りするようになったのだ。空条さんがスピードワゴン財団にこの資料庫を全て持っていつてしまったが最後、僕は二度と今考えていることが出来なくなってしまうのだ。やるなら今しかない。そう考えていた。

僕はどうしても知りたかったのだ。

どうしてDIOは、僕の父親は僕を殺さなかったのか。肉の芽を無効化してしまうスタンドに目覚めつつあった僕を生かしたのか。空条さん側、そしてDIOの配下だった者達の情報を総合したのち、自分の記憶を見ることで判断することにしたのである。

「待ってたぜ、お客さん。近いうちに来ると思ってたがずいぶんと早かったな」

「時間がありませんでしたから」

「そうかい」

「はい。チケットを買っても？」

「ああ、どうぞ」

僕は誰もいない映画館に入るのだ。そして、上映を待ち侘びる。案の定対象の持つ記憶を媒介に生成される映画の舞台はエジプトだった。

テレビでしか見たことがない豪華絢爛な宮殿を思わせる世界が広がる。

1,087の客室から構成され、中東で最大の宮殿の1つ。部屋は、2つの同じ20階建ての建物。宮殿とメインエントランスは地上階に位置しており、フロントと管理エリアを収容するため宮殿の屋根には、ナイル川やセントラル・カイロに面する野外劇場がある。

中を探検してみると、まさに宮殿の雰囲気味わえる。とくにカジノの上の階のあたりがすごい。しかし、真夏の服装で薄着だと宮殿全体の冷房が寒くて耐え難い。部屋の中では一度も冷房を使わなかったが、寒くてベッドで毛布に包まってはいけないうらさう。

とくにベーカリーショップでサンドイッチを食べたときはセーターがほしそうなほどぶるぶる震えている人間をみかけた。待らせている女性を孕ませて子供をつくるためには倍以上の人間が必要となるのだ。吸血鬼ならば外に知られないよう細心の注意を払っていたはずだから当然といえば当然だろうか。

「一体ここで、何があったんだ？」

ぶち割られた大型ガラスのショーウィンドウ。へし折られたマネキンたち。破壊されたサンングラスの残骸。女性のものと思われる左腕の残骸。そして、あちこちに見られる血溜りの池。

まるで自動車でもつつこんだような凄惨な現場が、僕の目の前に広がっていた。なにもいない、無人な空間だが、ほんの数分前に、この辺りで何かが起こったことだけは間違いなかった。

「まだ近くにいるかもしれない……」

ここにはもうなにもない。そしてここにいたであろう人間の影も、人外たちの姿も一人も見つけられなかった。僕はもう少しだけ、付近を探索することにした。

「僕がここにこれるってことは、来たことがあるはずなんだ、僕は。覚えちゃいけないけども」

1歳くらいの記憶を膨大な情報で補完することにより、この前来た

ときより遙かに詳しい映像の中に僕はいることができていた。

「どういうつもりかな、ハルノ」

流暢なイギリス英語が紡がれるはずがどう聞いても日本語だ。どうやらドリーム・シアターは日本語版か字幕版か選ぶことができるようで、支配人は気を利かせて日本語版を放映してくれているようだった。

僕は内心の驚きを隠しながら、すぐさま振り向いた。視線の先にはこちらを見下す大きな男がいた。いや、男の視線は幼い僕に向けられている。

「返してくれないか？」

「やー！とーさんあそぶー！」

僕は大きな金髪の男と二人きりにもかかわらず物怖じせずしゃくりあげ、愚図る幼い僕を緊張した面持ちで暗闇を見詰めていた。男の姿ははつきりとは見えず、わずかに輪郭が分かる程度だ。

「それを返してくれたら遊ぼう」

「おそとー！」

「そうだな、遊ぼう。外で」

その闇の中から優しい声が響いてきた。

「2歳まで生き残るだけでなく……同じ交渉の場に立たせるために、なにをすべきかわかっているとは……」

「……… 父さん」

僕の声が、わずかに上擦る。もちろん男には、D I Oには届かない。

「——そうか、知っているのだな」

視線と微笑みは幼い僕のものだ。

「うっ？」

どういう意味か説明しろと幼児だけに許されたやり直しが命じられる。D I Oの態度は、心のうちにするりと入り込まれるような感覚に陥りそうになり体は自然と強張った。幼い僕は平然と首をかしげている。なんのためにそれを見ているのか忘れるほどの衝動が、今僕を襲っていた。

D I O。ディオ・ブランドー。目の前にいるのは、失われた写真の男に間違いない。そう、自分の血が叫んでいる。

僕が空条さんや仗助先輩を探知できるように、幼い僕はきつとその血によってこの男がどこにいるかも感知することができた。だから興味を引くために勝手に私物を持ちだし、読めもしない文字を読んでいる。それが日常だった。

そのことに、僕はひどく動揺した。いつもの僕ならさんざん読み漁った資料を背景とする知識からD I Oという男を観察し、どういう人間かすぐに見抜いていただろう。だが僕は冷静さを欠いていた。

これまで、僕は家族というものにあまりに縁が薄かった。縁がなさ過ぎてよくわからないのだ。D I Oは死に、母は病死し、養父はアンジェロに殺された。すべてが僕を蔑ろにしてきた。ほんのわずかな親愛の情を示しているD I Oに僕はひどく動揺している。

それゆえ、幼い僕はもちろん観客でしかない僕は目の前の男の邪悪さに気付くのが遅れてしまった。

『天国』へ行く方法の研究と書かれたノート。幼い僕からD I Oに手渡されたノート。

「さあ、いこうハルノ」

「んー、いくー！」

手を取り、歩き出す幼い僕とD I O。手袋越しなのはすでに覚醒前のゴールド・エクスペリエンスが僕の中にあることに気づいていたからなのだろう。僕はじつとそれを見つめていた。

「……………ずいぶんと空想じみたタイトルだな……………吸血鬼も聖書を

読むのか」

「中華思想の聖王の方が正しい、訂正しろ」
「!？」

戦慄が走った。ドリーム・シアターは支配人が手心を加えなくては登場人物は僕の過去通りの動きしかしないはずなのに、D I Oは歩みを止めて背を向けたままいうのだ。僕は1歩も動けなかった。

「毎晩読み聞かせてやっただろう、忘れたのか？」
唄うようにD I Oはいう。

< 第1節 >

必要なものは『わたしのスタンド』である『ザ・ワールド』。我がスタンドの先にあるものこそが 人間がさらに先に進むべき道なのである。

「ダメだ、聞いてはいけない」

< 第2節 >

必要なものは 信頼できる友である。

彼は欲望をコントロールできる人間でなくてはならない。権力欲や名誉欲 金欲・色欲のない人間で彼は人の法よりも 神の法を尊ぶ人間でなくてはならない。いつかそのような者に このD I Oが出会えるだろうか？

「これは呪詛だ」

< 第3節 >

必要なものは 『極罪を犯した36名以上の魂』である。罪人の魂には 強い力(パワー)があるからである。

「僕は思い出すべきではなかった」

< 第4節 >

必要なものは 『14の言葉』である

「らせん階段」 「カブト虫」 「廃墟の街」 「イチジクのタルト」 「カブト虫」

「ドロローサへの道」 「カブト虫」 「特異点」 「ジョット」 「天使(エンジェル)」

「紫陽花」 「カブト虫」 「特異点」 「秘密の皇帝」

わたし自身を忘れないようにこの言葉をわたしのスタンドそのものに 傷として刻みつけておこう。

「これはD I Oが僕の魂に、記憶に、刻み込んだ呪詛だ」

< 第5節 >

必要なものは 『勇気』である。わたしはスタンドを一度捨て去る『勇気』を持たなければならぬ。朽ちていくわたしのスタンドは36の罪人の魂を集めて吸収。そこから『新しいもの』を生み出すであらう。

「生まれたもの」は目醒める。信頼できる友が発する 14の言葉に知性を示して：『友』はわたしを信頼し わたしは『友』になる。

「だから…… D I Oは…… ツ」

< 第6節 >

最後に必要なものは 場所である北緯28度24分 西経80度36分へ行き…… 次の「新月」の時を待て……

それが『天国の時』であらう……。

「僕を生かすために日本に母と送ったのだとしたら…… ツツ!!」

聖書になぞらえた言葉たちに、その本を信じている人々に育てられてきた僕は意味がわかってしまう。

貧民街に暮らし、人間を止め、闇の世界の住人となり、人間の脆弱さ、綻び、暗黒面を知り尽くしたD I Oが聖書の文言通りなわけが無い。

そこで考えられるのは「天国」という現象をD I Oが求めているということだけだ。あまりにも抽象的な言葉だ。D I Oは、あくまでも「自分(だけ)が天国へ行く事」の付属で人類が救われると考えているように思えてならない。

空条さんに倒されてしまったD I Oは、ザ・ワールドというスタンドを捨て、進化させ、天国を作り出し、行こうとしていたのだ。

天国がどんな世界なのかはわからないが、天国は神の場所だ。つまりはそういうことなのだろう、と僕は解釈した。

天国は神が用意した場所だ。その瞬間に世界は神の配下となる。世界を自分の権限で繰り返す、なんてあくまで支配権は神じゃない

か。D I Oは神をも超越したいのか。

「……………参ったな、この言葉はいくらでも解釈できるじゃあないか。世界中に信奉者がまだまだいるのに、どうしてくれるんだ」

まず初めにD I Oが考えたのは、多分天国に行く方法ではなく、神になる方法やそれを越える方法だったはず。天国に行く方法というのは、神になる方法でもあった。失楽園的なあれで考えると、D I Oは石仮面により永遠の命を手に入れたから、あとは善悪の知恵のみ。神様と同等になる。

D I Oが初めに手に入れたのは知恵の果実ではなく石仮面で手に入れた永遠の命、つまり生命の果実。

だから、一番初めに研究をしたのは、自ら手にした生命の樹についてだろう。D I Oはタロットカードを暗示するスタンド使い達を集めたとき空条さんはいっていた。セフィロトの樹というのはタロットにもつながりがある。それによって、自らの持つ永遠の魂をより確実なものにしたのだろう。

あとは善悪の果実だけだ。

D I Oとジョースターの血族の因縁を考えたら答えは出たようなものだが、ようするにジョースターを根絶やしにして神になりたいというD I Oらしい目的があったようだ。

「……………吸血鬼とジョースターの血族、そして天国……………まさかね。ありえない……………」

否定しきれないのは、僕はまだD I Oという男を知らないからなのだとわかる。

「ようするに解釈次第でどうともなるものを巡る争いに巻き込まれる可能性があるじゃあないか……………」

僕は深深とため息をついた。いつの間にかD I Oと幼い僕はいなくなっていた。

「さて、どういうことか説明してもらおうか」

どかりとソファに座ったまま空条さんは問いかけてくる。

「興味無さそうな顔してたわりにD I Oについて調べてるそうだが」

「実はですね、あの後よく考えてみたんですよ。僕は脊椎バンクの被験者が誰か聞いてるわけでも、養子に出される前の生家はどこか聞いてるわけでもない。父親について知りたいと思うのは普通だ。違いますか？」

「…… やれやれだぜ。よくもまあ、そんな思ってもないことをベラベラと次から次から思いつくもんだ」

僕は無言のまま笑った。同じくらいのあいだ無言のまま僕を睨みつけていた空条さんはコーヒーに口をつけた。

「僕がD I Oについて気になったのは事実ですよ。これからの僕をもつてD I Oの後継者かジョースターの血族か、それとも半端な有象無象か確かめると言ったのは他ならぬアンタだ。つまり、これからの僕の人生にはスピードワゴン財団の監視があるわけじゃあないですか。それがどういふことか考えてみたくなっただですよ」

「ほう…… そうか。なら、ひとつ見せてやる。お前のDNA鑑定の結果が出たぞ」

「！」

「お前の母親、ジョナサン・ジョースター、そしてディオ・ブランドーの血が流れている。お前がD I Oの子供の中で唯一D I Oがジョナサンの体に馴染む前に生まれた。ゆえに肉の芽が埋め込まれたのもお前の母親だけだ」

「普通ならジョナサン・ジョースターと僕の母親の血が流れるはずだからですか」

「ああ。だがそうじゃあなかった。ジョナサン・ジョースターの血液型はA型、D I Oは吸血鬼だ。血液型などあつてないようなものだが

子供を産むとなれば同じ血液型になり最適化した可能性がある。お前の母親はB型もしくはAB型だ」

「なるほど」

「1994年、イギリスで一人の少年が生まれた。彼は目立たない赤ちゃんだったが、よちよち歩きの際、両性具有者だとわかった。だいたい両性具有という診断は、停留睪丸と思われるものが卵巣と卵管と子宮の一部であることが判明した場合に確定する。さらに行われた検査で、彼の体のいくつかの部分は遺伝的には女性であり、その残りの部分は父親の遺伝子を引き継いだ男性ということになった。要するに、それぞれ異なる二つの精子によって受精が成立した二つの卵子が子宮内で融合して、一つの胚となった時に創られたと考えられる。ここまで奇妙な体じゃなくてよかったな、ジョルノ。これは偶然にも世界でも珍しい形で生まれたが、お前はそうじゃあない」

「だからこそその肉の芽……」

「そうだ、気味が悪い話だな。つまりお前は双生児が融合したような状態というわけだ。キメラ遺伝子というんだが。体の一部がそれぞれジヨナサン・ジョースターとDIOならばモザイク遺伝子というんだが、どうやらお前は融合しているパターンらしい。世界で40しか例がない極めてまれな遺伝子だ。テメーが調べてる以上隠すのはやめた。率直にいうがまともな人生を送れるとは思わねえ方がいい」

「参考までに、僕以外のDIOの子供はどうなんです？」

「他の子供たちはいずれも年齢的にジヨナサン・ジョースターの体にDIOが馴染み切ったあとに生まれた。遺伝子的には母親とDIOの血が流れていることになる」

「……つまり、肉の芽は使われなかった」

「ああ」

他の子供たちがどうしているのかふと気になったが空条さんの眼光が鋭くなった気がして詮索をやめた。

「お前はスピードワゴン財団にとってもDIOの協力者たちにとっても無視できない存在ということだ。どう足掻いてもな」

「そうですか……残念ですよ、とてもね」

「お前も気づいているかもしれんが、背反する2つの力が幼子にぶち込まれるわけだ、正常な状態で生まれたのはお前だけだジョルノ」
「……………」 まあ、そんな気はしていましたよ」

「だからこそ俺はずっとお前とお前の母親を探していたし、お前たちを監視していた人間を倒さなきゃならねえと考えていた」

「殺さなくて安心してますか？」

「意地汚ねえとわかってんならきくもんじゃあねえぜ」

「いえ、それくらい考えることも変わるのかなと思っただんですよ。結婚というものは」

「……………」

空条さんは指輪を隠すように握りしめてしまった。

「僕以外にD I Oの子供に接触は？」

「それを知ってどうする？」

「アンタと話す上でなにが必要かずっと考えていたんだ。ひとつだけ警告させてほしい」

「なんだ、言ってみろ。それが値するかは俺が考えてる」

『『天国へ行くための方法』』

空条さんの眼光が鋭くなる。

「テメエ…………… どこでそれを…………… ツ」

「思い出したんですよ、夢の中で。僕はD I Oに子守唄代わりに聞かされていたんだ。それはまるで呪詛のように僕の記憶、魂、そして体に刻みつけてあるんだ。それが僕だけなのか、確かめた方がいい」
「…………… そう、だな」

苦虫を噛み潰したような顔をして空条さんはいうのだ。

「なにが望みだ」

僕は笑った。

「ジョウサダのサイン入りのCDが」

ジョウサダファンの彼が絶賛していた名盤を手渡すとますます空条さんの眉がよった。

「ジョルノ…………… テメエ…………… 人の事おちよくるのもいい加減にし」

空条さんの苛立ちを助長するようなタイミングで電話が鳴り響く。舌打ちした空条さんは足音で怒りを顕にしながら受話器をとった。耳をそばだてようとしている僕に気がついたのか、じろり所ではない殺気が僕に向けられる。肩を竦めた僕はすっかり冷めてしまったコーヒーだったものを一気に飲み干す。

その刹那、すさまじい光と火花が視界隅に走る。瞼に残像が残るほどの衝撃で、たまらず僕は立ち上がる。

「空条さん！」

ぐうつという男のうめき声が聞こえたからだ。慌てて近づくとこれ以上近づくなと言外に強いられてしまう。焦げ臭い匂いと立ち上る黒い煙。僕は咄嗟にゴールド・エクスペリエンスを発動して丸焦げになった電話を蝶に変えたが、机の上あたりをフラフラとしているだけだ。

「チィ、遅かったか…… 僕が電話に出ていれば……」

「電気より早く動くことが出来ればの話だぜ」

「さすがにそれは無理ですね」

「やれやれ、ますますこの街から離れられなくなっただぜ」

「ルームサービスを呼びますか？」

「検証が先だ。どう思う」

僕は注意深く電話を観察した。

「ホコリがずいぶん溜まっていたみたいですね。劣化した可能性もあります……」

焦げ付いたところを指でなぞるように追いかけていった僕はモジュラープラグに目をつけた。それは電話線などの信号線をまとめて接続する場合に用いられる端子のことであり、電話、FAX又はLAN等を接続するのに用いられる。

モジュラージャックとは、モジュラープラグの受け口となる部品だ。電話線の差し込み口は、大半がこの形をとっている。モジュラープラグ及びジャックの材質は、ともに難燃性の合成樹脂である。

電話機に接続されているモジュラープラグとジャックが埃まみれになり、結露した窓の近くに設置されているためにしけついていたのだ

ろうか？指で触れた限り湿っている訳では無いらしい。

「トラッキング現象じゃあなさそうだ。単純に電気による発火ですね」

「スタンドはシンプルなほど強いからな」

「なるほど」

おそらく許容電流を超えたせいで発火したのだろう、と僕は考える。許容電流とは、規格上電線などに流すことのできる最大の電流である。

物体には電気抵抗があり、その物体に電圧をかけて電流を流すと抵抗によって発熱する。電線などの導体にも小さいながら抵抗があり、その発熱によって絶縁被覆が溶解すれば電気は短絡したり、場合によっては発火する。

電話線のように低電圧の機器であっても、電気が存在している以上は、火災の原因になる可能性は必ずあるのだ。

「空条さんが丸焦げにならなくてよかった」

「俺を見くびられちゃ困るんだが」

「だって形兆先輩と同じような状態になりかけてましたよ。引き込まれかけたんじゃないですか？感電してやけどしてるでしょう、空条さん。雷に打たれたみたいなきな音してましたよ」

「いや、警告だった」

「警告」

「ああ、ここから出て行けと言うシンプルな警告だ。こちらのスタンドはもちろんジョルノがいることも把握しているらしいな、新たなスタンドの矢と弓の持ち主は」

「そうですか……」

「テストや受験がうんざりだと言っていたから学生かもしれないが」

「……」

「ジョルノ」

「はい」

「次が知りたければスタンドの矢と弓の回収に協力しろ」

「…… ツはいー！」

食い気味に答えた僕に空条さんはニヤリと笑ったのだった。

ドリーム・シアター

本体 D I Oの手下だったが妻を殺され見限った男

破壊力 | E

スピード | C

射程距離 | C

持続力 | A

精密動作性 | B

成長性 | E

映画館の姿をしたスタンドであり移動能力はない。対象がチケツトを買い、映画を見始めると発動し、対象の記憶からエピソード記憶を選択して上映することができ。あくまでも記憶を映像化するため、対象が知らないことは描写されない。

また、その映画の登場人物として複数の中にいれることが出来る他、対象を観客としていれることも出来る。中に入れられた人間が負った傷は現実でも適応される。

再生中スタンド能力も再現できるかどうかは対象の記憶の鮮明さに左右される他、自分が登場人物の行動を変えることもできるがあまりにも不自然な行動はエラーとなる。

ザ・ロツク

ここは東北一円から患者が集まる中核病院である。このあたりの地域の基幹病院として、症例数が多い。特に循環器科・心臓血管外科における症例数と診療実績は常にトップで、地方全体の中でもトップクラスである。

創設時より大学医学部の関連病院として位置付けられ、院長をはじめほとんどの常勤医は大学医学部の医局より派遣されてきた。それだけ歴史があつて規模がでかい病院でことである。

そんな大学病院のエレベーターを出て、行きなれた通路をひたすら進んでいく。

つまり、代理ミュンヒハウゼン症候群の犠牲者になり、免疫に致命的な損傷を負い、瀕死寸前で担ぎ込まれてきた山本ミカが入院するにうつつつけの場所だ。

かつて僕が2度も保護されたときに、お世話になつた病院でもある。だからか、古参の看護師の中には僕に好意的な人間もチラホラいるのだ。ミカから呼ばれたと告げれば、すぐに手続きのやり方を教えてくれる。

この病院は面会時間が2時間だけ。学校から直行してもバスなどの兼ね合いでどうしても時間がかかる。部屋をナースセンターに確認して、施錠されたドアの向こうに行く。突き当たり、スタッフルームのすぐ隣。

「こんにちは、ミカ。元気そうでなによりだ」

「ジョルノお兄ちゃん、きてくれたの？」

「起きちゃダメだよ、ミカ」

目眩がしたのか、ぐらりとした彼女はまたベッドに逆戻りした。いわんこつちやない。病室を訪れた僕はリングをむいてやることにした。

「で、相談ってなんです？」

「ねむれないの」

山本ミカは僕にだけ聞こえるように、密やかにいうのだ。

「ジヨルノお兄ちゃん、おねがい」

「なにをしたらいいかな?」

「ヒモ、欲しいの。これくらい」

頭のとっぺんからつま先まで調べ尽くされ、絶対安静を言い渡されてしまっているミカは暇そうだ。

「このままじゃあ死んでしまいそう」

「またぶり返したのか? せっかく直ったのに」

「だつてえ」

「あんなことしなくても、コール1つ鳴らせば看護師が飛んできてくれるってのになにが気に入らないんだい?」

「だつて……ねれないんだもん」

「深刻だな、いつから?」

「ここに来てからずうつと」

「ずいぶんと我慢したんだな」

「せんせがみんなとあっちゃダメっていうから……」

「そりやそうだ」

ついこの間まで緊急治療室と面会謝絶の無菌室を往復したり精密検査、血液検査で右往左往したりしていたのだから。

「ね、ジヨルノお兄ちゃん。わたし、ほっかいどう行く前にほしいの」

「まさかそれが退院祝いとお別れ会のプレゼントとか言わないだろうな?」

「だめ?」

「ほんとうに?」

「ゲーキもジューズもいらさないの。わたし、ずっとねてない。だからねたい。一番欲しいのは眠りなの、ジヨルノお兄ちゃん」

「…… たしかにこのまま北海道にいつてしまったら不眠症になつてしまいそうだな。わかった。じゃあ、探してくる。前に使ってたヒモはなんだったか覚えてるか?」

ミカは首を振った。

「お父さんと暮らせるってわかって、みんなといううちに治ってから

どこかにやっちゃった。覚えてない」

「正しくは先生たちに取り上げられて、なにもない部屋に移動させられて訓練したからだよ。自分を見てくれない、傷つけたい、のループを脱出するためにイライラしたらひたすらに割り箸をわり続けるっていう」

「そうだっけ？」

「そうだ。思い出さなくてもいいよ、今回とは関係ないことだ」

「ジヨルノお兄ちゃんがいうならそうする」

「うん、そうするといいよ。つまり、なにも覚えてないんだな？」

ミカはうなずいた。

「あ、誰にも言わないで。バレたらお父さんと会うのがまた遠くなっちゃおう」

「わかってる。だから僕を呼んだんだろ」

またうなずいた。せつかくのお別れ会と退院祝いのプレゼントが紐でいいだなんて信じられないという人達にはたしかに余計なことを言わない方がいいだろう。

「前住んでたところはどこか教えてくれるよな？」

「取りに行ってくれるの？」

「誰かの家になってなければだけど」

「大丈夫、お母さん引越してないってお父さんいつてた」

そりやそうか。児童虐待に浮気、親権が取れなかった母親はこれから金を稼がないといけない運命にあるのだ。実家売り払って賠償や養育費にあてるとかなんとか、先生がこっそり教えてくれたことを思い出す。母親の実家がない袖は振れないと開き直るクズじゃなくてよかったという話だ。

「ランドセル、とって」

「ああ、うん。どうして？」

「中に入ってるから。鍵」

「……未だに持ってるのか」

「渡しそびれたままなの、お父さんたち土日にかこれないから」

北海道からS市の往復だ、無理もないだろう。言われたとおり、手

縫いのミカと刺繍された布袋の中には鍵が入っていた。不倫に狂う前の母親を忘れないように大事に大事にしていたのだろう、ほつれる寸前で何度もくちやくちやに握りしめられた跡がある。涙の痕には気づかないフリをした。

「お願いね、ジヨルノお兄ちゃん」

拙いながらも生まれ育ち保護されるまで住んでいた場所を聞いた僕はいなずいた。

「ああうん、任された」

ばいばい、と手を振るミカに見送られて僕はその場を後にしたのだった。

出ていけ、鬼、悪魔、人でなし、たくさんの怒りが込められたチラシがでかかど貼り付けられ、空白にすら母親の悪意を詰る言葉が書き連ねてある。ミカが保護されてからはもちろん、施設に保護されたあと巻き込まれた女兒連続誘拐殺人の被害者になってしまったことで、また母親の悪行が世間に広まってしまったようだ。

安アパートのチャイムを鳴らすが返事がない。新聞が山盛り詰め込まれ、たくさんの役場からの封筒がくしゃくしゃになりながらあたりを散らばっている。どうやらライフラインの滞納でもしているようだ。悪臭漂うがゴミ屋敷化するよりはマシなストレスのラインである。

チャイムを鳴らすが返事はない。おかしいな、外で確認した水道メーターや電気の数値は上下していたんだが。ノックをすると薄い扉から音がするのが聞こえた。

「すいませェん、今日は持ち合わせがないのでエ……勘弁してくだ

さいよオ……！」

ここしばらくすつかり老け込んだらしい男が疲労困憊な様子でドアを開ける。

「……ありやあ…… あんた、誰だ……？」

借金取りか弁護士かそれとも市役所の職員か、自業自得の叱責を覚悟していたらしい男は目を丸くした。

「僕はジョルノといいます。ミカちゃんと同じ施設の」

「おおお、そうかあ…… ミカんこの…… どうしたんだい？」

「実は頼まれたんです、とつてきて欲しいものがあるつて」

男の目が悲しげに歪む。

「そうかあ…… わかったよオ…… なんでもいいから持っていつてくれえ…… あの子のためになるならああ！」

おいおい泣き始めてしまった男に僕は目を細めた。一見まともそうな男だが初老だから母親の両親に違いない。実家を売り払ったから行くところがなくて一緒に住んでいるのだろう。監督責任でも感じているのかもしれない。だが親は親だ。子は子なら。

第三者の僕が立ち入ることじゃあない。僕は借金取りにでもなった気分になって狭い狭い玄関に入る。キッチンがむき出しの廊下をすぎると脱衣所、おそらく奥にはトイレとバスが一緒になった部屋。2部屋がある。

「ミカの部屋は…… こっちだったんだあ…… 今は私達が住んでいる…… 家内はパートに出てて、私は留守番なんだが…… 私もアルバイトを始めようとしてるところなんだよ……」

精一杯の贖罪のつもりなのだろうか、僕の眼差しを非難と過激に反応したらしい男がボソボソと呟くのが聞こえる。年金暮らしたろうに、母親の不始末のためにご苦労さまである。

がら、と立て付けの悪い引き戸を開けるとフローリングの部屋があった。

「……ほんとうに、ミカの部屋なんですか？」

「そうなんだよオ…… ひどいだろオ…… 私らがミカにあげたもの、全部他所の誰ともしれない糞ガキに……！」

とうとう男はおいおい声を上げて泣き出してしまった。僕は静かに溜息をつき、学習机やベッド、タンスがあつた日焼けを残しているだけのがらんとした部屋を見渡した。参つたな、まさかここまでなにもないとは思わなかつた。

「ミカはなにが欲しいって……？」

「ミカちゃんは、紐が欲しいんだそうですよ。いつもお守りみたいにして持ち歩いていたんだけど、どっかにいっちゃつたと言つてました」

「ひも…… オモチャでも、洋服でも、絵本でもなく…… ひもオツ!!」

男は嘆き悲しんでいる。一番ミカに贖罪すべき母親は今留置所のはずだ。やるせない限りである。

「心当たりはありませんか？」

「いんやあ…… 恥ずかしながら私は仕事ばかりで口出すのもみつともないって家内にも言わないよういつてたもんでねえ……」

「そうですか…… どれかわからないので、適当なものを持つていても？」

「ああ、いいですよオ」

男はペこりと頭を下げて出ていった。どうやらなれない手つきながらお茶を入れようとしているらしい。長居しても気を遣わせるだけだ、早いところ出ていかなきゃいけない。

僕はあたりを見渡した。

紐と1口に言つても色々ある。木綿は合成樹脂が一般化する前に、最も広く使われていた。麻は結束用として、農業用などに使われることが多い。絹は細くても強く、手触りや光沢がよいため、工芸品に使われる。ポリプロピレンは現在、結束用としてもっとも広く使用されている。

ノズルから吹き出したものを引っ張つたままの平たいものや、複数の紐を編み合わせたものがある。ナイロンは高い引張り強さ、水濡れに対する強さ、着色による意匠製を持ち、スポーツ用品、衣料などに用いられる。

紙はクラフト紙をよって作る。紙紐は、水に濡れると弱くなる欠点があるが、細くても一定の引張り強さがあり、ひねってから左右に強く引つ張ると道具を使わずに切ることができると、郵便局が配達する郵便物を束ねるために使われている。ゴムは伸縮性に富む。多くは単独ではなく、木綿やナイロンなどと組み合わせて作られる。

(ミカが言っていた感触のするのはどれだ……?)

じいっと見つめていた僕は、7歳の少女の目線に置かれていたであろう紐が目止まる。

(ああ、百均の物干し紐か)

手に取った僕は手触りを確かめながら、くるりと首に通した。

「おいいい——！」

ビクツとした僕は振り向いた。

「な、ななにしているんだよ、お前エエエエツツ!!早まるな、早まるな、落ち着けッな?なああッ!なにがあつたかは知らねーがよオ!虹村形兆が死んで、おめーが生きてるッてことは殺されずに済んだってことだろオ?だから早まるなよオ!」

「…… えっと、アナタは?」

「んなことどうでもいいからそれを床におけよオツ!」

「は、はあ……」

訳の分からないまま洗濯紐をおいた僕に小柄な男はあわててそれを手に掴むとポケットに入れてしまった。

「あの……」

警戒する猫のように見上げてくる男に僕は頬をかくしかない。

「もっともらしいこと言ってるが俺は騙されねえからな…… アンタには躊躇が一切感じられねえ…… てつきりミカの代わりに復讐に来たのかと思ってたらびびくりさせやがってエエ……」

「えっと……」

「あああッ!小林玉美さんっ!!いらしてたんですねえ!すぐお茶だしますからアアア?!」

「……?」

よくわからないがこの小林という男はこの家にとつてもてなすべ
き人間らしい。

「ちようどいい、座れよ。ジョルノ」

「……なんだって僕の名前を知ってるのか、教えてもらってもいい
ですか？」

「おう、いくらでも話はしてやるし、聞いてやるぜエ。俺は正義の味方
になったんだからなア」

「……はあ」

小林玉美は乙女座の男で20歳。杜王町在住の身長153cmの
小柄な男で、虹村形兆の持つ弓と矢でスタンド使いになった。僕が見
るかぎり小物にして小悪党な性格だが、暴力は嫌いというチンピラな
りの美学を持っているらしい。

当初はスタンド能力を悪用して強請りを行うチンピラだったが、罨
を仕掛け引つかかったのが通学途中の康一だった事で転機が訪れる。
康一と億泰をスタンド能力で痛めつけるが、康一が自転車でひき殺し
た猫の正体を仗助に看破されたことで一時はその場を去る。

だが、康一の家族と自宅を調べ上げた玉美は報復に家族から50万
円ほか諸々を巻き上げようと企むが、ここで康一の逆鱗に触れた事で
康一はスタンドを覚醒させる。音を貼り付けるスタンドで肉体的に
痛めつけることなく玉美はダメージを受け追い詰められ、さらに康一
の活躍で彼の母親と姉を人質に取る事もできなくなり、泣きつきなが
ら降伏。

それ以来康一に付き従っているという。

「今はちやあんとした仕事をしてんだ。こここのやつら、みんな筋金入
りのゲス野郎だったからよオー、俺のスタンドで罪の意識をさ自覚さ
せてやってんだ！」

金融業の人間といつても堅気の人間じゃなさそうだった。

小林がいうには当時から虚言癖があり、周りからの信用は低かったという老夫婦。家業を有限会社化のちに株式会社にするも指名手配されるまで詐欺商法を繰り返す。病的な嘔吐きで自意識が強く目立ちたがり屋。饒舌でいくつもの顔を持ち、エリートを演じる傾向がある。礼儀正しく愛想が良いが、猜疑心・嫉妬心が強い。異常なまでに執念深く嗜虐的。

また、虚勢を張るところもあるが、実際には神経質で臆病な小心者だったようで、暴力団から厳しい借金の取り立てに逢ったときは、部屋で小さくなり閉じ籠っていた。

また、出所した刑務所仲間によると、収監中は他の囚人や刑務官に対しては腰が低く礼儀正しく振る舞っていたが、実際には刑務官から全く反省していないと吐き捨てられていたと言う。

彼らは容姿や話術から女性から好感を持たれる魅力があり、詐欺に向いていたという。そんな夫妻から生まれた母親がミカの母親なのだ。ため息しか出ない。

「そうは見えませんが……」

「俺がスタンド使うまでは酷いもんだったんだぜえ……なんせ踏み倒す気満々だったんだからなあ……！」

お茶を持ってきた男からは今にも床に落つこちそうなほどでかい錠が見えた。出廻らしのお茶を飲みながら、僕は得意げに語る小林の話聞いていた。

「だからよオ…… たしかに人間てのは罪の重さに耐え切れなくなるって死んだほうがマシって思うんだぜエ……だが償いつてのはそんなんじやあねえ……責任つてのは、もっと地味でずーっと真つ当なもんだろオ……だからよオ……めつたなこと考えるもんじやあねえぜ……？」

僕は思わず笑ってしまった。

「な、なあに笑ってんだあ、人がせつなくなあ……」

「……いや、すいません、笑ってしまつて。小林玉美、アナタはい人ですね」

そして僕は盛大な誤解をされているのだと説明することにしたのだ。

泣きたくても涙が出てこないようなもどかしさが僕の中にはまだあるのだと小林玉美を見ていると気づくことが出来た。興奮してさめざめと泣きだした小林は、鼻の奥がツーンと痛み、目の縁から涙が染み出てくる。胸を突き上げてくる気持ちで闇雲に涙が溢れてくるのを止めることが出来ないようだった。

「ミカちゃんは幸福だ。こんなに泣いてくれる人がいるんだから、きつと北海道でやり直せる」

「あのよオ…………… どうしてもその紐は必要なのかあ……………？」

「残念ながら…………… 今のミカちゃんはオモチャや洋服やケーキよりも喜んでくれますよ」

「そうかあ…………… わかったぜ、ジヨルノ。ここをやつらには絶対に雲隠れさせねえように見張ってやつからよオ…………… 安心しろって伝えてくれ！」

「わかりました。それじゃあ、僕はこれで失礼しますね」

「また明日なッ……………！」

「……………？」

よくわからなかったが、僕はこの洗濯紐をベッドにくくりつけてネックレスみたいにしてようやく眠ることが出来る少女の所に急ぐことにしたのだった。

サーフィス1

1995年10月21日、双葉千帆は小学6年生の頃、家出をした際に不良に絡まれ、蓮見琢馬に救ってもらった過去がある。以来彼女はその記憶をずっと忘れずにいた。高校1年の入学式当日、町立図書館茨の館にて蓮見琢馬と再会するも、彼は過去の出来事を否定。彼が自分を救ってくれた少年ではないかと思いつながらも、友人として交友を深めていく。

そこまでは知っていた。

僕はある日、あの時、彼と一緒に不良に絡まれていた少女を助けたことがあったからだ。母親の遺体を発見したあの日、次の日にでももう一度行って母親の遺体を見つけ出し、通報すると決めてから僕は彼と共に施設に向かっていった。川沿いの道をひたすらに歩いていたのだ。

その先で僕達は両親の喧嘩に嫌気がさして、とは今まさに知ったけれど彼女と出会った。正しくは彼がいきなり動いたから僕がおいついた頃には彼は珍しく善意の第三者として仲裁という名の制裁をしているところだった。僕は止めなかった。

彼は人生で1番の絶望のさなかにあった、たまたまその八つ当たりとして不良が犠牲になったとしてもやむを得ない。それが双葉にとって少女漫画に出てくる女主人公の運命の人のようなドラマティックな邂逅だったただけだ。

化け物に襲われて生き埋めにされかけた双葉に僕は「忘れた方があなたのためだ」と率直に警告した。そこに親密さもなにもなかったはずだ。第一僕は1度も双葉に友好的な態度をとったことなどないのだから。なのに双葉が目の前にいる。隣には平然としている無表情で無機質な目をした青年。

「……今、なんていいました？双葉千帆……あなたはいつから自殺志願者になったんだ？」

ひどい、と非難めいた眼差しを向けられるが一言いいたくもなる。

「あなたもあなただ、琢馬……あなたのは行動はまったくもって矛盾

してるじゃあないか。百歩譲ってアンタたちが勝手に首をつつ込むのは構わない。でも、僕を巻き込む意味がわからない」

「詳しくは蓮見先輩に聞いて。私はあなたも一緒じゃないと嫌だと言われたからここにいるの」

「…… 塚馬」

「面白いことに巻き込まれた気分なんだとってたのはお前だろう、ジョルノ」

「あれは僕のこれからにおいて大切だから前のめりなのであって、断じてそういう意味じゃあない」

「違うのか？1人でも多く見つけたいんだらう？」

「…… はあ」

僕は観念したことを教えるために大袈裟に肩を竦めてみせた。やったあ、とガッツポーズしている姿はせめて僕に見えないところでやってもらいたいものである。

「どうして一度は死にかけたのにわざわざ首をつっこみにいくのか。なんのためか聞いても？それ次第で僕は断る権利があるはずだ」

「取材させて欲しいの」

「取材」

「そう、取材」

尊敬する作家か漫画家か映画監督の座右の銘みたいな言い方で双葉はいった。事実は小説よりも奇なりって言葉がある。

《Truth is stranger than fiction.》

世の中の実際の出来事は、虚構である小説よりもかえって不思議であるという意味だ。英国の詩人バイロンの言葉であり、社会の偽善を痛罵風刺し、生の倦怠と憧憬をうたいあげ、ロマン派の代表者となった彼らしい言葉だ。欧州各国を放浪、ギリシヤ独立戦争に参加して病死。

物語詩「チャイルドハロルドの遍歴」「ドンジュアン」、劇詩「マインフレッド」などが有名である。双葉の個人的な見解を付け加えるなら、そんな事実こそ最高のエンターテインメントだよ、って意味なん

だという。作者が実際に体験した現実を物語にしているから面白い。そんなリアリティが欲しい。

「将来の夢……と言うと笑われそうだけど、私はね、小説家になりたいと思ってる。自分の書いた作品が書店に並んで、遠く離れた家族がそれを手にとつてくれる、かつて過ごした日常を思い出してくる。それはとつても嬉しいなって——そう思って本気で小説家になりたいと思うようになったの」

「……ありきたりだけど、嘘はついてなさそうだな……」

「だから余計にタチが悪い」

「そうそれだ」

双葉の眼差しは揺るがない。あの時、こんな場所に放り込まれる前の自分の境遇。そんな中、自分はどう動いて、誰と出会って、何を感じたか。どういう会話をして、どこでどういうケガを負ってしまったか。

もちろんそんな呑気なことをしていたら人殺しの犯人とか、そういう人にあつさりと刺されて死んでしまうと思う。でも、やらずにはいられない。なにか『私が生きた証』を残したい。そう思った。

「だから僕達を巻き込みたい」

「助けてくれたから」

双葉はいう。きつと生き残ることは出来ないだろうと自分のことながらわかつている。そうなれば作品はきつと未完成のままどこかに放り出されてしまう。それでも、一秒でも長く、一文字でも多く、この現実を物語にしたい。

「なるほど……実に面白い考え方だ。頭が痛くなってくる」

僕は彼を睨んだ。彼は微動だにしない。双葉は話し続ける。

決して間違った行為だとは思わないと双葉は断言した。テンションが上がって話を続ける双葉を彼は止めない。双葉はあるいは喋り続けているといった行為に夢中になっている時は時間を忘れられるし、何より邪魔されたくないものなのだ。だから先に話をへし折っていたのに。気づいたら引き返せない程どつぷりと事態に巻き込まれていることに気づく。

「なるほど、いつもこうして巻き込まれているわけですか」

「そうだ」

「…… 案外悪くないと思ってる顔だ」

「なんの話だ」

「なんでもない」

僕は双葉が取材したいという奇妙なことについて耳を傾けることにした。

小学校の頃から仲がいい3年生の順子がドッペルゲンガーに悩まされているらしい。

「知らない男と一緒に歩いてたり、知らない服を着てたり、噂になって
いるらしいの」

それでも目撃されるたびにどんどん過激になっていき、とうとう親が目撃してしまったために心当たりもないのにしこたま怒られた挙句門限を設けられしまったという。

「ずいぶんとアグレッシブなドッペルゲンガーですね。深層意識とかそういう線はないですか？」

双葉は顔を赤くして、順子先輩はそんな人じゃあないと否定する。

ドッペルゲンガーは自分自身の姿を自分で見る幻覚の一種で、自己像幻視とも呼ばれる現象である。自分とそっくりの姿をした分身、第2の自我、生霊の類だ。同じ人物が同時に別の場所、複数の場合もあるが、に姿を現す現象を指すこともある。

ドッペルゲンガー現象は、古くから神話・伝説・迷信などで語られ、肉体から靈魂が分離・実体化したものとされた。この二重身の出現は、その人物の「死の前兆」と信じられた。

18世紀末から20世紀にかけて流行したゴシック小説作家たちにとって、死や災難の前兆であるドッペルゲンガーは魅力的な題材であり、自己の罪悪感の投影として描かれることもあった。

ドッペルゲンガーの人物は周囲の人間と会話をしない。本人に関係のある場所に出現する。ドアの開け閉めが出来る。忽然と消える等があげられる。

「でも、その順子は知らない男と話してたし、いったことない場所で

デートしてたし、普通にしていたらしいから……」

「そこまでくるとただの別人じゃあないか」

「ううん、違うんです。だってこれ、写ルンですと撮ったんだけど、同じでしょう？この時順子は塾にいったの、電話したから間違いないと思う」

「…………… もうそこまで調べあげてるんですか…………… 危なかったんですね、琢馬」

「僕の気持ちが変わったか」

「危なつかしいのはよくわかりました」

「なによ、2人して……………」

拗ねた様子を見せながらも双葉はネタ帳を広げる。

「ドッペルゲンガーじゃなくて、ホートスコピーじゃあないのか？」
彼はそういつて横槍を入れる。

ドッペルゲンガーより奇妙で複雑な自己幻視がホートスコピーである。これは極端にまれな私たちの自己像幻視で、本人とその分身のあいだに相互交流がある。相互交流は友好的な場合もあるが、敵対的なことのほうが多い。さらに、どちらが「オリジナル」でどちらが「分身」なのかに関して、ひどい混乱が起こる場合もある。

というのも、自己意識が一方から他方へ移る傾向があるのだ。初めは自分自身の目で世界を見ていたのに、そのあと分身の目を通して見ることがあり、そのせいで彼——もう一人のほう——が本当の人間だと思ってしまうこともありえる。

自己像幻視 (a u t o s c o p y) の場合とちがって、分身は本人の姿勢や行動を受け身でそのまま映し出しているとは解釈されない。ホートスコピーの分身は、限界はあるものの、やりたいことを何でもできるのだ（あるいは、まったく何もせずじっと横たわっていることもある）。

1935年に提唱されたホートスコピーという言葉は、その後は必ずしも有用と見なされてはいない。オートスコピーとはつきり二分されるものではなく、連続性やスペクトルがあるものと考えられる。

自己像との関係に対する意識は、ごく弱いものから非常に強いものまで、無関心から強烈まで、さまざまな可能性があり、その「現実味」の感覚も同じようにまちまちなのだ。

ホートスコピーという用語が考案される一世紀前の1844年、医師のA・L・ウィーガンが悲劇的な結果を招いた極端なホートスコピーの症例を記述している。

私が知っていた、ある非常に知的で感じのいい男性は、目の前のへ自分自身を認識する力を持っていた。そしてよく、彼の分身に愛想よく笑いかけ、そのたびに相手も笑い返してくるようだった。これは長年楽しみとジョークのタネだったが、最終的には痛ましい結果を招いた。

彼は次第に自分が、「もう一人の自分」に取りつかれたのだと思ひむようになった。このもう一人の自分は頑固に彼と言い争い、彼にとってひどく悔しいことに、彼を論破することもあった。論客として自らのむところのあった彼は、そのことにひどく傷ついた。彼は常軌を逸していたが、監禁されることも拘束されることもなかった。

しまいに、いら立たしさに疲れ果てた彼は、生きて新しい年を迎えまいと決意し——借金をすべて返し、毎週の請求書を別々の紙にくるんで——12月31日の夜にピストルを片手に持ち、時計が12時を打つと同時に口にくわえて発砲した。

分身、ドツペルゲンガー、半分自分で半分別人というテーマは、文学者にとって非常に魅力的であり、たいていは死や災難の不吉な前兆として描かれている。

場合によつては、エドガー・アラン・ポアの『ウィリアム・ウィルソン』のように、分身は目に見える具体的な罪悪感の投影であり、その罪悪感が耐えがたいほど強くなって、最終的に本人が分身に殺意を抱き、気づくと自分自身を刺している。

ギ・ド・モーパッサンの『オルラ』に出てくるもののように、分身は目に見えず実体もないのに、それでも存在の証拠を残す場合もある（たとえば語り手が水差しに入れておいた水を飲む）。

モーパッサンはこれを書いた当時、しばしば自身の分身を見てい

た、つまり自己像幻視を起こしていた。友人の語ったところでは、「帰宅するとほとんど自分の分身が見える。ドアを開けると、肘掛け椅子に自分がすわっているのが見えるんだ。見た瞬間幻覚だとわかる、しかし、異常なことじゃないか？冷静な頭の持ち主でなかったら、怖くてたまらないだろうね」。

モーパッサンはこの時点で神経梅毒をわずらっていて、病気がさらに進行すると、鏡に映った自分を認識できなくなり、鏡のなかの自分にあいさつし、おじぎをし、握手をしようとしたと言われている。

人を苦しめるのに目に見えないオルラは、そのような自己像幻視の経験から思いついたものかもしれないが、まったく別物であり、ウィリアム・ウイルソンやドストエフスキーの小説に登場するゴリヤートキンの分身のように、本質的には18世紀末から20世紀初頭にかけてはやった、ゴシック文学のドッペルゲンガーにはかならない。

現実世界では、ホートスコピーの分身は——ブラッガーらによって報告されている極端な症例はあるが——それほど悪意はないようでもある。温厚なものや、前向きで品行方正なものもある。オリン・デヴィンスキーの患者の一人は、側頭葉発作にともなうホートスコピーを起こして、その症状をこう説明している。

「夢のようでしたが、私は目が覚めていました。突然1メートル半ほど向こうに自分が見えました。私の分身は芝刈りをしていたので、それは私がやっているべきことだったので」。この男性はそのあと10回以上、発作の直前にそのような症状を経験し、発作活動とは関係なさそうな発症も何度かあった。1989年の論文にデヴィンスキーらは次のように書いている。

彼の分身はつねに透けていて、全身像で、等身大より少し小さい。患者とはちがう服を着ていることが多く、患者とちがう考えや感情を抱いている。分身はたいがい患者自身がやっていなくてはならないと思う活動をやっていて、彼は「あいつは私の罪の意識です」と言っている。

「でも順子先輩は普通の女の子よ。テニス部に所属していて、同じ部活の彼氏がいて、デートの惚気をたくさん聞かされているんだもの」

遠回しに友達を精神障害を疑われたことが気に食わないのか、双葉は食い下がる。

「んん……？じゃあ、誰に取材するつもりなんです？その順子先輩て人はまともなんでしよう？」

「私が取材したいのは、この人なの」

さしだされた写真を見て僕はようやく彼が協力者として僕を指名した理由を悟った。

間田敏和。ぶどうヶ丘高校3年C組の生徒。身長は自称165

cm。獅子座。テニス部所属。

長いボブカットに猫のような目をした、如何にも根暗そうな学生だ。マンガが大好きで学校のロッカーにマンガを置いている。本人のスタンド曰く「パーマンを知らないやつとは会話したくねー」とのこと。

性格は執念深く陰湿そのもの。かなり暴力的だが小心者でもあるため、身動きが取れない相手にしか手を上げる事ができない。弱い者をイジめると胸がスツとして気分がいいらしい。

「……まさか一人で行くつもりだったんじゃないでしょうね？」

双葉は目を逸らした。

「もし、双葉千帆のドッペルゲンガーが出現したとして。その存在を君は殺せますか、蓮見琢馬」

「…… 答えが出なかつたから、止めたんだ。無粋なことを聞くもんじゃない」

「そういうわりに、もし僕がドッペルゲンガーだとしたら躊躇なく殺そうとするんでしょう？」

「なにを当たり前のことをいうんだ、ジョルノ。ドッペルゲンガーは

スタンドまでコピー出来ないらしいじやあないか。僕のスタンドに即死性はないが、対応できたかどうかで本物と偽物の区別がつく。僕もお前も手の内は互いにわかり切っているんだから」

「そうですね」

「今からリクエストを決めておくか？」

「インフルエンザなんてどうです？」

「春も半ばなのにか？」

「リアリテイが足りない」と双葉に怒られそうだ」

「全くだ」

「ところで僕はまだ中学二年生なんですよ、琢馬。高校に入ってもいいんでしようか？」

「だからわざわざテニス部に向かうだろう、ジョルノ。テニス部は中等部と交流試合があるからな。双葉と同じように先輩の応援にきましたという顔をしていればバレないものさ」

「無表情のアンタにだけは言われたくありませんがね」

テニス・コートからはシャパンを抜くようなラケットの音が愉快そうに聞こえてくる。ボールがポンポンと乾いた音を立ててネットを飛び越えているのが見えた。

「蓮見先輩！汐華くん！こっちよ！」

フェンスの向こうで順子先輩とやらを応援している双葉が手を振っている。軽く頭を下げた僕の隣では愛想笑いすら忘れた疑惑がある能面がそこに歩いていく。女子部員のスカート目当ての男子生徒たちからは恨めしそうな眼差しを向けられるが、おいでと言われているのだから問題ないはずだ。

「今、順子先輩が勝つてるところなの」

ラブファイフティと審判が告げるものの興味が無いため意味はわからない。黄色い、あるいは野太い声援の最中、取り残されたように沈黙している僕たちはこれ以上ないくらい浮いていた。やることといえば男子部員たちの確認だ。

「今、順子先輩にスポーツドリンクを渡したのが彼氏さん」

なるほど、傍からみたら仲を裂く余地がないくらいラブラブな雰囲気

気がある近寄りがない人種だ。双葉が意固地になって浮気は絶対にありえないと断言するだけはある。これで浮気が真実だとしたら相当猫かぶっていることになる。間田とは真逆な印象だ。

「あれが間田敏和って人」

クレーコートに向こう側で練習に勤しむ男子部員の中でもボール拾いのような雑用を押し付けられている先輩がいる。

粘土質の地面に真砂土を撒いたイエロークレーでテニスボールのバウンドが高く弾む。持つてこいとも言われたのか、順子の彼氏がヤジを飛ばしていた。それに気づいた女子部員たちがくすくす笑っている中、順子がそちらに向けより彼氏になにかをいつているのが見えた。

どうやら庇ったのか、みつともない真似はするな、と怒ったらしい。カチンときたのか、間田敏和を指さしてなにかまくし立てている。我に返ったらしい順子はなにやら弁明しているが怒った彼氏はテニスラケットで順子をぶん殴るとその間出ていつてしまった。

あたりが騒然となる。

「いくぞ、ジョルノ」

「ええ」

間田敏和が騒ぎに乗じてテニスコートから順子の彼氏をおいかけて行くのが見えたのだ。双葉は順子の介抱をするために慌ててフェンスから入ろうと走っていつてしまった隙について、僕たちは先を急ぐ。

「ここから入れる」

部活に使うためか内庭を通り、校舎に続く道は開けっ放しになっていた。

「間田…… 間田…… ああ、これか。ほら、ジョルノ」

「いいんです?」

「外に出られなくなる。ああいうタイプは勝手に他人の外履きを使えないやつだ」

余程慌てていたのだろうか、外履きが置きっぱなしだ。僕は間田とかけられたそれらを拝借してツバメにした。

「ぎいやああああッ!!」

惨たらしい叫び声だった。叫び声がこだました。ツバメが驚いて本来の持ち主のところに行くのを躊躇するほどだ。その声は、白燃鉄を打つような響きを帯びて、鋭く僕達の耳を貫いた。

そのツバメがテニス部に割り当てられている更衣室に侵入している。

「……これはッ……!」

「……」

自分のラケットをつかって一心不乱に自分の頭をぶん殴っている順子の彼氏がいる。だがツバメはその先に向かうのだ。

「痛えよオ……痛えよオ……やめてくれよオ……謝るから、謝るからあああ」

ぼこぼこになっていく順子の先輩は僕達をみて助けくれえ!と叫ぶがどうやら自分の体を制御することが出来ないらしい。

ツバメが旋回する。僕は奥を見た。

「だっ……誰だっ!!」

そこにはもう一人の順子の彼氏と間田敏和の姿があった。彼氏はあいかわらず自分の頭を血塗れにすべくテニスラケットでぶん殴り続けている。ばちん、とはじける音がして、彼氏は気を失ってしまった。

「何をしているんです?」

「畜生、バレちまったか!誰もいないと思ったのに!」

等身大のポーズ人形を自分のネームプレートがついたロッカーに押し込もうと準備していたらしくロッカーは開けっ放しだ。ひどく動揺しているようで、なにかがひっくり返って僕の周りに散らかった。

「み、み、み見るんじゃねえ——ッ!」

慌てて間田敏和は写真をかき集める。そこには様々なシチュエーションの順子が写っている。どうやらこの男がドツペルゲンガー事件の犯人らしい。

「バレちまったなら仕方ねえ……ここで消えてもらおうか!」

間田敏和の声に応じて順子の彼氏が姿を変える。

「そんなバカなッ……僕がもう1人いるだとッ……！」

「形兆から話は聞いてるぜ、汐華初流乃ッ……！」

「ここからは僕が相手です」

「なるほど……順子のドツペルゲンガーというのは、君のスタンドか、間田敏和」

「そう、俺のスタンドサーフィスは等身大の人形に憑りつき、人形に触れた者の姿、仕草、声紋を全てコピーするスタンドだ！スタンドまではコピーできねえがパワー・スピードはそこそこ高い。てめーのゴールド・エクスペリエンスに負けるいわれはねーぜエッ!!」

「ツッ……!?!」

コピーされたせいだろうか、僕は順子の彼氏のように体の自由が効かなくなっていた。もうひとりの僕が手をあげると、僕もあげる。どうやら数メートル以内でサーフィスと向き合うと同じ動作しか取れなくなるようだ。

その際の動作は鏡写しとなり、サーフィスの右腕が動けば、ぼくの左腕が動く。また向き合うと言ってもお互いを認識する必要はなく、サーフィスがコピー元の姿を視認していればいい。また動作させる部位はある程度サーフィスが指定可能であり、サーフィスの支配下にあって一寸も違わぬような動作をするわけではない。

「さあ、殴り合いと行きましようか」

「たたり、と僕は冷や汗がたったた。」

サーフィス2

「なるほど、動揺を誘ってスタンド発動を食い止める気ですか……：残念ながら僕は直接触れなきや発動出来ない訳じゃあない！ゴールド・エクスペリエンス!!」

僕がスタンドを発動させると同時に間田は笑った。なにがおかしい、と眉を寄せつつ、僕はてんとう虫のブローチをヤモリに変える。「発動を阻止したいのは事実だが方法が違うぜえ……：サーフィス！」

僕はそのヤモリをサーフィスが化けた僕に投げつけた。当然ヤモリは叩き潰されて床に転がり、てんとう虫のブローチに戻ってしまった。その瞬間にサーフィスの腕がいびつに歪んだ。変な方向にぐにやりとまがり、だらり、と垂れ下がってしまう。

「かかったなアッ！」

「ツ!!」

まるで連動しているかのように僕自身の腕もまた変な方向にぐにやりとまがり、捻じくり返ったあとだらりと垂れ下がってしまったではないか。驚きと痛みのあまり二の句が告げない僕にサーフィスはいう。

「ああもう、なんてことしてくれるんです。僕はゴールド・エクスペリエンスが発動できませんから、この腕はそのままなんですよ？使い物にならなくなったらじゃあないですか。その代わりにパワーはあるんですよパワー。だから……：」

「まさか、お前ツ!？」

「こんなこともできる……：元の木に戻ってしまうのが難点ですが……：」

ごとりと目の前の僕がなんの躊躇もなく腕を切断してしまう。下には木でできた腕が転がった。

「まさかッ……：」

「そのまさかですよ」

次の瞬間に激痛が僕を襲う。僕は弾け飛んだ腕を見た。訳の分からない衝撃により片手が吹き飛んでしまう。

「今度は左手を切断しましょう」

「お前ツ……………まさか……………コピー元まで効果が……………!?」

「気づいても遅いですよ」

「ぐあっ！」

「形兆がいった通り、恐ろしいやつだぜ……………普通ならあまりの痛みに悶絶するなり泣きさけぶなりするつてのに、そこまで耐えるとはよ……………」

化け物でも見るみたいな顔で間田は僕をみた。

「さて、次は右足を……………」

「おいおいおい、これ以上もいだらお前の移動手段が無くなるじゃあねえか！なに考えてんだよ、サーフィス！」

「えっ、いいんです？ここで殺さないと僕は諦めが悪いから死なないし、また治療をしてみますよ？この程度で心が折れるとはおもえない」

「……………ホントにきみがわりい野郎だぜ……………ホントに14なのかよこいつ……………」

間田はロッカーの中のをテニスラケットのケースにぶち込んでいると、ならせめて移動手段を絶たないと、と直接片足を折ってこようとするサーフィス。

「ツ……………ゴールド・エクスぺリエンス！」

僕が叫ぶ前から再びでんとう虫のブローチから蔦が溢れ出し、サーフィスの手刀をかわす。カウンターはこちらにダメージが返ってしまうとわかった以上、解除して防御に徹した方がマシだ。何度も何度も執拗に攻撃していたサーフィス。だが僕が懸命に耐えているうちに、イラついた様子の間田に呼ばれてテニス部屋から出ていってしまっただった。

そのうち射程範囲から外れたのか、はやくサーフィスの対象から僕を外したかったのか、僕は自由の身になった。

「思考回路までジヨルノそっくりになるんだな。満身創痍じゃあない

か。生きてるか、ジオルノ？」

「死んじやいない、みればわかるでしょう？ただしくは死にかけだ。大丈夫って聞くとこころでは？」

「悪いな、人が来るとまずいと思つて外で見張つていた」

ほら、と僕の手を持つて来てくれた琢馬は珍しいものを見るような顔でこちらを見下ろしてくる。

「まさかコピー元にダメージが返ってくるだなんて思いもしませんでしたよ」

ゴールド・エクスペリエンスが僕の腕を受け取り、新たに作り直して僕の肩に埋め込み始める。仗助先輩と違って痛みは残るし、適応できるまですさまじい激痛が走るが耐えるしかない。

「人払いにいつてくるから待つてろ」

「友達がいのないやつだ」

「バレたら困るのはお前だ、ジオルノ。お前が暴力事件を起こしたなんてなつたらどうするんだ」

「……はやく出ていった方がいいのは確かですね。はやく間田を追いかけないと」

「いや、その必要はない」

「え？」

「僕は素知らぬ顔で帰るべきだ」

「どうしても？」

「どうしても」

訳の分からないまま、僕は治療を続ける。気絶している順子の彼氏の治療をしたら目を覚まして叫び始めたので、通りがかりの生徒に先生を呼びにいつてもらおう。

救急車に運ばれていく順子の彼氏を見送ったころには、すっかり夕方になっていた。双葉は順子先輩の手当に付き添い、そのまま病院に行ってしまったようである。

「ところで、僕のスタンドがどんなのか覚えてるか？」

ふと思いついたように琢馬がいった。もちろん、と僕は頷いた。彼の自己申告だからどこまで本当かは身をもって味わったことがまだ

ないのでわからないけれど。

蓮見琢馬のスタンドは本型・中距離精神攻撃型だ。右綴じハードカバーの単行本のような外見。厚さは3cm程度。表紙はダークブルーの革上で、何も描かれていない。ただし、最初数ページと後半は白紙である。古本のようなにおいがする。

本体の人生のあらゆる記憶を記録し、読む者にそれを伝えることができる能力。本体が胎児以前からの記憶（五感で得た全ての情報）が日本語にて小説形式で記載されており、いつでも読み返すことができる。本の内容はリアルタイムで更新され、外見上の厚みは変わらないが、実際に開いた時のページ数はどんどん増えていく。

記憶を読み返すと、その時感じた視覚、嗅覚、味覚、聴覚、触覚、そしてその時の自分の思考をそのまま再現することができる。自分が認識していない情報（視界の端に映った人の顔、街の雑踏で聞こえてくる噂話など）についても正確に記録されていき、本体の任意で後から情報を検索して探し出すことができる。

この能力により、琢馬は杜王町に長く住んでいるので、仗助や億泰の個人情報や噂話に出てくる程度の知識なら即座に調べることができる。本のページを標的に見せることで、自分の体験を『感情移入』させ、本体が読んだ場合と同様の状態にする事ができる。

この時、自分の身に降りかかった『危険な記憶』を読ませることで、同様の『危険』を味合わせることができる。琢馬はこの『危険な記憶』の書かれたページを『禁止区域』と呼び、攻撃に利用するとともに誤って自分で読まぬよう注意している。

この『本』を「読む」場合、一瞬でもページが視界に入った時点でその部分を「読んだ」事になる。

「読んだ」事になる条件は、本のページから2m以内であること。文字が認識できる程度に明るい所であること。日本語が理解できることの3点である。

『本』はスタンド使いにしか見えないが、ページを相手の視野に入れればスタンド使い以外にも効果が発動する（視覚ではなく魂が認識するため）。

ページをめくるのは常に現在から過去であり、目的のページまでを開くために要する時間は現代に近いほど短い（ほんの一瞬の差だが、スピードの速いスタンドと相対する時には重要な一瞬である）。

また本は破り取ったページも含めて本体から30メートルまで出現させることができ、本体は隠れてページを開いたまま本を放置することで、本を視界に入れた者を自動で攻撃する罠として利用することができる。

主な『禁止区域』は以下の通りだ。

インフルエンザの記憶

琢馬が12歳の時にインフルエンザに陥った時の記憶。ページを読んだ者を、高熱、悪寒、発熱、頭痛、筋肉痛など、インフルエンザと同様の症状に陥らせることができる。

飛び降り自殺の記憶

琢馬が8〜10歳ごろに入院中の病院の3階から飛び降りた時の記憶。植え込みに落下した時に枝が首の血管を傷つけ、顔や首に傷を負い、さらに全身打撲で肋骨を骨折した。ページを読んだ者に、以上の状態と同じダメージを負わせることができる。『禁止区域』の攻撃の中でも2番目に強力な記憶。

鋏での自殺の記憶

飛び降り自殺の前に入院する原因となった、鋏を用いた自殺の記憶。鋏を両腕の血管に突き立て、大量出血した。ページを読んだ者の両腕の血管に鋏で開けたような穴を開け、噴水のような出血をさせることができる。

交通事故の記憶

琢馬が小学2年生の頃に交通事故にあった時の記憶。ページを読んだ者の右大腿部に乗用車のバンパーが衝突したような衝撃と、全身に割れたガラスでできたような傷を負わせることができる。『禁止区域』の攻撃の中で最も強力な記憶。

自殺の記憶を植え付けられたものは、まるで自分が発作的に自殺を試みたような思い込みをしてしまう。インフルエンザを除くこれらの『禁止区域』を読んだ者は数時間放置されると出血多量で死んでし

まうのが普通であるが、塚馬自身が『死んだ』記憶がないので『感情移入』によって即死させることはできない。

「ジョルノのおかげで禁止区域の最上位が最近できたんだ」

「ああ、毒蛇やハチのアナフィラキシー？」

「他にも色々試しただろう？適切な処置を行なわなければ1時間以内に死亡するようなものが」

「最近やたら乗り気だったのは手段を増やすためですか」

「ああ、せっかくだからこいつを読ませたときどうなるか試したくなつた」

「ちなみになにを？」

「明日聞けばわかるさ」

翌日、間田が大量のハチにさされて入院したことを僕は知ることになる。

泣きつ面に蜂って言葉がある。悪いことがあつた上に、さらに悪いことがおきるたとえだ。また、不運が重なることのとたとえでもある。辛い目にあつて泣いているところに、さらに蜂が来て刺すということから来ているが、間田はまさにそんな状況に陥っていた。

毎年のように、ハチに刺されて亡くなる人間がいるのは知っていた。フグ毒、ハブ毒、細菌のボツリヌス菌やトリカブトなどは死に至る極めて強力な毒を持っているが、ハチに刺された場合、直接ハチ毒の薬理作用によって死ぬことはない。

しかし、ハチに何度か刺されるとI型アレルギー反応が関与した全身性アナフィラキシーショックが原因で、毎年およそ30〜40名の人が死亡している。このハチアレルギーで起こる全身性アナフィラキシーは刺された人のすべてにおこるわけではなく、刺された人のおよそ10%と推定されている。

全身性アナフィラキシーショックは生体の防御機構の誤作動で発生するものだ。人間にとって有益だと免疫といい、有害だとアレルギーという。アレルギーはある物質に2度目ないしそれ以後に接触した場合に生体の示す変化した反応能力を意味する。

人の身体をウイルスなどの感染症から守るためにつくられるタンパク質で、感染などの病気に対する体の防御機構の一部を担っている。アレルギー症状は主に抗体が過度に産生され、アレルゲンと反応した結果起こる症状だ。これが激しく反応して発生する。

ハチに刺されると体内で「危険な物質が入ってきた!」と判断され、抗原に対する防御反応が起こり、I抗体が産生される。この抗体は粘膜や皮下結合織にある肥満細胞と結合し、次にハチに刺された時に備える。

再びハチ毒が入ってくると、ハチ毒は産生された抗体が活性化され、有害な化学伝達物質が体内に大量に放出され、体の各臓器に作用して様々な症状を引き起こす。

全身にじんましがでる。咽喉、声門の浮腫、気道収縮によって呼吸ができなくなる。血圧が急に低下し、脳に血液がいきわたらず、低酸素状態となり意識がなくなる。これらの症状は1時間以内に出るので、緊急処置をしないと死に至る。

幸い通学路途中で意識不明に陥った間田は入院し、目を覚ましたらハチによるアナフィラキシーと聞かされたのだ。ハチにさされた覚えがないというのに。1度も刺されたことがないのに2度目のアナフィラキシー反応を示してぶったおれたといわれたのだ。普通なら不運な事故だが、間田は違った。

テニス部室で僕という物質から生命を作り出せるスタンド使いと交戦してなんとか逃げ延びた。気絶はしていなかったことを間田はサーフィスの忠告から覚えている。あまりにも慌てていたから誰かとぶつかって本を落とした気がするが、帰るのに必死で気づかなかつ

た。

こう思ったに違いない。

「ジヨルノのやつめ、スズメバチで刺しやがったな。2度目とか言われたがガキの時に刺されたのを覚えてないだけだろう、きつと」

つまりなにがいたいのかというところ、双葉たちと見舞いに来た僕は間田に怖がられていた。

「しゅっ、取材だあ?」

間田が素っ頓狂な声を上げるのも無理はない。お礼参りかと思ったら機材を持ち込み、話を聞きたいという女子高生が突然アポ無しで突撃してきたのだから。

「初めまして、私、双葉千帆っていいいます。ぶどうヶ丘高校1年生で小説家を目指しているんですが、お話をきかせてもらえませんか!」

「ハア?」

目が点になる間田。

「あなたがドツペルゲンガー事件の犯人らしいと聞いてお話を聞きに来たんです」

「ドツペルゲンガーだア……?」

「はい。順子先輩とデートしたり一緒に登下校したり家にお泊りしたりしてるのを見た人がいるんですが、いつも一緒にいるのがあなただって聞いたから」

「……!」

「ドツペルゲンガーってどんな感じなんですか?」

「どんな感じって……」

「えーっと、喋りますか?」

「お、おう、まあ……」

どういうことだ説明しろと僕に視線が向けられるが、僕は観念して洗いざらい説明した方がいいと忠告した。こうなったら双葉は止まらない。間田が僕のことを気にしすぎるあまり口が軽くなっている

せいか、怒涛の質問攻めが始まった。

いつからドツペルゲンガーが出せるのか。

ドツペルゲンガーはなにができるのか。

本人とドツペルゲンガーはどれだけ似ているのか。

ドツペルゲンガーと本人は会っても死なないのか。

どうして順子先輩だったのか。

「ぐうっ……。そ、それはア……。」

まるで拷問だなとなんとなく僕は思った。刑事に留置所で洗いざらい犯行を自白させられる犯人を見ている気分だ。

テニス部で唯一自分を邪険に扱わない同級生の彼氏が自分を虐めてパシリにしてくる男。手に届かないものを漠然とあこがれるような想いを吐露させられる間田。

心の底でひそかに愛慕を寄せるだけでは満たされることのなかった、そしてこれからも永遠に満たされることのないであろう少年の憧憬。かごの中の鳥が空に恋するように気が合えば合うほど、二人の間の永遠に縮まらない距離が浮きぼりになる。気が合う、だからなに？ ふつうよりちよつとだけ距離の近い平行線、なんの火花も散らなければ、なんの化学変化も起こらない。

「たしか、三月頃にも親友が突然自宅で自分の目をシャーペンでひと突きしたらいいですけど、間田先輩のドツペルゲンガーの仕業じゃないですか？」

「な、なんでそう思うんだよ？」

「だって、親友さんと好きなアイドルを巡って大喧嘩をしたそうじゃあないですか。その夜にっことは、間田先輩の想いがまた暴走しちゃったんじゃないかしら」

「……。は、はあ……？」

「だってそうでしょう？ 間田先輩にドツペルゲンガーが現れるのはいいだって誰かを好きだって気持ちを否定されたり、馬鹿にされたり、叶わないって思い知らされたりした時じゃあないですか」

「つぐうう……。」

「ドツペルゲンガーってそういうときに現れやすいつて本で読んだことがあるんです、私。ポルターガイスト現象みたいな」

ザクザクと言葉の牙が間田に突き刺さっているが語りだしたら止まらない双葉は解説を始めた。

ポルターガイスト現象は、思春期の少年少女といった心理的に不安定な人物の周辺で起きるケースが多いとされており、その人物が無意識的に用いてしまう念力によるものとする説もある。

つまり、そういった能力を有する者が無意識的に物を動かし「ポルターガイスト現象」を発生させてしまう、とする考え方である。意気揚々と語る双葉を見て、あの時の化け物はとんでもない方向にトラウマを発展させてしまったんじゃないだろうか、と僕は疑った。

「…… 双葉はいつから超能力万能説に目覚めたんです？」

「……… 僕に聞くな」

琢馬は目を逸らした。

「最近某大学教授の話をも熱心に読んでいると思ったら……」

「スタンドが見えない人間の限界を感じますね」

「全くだ」

今、双葉の中では超ESP仮説がトレンドらしい。聞いてもいないのに語り始めた双葉がいうには、「死後生や霊魂の存在の証拠とされる心霊現象も、ESPや超能力によるものだと見なすことで、霊魂を想定しなくても説明可能になる」とする仮説らしい。超心理学で超常現象を説明する時にとりうる仮説はいくつかあるが、そのうちのひとつだとか。

この超ESP仮説と対立する仮説は、肉体の死後も何らかの存在が存続し続けていて様々な超常現象を引き起こしている、と見なすサイババル仮説である。

亡くなった親族しか知らないはずのことが言い当てられているのは、スピリチュアリズムにおいては霊からの通信や霊の存在の証拠としているが、この超ESP仮説を採用すると、テレパシーや透視などの超感覚的知覚(ESP)を用いて実現されたと考ええることができる。

また、ポルターガイストなどの、スピリチュアリズムにおいて「物

理的心靈現象」に分類されている現象も、この仮説を採用すればサイコキネシスの一種によつて起こされていると見なせるなど、一般に心靈現象とされているものが超能力によつて起こされているとすれば、靈魂抜きで説明可能だ、と見なす仮説である。

これに対して、本人が学習していない言語や文章を扱うケースも報告されており、上記の仮説ではこの現象の説明はつきにくいことになり、極めて僅かであるが自在に言葉を操る「応答性真性異言」なども存在する。

ひとしきり語り終えた双葉は笑った。

「いつかあなたの思いに応えてくれる人が現れたらきつとドツペルゲンガーも現れなくなると思います。だから気を落とさないでください」

「…………… あ、ありがとう……………？」

僕も琢馬もため息をつくしかなかったのだった。

絵描きに会いに行こう

東北3大都市の1つS市は、「ゆべし」「ずんだ餅」などの特徴的な銘菓が有名だが洋菓子のおいしい店もたくさんある。

新進気鋭のパティシエが作る本場の素材と技術を駆使した物から、果物屋のこだわりフルーツケーキ、パン屋が作る絶品タルト、老舗の喫茶店で本物のコーヒート楽しめる洋菓子、和菓子の老舗が手がけた絶品ケーキなど、多種多様なケーキがそろっている。

僕が最近ハマっているのはとあるケーキ屋だ。世界中の最高級食材を惜しみなく使用する、S市屈指の人気洋菓子店。20種類の色とりどりのマカロンをはじめとして、フランスで修行したパティシエが最高レベルで再現した本場パリのケーキを並べた店内は宝石箱の様。もちろん甘さや食感も素晴らしく、一度この店のケーキを味わったらその虜になる事間違いなし。

市内に支店がいくつもある時点で人気ぶりがうかがえる。その店は世界に誇れる、S市でもトップクラスに君臨する洋菓子店でもある。フランスから取り寄せたチョコレートを始めとして、厳選された最高の素材で作るフランス菓子に惚れ込んだ外国人の常連もたくさんいる。

だから僕みたいな生まれがエジプトで育ちは日本。日本語しか喋れないのに見た目がどうみても外国人みたいな人間はとても居心地がいい。

いくつか試してみたが、苺ベースのクリームにクレームブリュレが入った、ピンクが鮮やかな「ピンクレディ」。世界的に有名なドモールのチョコレートを使用した「アンタンス」など、どれも大満足の逸品だったから鼻屑にしているのだ。

いつか行つてみたいと目論んでいるのが知る人ぞ知る、同じ系列の本格フレンチの名店だ。本物のフランス料理をコースで堪能した後は、素材にもこだわり抜いた絶品デザートが楽しめる。

フルーツのソルベやワインのコンポート等が組み合わされた見事なスイーツは、目と舌を大満足させてくれる。記念日にパティシエ特

製のホールケーキでお祝いされたら、最高の思い出になる事間違いなし、らしい。さすがに敷居が高すぎていけない。

今回は行きつけのケーキ屋だ。今日も今日とて大繁盛である。女性客の中に堂々と入り込めるという意味では日本人離れしたこの顔は役得といえた。

「すごい……どれもおいしそう……ごめんちよつと待ってもらってもいい？ 汐華くん」

最新モードを着こなしたようなカラーとフォルム。老舗ブランドのフレグランスのような香しいフレーバー。摘みたての熟れた果実をほおぼるようなフレッシュ感。フランスの太陽と大地を感じさせる濃厚な粉と乳製品。

産地、選別、鮮度すべてが最高品質のクーベルチュール。これらを緻密な計算と黄金比で組み立てた絶妙なマリアージュ。この国のあたりまえを軽々と飛び越える、本場パリ仕込みのパティスリー。双葉が悩むのも無理はない。甘いもの好きの聖地なのだ、ここは。

「僕は決まっているのでゆっくり選んでください」

「なに選んだの？ あ、プリンなんだ」

「あげませんよ」

「大丈夫、今日はお金多めに持ってきているから！」

なにが大丈夫なのだろうか。ショーウィンドウに目移りしている双葉を通り過ぎ、僕は会計を先に済ませることにした。

ふと、間田が双葉の取材の帰り際に言っていたことを思い出す。

スタンド使い同士はどういう理由か正体を知らなくても知らず知らずのうちに引き合う。運命の赤い糸なんて言葉があるがあれによく似ている。敵か友人かバスの中で足を踏んづけた人か引越してきた隣の住人かそれはわからない。

この狭い社王町に今、何人のスタンド使いがいるのかは知らない。いくら隠れていてもそのうちきつとボロを出して手がかりを見せる。形兆先輩からスタンドの矢と弓を奪ったやつはそうなるのを知っているから空条さんに出ていってもらいたいようだ。

形兆先輩と同級生であり、その繋がりですスタンド使いになったらし

い間田はずいぶんと憤りをみせていた。だからこそその警告なのだろう。

(もしかして双葉は無自覚なだけでスタンド使いなのか？ 琢馬はスタンド使い、双葉の父親も恐らくはスタンド使い……。もちろん僕も含まれているけれど……。まわりにスタンド使いがすぎじやあな
いか?)

「なあに?」

「なんでもありません」

「誘ったのは汐華くんでしょう?」

「いや、そういう意味じゃあないんだ。実は相談がありました?」

双葉はようやくここに来た目的を思い出したようで、選んだケーキとコーヒーを持って会計を済ませる。イトインスペースに向かうとノートパソコン片手に粘るOLやデートをしているカップルはたくさんいた。

ごつたがえしているテラス席からだいぶ離れたところに座ることにする。

「林先生ってご存知ですか? ぶどうヶ丘高校の美術の先生らしいんですけどね」

「えっ、林先生? まあ、一応知っているわ。美術は選択してないから噂程度だけれど」

「どんな人です?」

「どうして? 汐華君って中学生よね? どうして林先生を知っているの?」

「実はですね。僕が双葉と琢馬とテニス部に行ったことがあったでしょう? どうやらそのとき部室の窓から見かけたらしくて、モデルになつて欲しいって言われたんです」

「えっ、林先生に?」

「そうなんですよ。普通に考えて変じやあないですか? 生徒にモデルを頼みます?」

「たしかに……」

「琢馬に聞いたら興味ないと断られてしまいました。君の方が知っているだろうから相談したらどうだといわれたんですよ」

「そっか……。ああ、うん……。蓮見先輩は嫌いだと思う……。なんというかその、悪い意味で鼻屑のする先生なの」

「鼻屑ですか」

「そう。あんまりよくない噂もあって」

「たとえばどんな？」

「なんというか、モデルに選ばれた生徒は内申点をたくさんくれるとか、お金をくれるとか。みんな羽振りが良くなって自慢してるから噂になっているの」

「……。内申点ですか。僕は中学生だ。高校生じゃあない。それにその脅しは僕には通用しませんね、僕は二学期になったら転校する予定なので」

「そうなんだ……。でもね、気をつけた方がいいかもしれない。断った生徒の中には行方不明になったり入院したりしてる生徒がいるって噂なの」

「……」

「もしかしたら間田先輩みたいな人かもしれない」

「近からずも遠からず、かもしれない」

「そっか……。甘いものが好きな蓮見先輩が逃げちゃうわけだ……」

「そんなに嫌いなんです？」

「うん……。口にするのも嫌みたい」

「琢馬がそんなに嫌がるのか……。嫌な予感しかないな……」

「大丈夫？」

「どうでしょうね、1度あってから考えますよ」

「そっかあ……。気をつけてね。さて、食べよっか。あつ、おいしい」

「たしかに……。琢馬も来れば良かったのに」

「ね」

施設のイベントの手伝いがあるからと逃げてしまった友人を思い出し、僕は小さく笑った。

「ねえ、汐華くん」

「はい」

「汐華くんは蓮見先輩と長いよね？」

「そうですね、同じ施設で育ったから家族みたいなものです。この学ランも中学生の時のがもう着れないからと譲り受けたので」

「そっかあ……ねえ、汐華くん。ひとつ聞きたいことがあるんだけど」

「なんででしょう？」

「4年前の10月21日、私達会ったことない？」

「……またその話ですか。何度も言わせないでくれ、無駄なことは嫌いなんだ、無駄だから。僕から言うべきことはなにもない。聞く相手を間違ってるだろう」

僕は口元を真一文字に結んだ。

「千帆さん、あなた、付き合ってた数ヶ月の彼氏がいるのにもう浮気をしているの？」

女の声がして振り返ると女子高生がいた。咎めるような眼差しで双葉を見つめている。

ウエーブの長い髪以上に目を引いたのは改造制服を着た人が多いぶどうヶ丘高校、もしくはは中学においては珍しく、あまり改造されていないセーラー服を着用している。豹の様にしなやかな美人だ。

「ゆ、由花子さん!?!ちがう、ちがうの、これは誤解なんです!」

「……えっと……?」

「わたしは山岸由花子。ぶどうヶ丘高校の1年生で千帆さんとは小学校からの友達なの。家が近くだからよく知っているのよ」

「なるほど。初めまして、山岸先輩。僕は」

「汐華初流乃君よね?康一君とガラの悪い不良たちと一緒にカフェにいたり一緒に登下校したりしているのをよく見かけるから知っているわ」

「……ええ、よくぞ存知で」

「それにしても千帆さんの彼氏と同じ施設の育ちで幼い頃からのお友達だからか、雰囲気がよく似ているわね。これは千帆さんの好みにも

当てはまる…… というわけか。千帆さんたらひどいのね。よりによってこんな近くで浮気しなくってもいいのに」

「だから、誤解よ由花子さん！」

「ほんとうに？」

「ほんとうにほんとうに！」

「それはほんとうですよ、山岸先輩。双葉は4年前に不良に絡まれたとき助けてくれた少年が琢馬だったらいいのにと考えていて、天体観測に出かけてたアリバイがある僕達に聞いているんだ」

「あのナイフの少年？」

「そう」

「なるほどね……」

山岸由花子はニッコリと笑う。双葉の頬が紅葉するような美人だ。

「良かったわね、千帆さん。あなたの恋が上手くいくよう祈っているわ」

「ありがとう、由花子さん…… その、頑張ってるね」

瞬き数回、山岸由花子は嬉しそうに笑った。

「それじゃあごきげんよう」

「由花子さんね、好きな人に告白するんですって。頑張ってるんだあ」

その向かう先を見ていた僕はしばし固まる。そこには落ち着かない様子ですつと挙動不審な広瀬康一先輩がいたからである。

大変だな、と僕は思った。山岸由花子が広瀬康一に向けるのは、あの意味で蓮見琢馬という人間が双葉千帆に向けるものとよく似ていることを僕は知っているからだ。

僕は今、1950年アメリカ合衆国アリゾナ州の砂漠でFBIだか

C I A だか K G B だかに捕らえられ、西ドイツへと移送中に溶けてしまった火星人の気分だった。あの誰もが一度は見た事のある小人宇宙人がトレンチコートを着た男二人組に捕獲された写真の宇宙人だ。校門をくぐるなり、待ち伏せしていた180センチメートル越えの仗助先輩と億泰先輩にいきなり拉致された僕はまさにそんな感じだった。

終始ニヤニヤしていた2人に引きずられるようにして連行された先はいつものカフェ。コンビニが近いから週刊少年誌を読み回したり雑談したりするにはちょうどいいということでもどうヶ丘高校、あるいは中学の生徒たちの憩いの場になっていた。

訳の分からないまま大衆の目に晒されていた僕は非難の眼差しを仗助先輩に向けるのだ。まあまあ拗ねるなよと見当違いの宥めに入るもんだから余計にわからない。一体なんなんだ。

「なんだってウチの高校から出てきたんだよ、ジオルノくウウウン」

「なんでって用があったからに決まってるじゃあないですか」

「だーかーらア！なんの用でだよ、水くせえな！俺たちの仲だろー！コソコソすんなよー！」

「せっかく会いに行つたのに会えなかったのは同情してやるからさ、な？な？話してくれよ！」

「なんだって君たちがそんなに出歯亀したがるのかはわからないけれど、モデルをしていたんですよ。美術室でズウーツとポーズを決めたまま微動だにしないだけの退屈なアルバイト。林先生に頼まれたんですよ」

「うげげッ…… よりによって林先生かよオ……」

「隣のクラスの双葉千帆の次は林先生かよ！なんだって俺の周りには女の子がよって来るやつばっかなんだよチツクショーツツツ!!康一もジオルノも最近付き合いいわりいと思つたらこれだし、そこから歩いても仗助くん仗助くんばっかだしたまに声掛けられても仗助くんに渡してくれだしよオオオ!!」

謎の雄叫びを男泣きしながら放った億泰先輩はそのまま走って行ってしまふ。どうやら適当な飲み物や食べものを持ってきてくれ

るつもりのようなだ。後で割り勘などいいながらも名前を聞いただけで嫌そうに顔を顰めたのは仗助先輩だ。

「あの先生苦手なんだよ……俺……だってジロジロみた上から目線で美しくないってキレ始めるんだぜえ……この頭が気に入らないってよオ……」

これがなければ完璧なのに、と自慢のリーゼントをコツコツ叩かれたというのだ。普通ならここまで馬鹿にされたらぶん殴るところだが、ペアを組んだクラスメイトに髪型が描きにくいと言われてかつとなり殴ってしまったって叱られているところだった。

逃げ出したら単位はやらない、クラスメイトと仲直りして作品を完成するまでは居残りだぞと言われてしまい、ぐぬぬとなったようだ。なんとか課題を終わらせるまで美術部員でもないのに居座るのは居心地悪くてたまらなかつたらしい。2年生になったら絶対に選択科目から美術は外すんだと仗助先輩は愚痴り出した。

「言われてみりや鼻肩するやな先生だよなア……イケメンか彫りが深い男が好きだったみたいだぜ……」

しみじみと僕を見て仗助はいうのだ。

「なるほど、ジヨルノは林先生の好みに合致するな」

「うれしくありませんよ。林先生は僕がこの世界でいちばん嫌いな目をして僕を見てくるんだ」

「そんなに嫌なら行かなきゃいいじゃあねえか、変なやつだなあ」

「何を言っているんです、仗助先輩。今の時期に接触してきた人間なんだ、警戒するに越したことはないでしょう」

「そりやそーだけだよ……まっ、無理すんなよな」

「はい。そういうわけで今日は疲れているんだ。僕はこれで……」

「まあまあ待って待って待ってば、ジヨルノ。よーし、それじゃあ本題にはいろうじゃあねーか」

ガシツと掴まれた僕は無理やり傍にすわらされる。

「うーし持ってきたぜえー」

億泰先輩が3人分のジュースとジャンクフードをもってくる。ほらよ割り勘など当たり前のようにレシートを突きつけられて、しぶし

ぶ財布からきつちり小銭を億泰先輩に渡した。

「さあ、こないだケーキ屋でなに話してたのかとか、どうやってお近付きになったのか教えてもらおうじゃあねえか」

「なんの話ですか？」

「だーかーらー！なんて隠すんだよジヨルノツ!!」

「見てたんだよ！2人で帰ってたなら、たまたま、なあ？」

「そうそう、バツチリ見ちゃったんだよ！くっそー、こんなにしらばっくれるなら盗聴器と双眼鏡を用意すべきだった！おめーも隅に置けないなあ！」

2人はどうやら双葉と僕を見ていたらしかった。

「会話を聞いた訳でもないのによくそこまで盛り上がれますね、億泰先輩も仗助先輩も」

「そーいうお前は枯れすぎなんだよススキかよ」

なぜか頭を小突かれる。解せない。

箸が転がるのを見ても笑い出す年齢の傷つきやすい年頃な自覚はあるが、僕達はそれどころじゃないはずだ。体も心も大人の考えに変わっていく。

人生で一番多感なときで異性を識ればすぐにもスタンドみたい糸を掴まれそうな危なっかしい年齢なんだから、余計に気をつけなきゃいけないんじゃないのか。少女と女との谷間の空に風船のように浮かんでいる年齢の子達がたくさんいるのはわかっているがそれだけだった。

「ジヨルノ、お前さ、時々不倶戴天の敵みたいな反応するよなあ……まあ気持ちはわかるけど……肩の力抜こうぜ。じゃねーといつかぺしちゃんこに潰れちまうぞ」

僕は返答を拒否した。物事をひねくれた視点で眺める思春期の少年らしい前途に変化を望む若者の心理とでもいいたいのだろう。

もう14歳だと焦る気持ちと、まだ14歳だと安心する気持ちが交差していると。3年後にはDIOを殺した空条さんと同じ歳になるというのになにができるんだろうかという苛立たしき。標本に針で

止められた昆虫のあがきにも似ているそれをみすかされているように、僕はますます面白くないのだ。

僕の手は動く、足も動く、スタンドだって動かせる。動かしかたなんかわかってないのに、色々なところが動かせる。僕はいつのまにか知らない間にそういう世界のなかにあつて、僕の知らないところでどンドンどンドン変わっていく。こんな変わっていくことをどうでもいいことやとも思いたい、大人になるのは厭なこと、それでも気分が暗くなる。

胸の苦しさがうつとうしくて声を出す気にもなれず、僕は話を聞いている振りをして口だけ動かしながら、早く終わらないかなあと思っていた。魚のように口をパクパクとさせていると、自分が酸素のない水槽の中を沈んで行くような気持ちになった。

「僕の友達にどう告白したらいいか迷っていると相談されただけですよ」

「マジで？」

「ほら、覚えていませんか、仗助先輩。コンビニ強盗に巻き込まれる前、僕に声掛けてきた……」

「あー！もしかしてあの子か！どっかで見たことあると思ってたんだよー！」

「両片思い状態ですから、あの時と同じように聞く相手を間違ってるだろうっていったんですよ」

「おー！まじかあー！甘酸っぱいなあ!!」

本来の意味での青い春とは程遠いけれど、とは言わなかった。

私の絵の特徴の一つはゴールド、つまりは金色、これをたくさんたくさん使うことなの、と林先生はいった。ここ二、三日はクロツキー

ばかりだったけれど、ようやく構図が決まったのかひたすら同じポーズを取らされている僕がいる。

形兆先輩を殺害した犯人から差し向けられる刺客たちを考えれば警戒するに越したことはない。だから断らず足繁く通っていた僕からみる限りでは特別な手法では全然なくて、誰でもやってるありふれた描き方なように思う。

日本の技術を海外に喧伝する番組を見たことがあるのだが、世の中には純金箔を板にびっちり隙間なく敷き詰め、その上に描画するという恐ろしく贅を尽くした絵を書く画家もいるらしい。原価600万円だという話だからそういうのを「次元が違う」と言うとするなら、林先生は普通の絵描きだ。使っている画材は、フツーにそこら辺で手に入るものばかりだ。

一口に「金」といっても、案外いろんな色があると僕はしつた。色味は似てる。オレンジっぽく見えるけど、実際は、パツと見て違う程オレンジではなかったり。水で薄くのぼして、ふわっと、広範囲に金をかける…という感じだったり。

一番綺麗に色が出るものを林先生はいつも探していた。濃くガツンと入れたい時は墨に金色を混ぜたものを使っていた。粘りがあつて、さーつと引くと筆の掠れ具合とかもいい感じなかなか複雑ない色が出ているようだった。

転がっている絵の具はメーカーが全て違うからいろいろ金がある。言葉も違うから海外にわざわざ買いにいっているのかもしれない。

「私ね、美大で基本を学んだんですよ。次の舞台に選んだのが、美の都イタリア。街を歩けば美しい光景があたりまえのように広がり、人が息づく街。フィレンツェのアカデミア美術館に通いつめるための留学だったの。信じられないくらい早く終わる楽しい毎日だったわ」

絵から1度も目を離さないで林先生はいうのだ。当初は3年くらいで帰国しようとしていたフランス留学。ある画家との出会いにより刺激的な修行生活に変化した。彼はとにかく美しさ第一主義。納得いくモノを作るまでは夜中になろうがお構いなし。朝から深夜ま

で絵に没頭する理想の画家だった。

面積でいったらとても小さな都市フィレンツェ。でもこの街には沢山の分野で天才と評される人間がいつぱいいた。彼らがいる同時代に生まれた事を幸運に思いつつ、いつしか彼らと同じ土俵でという欲求が芽生え始めた。

「それだけじゃ食べていけないからこうして先生をやっているわけなんだけど。ねえ、汐華くん。君、ミケランジェロのダビデ像に似てるっていわれたことない？」

「ありますよ、たくさん。美術室にある石像だって」

「あだ名がGIORNO、だものね。お日様っていい名前じゃない」

「ボンジョルノって高確率でからかわれますけど」

「じゃあ詳しい？」

「もちろん」

僕はためいきだ。

ダビデは、1504年、ミケランジェロが29歳の時にフィレンツェのシンボルとなる像として依頼されて造られた彫刻だ。ダビデをモチーフにした彫刻は他にもあるがドナテロやヴェロッキオの「ダビデ」が剣を構えて勝利のポーズをとっているのに対し、ミケランジェロの「ダビデ」は「ゴリアテ」という巨人を目前に構えている彼の不安と緊張を表しているからだと考えられている。

ミケランジェロの「ダビデ」が造られた背景には、フィレンツェの独立国家としての歩みの歴史がある。

「豪華王」と呼ばれたロレンツォ・デイ・メデイチがフィレンツェを支配したルネサンス期は、イタリア国内でヴェネツィア、ミラノ・ナポリ、国外ではフランスとの利害関係によるいさかいが日常茶飯事。

そんなとき、ロレンツォは平和と文化のために全財産をもなげうつ覚悟で積極的に外交していた。ロレンツォに高く評価されていたミケランジェロは当時10代後半。ロレンツォの死を悼み、木彫りのキリスト像を製作したと言われている。

フィレンツェの主は代替わりし、芸術に全く興味を示さないピエロ・デイ・メデイチになった。彼がミケランジェロに命じた仕事は「庭

に雪だるまを造らせること」だけだったというので、どんだけ豪華な雪だるまだ。

その後、フランス軍によりフィレンツェからピエロは追い出されてしまい、厳格な修道院長サヴォナローラが市民の支持によってフィレンツェの新たな王になる。

ちなみに。このときミケランジェロはボローニャに逃げている。メデイチ家の失墜とともに、彼の父も職を失い、ミケランジェロは家族のためにいくつか作品を制作した。

間もなくして、ルネサンスの熱狂からサヴォナローラの厳格な執政に耐えられなくなった市民たちは彼を執政者の座から引き摺り下ろして処刑する。フィレンツェに、真の意味での民主主義国家の風が吹いた。

ミケランジェロがダビデ像の依頼を受けたのは、まさにそんな時。めくるめく執政者の変遷、激動の時代に、ダビデ像は「自由」と「解放」のシンボルとなった。

「ちなみに調べるまで気付きませんでした。瞳の瞳孔がハート形に彫られているそうですね」

「じゃあ君の瞳孔もハート形にしたほうがいいかしら」
「やめてください」

僕は即答した。

「君って私の初恋の人に似ているのよね」

その言葉に体が凍りついた。

「動かないで頂戴、今、顔を書き込んでいるの」

「……」

「ほんとにそっくりだね、ダビデ像に」

「…… え？」

「色々噂になっっているようだけど、私は人間に興味はないから安心してちょうだい。ピグマリオンコンプレックスって聞いたことないかしらっ。」

「ぴぐ……？」

「心のない対象である人形を愛するディスコミュニケーションの一

種」

ギリシヤ神話には、キュプロスの王であるピュグマリオンが自ら彫り上げた象牙の人形を溺愛し、彼は人形の命をアフロディテからもらうという逸話が語源とされている。

しかし、人形を溺愛した別のとある王は「私がどんなに望もうと何も与えてはくれないからこそ、私は彼女を愛しているのだよ」と語り、自分はピュグマリオンとは異なることを示唆した。現在、人形が人間になるという童話を信じている層は少ないと推測されるため、後者に属する類型が一般的とされる。

古来より、兵馬俑や古墳などで見られるように人間と一緒に埋葬されたケースや、無病息災を願って人形を川に流す風習、そして愛玩用などとして人形を人間の身代わりとして扱う習慣があった。

これらの人形が作られる過程で「自分自身の姿」や「理想像」を投影、美化しながら製作する職人も多く、こうした中で人形に対する感情移入が高じて、人形そのものに愛情を抱くようになるケースを指すようになったというのが大筋の見方である。

また、恋愛感情を抱きながらも、理想と現実とのギャップ、「意志を持ち、相手を裏切ることもある」人間に対する幻滅などから、恋愛対象とする相手の姿（理想像）を「意思のない、理想のフォルムを持つ」人形に投影・再現して擬似的な恋愛感情を継続させようとする傾向もこのピュグマリオンニズムの一種と見られている。

現代においても、ボークスのスーパードルフィシリーズなどに代表されるカスタマイズドール愛好家たちの間でも見られるように、人形に「理想像」を求めるユーザーも多く、これらの人形に対して強い愛情を抱きながら感情移入する傾向も、このピュグマリオンニズムに共通・類似する部分が多く見られる。

「ただ本家のピュグマリオンは人形に魂がやどっちゃうのよね、失礼しちゃうわ。人形は人形だからいいのよ」

「……そうですか」

「そうそう、そのまま止まってちょうだい。その緊張感と不安がこの

「上ないくらい理想的だわ」

「……まさか噂を放置しているのはそのため？」

「そうだけどそれがなにか？」

「……いや、なんでもありません」

ブラックウオーター・パーク

空条さんが宿泊しているホテルには、プライベートビーチがある。半島の先端近く、半島の南の沖にあり、同じくらいの大サイズの島として、北西近くに田代島、東にやや離れて金華山がある。

夏には多くの海水浴客で賑わう海水浴場とは違い、日露史上初の交易地として知られる風光明媚な自然を満喫できる温暖な海岸だ。

今日に到るまで大きな開発も行われず、ありのままの雄大な自然がそのまま残っている。東北地方でも有数の透明度を誇る。

至る所に常緑樹のアオキ、トベラ、タブノキなどの常緑樹や棕櫚が自生していることから、南方系の穏やかな雰囲気醸し出している。渡り鳥や海鳥などの多種類の野鳥を観察できるフィールドとしても知名度は非常に高く、多くの愛鳥家も訪れているようだ。

気候は、金華山沖での黒潮海流の影響を受け、温暖少雨で冬季間の降雪もほとんどなく、1年を通じ穏やかで過ごしやすい。

そんな場所に僕は呼び出されていた。

「……『汐華初流乃』さんですね……わたしはスピードワゴン財団の者です」

提示された身分証を眺めみた僕は黒づくめの男を見た。

「なんともアナログな方法ですが、レッド・ホット・チリ・ペッパーの特性を把握した空条承太郎様からの指示ですので、なにとぞご了承ください」

「話は仗助から聞いています。相手は遠隔操作型なのにスピードやパワーがスタープラチナに匹敵するとか。現代社会だからこそ脅威となるスタンドですね……盗聴、窃盗、なんでもありだ。しかも電力を得ることで強化されるなんて……」

うむうむと男はうなづく。

「あなたを監視するために潜伏していたDIOの協力者が多数この街に潜んでいます。そのうちの1人であった虹村の息子がスタンドの矢で射抜いた人間を記録した書庫が未明に火事になったのはご存知ですか」

「えっ……億泰先輩は大丈夫なんですか？」

「はい、彼は無事です。……ですが書庫が全焼しまして。原因は漏電による発火の可能性が高いとか」

「……漏電か……レッド・ホット・チリ・ペッパーの仕業にちがいない」

「我々もそう考えている次第です。なので汐華初流乃、あなたに頼みたいことがあります」

「なんです？」

「DIOの協力者の情報を提供していただけませんか？空条承太郎様から独自に調査をしていると聞いていますので」

「……嫌だといったら？」

「あなたに提示できる選択肢は……そうですね。ひとつはスピードワゴン財団の監視下に入る。ふたつは私があなたを拷問し、協力者の情報を得る」

「みつつ、あなたが僕を認めてレッド・ホット・チリ・ペッパーの情報を収集を代行することになる」

「……正気ですか？」

「僕が無駄なことをいうわけがない、これは事実だ」

「……いいでしょう。レッド・ホット・チリ・ペッパーを相手にする上であなたにどこまで出来るのかみせていただきましか」

男が笑った瞬間に気配ががらりと変わる。

見えないものに常に監視されているような圧迫感に、ぶわっと汗が溢れ出すのがわかる。心に不満や孤独感の内部圧が高まる。圧迫感にじわりじわりと押し付けられて息苦しい。

はげ口のない、耐え難い陰鬱な重圧

はげ口のない、耐え難い陰鬱な重圧がずしつと肩に食い込むような錯覚を覚えてしまう。

先程まであった紳士的な雰囲気はどこにもない。そこにあるのは、相当手練なスタンド使いである。

「暗闇を体験したことはありませんか？」

「暗闇？不思議なことを聞きますね。夜のことでしょう？ありますよ、もちろん」

「いんや、違います。そんなもんじゃあない。夜なんてもんじゃあない。社王町の夜は明るすぎる。黒闇を知っていますかな？ただ真っ黒なだけなんですよ。暗闇のようなものすべてが覆われている」

ただのやり取りなはずなのに言葉のひとつひとつが見えない矢のように体のそこに突き刺さる。スタンドは精神の力だ。それゆえに質量を持たない心の状態が肉体に様々な影響を与える。何か自分が理由の分らない詰問でも受けているように窮屈を感じるのはきのせいではないのだ。

眼の前の現実襲って来た無形の大磐石のような圧迫になおのと恐怖を覚えて震え上がる人間がどれだけいたんだろうか。

だがそれも。

(ドリーム・シアターで対峙したときのDIOには遠く及ばないツ……あれは神を信じる人達から生きる術を学んできた僕には相性が悪過ぎるんだ……だがこいつは違う……こいつはただの、人間だ！)

僕は目を見開いた。スピードワゴン財団の使者として空条さんと直接やり取りする人間だ。ただものじゃないとは思っていたが、どうやら直感は当たっているらしかった。

「あなたもスタンド使いなんですな」

「ただの人間が危険なスタンド使いが潜むこの町に派遣されるわけがないじゃありませんか。ねえ、『汐華初流乃』さん」

「そう、ですね」

僕は慎重に距離をとる。先に動いたのは男だった。

「ブラックウオーター・パーク」

男が一言告げると、人ひとりがすっぽり入ってしまいそうな大きさの球体が出現した。黒い水で中を満たされているようで、ガラスのような球体は浮遊しながら不規則な形で輝いた。

中央には太陽のような彫刻が施され、なにやら昔の文字が刻まれているのがわかる。

「ゴールド・エクスペリエンスッ!!」

僕はスタンドを発動し、いつでも対応できるようスタンバイする。なんのスタンドだろうか。みるからにパワータイプではなさそうだ。水を操るスタンドだろうか？アクアネックレスと同種？いや、男は拷問すると言った。告白させるといいかげんだった。つまりはそれが本職なんだろう。

窒息させる？それとも水攻め？いずれにしても射程範囲や持続時間が長くて致死性はないとみた。それなら僕がとる行動は……！

足元から蔦を発生させ、一気に男の懐に飛び込みラッシュをかけようとしたが球体が反応して横入りしてくる。どうやら球体そのものに能力はないようで本体は中身の黒い液体のようだ。できたら中身を出さないように処分したいが……。

僕はゴールド・エクスペリエンスと距離をとり、最近のびた射程ギリギリで能力を発動させる。まずはあの球体の中にあるのが物質かどうか知らなくてはならない。球体自体が物質で、触れることで発動するタイプの能力ならばこの瞬間に僕の勝ちが確定する。だが僕のところによつてきたこの男が、ゴールド・エクスペリエンスの能力を知らないまま勝負に応じるとは思えない。

なんとか球体を回避して男に奇襲をかけたいが反応が僕より早く突破できない。

そのうちこちらにぶつかってこようとする。ゴールド・エクスペリエンスが回避しようと触れた瞬間、ぱきん、とかわいた音が響き渡り、中の液体が溢れ出した。

「さあ、暗闇を知れ。『汐華初流乃』。お前はこの瞬間太陽から追放されたのだ」

「ッ!？」

目の前が真っ暗になる。咄嗟にいきをとめるが、黒い液体の中に閉じ込められているわけではなさそうだ。まるで濃霧である。泡はでてこない。呼吸はできるようだ。僕は慎重にあたりを見渡した。

なにもない。いや、なにかあるのはわかるが見えない。みえないのだ、なにも。男はさつきなんといった？『太陽から追放された』と言

わなかったか!?

僕は汗が止まらなくなるのがわかる。まさかこのスタンドはあの黒い水を浴びてしまうと太陽を知覚することができなくなるスタンドなのだろうか。現に今の僕はもはや太陽を見ることはおろか、なにも見ることが出来ない。光すら届かない世界に孤独でひとりぼっちである。失明を起こした訳では無いのだ。

「なるほど、これなら致死性はなくても自白剤代わりにはなりますね」
太陽が見えないなら方角を確かめなければならぬ。昼間なのに出現した星空を見上げ、僕は北斗七星を探す。

「ええ、時間が経つにつれてあなたはあらゆる太陽の恩恵を受けられなくなっていくます。低体温症とビタミン欠乏症による様々な弊害がもたらされる」

「まさかそんなに僕を閉じ込める気ですか」

男は笑うのみだ。

「我慢比べといきましょうか。植物は萎れ、発育不全のように見え、動物は、衰弱しているように見えるこの世界でいつまで耐えられるのか。ちなみに最終段階まで耐えた場合は植物または動物に基づいた食品から栄養を得ることができず、数週間後には栄養失調により必ず死亡してしまいますよ」

光が届かない世界で僕以外は平然とものが動くのは変な感じだ。海風、波の音、砂の感触、なにひとつ変わらないのに太陽を奪われただけでここまで寒々とした世界になってしまおうとは。

僕は懸命に考えた。ゴールド・エクスペリエンスにより植物を発生させていつくるかわからない男のカウンターを狙うがいつもより成長速度が遅い。やはり太陽光と温度がないと生命は生きられないのだ。

「なにも見えないのによく避けましたね」

「場数はそれなりに踏んでいるんだ」

「なるほど、それはよいことだ」

足元が冷たい。どうやら浜辺に出てしまったようだ。防戦一方でもいいから考えなくてはならない。思考を放棄した時点で僕の敗北は確定するのだ。

相対性理論により光が地球に届くのはどれくらいだ。地球と太陽の距離は1億4960万km、光の速さは約毎秒30万kmで、光が1年かかってたどり着く距離が1光年だから9兆4600億km。地球と太陽の距離を1光年で割ってみると、0.00001581光年、分になおせば8分19秒。つまり太陽から出た光は約8分後に地球に届くということだ。僕の体が異常に気づくのはそれからだ。

8分後すぐに凍りつくということは無いはずだ、最終的には凍りつきそうだが。

太陽が無くなったことによる潮汐力の変化はありえるが、太陽の潮汐力は元々月の潮汐力の0.45倍。月が無くなった場合に潮の満干がなくなることから想像できるように、地球はむしろ少し静かになると考えた方がいい。

そうか、植物は光合成ができなから急速に酸素濃度が低下していくのか。これは早くしないとどんどん僕が不利になっていくな。

ここで僕は海の風がなくなったことに気がつく。どうやら昼と夜の面の温度差がなくなったことにより、真っ暗な空には風がほとんど無くなった世界。どうやら時間がたつにつれて世界が侵食されていくようだ。

(勝負は一瞬だ、見逃さないようにしなくては)

「さすがですね、もう自分のおかれた状況を把握したとみえる。そう、無駄話に興じているとそれだけ太陽を奪われた環境が悪化していくことになる。今のところ、私のブラックウォーター・パークを突破出来た者はいないんですよ。大抵絶望して出してくれと懇願してくる。あなたはどうぞですか?」

太陽光と繋がりが深い生き物しか地球上には存在しない。直ぐに

死んでしまうのだ。どうしたらいい？なにをすれば状況が打開できる？酸素もなにもかもが僕の能力を制限している。

(このままで終わってたまるか)

僕は前を見据えた。

「なにもしなくても状況は悪化の一途をたどる……あなたになにができるというのか」

足音が聞こえてくる。僕は口元を吊り上げた。

「無駄なあがきはやめたというわけですね、いい心がけだ」

男には僕がそう見えているのだ。自分の信じる勝利が目の前で僕にさしだされる。そう見えている。DIOの息子がブラックホールに飲み込まれるかの如きこのスタンドに屈服するに違いないとそう考えて、笑っている姿が想像出来る。

挑発に乗る訳にはいかない。そんな酸素すら消費するのももったいない。無駄は排除すべきだ。思考回路も、感情も、全てはほんの一瞬を逃さないために！

「——ッ、なんだこれはッ!!」

男は驚きの声を上げた。

「……勝手に僕が戦う意思を放棄したと勘違いしないでくれ……ッ！僕は今まで1度たりとも……やめたことはないッ……！」

我ながら今回の機転は自画自賛していいんじゃないだろうかと思っただ。思った。

「これは……ホタルッ……？いや、違う……一体これは……まさかッ!!」

男は気づく。バシャバシャと跳ね上がる海水にまわりつく幻想的な光を。

プライベートビーチを青く染め、今の時期ちょうど見頃のピークを迎える美しく幻想的な光景が広がっていた。光る海、流星わたる天の川。波頭が青く光るのは光。死に絶えたる寸前にその生命が発光するために起こる幻想的な海の上をみずがめ座エータ流星群の流れ星が走る。

「ほんの一瞬……ほんの一瞬でいいんだ……それだけで十分なんだ。あなたの場所がわかればそれでいい」

ゴールド・エクスペリエンスが男に迫る。

「グアアアツ——！」

「あなたを気絶させることができればそれでこの暗闇は終わりを迎えるんだ」

青く碎ける波をゆっくりと僕は見つめる。波は刻一刻と変化を続け、2度とない無限の表情を見せてくれた。この豊かな波の姿を、一筋の光として浮かび上がらせる。

碎ける白波の可視化ほどの世の終わりにも似た美しさはない。闇に紛れ静かにやってくる波が碎けるとき、気持ちのよい音とともに白波が青い陰影と共に現れる。常に形を変えるその波を、心地よく照らし出す。常に移ろう自然光のように、一定ではない光の効果を生み出すことができた。

「本来、この光景がみられるのは南の島で、ピークは日没時の夕景だそうですよ。こんなちやちなものではなく、自然を利用しながらもダイナミックで、飽きることはない美しい波の光だそうです」

その中にぼんやりと黒い人型が浮かんでいる。そこを中心に世界が解け始める。

「……ッ！」

あまりに眩しくて僕は目を手でおおった。

菜の花の黄色の帯の向こうに、青い布をハラリと広げたようなのかなプライベートビーチがある。粘っこいような春の海が薄緑にひろがる中、僕は目を覚ました。どうやら海岸からホテルの敷地内の庭園に運ばれたようである。眠たげな甘さを含んだ四月の海をぼんや

りと眺めながら、僕はあたりを見渡した。

「……おい、大丈夫か」

根本の激情的な性格は変わらないが、ワイルドな風貌ながら知性的で物静かな態度のままこちらを見下ろす男が見えた。

形兆先輩の記録では不良だった当時に比べると言動は落ち着いて敬語も使っているほか、一般教養を身につけており、歳相応の社会人として更生しているらしい。だが何度見てもその面影を見出すことはできない。そこには知的な男がいるだけだ。

仗助先輩たちには豊富な知識や実戦経験などから一目置かれていたほか、敵からも最大級に警戒されている。また、スタープラチナの強すぎる能力が知れ渡っていることから、間違いなく彼が1番頼りになる大人だろう。僕にとっても。だから僕はスピードワゴン財団職員の呼び出しに応じたのだ。この男からの依頼だと聞いていたから。「なにがあった。プライベートビーチのど真ん中で倒れていたが……」

一瞬わけがわからなくてぽかんとしてしまった僕は悪くない。珍しいものを見るかのように空条さんは眉を寄せた。

「なんですって？今、なんて言いました？そんな他人行儀な。僕はスピードワゴン財団の職員から呼び出されてここに来たんですよ。あなたからの指示だって」

「……なに？」

緑の目が険しくなる。

「僕がDIOについて調べるために開拓した人脈をよこせといってきたので断ったんですよ。そしたら値するかどうか調べさせると言ってきた」

「……そいつはスタンド使いか」

「はい、ブラックウオーター・パークという太陽から追放する強力なスタンドだった。さすがはスピードワゴン財団ですね。伝達役にまでそんな使い手を使うだなんて……空条さん？」

「やれやれだぜ……レッド・ホット・チリ・ペッパー以外にも敵がいるってわけか」

「？」

「ブラックウオーター・パークなんてスタンド使いはいないぜ」

「なんですって？身分証を僕はたしかに見たんですよ？まさか偽物……？」

「どうやらそうらしいな。ちなみに本物の伝達役はこの男だ」

「……」

冷や汗が溢れ出すのがわかる。そこには似ても似つかない男が立っていたのだ。

「まさかスピードワゴン財団の関係者まで疑わなきやいけなくなるとは思わなかったぜ。悪いな、ジョルノ」

「いえ、僕がうかつだった」

「それは違う。やつはよりによつて『空条承太郎』の名前を出しやがった。俺を信用させてみるとジョルノに言外に言い放った俺の名前をだ。お前が応じるのは当然だろう、お前はそういうやつだということは一番信用しているからな」

「空条さん……」

空条さんは硬い表情でいうのだ。

悪魔の背に乗っているように、いつ振り落とされるかわからない毎日を過ごしている僕に、嘘と虚飾にまみれた口のうまい男が『空条承太郎』がせつせと培ってきた信用を一気に地に落としたのだ。奈落の底までに墜落したとわかっていい。

信用していいかわからない灰色の人間が地道が必死に否定するが、その慌てた仕草は、信用できる人間の作法にも見えないに違いない。それだけ一度失った信用を取り戻すのは大変なのだ。

「ジョルノ…… てめーにはジョナサン・ジョースターのような人の道か、DIOのような魔の道か、ふたつの道があると俺は考えていた。どうやらどちらとも違う道を模索しているようだな」

「そんな大層なもんじゃあないですよ」

「まあ聞け。そのために俺に対して信用の殻を固く閉じていたのを開き、人を信じる能力がひび割れてしまっているのを必死で修復しようとしているのを俺は見てきた。それを無下にするやつが存在するこ

とに対して、俺は怒りを感じている」

「……………空条さん、あんた……………」

「何が目的かはわからねえ以上、警戒するに越したことはない。だからジョルノ、俺からの連絡以外には応じなくてもいいぜ」

「わかりました」

僕は頷いたのだった。

「明後日、仗助たちと××にこい。電線のあるところでの会話および電話や電報も危険だからな、詳しくはそこで説明する」

スタンド名 ブラックウオーター・パーク

本体 スピードワゴン財団職員？

破壊力 — E

スピード — A

射程距離 — B

持続力 — A

精密動作性 — C

成長性 — C

能力：人ひとりがすっぽり入ってしまいそうな大きさの球体の形をしたスタンド。この球体ではなく中の黒い液体がスタンドである。球体を破壊されるまでは対象を自動追尾し、破壊されたあとは対象を太陽が存在しない空間に閉じ込めることができる。

視界を奪う、体温を奪うなど、太陽の恩恵により受けられるはずの全てを奪う。数ヶ月後には低体温症とビタミン欠乏症による栄養失調で衰弱死させる。

拷問の手段として最適とのことだが、承太郎曰くそのようなスタンド使いはスピードワゴン財団には存在しないとのことである。

レッド・ホット・チリ・ペッパー

カワサキ・ゼファーとは、日本が誇る伝説的なオートバイシリーズである。露伴先生たちも持っているから人気なのだろう。僕はこのオートバイに乗せてもらって億泰先輩に連れてきてもらった。

社王町から少し外れた、海が望める寂れた野原に僕達は集合する手はずになっていた。自転車のそばで座り込んでいた康一先輩がすでに到着していたらしい。僕と億泰先輩に気づいて、こつちだよと手を振ってくれた。遠くから仗助先輩が歩いてくるのがわかる。タクシーでも使ったんだらうか。

「ありがとうございます、億泰先輩」

僕からヘルメットを受け取った億泰先輩は2つ分を所定の位置に戻し始める。僕はすっかり解れかかっている三つ編みを一旦解き、緑のヘアゴムでいつものように結び上げた。だいぶん伸びてきたから落ち着いたら美容室に行きたいものである。

「仗助のやつ、なんだよいきなり話つてよオー。せつかくだから康一とジョルノをトニオさんと共に連れてつてやりたかったのに、ダメだっていうし……」

ぶつぶつ愚痴っている億泰先輩だが、仗助先輩の到着にはまだ時間がかかりそうなので、僕は暇つぶしも兼ねて話を振った。ゼファーに体を預けながら僕は聞くのだ。

「昨日は災難でしたね、億泰先輩。話は聞きましたよ、ボヤ騒ぎ。大丈夫でしたか？」

「えっ、億泰くんの家火事だったの?! 大丈夫?」

「そーなんだよ、聞いてくれ二人とも! なんでもコンセントがタコ足回線な上にホコリがつもりまくって、そこから火が出ちゃったらしいんだよ! あの部屋兄貴に入るなって言われてたからなんとなくそのまんまにしていたんだけどよオ…… はああア…… ついてねえ……」

ガツクリと肩を落とす億泰先輩を怪我がなくてよかったよ、と康一先輩が励ます。だが几帳面ゆえに掃除をかかさなかった形兆先輩が

いなくなり、まともに学校に通い始めた億泰先輩だけではあんなに広い屋敷を以前のようには管理できる訳もなく、仕方ないとはいえ自分のせいだと落ち込んでいるようだ。

「気を落とさないでくださいよ、億泰先輩。これみて元気だしてください」

「んん……？あつ、それは！」

「まさか僕が借りてた分がまるまる焼失を免れるとは思いませんでしたが、不幸中の幸いでしたね」

「そーだ！そーだよ、そーだったなあ！おめーに貸してたんだよな、これ!!すっかり忘れてたぜ、ありがとよジョルノ！」

「気にしないでくださいよ、もともとは億泰先輩のじゃあないですか」

嬉しそうにカバンにしまい込んだ億泰先輩は、あ、と気づいたように声を上げるのだ。

「そーいやおめーに貸したヤツ、コピーとってたよなあ？今度見せてくれよ」

「そういえばそうですね……まさかこんな形で役にたつとは思いませんでしたが……よかった」

「ほんとにな……」

「よくわかんないけど形兆先輩の日記かなんかが残ったってこと？全部焼けちゃわなくてよかったね、億泰くん」

「おう」

「それはそうと億泰先輩、形兆先輩の書庫にあったスタンドの矢でいった人間のリスト、読んだことありますか？」

「リストなあ……兄貴が書いてたのは見てんだけどよオ……覚えてねえ……こんなことなら読んどくんだったぜ」

今にも泣きそうな顔でわらう億泰先輩をみて、僕はドリーム・シアターの対象にするのは難しいなと思った。1度でも目にしてさえいれば人間の脳は勝手に知識とエピソード記憶を結びつけて頭の中に蓄えていくが、トリガーとなりうる虹村形兆に対する感情が強すぎる。

想いが色濃く反映されるドリーム・シアターは、時として登場人物

が対象に対して喋りかけてくるのだと支配人はいつていたはずだ。億泰先輩の感情がノイズとなって肝心のエピソード記憶が上映出来そうにない。

ドリーム・シアターでスタンドの矢にいられた人間をあらかたリストアップできれば、相手が組織じゃない以上人海戦術が使えたというのに。

(レッド・ホット・チリ・ペッパーの使い手はこれ以上ないほどに慎重だ。僕達のこれまでを逐一監視していたのだとしたら、ここにいる全員のスタンドを把握しててもおかしくはない。さてどうするか)

ゼファーを撫でながら僕は考える。

「ジョルノ、いくら羨ましそうに眺めたってオートバイはやらねーぞ」
「わかっていきますよ、わかってます。いくら羨ましくても僕はまだ14だから免許すら取れないってことくらい…… 残念だけど…… 本当に残念だけど」

「どんだけ残念なの、ジョルノくん」

「康一先輩だつていい自転車に乗ってるじゃあないですか。僕はそんなお金ないんだ。羨ましくて悪かったですね」

「あはは…… 自慢みたいで悪いけどほんとにいい自転車なんだア…… バス通が嫌になるくらいにね！」

「そう拗ねんなよオ、ジョルノッ！ また後ろに乗つけてやるからな！ な！」

「約束ですよ、億泰先輩」

「おう、任しとけ！」

「嬉しいですけど頭ぐしやぐしやになりますからやめてください。セツトが崩れるじゃあないか」

「あはは！ 後輩は大人しく先輩のいうこと聞いとけよ！」

「よう、盛り上がってんなあ、お前ら。どーしたんだよ？」

「あ、仗助くん！」

「よう、仗助いいところに来たぜ！ ジョルノがさあ……」

「だから離してください、って言って……！」

「なんだなんだ楽しそうだな、お前ら！ 俺も混ぜろよ！」

「仗助先輩まで……！」

アンタはこれからやること空条さんと打ち合わせ済のはずでしょうが！といいかけた言葉を飲み込んで恨みがましく仗助先輩を見上げるとウインクされた。

「そういうジョルノは大丈夫だったのかよ？なんかスピードワゴン財団のなりすましに襲われたんだろ？」

「えっ、そうなのジョルノくん!？」

「おいおいおい、大丈夫かあ？俺に氣イ遣ってる場合かよ！おめーのがよっぽど危ねー目にあつてんじゃねーか！」

「一昨日なんだろ？大丈夫かよ」

「ああ、はい。軽度の低体温症になりましたが今は回復していますから安心してください。ただ、非常に凶悪なスタンドでした。今から教えるので注意してくださいね」

僕は注意喚起も兼ねて情報共有を行う。とはいえ、億泰先輩なら太陽なんて関係ないし、仗助先輩は周りを治せばいいし、康一先輩にいたっては光を連想する擬音を地面に貼り付ければいいのだから僕ほど苦戦はしないだろう。スタンドは相性が大きいなど改めて思うのだった。

「で、なんでさっきから億泰のバイクに我が物顔でよっかかってんだ？ジョルノのやつ」

「うらやましいんだってよー！かつこいいもんなあ、ゼファーー！」

「あー…… 気持ちはわかるぜ、ジョルノ」

「…… うるさい、大型二輪の免許アンタも持つてるくせに」

「あつはつはつは！拗ねるな拗ねるないこだから！な！」

「だからやめてくださいよ、アンタら！気持ち悪いなあ！」

たまらず声を上げた僕に仗助先輩たちが大笑いする。なにしてんだ、お前ら、と呆れ顔の空条さんがきたものだから僕はため息をついたのだった。なんてタイミングで来るんだこの人は……！

レッド・ホット・チリ・ペッパーの本体を特定出来るスタンド使いの来日時間や日付がバレてしまった。バイクに潜んでいたのは把握していたので、ただちに僕は行動に移す。

「ゴールド・エクスペリエンスッ！」

ゼファアーが一瞬にしてカエルになる。重力に従い、レッド・ホット・チリ・ペッパーが落ち、カエルは感電して丸焦げになった。僕が生み出した生命にはカウンターの能力が付与される。黒焦げになったレッド・ホット・チリ・ペッパーはうめきをあげる。

「やはり電気は蓄電効果があるみたいですね…… ですが火傷はタダじゃないはずだ」

電気を操るなんてとんでもなくシンプルな以上、感電によっておこる傷害のことでこの街で一番詳しいのは目の前のスタンド使いのはずだ。なにせ能力が能力だ。電気が生体内を流れることによつて生じる障害、二次的な障害も完全に熟知しているはず。

アクアネックレスのように本体と感覚をある程度共有しているならば、なかなかの一撃になつたはずだ。

だが僕の想像を見透かすようなタイミングでレッド・ホット・チリ・ペッパーはにやりと笑うのだ。

カエルが焼け焦げて、ゼファアーもどこか焦げ臭い。

「残念だったなア！俺はアクアネックレスと違つてダメージにフィードバックがあつても電気つていう回復手段があるんだよオツ!!」

「なんだって!?!」

思わず僕は目を丸くした。遠隔操作型にもかかわらず本体にダメージがあつても回復できる上にパワー型のスタンドと同じくらいスペックがあるのか、このスタンドは！なんて思い込みの強さだ！ここまでくると一種の才能を感じてしまう。

「カエルさえ殺しまえばゼファアーは俺のもんだッ！」

「ならば今ここでまた生命を生み出すだけだッ！これ以上の戦力強化はさせないッ！ゴールド・エクスペリエンスッ!!」

「グウッ…… やっぱめんどくせえなあ、ジヨルノめ…… !あの野郎…… ジヨルノを倒すから任せたのによッ」

「…… なんですって？まさかあの偽物を寄越したのはアンタかッ！」

「知らねえなあ…… 知らねえよ…… 俺はただジヨルノを倒してくれるツツーからお前について教えただけだぜ…… どの誰かなんて俺には関係ないからなアッ！」

「ゼファアがただの生き物になった以上、電気はもう調達できないはずだッ！さあ！諦めろ！」

「そうだぜ…… ここからは俺が相手だからな…… 兄貴の無念をきつちりと晴らしてやるからよオ！」

腹立たしさの中からかきむしりたいほどの怒りが湧き上がっているのが分かる。僕はそのままゼファアの生き物をつれてその場から離れる。

「ありがとよ、ジヨルノ」

億泰先輩は指を鳴らしながらレッド・ホット・チリ・ペッパーに近づいた。両足は地面を蹴って、肩をいからせて、大股で歩いていく。感情が燃え立っているその姿を、僕はただみつめていることしかできなかった。

全身は怒りのために爪の先まで青白くなって、抑えつけても抑えつけてもぶるぶると震え出しそうだったからだ。億泰先輩は襟もとを、力まかせに——極度な怒りをこめた腕で——捻じ切るほど締めた。表情の歪んだ顔からは怒りの涙がほとばしって プチプチ音をたてている。

僕は自分の中に苦痛に似た、灼熱した金棒のような固い一本の憎悪に化していく事が分かった。億泰先輩に感化されたのかもしれない。やり場のない怒りを拳に託すしかないのだ。頭の中が真っ白になって理性を失う癩癩玉と化した億泰先輩が、悠木のせいであるかのように怒鳴った。

億泰先輩にここは任せて、僕は逃走経路になりうる芽をすこしでも潰しておこうと慎重に、警戒しながら距離をとる。まわりには仗助先輩と空条さんが事前に取り決めただけあって、なにもない。電信柱一本ない。せいぜい犬の散歩をしている男が一人、僕達の異様な様子をみて怖気づいたのか遠回りに歩いているくらいだろう。

「アツ……こら、サクラツ！帰ってきなさい！コラツ……サクラ!!」

男が慌てて声を上げる。やつちまったと顔に書いてある。どうやら犬の付けていた首輪がすっぽり外れてこつちに走ってきているようだ。今、レッド・ホット・チリ・ペッパーのせいで尋常じゃないほどの電気が発生しているから、興奮状態にさせるような人間が聞き取れない音でもでているのかもしれない。

犬は黙ったまま僕達の動向を眺めている。僕を見るなり惨めに尻尾を巻いて、土を引掻くようにして必死で逃げて行くような犬だ。

黒い痩せた犬はそこに座って、周りには目もくれず、何かを回顧するみたいにこちらをじつと見つめていた。耳ひとつ動かさなかった。だが前方を見て吠え、しきりに進みたがっている。まるで猟犬のようにじつとこちらをながめながらである。

「なんだ……？」

たまに知る知らない人間が近寄ってきたら、地獄の釜の蓋でも開けたみたいに吠えまくる犬なんだろうか。

犬が狂ったように吠えまわる。ちよつと近づいては神経質そうに甲高く吠える。火がついたように吠えている。うるさいとでもいいたいんだろうか、警告のつもりなんだろうか。どうする？と康一先輩が目配せしてくるがどうしようもないだろう。

自分から近づいておきながら低くうなり、それから何度か吠えた。警告を与えるように短く鋭く吠え、また嵐のように激しく吠えはじめた。

だが空条さんだけは反応が違った。

「おい、気をつけろ！あの犬を近づけるんじやあないツ!!」

「えっ!？」

「ただの犬じゃ……?」

「ただの犬じゃあねエ…… スタンドつてのはな、地球上に存在する全ての生き物ならなんだって出現するんだ!」

僕と仗助先輩は顔を見合わせた。

「アアッ!」

康一先輩が声を上げた。

「ペースメーカーだッ! ペースメーカーだよ、みんな! この犬、足に手術跡がある! あの赤いところはペースメーカーを入れたところで、胸腕が不自然にピクピク動いているから、きつとペースメーカーもちなんだっ!」

動物病院の予防注射にいったときポスターを見た事があると康一先輩は早口でまくしたてる。バレたと感じたのか、いきなりこちらに全速力で走ってきた。やっぱり! と康一先輩は交戦状態の億泰先輩と仗助先輩に注意を促す。

まさかそれ知っていてレッド・ホット・チリ・ペッパーはスタンドの矢をこの犬に打ったのか!?

「ゴールド・エクスペリエンスッ! 犬を近づけちやあダメだっ!!」

あわてて僕は犬が興味を引きそうな小動物を生成して放り投げられる前にもよこまかと逃げてしまう。ダダダダと走ってきた犬はそのまま空条さんのところを駆け抜ける。

「やれやれ…… こいつは本当にただの犬だな…… アイツからいの知能はないらしい」

いつの間にか犬を捕まえている空条さんがいた。狂ったように吠えまくる柴犬、あるいはその雑種は牙をむくが微動だにしない。よかった、と息をはこうとした瞬間、億泰先輩が呻いた。弾かれたようにそちらを見ると、一回り大きな柴犬が億泰先輩に体当たりしたらしく、不意をつかれて転倒したらしい。そこに強烈な電撃が炸裂する。ばちいん、という音がして億泰先輩の腕がだらりと垂れ下がってしまった。

「チツ…… スタンドに自我があるタイプかッ！」

空条さんの腕の中が空っぽだ。犬の足から伸びるリードを伝ってレッド・ホット・チリ・ペッパーは中に入ってしまった。そして柴犬はすさまじい勢いで走り去ってしまった。

「こら、サクラー！サクラー！」

飼い主が追いかけていくのが見える。仗助先輩があわてて億泰先輩の治療に入る。犬はもう浜辺のあたりを走っている。今から追いかけるには……。僕は手の中のカエルを開き、ゴールド・エクスペリエンスを解除すると黒焦げのオートバイが現れた……。これは仗助先輩待ちだな。

すみません、すみません、と180越えの大男3人と学生と金髪に取り囲まれ、壊れたファービーのように繰り返す飼い主。

なにもないところをひたすら殴りつけていたり、いきなりオートバイが黒焦げになったり、訳の分からない大きな音がしたり、血だらけになったり、腕がぐにやぐにやになったりしたら怖いに違いない。

処刑台にたつ冤罪の死刑囚のような顔をしながら、彼はサクラという名前の柴犬がここのところおかしいのだと教えてくれた。

去年12歳になりそれなりの大病をしてペースメーカーを埋め込んだとたん、なりを潜めていた脱走癖が再発したらしい。

しかもこの前の脱走では全身泥だらけになっており、犬小屋をはじめとした狭いところが大嫌いになっているようだ。

「こないだニュースで連続ペット誘拐事件の犯人があの人だったでしょう？森野さん。もしかしたらあいつも誘拐されて生き埋めにされたかもしれないですよ」

なるほど。もしかしたらあたっているのかもしれない。スタンドの矢をもっている以上、僕のゴールド・エクスぺリエンスの生体探知を警戒して新たなスタンド使いとして動物の中に潜んでいてもおかしくはないのだ。

案外ペースメーカーの中に潜んでいたら生き埋めにされかかって助かったものだから、サクラは懐いているのかもしれない。スタンドが犬に見えるのかはわからないが、空条さん曰く犬のスタンド使いはよく知ってるということで僕達は受け入れられたのだった。

「輪番停電てのはどうです？アメリカだとよくあるんでしょう？スピードワゴン財団の力で何とかできませんか？」

それはいわゆる計画停電というやつだ。

「お、いいんじゃないね、それ」

「活動範囲を狭めていくってわけか。面白そうだな」

空条さんは首を振った。

「ストライキも電力不足も日本にはそぐわないな。今からは時間がなさすぎる」

「そうですか……非常電源があるところで待ち伏せしたらいけると思っただけだなあ……」

僕はがっかりした。さすがにスピードワゴン財団もそこまでの権力はないようである。時間があれば可能らしいがさすがにジョセフ・ジョースターさんの到着までを考えたらさすがに時間がなかった。

「やっぱり俺らが探すしかなくねーか？」

「急がなきゃまずいね。どうする？」

「まじかよ……どうやってみつけんだ？この社王町のどこかにいやがる犬をよー」

「それについては心配いらない、と思う。僕のスタンドを使えばいい。サクラの私物をかりればなんとでもなる。問題はどうかやって捕まえるかです。僕は犬を飼ったことがないので全然わからないですよ」

「俺もだぜ」

「俺もねえなあ……」

「ほんとだよ」

わふわふ飛び跳ねながら柴犬が本来の持ち主目掛けて歩き続けている。僕たちは何度目になるかわからない角を曲がった。

レッド・ホット・チリ・ペッパー2

「動物保護センター、シェルター、保健所にも問い合わせてみましたがサクラはいないそうです」

「そっか、なら行くしかないね」

先にマウンテンバイクで先行してくれる康一先輩だったが、サクラは遊んでくれていると勘違いしているようで社王町をいつたりきたりしていた。おかげで今度保護者にお小遣いを前借りして自転車を買おうとところに誓うくらいには走らされた。息を切らしながら僕はようやく康一先輩においついた。

「ここですね」

犬が中に入りたそうにしているのは廃屋だ。

古い自動車が二台雨ざらしになっていた。どちらの車にもタイヤはなく、ボンネットは開けられて内蔵をひきずり出されていた。

今にも落ちそうな看板がある。昭和40年代にタイムスリップしたかのような店構えだ。二階建ての雑居ビルは築四十年以上。ひび割れが目立つ煤けた煤けた外壁には触手のようなツタがびっしりとからみつき不気味な雰囲気醸し出している。入り口に猫の死骸が転がっていたが陰気な風景にオブリエのようになじんでいる。

見るからに骨董品な建物だ。階段も手すりも各部屋のサッシも赤茶色に錆び付いている。細いヒビが毛細血管のように走る壁は汚水が染みこみ、淀んだ色に染まっていて新築当時の色彩が判別できないありさまだ。

「こんなところにレッド・ホット・チリ・ペッパーが？」

「少なくとも、ここから電気は通ってなさそうだし、まだサクラかというと思いますよ」

「そうだよね、急ぐう」

夜の色に包まれて暗く年取った大きな獣のように陰気くさい。年季の入った木造の建物には店名すら表示されていない。昔ながらの古ぼけた色合いのビルである。決して大きくはない。くすんだ窓ガラスやカーテンの黄ばみやひびの入った外壁の様子から、その古さが

伝わってくる。

しかし廃墟とは違う。朽ちかけたコンクリートの中に生き物の息遣いが含まれているのを、確かに感じ取ることができるからだ。くすんだ寮の外観のなかで、窓ガラスだけは陽射しを受けキラキラときれいに見えた。

「サクラ、いるのかい？」

絞り込み全てのガラスを失った窓枠のペンキはすっかりはげおちて変色し、壁は各所でぐずぐずに崩れ落ち、鉄扉は赤く錆び、石壁には落書きがある。

もう何年も前から人の住んでいないような荒れがにじんでいる建物の肌を探りながら先に進んだ。家が、腰がくじけたように崩れる。ブック・エンドを不意にはずした書籍のように、家々が倒れる。少し歩いただけでこれだ。

のっぺりとしたコンクリートの壁には冷凍倉庫に使われていたころの名残りの配線や鉛管がもぎり取られたままところどころにぶら下がっていた。

様々な機械やメーターやジャンクション・ボックス、スイッチのあとには、それらがまるで巨大な力でむりやりむしりとられたかのように、ぽっかりと穴があいていた。

ほとんどの窓は錆付いたようにびったりと閉じられ、わずかに開いた窓からは色あせたカーテンがのぞいている。

壁や扉や天井の鉄板があちこちはずれていたので、中に入ると、まっすぐに通り抜けてゆく風の動きを感じる事ができる。見上げると、はさみで切り抜いたような空が、所々に見えた。

近づきがたい暗さが漂っていた。夜目で見てもガラスが割れているのは分かったし、壁にはスプレーで落書きがされている。

「うへえ」

康一先輩がうめく。

「すごい匂いだな、鼻が曲がりそうだな」

棚と、檻がいくつか並んでいる。棚はだいたい割れてるし、檻も蓋が開いている。階段は、埃が積もっているがそこまで古くはなさそう

だ。やっぱり意外と頑丈な階段だ。

ペットブームの裏で、猫や犬が子を産みすぎ、自宅で飼い切れなくなって手放してしまう多頭飼育崩壊が目の前にある。

何匹分ものフンや尿の始末に困った揚げ句、掃除そのものをあきらめて、「ゴミ屋敷」化したのだ。

家の中は猫のエサの袋が散乱し、大量のフンと尿にまみれている。玄関に入った途端、強烈な刺激臭が鼻を突く。エコーズによる換気がなければ瞬く間に病気になりそうだった。

犬たちは部屋の中で自由に動き回っていて、天井裏にも上っている。大量のゴミ、そしてフンや尿……清掃作業員を投入しても、まとめるのに1日かかるほどの量のようなのだ。

劣悪な環境で過ごしている犬たちだがエサだけは十分に与えられていたため、痩せている様子はない。

「どうしたんだ？」

犬は困ったようにうろろうろしている。

「まさか、こいつら全部がサクラとか言わないだろうな？」

犬はその場に座り込んでしまう。僕達は顔を見合わせた。

「サクラはいつたいどれなんだ……」

「まさかスタンドで増殖した……？ どうしてサクラはそもそもここに？ レッド・ホット・チリ・ペッパーがアジトにしてるわけでもなさそうだし……」

「スタンドだとしたら、捕まえれば消えるはずだ。サクラは逃げるためにスタンドに目覚めたんだから、追いかけてちや意味が無い。どうします、康一先輩」

「よし、一か八かやってみようか、ジオルノくん」

康一先輩はまず飼い主が来ていたセーターを出した。少なくとも丸一日着用した衣類がなおいいらしい。迷子犬が匂いを感知しやすくなるので、着ていた時間が長ければ長いほど良いとのこと。

その衣類品を放置した。そしてサクラのお気に入りのおもちやと一緒に置いた。

ついでに水の入った皿を置いた。

「こんなんで来るんですかね……?」

「まあまあそう言わずに。サクラは普通の犬より賢いんだ。きつとわかるよ。僕んちの犬で効果があったんだからきつと」

「なるほど」

こうして僕達はいったん1階に降りて様子を伺うことにした。

「……ほんとだ」

「やっぱり飼い主が恋しいんだよ」

「スタンドに知能があっても犬は犬ですね。本能には勝てないってわけか」

「じゃあ行こうか、エコーズ!頼んだよ!」

飼い主がよくサクラを呼ぶのに使っている犬笛を再現した擬音が階段に張りつけられる。

それに気づいたサクラが寄ってくる。

「捕まえた」

僕はサクラの首輪にリードをつけた。

「さあ、来るんだサクラ」

康一先輩から餌をもらったサクラはしつぽをぶんぶん振り回してオネダリしている。

「レッド・ホット・チリ・ペッパー、いるんだろう?観念して出てきたらどうだ?億泰先輩との戦闘で死にかけだそうじゃないか。電池で動くペースメーカーにいたって時間稼ぎにしかない」

「サクラはペースメーカーがないと生きられないんだ。その電気を横取りするなんてどうかしてるよ!」

「ここには電気が通っていないようだ。死にたくないならでてこい、命だけは助けてやる。僕はアンタに聞きたいことがあるんだ」

康一先輩は心臓の音をサクラに貼り付ける。僕はすかさずゴールド・エクスペリエンスを起動した。一時的にペースメーカーがわりとして擬音のはりついている間にペースメーカーのリードからサクラの肉体に変化させる。これで逃げ場を失ったスタンドが出てくるはずだが……。

「……でてこない」

「まさか偽物!？」

「ちがうよ、捕まえたって消えないんだから！」

「一体どういうことだ……?？」

「まさか!？」

僕達は2階にかけあがることにした。

「助かったぜエ、サクラア! お前は俺の恩人だ! そーだよなあ、お前がそのスタンドに目覚めたのは俺のおかげだもんなあ!」

たくさんいたサクラの分身は全て消えうせ、そこにいたのは電気をたっぷり蓄えたレッド・ホット・チリ・ペッパーだった。

「いい機会だからちよいとばかり、理科の勉強を教えてやるぜ、汐華初流乃ツ!」

レッド・ホット・チリ・ペッパーは誰も頼んでいないのに講釈をたれはじめた。

「もし人間が光速で動いたらどうなると思う?？」

例えで言うと、新幹線。時速1000〜2000kmからは息苦しさが現れ始め、時速300kmは、痛みが生じるそう。時速400〜500kmは、皮膚に傷が現れ始め、時速600kmからは、筋肉が悲鳴を上げる。人間の身体は、光の速さには、耐えきれない生き物だ。だから光の速さ、光速が1億kmだとすると、人間の身体は消滅してしまう。

光速と言うのは、光の速さだと言う事で、熱がこもった光の速さだ。例えば、原子じゃない流れ星、光速だと言われる、速さの中で、いずれ無くなり燃え尽きる。そこに産まれたものは、原子じゃなくても、形が存在する事で、存在するものは光の速さには耐えきれない。

「お前が作り出せる質量をもった生き物でエツ! 光速で動けるやつはいないツ! つまりお前のスタンドは俺には止まって見えるんだ

よオッ!!これは正しいぜ!なんせ俺がわざわざ調べたんだからなアッ!」

「なるほど…… スピードは勝てないわけですね、今のアンタには……」

「この絶望感を前にしてもなんでもありませんみたいな顔すんのがムカつくんだよ、てめエエエエ!!」

「そんなこと言われたって仕方ないじゃあないか。僕はこういう体質なんだ」

「じゃあいつまで耐えられるかッ試して見ようじゃあねえか!」

ゴールド・エクスペリエンスとレッド・ホット・チリ・ペッパーの発動はほぼ同時だったはずだ。だが康一先輩がジヨルノくん!!と叫んだ時には僕の体が弧を描き、宙を舞う。

1回、2回、3回までが数えられる回数だった。目が回るほどバウンドするとそのまま蹴飛ばされたのか勢いのままに、サッカーボールのようにごろごろと転がっていく。コンクリートの壁に激突し、ようやくおさまったエネルギー運動。ひどい有様だった。一瞬で僕の体はボロボロだった。

「ジヨルノくんッ!」

「来るな!」

「でも!」

「来ちゃあいけない、康一先輩。アナタはサクラをレッド・ホット・チリ・ペッパーから遠ざける大事な役目があるじゃあないか!」

「ッ!」

「またサクラと一緒に逃げられたら無駄足になってしまう。すこしでも可能性は潰すべきだ」

擦り傷、切り傷、打撲に内出血。左腕は大きくダメージを負っている。力なく垂れ下がり、右腕で肩を庇うしぐさをする僕を康一先輩は固唾を飲んで見守っている。

転がった際についた傷から血が滲み出る。顔の頬からじんわりと真つ赤な液体が滲み出た。

乱暴に学生服の袖でこすり、そして鋭い視線でレッド・ホット・チ

リ・ペツパーをにらみつける。

僕が転がった距離は部屋の隅っこだ。そのちょうど向かいにやつはいる。対照的な二人に言葉はない。沈黙の中、睨み合う。傍で光っていた街灯が一度だけ、バチツと火花を散らした。

「ゴールド・エクスペリエンスッ！」

「無駄だっついていってんだろオツ！」

レッド・ホット・チリ・ペツパーが猛然と向かってくる。目に痛い輝きはフル充電した証だ。それすら確認できない速さで迫まってくる。

僕は迎え撃つ体勢に入る。ギリギリのタイミングを計るようにつきすら許さない、まるで居合い切りの達人がするかのような集中。

瞬間、二人の体より影が飛び出す。

「かはッ——！」

電気が走る。感電だ。感電したのだ。ちやちな拷問の方が生ぬるい強烈な熱、そして衝撃が僕を襲う。あとから音が空気が爆発したかのように響き渡り、鼓膜を破壊しようとしてくる。それが何度も繰り返される。なんども、なんども、数えるのすら億劫になるほど繰り返された。

「ゴールド・エクスペリエンスッ！」

「馬鹿の一つ覚えみてーに！通電でろくな思考が働かなくなっちゃまったかあ？」

スタンド同士の激突というにはあまりにも一方的なぶつかり合いだった。拮抗しているように見えて、実力は歴然としていた。それは互いの表情が物語る。康一先輩が心配そうな顔で見えてくるものだから余計にわかる。わかり切っていた。この戦況は明らかに僕が不利だと。

僕は唇を噛みしめ、麻痺してしまった四肢を叱責しながら立たせる。手に走る痛みを顔をゆがませる暇はない。裂傷が走ろうが、体中にあざ、擦り傷が出来ようが、僕の実力不足からくるダメージの蓄積にすぎない。代償は体力であって精神力であってはならないのだ。

やはりレッド・ホット・チリ・ペツパーは強敵だ。直接的なパワー、

スピードではとてもではないが敵わない。僕にできることは機械的に戦闘を続けることのみだ。

隙を見せることなく、ジワジワと相手の体力、精神力を削り取っていく。放電させて弱体化させるのが目的なのだ。僕が倒れた瞬間にゴールド・エクスペリエンスの能力は解除され、サクラと共にまた逃げだされてしまう。それは困るのだ、最低限の役目は果たさなければならぬ。空条さんたちの信用に応えるために。

「ッ！」

一瞬混乱が起きた。攻撃が一瞬やんだのだ。しかしその糸のように細い集中力の切れ目は、この実力差で消耗しつつあった僕にはこれ以上ないほどの支援だった。

「これ以上は……これ以上は無理だよ、ジョルノくんッ！僕のスタンド、エコーズの力じゃあ……」

康一先輩のスタンド、エコーズの擬音がなんとかしのぎ切ってくれたらしい。すさまじい空気の流れが放電を加速させて、あたりに散開させてくれたようだった。

「ありがとう、康一先輩ッ」

僕は笑った。

「この一瞬さえあれば十分だッ！ゴールド・エクスペリエンスッ！」

隙を見逃さず叩きこまれた一撃は、

レッド・ホット・チリ・ペッパーを的確に捕えた、はずだった。

「だから言っただよ、おせえんだってよオ！」

僕は捕まったことを悟った。脳を揺さぶられ、平衡感覚を狂わされる。血が花びらみたいに散っていった。

ぽいつとゴミみたいに捨てられた僕は、膝から崩れ落ちる。体が糸の切れたマリオネットのように倒れていく。レッド・ホット・チリ・ペッパーを逃がすまいと伸ばされた手が足元にすがるように空を切る。とたんに体力気力の糸が切れた。棒つきれのように横たわる。床はホコリと腐敗の匂いがした。身体が突然後へ反って、仰向けに倒れたなり動かなくなった。

康一先輩がひたすらに耐えて耐えて耐えながら好機を伺い、隠し

持っていた能力が発動した。空を切った一撃。追撃のようにレッド・ホット・チリ・ペッパーの手が僕にたたきつけられる刹那、ビル全体が「ヤメロオツ!!」と叫んだ。

「なっ……なんだアツ!?!」

コンクリートが崩れ始める。まるで

水を含んだ角砂糖のように崩壊する。

「レッド・ホット・チリ・ペッパー、アンタの敗因は1人で戦ったことだ」

ゴールド・エクスぺリエンスでひたすらに植え付けられ、僕が時間を稼いでいる間に張り巡らされた雑草。長年放置されていた建物は阪神・淡路大震災で改定された耐震性には遠く及ばない。だからこそあつけないくらいに壊れるのだ。康一先輩の怒りを込めた叫びを受けたエコーズの攻撃くらい。

僕達はもろとも倒壊に巻き込まれた。

「ジヨルノくん!」

……もちろんこの声が僕の生き埋めを助けてくれるのも折り込み済みだ。

「康一先輩、アナタのそういうところ、僕は誰よりもかってるつもりなんだ。だから今すぐレッド・ホット・チリ・ペッパーが逃げたと伝えてくれ、時間がない」

「ええっ!? どうやって逃げたの!?!」

「君の自転車だよ……残念だけど……ほんとに残念だけだよ」

康一先輩の手を借りてなんとか生き埋めから免れた僕は、サクラと

共に波止場に向かったが全ては終わっていた。

なぜか全身ずぶ濡れで僕よりよっぽど満身創痍な仗助先輩たち。なにがあつたのか聞く康一先輩の顔を見るなり笑う元氣は辛うじてあるらしかった。

スピードワゴン財団職員に連行されていくウエーブがかかったロングヘアー、顔の左側に稲妻状の模様を描いている男が僕とすれ違う。ピチピチの白色のズボンに、胸元を開けた服と黒のジャケットを着用し、袖には右腕に↑AC、左腕にはDC↓という文字のアクセサリーを付け、服全体に十字型と輪つかの形をしたアクセサリーで飾っている。

こいつがレッド・ホット・チリ・ペッパーのスタンド使い、音石明だった。

仗助先輩曰くギターをこよなく愛するロツカー、19歳。夢はウルトラ・スーパー・ギターリストになって激しく熱く生きること。

虹村形兆によりスタンド能力を引き出されたスタンド使いの一人。スタンド能力が成長した後、彼を殺害して「弓と矢」を強奪した張本人。

調子にのりやすいが反省すると強いタイプであり、僕のことをスピードワゴン財団職員の偽物から聞いたためにヒットアウェイ戦法に切り替え、仗助先輩たちは大いに苦戦したらしい。

慎重な性格も持ち合わせており、本当は自身のスタンドのパワーがスタープラチナを超え完全に勝てるまで潜伏したかったらしい。だが僕たちの妨害で思った以上に電力を消費してしまったせいで全力を出せなかつたと怒っている。

想定より弱体化してなかつた。もつと体力を消耗させると怒られた、理不尽である。

空条さん曰くスピードワゴン財団が今まさに自宅や活動していたライブハウス、スタジオなんかを調査しに向かっているらしい。

「出やがったぞ、偽物が」

「なんですって!?!僕が目的ではないんですかッ!!」

「音石に話を聞こうとした瞬間に出やがった」

「……なんてことだ」

いきなり世界が真っ暗になったと職員がパニックになった。そして転覆。億泰先輩と空条さんが音石をぶっ飛ばし、仗助先輩がジョースターさんを助けたとのこと。

なにを思ったのか、音石はそれきり貝のように口が固くなってしまったらしい。

不穏な空気を残しながらも社王町は5月を迎えた。一応一件落着なのだろう、音石がいつてた窃盗総額5億円とスタンドの矢、弓が行方不明という点を除いては。

すっかり安全地帯はないと悟った音石は沈黙を守っていたものの、死闘の果てに窃盗と殺人未遂。転覆の罪まで加わると知るとたまらず口を開いたらしい。残念ながら自白剤と億泰先輩、空条さんの脅迫にもかかわらず僕達の持っている以上の情報はなかったが。

とりあえず僕は日常に生還することが出来た。

「康一先輩……いいかげん機嫌を治してくださいよ……」

「いいじゃあないか、べつに。僕が怒ってたって、君にはなんにも関係ないんだから」

「マウンテンバイクについては謝ったじゃあないですか」

「そういうんじゃないんだ」

康一先輩は未だにうつむいたままだ。

「……僕が勝手にイライラしてるだけなんだ。ジョルノくんが原因じゃあない」

「そんなこと言って恨めしげに見られても」

沈黙のさなか、やっと康一先輩が重い顔を上げる。涙は止まっていた。そう感覚として理解できた康一先輩はまたも俯こうとしたが堪えた。

「言って欲しかったら言うべきだ。日本人はそういうところがいけない」

お互いの視線ががち合う。一触即発とはいかないが、決して穏やかなものではないのを感じ取った。

「君も日本人じゃあないか」

「ハーフです」

「戸籍上も育ちも日本人じゃあないか、しかもその顔で日本語しか喋れない」

「たしかに」

僕はためいきをついた。

「この際だから言っときますが、僕が黙ってるのは今に始まったことじゃあないはずだ。アナタのエコーズが近接戦闘が苦手なことを責めてるわけじゃあない。言わない方がいいから黙ってただけだ。よく言うじゃあないか、沈黙は金なり」

「そんなこといって、なにかあったら置いてくよね」

「お望みならはつきり言いますが、僕は仗助先輩じゃあない。世界で一番やさしい能力じゃあない。場合によっては君が足手まといだから……置いて一人で行くことだってある」

威圧するような口調ではない。しかしその言葉の重みが康一先輩を沈黙させる。

「僕が……弱いから……」

「弱いというのがスタンドの強さを言っているのか、康一先輩の性格を言っているのか、それ以外のもつとぐちやぐちやしてるなにかを言ってるのかはわかりませんが、悪くないと僕は思ってる。でもそうだな、確かに康一先輩を置いていくと思います」

淡々と事実のみを述べる僕に対して康一先輩は怒りを覚え始めたように唇をかみ締めた。

「僕はいつだって色んなものを置いてきたし、置き去りにされてきた。身軽にならないと死ぬしかなかったからだ」

「でも今はそうじゃあない。それはわかっているはずだよね、ジョルノくん。そんな君が一人で行っていつかぺしゃんこになったとき、手を差し伸べてくれるやつが居ないのは寝覚めが悪すぎるじゃあないかッー」

「全滅するよりはマシだと思っただけだなア……… なんだって仗助先輩といい空条さんといい、億泰先輩まで……… 似たようなことば

かりいんだか……」

「ごういうのは皆まで言わせるもんじゃあないよ、ジヨルノ君
僕は肩を竦めた。

「さあ、行こうか。学校に遅れちゃうからね」

ヘブンズ・ドア

広瀬康一と間田敏和。新しい創作ネタを手に入れるため、ぶどうヶ丘高校の学生達にスタンドを発動させ、

記憶を見ていた岸辺露伴は気がついた。

「なんだこれは……ここだけ書体も字体もなにもかもが違うじゃないか……気持ち悪いな」

どこかで見ることがあるような気がするのと首をかしげる。そうだが、新興宗教にハマっていた人間を取材して回っていた時に見たものと同じだと気づく。なんの脈絡もなく教祖の言葉や経典の言葉が差し込まれ、薬による酩酊状態から来る幻覚なんかまさにそれじゃないかと。ただあくまでも本人の思考に基づいたため、ここまでちがうのは見ることがなかった。ここだけ一人称が僕なのだ。余計にういて見える。こういうときは前後の文書に関係ある人物がスタンド使いとして考えていい。

「ふむ……汐華初流乃……生命を作り出すスタンド……記憶にまで影響が出るのか？……どういうことだ……前後に脈絡がない。興味深い……非常に興味深いぞ……！」

パラパラパラと間田敏和の人生をめくる。

「アナフィラキシー……」

露伴は棚から分厚い医学書を開き、該当のページを探り当てる。

「……だな」

食物アレルギーを引き起こすことが明らかかな食品として、卵、牛乳、小麦、そば、ピーナッツ、えび、かにがあげられ、この7品目は食品衛生法において特定原材料として食品表示が義務づけられている。また、あわび、いか、いくら、オレンジ、キウイフルーツ、牛肉、くるみ、さけ、さば、大豆、鶏肉、豚肉、まつたけ、もも、やまいも、りんご、ゼラチン、バナナの18品目についても、原材料として含まれる場合は可能な限り表示することが推奨されている。一般に食物アレルギーは乳幼児で発症することが多く、その後、年齢とともに減少していく。食物アレルギーの特殊型として、原因食物摂取後に運動な

どの二次的要因が加わりアナフィラキシー症状をきたす食物依存性運動誘発アナフィラキシーという病態がある。小麦が原因となる場合が多く、運動により多量の抗原が吸収されるためとされている。

「乳幼児期か……」

ほかにもアナフィラキシーを引き起こす可能性のある虫さされとしてはハチが最も代表的であり、中でもスズメバチ、アシナガバチ、ミツバチが重要だ。ハチ毒に対するアレルギー反応がない場合は、局所症状は数日で改善するが、ハチに一度刺されてハチ毒に対する抗体ができている場合は、再度ハチに刺された後5〜10分以内にアナフィラキシーを起こすことがあるのだ。また、ハチ毒の成分は種類によって異なりますが、スズメバチ類とアシナガバチ類の毒成分は類似しているため、アシナガバチに刺された経験がある人は、初めてスズメバチに刺された場合でもアナフィラキシーを生じる可能性がある。

「2回目ならやはりハチの記憶を辿るべきか？」

薬によるアナフィラキシーの多くは、ペニシリンなどの抗生物質、アスピリンなどの解熱鎮痛剤、医療機関で検査に用いられる造影剤などによるもの。また、薬を作るときに使う安定化剤などの添加物によってもアレルギーを起こすことがある。この他、卵アレルギーのある人が塩化リゾチームを含んだかぜ薬を服用すると、アレルギー症状があらわれることがある。これは交叉反応と呼ばれ、卵アレルギーのある人が塩化リゾチームに対してもアレルギー反応を起こすというもの。

「風邪薬！そんなものもあるのか」

ゴム製品でアナフィラキシーを起こす場合もある。ゴム手袋や風船などには天然ゴムが使われている。天然ゴムの原材料に含まれるラテックスというたんぱく質がアナフィラキシーの原因となる。また、もともと花粉症を持つ人が果物に対してもアレルギー反応性を示し、口腔粘膜を中心とした浮腫、違和感を始めとする症状を生じることがある。これを口腔アレルギー症候群と呼ぶが、このような場合には果物のほかにラテックスにも交叉反応を示すことがあり注意が必要。

「うーむ、掃除の時間もみてみるか」

そこから一心不乱に岸边露伴は間田敏和の記憶を読みあさる。受験勉強を控えた学生のごとく、単語のひとつひとつを目を皿にするようにして探し回った。

「全く疲れる作業だ…… こういう時ばかりは検索機能が欲しくなるなア…… 興味が無いことを調べるほど苦痛なものはない。特に読むに値しない人間の記憶を読まなきゃ行けない時はなおさら」

あんまりだと間田は思ったが言葉にできない。

しばらくして、そこに一度もスズメバチに類する昆虫に刺されたことがないこと、似たようなアレルギーがある訳でもない気づいた露伴は興奮している自分に気がついた。

間田は何故か経験がないにもかかわらず2回目のスズメバチのアナフィラキシーを起こしているのだ。

「君に直接の興味はないが、この記述に興味が湧いたツ！これは是非とも取材しなければ……!!」

ビリビリとそのページを破り捨て、露伴は康一のページから汐華初流乃の単語を一心不乱に調べ始めた。

「× × × ジョルノ…… ああくそ、名前が2つ入り交じりなのが面倒くさいなアツ！」

懸命に調べていた露伴は、ふむ、と考え込む。

「どうせ康一くんの記憶は根こそぎもらうんだからじっくり調べるとするか……」

だいぶ薄くなつてしまった。体重が25キロくらい減つてそうだが、問題ないだろう必要な犠牲だ。

「生命を作り出す…… 柴犬、蝶、すごい…… 凄いじゃあないか…… 知り合いになれば目の前で再現してもらえるかもしれない…… これはいいぞオ…… !しかも環境がいい…… まるでアメコミのダークヒーローみたいだ…… ほんとにすごい…… 凄いよ康一くんツ！汐華初流乃から友情を感じているだなんてこの記述が特にいい！素晴らしい!!」

ぶつぶつぶつと呟いていた露伴はふと違和感に気づいた。《今ハチ

に刺されたような気がしてきた』のだ。ちらと時計を見るとあの変な文書を見てからきつちり10分たっている。ある可能性に思っていたり、また間田敏和の記憶を辿りはじめた露伴は、その文書の10分後に間田がアナフィラキシーで倒れていることに気がついた。

アナフィラキシーで恐ろしいのは、喉が腫れ上がるために奥の空気の通り道が塞がれること、不整脈やショックであり、死に至ることである。この記述では死ぬことは無いがだいぶやばいところまでいくようだ。いそいで病院に行かなくては死ぬらしいから。

「しゃがれごえ……うまく……こえがだせない……のどのつまり……まちがない……ぼくにもこのきじゆつがてきおうされている……！まずいな……このままだとどうきにめまい……そしてきぜつ……」

露伴は電話がある部屋に移動した。

「まさか……まさかあれをよんだから……ぼくのからだもスズメバチのアナフィラキシーを……？かんちがいているのかつ……!?はごまだのようにつ……!!」

死ぬことは無いと間田でわかっているとはいえ、記憶を覗き見るだけで発症するとは相当強いスタンドだ。

「すばらしい……すばらしいぞツ！せかいはひろいなあ……これはそうさくよくがわいてきたぞツ!!」

とりあえず救急車をよぼう、と露伴は電話をかけることにしたのだった。

個室に持ち込んだ画材を駆使して今月分をまとめてこなす傍ら、露伴はどうやって汐華初流乃に近づこうかと考えていた。

オートバイや自転車を欲しがると金欠らしいから、アルバイトを欲しがっていると間田敏和か広瀬康一を通して接触を測ってはど

うだろう。一度会いさえすればヘブンズ・ドアでどうとでも……ここまですでかながえてダメだなど思い直した。

汐華初流乃はその奇妙な境遇ゆえにスタンド使いを常に警戒している人間だ。なにせ正体不明の黒服なんてどこの秘密結社だみたいな男が目的不明のままスタンドの矢を持って姿を消して、社王町に潜伏しているらしいのだから。そんな奴に接触を測るのだから、こちらもそれなりの態度で応じなければならない。なにせ汐華初流乃は生命を生み出すスタンドなのだ、しかもある程度の知能を操作することも可能だという。売れっ子作家ゆえに取材にいける期間も限られている露伴からすれば、いくら出したって構わない人材なのだ。ワシントン条約とか輸入規制とかめんどくさいものを一切気にしないで思う存分スケッチ出来るのだとしたら、それはもう夢のような話なのである。

第一、汐華初流乃はもうひとつ能力を隠している可能性があるのだ。広瀬康一のようにスタンドが成長することだってあるだろう、ただでさえ秘密主義のようだし。うっかり今回のようなことになればまた病院送りである。

広瀬康一をまた家に呼びたい露伴からすれば非常にこまるのだ、それは。

それに汐華初流乃は岸边露伴のファンじゃないから波長が合わない可能性が高い。レ・ミゼラブルや青い鳥のような絶望の中に一筋の光を見たり、社会の矛盾に屈折した思いを抱きながらたくましく生きたりするようなストーリーは露伴の作風とはかすりもしなかった。

つまり、露伴は汐華初流乃の頭の中をヘブンズ・ドアで見ることが出来ないから、汐華初流乃に話してもらう必要があるのだ。いつもの手段が使えないとわかった瞬間に、なんで僕がこんなことしなきゃいけないんだ、と思ってもした。だがせつかく入院になったんだからなにかしら得るものがなければもったいなくていけない。さいわい考える時間はたくさんあった露伴は、汐華初流乃の能力について考えた。

生命に能力を付与することが出来るようになった、なんてどうだろ

う？カウンターなんて意味のわからない能力を付与できるんだ。共感とかそれっぽい方向で進化した、あるいは変化した。ありうる話だ。汐華初流乃はスタンド使いなのにスタンドに刺されているのだから。矢に刺されただけでヘブンズ・ドアーを得た露伴からすればありうる話である。

問題は汐華初流乃にもメリットがないと応じてくれないだろうということだ。広瀬康一のようにお人好しが人の形をして服を着て歩いているような人間ならこんなにも悩むこともないだろうに、汐華初流乃は懐かない野良猫みたいなけ好かない性質をしているとみた。こちらの真意をすこしでも暴いてやろうと伺ってばかりのクソガキなのだ。

間田敏和は双葉千帆という将来有望な小説家の卵に取材を受けたことがあるようだが、彼氏とかおまけがくつついてくる。しかも女子高生に20歳の漫画家がわざわざ病院の個室に呼び出すなんて怪しすぎる。事案にも程がある。どのみち怪しまれるのは前提にした方がいいに違いない。

色々考えた末、露伴は正攻法でいくことにしたのである。

「やあ、よく来たね、汐華初流乃君」

その第一声に汐華初流乃は僅かに眉をあげた。あらゆるアンテナを張り巡らせ、まんじりともしないであらゆる物音に耳を澄ます。それでいて焰のような警戒心を消さない。心がハリネズミのように警戒心の棘を張っているのがわかる。警戒心を壁のように張りめぐらせているから、豆腐のように慎重に扱う必要がある。

近所のおばさんがえさやりをしているせいですっかりうるつくよくなった野良猫のようだ。勝手に入り込んで漫画をひっくり返して猫の手スタンプを押しまくる困ったやつ。一回ヘブンズ・ドアーで入らないという一文を入れられないか試そうとしたとき、あの手この手で来るように試したことを思い出す。結局あの時は猫にそこまで

の知能がなかったから諦めたが、目の前にいるのは猫ではなく人間だ。吸血鬼を父親に持つというにわかには信じ難いものの、日本語が通じる人間なのだ。

二人の眼は犬のようにお互いを見ることを、警戒し合っている。ヘブンズ・ドアーの傘下にある広瀬康一は甲斐甲斐しく露伴の世話を焼こうとコーヒーを出してきた。不審そうな目が汐華初流乃から広瀬康一に向けられる。やはり怪しまれているようだ。

顎を引き、身体を固くし、警戒態勢に入った汐華初流乃に、露伴は肩を竦めた。非常な神経を働かせて、広い屋内の空気を隈なく探っているのが手をとるようにわかる。公然にはできない理由からの警戒をふとした行動から漏れてはならないと潜行的になっている。

「はじめまして、僕はぶどうヶ丘中学の汐華初流乃です。康一先輩に誘われてアルバイトに来ました……」

「ああ、康一君から話は聞いてるよ」

「一応聞きますがどこまで？」

「すべて、と言った方がいいかな。康一君が知ってることはだいたい知ってると思ってくれて構わない」

ちら、と汐華初流乃は広瀬康一を見る。お見舞いとアルバイトに誘うと書かれてしまっている彼は矛盾した行動が取れないために、汐華初流乃が岸边露伴を警戒していると気づいた途端に口が止まらなくなった。冷や汗が浮かんでいることに気づいたようで、汐華初流乃は思案している。目敏いヤツめ。

汐華初流乃はやはりピンクダークの少年を読まない人間だった。

広瀬康一が語る岸边露伴。その超絶漫画作成能力（コマ線・効果線は一瞬で素早く正確に描く、ペンの一振りですばやく墨汁でベタ塗りを完璧に仕上げるなど）により、19ページを4日で仕上げる事ができる。

漫画は、金や名声のためではなく「読んでもらうため」に書いている。そのためにリアリティのある題材を常に求めており、そのためにはどこへだって行くし、どんな無茶も平然とやる。事実、作中での彼の行動原理の根幹には「漫画を描く」事が前提として存在したため、お

そらく世界が滅亡しようとも命ある限り、彼は漫画を描き続けるだろう。

そんな話を聞いて、ベッドの露伴に問いかけた。

「そんなに技術があるのなら、スタッフやアシスタントはいらないじゃあないですか。なんだって僕みたいな素人を誘ったんです?」

「決まってるだろ、スタッフもアシスタントもお呼びじゃあないからさ。用があるのは君だ、汐華初流乃くん」

「なんのです?」

「君の生命を生み出すスタンドってやつがみたいんだ、僕は」

「なんだって?」

「スズメバチに刺されたせいでアナフィラキシーにかかってしまったね、取材に行けなくなってしまうんだ。福井県の山奥にある絶滅危惧種の植物とそれに纏わる民話を聞きに旅館の予約をしていたんだがキャンセルしなくちゃいけなくなった。もちろん、それなりの金額は払わせてもらう用意は出来てる。どうだい?マウンテンバイクを買うくらいのお金は準備しているつもりなんだが」

「…… どうやって知ったか聞いても?」

「虹村形兆とかいうやつにスタンドの矢でさされたんだよ。ここに越してきたころだ」

「…………… デッサンでも描くんですか?」

「そうだ。凶鑑を写生したって意味が無いとは思わないかい?僕はその植物の存在する空間を描きたいんだよ。平面じゃあない、360度、X軸もY軸もZ軸もすべてだ。最近じゃあパソコンを使ってそれを再現できるが、所詮はそれなりだ。現実には到底及ばない」

「どこかで聞いた話だ……………」

汐華初流乃は双葉千帆を思い出したのか、どこか遠い目をする。長い長い沈黙の末、いいですよ、というどこか投げやりな言葉が返ってきた。

「悪い人じゃあなさそうだ」

「ならば念押しに僕のスタンドについて説明しようじゃあないか。君は口が固そうだ」

ひとしきりの説明を聞いた汐華初流乃は小さく笑った。

「もう知っているとは思いますが、僕はスタンド使いだ。ゴールド・エクスペリエンスという生命を生み出すスタンドをもってる。初めて見る植物に関してはよく知らなきゃできない。なにか資料はありますか？」

岸辺露伴が心の中でガツポーズをしたのは覚えがある限りではこれが初めてだったという。

今の時期、露伴先生の家ドアには「カメ実験中」と書かれたお手製の看板がかかっている。これがかかっている間、仗助先輩は絶対にこない。

「これがないとうっかり見られたら説明が面倒だからな。必要経費さ」

こここのところ、ぶどうヶ丘高校を中心に興味本位な来訪が増えていと迷惑そうに露伴先生はいつていた。

たしかに見た人が詳しい場合、通報されるに違いない。ワシントン条約をガン無視した光景が広がっているからだ。

ワシントン条約とは、正式には「絶滅の恐れのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」といい、1973年、ワシントンで採択されたことから通称「ワシントン条約」といわれている。この条約は、国際取引によって生存を脅かされている又は絶滅してしまう恐れのある野生動植物を保護することを目的とした条約で、日本をはじめ世界の約170カ国が加盟している。ちなみに日本は1980年批准だ。

この条約の本文に規制の対象となる動植物のリストが付いていて、このリストは「附属書」と呼ばれ、規制が厳しい順に「附属書I」「附属書II」「附属書III」にわかれている。

ワシントン条約に基づき、動植物の多くのものが輸出入の規制対象

となっており、この条約で定めた機関の発行する書類等（輸出許可証、輸入承認証など）がないと輸出入することができない。

日本への持ち込みが規制されているものとしては、動植物、加工品や製品に別れている。僕が露伴先生に頼まれるのはもっぱら動植物だった。持ち込みではいけないものと持ち込むのにとつともなくめんどくさい手順を踏まなくてはいけないもの。大雑把に言えばこの2種類にわけられた。

なぜか大怪我で病院に逆戻りしたこともあったが、今は休載しているとはいえ自宅療養にきりかえている。そしたら途端にゴールデンウィークや土日は必ず露伴から電話がかかってくるようになった。どうやら康一先輩からごっそり奪った記憶の中に僕が二学期になったら公立の中学校に転校すること、また施設に戻ることが書かれてあったようだ。僕にまだ自由時間がある間に、このリストにある動植物全てをコンプリートしたいにちがいないと疑っている。

僕からすれば貴重なアルバイト先なのだが、康一先輩たちは決まって嫌そうな顔をしている。特に金額をアップするからと言われて張り切って出した爬虫類地獄に襲われた仗助先輩はしばらくの間口を聞いてくれなかった。康一先輩もずっと露伴先生のスタンドの餌食になってるのに助けてくれなかったことを怒られた。まさかの裏切りと根に持っているのかもしれない。億泰先輩の提案でお詫びにイタリアンレストランに時々に行くはめになってしまい、なかなかお金が溜められないのはカツアゲに当たるのではないだろうかとそろそろ東方巡査に相談しようか考え始めているころだった。

「やはりデッサンは本物を並べて描くにかぎるなア……！」

毎回ものすごいスピードで消費されていく筆記用具。そしてスケッチブック。なにも知らなければこれがスタンドだと思うだろう。普通に書いた場合は何倍もかかることを美術の先生から嫌というほど学んでいる僕は純粹に凄いと思うのだ。こないだ出会ったイタリアンレストランのシェフは、熟練の腕がスタンド能力として開花したパターンだったし、スタンドの矢にいられなくても露伴先生は遅かれ早かれスタンドに目覚めていた気がする。

それにしたって、最適な気温と湿度、そして餌を提供されて我が物顔でのそのそ歩き回るマダガスカルホシガメがこの瞬間世界で一番幸福なボールペンなのは間違いないかった。

ここにくると僕は最初に凶鑑と露伴先生が集めてきた資料を読み漁り、ゴールド・エクスペリエンスを発動させる。やり直しが利くためか、お気に入りの模様が出来るまでリメイクが入るため、意外と根気がいる作業だった。ゴールド・エクスペリエンスの訓練になるし金になるからいいけれど、今度からはよく内容を吟味してから請け負うことにしようと考えた。

そうして出来上がったのが、対の2匹である。最大甲長40センチメートル。メスよりもオスの方がやや大型。背甲はドーム状に盛り上がり、上から見るとやや細長い。甲板の成長輪は明瞭。項甲板はやや大型。後部縁甲板は鋸状に尖ってやや反り上がり、左右の第12縁甲板は癒合する。背甲の色彩は黒や暗褐色。ちなみに「星のカメ」という意味があるらしい。

移入者による保護区内も含む違法な焼畑農業や農地開発による生息地の破壊、人為的に移入されたカワイノシイヌによる幼体の捕食、食用やペット用の乱獲などにより生息数は激減しているカメだ。

今は露伴先生に好き勝手されている可哀想なボールペンでもある。

「よしよし、ここだ。このアングルがいいぞっ！陰影が最高だ！初流乃くん、ここで止めてくれ！」

「このまま3分40秒止まるんだ」

「いや2分30秒でいい」

「だそうだよ、2分30秒」

「よしよしよいいぞオ！普通の亀ならこうはいかない！ずーっと張り付いて何週間かに一度してくれるかしてくれないかの絶妙な傾げ方だっ……！」

ここまで褒めてもらえるボールペンを僕は見たことがないし、これからも見ることはないだろう。

「終わりだ！できたぞ、初流乃君!!」

「解除しても?」

「もちろん！お疲れ！」

この瞬間にカメはボールペンとなる。拾い上げた僕はカバンのペンケースを漁った。

「いつも君の私物でやってもらってすまないな」

「いえ、万が一外に逃げ出しても、僕のものなら追いかけることが出来ますからね」

「ああ、そうだったか。しかし、君の生体探知は本当に便利だな。康一さんの記憶で見たが大活躍じゃあないか。そうだ、君探偵にでもなれよ。汐華初流乃探偵事務所っていい看板になりそうだし」

「取材に来る気満々じゃあないですか」

「当たり前だろう、探偵は閑古鳥が定番だからね。いや待てよ……？ペット探しに浮気調査、うん、定番どころはだいたい君のスタンドでカバー出来るじゃあないか。適当にいったわりにはなかなか名案じゃ……」

僕の気持ちを代弁するかのようタイミングで呼び鈴が鳴る。舌打ちをした露伴先生はいつものように無視を決め込もうとしたが、今回の依頼人はだいぶんしつこいようでなかなか鳴り止まない。イライラし始めた露伴先生がどんなやつが来ているんだ、あまりにも失礼なやつならヘブンズ・ドアーで二度とこないと書いてやると考えているような顔で出ていった。いつものことだ。

僕はそろそろ帰ろうと準備を始める。

「噂をすればなんとやらだ」

さつきとは正反対に上機嫌な露伴先生がやってきた。

「汐華初流乃くん、君に依頼人だ」

「はい？」

「ジヨルノ、手伝ってくれ」

「……まさかまたですか」

「そのまさかだ、ジヨルノ」

「また？なんだ、初流乃君。君、もう探偵ごっこやってるのか？」

「そんなんじゃないですよ」

「たしかにそんなんじゃない。千帆が巻き込まれやすいだけだ」

「ああ、間田に取材してた女子高生か」

「そう」

「今度はなんですか？」

「時間になってもこない」

「すつぽかされたただけでは？」

「父親の愛人に拉致された可能性がある」

「またずいぶんと衝撃的な出だしですね。ドラマならまた次回だ」

「来週には死んでるだろうな」

「…… アンタ、最近双葉の扱い変わってきましたね」

「そうか？」

露伴先生が口元をつりあげる。

「面白いことになってるじゃあないか…… 僕も混ぜてくれよ。どうだ、アルバイト代弾んでやるからさ」

メモリー・オブ・ジエツト

晩春から初夏へ移り変わる山々の、新緑の美しさといったら、記述するだけでわくわくしてくるものだ。双葉は知っている。

こここのところ蓮見先輩に読んでもらう小説が行き詰まりを見せていて、気分転換に取材を繰り返していた甲斐があった。

有名な神社の境内のくすのきが、若葉の季節には、緑という黄金色に輝いて、初夏の空の蒼によく映える。

春はどんどん深まっていった。風の匂いが変わっていった。夜の闇の色合いも変化した。

音も違った響きを帯びるようになっていった。そして季節は初夏に変わったと思わせる暑い五月。晩春の花のがくをまだつけている新果のようなある朝、双葉は蓮見先輩と待ち合わせのカフェに向かうためいつもの道を歩いていた。

街路樹の高い枝の上に白く咲く花も盛りの中で、遅れて「春」を演出している。

まだ梅雨の前なのに、夏の盛りを思わせるような暑い日だ。梅雨に入るのもまだ早いというのに、台風を思わせる空模様が続いていた。

公園に入ると川に沿って植えられた樹々の若い葉の匂いがした。その緑色があたりの空気の中にしつくりとにじみこんでいるようだった。松も新しい緑にかわって、草も木も青い焰のようになった。

外の世界は五月だ。明るい澆刺とした五月だ。自分の心もかつてはこのようでなかったか？なぜいきなり沈んでいる？

その答えは目の前にある。

「偶然ね」

双葉の気分が急転直下なのは、目の前の女性のせいにほかならない。こんにちは、でも、久しぶりでもないのは知人でも友人でもないからだ。

「デートかしら。いいわね、若くて。私はね、今からあなたのお父さんに用があるの。いるでしょう、家に」

双葉はこの女性に見覚えがあった。頼んでもいないのに自己紹介

を始めたからだ。オリカサハナエさん。杜王町在住の女性、三十九歳。趣味はミステリ小説を読むこと。

身長は高めの一六九センチですらつとした体型、年齢よりも若く見えると思つた。父は高校時代の先輩後輩だと言っていたが、しばしば双葉の家族にちよつかいをかけてきている。母が出ていったのはこの人のせいだと双葉は考えていた。

個人的に調べた限りでは家族や親しい友人はおらず、近所づきあいもせずに杜王町新興住宅地の一軒家にひっそりと暮らしていた。働いていないわりにわりとリッチな生活をしていた。

あまり聡明なようには見られず、とっさの機転も利くほうではない。そのくせ妙なことに気がつき、積極的に行動しようとすることからトラブルメーカーの気質が窺えた。双葉の家はまさに標的になっているのだ。きっと双葉が生まれてくるずっと前から。

「あなたのお父さんに用があるのよ」

にこりともしないで女性はいった。この人が現れるたびに双葉にとつてあまり良くないことが起こるのだ。両親の言い合いが始まり、喧嘩ばかりになったのもこれがきっかけだった。また現れた女性はじろじろと無遠慮に辺りを見渡し、また来るわねと去っていったのだ。

「なんの御用ですか」

2回目に来たとき、双葉はどうとう尋ねた。弓のように口を歪ませた女性はいうのだ。

「私、オリカサハナエっていうのよ。あなたのお父さんにきいてみたらどうかしら」

そのまま告げたとき、父は表情を落つこととしたような顔をして黙ってしまった。

「本当にオリカサハナエと名乗つたのか」

「うん」

「……なにが目的なんだ……」

ああ知っている人なのかとぼんやり思つた。わざと鈍感にならなければいけないで、父がどんな顔をしていたのか双葉は思い出すこと

ができない。

「父さんの知ってる人？」

「……………父さんの昔の恋人だ」

「え」

「母さんと出会うずっと前、恋人だった人だ。でも別れた」

「どうして？」

「なんで聞くんのだ」

「だって……………」

「…………父さんが猫が嫌いなのは知っているだろう？」

「うん」

「オリカサハナエさんは猫が大好きだった。父さんは嫌いだった。恋人になるということは、どちらかが我慢しなくちやあいけない。どちらも譲れなかった。だから喧嘩して、嫌いになって、別れた」

「そうなんだ」

「そうだ。でもオリカサハナエさんは猫のせいだと思い込んでいる。それだけじゃあなかった。それをわかってくれなかったからわかれただ。わかってくれたのが母さんだ」

「だからまた来たの？」

「たぶん…………不安にさせてすまないな、千帆。オリカサハナエさんはずっと一人だったから、ずっと時間が止まっている人なんだ。おそらくは16年前から。悪いことは言わない、今度来たら居ないふりをしなさい。見て見ぬふりをするんだ。警察を呼んじやっさい。何をされるかわからないからね」

こくりと頷いた双葉をいい子だと父は撫でてくれた。約束を思い出しながら双葉は嘘をついた。

「猫がね、死んじやったのよ。ニュースでやっているでしょう？森野って女たちが誘拐したペットを自宅の庭に生き埋めにしてたつてやつ。あたしのペットもね、誘拐されて死んじやったのよ。もうヨボヨボのおばあちゃん猫だったけど、唯一の家族だったのに」

双葉が巻き込まれかけて、逃げ出した事件の被害者のひとりがオリカサハナエだったから、罪悪感から逃れることができなかったのだ。

「あなたのお父さんからもらった猫だったのに。トリニータつていうのよ、2代目なんだけど」

その一言が思考を停止させたのだ。気づいたら双葉は知らない家にいた。

「ふふっ」

のぞき込んでいるオリカサハナエに気づいた双葉は血の気がひいた。飛び起きて距離をとろうとするが力が入らず、ずるずると後ろに下がっていくしかない。やがて壁と背中が一体化してしまうのではないかというくらいくつついてしまう。オリカサハナエはおかしくて仕方ないという風に笑うのだ。

「ふふふっ」

「な、なに、なんですかあ……」

彼女は壊れた人形のように笑うのだ。他者の存在がハリボテのように感じられるくらい、ハイライトが死に、目の焦点が合わない。

「どんなに愛している娘でも、あなたのお父さんにとっては、いずれ自分を映す鏡にしかすぎない。私は賭けをすることにしたのよ、双葉千帆さん」

「ひっ」

突きつけられたのは、ナイフだった。

「我慢くらべといきましょう？絶対に出られないこの家でどちらが先に死ぬか。ねえ？いい考えだと思わない？」

ほんの少し事情を知った後でも双葉はオリカサハナエが嫌いになれなかった。どう好意的にみても冷たい印象は変わらなかったが、それ故に似ている気がしたのだ。ふるまいや口調がどんなにやさしくても彼女は父と同じようにひとりで生きている感じがした。

同じ匂いを感じ取っていたのだ。つまりその程度の知り合いにすぎない、赤の他人に対する無関心さがある。それと同じくらい残酷になれる者同士だったのだと双葉が知ることになるのはずっとあとのことだ。

「……千帆のやつ、遅いな」

いつまでたっても来ない後輩。待ちぼうけをくらいながら、蓮見琢

馬はぼんやりと外を眺めている。全ての情報を一度覚えたら忘れることが出来ない壊れた脳みそをもつ彼はいつも外を眺めていた。

この時期、この時間帯に通る車のナンバーと所有者と住所はだいたいわかっているのだ。いつもと違えば間違いないと覚えている。スタンドを発動させれば黒い本が1冊出てくる。分刻みででてくる情報を眺めていた琢馬はある一節に目がいくのだ。

8時45分52秒オリカサハナエの自家用車通過。

(おかしいな、いつもは買い物はずだが)

こここのところ、社王町にスタンド使いがすぎるせいで双葉も事件に巻き込まれて死にやしないかと想像してしまう。いよいよ想像が現実になったんだろうか、人間はいつだって実現しうることしか想像しないのだ。

「…………… ジョルノは…………… 岸辺露伴のところか」

なぜかピンクダークの少年が1ヶ月休載していると噂の漫画家のところにアルバイトにいつているはずだ。またですかと言われるのはわかっていたが、会計を済ませて琢馬はそのまま岸辺露伴の家に向かった。

ピンポンと何度も呼び鈴を鳴らすが返事はない。

「いつもなら面白い物から帰宅して趣味に興じている頃だ」

琢馬は勝手知ったる我が家という顔をして裏庭に回り込む。ここに康一先輩がいたら警察を呼んだ方がいいとか通報されるとか至極真つ当な反応をしてくれるはずだが、不幸なことにここにいる人間は誰もそんなことはしない。興味が無い、どうでもいい、ちんたらしてたら双葉千帆が死ぬ、いろんな理由はあるが一致しているのは間違いない。

「彼は何を言っているんだ？」

「瞬間記憶能力があるんですよ、琢馬は」

「ああ、漫画でよくあるあれか。ほんとにいるんだな」

「いつも車のナンバーを見てるけどまさかほんとに役立つ時がくるなんて思わなかった」

「すごいな……」

「へブンズ・ドアーはやめた方がいいですよ、彼の記憶量は多すぎて六法全書何冊分になるかわかったもんじゃあない」

「それを決めるのは僕だが…… 双葉千帆っていう彼女のために頑張るヒーローを邪魔だてするほど僕は暇人じゃあないさ」

「そんなんじゃない」

「みんなそういうもんさ」

蓮見琢馬と双葉千帆に関して言えばまさに本人の主張通りなのだが、僕は完全なる第三者であり、これからの人生すらかかわる根幹でもあるから僕は何も言わなかった。

「働いていないのに悠々自適な生活、愛人家業は儲かるらしい。今年、婦人系の病気にかかって子供が産めなくなってから千帆の家に嫌がらせばかりしていたようだ」

「長年金をもらっていながら……？子供が産めなくなるってそんなにシヨックなんですわね」

「らしい」

「ずいぶんと詳しいじゃあないか、蓮見君。相談にでも乗っていたのかい？いい彼氏じゃあないか」

「そんなんじゃない…… 放っておいたら父親の愛人を独自に調べあげるのと同じくらいの必死さで、この街の不思議なことに引き寄せられてしまうだけだ」

「それはまた危なっかしいな」

「露伴先生にも言われるってことは相当だな……」

僕達の雑談に乗っかりながら、勝手にじろじろとカーテンの向こう側を見ていた露伴先生が不意に声を上げた。

「あれを見る、物取りでも入ったみたいだに部屋中ひっくり返されてるじゃあないか。これは慌てて家を出ていったみたいだな」

「洗濯物がそのままなの？」

「そう、そのままなのだ」

「………… 今日は一日晴れてるから取り込まなきゃいけないのに放置されてるぞ、ジョルノ。湿ってる」

「朝出かけたきり?」

「僕が見かけた車のまま、帰ってきていないらしいな」

離れた駐車場を一応確認してみたが、空っぽだった。

「どうします?」

「これ、使ってください」

「なんですこれ?」

原稿用紙を受け取ろうとしたら露伴先生に取られてしまった。淀みなくめくられて行く紙の乾いた音がする。どうやら露伴先生は速読もできるらしかった。

「ふむ、なかなか面白い題材じゃあないか。荒削りだが熱意を感じる。宝石の原石だな、投稿するほどの推敲はないが一番大事なところがかけている」

「千帆にいつてやってくれ。小説家志望なんだ。ピンクダークの少年の漫画家に褒められたと知ったらテスト返上で没頭するに決まってる」

「君が読んであげているのか。将来の原作者になるかもしれないから大事にしてあげてくれよ、くれぐれも」

「………… 考えておく」

いいことをしてやったと自画自賛気味な露伴先生は琢馬にその車が走っていった方向を聞いた。

「そうか………… それなら別荘地帯だ。バブルが崩壊したと同時に売りに出されてゴーストタウンみたいになっっている」

康一先輩が山岸先輩に拉致監禁された別荘があるというあれか、とぼんやり考える。

「ぼよん岬か、千帆が熱心に調べていたな」

僕は思わず閉口した。まさか小学校からの友人がその噂の当事者だとは思わないに違いない。ここまでスタンド使いとの接点が多く、家族にもスタンド使いがいるのに、双葉千帆だけがただの一般人と考えると詐欺のように思えてくる。スタンド使い同士の引力に巻き込

まれてぐるぐる回っている衛星みたいなものだろうか。

すっかり満足したらしい露伴先生から原稿用紙を受け取った僕はそれをツバメに変えた。

「今更なんだが、君は驚かないんだな」

「ジヨルノがそのスタンドを使いこなすまで色々あったから慣れた。季節外れの昆虫や植物が大量発生して騒ぎになっていたからな」

「ああ…… そうか、初流乃君のスタンドは一般人にも見ることができるとか」

「そういうことだ」

我関せずという顔をしてツバメが飛んでいく。やはりぼよん岬の方だ。ずいぶんと遠くに双葉は誘拐されたらしい。僕たちはタクシーを探して大通りをいくことにした。

バブル景気の際にはリゾートマンションが相次いで建てられたり、別荘地ではなかったところにまで開発の手が伸びた。S市の別荘地帯もまさにそうである。

本来の利用目的ではなく、投資・投機目的をうたって各地で開発・分譲が行われた例も数多い。このためバブル期に開発された別荘地は元々の条件が悪く利用価値の低い場所や、道路すら造成されず整備自体がろくに行われていないような土地もあり、バブル崩壊とともに売却されたり、放置されて荒地・廃屋となったりしている物件も見られる。

原野商法やそれに近い詐欺的手法で辺鄙な場所の土地や建物を売り付けた例も少なくない。

バブル期以降、一部の別荘地はなお活況を維持しているものの、ニーズの変化や長期間に及ぶ個人消費の落ち込みなどから日本全体においては旧来型の浮世離れした避暑や別荘レジャーは終息に向かいつつある。

バブル期にみだりに開発を行った新興別荘地は廃れた。大方の別

荘は値崩れしている上に売れず、衰退する別荘地も増えている。

おかげで治安の悪化やスラム化も叫ばれているようで、このあたりも例外ではなさそうだった。ツバメが旋回する所にあたりをつけ、僕はタクシーを降りた。

「あの別荘ですね」

「本当に優遇されていたんだな、愛人一人に別荘だと？スナツクのママに入れ上げたおっさんみたいなことするんだな、双葉さんの父親は」

「耐震偽装を隠匿するための口止め料としては安いんじゃないかな」

「なんだって？」

「そういう噂があるというだけだ」

琢馬はどこかトゲがある言い方で呟く。僕は話がどう移り変わってゆくのか見当もつかず、ただじつと露伴先生と琢馬の話に耳を傾けた。明らかに露伴先生はグツと心臓を引っ搦んで、云い知れぬ好奇心の血を波打たせているのがわかる。なにやらスイッチが入ったらしい。

六割の好奇心と四割の野次馬根性とに動かされて、呼吸をするのさえ忘れていたようだった。イライラし始めた琢馬を横目に僕はツバメを探す。

周囲の音が、見覚えのない筆跡に吸い込まれるみたいにして黒い翼がすーっと遠ざかる。心の奥底で本能の光がまたたいて、ツバメは帰省本能に従い、迷うことなく飛んでいった。

「ここだ」

「しかし、不思議なこともあるもんだな」

「なにがです？」

「初流乃君は知らないのか？この辺りはたしかに別荘地帯だがぼよん岬が目と鼻の先じゃあないか。最近ここいらはあの岬のおかげで観光地になっているんだよ。なんでも両思いになるとかなんとかで。今日は休みだったのに人っ子一人いないじゃあないか」

僕と琢馬は顔を見合わせたのである。

メモリー・オブ・ジェット2

露伴先生が気づいた違和感を検証してみたところ、予想以上に事態は深刻だった。

「ダメでした、いつまでたつてもこない」

僕は首を振った。ここまで乗り付けたタクシーに戻ろうとしたのだが、辿り着けないのである。どうやら屋敷から50メートル以内には一般人は辿り着けないようだ。もしもに備えて距離をおいたのだが裏目に出てしまった。諦めて帰ってきた僕に琢馬はそうかとだけ返した。

「やはりそうか…… さつきから同じタクシーに住所を伝えているんだが、たどり着けないと気味悪がられてもうかけてこないでくれ、だよ」

電話ボックスから出てきた露伴先生はどこか嬉しそうな顔をして答えた。どうやら僕が待機しているタクシーに辿り着けないことを見越して、タクシーから近づくように手配してくれていたらしい。

「僕達は今まさに怪談の最中にいるのだ…… なるほど、こんな感じなのか…… いいネタになりそうだし！」

どこに忍ばせていたのか、メモ帳にざかざかと書き始めた露伴先生を尻目に琢馬はなにやら考え込んでいる。

「周りから見えなくさせる、から、隔離する、に強化されてるように思うのは気のせいか？ ジョルノ。明らかに俺達は今、異空間に閉じ込められている」

「明らかに射程範囲が伸びている…… あの時は突破できたから、また出来ると思っ込んでいた…… まさかこうなるとは」

「あれから4年経っているから…… 成長したのか？ 誰かが外に持ち出したことは明らかだからな。きつと驚いたに違いはない…… 誰にも見つからないはずの遺体が発見されて、未解決とはいえ、事件になったわけだからな」

「そうですね。あれは事故だったことになっているから、時効はすでに成立している」

「その間に老夫婦は相次いで亡くなってるから訴える遺族はもういない」

「いない？」

「そう、いないんだ。もうこの世界のどこにもない」

「そうですか」

「ああ」

「……やはり警戒してスタンドが成長したのかな。スタンドは追い詰められると成長するものだからね。だいたい違法建築に時効はありません。時効というのは犯罪の証拠が時間とともに立証が難しくなるから存在するのですが、違法建築は建物が無くならない限り、その立証はできませんから……」

「ああ、そうか、なるほど。去年から妹歯だかなんだかが似たような耐震偽造をやらかしているからな……業界全体が騒がしくなっている……危機意識を持ってもおかしくはない」

「んん？さつきから話をきいていれば、君は双葉さんの父親がこの現象の犯人だといいたげだな？」

「千帆も織笠花恵もスタンド使いじゃあないから、消去法だ」

「スタンドの矢が行方不明だからたまたまいられた可能性もありますけどね」

「たしかにそうだな」

「どうしていきれるんだ？」

「僕達は似たような現象に遭遇したことがあるんですよ、露伴先生。その時は出られたんだ」

「たどり着けたのに出られない……こちらがメインの能力か？」

「おそらくは」

「ところでさつきから遺体がどうか不穏な言葉が飛び交っているんだが教えてもらえないのか？」

しばし沈黙した琢馬だったが、散々迷ったあとで小さな声で呟いた。

「実は……まだ千帆との……その、関係に……許しをもらっていないんだ、先生……」

「おお、そうなのか。で？」

「今、アンタに明かすと……いつになるか……わからないから……」

「ああ、なるほど。すまない、僕としたことが迂闊だったな、将来有望な原作者の未来を閉ざしてしまうところだった。わかった、その口振りだと終わったら話してくれるらしいからな、いいとも。待っていてやろう。具体的にはいつくらいだ？」

「……そうだな……そこまで考えたことはなかったが……冬くらいなら」

「今年の？」

「今年の」

「おいおいおい、君はそれまで僕や双葉さんを待たせるつもりなのか？」

「……………」

「ああすまない。彼女の父親に会うってことは、それなりに心の準備がいるっていうもんなツ！野暮なことを聞いてすまないね！」

「……………」 ジョルノ、よくこの人のアルバイトをしていられるな」

「僕に言われても困りますよ。この人は本当に時給がいいんだ。アルバイト求人の時給をみてため息をつかなくていいのは本当にありがたいんだ」

琢馬は小さくため息をついたのだった。

ナイフに晒されながら双葉はオリカサハナエと数時間が過ぎていた。

「時間だけならたっぷりあるんだから、ちよっとお話しましょうよ」

オリカサハナエはブツブツと話し始めた。

不動産購入において欠陥物件をつかまないようにすることがとて

も大事だということ、論を待たない。どんなに立地や建物の仕様が気に入っても、住宅として機能しない欠陥物件であつたら、購入後に思わぬ出費を強いられたり、物件を手放して借金だけが残つたりという、

悲惨な結果を招くことになりかねないからだ。残念ながら、投資対象となる住居用物件の中には、欠陥住宅と呼ばれるものも存在する。そこで今回は、欠陥住宅を避けるために、内覧時に欠陥を見抜くポイントについて教えてあげるわ、とオリカサカナエは双葉にいった。

欠陥住宅とは、建物の種々の欠陥や不具合により、住居として最低限備えるべき重要な機能・性能を有しない住宅を指す。具体的には、雨漏りや床の傾き、壁や柱の傾斜、基礎の陥没、気密・断熱・通気性の不良などで、私たちの目に見えるものも見えないものもある。

住宅とは、人の居住を目的とした建築物であり、居住者を暑さや寒さ、風雨、騒音などの外的環境から守り、快適に過ごせるものでなければならぬ。こうした目的を果たせないものは、すべて欠陥住宅に該当すると言つて良い。

欠陥住宅が広く認知されるようになったのは、1995年に起きた阪神・淡路大震災。震災の死亡者の9割近くが、建物倒壊などによる圧死であつたと言われている。「倒壊した建物の多くは、建築基準法などが定めた安全基準を満たさない欠陥住宅だったのではないか」という考察と調査結果から、建物の安全性や欠陥住宅に関心と注目が集まるようになった。

それ以来、建築物の安全性に対する目は厳しくなつた一方で、かつて世間を騒がせた耐震強度偽装問題のように、「安く、早く」を求める発注者と、設計・施工者によるずさんな施行管理や手抜きが原因で、見えない所に重大な不具合を抱えた欠陥住宅は存在し続けている。

消費者や投資家は、こうした欠陥住宅を購入しないよう、物件を見る目を養い、自らを守るより他に方法ないのが現状だ。

「知ってる？ 双葉千帆さん。欠陥住宅ってね、時効がないのよ。証拠は残るから」

双葉はにわかには信じられなかつた。一級建築士である父親が欠

陥住宅を売りさばいていて、その口止め料として目の前の女性が愛人で、嫌がらせしているのを黙認しているだなんて。

「欠陥住宅を見抜くポイントを今から教えてあげるわ。一番手っ取り早い方法は、実際に物件を内覧した時に直接チェックすることだよ。ほら、たちなさい。私がわざわざ教えてあげるんだから」

ビー玉やピンポン玉を床の真ん中に置いて転がらないか。転がれば、床に傾斜がある可能性がある。

水の入ったペットボトルやコップを床に置いてみて、振動がないか。水面の揺れがあれば、耐震性に問題がある可能性がある。

建具や柱に、水平器や重りをつけた糸など垂直なものをあてがい、ズレなく垂直に重なるか。水平・垂直にズレがあれば、建物にゆがみが生じている可能性がある。

床を隅々まで踏んで歩いてみて、フローリングの浮き沈みや感触の違和感がないか。不自然な沈みは、土台や基礎などに陥没や腐敗が起きている可能性がある。

部屋の隅やクロス・木製建具にカビや黒ずみ、水の浸み跡などがないか。該当箇所があれば、雨漏りや水漏れ、結露の可能性がある。

窓や戸がスムーズに開閉できない。建物全体のゆがみや、取り付け不良の可能性がある。

窓や戸を閉め切った時に、妙な匂いがこもらないか。薬臭さやカビ臭さがあれば、建材やのり・塗料などにアレルギー物質や有害薬品が使用されていたり、見えない部分にカビが繁殖していたり、腐食していたりする可能性がある。

収納部分や小屋裏などに、手抜き工事がないか。表から見えない部分に手抜きがあれば、他の部分にも重大な欠陥がある可能性がある。自分で出来る検査は全て当てはまってしまった。

「ここはね、あなたのお父さんが私にくれたのよ。効率いいわよね、一番欠陥が多くて売れないからくれたのよ。私が文句言えないと思って。ここほどじゃあないけど、あなたのお父さんはたくさん売りさばっていたのよ。どんな気分かしら、そのお金で生きてきた気分は？」

殺意のない隔離空間ほど困るものは無いと純粹に僕は思う。今までの敵はまさしく殺意でもって僕に立ちはだかつてきたし、それを退けるには戦うしかなかった。だが今回のスタンド使いは一般人にしかこの能力を使ったことはないはずだ。

おそらくは特定の場所に人間を近づけさせない能力。指定した場所は周囲の人間の方向感覚がおかしくなったかのように、視界から消え去ったかのように不思議と誰も近づかなくなってしまう。

「ある人間のいる場所」を指定すれば他の人物がどれだけ望もうとある人間に近づくことはできなくなる。本体が特別に指定した人物は近づくことができるようになるほか、琢馬がいうには鼠などの小動物には影響しないスタンド。

一般人に対して殺意を持って使用すれば直ちに死なせることは出来なくてもいずれば死なせることが出来る能力だ。それよりも誰にも見つからない、隠して置ける、これが本命だろうか。

隔離するだけだから、酸素はあるし、監禁場所によっては私生活も困らないに違いない。本人が世話を焼いてやれば餓死はしない。だが一度も世話をやいてやらないとしたら。

「人間は食べ物を食べずに2ヶ月の間生き続けることができるらしい。水がなければ1週間もあれば死ぬが」

琢馬はスタンドを発動させるまでもなく、すらすらと知識を披露し始める。自分の母親が餓死で死んだのだ、どのように死んだのか知りたかったに違いない。世間話でもするみたいに告げるのだ。

人の身体は通常の間腹状態を過ぎると、脂肪を燃やし始め、ブドウ糖を作り出す。体ができるだけブドウ糖の燃焼をしないようにし、通常状態の体を、必要な分だけブドウ糖を生成するようにするのだ。平

均的な人では、空腹を感じたり不機嫌になる前に、ブドウ糖の燃焼によって6時間保つことができる。

それも使い切ると、今度は脳がブドウ糖の消費量を減らす。いわゆる脂肪燃焼だ。脂肪燃焼は数日から2週間つづき、肝臓が脂肪酸を代謝し、ブドウ糖に変わり主要なエネルギー源となる。この化合物は、3つの違った水溶性体となり、肝臓から心臓と脳に送られる。

最終的には体内のプロテインを消費し始める。その結果急激に筋肉が衰えはじめたり、体の機能が低下していく。ここまで来ると自分の体を食べて生き延びているような状態で、最後が近づいていると言えるようだ。

食べ物なしでも最大2ヶ月は持つ。医学的に言えば、飢餓は体が充分なカロリーや栄養を取り入れていない時に起こる。飢饉や貧困から引き起こされることもあれば、医療のために自発的に飢餓状態になることもある。生物学的飢餓は、どんな原因があるにもかかわらず同じプロセスを踏む。本当にそのプロセスは同じなのだ、残酷な程に。「酸素がないために死に至る時間は、5分から10分。水がない場合は、2日から最大で7日持つと言われている。状況にもよるが食べ物なしの場合は最大で2ヶ月持つと言われている。どれが残酷なのかは、希望を持っていられるだけ絶望が深まるのだから間違いなく後者だろう」

「わからないのは、双葉さんの父親が矛盾しているということだな。愛人と仲違いして監禁するならまだわかるが、オリカサハナエは自分からここに来たんだらう？それに双葉さんまでいる可能性があるなんて」

「千帆の父親は孫を見るのが夢だそうだから、一人娘を溺愛している。離婚した場合高確率で母親に親権が行く日本においては珍しく父子家庭だ」

「そうなのかい？ならますますわからないな…… スタンド使いとはいえ双葉さんの父親のスタンドの使い方はちゃちだが、実に共感できる使い方だ。しかも現時点では犯罪に問える要素がひとつもない」

「被害者が勝手にその空間から出なかったからな。認知症、錯乱状態、いろんな理由を後付けされて不幸な事故死と認定される」

「そう、それだ。なのに今回はあまりにも矛盾しているぞ？」

琢馬はたんたんと屋敷を睨みつけている。

「どうします？今回の件は君がなにをすべきか決めるべきだ」

長い沈黙だった。

「ジヨルノ」

「はい」

「ここに電話をかけてくれ。先生でもいい」

琢馬はメモにボールペンで走り書きをして渡してきた。

「いや、僕はやめておこう。万が一双葉さんの父親が僕のことを知っていたら、あらぬ誤解をされる必要があるからな。僕はここにいなかった、それが一番いいに決まっている」

「そうですか、なら僕が」

「今、まさに繰り広げられている昼ドラマも真つ青はちやちな展開がスタンドをまぜたとたんにミステリ帯びてくることを僕はなんとしても書き留めなければならぬんだ。これは義務だ、僕の漫画家としての！」

「……………俺は千帆のところについてくる」

「よし、僕も同行しよう」

「……………わかった」

「ちなみに僕はなんていえばいいんです？」

「今起こっていることを伝えるだけでいい。それだけで千帆の父親はとんでくるからな」

「なるほど……………蓮見くんは次の犠牲者が自分にならないように上手くたちまわるわけだな。好感度を稼ぐことは大切だ。頑張れ」

僕は思わず笑ってしまう。ばつ悪そうに僕を睨んだ琢馬だったが露伴先生が早く行こうと急かすものだからため息混じりに行ってしまった。

一人残された僕は電話ボックスに入り、入口を閉め、10円玉を入

れて電話をかけ始める。呼び出しコールは数回。

「もしもし、双葉ですが」

どこかイラついている様子の男の声だった。おそらく早く愛人が餓死してくれと祈ってやまない、それでいて双葉千帆が死ぬことを仄めかされて警察にも相談できずいらいらしている声だ。

「オリカサハナエが双葉千帆を別荘に監禁している」

「なんだって？今なんて？」

「オリカサカナエが双葉千帆を監禁している」

「君は一体誰なんだ？なぜ知っている？ハナエの愛人か？」

「オリカサハナエは双葉千帆と餓死しようとしている」

「……………ツ!?!」

壊れた機械のように僕は繰り返した。しばらくの沈黙の後、電話はきれた。叩き切られたとっていいかもしれない。僕は電話ボックスを出て屋敷に向かうことにした。

屋敷に入るとドアは空いていて、廊下には誰かが争ったような後があつた。

「……………なにしてるんです？」

血だらけの包丁が転がっている。傷だらけの双葉を抱き抱え、琢馬は遅かったなど無機質な目を向けた。僕が聞いたのは、全身じゃばらおりのオリカサハナエを一心不乱に読みあさっている露伴先生だ。

「すごい、すごいな……………ここまで男を金に変えることに全人生を捧げてきた女を僕は見たことがないぞ……………！」

どれを切り取って持ち帰ろうか露伴先生は本気で悩んでいるようだった。なにを書き込んでいるのかと思つたら、ここの乱入事件についての記憶を忘れるとあつた。攻撃できない、は一般人だから書く気もないらしい。

「双葉さんを散々苦しめた女だ、何かリクエストはあるか？」

露伴先生なりの報酬らしい。琢馬は首を傾げる。

「ああそうか、言つてなかったな。僕は今君が言うことをこの女に実行させることが出来るのだ。この漫画を見せることだな。おっと、今、みるんじやあないぞ。完結してない恋愛漫画は趣味じやあないん

だ」

「……………僕と千帆に近づかない」

「そんなんでいいのか？近づいたら交通事故とか双葉さんに遺産を残すと遺言を残して焼身自殺とかでもいいんだぞ？ここにくるまでだ
いぶん僕はイラついているからな」

「……………なら、僕と千帆に近づいたら自殺する。遺言とかはいらない」

「いいだろう、これが僕の報酬だ。いいものを見せてもらった！」

きつとこれから来る双葉の父親も同じ目に会うんだろうなと思つた。もちろんその通りになった。

「ごめんなさい、琢馬先輩…………… 汐華君…………… 岸辺先生…………… ありがとうございました」

さすがに憔悴している様子の双葉は帰りたくないようで、このまま琢馬の家に泊まるらしい。僕は露伴先生とタクシーに乗り込むことにしたのだった。

オリカサハナエが突然行方不明になったらしいが僕の関知するところではない。

ハーヴェエスト

足で大きくブランコを一振りするたびに軋り音は、たえず歯ぎしりのようにきいっ、きいっ、きいっとなんと金属のこすれあう規則正しい音がする。揺れるブランコの後ろに立って、子供の背中を一定のリズムで押し続ける錆びた鉄のぶらんこが揺れる音だ。

小学生達がランドセルを近くの長いベンチに置き去りにして、どちらが遠くまで靴を飛ばせるのか競っている。昨日まではどこまで遠くにジャンプできるか競争していたらしいが、ひとりが足を踏み外してコケてしまい、ブランコが直撃してからはもうやらないことになっていた。

通りすがりのリーゼント高校生が痛い痛い飛んでいけで、本当に怪我也も傷もたんこぶも痛みまでも飛ばしてくれなかったら、きつと大変なことになっていたに違いなかった。

きつと今日も会えるだろう、と小学生達は考えていた。この間、他の学ラン姿の友達とゴミ箱をひっくりかえしたり、仕分けしてニヤニヤしたり、喧嘩したり、よくわからないが楽しそうに去っていったから。改めてお礼を言おうと考えていた。

ここはS市の市街地から近距離ながら、自然林や人工林に囲まれた緑豊かな大規模な公園だ。

美しく手入れされた近代庭園やスイレンが咲く大池、森林浴ができる園路、彫刻を眺められる広場など、まるで森に迷い込んだかのような景観が広がる。子ども連れにはうれしい、フィールドアスレチックも完備。遊具はローラー滑り台やつり橋、ロープ縄でできたアスレチックなどが一体化したコンビネーションタイプ。自然の中で元気いっぱい遊びたい子どもが一日中自然の中で思いつき遊びでフリッシュしたい時におすすめの公園でもある。

広場を囲んだ樹々が太陽の日差しを受けてきらきらと立っている。5月に入り、暖かくはなってきたが夏はまだ遠い。公園の樹木の枝が影を作り、そこはまだ肌寒く感じる季節である。潮が満ちるように賑やかさの始まるうとしている。

そのアスレチック広場から少し外れると遊歩道があるのだが、公園の薄暗いトイレは、壁は落書きと蜘蛛の巣で汚れ、小便の匂いが鼻につく。近くには水銀灯が一本高く立っていて、その明かりが犯罪を防ぐために隅々までを照らす設計になっている。その奥の雑木林がセツトになっており、芝生を縁どる散歩道では、ホームレス達は、朗かないびきをあげて眠っていた。

ちなみに思いつきり走り回れる広々とした芝生広場や花壇の花々が美しい池はそのつつきつた先にある。

本来ならホームレスたちがコソコソしている程度で、静かなはずの遊歩道で、一人の中学生がうずくまっていた。七色に変わっていくコンクリートに、さつきからジャラララララと古びた音がたくさん鳴り続けている。リレー競争のバトンみたいに目まぐるしく、たくさんの小銭がその中学生の前に山積みになっていくではないか。

塵も積もれば山となる。濡れ手に粟を掴むように、まさに彼は今、ボロ儲けしているのだ。こないだ喰るほどの大金を逃してしまったために、余計に気合いが入っている。

「はしはし」

小銭が貝殻の裏のようにきらきら光る。どれくらい溜まっただろうか。眼の飛び出るような大金になっただろうか。気がせいしてしまうのは、こないだ500万円なんて大金の小切手を見てしまったからにほかならない。入れ物の中のお金が水から上がったばかりの魚のようにイキイキと躍動していた。

かたちのあるもので、お金を積んで買えないものはあまりない。だから少年はお金を貯めるのだ。

いれずみのような十円。茶色い五十円。錆びまくっている五百円。しつとりとしている一円玉。青いカビのはえた見たことがないコイン。

よく見ると全ての硬貨には、虫のような不気味な造形の生き物がいる。四方八方からわらわらと集まってくるではないか。

「んんー？見たことないお金だどー？もしかして、昔使ってたお金っ

てやつかなあー？おつ、こつちは穴が二つあるど！これは価値がありそうであー！」

ニコニコしながらジャラララと小銭を容器に入れていく。どんどん増えていくお金を後で選別して骨董商をやっている知り合いのお兄さんに売りに行かなくてはいけないと少年は張り切っていた。

「みんなこの調子で拾ってきてねー！しししつ、いちまんえん位にはなったかなあー！数えるの楽しみだなあー！」

あまり賢そうではない顔つきをしている少年は、ぶどうヶ丘中学の制服を着ていたが、明らかにサイズが横にあつていなかった。ゆうに100キロは超えていそうである。足元で無数に蠢く生き物たちに囲まれて間の抜けた笑い声を上げた。

彼の名前は矢安宮重清。通称重ちー。彼はハーヴェストという無数の昆虫に似た群生型スタンドの使い手である。社王町中から硬貨という硬貨を拾い集めている途中だった。

「五百万円は仗助たちと三等分になったけど…… やっぱり…… やっぱり！おらが一人で集めたお金は、おらのものだど……！」

ここまで言ってから、キョロキョロと重ちーはあたりを用心深く見渡した。見知った顔がないことを確認するなり、ほつと息を吐いた。なんのために場所をいつもの場所から変えたと思っているのだ。仗助たちに見つからないよう、またこつそり集めているところだったのだ。居場所がバレたら意味が無いではないか。

今はおそらく十万円くらいだ。毎日集めたら何日くらいで五百万円になるだろうかと考え始めるが、両指を超えたあたりから数えるのが面倒になったのか幸せそうな顔で笑った。誰がいる訳でもないが誤魔化したとも言う。

容器いっぱい硬貨を敷き詰めていた重ちーはいつもと違う感触に手を開いた。その拍子に指の間からたくさんのお金が転がっていく。ハーヴェストたちは直ぐに山の方に戻してくれた。

「うわわわわ、まあたお金が曲がってるど……」

そこにはぐんにやりと曲がっていたり、ドロドロにとかしてまた固めたり、変な形をした硬貨がたくさん固まっていた。

「うーん……最近多いなあー。困るど……お金はぐちゃぐちゃになってたら銀行も骨董屋の兄ちゃんも受け取ってくれないのに……」

ため息をついた重ちーはどうしようかなあとほほをかいた。このところ、破損した硬貨が多いのだ。この国ではお金を傷つけることは禁じられているため、重ちーがわざとやったと言われたら困る。

「……うーん……うん？」

重ちーはハーヴェストたちを見ていて、ふと気づいた。

「どーしたんだど……それ……痛くない？またいじめられたんだど？」

ハーヴェストはスタンドだ。スタンド使いにでも見つかって攻撃でもされたのだろうか、と重ちーは何体かのハーヴェストを手にした。

「酷いやつもいるもんだど」

幸いハーヴェストは数が多すぎてちよつとやそつとの個体を破壊されたところで重ちーにフィードバックはない。だが歪んだ硬貨が増えるにつれて、そこにいったハーヴェストがこうして傷だらけになったり、穴だらけになったり、ドロドロになったりすることが増えてきた。そこにたくさんのお金があり、壊しているのはわかっていたが重ちーはよくわからなかった。

「うわっ、わわわっ、ハーヴェストが溶けてるううっ!？」

重ちーを取り囲んでいるハーヴェストのある地点に凹みが出来たかと思うと、お風呂の栓でも抜いたかのようにハーヴェストが次々と消えていくではないか。ハーヴェストたちは驚いて逃げ惑い、あつとつと間に溶けていった個体たちのいた場所はなにもいなくなった。

「……?」

そこにあるのは、ドロドロに溶けかかっている五百円玉。重ちーは恐る恐るそのお金を拾い上げた。チクツとなにかが刺さる気配がした。痛いと五百円玉を投げた途端、重ちーは目を丸くする。

「うわあああっ!?!」

重ちーの悲鳴が上がった。なんと指先がないのだ。手がないのだ。

現在進行形で腕がどんどん溶けているのである。

「だ、誰かつ…… 仗助つ、仗助えええつ！」

とつさに仗助のクレイジーダイヤモンドが脳裏をよぎった重ちはぶどうヶ丘高校に行こうと走り出す。その間にも溶解は進み続けていた。このままでは死んでしまう。どうしてこんな時に限っていつもの場所から移動していたのかと、重ちは本気で後悔していた。

「大丈夫ですか、矢安宮君?!」

「あつ、ジオルノつ、ジオルノー！仗助呼んでほしいぞー！助けてー助けてえ、オラ死にたくないっ!!」

たまたま通りかかったのだろう季節外れの転校生を見た時、重ちは助かったと思った。ジオルノは仗助や億泰と仲がいいのか、よく一緒にいるところを見たことがあったのである。

「わかりました、わかりましたから落ち着いてください、矢安宮君！僕は仗助先輩と違って治せませんからすすごい痛いですが、我慢してくださいね、死にたくないでしょう?」

「?!」

「ゴールド・エクスペリエンスツ!!」

ジオルノの後ろから金色のテントウムシをモチーフにしたと思われるスタンドが現れたとき、重ちは驚きのあまり反応が遅れた。ゴールド・エクスペリエンスと呼ばれたそれは、重ちの肩まで溶解しかかった腕から何かをとる。重ちの溶解が止まるが、どろりとジオルノの指先が溶け始めたではないか。

「うわわわわあ—— ツ！ジオルノ、ジオルノが溶けちゃうぞー！そんな、どうしよう、オラのためにツ!?!」

「大丈夫です、死ななきゃ安い」

ジオルノは驚くほど冷静にスタンドの手の中にあるものを見つめた。

「ゴールド・エクスペリエンス」

その小さな針が蛇に変わる。そしてジオルノは惜しげも無くその牙に指を突き立てた。僅かに眉が歪むがそれだけだ。よし、とだけ言っただけ、ジオルノはその蛇を重ちに投げつけた。

「うぎやあああっ?!」

「安心してください、これでスタンド毒は解毒出来たはずです」

「な、ななななっ?!」

「空条さんに話を聞いていてよかった……運がいいですね、矢安宮君。君は運がいい。その幸運に感謝すべきです。僕のアルバイトの帰りが遅かったら、君は今頃煮凝りになっている」

「わ、訳わかんないこといってないでとってー!蛇とってほしいど、ジヨルノおっ!」

「ああ、すみません。さすがに解除は出来ないの……そうだな……これでいいか」

飲みかけのペットボトルを捨てて、ジヨルノは蛇を中に入れてしまった。ほっとしたのか、ズルズルとその場に座り込んでしまった重ちーに、ジヨルノは近づいた。

「だいぶやられましたね、矢安宮君。大丈夫ですか?」

「大丈夫だけど大丈夫じゃないど……でもありがとう」

「お礼はまだいいですよ」

「へ?」

「ちようどいいから、僕がまた腕をつけてあげますよ。仗助先輩の家までは遠いですからね、さすがに目立っていけない」

「ほんとに!?!ほんとに腕つけられるんだど!?!ジヨルノすごい!」

「まだ実験中なんですけどね、大丈夫ですよ、きつとね。僕自身でやったことはなんともあるので」

「なら頼むど!」

「さつきも言いましたけど、僕は治すんじやあない。もう一回埋め直すんだ、しかも麻酔なしで。物凄い痛いですよ」

「えーつと、どれくらい?注射?」

「もつとかな」

「じゃあ……億泰のパンチ?」

「もう一声」

「まさか仗助のパンチ?」

「ラツシユくらいは覚悟してくださいね」

「や、やっぱり仗助に直してもらいたいど……」

「やだなあ、僕達同じ中学の仲じやあないか」

「ジョルノ目が怖いぞ！笑ってない！」

「本人の合意を得て出来るなんてめったにないんだ、さあ、こっちに來てください。男に二言はないでしょう？」

「うわああああ—— ツ!!」

重ちーはもう二度とジョルノに治療されたくないと思ったのだった。

「体が馴染むまで時間がかかりますし、これがなんなのか、少し話をしましょうか」

「ううう……痛すぎて頭に入らないど……」

「そんなに？それは大変だな、痛み止めでもします？」

「そ、それはもつと嫌だど…… ジョルノ、また蛇出してくるど……！」

「よくわかりましたね」

「やっぱりいいっ！」

「なら我慢してください。男でしょう、アナタ」

観念したかのようにがっくりと肩を落とした重ちーは、自分の片腕を持っていかれたスタンドについて聞くことにしたのだった。

「ついこの間、この街にスタンド使いを増やしていた音石明つてやつが捕まったんですがね、そいつ、遊び半分でドブネズミにもスタンドを付けてしまったんですよ。仗助先輩たちが既に回収したらしいんですがね」

「たちが既に回収したらしいんですがね」

「そうかあ……でもみんな捕まったならよかったど……パパやママが酷い目に合わなくてすむぞ」

「そのはずだったんですよ、今日までは」

「今日？まさかまだドブネズミがいたんだど？」

「そのまさかです」

「なんだってー!？」

ジョルノはそのスタンドの凶悪性は既に体感したはずだと重ちーに告げる。「毒針」で攻撃し、それを掴んで調べようとしただけで、手をドロドロに溶かしてしまおうというのだ。

「動物つてのは基本三大欲求しかないから、遠慮なくスタンド能力を使ってしまいます。人間みたいにタガがないから厄介だ。しかもスタンドのせいで知能が飛躍的に上がってしまうらしくてですね」

その性格は極悪そのもの。「自分のナワバリにいる者は人間だろうが仲間だろうが皆殺し」「てめーさえよけりゃあいいという……もはや、この地球上に生きてていい生物じゃあないなこいつは……」と仗助と一緒に交戦した人が評するほど残忍かつ狡猾で本能的。

スタンドで溶かした肉塊を冷蔵庫に入れ保存食にする。本来ネズミは行うことのない、同じ足跡を踏んで元来た道に戻る動きで追跡を撤く。仕掛けられた罠を持ち去り、逆に仕掛け返す。自身のスタンドが撃った毒針を岩に当てて跳弾させ命中させる。自身の残した痕跡を計算に入れた上で、スタンドの特性を發揮しやすい位置に、追跡者を誘い込む。など枚挙に暇が無く、ネズミの習性を熟知している人達を翻弄した。

本体の精神力により千差万別の姿や能力になるスタンドの中で、全くの同型・同能力という異色のスタンド。姿は4脚に支えられた大きな頭部に巨大な単眼を備えた小型ロボットのような外見をしている。ネズミが発現した割にはメカっぽい。

その能力は、スタンドさえも溶かしてしまう「毒針」を発射する長射程の『固定砲台』で、能力を使う際は大きく反転して逆側に備え付けられたロングバレルの砲身が標的に向けられ、後側に回った単眼の様に見えるものはターゲットスコープの役割を果たす部分となる。

針の射程距離は5 m以上。ちなみに脚に見える部分はスタンドを固定する台のようなもので、スタンド自体が移動する事は出来ないようだ。

スタンド能力の根幹となるその「毒針」の性質だが、これは対象を瞬時に死へ至らしめるのではなく、着弾した瞬間に『スタンド毒』とでもいうべきもので侵し、そのものの中身を徐々に溶かしてしまふ。毒針に触れたものは生物でなくとも溶かすことが出来る。5〜6発被弾させれば人1人程度なら容易にドロドロの肉塊に出来る。なお、溶かしたものを煮こぐりのように固めることも可能。

「しかもネズミはスタンドがそれぞれ特徴が微妙に異なってるんですよ」

3〜5発のバースト射撃、跳弾や偏差射撃も可能。射撃の際はスコープを覗く必要な個体。単発式、若干宙に浮いてる。スコープを本体が覗かずとも自動発射可能な個体。

「問題はここからです。遺体を回収したはいんですが、オスとメスだつてことがわかった。しかもそいつらはつがいだつた。つがいでスタンドを持った自分たちは他のネズミとは違う！という意識があったみたいですね。食物連鎖の上位生物である人間を食う立場になろうとしてあそこまで狂暴になったのかもしれないそうです。あのまま自分たちの子孫を増やして遺伝でスタンドネズミを量産し生物界の頂点目指したかったのでは、という疑惑が持ち上がったころ、出産の形跡があった」

出産の言葉に重ちーはざあつと血の気がひくのがわかった。

「スタンドというものは、誰かが覚醒すれば親近者も覚醒する可能性があるそうです。でも動物にもその可能性が適応されるのかわかりませんでした、この瞬間まで。でもアナタのおかげで残念ながら適応されることがわかった。しかもアナタの証言によれば随分前から歪んだ硬貨や溶けたハーヴェストがいたという。なら、答えはひとつです」

重ちーは悪寒が止まらない。知らなかったとはいえ、自分の最愛の両親も被害に遭うかもしれない危険なスタンド使いの存在に気づい

ていながら、深く考えたり調べたりしなかったことを。そのせいで地球上に存在してはならない悪魔のような存在がこの街に増殖しつつある事実だ。

「……………なんてことだ、なんてことしてくれたんだ……………音石明……………！」

ジョルノは静かに憤りを感じていた。そこにあるのは穏やかさすら感じる冷徹な怒りだった。

「嫌な予感はしていたんだ……………サクラにスタンドの矢を撃ち込むようなやつが、ずっと黙っていたようなスタンド使いだ……………おかげで被害が拡大している……………」

「何匹……………何匹いるんだ……………この街に……………その虫食いの子供たちは！ジョルノ！」

ジョルノは淡々と事実を述べる。音石がドブネズミにスタンドの矢で貫いた時期がそもその問題だったのだと。

かつての日本家屋では、天井に営巣するクマネズミと、台所や下水道に穴居するドブネズミが、生活の場を棲み分けていた。ハツカネズミは、もともと他の2種と比べると少ない。その後、第二次世界大戦後の都市化とともに、地下街や下水道など湿った場所を好むドブネズミが勢力を伸ばしたが、1970年ごろからの高層ビル建築ラッシュとともに、乾燥した高いところを好み登攀力に優れ、配管等を伝ってフロア間を自由に行き来することができるクマネズミが目立ち始めた。

現在、家の屋根裏に生息するのはクマネズミであるが、近年は再開発の影響で地中に生息しているドブネズミがすみかを追われて都心に出てきており、渋谷や銀座の繁華街では、ドブネズミも頻繁に見られるようになった。

「街の中に……………！」

ぞぞぞつとしたのか、重ちーは制服を握りしめた。

「虫食い達は農家をテリトリーにしていたが、自分が一番という思想です。自立した瞬間に子供たちは敵となる。追いつて来られたに違いない」

本来捕食者となるはずのネコ・イタチ・フクロウ・ノスリ・アオダイショウなどから逃げるため、子供たちは天敵が少ないこの街に逃げ込んだ。そうジョルノは考えた。ハーヴェストが社王町限定のスタンドだから間違いのないのだ。

いつの間にか家の中に密かな気配を感じさせ、夜中には天井裏で運動会を始めるねずみ。ねずみは人のいない時間帯や人のいない場所を狙って行動しているため、家の中においても気づきにくく、増えたらねずみの発生が発覚することもある。

ねずみは繁殖力に優れており、個体自体の寿命はそれほど長いわけではないが、短い寿命の間に異常な繁殖力で数を増やしていく。寿命は短いものの、生存期間の多くが繁殖期間となっており、短い妊娠期間を経て一度に多くの子供を産む。ねずみの種類別では、クマネズミやドブネズミは寿命が3年ほどで、生後3ヶ月くらいから2歳くらいまで繁殖が可能。つまり、音石はたまたまその番を矢でいってしまったのだ。

早い時期からの繁殖開始と短い妊娠期間によって、ねずみは脅威のスピードで繁殖を進めていく。そもそもねずみの異常な繁殖力は、野生動物としての種の保存に関係している。捕食される側になりやすいねずみは、異常な繁殖力をもって捕食し尽されるのを防いでいる。ねずみは野生の世界では捕食される側として弱い立場だ。たくさんの子を産むことで種を維持している。そのため、絶えず妊娠と出産を繰り返すスタイルを取っており、特定のシーズンに発情期を迎えることはない。1年中が繁殖する時期なのだ。

「間の悪いことにドブネズミの繁殖のピークは、春と秋なんですよ」「じゃあ……どうやって捕まえる?」

「ねずみの活動時間は日没直後と夜明け前がピークとなり、昼間はあまり活発に動きません。ねずみの存在に気がつくのが夜なのも夜行性の動物だからです。悪いことは言わないから昼間の方がいいですよ」

ジョルノはため息だ。

「ドブネズミは妊娠期間が20〜21日、1回の出産で7から9匹程

度を生み、1年で5、6回くらい妊娠します。つまり、1年で大体30匹以上繁殖可能ということですよ。死者とか被害がやばいことになるな、間違いなく」

ねずみは見た目以上に警戒心が高い。だから、警戒モードになったら先ず「見つからない」と思った方がいい。本当の油断が来るまで耐えるしかない。ジョルノは空条さんも回復役の仗助先輩が居たからこそ攻略出来たけど、一人で虫食いを攻略するのは非常に難しいと考えていた。

「ほっとけば一年ほどすれば勝手に寿命で死ぬが、孫にまで発現したら目も当てられない」

これアンジェロよりやばいんじゃないか？とジョルノは言いながら気づいてしまう。ネズミのスタンド使いが鼠算式に増えまくって親二匹が人間の煮ごり生成。子ネズミの能力が煮ごり生成に近い能力にでもなってみろ。マンションとか集合住宅に住まれてもしたら一瞬でネズミの国が出来るじゃないか。

「毒針を防ぐことができる。本体を見つげだすことができる。本体に攻撃を当てることができる。これをスタンド一体で賄うのは大変です。人を呼んだ方がいいですね」

そうだと、とジョルノは重ちーに聞いた。

「明日、学校サボりませんか？ねずみの駆除は予防と同時にしなくちゃあいけないからな」

「わかったどー！」

ハーヴェエスト2

承太郎の連絡により、スタンド使いたちは学校をいろんな理由をつけて休み、社王グランドホテルに集められていた。互いに知らない顔もいくつかあったが、仗助や康一が詳しくかったものだから情報共有は滞りない。みんなが揃う頃には第1発見者たちはすでに行動を開始していた。

承太郎が立てた計画はこうだ。まずはハーヴェエストが社王町中の硬貨とその場所の変に曲がっていたり、溶けていたりするものをなんでもいいから物体を持ち帰る。そこでだいたいのエリアを特定する。次にジョルノがゴールド・エクスペリエンスでその毒素から生命を作り出し、生体探知を利用して虫食いの子供たちの場所をピンポイントで特定する。

あとは最低2人でペアを組んで、それぞれの虫食いの子供たちを撃破していく。

承太郎と仗助がすでに親達と交戦経験、そしてハーヴェエストが被った被害の実例があるおかげで、それぞれのスタンドの対策を講じることができる。少なくともたかがねずみと侮ることなど、承太郎と仗助がいかに苦戦し死闘を繰り広げられたのかを聞けば、出来るわけもなかったのである。

虫食いの7から9匹の恐るべき子供たちの討伐にジョルノが宛てがわれたのは、昨日ハーヴェエストが1番被害を蒙り、ジョルノと矢安宮が腕を溶かされた1番規模がでかいと思われるエリアだった。

「社王町に地下街がなくてよかった……もしあったらスピードワゴン財団に封鎖してもらわなきゃあならないからな」

「代わりにアーケード街がたくさんあるど……色々反対とかあったってママがいったど」

「おかげでエルパルに行くだけでいいんだからよかった、よかった」

「バスに乗ろうジョルノ。いっちゃうど」

「そうですね」

ジョルノ達が目指しているのは社王町の玄関口である駅。東北地

方最大の都市S市の代表駅である。ジョルノが生まれた1985年に羽田空港便が廃止されてからは、新幹線が輸送を独占的に担っており、当駅の新幹線利用客は1日平均4万人以上となっている。

東北地方最大のターミナル駅となっている。「シヨツピング、食事、ホテル等の施設も充実し、文化の発信基地としての役割も担う駅」として、東北の駅百選に選定されるほどだ。

「1日4万人か……もし地下鉄から被害が拡大したら最悪だ……バイオハザードも真つ青だな」

「涼しい顔して怖いと言わないで欲しいど……」

重ちーはぼそりと呟く。

ジョルノは動物のお医者さんでも目指しているのかというくらい、ネズミに詳しい。承太郎とかいう人がジョルノに頼んだのもそれが大きいのだろう。

事実ジョルノはすでに駅の飲食エリアが怪しいと睨んでいた。ドブネズミは冷蔵庫裏・食器棚の背面などに住処を作り、湿気を好むため、水回りに近い場所が多いらしい。

「どうやって探るんだど？」

質問すれば暇つぶしがてらに教えてくれた。

ねずみが見せる動きの特徴として、壁際・家具のすぐ傍を通り、部屋の隅から隅へと移動する、というものがある。部屋の中央を横切っていく、というような動き方はほとんどしないということだ。

この「部屋の隅を移動する」という点についてはどのねずみにも共通している。狭いすき間などにも、好んで入り込む。

このため、ねずみが家にいることを示す痕跡、通称ラットサインは、大半が壁際や家具の側面などに集中する。これはねずみの存在を確かめたり、移動ルートを特定するのにも役立つし、粘着シートや捕獲トラップなどを仕掛ける際も、参考にすることができ。部屋の真ん中に置いてもねずみがそれにひっかかることは少なく、ねずみが移動する隅に置くのが効果的だということだ。

しかもねずみは動き回りながら尿をするという性質がある。そのため、ねずみが通ったあとには尿の跡が残っていく。人間のものに近

い刺激臭がするので、その発見は容易だ。

ねずみは部屋の隅を移動する習性があるので、フン尿もそうした場所に残り、ラットサインとなることが多い。フンの大きさ・形状はねずみの種類によって異なるため、そこからねずみの種類を推定することができるとができる。

「注意しなくちゃいけないのは、虫食いの子供たちがスタンド毒を克服しているかもしれないってことだ」

重ちーはぎよつとした。

ジョルノがいうには、近年では都会を中心に毒エサの効かないスーパーラットというネズミが急増しているらしい。報告されているネズミ被害の大半がこのスーパーラットによるものだという地域もあるほどだ。

スーパーラットとは、毒への耐性を持ったクマネズミのことをいう。クマネズミはもともと運動能力が高く警戒心の高いネズミであるため、駆除がしづらいネズミだ。ネズミは一世代ごとの寿命が短い上に一生で何度も子供を産む。そのため、毒エサを食べても生き残ったネズミ同士が子供を作ることによって強い耐性を持ったネズミが産まれてくることになる。

普通のネズミが毒や寿命で減っていく中、スーパーラットは出産のたびに増えていく。スーパーラットが出現した場合は、ネズミの胃液と反応して毒ガスを作る薬品であるリン化亜鉛を使用する必要がある。

ただし、リン化亜鉛は劇薬指定物であるうえ、子供やペットが誤飲してしまう危険性も伴う。ただでさえ捕獲が難しいとされるスーパーラット、無理やり捕獲を試みるより、専門家に依頼するのが確実に駆除できる方法だと言える。スタンド使いでなければの話だが。

「ドブネズミだって同じことが出来てもおかしくはないですよね」

「ひよええ……ネズミ怖いど……」

「ハーヴェストのおかげで絶対に近づかなきゃいけないわけじゃないのが有難いですよ。ありがとうございます」

重ちーはにへらと笑ったのだった。

「ところでジオルノ、あの農場から市内って遠いけど、ネズミ達はどうやって行ったんだと？」

「うーん…… あんまり考えたくないけれど、たぶん、あちこちに餌場を作ったんじゃないかな」

「うげげっ……」

「もしかしたら、ああいう、シャッター街とか……」

「……なあ、ジオルノ」

「はい？」

「……そういえば、やけに静かだど、このあたり」

「言われてみれば、一人もいないですね」

ジオルノは眉間にシワを寄せた。シャッター街とはいえど、井戸端会議をしていたり、椅子を出してのんびりしていたり、老人達はそれなりに日常を過ごしているものだ。この辺りのシャッター街は古くからやっていることも多く、通学路にもなっている。商店と住居が一体化しているタイプの場所なのだ。

「どんなスタンドか、見てみた方がいいかもしれないな」

「そうだと、いこう」

ジオルノは重ちーにハーヴェストの先行を頼みながら、自分も入ることにした。重ちーが狙われたらたまらないから、護衛がわりに犬を置いておく。

「異臭がする……」

シャッターが蝶になり、あたりに飛んでいく。

「魚屋…… たしか、ドブネズミは魚や肉が好きだったな…… 人間で狩りの練習をしていたかもしれないが……」

ジオルノはぶわっと立ち込めた異臭に顔をしかめた。魚という魚が中途半端に食い尽くされ、冷蔵庫に穴が空いている。

「すごい食欲の個体だな……」

ハーヴェストがミツケタゾ！と口々に叫んでいる。嫌な予感しかないが、ジオルノは意を決して冷蔵庫の穴を覗いて見た。

「これはッ……」

案の定、そこには魚屋の店主と妻と思われる人間がドロドロに絡み

合い、溶け合い、えげつない形に固定化していた。ジオルノが驚いたのはそれではない。その塊がところどころ透明になっていったからだ。「…… たしかに、あるな。宙に浮いてる訳じゃあないみたいだ」

透明ななにかが混ざっているのだ。一体なにが？ 仗助から透明になるスタンドに目覚めた赤ちゃんを拾ったせいで、親を探すのに四苦八苦していると愚痴を聞かされていなければジオルノも気づかなかったに違いない。

その赤ん坊は生後半年ほどであり、オムツもなにも着ていなかったが丸々と太った元気な赤ちゃんだそう。その時点でジオルノは自分のように虐待されたり置き去りにされたりしたわけじゃないんだろうなと思っていた。赤ん坊にだって感情はある。大声で泣くのは愛されていた証だ。仗助たちがくる寸前までその子はたしかに親に愛されていた。

散歩か買い物かわからないが、オムツを変えていた時になにかがあったのだ。スピードワゴン財団が全力で探しても見つからない時点で見つからないのだ。痕跡がないのだ。なにも。最初は不幸にも事件か事故に巻き込まれたのだろう、と仗助たちは考えていたが、それでも見つからない。

アンジェロは時期的に合わない。音石は赤ん坊をつれた父親、あるいは母親にはいっていないという。ならば、形兆か今の持ち主にやられたのだろう、とジオルノは考えた。その先で生き残り、なんらかの事故か事件に巻き込まれ……。

「まだわからないけれど…… 連絡した方がいいな……」

ジオルノはハーヴェストたちと共に魚屋を後にする。そして重ちーに公衆電話を探そうと告げたのだった。

エキチカフロアは全域リニューアル工事のため本日より閉店しております。リニューアルオープンは6月下旬を予定しております。ご不便をおかけいたしますが、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

「なるほど、こうやって人払いしてるわけか。スピードワゴン財団も

考えるなあ……」

ジオルノがシャツターの前に貼り付けてある張り紙を見て呟く。

「えーっと…… 魚屋さんみたいに酷い目にあってる人はいないってことだど？」

「うん、そうだと思うよ。客はね」

「…… お客さん？」

「そう、お客さん。そうだ、ハーヴェストに通り道を塞ぐよう伝えてもらえませんか？」

「あー、逃げたら大変だ！わかつたど！」

ジオルノのゴールド・エクスペリエンスにより頑丈なシャツターは花びらのように散っていった。

入ってすぐの所にはS市の銘菓はもちろん、東北6県を代表する銘菓店が集結しているブースがある。

訪れたお客さまには、旅の良き思い出を、地元のお客さまには、馴染みの味や新しい発見を。リニューアルにより日常的にご利用いただける商品を多数取り揃えました。そんな看板がかかっていた。

おみやげ通りには飲食ゾーンもあるようだ。進んでいくとスイーツゾーンのようだ。

「…… 肉食だから、手前だな」

ジオルノは先に進むことにした。

「ゴールド・エクスペリエンス」

シャツターが復元される。

「ジオルノツ!？」

「逃げ出したら意味がないでしょうっ！」

「だけんど……！」

ジオルノはいうのだ。ねずみの駆除は、棲みにくい環境を作る「環境的防除」を重要視しなければいけない。そうしなければ殺鼠剤や忌避剤を使用する「化学的防除」や、機器類を用いる「物理的防除」の効果が半減してしまう。

逆にいえば、「環境的防除」を中心にすれば、「化学的防除」と「物理的防除」の効果相乗的に働く。

その「環境的防除」の3つのポイントは、エサを与えないこと。巢をなくすこと。通路を遮断すること。

この3つのポイントを徹底すれば、ネズミは必ず防除できる。一般的にこのような施設では、ねずみの被害が拡大することは少ないが、共用部分の縦貫通孔や、上下に通じる電気ケーブル、ガス・水道などの管はネズミの移動経路になるから、塞いでおく必要がある。各階層で塞いであるかをチェックしなくてはならない。

ハーヴェストによりこれは完了した。

「よし、始めるか」

ジョルノは静かに侵入を開始した。

「ギギギッ」

それは不快なねずみの声だった。警戒しているようだ。威嚇だろうか。おそらくジョルノがここにいることはバレバレなはずなので、ゴールド・エクスペリエンスは発動したままで進む。

「ん？」

どうやら重ちーが援護してくれているらしい。無数のハーヴェストがジョルノの足下を通り過ぎ、声が出た方へ這い上がり、その全身を覆い尽くす。うち数匹が食らいつき、短い腕をドスドスッと突き刺した。

「いない……？」

ハーヴェストたちは困惑している。立ち退いた先には誰もいないでは無いか。

「やはり早いな……」

ふとジョルノは振り向いた。ゴールド・エクスペリエンスのヴィジョンを出現させ、瞬時に臨戦態勢を取った。後ろの声の主に、今にも殴りかかろうとした。

ゴールド・エクスペリエンスが鳶を張り巡らせて、なにかをはじき飛ばす。だが、連打だ。とろけ始めた鳶はそこから切れてしまい、だいぶ減速はしていたものの、ジョルノの腹部に、鉛のような衝撃が走る。

何かが飛んできた形跡はないが、ジョルノが腹部を見るとなにかが

めり込んでいた。ジョルノは唇を噛み、痛みに耐えながら拳を突き出す。それは蛇になり、ジョルノの体に噛み付く。どろり、と溶けていくはずだった体はそれだけで止まる。舌打ちをしたジョルノは、また拳をかかげた。蛇は一度鉛玉に戻り、次は猫になった。

ジョルノの異変に気づいたらしいハーヴェストも支援に走るが、顔めがけて飛んできたはずの鉛玉の反対側には誰もいない。弾いても、ジョルノの肩、足、そして顔。無茶苦茶な方向から飛んてくる。ゴールド・エクスペリエンスがそのたびに鉛玉を新たなる生命に変更していくが、攻撃がやまない。

ハーヴェストはなぜか見つけれられない敵に困惑している。無秩序な軌道で鉛玉がまるで鉛のように飛んてくる。音もない。法則もない。気付くのはいつもダメーシによるもの。ネズミには……気配がまるでない。

ハーヴェストの拳によってえぐり取られ、真っ赤な血が噴水のように噴き上がるはずのねずみはたちまち姿を消してしまうのだ。

(どういうことだ……鉛玉を充填する気配がないぞ……)

疑問に思いながらも、ジョルノはゴールド・エクスペリエンスで乱打する。一瞬でもはやく耐性持ちの生命に変えなくてはならない。すると、再びジョルノの顔面目掛けて、鉛のような威力の鉛玉が飛んてくる。避けようとした先で、鉛玉が奇妙な軌道で足にめり込んだ。そのせいでのけ反り、ジョルノは倒れこむ。

「逃がすかッ……!」

ジョルノは今まで生成してきた生命、ねずみの天敵であるネコたちに命じる。そしてほぼ同時に転がりながら、体を起こし距離をとる。「やっとみつけたッ!」

ゴールド・エクスペリエンスが拳を振りかぶり、数メートル離れた先のねずみ目掛けて全力で殴りかかる。ジョルノには届くという確信があった。だがねずみには当たっていない。命中しない。ジョルノは目を見開いた。まるで蜃気楼のようにねずみの体がすり抜けたのだ。

「またかッ……一体何の能力なんだ、一体……!」

「ジョルノに狙いをすましたかのように、鉛玉が迫る。避けるが異様な角度で跳ね返った。ジョルノは即座に対応し、また無力化しようと殴りかかる。」

「また…… すり抜けたッ！」

ジョルノの腹部に鉛玉がめり込む。すり抜けた鉛玉ではない。何故か真後ろ、つまりは背中。いつの間にか背中に鉛玉が突き刺さる。

「チツ……。舐めたまねをしてくれる！」

（でも……。居場所も分からないんじゃない。見える場所にはいない……。？いや……。音も聞こえない。ただの幻じやあなさそうだ。まるで別の場所から聞こえているようだ。どんな能力だ？）

ジョルノはこの瞬間に、まるで茂みのように結界を作りあげる。

「これでひとまず。アンタの攻撃は無力化した……」

鉛玉が迫る。ジョルノはその軌道を追わず、ゴールド・エクスペリエンスで軽くないです。

「何度やってもッ！その攻撃は無駄だッ！」

しかし、次の瞬間、脇腹に衝撃が走る。ジョルノはダメージを受ける。

「何故……だッ……。ゴールド・エクスペリエンスが……。違う方向に……」

ジョルノは気づく。ゴールド・エクスペリエンスが違うところを防御したのは、角度をねじ曲げたからだ。このねずみは対象の角度を変える能力があり、光の角度を変えたことで蜃気楼が発生したのではないかと。

「成程……」

そして、確信するのだ。ねずみは複数いると。角度を変えられる突然変異と虫食いのような能力のねずみに分かれていると。

「チツ……」

反射的な行動を制限されたジョルノは、既に意味をなさない蔦の結界を解除し、ラッシュユするが、そのすべての鉛玉を防ぐことは不可能だった。

「グウ……ッ！」

体中のダメージが蓄積し始め、視界を覆い隠していく。立つ事すら
厳しいほどのダメージだ。

そのすべてをジヨルノはあえて体に受ける。まるでサンドバッグ
のように全ての攻撃を受けた。

「……………やっど…………。分かった…………そこに…………いるんだな…………お前
は…………」

その拳は頬を抉らんばかりに、ねずみの体に直撃する。ジヨルノの
拳はようやく届いた。

「たしかに全部受けるしかないな、お前の攻撃は。だから分かったん
だ、一度角度を変えられても、二度は変えられない…………」

ジヨルノは血を吐きながらも、立つ事を止めず、拳に力を入れる。

「そう、お前には無理なんだ。対象の真後ろをあてることだけ
は…………。だから僕のゴールド・エクスペリエンスをねじまげて、む
りやり当てていたんだ。その時だけは無防備になるから絶対にでて
こない」

ギギギツとねずみの悲鳴があがった。次の瞬間、ハーヴェストたち
が襲いかかる。生成した鉛玉から生まれた耐性持ちの天敵たちが誘
導しているのだ。

恐るべき子供たちはハーヴェストに蹂躪され、自ら生成した毒から
生まれた食物連鎖の先に食べられてしまった。

「これで、一体…………！」

変化球を失ったねずみたちの攻撃が途端に単調なものとなる。

「飛んでくる方向さえ分かればこちらのものだ！」

なにせ毒を帯びた鉛玉というプレゼントをくれるものだから、あと
はそれに案内させるだけなのである。いくらスタンド使いでも本体
に無数のハーヴェストたちが襲いかかればなすすべもない。どうあ
がいてもねずみは、ねずみでしかなかった。

「これで、2体目…………ッ」

最後はハーヴェストたちに塞がれている通気口から逃げようと必死なところを猫に食べられてしまった。

「これで終わり、か？」

ハーヴェストたちが歓声をあげる。

「あとはスピードワゴン財団に頼んで、ここに殺鼠剤をばらまいてもらえば完了だな」

気づけばスタンドの溶解は最小限だが傷だらけだ。治療するに当たってここは不衛生すぎる。場所を移動しなければならぬ。

「ありがとう、ハーヴェストたち。うん？ いや、やめた方がいい。この個体は死肉が好きらしいからな、さすがに丈助先輩でも僕でも生き返らせることはできないよ」

ネズミが鎮圧されたあと、ジオルノたちはスピードワゴン財団による感染症などの検査を受けることになった。頭のとっぺんからつま先まで調べ尽くされ、食品工場以上に徹底的に清潔にされた。社王町で一番清潔なのではないかと思うくらいだ。

丈助は虫食い以上に生成された人間の煮凝りをクレイジーダイヤモンドで治す作業に追われ、最終的にはしばらく豆腐はみたくないと軽い四角恐怖症にかかってしまった。

そして。

「ジオルノ、お前が見つけた透明な遺体だが、DNA鑑定の結果ジジイが見つけたあの赤ん坊と親子関係が認められた。母親のようだ」

身元が判明した赤ん坊を親元に返せるかどうかスピードワゴン財団が調べた結果がジオルノの手元にある。駆け落ち同然で結婚した男に逃げられ、必死でシングルマザーをしていたらしい母親。

それぞれの実家などを当たってみたが、たった一枚の報告書を見れば芳しくないことは直ぐにわかった。スタンド能力に目覚めていなければ、ジオルノの施設に預けられることになるだろう。

一歳未満の養子縁組はいつの時代も人気だ。だが、現状不安になっただけで周りを透明にしていまい、ジョセフ・ジョースター以外に懐

いていないとなるとそうはいかない。これからどうするのかはゆっくり考えるそうだ。

「……問題は、母親になにがあったかということですね」

「そうだ。仗助が直してくれた遺体を検分してみたんだが、脊椎損傷による出血多量だ。数時間は生きていたと思われる。あのアーケード街に向かって這いながら助けを求めようとしたが、透明なために誰にも気づかれず死んだらしい。仗助たちは気づかなかったようだが……そのあと虫食いの子供に運ばれたようだな。おそらくは爆発かなにかに巻き込まれたのだろう」

「爆発ですか」

「調べてみたが、あのあたりで爆発による事件や事故は起こっていない」

「……不気味な事件ですね」

「全くだ……この街のどこかにあの赤ん坊の母親を殺したスタン・ド使いが潜んでいるのかもしれないねえ……」

承太郎はやりきれないのか帽子のつばを抑えた。ジオルノは知らないがアメリカに残してきた妻と子供のことが胸を去来していたのである。

じつと報告書を見つめていたジオルノだったが、意を決したような顔で承太郎を見上げた。

「あの赤ん坊が母親に死ぬ直前まで愛されていた。これは捨て置けない事実です。空条さん、犯人探しをするというのなら、手伝わせてください。是非」

「……ジオルノ、お前……」

ジオルノは母親に恵まれなかったから母親の無念は正直よくわからない。だが飛来明里という自分の身を犠牲にしても子供を生かそうとした母親。そして蓮見琢馬というその子供が辿っている数奇な運命をそばで見守り続けている自覚がある。

あの赤ん坊が蓮見琢馬のようになるかはわからないが、可能性は潰しておくべきだと考えたのだった。ほとんど衝動的な考えだ、いつものジオルノであればここまで直情的になりはしない。

その変化を見逃す訳もなく、静かに見つめていた承太郎はゆつくりと頷いたのだった。

「大丈夫ですか、重清君」

「おー、ジョルノ！来てくれたんだ……うれしいどー！」

「すいません、僕が気づくべきでしたね。相手がねずみなんだからそもそも感染症のウイルスを警戒すべきだった」

「それは仕方ないどー…… オラもまさかこれがスタンドじゃないとは思わなかったど」

そこには僅かにただれた跡があり、周りが赤くなっているのがわかる。

重ちーはどうかやら感染症にかかってしまったようだ。スピードワゴン財団により大学病院に担ぎ込まれ、それなりの治療をすることになってしまった。

9匹いた虫食いの子供たちを特定するのに、たくさんハーヴェストが彼らに接触した。スタンド毒の中には人間を苦しめる方向に進化した個体もいたらしかった。

発症初期には発熱、頭痛、腹痛、嘔吐、筋肉痛等のインフルエンザに類似した症状を示した時点で治療されたのが幸いである。そのまま放置していたら発熱と同時に咳が出始め、その後、胸腔中に浸出液が急速に貯留して呼吸困難とショックによって高い死亡率が報告されている病気だったようだ。

「これ、お土産のサンドイッチです」

「ありがとうだどー！」

「どれくらいかかりそうなんです？」

「えーつとオ…… 1ヶ月くらい？オラの病気、いろんなとこに教えなくつちやあいけないらしいんだ…… なんか大事になつちやつ

て……」

「どうやら重ちーがかかった感染症はこのあたりで感染例がなかったらしい。しかも政府に報告が義務付けられている感染症のため、スリードワゴン財団といえども隠し通すことはできなかったようだ。」

さすがにハーヴェストがなかなかフィードバックされない性質があるとはいえ、限度はあるとのことである。退治するためとはいえ、ジオルノと共に長い間あの空間にいたのだから無理もない。曝露する表面積の違いなのだろうか。

「ママもパパも心配させちゃったけど…… オラ、これでいいんだア…… みんな、これで安心できると」

「たしかに、そうですね。違うない」

にへらと重ちーは笑ったのだった。

ねずみA

能力：仗助たちの戦いを見ていた子供が学んだことで発現したスタンド。物質の運動する方向を変えることが出来る。これで身を隠したまま自分の居場所を攪乱したり、兄弟の鉛玉を打ち込んだりすることが出来るようになった。さらに、人間の手足を機能させなくすることも可能。だが一度曲げたものをもとにはもどせず、一度解除しなければならぬ。

ねずみB、ねずみCは虫食いの劣化版のスタンドであり、闘争本能にかける。いずれのねずみも死肉が好きなようだ。

ゴールド・エクスペリエンス

それはあまりにも唐突に起こった。

僕が割り当てられている部屋は、かつて彼の奥さんが使用していた部屋だ。

広い部屋だった。広く、静かで、古い納屋のような匂いがした。子供の頃かいだことのある匂いだった。古い家具や見すてられた敷物のかもしれない古い時間の匂いがする。

最小限の家具すらなく、がらんとして薄暗かった。寝る前の部屋にはベッドとドレッサー、本棚などがあり、ここまで死んでしまった時間の匂いはしなかったはずだ。

目を覚ました僕はぞつとした。ここは、この部屋は、まるで別人の顔をするようになっていた。しんと暗く、なにも息づいていない。見慣れていたはずのすべてのものが、まるで僕が嫌になって出ていったようではないか。

僕は、いつてきますと言うよりはおじやましましたと告げて抜き足で出てしまいたくなる。この部屋の時間が死んだ。リアルにそう感じた。

部屋は、秒を刻む時間を感じさせないほどにしんとして、僕だけが生きて活動していることを申しわけなく思うような静止した雰囲気をかもしだしていた。それは母が死んだ後の部屋によく似ていた。人が死んだあとの部屋はいつもこうだ。

部屋中が朝の中でしんと静まって、僕の声を聞いているようだった。この部屋もまたとまどっているように感じられる。

寝ぼけているから取り留めのないことを考えてしまったが、早い話部屋が引越し直前の部屋みたいに空っぽだったのだ。強盗だつて僕がいるというのにここまで全てを根こそぎ持ち去るはずがない。床の上で寝ていたらしい僕は体が今にも折れそうな音がしたものだから、余計に気だるさが残ってしまう。

ふあ、と欠伸を呑気にした後、僕は現実にも再浮上して一気に目が覚めたのである。床で1日寝ていたせいで思ったよりも寝不足だった。

「目が覚めたら空っぽだったんですよ」

「空っぽだあ？」

「はい」

「そりやおめー、泥棒にでも入られたんじやあねえのか？」

「警察の官舎にですか？」

「あー、そういやそうだっけ。じやあ違うな」

「そうなんですよ、おかげで眠れやしない」

くあ、と欠伸を噛み殺しながら僕は呟いた。

「次の日にはなぜか彼の奥さんの自宅に全て届いているんだ。なんの嫌がらせだとお怒りの電話が朝からずつとなりっぱなしでして」

「嫌がらせ？」

「ダンボールにも包まないで玄関前に散らばってる状態らしくてですね」

「うっげー、なんだよそれ、気持ち悪い」

「なんかスタンド攻撃でも受けてんじやねーのかあ？」

「うーん…… どうなんでしょう？さすがにわかりません」

くあ、と僕はまた欠伸をした。

「さつきからあくびばかりかしてるけどよ、ジオルノ。大丈夫かあ？」

「大丈夫じゃないですよ。おかげで彼は奥さんの実家に召喚されていって参ってしまう」

「へー、今一人なのかあ…… なら誰かんちに泊まればいいんじやねーの？変わればさすがに変な現象起こらねえだろ」

「だったらいいんですがね……」

「俺んちくるかア？」

「俺ん家に来て欲しいなー、なんて」

「嫌ですよ。なんだって僕が東方家のド修羅場に首を突っ込まなきやあいけないんだ」

「そんなこと言わずにさあー、ジオルノも俺の遠い遠い親戚みたいなもんだろオー！」

「東方巡査とジョースターさん、空条さんがひとつの部屋で会話するところに行けっというんです？嫌にきまつてるじやあないか。ただ

でさえあの赤ん坊連れていくなつてとんでもない状況だつていうのに。これ以上話をややこしくしたくありませんよ」

「想像したくねーッ！今脳が考えることを全力で拒否つてることをズバズバいうんじゃないやねーよー」

「誰がアホですか、誰が」

「つつーことはア……俺ん家にくるか？」

「そうですね、億泰先輩には形兆先輩の記録をコピーしたやつ渡さなといけないし。ついでにお邪魔してもいいですか？」

「いーぜえー！」

「くっそオ……目と鼻の先だつていうのに、なんだつて俺だけ参加出来ねえんだよオ……」

「さすがにこのタイミングで無断外泊したらみんなから怒られると思いますよ、仗助先輩」

「ぐううッ——！！」

「まあ頑張れよ、仗助。俺達はゲームでもして楽しんでるからよオ」

「骨くらいは拾つてあげますね、仗助先輩。あとから長電話する気力があればいくらでも付き合いますから。頑張ってください」

「くっそー、他人事だと思つてテキストいいやがつてエ……！今に見てるよお前らア！」

「寄り道しないで帰つた方がいいですよ、仗助先輩」

「わーつてるよ！だ——ッ……今日だけは……今日だけは家に帰りたくない……！」

「ご愁傷様です、と笑いかけたら、八つ当たり気味に頭のとつぺんから衝撃が降つてくる。クレイジーダイヤモンドがチラついて僕はギョツとした。」

「スタンドはなしでしょう、スタンドはツ……！」

「ゴールド・エクスペリエンスが庇つてくれなければどれだけの衝撃だったろうか。でも悲しいかな、僕が成長しても仗助先輩も成長しているから単純なパワー、スピードはクレイジーダイヤモンドには到底及ばない。」

仗助先輩が本気を出していたら今頃僕は近くの石と同化していた

に決まっていた。その場に沈んだ僕は、復活にそれなりの時間がかったのだった。

「一回官舎に帰ってもいいですか？荷物を持ってこなくちゃいけない」

「おう、いいぜー。待ってるからよ」

「今日はよろしくお願いします、億泰先輩」

「部屋だけならたくさんあるしな！親父も喜ぶと思うぜ」

「はい」

そういうわけで、僕は億泰先輩の家に泊まることになった。宛てがわれたのは客室だ。10年近く使用する機会がなかったためか、まだ満足な家具も揃っていないがらんとした部屋である。

余計なもの何もないさっぱりとしたものだ。形兆先輩の手入れのなごりがまだあるため、病室のように清潔な部屋に見える。殺風景な、窓のないコンクリートの棺桶のような部屋というわけではない。

余計なものが何もないが、塵ひとつない完璧なシャープに四角い部屋。がらんとしていて空気が静止しているおそろしく飾り気のない部屋だ。実務的でござっぱりしているともいう。僕の好みに近い部屋だ。

まるでモデルルームだ。清潔で統一感があって、必要なものはすべて揃っている。しかし無個性でよそよそしい、ただのはりぼて。

それでも全ての荷物を出し終えた、がらんとした部屋よりはよっぽどマシだ。目が覚めた途端にそれだったのだから、世にも奇妙な物語にも程がある新しい朝である、迷惑な話だ。

まるで誰も住んでなかったように、人間の気配がない。家具達か、人間との関わりを拒絶して、どこかに飛んでいってしまったみたいな状態だったのだから。

「ジョルノ、ゲームしようぜえ！早くこいよー！」

僕は返事をして、一旦外に出た。

ゲームをして、テレビを見て。宿題をしようとした僕に心底嫌そうな顔をした億泰先輩だったが、観念したようにプリントをやり始めた。気づいたらどういいうわけか僕が穴埋め問題を手伝っていたが、た

まにはこれもいいだろう。

トイレや風呂を使わせてもらって思ったのだが、この家には意味のあるものしか存在しないようだ。全てが億泰先輩と形兆先輩のためにある。あたりまえだが少し羨ましくなった。

キッチンにはさっぱりと片付いていた。調理道具は決まった場所に全部収まっていたし、ステンレスの調理台は乾ききっていたし、食器洗浄器の中は空だった。システムキッチンのショールームのように、よそよそしく味気なかった。形兆先輩に似て几帳面なんだなと思った。

今夜はゲームに熱中しすぎてキッチンの出番がなかったから仕方ない。僕達はカメユのお惣菜とパンを並べて、お行儀悪くりビングで食べていた。

「それじゃあおやすみ」

「はい、おやすみなさい」

僕はそのまま就寝した。

腰が痛い。嫌な予感がして目を覚ます。おそろおそろ目を開けると部屋の中には何ひとつ残されてはいなかった。指紋さえ拭き取っていたんじゃないかという気がするレベルだ。なんの飾りもない、修道院の内部のような裸な室内がかえってすがすがしく見える。予想をはるかに上回って何も無い部屋だった。昨日まであったはずの物品が何も無い。

本棚に敷き詰められていたはずの山積みの古い洋書、絵本、写真集……デイケンス、ヘンリー・ミラー……カミュ、三島由紀夫……古い文庫本、ファツション誌、漫画雑誌。モザイクみたいに積んであったものまでご丁寧になくなっていく。

棺桶に限りなく似たこの部屋で呆然と立ち尽くしていた僕は、慌てて億泰先輩のところに駆け込んだ。

「おはよう、ジョルノ。はえーなア……せつかくの休みだったのにもっと寝かせろよオ」

くあ、と大あくびした億泰先輩だったが、構わず僕は聞くのだ。

「あの部屋、誰の部屋でした？」

「誰のつて…… たしか親父だったかなア…… お袋が死ぬまでは親の部屋だったんだよ」

「ありがとうございます、億泰先輩。もし僕の予想が正しければ引越し作業を手伝ってもらわないといけないかもしれません」

「はあ？」

「二度寝してもいいですが、目が覚めたらお父さんの今いる部屋に来てみてくださいいね」

「お、おう……？よくわかんねーけど、ジヨルノも寝ろよ。ひでー顔」

僕は笑うしかなかった。

億泰先輩の父親の部屋を訪ねると、案の定ものが溢れかえってびっくり仰天している父親と目が合ったのである。

「そろそろ来る頃だと思った」

僕がいきなり訪ねたにも関わらず、蓮見琢馬は当然のように僕にいった。

「まあ、入れよ」

あちらこちらに双葉千帆がいる形跡がある。父親の愛人に拉致された事件から二人の関係は一気に進展したらしかった。非常に居心地が悪い部屋だ。僕は見て見ぬふりをしてリビングに入った。

「どうせ湿気るばかりだから消費に貢献してくれ」

皿に開けられたチョコレートと入れたばかりの紅茶。たしかに嗜好品は好み合わないとなかなか減らない。買う余裕があるのがうらやましい。僕は遠慮なくもらうことにした。

「ほら、制服」

さしだされた紙袋には几帳面に畳まれたものが入っていた。

「クリーニンググ！すいません、お金……」

「玄関先に飛んできた鳩がいきなりこれになったから、出してくれたという主張かと思った」

「そんなわけないでしょう」

「ああ、知ってる」

レシート通りの金額を支払うと僕はそれを広げてみた。

「てんとう虫のブローチがない……」

「なんだ、外してたんじゃないのか？」

「……ここにないってことは施設だ」

「なら、一日手伝えよジョルノ。今日は施設のイベントを手伝う日だ」

「なんのです？」

「読み聞かせ」

「ああ、君の得意分野だ」

「好評なのは千帆の方だ」

「それでもだよ。少なくとも読み違いはない」

「たしかにそうだな」

琢馬はうなずいた。

「また変なことに巻き込まれているみたいだが、布団か枕を買った方がいいぞ、ジョルノ」

「なんでです？」

「ひどい顔だ。睡眠不足は人類の敵だからな」

「君が言うと言得力がある」

「岸辺露伴に寝ると書いてもらうのはやめた方がいい」

「よくわかりましたね」

「スタンドは精神状態が左右すると俺は経験からよく知っているからな。強制的に寝ても問題解決にはならない」

「なるほど」

僕は1日施設の読み聞かせボランティアに参加することにしたのだった。

「…… どういうつもりなんだ、ゴールド・エキスペリエンス」

僕の問いにはあいかわらず無言だ。呼ばれて出てきたものの、黄色のスタンドは答える様子はない。

空条さんに話を聞いた限りでは、なかなか珍しいケースのようだ。

スタンドの制御には精神の強さとある程度の攻撃性が要求され、不十分な場合スタンドは暴走し、持ち主自身を害することになってしまう。

「制御は出来ている、はずだよな？」

ゴールド・エクスペリエンスは答えない。

スタンドの中には自我や意思を持ち、本体やスタンド使いとコミュニケーションをとるものもある。殆どの場合は鳴き声的なもの、システムの単純な言語を繰り返して発するくらいで、基本的に無口。しかしながら、本体の制御下にならない状態で「スタンド本来の性格」が存在する自我を持っている可能性もある。

戦闘中にスタンド能力に覚醒した場合スタンドが自らの存在や能力を本体に説明するというケースがあるらしいが……。

黙りを決め込む僕が特に用はないと判断したのか、ゴールド・エクスペリエンスはいなくなった。僕によく似て最低限の意思表示しかないやつである。

「もし、枕か布団を買うなら、施設に帰ったら俺が預かってもいいぞ」

「琢馬、僕はまだ……」

「どうせ無駄だと思っっているんだろ？あそこで自分だけ、は認められないからな」

「……」

僕は肩を竦めた。

ゴールド・エクスペリエンスのイタズラだと判明したその日から、僕の日常は災難に見舞われ続けた。

学校ではなにも起こらないから、睡眠不足を解消するために休み時間や放課後は全て費やされた。

露伴先生のアルバイトは、断ったにもかかわらず見たいから来いと言われて大惨事になった。

空条さんにも相談してみたが、こんな制御不能はなかなかお目にか
れない、らしい。

いかげん睡眠不足も限界に近づいていた僕は、観念して布団屋で
布団を一式買うことにした。なんだってこんな子供じみたことをし
ているんだ、ゴールド・エクスペリエンスは。施設から出るまではこ
こまで過激なことをしたことはなかったというのに。

「……わがままになっていないか、お前」

ゴールド・エクスペリエンスは佇んでいるだけだ。

「ここまでお前がわからないのは初めてだ、ゴールド・エクスペリエ
ンス」

ためいきがとけていく。スタンド使いはスタンドに触れることが
出来ない。原則はわかっているのにもどかしい。コミュニケーション
が取ればこんなにめんどくさいことにはならないのに。

こんなに近くにいるゴールド・エクスペリエンスにさえ、僕には触
れる術はない。けれど、触れることを許可することは出来る。

ゴールド・エクスペリエンスは出現するとあまり離れることはな
く、僕の手の届く範囲からは出ない。能力を使う時や戦う時以外は、
すぐ傍にいて、命令が出ないとわかると直ぐに姿を消す。黄金色の風
を残して。

僕の生まれを知った今ならわかるが、生命を生み出す能力は、吸血
鬼にして時を止めるスタンド使いというDIO、そして波紋使いとい
う対極のジョナサン・ジョースターという存在を思えば、なんとも奇
妙な能力に目覚めたスタンドだ。空条さんを見ていればDIOの息
子たる僕を見て、思うところがあるのはわかるというものだ。

そうでなくたって、スタンドについて一般人から理解を得られた仗
助先輩、空条さんはそうとう恵まれた存在だろう。世界にただひとり
の神様しか信じない施設の人々にはあまり歓迎されない確信が僕に
はあった。

特に、僕のような宗教に熱心ではない者がそういうことをするの
は、決して快くは思われない。言ってしまうえばそれは神の冒瀆に値す
る。生命の創造は神の領域だからだ。

人の命を一から生み出すことは今はまだ出来ないが、人間に限りなく近い、僕の意志に完全に従うおぞましいなにかなら、あの時よりより精密に作る事ができる。無機物を媒体にあらゆる器官を作って損壊部分に埋める事が出来る。

それは、生命の尊さを侮辱するとも表現出来る。失ったら作れば良いという発想は、人の命にかかわるものについては人道という観点からしてこの世界は非常にシビアだ。その視点からすれば、僕はまるで生命を軽んじているかのように見える。

僕の倫理観は、神様を信じる人々に教えこまれた倫理観の上にたつていながら、あまり大衆的ではないらしいという自覚はある。人を殺すことについて、僕の善悪の判断の下に決める。そんな予感がある。社会通念や法律、様々なしがらみが心地いいからしないだけで、必要ならば躊躇なく行うし、そこに達成感があっても後悔は絶対にはないと決まっているのだ。

そんな僕が生命を生み出したり人体を作ったりすることが出来る。この上なく残酷なことだ。

空条さんはまともな人生歩めると思うなといったが、その通りだ。僕が第三者だとしたら悪意を持って近づくと自信がある。それは僕自身の安全を脅かすだろう。

実際、形兆先輩に、この能力を目当てに拉致されたのだから。あのとき父親の正常化は叶わなかったが、僕のゴールド・エキスぺリエンスは成長しつづけている。いつか、はくるだろうという確信がある。

臓器が高額で売買される事実がある以上、拒否反応は防げないとはいえ「痛み」だけなのだ。まるで金のなる木である。なにせ人間の臓器、特に心臓や腎臓といった未だに完全再現ができない臓器は適合がものをいう。

その問題を簡単にクリア出来る上に、媒体は何でも良いとくればコストはゼロに等しい。また、能力を解除すれば元の媒体に戻る為、金を存分に巻き上げた挙げ句に殺すことも出来る。金を手に出来て邪魔者も消せる。笑えない冗談だ。

僕は慈善事業にせいを出す善人でも本気で神様がいると信じてい

る宗教家でもない。下らない発想にも興味はない。僕は博愛主義ではない。僕は手を伸ばす相手を選ぶべきで、そこに迷いを挟むべきではないのだ。迷っていたら、本当に大切なものだけが指をすり抜けていくのだ、いつだって。

「なんだっていきなり、こんな子供じみたことをしているんだ、お前は」

10年間ずっとそばにいたくせに、いきなり言うことをきかなくなったスタンド。しかも僕が寝ている間に限って悪さをする。理由が全くわからなくて言葉が荒くなる。

「……おい、ゴールド・エクスペリエンス。なんの冗談だ？」
黄金色の風が吹いた。

「いつから僕の部屋は植物園になったんだ？」

目の前にはいろんな草木が生い茂る亜熱帯が広がっていた。

ゴールド・エクスペリエンス2

春は残酷な季節だ。

春を残酷と感じるのは、始まりは痛みであるからだ。始まりが痛みであるのは、過ぎ去って還らないものを後ろに残して始まる、そのことが「痛い」のだ。

人生は過ぎ去って還らないけれども、春は、繰り返し巡り来る。一回的な人生と、永遠に巡る季節が交差するそこに、桜が満開の花を咲かせる。人が桜の花を見たいのは、そこに魂の永遠性、永遠の循環を見るからだ。それは魂が故郷へ帰ることを希う（ねがう）ような、たぶんそういう憧れに近いのだ。

始まりを繰り返すことの痛みは、終わりへ向かうことの痛みでもあるだろう。花は儚いと人は言う、自分の人生がそうであるように。

あまりにも暇すぎて、暮らしの哲学を読んで助けを待っていた僕は顔を上げた。肩の痛みがだんだん激しくなってきたいて、方向と移動速度から助けにきてくれた人が呼び鈴を鳴らしてくれたことがわかったからだ。

ドラアツという乱暴なノックがして、豪快にドアが破壊、粉碎、玉砕する音がした。きつと歪ながらもぎりぎり原型を保っているドアが出現するに違いない。かすかに杖助先輩の声が聞こえてくる。口笛なのは気の所為だろうか。こっちは身動き出来なくて困っているのになんて人だ、全く。

「おーい、ジョルノー！生きてるかア！」

「なんとか生きてます、大丈夫。一食や二食抜いたって人は死なない。君のご自慢のパワーとスピード、そして治癒力で僕のスタンドを無力化してくれ」

声を張り上げないとなかなか届かない。お隣と真下が独身の警察官でよかった。今、ご近所迷惑なんて考えていたら僕は即身仏になってしまう。

「いつからラピユタになったんだ、この部屋はよオ！」

「ついさっきですね」

「ついさっきだア!? なんだそりや、無茶苦茶だな! つーかこの惨状で呼んだの俺だけ?」

「真っ先に思いついたのが君だったんですよ、仗助先輩。家から出たってあれだけいつてたじゃあないか。感謝してくださいよ」

「ま、まア……正直、ラッキー! って思ったぜ? それにありがたい限りだけよオ……想像以上に話が拗れちまってピリピリしてるし……でもこつちもすげえな別の意味で」

「他の人に連絡を入れようとしたら、電話線から受話器まで百合に変えられてしまいました」

「うわっっちゃー、悪戯にしちやすぎてんじゃねーの?」

「もつといつてやってくださいよ、仗助先輩。ゴールド・エクスペリエンスのやつ、完全に反抗期なんだ。もはやどの生命にカウンター能力が備わっているかわかったもんじゃない」

「あー、切れたら静かになつてくタイプかア……お前そっくりだわ。容赦のなさとか」

迂闊に殴れないじゃねーか、と仗助先輩の困ったような声が聞こえてくる。

「今どの辺にいますよ?」

「部屋から一步も出られない……スズメバチに追い立てられましてね。起きたらこうなっていたんですよ」

「こりやまたすげーなア……鳩でも捕まえてくれと言われるかと思っただぜ」

玄関の扉を閉めてチェーンをかけた仗助先輩は靴のまま入ってくる。無理もない、靴下で入ったら怪我をする。

「んだこりや、ここだけ植物園かよ」

「あれですよ、ガラス玉の中で循環する生態系のやつ」

「あー、やけに金がかかる趣味の……なんだっけ、名前思い出せねえや」

植物が朽ち果てていくときの微かな青臭い、植物の髓から溢れる匂い。あたり一面に夜気で凍りついた木のおいが立ち込めていた。

日差しが当たるところには若葉の匂いと湿った土の匂い。

その花はまばゆく日に照らされてすーんとした香りが辺りにただよい、熟した麦が香ばしい匂いを放つ。斧による鋭い切口から官能的な甘さのまといつく匂いをたてている生木の香りが熟れている。橘の花が、折からむさされて芳香を伝える。

香りの坩堝なのだ、不愉快にならない程度には。

連絡手段だったはずの電話やパソコンといった類のものは、すべて花に変えられてしまっている。白い百合は大きく、瞑想に耽る異国の小さな動物のようにもったりしていた。ダリアに似た花もあった。機転のきかない中年女性を連想させるいかにも鈍重な花だった。花はいくつもの黄色い細かい花卉をつけている。

懐しい草の匂いが鼻をついた。ずっと昔のピクニックの匂いだ。五月の風はそのように時の彼方から吹き込んできた。どうやら窓まで草木に変えてしまったようだ、ゴールド・エクスペリエンスは。

「外からバレたらまずいな」

「外にはまだ出てねえけどさ、時間の問題じゃねエの？」

「できれば人目につくまでになんとかできませんか？」

「あーくそ、ねずみの件といい、みんな俺に頼めばなんとかなると思ってるだろ！その通りだけど疲れるぜ！」

悪い気はしねーけどさ、たよられてるから嬉しいし。ボソツとやけにでかい本音を照れ隠しにいいながら、仗助先輩がクレイジーダイヤモンドを発動させたようだ。カウンターがどこに仕込まれているかわからない。なにが植物になっっているかわからない。そう伝えたらか、仗助先輩は慎重に進行の邪魔になるものだけを元に戻しているようだった。

「ゴールド・エクスペリエンスの本気っつーか、暴走っつーか、はっちやけっつーか……とにかくすげえなア」

「全くだ、おかげで完全に鼻がイカれました」

百合とさんざしの匂いとだけ判って、あとは嗅覚が慣れない。何の花とも判らない強い薬性の匂いが入れ混って気分が悪くなるくらいに刺激する。木々の若芽のくさむらが、垂れた房々をもたげてほのか

に揮発性の匂いを発散するものだから、まさに混沌だ。

「ジョルノー、どこだ？」

「ここです」

「待ってくれ、そこまでたどり着けねえんだけど」

「だから呼んだんですよ、君を。下手したら二度と出られない気配がしてきたので」

「質量保存の法則ガン無視だもんなア……こりやすげえ」

僕がいる部屋に向かうにつれて、行く手を遮るように蔦が生い茂っている。

仗助先輩がラピユタといったのはまさにその通りで。滅びの呪文により破壊されるはずが、樹木の根っこが張り巡らされて飛行石ごともっていつてしまったあのあれなのだ。蔦や根が目の前にあるのだ。

さつきまで僕もなんとか出ようと足掻いていたのだが、死んだ皮膚である爪までアゲハ蝶として飛んでいつてしまった。人間指は爪がないと力が入らないのだ。おかげで細かい作業が全くできない。

下手したら髪の毛や歯まで逃げ出してしまいそうだったから、僕は抵抗を辞めているのだ。ゴールド・エキスperiエンスが本気になったら僕はダルマ状態になってしまう。能力を当てにして体を張りすぎたせいだ。さすがにそこまで言えないので、僕は仗助先輩を待つしかないのだ。

「うへえ……どっかにカメいねーだろうなア？」

「スズメバチはいましたが……どうでしょう」

「それも嫌だ！」

根が、老いた蛇の肌のように灰白色に乾いてささくれだって、しぶとくうねっている。木の根が静脈のように小道に浮き上がっている。場所をつたえてくる仗助先輩に、その先だと告げる。クレイジーダイヤモンドがあるべき姿に戻すにつれて、なにかが落下する音が近づいていた。

「うっわ、びしよびしよじゃねえか……下の階やばくね？」

「さすがにわかりません……」

「うわあ……」

椿のトンネルは長年の風雨に晒されて土を奪われたせい、椿の幹の下から曲がりくねった裸の根が幾本も顔を出し、からまり合っている。仗助先輩は自慢のブランドの靴が汚れたとぼやいた。しかもその表面は雨に濡れてなまめかしく、浅川はふと巨大な怪物の腸の中を走り抜けているかのような感覚に陥ってしまう。気持ち悪いのと。

「ゴールド・エクスペリエンスはあれか？ジブリでも見た？」

「どうでしょう？最近見てませんね」

「金ローやらねえもんなア、最近」

足音が聞き取れるくらい近づいてきたようだ。

「なあ、まさか木の中にいるとか言わねえよなア？」

「なんでです？」

「古い根つこがさ、庭土の上にもりあがつてんだよ。でっかいコブみてーなのがぼこぼこしてて腫れてる。人一人分くらいありそうな感じの」

「いえ、僕はもつと奥です」

「そっか、よかった」

僕はここです、と目の前の木々を叩いてみた。染み込んだ春の日が、深く草の根にこもっているのが僅かな隙間からうかがえる。カウインター能力が付与されていたらしく、どっかと僕は尻もちを着いた。眼に入らぬ陽炎を踏みつぶしたような気分になる。見上げた先には、木の根が、養分を吸う毛根の吸いあげる水晶のような液が、静かな行列を作って、維管束のなかを夢のようにあがつてゆくのがみえる。

養分を吸い上げる木の根はたこのように、いそぎんちやくの食糸のような毛根をあつめて、その液体を吸っている。切り崩された赤土のなかからよきによき女のももが生えていた。

「……スプラッタな光景がありますが、全部ゴールド・エクスペリエンスの仕業なので安心してください」

「あのよ……わかってても木々にしれつと紛れ込んでる人体とか触りたくねーよッ！どこの暗黒小説だッ！」

たまらず仗助先輩はさげぶ。

だんだん目の前の木々の壁が薄くなっていく。そのうち枝や蔓枝だけが残り、大樹の幹を捕えた綱のように、ぐるぐる巻きに巻きながら攀じ登っている蔓だけになっていく。弓弦のように張りきつていたそれは、払いのければあとはただのカーテンだ。

「…………… 仗助先輩」

「どうした、ジヨルノ」

「少しまずいかもしれない」

「なんだって？」

「体の一部が昆虫化し始めてる」

「もつと早く言えよ!!」

仗助先輩はあわててかけこんできた。

僕から発生した巻蔓は、空の方へ、身を悶えながらも狂おしい指のように、何も無いものを捉えようとしてあせり立っている。かすかに凌霄花のうぜんかずらのおいがした。

「うっげえ…………… ぐるいなあ、おい。大丈夫か？」

「なんとか」

「間に合ってよかった！あーくそ、よかったー!!」

クレイジーダイヤモンドが僕を修正してくれる。爪などがあるベキ場所に戻っていくのがわかる。

「…………… おめー、知らないうちにあつちこつちが治せたつーことは、ゴールド・エクスペリエンスで埋めてやがったな？」

「パーツを、ですな」

「ゴールド・エクスペリエンスが切れた気持ちがわかる気がするぜ」

「なんのことです？」

「ここまで危害加えられてんのに、なあにがゴールド・エクスペリエンスのイタズラだよ。お前のスタンド、ほんとよく似てるよなあ」

仗助先輩はゴールド・エクスペリエンスを呼びつけるようにいった。

「ダメなんです、出てこない」

「まじか、重症だな。ここ数ヶ月で思ったんだけどよオ…………… アンジエロや音石がいなくなってから、おめー感情を表に出したか？」

「どういう意味です？」

「なんつーか…… スタンドってのは精神状態が反映されるって承太郎さんが言ってただろ？」

「はい」

「あの赤ちゃんのお母さんが誰かに殺されてるってわかってから、様子がおかしいぞ」

「そうでしょうか？」

仗助先輩はうなずいた。

僕は爽やかな性格の中に隠れた熱い魂をもつ、難しい性格だと臆面もなく仗助先輩はいうのだ。一応優しいけど、怖い。ある程度根性というか、我慢のできる人じゃないと多分ジヨルノの性格にはついていけないと思うと。

敵への容赦の無さはN o. 1だ。でも善悪の分別はジヨルノなりにあるんだろう。人格が完成しすぎている。それから、冷たさも感じる。仲間を手駒のように扱う冷たさの一手手前って感じ。

冷酷ってわけではないんだけどすごく冷たいイメージがある。全てに達観しすぎていて後半なんかもう人間味を感じない。信頼して人間とかは何があっても守るけど、自分自身のことは盤上の駒としてみてるような気もする。

覚悟が決まった時の爆発力の中でも

手段を問わずに完遂する、成し遂げる為なら何でもする方面ではN o. 1だと思う。信念に則った黄金の意志みたいな。

黄金の精神を軸に持っているけれど、それを外れない範囲ならどこまでも合理的冷酷になれる。

原動力は情熱だけど、幼少期の経験からか冷徹さと合理性が言動に表れがちな感じ。動揺したり、態度が丸かったりと十分に年齢相応な面もあるんだけど、エグいときには本当にえげつないから、そっちが印象強くなる。

周りを傷つけて憚らないが、人を惹きつける。他者の犠牲を省みない。仲間の死とかには結構感情的で避けようとしてる。むしろ、結構自分自身が犠牲になることで最終的に仲間が勝利するパターンばかりだ。まあ、そういう場合でも結局自分自身も助かるように計算して

の行動。つかみどころがなくて計算高いつてイメージ。

「ズバズバ言いますね」

「まあ聞けつてば。ジョルノは怒ったら冷静に理詰めになる感じだろ？そのうち怒りはどっかいつちまうと思ってるが、実はそうじゃあないとしたら？」

「まさか、ゴールド・エクスペリエンスが溜め込んでいるとでも？」

「いやー、どっちかつつうと精神が不安定でスタンドの力がやばいのをうまくガス抜きしてる感じじゃねーの？」

「それにしてはずいぶんとイタズラが過ぎますね」

「お前が発散するのを待ってんだろ」

「なんだつて？」

「ゴールド・エクスペリエンスはそんなやつだろ？わりとさ」

「そうです？」

「本人が自覚出来てねえからこんなことになってんだろーが。今回のだって、俺に助けを呼ぶのはOKなんだろ。だってズメバチもなにもしないでこなかったしよオ。今のゴールド・エクスペリエンスなら犬や猫どころじゃねえ、もつともつとヤベー奴をつくつたつてちつともおかしくはないんだぜ？」

「……」

「納得がいかないって顔してるなア…… そうだ、ジョルノ。今から出かけようぜ」

「えっ、いきなりなんです？」

「納得はあらゆるものに優先するんだって顔してるからよオ……ほんとはまだつて承太郎さんには言われてるけど、まあいいや。ジョルノにあわせたいやつがいるんだ。つていっても俺も会うのは初めてなだけだな。いこうぜ」

「??」

よくわからないまま、僕はカバンをもって官舎を後にすることになる。なお、水も合わせて生み出された生命と判定されるようで、物取りにあったかのような大惨事を除けばご近所付き合いに支障が出そうなものではなかったのだった。

オーソンの近くにある地図にはないはずの小道。そこには、いつの間にか少女が立っていた。仗助先輩くらいの美少女である。髪はオールバックで、ワンピース姿という服装をしている。隣には愛犬だというアーノルドという犬がいた。

「仗助先輩……彼女は？」

「康一に聞いたんだけどよオ……この人は杉本鈴美さん。アリスと一緒に幽霊らしいぜ」

「康一……露伴ちゃんの友達だったわね……ということは友達なのかしら？」

「露伴ちゃん？」

「私、15年前に死んでいるのよ」

彼女はたんたと身の上を語り始めた。今から15年前に、殺人鬼が杉本家に押し入り、家族と愛犬と共に杉本鈴美は殺された。享年16歳。

「私がここに居るのは、まだ殺人鬼が捕まっていないからよ。それどころか、被害者は更に増え、この町は他の町の7倍以上の行方不明者が出ている。この「振り向いてはならない小道」に、殺人鬼に殺された人の魂が空を上っているわ」

なるほど、この世に未練があるから、自ら進んで地縛霊になっているというわけか。

「あなたといい、康一君といい、幽霊をあつさり信じてくれるなんて思わなかったわ」

「二度あることは三度あるといいますからね」

「アリス・ランドって子は気の毒ね、スタンドのせいで成仏できないなんて」

「ここが幽霊の通り道ならサウンドガーデンもいそうなものですが、いないんですね」

「ここはスタンドではない冥府とあの世の境目だもの。あの世にとどまらせようとする力と引きずり込もうとする力は相反するわ。出会わないのが運命なのよ」

「なるほど、そういう星の巡り合わせってわけか。ところで仗助先輩、彼女と僕をあわせたのは一体？」

不思議に思っただけで仗助先輩に視線を投げると、なにやら写真を杉本鈴美さんに見せているところだった。次の瞬間に彼女の眼差しがきつくなる。

「ええ、ええ、この前日に登っていったわ、間違いない。体の半分が吹き飛んでいて、血だらけで、最後まで赤ちゃんのことを心配していたわ。まだ死ねない、まだ死ねない、死にたくないって」

僕は想像するだけで悲しくなった。

「きつとあいつの仕業なのよ」

「犯人が誰か知っているんですか？」

「わかるわ、だって私をころした殺人鬼ですもの」

「なんだって!？」

僕の反応に嬉しそうに彼女は笑うのだ。

「私はずっと待っていたわ、15年間。あなたたちのような人たちを。あなたたち生きてる人間が町の誇りと平和を取り戻さなければ、意味が無いの。耳を傾けてくれる人がいて、嬉しいわ」

そこに浮かんだ涙を見て、僕は無意識に拳を握りしめていた。仗助先輩に指摘されてようやく気づくのだ。

「行き場のない憤りとかよオ、ぶつけ先が見つかってよかったじゃねえか」

僕はバツが悪くてなにもいえなかったのだった。

1989年からD I Oの協力者が事件や事故に巻き込まれる、もしくは消息不明となりスピードワゴン財団の手腕をもつてしても追跡できない。なんとも不気味な案件が山のように連なり始めていた。

D I Oの協力者は世界中の経済界をはじめとした様々な分野に根深く入り込んでおり、排除する訳にも行かず監視をするのみで手をこまねいていることもよくあった。ゆえに、その監視対象がことごとくいなくなるのは財団側として危機意識を抱くのは当然である。

それが水面下で行われている暗殺あるいは仲間の勧誘だと気づいたのは、スピードワゴン財団職員の恋人が内通者の1人だと判明したからだ。

スピードワゴン財団が組織を挙げてD I Oの協力者を暗殺する人間を追いかけている中。男はいくつかの候補地から決行地点を選び、世界中を移動しながら必要な特注の狙撃銃、偽造の身分、偽パスポート、衣装や小道具、入出国経路などを抜かりなく用意し、暗殺と行方不明の手引きを遂行していた。

スピードワゴン財団は全国の国境やホテルから毎日届けられる入国者・宿泊者リストを洗い、何度も追い詰める。その度に彼は寸前で逃げ、何度も偽造パスポートを取り替えて変装を変える。その途上においては、ホテル以外の宿泊場所を巧みに得るなどして、時間を稼ぎながら標的を目指す。

当初、汐華初流乃にD I Oの協力者の居場所を聞き出そうとしたスタンド使いの男は、その男ではないか、と言われていた。スピードワゴン財団職員に成りすますという大胆不敵な犯行にもかかわらず、未だに見つからないからだ。だがここまでみつからないとなると、手引きした男と任務を遂行した男がいることになり、背後に組織を感じざるをえなくなる。

それはあたっていた。

スピードワゴン財団が見つけれられないのは無理もない話だ。その

スタンド使いは初めから存在していない。ただしくは本体とスタンドの組み合わせはあとから生成されたものであり、本体はすでに出国しているからである。

その男と接触した後、行方不明という自由を勝ち取る恩恵を預かるかわりに、なにかを失った男がここにいた。

今なおジョースター殲滅の闘志を燃やす男の名はジョンガリ・A。推定12歳にしてDIOに心酔し配下となったのだが、監視に優れたスタンド故に別の国に潜伏していたため、DIOのために戦うことなく全てが終わってしまった哀れな男だ。同年代のポインゴたちとは異なり、エジプトに残れなかったことを嘆き、悔やんでいた。

10年振りにジョンガリと再会した支配人は随分と雰囲気が変わったように思った。

「軍人か…… なかなか頑張ってるじゃあないか、ジョンガリ坊や」
久しぶりにあった少年は復讐に闘志を燃やしたまま青年となっていた。10年はそれだけ人を変えるのだ、見た目も心も。アメリカの軍人となっていたジョンガリは休暇もかねてこの街に訪れているという。普通なら京都あたりが観光のセオリーだろうに、わざわざ東北地方なんてデーパーなところを選ぶ時点で支配人は目的がわかっていた。

「俺を殺しに来たか？ジョンガリ坊や」

「お前がDIO様を裏切って日和見に走ったのは知ってるぜ。だがまだ殺さない。お前には利用価値があるからな」

「利用価値ねえ…… 23のクソガキにんなこといわれるとは思わなかったが…… まあ本気なんだろうな。お前はやると言ったらやる男だ。そういう目をするようになった」

支配人はジョンガリを見つめる。

「それにしたってなあ、ジョンガリ坊や。なにしてたんだ？これは軍人という経歴も含めて言ってるんだが」

「どういう意味だよ」

「10年間も一体アンタ何やってたんだ、と聞いているんだ。だってさう言わざるを得ないだろう？軍人になってるヒマがあつたらさっさ

と空条承太郎の一人や二人殺しちまえばいいものを。何こまねいてる。……いや、何を企んでる？」

支配人は違和感をぶつけるのだ。ジョースターの血統にとどめを刺す時、ジョンガリの人生はやっと始まる。それほどまでに心のささえだつたD I Oを奪つた空条承太郎が憎い。

この、あまりにも重々しい言葉は、これまでジョンガリがずっと心の支えなしで生きてきて、そして長年の恨みをやっと果たせるって、いう万感の思いが込められている。

だが、D I Oが死んでからもう10年が経つ。ボインゴみたいに新しい人生を歩もうとして頑張っているとか、ポルナレフや空条承太郎みたいに新しい敵と対峙して戦いに生きている、ならいざ知らず。

ただの軍人として生きていながら、呑気に世界中のD I Oの協力者に空条承太郎の復讐を持ちかけて賛同しなければ殺すなんて遠回りしなくてもいいだろうに。そんなにD I Oを殺されてショックならさっさと空条承太郎を殺しに来ればいい。そう、支配人はいった。

空条承太郎が気づいていないのだから、なにもしていないのはわかる。そう付け加えた。

「よく知ってるな」

「そりやこの街に潜んで何年になると思ってる。腕がなきやスピードワゴン財団に目をつけられてるさ。それなりのつてはある」

空条承太郎が高校生のころ。いや、結婚したとき、赤ん坊が生まれたとき。復讐なんてものは、そういう幸せの絶頂で殺すのがセオリーだろう。なのにジョンガリはずっとずっと何もしなかつたし、していない。

いや、あれからずっと殺ろうとしていて、ことごとく失敗して10年だったら笑うが、軍人だ。スナイパーだ。武器はあるし腕はあるし、いつだって殺れるはずだが、やらないのだ。だからこそ支配人は問いかけるのだ。

「何を企んでる？ジョンガリ坊や」

ジョンガリは不敵に笑うだけだ。

「まだまだ、まだ時期じゃない」

「お前にしちやずいぶんと慎重だな」

「慎重にもなるだろ、俺だから」

たしかにジョンガリのスタンド『マンハッタン・トランスファー』は空気の流れを読み、あるいはその銃撃の反射の中継地となる能力だ。ゆえにコンプレックスがあった。

ホル・ホースは自分のスタンド銃でスタンド弾を自由に撃てたし自由になんか消すコトが出来た。だからエジプトに残れたし、ジョンガリは残れなかった。同じ盲目のンドウールもまたジョンガリより優れていたから残れたのだ。

ジョンガリ・Aはちゃんと銃を持ち込んで組み立てないといけない。そしてスタンドを撃つコトも出来ない。明らかに監視と暗殺に向く能力だった。出来ることは「風や空気の動きを感知する（人や物の動きがわかる）」ことと、狙撃衛星として弾道を変えること。

「スタンドを強化するために入隊か……熱心なこったな。しかし、そこまでお前狂信者じゃなかったように思うんだが、俺の記憶違いか？」

「そうだな、記憶違いだ？なんせ10年振りだからな、会うのは」「そーかい、ならそういうことにおこうか」

10年にも及ぶ恨みのチグハグさに疑問は覚えるものの、ジョンガリが口を閉ざしたために支配人は会話をきりあげた。

「で、今更この老いぼれに何の用だ？」

「汐華初流乃と接触しているな？」

「……驚いたな、もう掴んでやがるのか」

「いずれドリーム・シアターをつかってもらう時がくる。それまでせいぜい営業するんだな」

「嫌だと言ったら？」

「医療ミスで息子がしぬな」

「……誰の入れ知恵だ、ジョンガリ坊や」

「何の話だよ」

支配人はためいきをついた。

「あれ、閉館しないんですか？」

今年を最後に閉館すると書いてあったはずの張り紙がなくなっている。B級ホラー映画にハマったのか、最近足繁く通うジヨルノが聞いている。

「常連客に熱心に口説かれちゃってね、俺もなかなか焼きがまわったなア」

コスモス・フアクトリー

幼かった頃、果物の種を飲み込んだりしたときに、もしかしたらお腹の中で芽が出やしないだろうかとか心配をしたことはないだろうか。注意されて、どうしようかと悩んでいた、とか。そんなのは冗談の世界だと笑っていたら、笑っていられない事態に陥ってしまった。

悲劇は常に喜劇と背中合わせというが、まさにそんな悲劇が天谷の身に起こった。そのはじまりは、まだ寒さ厳しい2月初旬のことだったと記憶している。

ある朝天谷は焦っていた。簡単にいうと寝坊してしまったのだ。急いで朝食をとる。朝に弱い天谷は、デザートのぶどうを種も皮も出さずにそのまま食べてしまった。そう、ぶどうの種まで飲んでしまったのだ。種はそんなに小さなものではない。硬い種が扁桃腺を揺らして食道を押しひろげ胃に到達する感触を、それはもうはつきりと感じることができた。

おしっこが勢いよく出すぎたときのような痛みをのどに感じたが、そんなことを言っている場合ではない。なにしろ遅刻しそうなのだ。天谷は歯磨きをすませ、洗顔のかわりに申し訳程度の水で顔を濡らすと、すぐに家を飛び出した。食道と胃の違和感はそのうちにおさまり、ぶどうの種を飲み込んでしまったこと自体、当然のように忘れて日常を過ごしていた。

天谷は無性に朝から耳の奥がむずがゆくてたまらなかった。耳かきを突っ込んでみるも、届かない感じがもどかしい。耳を引つ張ると泣き叫びたいくらい痛くなり、先生が中耳炎じゃないかと疑って耳鼻科に連れて行った。

痛い。耳の奥と同時に、胃までがつっぱるような変な感覚。ぜんぜん抜けてこないのだ。原因はわからないと言われた。薬を出されて返されてから、天谷は手を洗うために鏡を見た。

「なっ………なんだよこれえッ………！」

耳からなにか生えているではないか。天谷は気づいた。なにかの芽が生えている。思わず引き抜こうとするが舌を引っこ抜かれる

ような痛みが襲う。

「どう？痛い？」

涙目でうずくまっていると耳元で囁く声がする。天谷は悪寒がとまらなくなった。

「これはあのととき飲んでしまったぶどうの種が胃の中で発芽して、その芽が成長して耳から出てきたのよ。ちゃんと出さないから」

「……待って……納得できないよ、おかしいだろオ……なんで耳？なぜに耳？」

「何故って、私が他のところに生えたら、あなたすぐ死ぬじゃない」
現実として天谷の耳からはぶどうの芽が生えてきているのである。これには道理も引つ込まざるを得ない。

施設の誰にもぶどうの芽が見えないとわかったとき、天谷は絶望した。その日から天谷は体重がずいぶん減った。食欲が旺盛になり、それまでの倍近くの量を食べているような気がしていたのだが、体重は増えるどころかどんどん減っていったのだ。要はお腹の中の種が、発芽し成長するための養分を、天谷の身体から摂取していたということだろう。

そして今、この芽がどうなったかというところ、順調に育っている。葉っぱが直接光を浴びられるようになったおかげで、天谷の体重減少はひと段落している。それどころか、どうやら今までのお返しにと、光合成で得た養分を分けてくれていたらしく、むしろ以前より太ってしまった。

誰も見えないから現代の医学では、天谷の身体を傷つけずに芽だけを取り除くことは不可能だろう。

「このまま死にたくなかったら、いうこと聞いてくれる？」

天谷はぶどうの囁きに抗うことが出来ない。鼓膜を突き破って花や目や口から発芽して、成長して、実をつけてもいいのだと脅かされているからだ。実際、天谷はこの耳の聴力が徐々に失われつつあるのである。抵抗したらどうなるかなんて、誰の目にも明らかだった。

ぶどうの囁きに耐えきれなくなり、言われるがまま、天谷は行ったことのない住宅地に入り込んだ。

辿り着いたのは、どこにでもありそうなアパートである。

「ポストを見てくれる?」

ポストが誰でも見られる位置に設置されている。少年はその一角をみて、違和感を覚える。ポストがすべてガムテープで固定されている。ついでに近くの壁にはペンキで落書きがされている。近くにある花壇は放置されているようで、すっかり枯れて荒れ放題。ついでに言えば、このアパートのベランダは、人の営みが全く感じられない建物だった。

「どれだよ」

「木村ってあるでしょう、そこよ」

どくどく耳の脈の音がうるさい。天谷はガムテープを剥がして、ねちやねちやのそこを開いた。セロハンテープで鍵が固定されている。「それで部屋に入って」

うすら寒くなってきた天谷は嫌だと泣き叫びたい気分になるが、ぶどうが許してくれない。真つ暗な気分水道の料金メーターが並ぶ一角を通り過ぎる。なんとなく目を走らせるがどのメーターも止まっており、動いている気配がない。つまりどの部屋も水が止められている、人が住んでいない部屋ということだ。

天谷は驚いた。誰かいると思われる部屋は普通に明かりがついているんだが、どういうことだ。さすがに引け目を感じていた天谷はなにか危ないことをさせられている信憑性を帯びてきて顔が険しくなる。

「わかったよ、いけばいいんだろ」

天谷は人がいるはずの部屋に続く階段に向かった。

「……これはっ……!」

そこには立ち入り禁止のテープが張られている。ラミネートされているお知らせによるとこのマンションは耐震偽造が発覚し、建て替えが行われるため住民はすべて立ち退いているようだ。

その後、建築業者との交渉が難航しているのか、数年前からずっとこのままのようだ。つまり、ここには誰も住んではいけないということだ。とうとういても立ってもいらなくなった天谷は逃げ出した

くなる。

だが、ぶどうが囁くのだ。

「いいけど、あなた死ぬわよ?」

長い長い沈黙の後、天谷はそのテープを無視して一気に階段を駆け上がる。

アパートの一室に辿り着くと、やはりここだけライトがついている。ぴんぽんとチャイムを鳴らした。どンドン、と壊れかねない勢いで乱暴にぶつ叩く。

「鍵はあるでしょう?なんでたたくのよ、うるさい」

天谷は慌てて鍵をあけて、がちやりとドアが開く。

「ひいっ」

天谷は戦慄した。足元から水が流れてきたのだ。たくさんの木々が生い茂っている。

「ちよつとお…… 静かにしてよね。みんな起きちゃうじゃないの」
部屋着姿の女がいる。けだるい様子で木々の下をみている。つられて見てしまった天谷は腰を抜かしてしまった。

人だ。人が床にびっちり敷き詰められている!

それはそれは、異様な部屋だった。数年間使われていないのに、なにも劣化していない上に、問題なく使用することができる部屋が広がっていたのである。

花瓶には鮮やかなひまわりが飾られており、丁寧に手入れがされているようにみずみずしい。部屋全体が清潔に保たれ、整理整頓されている。ちよつどいい室内温度に保たれている。

テーブルの上には、仕事に行くから食べてくださいと一筆添えられた置手紙とラップがかけられた食事が用意してある。天谷はあなたみたいな人がルームシェアしてくれていろいろやってくれているんだ、とおぞましいことを聞かせてくる。天谷の表情は青ざめていくばかりである。

埒が明かない問答である。さすがに天谷は女の言動がおかしすぎて、全く会話がかみ合わないことに鳥肌が立っている。ここに居てはいけない。そう強く感じる。ここにずっといては天谷は壊れてしま

う。女は天谷の忌避感などお構いなしに、いかに自分にルームメイトたちが優しいかメモを見せてくる。

弱音を吐く女を激励する言葉が並んでいる。丸文字のかわいらしい女性の文字である。帰りたい、戻りたい、家族が心配だ、でも帰り方が分からない、という仄暗い背景をうかがわせる言葉が並び、それをひとつひとつ慰める言葉が並んでいる。ここだけみれば温かな交流だが、あまりにも状況が異質すぎた。

ルームメイトが床に敷き詰められている人間も含まれているのはあきらまかだった。

「はい、これ。汐華初流乃に渡してくれる？」

天谷は壊れた人形のように頷いたのだった。

天谷はどこかジオルノと似ているところがある子供だった。外部から人間が来たとき、子供たちは決まって私を僕を俺を見てくれと必死な程に気を引こうとする。時には周りをけ落とそうとすらするのだ。

ジオルノはここに辿り着くまですっかり希望を持たない方が楽だと知っていたし、今までの環境からしたら施設は天国だった。だから遠巻きに本を読んでいる蓮見琢馬の隣で続きを強請るような子供だった。そこまで積極的ではないにしろ、大人の前で子供らしくすることに疲れ、話し始める児童書に集まってくる子供の一人が天谷だった。だから。

「大丈夫ですか？」

ぶどうの枝と一体化している耳があったはずの場所。そこに手を伸ばし、問いかけた瞬間、堰を切ったように泣き始めた仲間にジオルノは目を丸くするのだ。

どうせ、俺のなんかどうでもいいんでしょと気をひくことすら億劫になり、陰鬱な顔をしているはずの天谷が、人の善意を期待して泣くなんて初めて見たのだ。

仗助や康一だったなら、なにいつてるんだ、と平手で頬を叩いて、叱責してくれるだろう。誰かを叩くなんて生まれて初めてのことだなんていいながら。

自分の中にそんな暴力衝動があるなんて思いもしなかったといいながら。目の前には頬を押さえている天谷がいたなら、きつと瞳には涙を浮かべ小刻みに震える。唇にはうつつすらと血がにじんでいて、繊細なガラス細工を壊してしまったような後悔と罪悪感が沸いてもなお、謝らないと彼らはいかに違いない。

だがジヨルノはそうではない。理解できないことを理解できるように振る舞うことの方が残酷だと知っている。だから必要以上に踏み込まないのだ。なのに、天谷は泣くのだ。わあわあ泣くのだ。尋常な泣き方ではない。この時点でジヨルノはイジメなどの問題とは別次元の問題を天谷が抱えていると悟った。

「これ……ジヨルノにつてえ……」

根気強く事情を聞き続けたジヨルノは、ようやく天谷の目的に到達する。施設の施設長が困り切った顔で天谷がジヨルノに会いたいと癪癪を起こして、ハンガーストライキを始めてしまったと電話口で聞いた時にはなにごとだと思っただけだ。

ぐしやぐしやの紙を広げてみると汚い字で住所が書いてあった。

「誰がこれを君に？」

しやがみこんで視線を合わせ、優しく問いかける。天谷はジヨルノの服の裾をしっかりと握りしめて、片時も側から離れまいという態度のまましゃくりあげる。

「これ……っ……つけた、ひと、があっ……」

しにたくない、まだしにたくない、たすけてジヨルノ、と必死で助けを求めてくる天谷の頭を撫でながらジヨルノは頷いた。

ふいにビクツと天谷の肩が飛び跳ねる。瞳の奥にはこの世の終わりにみたいな絶望感が広がっている。

「……あんな、い、する……から……ころさないで……し

にたくない、しにたくない……ジヨルノ、きて、今すぐ来てッ!!!」
発狂したように泣き叫びながら天谷が叫ぶ。グイグイ手を引っ張

り、天谷は施設からどこかにジオルノを連れていこうとしているではないか。

「わかった、わかったから、今すぐ行こう」

頭がとれかけの人形のようにぶんぶん首を振りながら、天谷は部屋から出ていこうとする。

「ここじゃあ話しくいみたいなので、今から少し二人で歩いてきますね」

心配そうに様子を伺っているスタッフと施設長にジオルノは告げる。天谷だけ特別という雰囲気を感じつけた子供たちがわらわら集まってくるが、錯乱寸前の天谷を見てずるいと連呼するのはやめたようだ。おずおずと顔を上げ、ジオルノの様子を伺っているのがわかる。ジオルノは笑って答えた。

「これから男同士、とても大事な話があるから」

この年代の男の子には魔法の言葉だ。

天谷はジオルノの手を1度も離さないまま、施設をでる。

「帰りが遅くなりそうだから、電話してもいいかな」

天谷は怯えた様子でぶどうの枝を見る。

「……うん」

「電話ボックスにいるから」

1人しか入れない電話ボックスである。どうやら天谷を通じて呼び出したらしい人間は待ってくれるらしい。ジオルノは財布を探った。

「いらっしやあい」

やる気のない女の声がある。湿地帯となつている足場には所々水草には隠しきれない人間の胴体が浮かんでいるのが見えた。

ジオルノは眉を寄せる。

「……さあ、天谷を解放してもらいましょうか。僕をここに連れてくるという目的をしっかりと果たした訳だから」

「んんー……そうねエ……それもいいんだけどお……」

「まだなにか？」

「汐華初流乃、あなただってえ、すつごく頭がいいでしょー？あたしと違ってさア。だからあー、保険ってことでここにいてくれるう？」

天谷はジヨルノの袖を掴んでガタガタ震えているが、女がはやくう、と呟く声がぶどうの木から聞こえてくるからだろうか。今にも泣きそうな顔をしたまま、リビングの椅子に座り込む。

「逃げちゃダメだってばあ！はーい、コスモス・フアクトリー！あとよろしくねえ」

「うわあああッ！」

すぐ下に転がっている人間の体に変化し、まるで鳶のように天谷の足と椅子を固定化してしまう。

「いたい痛い！」

今度は両手が変化して鳶が背もたれと天谷をたちまち縫い付けてしまう。どうやら人体を植物にしても神経などはそのままのようでありびつに歪んだそれは天谷に激痛をもたらしているようだった。スタンドは一般人には視認できないが、寄生されている人間には見えてしまうのだから発狂するのも無理はない。

耐えきれなくなったらしい天谷はぐったりとしたまま、動かなくなってしまう。このほうがよかったのかもしれない。下手に気絶することが出来ない精神強度だとかえって残酷な光景がこれから広がることになるのだから。

「……で、僕になんのようですか？こんな紙切れだけ渡されても分からないんだが」

住所が記されている紙切れをみせると女は口笛を吹いた。ジヨルノは不愉快だともいいたげに眉を寄せた。

「あたしがあんたを呼んだのはあ……ふたつ理由があるのお。まずひとつおつ、あたし、木村蓮花の邪魔をしないことお。あたしねー、頭がよくないからあ、めんどくさいことしたくなあいの」

間延びした、イライラさせる話し方である。

「ふたあつ、岸辺露伴を始めとした連中のお、嫌がらせをやめることお」

「嫌がらせとは?」

「あんた達があ、好き勝手に調べ回るからあ、あたし達が苦勞してるってえいつてるのお。わかるでしょ?人ひとり言うこと聞かせるのだったえ、前はこんなに慎重にならなくてもよかつたのにい」

「それはつまり、あんたは僕達が追ってる連続殺人犯の仲間で、僕達のことを把握している。そしてこれは警告と考えていいんだな?」

「そうそれエー!さすがよねえ、頭がいい人ってこれだからあこがれちゃうんだア…… あーあ…… なんであたし、こんなめんどくさいスタンドなんだろうお…… 搦手使わなきゃいけないなんてめんどくさいすぎない?」

「決定打に欠けるから搦手を使う必要性については同意するけれど、あんたと一緒にしないでもらえます?不快だ…… 不快だ、この上なく」

「えええ…… なんて怒ってるのオ?同じ植物を操る者同士、仲良くしましょうよオ」

「断る。僕がいえるのはそれだけです」

「えええ…… ほんとにイ?ちよつとは考えないのオ?この子をキユツとしちやつてもあたしは構わないんだよオ?」

女は驚いたように天谷をみてジョルノに聞いてくる。

すでに女はスタンドの種子を標的である天谷に植え付けており、「死ぬ」と一言発するだけで発動する。きつと天谷の全身を突き破り、ぶどうの花は開花する。きつと幼い子供の血の方が綺麗な花を咲かすだろう。あまりにもジョルノがあつさりと決別の言葉を口にするものだから、今まで人々を屈服させてきた女は予想外すぎて戸惑っているようだった。

「あつ、もしかしてえ、はったりだと思ってるのオ?さすがにあたしもさあ、そこまで馬鹿じゃないよお」

木村はニコニコ笑って、自分の体と一体化している蔦をひとつひきちぎった。

「うぐあつ!!」

男の声がする。すると、木村の掌にはドロドロに血を流す成人男性

の手が現れたのである。そして、ぽいつとジオルノの目の前に投げ
みせた。

「手に取ってみなよオ……本物でしょオ？あたしのスタンド、コス
モス・ファクトリーはねえ、こうしないと元に戻らないしい、あたし
がやーめたってしないと元に戻らないってわーけ。つまり、このま
まじゃあ、その男の子は解放されないんだよオ？しかもほつといた
ら、体は勝手に植物に近づいちゃってエ……、元に戻ってもふつー
の体じゃなくなっちゃうんだア。ツリーマンて知ってるう？あれに
なるんだよー！かつわいそー!!」

きやはははは、と耳障りな高い声で木村は笑う。ジオルノは男のま
だ暖かい手をとり、静かに見つめていた。

「ゴールド・エクスペリエンス」

「へええー、キレイなスタンドだねえ。金ぴかなテントウムシ？羽も
生えててかわいいい！」

ジオルノの手にあった腕はたちまち植物が芽吹き始めた。

「どーせなら、もつときれいな花にすればいいのにイ？たとえば、こん
な感じのっ！ねっ、コスモス・ファクトリー!!」

ジオルノの目の前に、たくさんのコスモスでつくられた人型のスタ
ンドが出現する。

「ゴールド・エクスペリエンスッ！」

ジオルノの声に応じて、ゴールド・エクスペリエンスがコスモス・
ファクトリーの手を弾く。

ぶわつとコスモスの花卉が散る。

どんな樹の花でも、いわゆる真つ盛りという状態に達すると、あた
りの空気のなかへ一種神秘的な雰囲気撒き散らすものだ。

それは、よく廻った独楽が完全な静止に澄むように、また、音楽の
上手な演奏がきまつてなにかの幻覚を伴うように、灼熱した生殖の幻
覚させる後光のようなものだ。

それは人の心を誘わずにはおかない、不思議な、生き生きとした、美
しさだ。

だがジオルノの前にあるのは、あまりにも媚びている色彩と香りの

暴力である。

「ッ!？」

最初にあったのは、違和感だった。なにかが体の中に蠢く、気持ちの悪い、モゾモゾとした気持ち悪さだった。ジオルノはとっさにゴールド・エクスペリエンスをみる。

「なっ!？」

にいい、と木村は笑った。

「ゴールド・エクスペリエンス!」

そこには身体中から発芽しているおぞましいオブジェとなったゴールド・エクスペリエンスの姿があった。

「なんだ……なにがッ!」

ゴールド・エクスペリエンスは明らかにいつもより精彩をかいていた。スピード、パワー、なによりも射程が著しく制限されているように感じる。生命エネルギーがあちこちに四散し、ひとつにまとめることができないのだ。

「まさか……コスモス・ファクトリーは、吸収できるのか!生命エネルギーを!」

「フツッならスタンドの維持が出来なくなる感じなんだけどオ……キヤハハハッラツキイ!あたしとあんた、相性最悪みたいねエ!!」

ゴールド・エクスペリエンスから発生した数多の茨が自身をがんにがらめにしていく。それはジオルノの体が拘束されるも同じである。

ゴールド・エクスペリエンスの拳はコスモス・ファクトリーを捉えることなく空を切る。掠めてもコスモスの花びらが散るだけでダメージを感じている気配はない。少しくらいあってもおかしくないというのだ。

おかしい、が大きくなっていったころ、コスモス・ファクトリーの生命エネルギーが膨張する。足元のいくつもの肉体が突如消失した。そして極大な茨がいくつも襲い掛かってきたのである。

ゴールド・エクスペリエンスから発生した蔦は金朱のいろの錦の蓑

をかけ連ねたように美しかった。大きくうねりを見せて動いている潮のように揺らぎ、本体であるジヨルノの意志に反して猛威を振るう。

そして床に転がっていた人間がまるごと変化した蔦は、ジヨルノ目掛けて次々と襲いかかる。ひとつかわすと、そこに傷どころではない大きなものを落としたかのような跡ができる。若蔦の群は扉を横切って退路を塞ぎ、床全体に張り巡らされていく。意思を持っているかのように、いくつもの蔦がジヨルノに向かってくる。ジヨルノはかわすので精一杯だった。

「チイツ」

鬱蒼と覆い掛り垂れ下る蔦葉をみると、もはや変異した人間と人間の間境目があるのかどうかも怪しくなる。ゴールド・エクスペリエンスで弾き返したり、ラツシユで蹴散らしたりするたびに死んだ体の一部が弾け飛び、老若男女の悲鳴がして、足元に鮮血が広がっていくのだ。舌打ちをしたジヨルノがぬかるみを弾く度に、そのパーツは新たな生命として湿地帯に芽吹いていく。

「あはははッあたしのフィールドでえ、このあたしにい、植物で勝負するっていうのお？大丈夫う？」

「お前の頭よりは大丈夫だから安心しろ」

「ひつどーい！ちよつとー、酷すぎるんですけどお？なあによお、ヘナチヨコぱんちしかできないくせにい！」

木村は気分を害したのか、コスモス・ファクトリーを呼び出す。

ぼちぼちと紅色の新芽が、ゴールド・エクスペリエンスから無数に生えている蔦の蔓から生えていた。

ジヨルノは目を丸くする。生み出した植物からさらに植物を生成することが可能なようである。生き物であれば寄生に寄生を繰り返すことが可能らしい。規模はどうしても小さくなるが、ゴールド・エクスペリエンスの行動をさらに制限することは可能だ。

「なるほど、面倒くさがりなあんたにはびつたりのスタンドだ。周りから養分を吸い上げていく寄生根性はまさしく、ですね」

木村は殺意をみなぎらせたままジヨルノをみるのだ。

それは爬虫類の掌のようでもあれば、吹きつけた火の粉のようでもある。スタンドを蔦蔓がたんねんに這い繁って、あつというまに覆い尽くしてしまった。

「コスモス・ファクトリーッ!!」

木村の号令に従い、ゴールド・エクスペリエンスが宙に浮く。ジョルノもフィードバックをもらに食らってつま先が床からだんだん届かなくなっていく。

首に黄金色の蔦が食い込む。下顎から、耳の後ろへと輪が締まる。鼻が、息を吸い込むために震えた。喘ぎ声が出る。足が前後に動く。水泳の訓練を行うかのように、足は揺れる。揺れは速い。

ほどなく、遅くなる。口から涎がこぼれた。泡が、喘ぎ声とともに、唇の端からこぼれる。両手が、首に食い込んだ蔦に伸び、皮膚とロープの隙間を探している。爪が首もとの皮を引っ掻いた。

血圧が上昇したのだろう、顔面と眼球が赤く、滲んだ。首のまわりが膨らむ。痙攣がはじまる。

首の気管は圧迫され、呼吸はか細いものになっていく。声は出てこなかった。声帯を震わせるだけの空気がそこにはもうなかったし、舌も喉の奥で石のように固まったままだ。気管は今では隙間なく塞がれていた。

空気は一切入ってこない。肺は新鮮な酸素を死にもぐるいで求めていたが、そんなものはどこにも見当たらない。身体と意識が分割されていく感覚があった。身体が空中でのたうち続けている一方、ジョルノの意識はどろりとした重い空気の層に引きずり込まれようとしている。

両手と両足が急速に感覚を失っていった。やがて辺縁を持たぬ暗闇が天井から降りて、すべてを包んだ。

木村はコスモス・ファクトリーに黄金色のコスモスを咲かせているサンドバッグにありったけの力を込めて連打をかますよう命令をくだす。怒りがおさまらないのか、それだけでなく四方から束になった蔦がすさまじい勢いで向かっていく。今にも全てがジョルノに到達しようとしたその瞬間、木村は目を開いた。

「なっ、な、なによこれ…… なによこれえっ!? ななな、なんで? なんで枯れていくのっ!? どうしてよ、コスモス・ファクトリー!」

物凄い勢いで植物がかれ始めたのだ。木村がコスモス・ファクトリーに命じてもなぜか新たな生命として植物を生やすことができない。なぜか小さな小さな芽が生えるだけで、すぐ枯れてしまうではないか。いくら生命エネルギーを注ぎ込んでも人間の体が植物に戻らない。そのうちコスモス・ファクトリーの力から開放された人間が床に転がり始める。

呻きながら、痛い痛いと言を流す男。泣き叫びながら助けを求める女。ぐったりとしたまま微動だにしない子供たち。そこには、犬や猫の姿もある。

「なんでっ……… なんでえ? あたしなにかした? まさか……… あんたなんかしたの!?!」

ここでようやく木村は気づくのだ。湿地帯にあったはずの植物がすっかり変わっていることに。

背の高い雑草が一面に生い茂っているのだ。大きな群落である。1—2 mに達する背丈の雑草。葉は茎に沿って多数が密生して付き、披針形で先端は伸びて尖っている。

「アレロパシーって御存知ですか?」

木村は振り返る。すっかり全身拘束の痕が残ってしまったているが、そこにはジョルノが立っていた。

「なによそれえ」

「ある植物が他の植物の生長を抑える物質を放出したり、あるいは動物や微生物を防いだり、あるいは引き寄せたりする効果の総称です。日本ではススキやセイタカワダチソウが有名ですね」

特にセイタカワダチソウは、アレロパシー効果でススキ等その土地に繁殖していた植物を駆逐し、モグラやネズミが長年生息している領域で肥料となる成分が多量蓄積していた地下約50センチメートルの深さまで根を伸ばす生態がある。そこにある養分を多量に取り込んだ結果背が高くなり、平屋の民家が押しつぶされそうに見えるほどの勢いがある。

しかし、セイタカアワダチソウでその領域が埋め尽くされると、土壌に肥料成分が蓄えられなくなり、また蓄積されていた肥料成分を大方使ってしまう。自らのアレロパシー効果により種子の発芽率が抑えられる等の理由により、派手な繁殖が少なくなり、それほど背の高くないものが多くなっていく。やがて大打撃を受ける。

「僕もよく知ってますが、植物つてのは環境が大事だ。生きられる環境になれば、いくらスタンドを使っても無意味になる」

「まさか、こんな短期間で何も生きられない環境にしたっていうのをお？嘘でしょ？」

「嘘じゃあないさ。こればかりはゴールド・エクスペリエンスに感謝だな。明らかに速度の精度が上がっているんだから」

一步、ジョルノが近づく。一步、木村が下がる。外部から栄養を供給できずモチーフたるコスモスがセイタカアワダチソウの毒に汚染されて飢餓状態に陥っているのか、そばに居るのはなんとも貧相なスタンドである。

寄生するエネルギーすら残っていないのか、いつの間にかゴールド・エクスペリエンスは元の輝きを取り戻していた。

「なるほど、アルラウネよろしく力を蓄えてたってわけか。哀れなものですね」

ジョルノは腰を抜かしたのか、倒れたままズルズル後ろに下がる木村を見下ろす。

「な、なによお……」

「さあ、話してくださいよ。僕は勝ったんだから。お前に命令してきた仲間の名前は？」

「しるわけないじゃない」

「は？」

「だーかーらー、しるわけないじゃない。あたしはめんどくさいことはいらない主義なお。あたしの代わりにあたしのことをしてくれる人を蓄えるの、邪魔しない代わりに協力しろって言われただけでえ、あたしは会ったことないんだもの」

「あったことが無い人間に従ってたのか、あんた」

「だってえ……この子みたいに集めてた子がいきなり居なくなつてえ、あたしもやけどしちゃったのよお？ちっちゃいやけどだったけどお……すごく痛くて死んじゃうかと思つたんだからア……そしたらまた別の子のぶどうから声がするんだもん。どうしろつてのよオ」

「……ダメージがないと思つたら、あのコスモスひとつひとつがスタンドなのか……。どんな声がしたか、説明してもらいましょうか」

「あのねえ、あたしが正直に話すと思うのオ？」

「もちろん、話すに決まつてるじゃあないか。スタンドがろくに使えない今、僕がこの人達を直したらどうなると思えます？あんたを待っているのは、司法に問えないと知つた犠牲者たちの復讐劇だ」

「ひいつ」

「入院したって面会謝絶にはできないな、だってせいぜい体調不良だろう？セイタカアワダチソウのアレルギーがあるなら話は別だが」

木村はジヨルノが犠牲者たちの治療による悲鳴を聴きながら、ガタガタと震え始めたのだった。

コスモス・ファクトリー

本体 木村蓮花

(親に置き去りにされたニート)

破壊力 | C

スピード | A

射程距離 | C

持続力 | D

精密動作性 | C

成長性 | A

本体は形兆によりスタンド使いになる。自堕落でめんどくさがり

のため、ニート生活を継続させるためにスタンドを使っていた。下僕が吉良に爆破され、2回目に脅されて協力していた。

コスモスがモチーフの群生型スタンド。生きているものに対して、植物を寄生させることができる。生み出した植物は本体の意思で生き死にが決められ、死ぬと元の生物に戻る。寄生先が死んでも元に戻る。生成した植物にさらに植物を作ることが可能。

その場の環境に適応した植物しか生み出すことができない。植物はスタンドにもはやすことができるため、生命エネルギーを蓄えて強化することができる。

人間へのスタンドを解除しても場合によってはツリーマン症候群を発症してしまう。

ハーミットパープル

静(しずか)という名前が判明したばかりの赤ん坊の発育状況は、スピードワゴン財団の医療班が太鼓判を押すほどの成長ぶりだという。

体つきに安定感が出てきており、両手で支えれば短時間おすわりができる。両手で体を支えようと短時間なら1人で座れる。寝返りが上達してきて、足で勢いをつけなくても腰をひねって回転できる。手の動きも発達し、手で持ったものをもう一方の手に持ち替えられる。

さみしい、悲しいといったよりこまやかな感情が発達してきて、いろいろな理由で泣く。

ジョセフさんはすでに、泣き方の違いに注意してどうして泣いているのか静の気持ちを考えられる。どんなときどんなふう泣くのかかわかってスムーズに対応できている。

静は満足げにジョセフさんに向かって「アア」「ダーダ」など繰り返し音を出していた。

身元が判明したことで健康診断をちゃんと受けていることがわかったとジョセフさんは話しながら静を抱き上げる。抱っこしてみるかと聞かれたが、あんなに柔らかくて小さくて温かいもの恐ろしくて抱けないと断った。

「うるさくてスマンが、今の時期の赤ちゃんは目を離したら死ぬからもう」

すっかり父親の顔になっているジョセフさんは認知症とは到底思えない。たぶん不倫がバレてしまったからすつとぼけていたんだろうと僕は思った。

静の母親はシングルマザーながら懸命に育児をしていたようだ。離乳食を2回食にしたり、オーラルケアを始めたたり、夜泣き対策に色々試していたりした形跡が遺品から判明したという。

「母子手帳に書いてあればよかったんじゃが、わざわざ書かんだらうしなあ」

ジョセフさんは苦笑いしている。目の下にクマがあるのは、夜泣きに苦戦しているからのようだ。

赤ん坊は大人が考えている以上に過敏だ。視力が0.1もないくせに匂いで母親を見分けてしまう。きつと静はすでに母親がいなくても本能でさどつているはずだ。ほとんど初めての場所で、今まで会ったことのない人たちと向かい合っていたら、なんだかすぐく天涯孤独な気持ちになってしまう。だから泣くのだろう。夜泣きがひどいのは無理もない。

今は夜のリズムが整ったと思ったら、夜泣いて起きるようになるころらしい。背中をトントンする、抱っこする、授乳する、お茶を飲ませる、外気に触れさせるなど、赤ん坊の気分を落ち着かせる方法をいろいろ試してみているらしい。早寝早起きの生活リズムを整え、日中は散歩や外遊びをする、寝る前は興奮させないなどの工夫もしているがダメらしい。

静はすでに理由や目的があつて泣き、問題が解決したら泣きやむようだ。また、欲しいものに手を伸ばしたり、指で示したりするようになるので何をしたいのか、わかりやすいのが幸いらしい。それは、ジョセフさんと静の「共感性」が高まった証拠だろう。

ふだんからしぐさや様子に注意して、まだ言葉にはならない赤ん坊の気持ちをくみ取ってあげているようだ。なるほど、たしかに目を離したら死ぬ。

「やはり初めて会う人には緊張するようじゃのう、固まってしもうた」

おーよしよし、とジョセフさんは静を高い高いし始める。

「わしは静を養子にしようと思つとる」

僕は目を見開いた。

「静は海外養子縁組になるのう」

「アメリカではよくあることなんですか」

「そうじゃ。スタンド使いは惹かれ合う。静と会ったのも巡り合わせじゃ。それに仗助と打ち解けられたのも、この子のおかげじゃのう」

「つまり、静・ジョースターですね」

「そうなるのう」

僕は胸をなでおろした。透明になるスタンドがまだ制御出来ない

赤ん坊なんて今の日本中どこ探したってちゃんと育てられる人はいないはずだ。

「ジヨルノ君、座ってくれるかの。老体は立つのも一苦労じゃ。なにせ一日一日赤ちゃんも重くなっていく」

僕は促されるままに座った。

「承太郎から話は聞いたよ」

「そうですか」

「DIOを思い出させていけない、年甲斐もなくイラついてしまうと舌打ちしておったわ」

僕は声を上げて笑った。

「君は決して無愛想というわけではなく、誰かに話しかけられればきちんとしてそれに答えたし、物のいいようもしつかりとしている。そうなるうと思えば、いくぶんのぎこちなさは感じられるにせよ、愛想良くなることもできるようじゃな」

きらり、と老人の目が光る。

「しかし原則としては、孤独だ。子供は好きで、子供がいたらとつとめて親切に振舞おうとする」

僕は静かに聞いていた。

「聞いた話じゃが、君は暗闇の中にひとりぽつんと座っているような子供だったそうじゃな。暗闇の中にじつとうずくまっているような、まるで置き去りにされた荷物のような。じゃが今はそうは見えない。友達に恵まれたのう」

ジョセフさんは目を細めた。

「人を見る目はあるつもりなんじゃ、これでも」

「それで、僕に話してなんでしようか」

「なあに、老人の相手をして欲しいだけじゃよ。静の世話で一日中つきつきりじゃからのう。気が滅入っていけない。承太郎は博士号をとるための論文に忙しいからのう」

「ああ、海洋学者でしたっけ、空条さん」

「そうじゃ」

僕は肩を竦めた。

たしかにそれは良くない。赤ん坊と2人しかいない部屋というのは思考が永遠に立ち止まる場所だ。そこに長居をしてはいけない。母を、妻を、女性を閉じ込めてはならない。ふとした殺意も、キツチンドランカーもそこから産まれるのだ。そうやって追い込まれた両親から保護されたり追い出されたりした子供たちを僕は誰よりも知っている。

しかし、まだあつて数十分だというのにずかずかと言い当てる老人だなと思う。これがアメリカの不動産王であり、空条さんの祖父であり、仗助先輩の父親なのだとしたら納得してしまいそうだ。

たしかに僕は孤独なんだろう。客観的に見ても、主観的に見ても。この人はきつと世界中にたくさん友達がいて、僕もそのうちの一人にしたいと考えている。みぞおちがきゆうと痛むような感じがする。差し替えのきく一枚のカードや、移りゆく日々の風景のひとつ、遠くで思いだす憧れ、真冬に思い描く真夏の海辺、そういうものにすぎない。そのことをすこしさみしく思う。

感傷的になるのは、きつと静がいるからだ。この赤ん坊がいると僕は感情のコントロールがきかなくなる。

いつもの僕ならば自分しかないとどこにいつもいたから、何者も心に映さない。ジョセフさんの言葉ごとときで揺らがない。

ホテルの部屋で異国語のTVを見ながら突如気が狂うほどさみしくなつて泣きじゃくり始めた静につられるなんてことないはずだ。とうに忘れていたはずの感情なのだから。

ああ、この目は嫌いだと思う。空条さんが時々僕にむけてくる視線だ。タチが悪いのは、空条さんはなんとか誤魔化そうとして誤魔化しきれず、ジョセフさんは隠す気が微塵もないところだ。

ひとりのときに部屋を貫くように差し込んでくる太陽のような、無遠慮さがある。ひとりのぼくに、どうあがいてもぼくはひとりだと思わせる。窓から外を見たりなんかすると、アスファルトでさえ宝石でも紛れ込ませているかのようにきらきらしているように見える。太陽は、ひとりの自分を嫌いになるようにしむけてくる。

「君は静と自分を重ねるとるんじゃない、だからそんなに真剣になれるし

優しくなれる。静を救うことが自分の救済になる。そう考えている。違うかの？」

だから勘のいい人は嫌いなんだ。

「僕自身よくわかってないんです、ジョースターさん。ゴールド・エクスペリエンスによればどうもそうらしいけれど」

静の母親を殺した犯人に繋がる手がかりを入手するたびに、ゴールド・エクスペリエンスは喜ぶ。今まで必要以上に出てくるやつじやなかったのに、なにかしらのアクションを起こす。それほどまでにすさまじい勢いで成長を遂げている。

「もう暴走は治ったかの？」

「一応はなりを潜めました。でも気を抜いたらすぐ鳩になって飛んでいってしまう」

「気持ち着急しているんじゃないのう」

「そうなんでしょうか」

「なんとかしたい、という強い感情を抱くのは初めてなように見受けられるからな」

「……」

僕は静かに目を伏せた。

いつか静が物心ついたとき。家族という確かにあったものが年月の中で臍気なものすら減っていく現実に直面する時がくる。自分がひとりここにいるのだと、ふと思いつくと目の前にあるものがすべてうそに見えてくる時がくる。そんな時に影を落とすものは少ない方がいいと今の僕は考えている。

「それが自覚できるんじゃないや、やはり君は強いほう」

ジョセフさんはしみじみと呟く。

当然だろう。僕は荒波に翻弄される流れ木ではない。その流れ木よりも僕は孤独だ。自分は一ひら風に散ってゆく枯れ葉ではない。しかしその枯れ葉より僕は寂しい。満たされたことは無いし、今のところ満たされる気は無い。心は吹きこむ風の寒さと共に冷えていて、そのままだ。世の中からきれいに離れてしまった孤独な魂がたった一つそこには見いだされている。僕が意味をあたえてやらなく

ちやいけない。静・ジョースターはその1歩なのだ。

「ジヨルノ、君は……弟に会いたいかのう？」

「……はいですね。もうわかったんですか」

「ううん、それは違うのう。逆じゃよ、逆。見つからなかったのが君なだけで、他の兄弟達は見つかったたんじゃよ、実は」

「見つけていた、だけなんですネ」

「そうじゃな、その通り。君から承太郎に告げられた忠告どおり、改めて兄弟達を調べ直したんじやがのう……今なお生き残っておるのは3人だけじやった」

「3人」

「そう、たった3人じや」

「彼らは、大丈夫なんですか」

「それはどういう意味かの？」

「D I Oの信奉者に唆されていたり、困いこまれたりしているかという意味で」

「それなら、さいわいまだじやった、と言えるのう。間に合ったともいうべきか。今となつてはこの世界におけるD I Oの影響力を過小評価していたと言わざるをえんが……。君のようにスタンドに中途半端に目覚めた子供は1人しかおらんかった。だからその子供を重点的に、他の2人はスタンドの発現の形跡はないから軽めの監視に留めておつた」

「(とごとく過去形ですネ)」

「過去形にもなるわい。君の懸念どおり、生き残っている子供たちは共通して、D I Oによからぬ子守唄を聞かされておつたようのう……。生き残ったから聞かされたのか、聞かされたから生き残れたのか、真相は闇の中じやが……。いずれD I Oの信奉者が君を始めとしたD I Oの息子たちに接触を図るのは目に見えておる。今、不穏な動きが世界のあちこちで見えている以上、監視だけではなく直接

庇護下にいれることになったんじゃ」

「庇護下」

うむ、とジョセフさんはうなずいた。

具体的にD I Oの息子にして、僕の弟（ジョセフさんがいいきるということは僕が1番年上らしい）の詳細や居場所、名前については教えてもらえなかった。スピードワゴン財団の監視におかれることを承していないからだと言外に言われているような気分になる。

「承太郎は頑として聞かせてくれんのじゃが…… そんなにやばいものだったんじゃなあ……」

「そうなんですか」

「うむ」

そんなものを子守唄にするとは、という憤りすら透けて見えるように僕は思考を巡らせる。

D I Oが『天国』へ行くための生贄として用意するはずだった子ども。あるいは気まぐれになんらかの実験をするために産ませた子供。ジョナサン・ジョースターで首をすげかえれば体に乗っ取ることが出来ることは証明されているのだ。スペアの意味もあつたのかもしれない。生き残ったのが僕を含めて4人しかないというのだから、D I Oにとつてはなにか意味があつたはずなのだ。そうでなければ生かすわけがない。

「あの、母親は？」

僕の問いかけにジョセフさんは静かに首を振った。

「お前さんの母親のように体を肉の芽に食い潰されるか、子供を産んだ直後に食料にされるか。いずれも母親はもうこの世にはおらん」

「天涯孤独ってわけですね、なるほど。たしかに庇護下にいけないと悪い大人に騙されてしまう。その庇護が真つ当かはまた別の話ですが」

「手痛いろう」

ジョセフさんは笑った。

「…… 待つてください、僕は空条さんからDNA鑑定の報告を受けました。肉の芽による被害は僕の母だけだったのでは？」

「ああ……その点についてはこちらのミスじゃ。訂正させておくれ。もう一人おったんじゃ。肉の芽による妊娠、出産、そしてその後生かされたまま帰国し、死亡した母親がおるんじゃが……。その子供は1986年生まれ。たった1年の違いじゃが……。つまりジョナサン・ジョースターの体がDIOに馴染み切つてから生まれた子供ということになるのう。DNA的にはその母親とDIOの子供でジョナサンの血はそこには入っておらん。どうやらDIOはお前さんと同じ条件で子供を作つたらどうなるか、実験したかつたようじやのう」

僕は思わず閉口した。ジョセフさんは胸糞悪い話をしてしまつて申し訳ないという顔をする。

「どこまでもえげつないことをしでかしておるのう、DIOという男は」

「1986年か……。なら、その肉の芽の犠牲者の子供がスタンド使いですね」

「……そうじやのう、隠しても意味が無さそうじやからいつてしまうが」

「なら、ついでに教えてくださいよ、ジョースターさん。僕はゴールド・エクスペリエンスのおかげで肉の芽の支配からは免れましたが他の子供たちはそうじゃあなかつたはずだ。空条さんが億泰先輩の父親を知らなかつたんだ、宮殿に肉の芽の暴走の犠牲者はいなかつたはずですよ。誰が肉の芽から彼等を解放したんです？」

「……まるで見てきたように聞くんじやのう。おどろいた……。承太郎じやよ。宮殿内に侵入したとき、承太郎がDIOの子供達や女性たちの額の肉の芽から解放したんじや」

「額だけ」

「そう、額だけ」

「なるほど……。ジョセフさん、あなたは娘さんと同じ症状に苦しんでいたのであろうその赤子を初めから庇護下に置くという選択はなかつたんですか？」

「今考えればそうすべきじやつたが、当時はそうではなかつたのう。」

DIOが死んだことで死の運命は避けられた。母親となる女性はいずれも失踪届けがだされておった。陰惨な事件の被害者の忘れ形見を遺族に届けるべきじゃとわしらは判断したんじゃ。さいわい、みな、人間じゃったからのう」

「だから監視にとどめた」

「そうじゃ」

「慈善団体ではありませんもんね」

「……ここだけの話、君たちの境遇を見ておると、判断を間違えたのかもしれないと承太郎はこぼしておったのう。あの子も今は一児の父親なんぞな」

僕は言及を避けた。

「つまり、スピードワゴン財団としては、僕も庇護下に入ってほしいわけですね」

「そうじゃな……本音としては」

「まあ、当然ですよ。ボランティアじゃあないんだから」

「君のように自分も含めて目的のためなら駒にできる思考は重宝しそ
うなんじゃがなあ……その興味深いスタンド能力もあわせて」

僕は肩を竦めた。

ロバート・E・O・スピードワゴンが創設者したスピードワゴン財団は、アメリカにて油田を見つけ、世界有数の大金持ちとなった彼がその金を全額つぎ込んでできた財団である。

医学、薬学、考古学までをも専門として人々の生活と福利厚生のために動く財団である。

このことは当然ながら嘘偽りのない真実なのだが、スピードワゴンがこの財団を設立した本当の目的は遺言に基づいてジョースター家の闘いを陰から支えるためだと僕はわかっているのだ。

数々の専門知識と技術は健在で、ヘリや船などの移動手段の管理・運転技術や、人間の目の損傷や犬の足の治療に至るまでの幅広い医療技術、果ては伝書バトの管理まで、あらゆる技術と物資、人脈をとおして、ジョースター家ならびに「黄金の精神」を持つ者たちの闘いを支え、見守っている。

そう、ジョセフさんはいった。

「もし、考えてくれるなら、わしらは君のためにあらゆる助力を惜しまんつもりじゃよ。頭の片隅にでもおいといてはくれんかね？」

ハーミットパープル2

社王グランドホテルを後にしようとしていた僕は、空条さんに声をかけられた。セリフを読むように淡々とした口調で、こちらがひやりとするほど空々しい声である。

「じじいに何を言われたのかはしらねえが」

機械的で少しの温かみもない様子で、素っ気ないほどきっぱりと告げる。ツンと取り澄まし、他人の感情をまるで無視した口の利き方だ。

「じじいが勝手にそう思ったただけだ。俺じゃあねえ」

相手を押しのけるような口調は、これ以上冷ややかには言えないと思えるほどの響きであたりに溶けていく。

「あの時、俺がどう思ったのか、どう感じたのか、どう決断したのか。それは俺だけが知っているべきものだ。勝手に憶測でものを言うのは勝手だが……」

じろり、と僕を見下ろしてくる。

「勝手に期待したり失望したりするのは結構だが、迷惑をかけるんじゃないやあねえぜ。ただでさえてめえには手を焼いてるんだからな、ジョルノ」

わざとつつけんどんな仕草ばかりしているように見えるのは、僕の気の所為だろうか。取り付く島もないほど事務的な声なのは、あえて内心を悟られまいとしているからだろうし。

そこには有無を言わせぬ響きがあった。その声は冷蔵庫に長いあいだ入れっ放しにしておいた金属製のものさしのようにとこまでも硬く冷ややかだった。そうするしか空条さんは誤魔化し方がわからないのかもしれない。ぽきつと木の枝を折ったように無愛想というか、言葉が足りない印象を受ける。

空条さんの発する言葉があまりに冷たいので、もしここに仗助先輩や康一先輩がいたら今すぐ逃げ出したいとコソコソおしやべりに違いない。僕も違う意味で空条さんの前から忽然と姿を消したい気分だった。

「どう扱っていいか困っている僕にジョースターさんが余計なことを言うから不機嫌なんですか？」

空条さんは眉を寄せた。

「なにをいってる」

「あまりにもタイピングが良すぎるじゃあないですか。博士号をとるための論文で部屋につめているって聞いてましたが」

「……」

「DIOの協力者や正体不明の爆弾魔がいるんだ。しかも被害者は静の母親。アンタがなんの対策も講じないでホテルにジョースターさんを泊めるとは思わない。貸切でもしているんじゃないですか？監視カメラのひとつやふたつ、ありそうですね」

「肉の芽のくだりで俺に向かって話してたのはどこのどいつだ」

「お互い様じゃあないですか」

息が吹きかかった空気がその場で凍っていくのではないかと、とも思える沈黙が流れていく。不機嫌さを凝縮して、すぐみさえ感じる低音で、空条さんの舌打ちが聞こえた。僕は小さく笑った。

僕達は歩道を歩いていった。空条さんが論文の気晴らしに歩きたいから付き合え程度の軽口を叩いたからだ。いいですよ、とうなずいた方がいいが空条さんは本気でそのつもりだったようで、海岸まで歩かされた。いつまで付き合えばいいんだろう、と思っていたら。

空条さんはおもむろに岩場にさしかかると靴や靴下をぬぎ、服の袖をまくしあげて海に入ってしまったのだ。まさかこのままフィールドワークに突入するつもりじゃないだろうな。懸念が不幸にも当たってしまったと気づいたのは、クーラーボックスをもってこいと言われたときである。

「……新種のヒトデですか」

零れた声は呆れと若干の疲れがにじんでいた。すっかり砂だらけになってしまった靴をひっくり返して、僕は中の痛みの原因を追い出しにかかる。手渡された濡れたタオルで、海水でべとべとになってし

まった服のあちこちを拭った。

「露伴先生はきちんとお金を払ってくれるっていうのに、ずいぶんとこき使いましたね、アンタ」

「ほうっ？」

「…… 待つてください、僕は今ものすごく後悔しています。訂正させてください、さっきの発言はあきらかに軽率だった」

「先人に習ってゴールド・エクスペリエンスが必要な時には金を払うとしようか」

「…… しまった」

くつくつと空条さんは笑っている。論文に行き詰まりをみせているのは事実だったようで、僕のゴールド・エクスペリエンスの存在に今気づいたという様子で目がぎらりと光ったのだ。さっきの不機嫌さはなかなか出てこない文章によるイライラも混じってるんじゃないだろうな、と今僕は疑っている。

「俺は海洋生物を専攻して、今に至るまで研究を続けてきた。今回の論文のテーマは新種を発表することだ。地球上に未だ眠っている誰も知らない名も無き生物に名前を付けるということだな」

「…… なかなか夢がありますね」

「そうだろう。新種かどうかわかるのは、なにも発見した時に限らない。知識が豊富で勘の鋭い研究者なら、採った時にこれは見たことのない生物と思うかも知れないが、はっきりと結論を出すには相当な労力と時間が必要だ」

僕は冷や汗が流れるのがわかる。今まさに逃がしてたまるかという圧力を感じているのだ。相当な労力と時間に貢献しろ、報酬は払うからと顔に書いてある。

「持ち帰って顕微鏡でじっくりと観察し、凶鑑を片手に名前を調べる。もし凶鑑に載っていないとなると、論文などの文献に当たらなくてはいけない。これまでに発表されてきた数々の論文を、歴史をさかのぼりながら辿る。全く情報のない種類なら、1800年代の海外の文献を調べることだってある。海外の古い文献は簡単に入手することができず、欧米の博物館や図書館にコピーを依頼することもある。文献

を過去にさかのぼって調べていき、顕微鏡を使って多くの標本を慎重かつ詳細に精査した結果、それが新種だと分かった場合、ようやく論文にとりかかれるというわけだ。正体不明の生物の名前を調べるだけであれば、早くも数日以内に終わる。手元に資料がない場合は数週間から数ヶ月かかることもある。そういう意味では凶鑑上のヒトデを实体として作り出せるのは便利だな、ジョルノ。大幅なロスの改善だ」

ああやっぱりそうか、嫌な予感があたってしまったと僕は軽率すぎる自分を嘆いた。

「明日からこい、ジョルノ」

「人付き合いが荒いって言われたことありませんか、空条さん。僕の予定を聞きもしないなんて」

「どうせ、これから探偵ごっこでもするつもりなんだろう？ こうでもしなけりや勝手にまた一人で行動するじゃあねえか」

「バレましたか」

「あの母親の遺体の第一発見者はてめえだからな。遺体の一部から生体探知ができるってのはアンジェロの時にやってたと仗助から聞いてる」

僕は肩を竦めた。

僕はポケットからハンカチを取り出す。なにもないがそこには確かに哀れな犠牲者、静の母親の遺体が存在している。

「ゴールド・エクスペリエンス」

僕はツバメを生み出した。

「まちな、もつと適任がいるぜ」

「なんです？」

「ハリオアマツバメの方がいい」

「ハリオ……海外のツバメですか？」

「そうだ。夏季にユーラシア大陸東部で繁殖し、北半球における冬季になるとオーストラリアやパプアニューギニアへ南下し越冬する。中華人民共和国南部やヒマラヤ山脈では周年生息する。日本では繁殖のため飛来する夏鳥だ。社王町に来たっておかしくはない」

「なるほど……なら悪目立ちはしないか」

「全長21cm。体形は太い。尾羽は短く、羽軸が針のように露出している。全身は黒褐色、背中は灰色の羽毛で覆われ、額や喉、腹部側面から尾羽基部の下面にかけての羽毛は白い」

「ちよつと色が珍しいんですね」

「だがこいつは1日の大部分を飛行して過ごし、地上に降りることは無く岩場に爪を引っ掛けて休む。だから人間の目に止まることは少ないはずだ。ギネスに登録されてる世界最速の鳥だ」

「それはハヤブサでは？」

「降下した時ならば正解だ、ジヨルノ。水平移動ならハリオアマツバメに軍配が上がる」

にやりと笑った空条さんは空高く舞い上がった鳥を仰ぎみた。

私の名前は吉良吉影。 年齢は33歳。

杜王町東北部の別荘地帯に住んでいて、独身だ。結婚はしていない。 仕事はカメューチエーン店の会社員で、毎日遅くとも夜8時までは帰宅する。 どこにでも居る平々凡々な人生、それこそが私が最も重要視している人生の価値観だ。

ドラマや小説でよくあるような刺激的な出来事なんて真つ平御免だ。代わり映えのない日々をただただ安心して過ごし、悩みもなくつろいで熟睡できること。それこそが、私の求めているものだ。

しかし今、私は平穏とはほど遠いこの状況に、闇雲に爪を噛む。今こここの場所で、窮地に陥っているという事実。隠れている事実。に、歯噛みする。

まずこの状況がいったいどういう事か、という問題もある。 私は私以外に不可思議な力を使う男に出会った。その時父の秘密を知った訳だがそれだけだ。まったくもって冗談じゃあない……！

吸血鬼、波紋、スタンド、スタンドの弓矢、そしてジョースター一族、スピードワゴン財団。どこのハリウッド映画だ？ B級映画顔負けのとんでも展開じゃあないか。いつもの私なら直ちに善意の通報し

ているところだが、男がスタンドの矢をよこせと言ってきた時点で、たらのな狂言ではないことに気づいてしまったのだ。

もちろん、そもそも私は無力なただのサラリーマンではない。どんな逆境、苦境に陥っても、それを文字通りに消し飛ばせるだけの特別な力がある。

スタンドというらしいその力。私のスタンドがどれほど効果的に使えるかが分からない。確実に、そう確実に、私の平穩の邪魔をするものたちを吹き飛ばし、始末できるといふ状況や確証が欲しい。それが確保されるまでは渡せないと言ったのだ。

そしてこの町に潜むスタンド使いを提示されて、私は卒倒しそうになった。なんだこれは、なんだってこの町にはスタンド使いがうじゃうじゃいるのだ!?

ジョセフ・ジョースターの隠し子に吸血鬼DIOの子供！監視下におくためにかつて配下がたくさん潜んでいた関係で、今なお犯罪率が高いというのだ。訳が分からない……父がこの社王町に住み始めた理由がわかってしまったが、まさかその一人が父だとは！なんてことだ、私の平穩は仮初のものだったのか?!

私はため息をつくしかないのだ。まさか、虹村形兆とかいう男がスタンドの矢で妊婦をいって、生き残った女をよりにもよってあの時仕留め損なうとは。

なんて運が悪いんだ。通りで最近爪の伸びが悪いはずだ。

「……さて……そろそろお別れかな」

私はサンジェルマンの袋にいる彼女を見つめる。

「さみしいよ……実にさみしい……だが君のせいで私は今ピンチに陥っているんだよ。悪く思わないでくれ、私は今まで1度たりとも乗り越えられなかったトラブルなどないのだから」

紙袋の中には透き通るような皮膚をしたしなやかな彼女がいる。白い餅のように柔らかいえくぼのたくさん彫られているから気に入っていた。絹ハンカチのように頼りないほど柔らかい。愛おしくて頬を擦り寄せた。

ふつくらとしてほの温いその手の甲に、私は和菓子子の求肥を指先で

撫でる時のような快さを感じたものだがこれもお別れだ。

手のひらには、いつもと同じ何本かの深いしわが刻まれているだけだ。それは太陽の下では、火星の表面に残された水路のあとのように見える。じつと両手をそろえてみると爪の一ツ一ツが黄色に染って、私の十本の指は蚕のように透きとおって見える。

指は長くしなやかで、肌は白く不透明だ。何度も品種改良され、温室で大切に育てられた植物のようでした。指のいろいろな部分に表情がある。薬指の爪が微笑んだり、親指の関節が目を伏せたりするんだ。

惜しい、実に惜しい。だが彼女が悪いのだ。イタズラばかりするのだからお別れだ。

私はスタンドを呼び出した。

「さあ、消えてくれ。そして汐華初流乃の生体探知を妨害するんだ」

にい、と私は笑った。音もなく爆発した彼女。私はスタンドを解除し、遊歩道に戻る。

「……だめですね、見失ったみたいだ」

少年の声がかきこえる。私は振り返ることなく歩き去っていった。

ジョースターさんに用がある、と連絡してきた露伴先生は静にスタンドを使いたいと申し出てきた。いきなりの宣言に驚いたジョースターさんは理由を聞く。たしかに推定生後6ヶ月前後の静の記憶にそれだけの価値があるとは思えない。邪な予想をしてしまったのか、眉を顰めるジョースターさんに露伴先生はあわてて弁明するのだ。「この子の仇は、僕の仇だ。だから、記憶を見せてもらおうと思った、それだけですよ」

僕はジョースターさんと顔を見合わせたのである。

「ヘブンズ・ドアー！」

露伴先生は静にスタンドを発動した。漫画を見たことがない赤ん坊でも発動出来るのか固唾を飲んで見守っていた。どうやら露伴先生の並々なぬ気力により実現したようである。

「よ……読みにくいな……！」

「どうします?」

「仕方ない、なんとか解読するぞ」

ファンデーシヨンで浮かび上がっている透明な文字をひとつひとつ読みながら、露伴先生は該当の記述を探す。

「あつたぞ、ここだ」

母親が誰かに声をかけられて、嬉しそうだと思はれた。知らない男に声をかけられた。腐臭がして怖くなって泣いた。ベビーカーが動き出し、ずっと腐臭が消えない。静は気分が悪くなり大暴れする。そのうち近くのレジャーシートに降ろされ、オムツをかえられる。ミルクを飲まされる。ベビーカーに染み付いた腐臭から逃れられて静は安堵する。

また腐臭が近づいてきて泣いた。隣で男と母親のやり取りが聞こえてくるが言葉が理解できない静には言葉として記憶に残らない。すべてカタカナ、あるいはひらがな。音だけ並べられた単語たち。

そして吹き飛ばされた。母親が庇ってくれた。大泣きしたが母親が抱きしめてくれたから落ち着いた。母親がいつまでたっても目を覚まさない。そのうち芝生を知らなかった静は生まれて初めての土に楽しくなってきたハイハイを始めた。

露伴先生は犯人と思われる男の特徴を読み上げる。

そしてジョースターさんと仗助先輩と出会ったというわけか。

「……あまりにも普通……あまりにも普通な男だな。これは探すのが難しくないか……?」

露伴先生の言葉に僕は息を飲んだのだった。

忙しく行き交う時間と人の流れの中で、焼きたてのパンとコーヒードでホッと一息つける空間をご提供しているのがここ、サンジェルマンだ。作りたての調理パンやフレッシュなサンドイッチをはじめ、おやつに食べたい菓子パンやドーナツまで、ボリユーム感と値ごろ感のあ

る品揃えで、忙しい毎日の食生活を華やかにしてくれると人気がある。

1970年から店の中にパン窯を持ち込み、焼きたてのパンを提供する「オーブンフレツシユベーカリー」というスタイルで歩み出したのは、ここが発祥だ。

ヨーロッパアンスタイルの食事パンやフランスパンをはじめ、フレツシユサンドやデニツシユ、日本ならではの馴染みパンまで。素材にいつそうのこだわりをもった自信の商品を、職人がひとつひとつ丁寧に焼き上げている。

「やけに詳しいな」

「重清君のお気に入りのカツサンドがあるんですよ。お見舞いの差し入れによく買いに行くんです。せつかくここまで来たんですから、寄りませんか？」

空条さんの返事を待つまでもなく、僕は中に入った。ツバメを一度ゴールド・エクスペリエンスで解除し、そのままハンカチをポケットにしのをせる。トレレーとトングを持ち、僕はあたりを見渡した。

(ゴールド・エクスペリエンス)

焼きたてのパンのいい香りがする場所にハエなんていない方がいいのだが仕方ない。さすがにそのまま上空で旋回しているツバメを突撃させる訳にも行かないのだから。とまったやつは僕が買い取ることにしよう。

チョコレート風味の生地、ダイスチョコをのせて焼き上げであるチョコマフィン。あるいはたつぷり濃厚なカスタードクリームが贅沢に入っているリッチカスタードクリームパン。いつものパンをトレレーに乗せて僕は場違いなハエを追いかける。

「……………カツサンドにとまっている……………」

人気のカツサンドは最後のひとつになっていた。僕は慎重にトレレーにおく。ゴールド・エクスペリエンスを解除し、またハンカチにくるんで透明な遺体をかくした。

「どういふことだ……………？」

途中まではたしかに大通りを真っ直ぐツバメは進んでいたのだ。

いきなり方向転換してしまい、疑問に思いながらも空条さんとおいかけた先で僕はサンジェルマンにたどりついたわけである。

そしてこのカツサンドにたどり着いたのだ。静の母親の遺体の一部が、カツサンドに。そんな馬鹿な。さすがに指紋レベルの探知はできないはずだ、一体このカツサンドになにが……？

「……穴が空いているな」

ラップからソースがブチュツつと出ていることがわかる。カツ自体は薄いタイプであり、半固形のソースがたっぷり入っているせいだ。子供がいじくり回して放置したのだろうか。一瞬頭に嫌な想像が出来てしまい、僕はカツサンドに視線を落とす。

薄いハムカツと白っぽい卵マヨネーズ。指に付着してポタポタと垂れないほどの重厚さを持ったシャリアピン風のソースのサンドイッチである。

2時までに行かないと売り切れるため、重清君のお見舞いはいつも土日になってしまう。平日の昼間に買いに来れるサラリーマンかOLか、旦那のいない間に贅沢したい主婦か、重清君のように抜け出す悪い子か。ダメだな、対象が多すぎる。

ちら、とうしろを見ると空条さんは表で待っているようだ。早く来いと目配せされてしまう。仕方ない。なにがいいだろうか、2メートルはありそうな海洋冒険家の好物なんてわからないが。とりあえず僕と好みは微塵もかすりそうじゃないので肉系だろうか？ざっと見渡して、適当にとることにする。

黒胡椒の効いたパストラミベーコンと、優しい味わいのたまごサラダのサンド。フランクフルトにさっぱりとしたキャベツの酢漬けをのせた、食べごたえのある調理パン。かもの肉を挟んだサンドイッチも目に入ったが頭が認識を拒否したのでスルーを決め込む。

僕はそのままレジに向かった。

「ずいぶんと時間がかかったな」

「イタズラされた跡がある商品を買おうとするのはこの国では少々時間がいられますからね。サービス精神も時には邪魔だ」

「そんなに欲しいものがあったのか」

「ええ、ありましたよ。いつも買ってるやつなので店員が覚えていてくれて助かりました。はい、どうぞ」

サンジェルマンの紙袋を渡したら空条さんはしばし固まる。

「返品は不可です。僕は今甘いものが食べたい気分なんだ」

「…… そうか、ありがとう」

「それより行きましようか、後で説明しますから」

「ああ」

僕達は近くの公園に向かった。

「気持ちの悪い話をこれからするんですが、どうします？ 後？ 先？」

「食う気が失せる性分に見えるか？」

「なら食べながら聞いてください」

コーヒーを並べながら僕はチョコマフィンにかぶりついた。大手術を終えた外科医か看護師のように僕達は平然と食を進める。

「こいつが方向を急に変えたのは、始めに補足した対象が突然なくなったからです。そして、この世界で唯一残ってるところにたどり着いた」

「まさかパンか？」

ギョツとして食べかけのサンドイッチに視線を落とす空条さんに僕は眉を寄せた。

「たいがいアンタも失礼なやつだな。僕を一体なんだと思ってるんです。こつちですよ」

「…… そうか」

僕は指を突っ込んだせいで包装が破けているカツサンドを差し出した。空条さんはジト目の僕から視線をさりげなく外しながら昼食を再開する。

「遺体から離れていこうとするツバメがいた時点で、僕はアンジェロみたいに居場所を特定しようと考えていました。でも、今日歩き回ってわかりましたが、色んなところに行きましたよね。そして最終的にはこのカツサンドだ」

「…… なるほど、深読みするほど恐ろしくなるパターンか」

「そうです。僕は収集癖があるやつが犯人かと思っていたんですが、

相当な変態が犯人らしい」

「遺体の一部を常に携帯している…… ってやつか、やれやれだぜ」

空条さんはカツサンドが入った紙袋をみる。

「ホテルに帰ってスピードワゴン財団にDNA鑑定をしてもらうことにするか。あとは静の母親の行動範囲と俺たちが行った場所に重なるところがないか調査だな」

「どれくらいかかりそうです?」

「3日ほどかかるな」

「僕の時より早いですね」

「あたりまえだろう。お前の片方の父親はずっと前に死んでいるんだからな。それにじじいを始めとしたジョースター家とも照合する必要があったんだよ」

「ああ、そうか。言われてみればそうでしたね」

「今回はここに混入しているであろう爪や皮膚の一部が静の母親のDNAと一致するか調べるだけだからな」

「たしかに簡単だ」

カスタードクリームパンをコーヒードリで流し込みながら、僕はうなずいた。気づけば空条さんはすでに完食している。足りなかつただろうか。まあそこまで気を回す必要も無いだろう、ほんの気まぐれなのだから。空条さんにまた困惑の目を向けられる前に僕は余計な考えを振り払った。

「監視カメラがあれば楽なんだがな……」

「ベーカリーに監視カメラはなかなかないですよ、デパートの中ならありそうですけど」

「全くだ」

「ご馳走様でした、と昼ご飯を片付けたはいいものの、肝心の犯人探しはまた振り出しに戻ってしまったのである。」

シアー・ハート・アタック

(汐華初流乃……！)

私の頭の中では行きつけだったサンジェルマンに二度と行けなくなった恨みを向けるべき少年の顔が浮かんでは消えている。

(空条承太郎……！)

行動範囲を著しく制限してくれた男の姿がチラついていて。爪は長くなる一方であり、そのうち衝動にかられて我慢できなくなる予感がしてしまう。無意識に私は爪を噛んでいた。

彼女との別れから数日、私の生活圏にはチラホラとあの男が教えてくれたスタンド使いばかりが目につくようになってしまった。平常心で通り過ぎたり避けたりすれば案外バレないものだが、スタンドを見える人間がスタンド使いだと知った今となっては迂闊な行動がとれなくて余計にイライラしてしまう。

帰宅した私はため息をついた。いつものルーチンワークをこなしているはずなのに体が一向に休まらない。熟睡出来ないのは紛れもなく奴らのせいだった。

「クソっ…… どうすれば……」

机に広げてあるこの街に潜むスタンド使いのデータを眺めみて、考え込む。さいわいなのは私の敵ばかりではないことだ。最近連絡が取れなくなった女からはだいたい汐華初流乃について情報を得ることができた。

生体探知は非常に脅威だ。私が私と証明できるものをなにかひとつでも汐華初流乃に渡した瞬間に、私はどこにしようが逃げられなくなるのだ。こここの自宅を特定されたが最後、私のものは入手し放題となる。困る。それは非常に困る！変装しようが整形しようが私の体が私である限り、汐華初流乃の能力からは逃げられなくなってしまう！

「…… 隠してしまうか、それとも渡すか……」

あらゆる可能性を模索しなければならない。自宅に隠してあるスタンドの矢を差し出して、善良な市民として守ってもらおう……？

ダメだ、スタンド使いだとバレル確率が飛躍的に上昇してしまう。ただでさえイラつくヤツらと接点を持てばいつかはボロがでるのだ。

一撃で仕留められなければ、私のスタンド能力が爆弾だとバレル瞬間に全てが終わる。なにせ汐華初流乃、東方仗助と回復を得意とするスタンド使いが二人もいるのだ。生存者からの証言はダメだ……仕留め損なつた死体からすら情報を入手されてしまうのだから。

それにあの男が猶予とした日と約束を破ることになった瞬間に、私は二つの勢力から常に狙われることが確定してしまうのだ。それはあつてはならない。絶対に。

「……見つからなければいくらでもやりようはある…… なにか…… なにかないか……？」

私はざかざかとスタンド使いたちのデータの一覧をめくりながら、食い入るように見つめ続けた。

そして、一人のスタンド使いに目が止まる。

私は悪夢を見ているのだろうか、という顔をして、大神照彦は病室のベッドに横たわり長いこと沈黙している。いつか因果応報が訪れる予感があつたが、よりによって趣味が悪いと自重めいた笑みさえ浮かべている。

「それじゃあ失礼しますね、大神さん。ところで、さっきからそのメツセージカードを熱心に見ているが、どうかしましたか？」

私が問いかけた瞬間に、我に返つたらしく激しい動揺がみてとれた。

「……いや、なんでもありません。お見舞いに来てくださったのに、すいません」

「突然押しかけたのは私の方ですから」

「ご丁寧ありがとうございます」

世間が建築業界のえぐい違法の数々にシビアな目を向け始めている中、大神照彦の事務所もまた過去の不正がばれないように戦々恐々

としているのは知っている。

カメユーを会場にした商談会はここ一番の仕事場だったのだからなおさらだろう。そのイベントにかかわる会計事務に食い込めたのはなによりだ。わざと必要な領収書を渡さず、お詫びにとここに堂々と来ることが出来たのだから。

見舞いの品に紛れ込んだ脅迫状を読んでいるところに遭遇するとは思わなかったが、私はそのまま病室をあとにした。

カメユーに向かう途中で私のところに電話がかかってきた。

「これは私に与えられた、当然の罰なのか」

そう、大神照彦はいった。私は笑いをこらえるので精一杯だった。あの男が提供してくれたデータどおり、大神照彦はスタンド能力さえ除けばただの人間だった。

キラークイーンで爆弾に変えていたうちの社員の名刺を爆破して重症を負わせただけで屈服した。

私がまだなにもいっていないのに、大神は勝手に懺悔を始めたのだ。

「私はずっと悪夢を見ていた。自分の過去に隠された罪の重圧に耐えきれなかったのだ」

何故この男にもスタンド能力が目覚めたのか私には検討もつかなかった。私と同じようにスタンドの矢でスタンド使いになったというのに、電話の向こうの男は直ぐに死んでもおかしくないという印象しか受けなかった。

「私は一人の女性の人生を理不尽に終わらせた。一人の赤ん坊の人生を狂わせた。もし私が死んだら、自分は天国には行けないだろうという実感はあった。この悪趣味な依頼はその報いなのか」

私はそうだとも違うとも言わなかった。メッセージカードにかかれた言葉だけが私の要求だ。ひたすらに続く沈黙に耐えきれなくなったのか、大神照彦は私のいいたいことが分かったようで、憔悴し切った声を出す。

「娘だけはツ双葉、双葉千帆だけは助けてくれッ!!私のことはどうなってもいい!なんでもする!私はなんでもする!だから!だから!」

らアツ……千帆だけはアツ……!!」

すすり泣くような声だった。

「あなたがどの誰かなんてのはどうでもいいんだ……そんなことは問題じゃあない……頼む……頼むから、千帆の父親として……いわせてくれ……これだけは守ってくれ……千帆にだけは手を出さないでくれ!」

一人の女を殺して一人の子供を天涯孤独にしたとは思えないような迫真の言葉だった。世界で一番愛する娘が命の危険にさらされる可能性を知って、全てをなげうってでも救おうとする素晴らしい父親の言葉だった。幸せな家庭という私が共感出来る価値観をもっていないながら、なぜか大神照彦という男の主張は私にはかすりもなかった。

「あの子は……千帆は……不思議な力目覚めたこともない、普通の、ほんとうに普通の子なんだ……! 喧嘩なんかしたこともない子なんだ……人を傷つけるなんて、できない子なんだ……! あの子が……あの子が、あなたに狙われたらどうしようもない!!」

大神はそれでも続ける。最愛の娘を救う方法は、もはや私に懇願するしかないとしていっているのだろう。

「頼むッ! 千帆をッ!! 頼むッ!!」

大神は何度も何度もそう叫ぶ。最愛の娘を守るために、大神はすべてを投げ出す覚悟だと教えてくれた。この瞬間に大神照彦の未来は私の手中に収まった。私に食い潰される運命となったのだ。

そして私のもくろみ通り、私吉良吉影の家は次の日から誰にも知覚されなくなってしまったのだ、郵便配達などの一部の例外を除いて。私は対象外のようにその発動範囲には自由に立ち入ることができた。やはりこの男、昔の愛人関係を精算したり、不正に気づいた人間を消したりするためにスタンド能力を乱用しているらしく、成長が著しくなっている。私が落し物さえしなければ、私の家は誰にも見つかりはしないのである。

ようやく私は安定した睡眠をえることが出来るようになった。

ありがたい程親切者だが会っていると、憂鬱なほど不快になって来

る人間。なぜこういう人間ほど、自分がどれだけ他人を不愉快にさせているのかわからないのだろうか。ことごとく共通項であるせい、か、ひとたび目に付いてしまうとムカムカして仕方がない。

言うことすること一ツ一ツが何か思わせぶりな言いかたにきこえてくる。本当はいい人なのだけれども、けちでしつこくて、する事が小さい事ばかり、私はこんな人間が一番嫌いだ。

非常にすまない気持ちで今度会ったら優しい言葉をかけてあげようと思っただけでも、こうして会ってみると、シャツが目立って白いのなんかも、とてもしゃくだったりする。

遠くから考えると、涙の出るようないい人なのだけれども、会うとムツとする温情主義、こいつが一番苦手なのだ。

ここ最近、巡り会う女性という女性がほとんどこのタイプだったから、これまでにないほど私はイライラしていた。

触りたくないと思ったのは初めてだ。手より上はすべて手の付属物であり、手の存在価値を高めるためそれ以上でもそれ以下でもないただの物体。女性という形から手を一刻も早く解放してやりたい、という衝動にかられるのは初めてだった。だが私はいつも以上にイライラしていたし、この世から間違はなく消し去ってしまいたいと考えていた。

「キラークイーンツ！」

絞殺してから切断する手間すら惜しかった。手を切断してから爆殺して虚空に消えた女、そして残された手を見つめてみる。

あれだけ燻っていた怒りは収まり、ようやく私は平常心を取り戻していた。

「…… ようやく、だ。ようやく手に入れた」

息を吐いたとき、思いのほか気が抜けていることに気づく。口元が吊り上がるのがわかる。実に1週間もの間彼女が手に入らない絶望的な状況に耐えてきたが、ようやく手に入ったのだ。

しかしまあ、大神照彦の愛人はどうしてこうも手に必要なケアを放棄するような頭の足りない女ばかりなのだろうか。発狂したのか神経がイカれた女が唯一許容範囲だったから、ハンドクリームなりケア

の方法なりをさせるように仕向けていた。

ようやく手にした彼女は私の審美眼にはとうてい届きそうにないものだが、ようやく連れて歩くに値する彼女とすることが出来た。残念ながらそれ以上の関係になるには30年近く手入れを怠ってきた女の歴史を見るようで気分が高まることはなかった。

「クソっ……いつまで私はこんな生活をしなくてはならないんだ……！」

罵声は大神照彦の別荘で響き渡るだけだった。

空条さんに召集された僕達はぼよん岬周辺にある別荘地帯に向かっていた。

「吉良吉廣。こいつの家にこれから向かう」

回し読みしろと言われた写真と調査報告書によれば、この男はかつてDIOの部下として空条家を監視していた億泰先輩の父親がこの町に引っ越したのとはほぼ同時期に生活拠点をこちらに移しているという。

父親の目的はさだかではないが仗助先輩の家と目と鼻の先だったこと、僕の囲われていたアパートから半径1キロ内にあることから僕達の監視も兼ねていたのではないかという。仲間がひとりやふたりいてもおかしくはないはずだ。

「俺の家を監視していた関係で、吉良吉廣のスタンド名は不明だが能力はわれている。写真の中に入り、同じ写真の中にあるものに干渉することができる能力だ。攻撃したり、邪魔をしたり、な。形兆がスタンドの矢を持つていたんだ、我々に渡るのを惜しんでこいつが横取りした可能性がある」

想像の域は出ないが、と前置きをして空条さんはいうのだ。日本におけるスタンド使いを探す任務を持っていたかつての配下達が仲間割れしているのではないかと。

吉影家は吉廣の父の代で落ちぶれてしまったが、息子が金に困らな

い程度にまで立て直していること。『弓と矢』を億泰先輩の父親が譲り受けた時期はD I Oが復活して水面下で活動していた時期であること。

以上から『弓と矢』を譲られた彼らが条件として、エンヤ婆の依頼で多額の報酬と引き換えに、日本のスタンド使いの適合者を探していたという可能性は十分に有り得る。

この時、自身には末期ガンで余命がない事は知っていた筈なので、息子の為に少しでも金を残そうとしたと言ったところだろうか。

「待つてください、末期がん?」

「まさかもう死んでるんすかア?」

「でも息子さんがって」

「そうだ。1987年の男は戸籍上死んでいるから、俺は相見える事はなかった。だがこいつは写真の中に入れば実質不死身だった。身代わりをたてたかもしれないし、カメラに魂を抜かれたのかもしれない。この町に潜むD I Oの協力者の中ではかなりの古参なのは間違いないからな、億泰たちの例を見れば捨ておけん」

「……空条さんはあの襲撃者はブラックウオーター・パークの使い手ではなく吉良吉廣って男だと考えているんですか?」

「スピードワゴン財団職員の中に紛れ込んでいたのは間違いない。写真の中にスタンドの矢を持ち込んで隠し、職員に写真から攻撃した可能性も考えられる。あのスタンド使いだと矢を持ち去る方法がないからな」

「あー、たしかに!あの時、俺たち船人中探し回ったんだけどよオ、見つからなかったんだぜエ」

「どうやって判断したんです?」

「なについてそりやあ、ジヨルノが気絶させりやスタンドは解除できるっていったからよオ、片っ端からこう、ぶん殴って」

「ぶん殴るって、億泰君…… まさかそのせいで操縦できなくなったんじゃ……?」

「いや、それはない。レッド・ホット・チリ・ペッパーが操縦席で好き勝手してくれたから時間の問題だった。どのみち音石の居場所を特

定する必要があったからな」

「そうそう、パニツクになられても困るからよオ」

「ほんとオ？」

億泰先輩たちの話を聴きながら、僕は仗助先輩をみた。

「大丈夫です？」

「ん？…… あー、わりい、なんだっけ？」

「ひどい顔していますよ、仗助先輩。地獄の4者面談に挑む前みたいな顔をしている」

「あはは…… そりやそーだろお…… だつてよお、俺たち全然知らなかったんだぜ？あの家、俺ちと目と鼻の先なんだ。最悪殺されたかもしれないなんて、ちよーこえー」

「そうですね、それは間違いない。僕達は驚くような幸運の積み重ねの先で生きている」

「ようやく実感が湧いてきたっつーかア」

僕は頷いた。仗助先輩を見ているとかつて通り過ぎてきた日々が思い出される。そこにはほんやりとした感情と事実があるだけだ。

施設に入ったばかりのころは何回も死にかけたあの日々を夢を見た。その度に体を固くしてとびおきた。いつも汗をかいていた。そしてその後は眠りそびれて、朝いちばんに朝刊を取ってきてはすみずみまで読んだりした。

TVのニュースをおびえながら見たりした。心配に濃い色加わり、いつも何となく肩が重い。明日はたらたらと今日続きで、先のことを考えても楽しくない。そんな毎日だった。義父の有罪が確定したことに安心して幸運を噛み締めてきた。

今の仗助先輩は、かつての僕のように空条さんの話も億泰先輩たちのじゃれあいも、僕の忠告すら遠いものになっている。表面に薄い膜ができていて、それを透かさないことには何も見えなくなってしまう。あらゆる妄想が 悪霊のように訪れているのだ。

ずっと昔、子どものころの仗助先輩に戻ってしまったに違いない。

僕の眼差しに気づいたのか、ばつ悪そうに仗助先輩はほほをかい

た。そしてぼそぼそと語るのだ。僕が基本的に傍観者、あるいは無関心な第三者からはみ出さないことを知っているから気楽なのだろう。

仗助先輩は昔、暗闇を見つめていると、人の顔が浮かび上がってきたような気がして、電気の消えた部屋で気軽に目を開けることはできなかったらしい。隣で寝ていた母の顔も、じつと見ていると表面があぶられたマシユマロみたいにじんわりと変化してきて死に顔に変わっていく気がして、見ていられなかったという。

それを思い出してしまったらしい。まわりに浮かんでいる何かと何か小さく衝突した加減によつて、くじかれて、なぜかとんでもない不安のなかに放り出されたような気持ちにもなつて、立ちつくしてしまうという。

「ジョルノはどうしてたよ、こういうとき」

「君の方が詳しいのでは？」

「まあ、そりゃあ……なあ。でも平気そうだし」

「…… 参考になるのかはわかりませんが。それはいつもほんの少しのことなので、それがしゅつと渦を巻いて消えてしまうまで、だいたいじょうぶ、だいじょうぶ、と念じるんです。目をつむったりひらいたりして息を整えたりして色々なものを逃がしてやる。そうすればだいたいなんとかなりますよ」

「それつてき、誰に教わったんだ？」

「はい？」

「すげえ優しい顔してるぜ、ジョルノ」

「覚えている限り、一番最初の記憶ですからね。残念ながら誰かは覚えてないけれど」

「へーえ」

「なんですいきなり」

「いやあ、ジョルノも子供らしい所があるんじゃないかと思つてさ」

いきなり手のかかる後輩扱いしようとしてくる仗助先輩から逃げるべく、僕は空条さんのところに駆け出した。

近辺の地理に通じていない訳では無いのに、僕達は二度ばかり角で立ち止まり、自信なさそうにあたりを見回し、電柱の住所表示を確認する。やがて歩調がいくぶん速くなる。見覚えのある地域に戻ってきたのだ。

区分地図を広げてみたが、地図は地球儀と同じ程度にしか役に立たなかった。

自分の家のある方向を指さそうとしたが、いったいそれが正確にどちらの方向に位置しているのか僕にはわからなくなっていた。奇妙な角度に折れまがった曲り角をいくつも通り抜けてきたせいだ。

「…… あつれえ…… おっかしいな」

「この辺だよね？」

「ああ、そのはずだ」

「間違えたとか…… ねえよなあ」

「いえ、間違いありません。でもたどり着けない。みんな揃って方向音痴になってしまったんだろうか」

断片が混じりあってしまった二種類のパズルを同時に組み立てているような気分だ。どこか違う世界にまぎれこんで、別世界に踏み込んでしまったような。さして激しくはなかったけれど、まるで体が幾つかの別の部分に分断されてしまったような異和感を僕に与えつつけていた。

味噌汁の、砂が抜けきっていないあさを噛みしめて、じやりつときた時と同じ、ものすごい違和感だ。僕はしばしば感じる。断片が混じりあってしまった二種類のパズルを同時に組み立てているような気分だ。

「おかしい…… おかしすぎる」

「まさか、スタンド攻撃か？」

「ぼよん岬がすぐそこなのに車も人もすれ違わないなんてやっぱりおかしいよね」

みんなの言葉に僕は息を呑む。ここは双葉の父親がもつ、愛人を監禁するための別荘からは距離がある。あのスタンドのせいかとも

思ったが、今から僕達がいくのは吉良邸だ。対象からは外れるはずだ。

まさか……まさか、そんなことがありえるのか？脳裏にある可能性が浮かんで、僕はそれだけしか考えることが出来なくなる。心当たりがあつたものの、確証がえられなくて僕はひどく困惑した。

たしかにあのスタンドは、双葉照彦のスタンドは一般人が知覚出来ない、あるいはスタンド使いが近づけない、それもかなり広い射程範囲をもつ遠隔操作型、そんな能力だったはずだ。だが対象は人間だったはずだ。生き物は対象外、だから僕のゴールドエクスペリエンスによる生体探知が有効だったのだ。

もし、もしもだ。双葉照彦が協力しているとして、吉良家にたどり着けないとしたら、その家にいるのは誰だ？あのスタンドの対象は誰だ？息子は普通に社会人をして一人暮らしだと空条さんはいつていたというのに。まさか成長したことで物体を対象にすることが可能になったのだろうか。

そしてなによりも。双葉照彦は生まれながらのスタンド使いではなかったのか？まさかDIOの協力者？そうでないならなぜ吉良吉廣に協力している？わからないことが多すぎる。なによりも空条さんが把握していない時点でDIOとは関係ないはずではなかったのか？

いつもなら円滑に情報共有するはずだが、僕は迷ってしまった。双葉照彦が敵ならば蓮見琢馬について語らなければならなくなる。僕はどうしたらいい？

無駄だとはわかっていながら僕は言葉にするのが遅れた。

「……あの」

「なんだ。そんなに言いにくそうな顔をしなくても心配するな、ジヨルノ。目的地が見つかったぞ」

「！」

空条さんが指さす先には、インターホンの音色までどこことなく気品がある御殿のような広大な邸宅が立っていた。名札は出ていないようだ。門の先を覗いてみる限り、間取りが旅館のように入り組んでい

る屋敷だ。億泰先輩の屋敷も大きかったが、吉良邸もなかなか大きい。D I Oの協力者だっただけはあるだろうか。

蔦の絡まるレンガ造りの西洋建築は、よくいえば文化財的な価値を持った豪邸。悪くいえば朽ち果てつつある過去の遺物のようだ。インターフォンの反応はないがドアが開いている。あまりにも不用心で僕達は顔を見合わせた。

「明らかにおかしい…… あれだけかかったのにあっさり見つかるなんて…… 空条さん、これは」

「ああ、そうだな。俺たちは招き入れられている。罠に違いねえ。だが他に行くべきところがないのも事実だ、ジョルノ」

「虎穴に入らずんば虎子を得ずってやつですか」

「そういうことだ」

大きな玄関から中へ。まず目に飛び込んでくるのは、古い映画のセットかと思紛うような、赤絨毯の敷かれた大階段だ。広間には、西洋式の甲冑やら象牙やら鹿の剥製やらが飾られ、住人の趣味の悪さをこれでもかと誇示している。

邸宅は、周辺の慎ましい二階建て住宅を圧倒する存在感を示している、他を圧するがごとき豪勢なお屋敷がデンと建つ。

西洋館が角地面を吾物顔に占領している。この主人もこの西洋館のごとく傲慢に構えているんだろうと、門をはいってその建築を眺めて見たがただ人を威圧しようと、二階作りが無意味に突っ立っている目に沁みるほど鮮やかな色彩が広がっている。目がチカチカする。寝起きで見るとは、ずいぶんと目に優しい配色だ。どれもこれも襟首はすり切れ、裾の糸はほつれ、生地自体も薄くなっていたが、そのくせ色が妙に明るいで、その印象はまるで寂れてしまった遊園地のようなだった。

来客用においてあるアラビア風のお菓子は、ピンク、ブルー、グリーンとその色にちよつとたじろいでしまう。

魂を売り飛ばした金の亡者はこんな感じなんだろうか。遊んで暮らせるほどの資産が透けて見えるようだ。

金持ちになるには少しばかり頭が要る。金持ちであり続けるため

には何も要らない。人工衛星にガソリンが要らないのと同じでグルグルと同じところを回っていればいい。だがこの家主はあまり回らないらしい。

があああん！

後ろで豪快な音がして、後ろを振り返ると重厚な扉が誰もいないのに閉じていた。飛び上がった康一先輩と億泰先輩がスタンドで攻撃するのはほぼ同時。明らかに手応えはあった反応なのだが、僕らは目を見張った。

そこには二人がかりの攻撃にビクともしない扉があるのだ。仗助先輩と空条さんが今度はラッシュをかける。どうやら相当強固な扉のようだ。最後に僕がゴールド・エキスペリエンスを発動して、扉そのものを生命体に変えてしまおうとしたのだが変化がない。

僕の体感的に言えば生命エネルギーをそそごうとしても跳ね返されてしまう。どうやらすでにこの扉は何らかのスタンドの対象であり、ほかのスタンド能力および物理攻撃は効かないという能力のようだ。シンプルにこの屋敷の中に僕達を閉じこめるという能力だろうか。

軽く説明すると、考えるのがめんどくさくなってきたのか、億泰先輩が先に進めばいいんだなど即答する。ずかずかと先に進もうと歩き始め、康一先輩と仗助先輩が追いかけていく。慌てて追いかけてようとした僕を空条さんが引き止める。

「おい、ジヨルノ」

「はい？」

「さつき、なにをいいかけた？それによっちゃ……俺はこれからの対応をかんがえなくちゃあならねえんだが。教えろ」

「……」

「ジヨルノ」

「ひとつ条件があります」

「なんだ」

「この屋敷にはひとりの男が関わっている可能性がある。僕はその男に復讐を目論んでる人間を知っている。極めてプライベートであり、

スタンドの矢には一切関係がないこと、いわば家庭裁判所の管轄だということを保証します。深入りしないでやってくれませんか」

「いいだろう」

「え」

「安っぽい感情だと断じる気はねえ。すべては復讐するために。自らの手を血で汚し、人の心を捨てて獣のように。そうやってやり遂げたやつを俺は知ってる」

「……」

「意外か？」

「復讐を繰り返したところで、憎しみの連鎖が続くだけ、と綺麗事をいう人とは思っていませんよ。ただそんなこと関係ないと言われると思っただけで」

「復讐ってのは開いた傷口と同じだ。でも糧にしないと生きられねえやつもごまんといえるだろう。お前はくだらない理由でかばい立てするような人間じゃないことは知ってるからな。そこまでいうならつてことだ」

「ありがとうございます」

「ただ、この信頼をうらぎるんじゃないやねえぜ、ジヨルノ」

シアー・ハート・アタック2

屋敷の中はどこまでもしんとしていた。耳を澄ませると、その静寂にはいくつかの意味あいが含まれているように感じられる。ただ物音ひとつしないというだけではない。沈黙自体が自らについて何かを語っているようだった。

一種不可解な沈黙に覆われている。広さに比べてそこに含まれる人間の数が少なすぎることから生ずる沈黙だ。しかしこの部屋を支配している沈黙の質はそれともまた違っていた。いやに重く、どこことなく押しつけがましかった。僕は昔どこかで経験した覚えがあった。避けがたい死の予感をはらんだ沈黙だ。空気がどこことなくほこりっぽく、意味ありげだった。

康一先輩たちを追いかけて螺旋階段を登り、開こうとした真正面の扉がビクともしない。どうやら立ち話をしている間に僕達は二手に分断されてしまったようだ。閉じ込めた衝撃や音すら吸収してしまうようで、扉に耳を押し当ててもなんの音や振動を拾うこともできない。

小さく首を振った僕に空条さんはやれやれだぜと呟いた。情報共有が滞ってしまったのはお互い様でとやかくいうことが出来なくなってしまうと軽口すらこぼれおちる。

どうやら1階と2階に綺麗に僕達は分断されてしまったようだ。

「ハウス・オブ・ホーリー……それがスタンドの名前ですか」

「ああ、建物を支配し、あやつるスタンドだ。支配した建物に入ったものが一時間経過しても内部にとどまっていた場合、この世から消滅させることができる」

「消滅……穏やかじゃないですね」

「ああ、億泰のザ・バンドほど殺傷能力はねえが、嵌めたら強いタイプ

のスタンドだ。建物自体は実体として存在し、スタンド使いでなくても見ることができが、壁、窓、床などへの物理攻撃は一切効果がない」

「詳しいですね」

「10年経つが案外覚えてるもんだぜ。ディジャ・メイカーはホテルマンに化けて俺たちを待ち受けていた。今はもう34歳か。一見、物腰柔らかで丁寧だが内面は陰険で狡猾。しかも手を汚さずに人を殺せる自分のスタンド能力に誇りを持っているたちの悪さは俺たちにボコボコにされても治らなかつたらしいな。しかも完璧主義なところが悪化したらしい。俺たちの前に姿を表さねえとはな」

「つまり、僕達は1時間以内にそいつを倒さないと全滅するってわけですね」

「そういうことだ」

僕達は直ちに螺旋階段を降り、居間から台所に行き、納戸と浴室と洗面所と地下室を調べ、部屋のドアを開けてみた。誰もいなかった。沈黙だけが油のように部屋の隅々にしみこんでいた。部屋の広さによって沈黙の響きかたが少しずつ違っていているだけだった。

「そのメモリー・オブ・ジェットってのは、人間を対象とするスタンドなんだな？」

「困ったことにこちらも遠隔操作型です。本体が望む人間に、誰一人近づけさせなくする能力を持つスタンド。この能力が発動すれば、標的はどれほど会いたい人がいたとしても、誰とも接触を図ることができなくなってしまう。もしかしたら人間だけでなく物体に対しても適応させ、発動範囲が飛躍的に向上しているのかもしれない」

「わからねえのは、吉良吉廣の家に辿り着かなかったのがメモリー・オブ・ジェットの仕業だとしてだ。俺たちが仗助たちと会えないのがおかしいってことだ。同時に複数の対象を選ぶことが可能なのか？」

「わかりません。わかりませんが、このスタンドは遭遇する度により複雑により強力なスタンドに成長しつつある。なにも不思議なことではありません」

「隠したいっつー誰にでもある極めてシンプルなスタンド故だな。シ

ンプルな能力ほど強力なのは世の常だ。どうやら余程切羽詰まっているらしい。追い詰められるほどスタンド使いは成長するからな」

「……今この瞬間まで僕はディジャ・メイカーがハウス・オブ・ホリーを発動した状態で、自分を対象にメモリー・オブ・ジェットを発動させていると思っていました。でも迷い込んだ人間を対象に選択した方がどう見ても効率的ですね。どちらも遠隔操作型であり、その場にいる必要はなく、しかもメモリー・オブ・ジェットは対象が死んでも効果は継続しますから」

「どうやらその予想は当たっているらしい。俺たちのスタンド能力を完全に把握した上で一網打尽にしようとしていやがる」

僕はため息をついた。

「どうした？」

おもむろにカバンから筆記用具を取り出し、ツバメに変えた僕に空条さんが聞いてくる。

「保険を掛けておきましょう。僕達でどうにもならなかったらの時のために」

やはりただの生き物は能力の対象外のようなだ。窓を開けて飛び去っていったツバメ。僕達が手をかけても窓はビクともしない。

「このまま1時間経過するまで監視するつもりでしょうか？」

「さあ、な。ディジャ・メイカーは謎ときを挑んできたがどこにもいやがらねえとなると、組んだやつの方が立場が上らしい」

「……吉良吉廣なら……」

「より確実な方法をとるに違いねえな。俺たちの先読み在先読みを重ねてやがる。確実に息の根を止めねえとお前や仗助により回復されることがわかりきってるからな。肉の芽を植え付けられなかったのは、それなりの理由があるんだいって、な」

僕は息を飲み、あたりを見渡す。静寂がただ1階を包んでいた。

それは唐突に僕らに襲いかかってきた。立ちくらみのような、めまいのような、脈絡もない突然の爆発。熱気でカーペットが床ごと焦げる。黒煙の柱が立ちのぼった。

僕は息を飲んだ。

重々しい響きが反響し、一すじ薄くなびいていく。

一瞬何が起こったのかわからなかった。雷のように、光と音がほんの少し違和感をなしてずれたような感じだった。向こうの角に見える廊下の上が明るくなり、急に火が出て、鈍い音と共にガラスの破片がスローモーショョンで闇に降りそそいだのだ。床や壁は無事だというのに、内装は粉微塵である。

鉄が錆びた様なこもった臭い。重苦しく淀んだ空気。地面に散らかる赤の斑点。断片のようなくつもの記憶が思い浮ぶ。細部まで見たわけでもないし、急いで目を逸らしたから、全部がどうだとかっているはずもない。その光景は嫌に鮮明で、生臭い。

「大丈夫ですか、空条さん」

「動くなッ！」

「!!」

僕はごくりと唾を飲み込む。

「空条さん！」

「動くんじゃないやあねえぜ、ジョルノ」

誰もいなかった。この空間には空条さんと僕以外に人一人見つけることができなかった。

突如脇腹に鈍い痛みが走り、呻き声を漏らしかける。慌てて口を覆い、喉奥で痛みの叫びを噛み砕く。どうやら爆発に僕達は多少のダメージを受けてしまったらしい。

空条さんは辺りをゆっくり見渡し、鋭い視線で何一つ見逃すまいと神経を張り巡らしている。しばらく観察を続けている。僕も気合を入れ直し、再び集中する。

「……………」

空条さんは息を吐く。深く、長い呼吸音がある。ただ機能的な音が聞こえた。

そして唐突に空条さんはまっすぐに見据え、呟くようにこう言った。

「どうやら爆発させるわけじゃあなく、爆発物に変えられるらしいな」
刹那、ぞわり と、背中が震える。空条さんの目を見た僕は見てし

まったのだ。そこに込められたのは殺意。どこまで続くかもわからないほどの、漆黒の殺意だ。命のやり取りをした者だけが許される異常な環境における正気、そのものだった。

「スタープラチナ」

空条さんの体から大男の影が現れ、スター・プラチナが構えを取る。すさまじい速さでなにかを破壊していくのがわかる。本能的な恐怖よりも僕は理性が上回った。

「ゴールドエクスペリエンスッ！」

僕はあたりの瓦礫を手当たり次第に樹木に変えた。通常の成長速度を度外視して巨木に成長していったそれは、廊下にころがるあらゆる調度品を飲み込み、一体化していく。そして廊下の突き当たりになんてが叩きつけられてしまった。

「どおん、どおん、と突き当たりの壁のあたりで樹木の内側が破裂したが、だいぶん距離がある。緩和していた衝撃は僕たちのところには届かない。ぱらぱらと飛んできた破片は振り払うことが可能なほど小さなものだった。」

「爆弾そのものは植物に変えられないのか？」

「場所が特定できませんでした」

「そうか、お前には見えないんだな」

「そうですね、アンタのスタンドに比べたら致命的に経験値が足りない」

軽く笑おうとした僕に空条さんはニヤリと笑った。

「スター・プラチナ・ザ・ワールド」

「え」

時が静止した世界は知覚すら不可能だ。気づけば螺旋階段の頂上付近で盛大な爆発音がする。

「爆弾とスタンド能力を織り交ぜるとは考えてやがるぜ」

一瞬で、螺旋階段は崩落する。一閃、目で追えぬほどの速さで振るわれ指先が、それほどの威力がある爆弾をはるか上空に投げたのだ。

「ありがとうございます」

「さあ、いくぞジョルノ。どこかで爆弾魔が見ている可能性が出てき

たからな」

屋敷に似つかわしくない、ギルギルギルという自転車のタイヤがカーペットの上で鼠の鳴くようにきしむ音がする。

車輪のスポークは異様に進化した獣の歯のように、闇の中に不吉な光を放っていた。車重を支えたタイヤがカーペットを踏みながら進み、押しつぶされた布地が擦れあい鈍い音が鳴る。

「新手だろうか、と僕達がスタンドを発動させたのはほぼ同時だった。」

禍々しい髑髏の顔とキャタピラのみ小さな車体は異音を響かせながらやってきた。僕達は即座に距離をとるが真つ直ぐに向かつてくる。隠れたり姿を見えなくさせたりしてみたが、迷うことなくやってくるではないか。驚きと共に走りながら僕達は後方を気にする。

「こいつ、こちらが見えているのか?」

「遠隔操作型……? いや、玩具を爆弾に?」

「ずいぶんと趣味が悪い玩具だな……だが、それはなさそうだが、ジヨルノ。明らかに意思を持っていやがる。どうやら何らかの方法で俺たちを追跡する気らしいな」

「ゴツチヲ見口オオ——ツ——」

ギルギルと音を立てながら戦車が屋敷内を駆け巡る。長椅子やテーブルの間を縫うように走り回り、自動で探索する。しばらくこの戦車と追いかけてこをしてみたのだが、この能力の前では隠れる場所も逃げる場所もない。なにかに反応し走り出す。こちらを捕捉されている以上延々と追い回されるらしい。

「やるか?」

「待ってください、まずは確かめなくては。ゴールド・エクスペリエンス!」

僕は拾った瓦礫をツバメにかえ、あの不気味な戦車に突撃させた。

案の定、どおん、という轟音が響き渡る。瓦礫が粉微塵にふきとんでしまったが、その程度の足場の悪さなどものともしない。どうやら触れると爆発するタイプの爆弾のようだ。カウンター能力を付与したからこれで強度がわかるはずだが……。

「ビクともしていないな」

「自分にフィードバックしないのか、それだけ頑丈なのか……」

「調べてみるか」

「手伝いますよ、空条さん」

僕はカーペットを植物に変えて自分たちの足場をつくり、爆弾戦車を空中につりあげた。ギョルルルルと車輪が空回りしている。空条さんのスタープラチナが破壊しにかかる。あいかわらず僕の目視ではスタープラチナのラツシユを捉えることは出来ない。だから僕は爆弾戦車の方を注視していた。めきよつとフレームが歪むのがみえたのだ。爆発すると判断したその瞬間に、僕は爆弾戦車の足場の樹木だけを枯らせた。重力に逆らえず爆弾戦車は落下していく。なかなかの高所からの攻撃とスタープラチナのラツシユ。床に叩きつけられたことで鈍い音がした。

「……なんて硬さだ。こんなに硬いスタンドは久しぶりにみたぜ」
「スタープラチナのラツシユに耐えるのか!？」

思わず声が出てしまった。ギョルギョル車輪を回しながら、爆弾戦車は僕らの足場を攻撃し始める。さすがに木は爆発には耐えられない。ただちに移動しなければ。

しかしなんてことだ。スタープラチナですら破壊が不可能なほどの異常なまでの強靱さとなると、物理的な破壊をすることもほとんど不可能と言える。もちろん僕のゴールド・エキスペリエンスのラツシユは無理だ。媒介としてある物体があれば僕の勝ちだが、あるわけじゃあなさそうだ。

床に降りようとした僕らは、爆弾戦車が加速するロケット噴射のよう飛び上がり、僕達目掛けて飛翔するのを見た。

「ジヨルノ、飛べー!」

「ゴールド・エキスペリエンスッ!」

即座に僕は崩壊している螺旋階段の支柱に跳躍し、樹木をはやす。足場を作りながら移動していき、なんとか回避して2階の踊り場に着地することに成功する。単調な動きしかできないことが幸いして、入口扉から数メートル上方の壁に衝突し、大爆発を起こした。

「今ノ爆発ハ人間ジャネエ！」

明後日の方向から聞こえる機械的な声に注意が逸れる。活動を再開した爆弾戦車が突撃してきたのだ。

「めり込めばいいものをー！」

「建物自体はスタンドの影響を受けてやがるからな……物理攻撃は無効だ」

スタープラチナの再三の攻撃にもかかわらず、せいぜい装飾が禿げたくらいである。空条さんは僕が張り巡らせた樹木を飛び移りながら舌打ちした。

どうやらスタンド能力を解除しない限り、いつまでも標的を狙い続ける自動追尾型のスタンドのようだ。攻撃はまだ終わってはいない。

「コツチヲ見ロオオ!!」

「見ろと言われて正直に見る人はいませんよ」

僕は枝を折って生命を生み出し、突撃させる。視界不良の攻撃のはずだがかならず察知して爆発しているあたり、目ではないなにかで僕達を追撃しているようだ。音にしては反応が早い。

ずっと見ているようだから障害物があっても問題ないものなのだろう。なんだ？なにで僕らを追尾している？それさえ分かれば楽なんだが。そんなことを思いながら、また足場を作り、移動する。空中の爆風により軌道がそれた爆弾戦車は壁に激突して大爆発を起こしていた。

「おい、ジヨルノ」

「なんです？！」

「今から蛇とツバメを同時に突撃させてみる」

「蛇とツバメ？ああ、なるほど。わかりました」

僕は足元の葉っぱを2枚ちぎるとゴールド・エクスペリエンスを発動させた。爆弾戦車目掛けてツバメと蛇が飛んでいく。爆弾戦車の軌道は僅かにそれ、先に向かってきた蛇ではなくツバメ目掛けて突っ込んだ。

「今だ」

そして、接触する寸前にただの葉っぱに戻ってしまう。

「アレツ!?アレアレツ?!」

標的を見失い、爆弾戦車がウロウロと辺りを彷徨っているうちに木にひっかかり、車輪がギョルギョル空回りする。

「なるほど、そういうことか」

「サーモグラフィーってやつですね」

ようやく僕は理解した。爆弾戦車の追尾機能の正体は温度だ。そして人間の体温程度の温度に達しなければ、爆発は起きない。そして体温が高いものと低いものがあれば、高いものに攻撃してくる。

「ならば、話は早いですね。デコイを用意するだけだ。鳥類は基本人間より体温が高いですからね」

無作為に生成したツバメたちの攪乱により、爆弾戦車は見当違いの方向に移動し始めた。木の枝に捕まりながら僕達は下を見つめる。

「遠隔操作型かと思ったが、こいつは明らかに違う……自動操縦に近いのか?」

初めて見た見たスタンドのタイプだと空条さんという。遠隔操作型とは違って、本体との距離とは関係なく強い力を発揮できる、ほぼ無限と言える射程距離をもつ。スタンド自体の耐久力や再生力が高い。倒されても再発動可能。遠距離から一方的且つパワフルに攻撃できる。

「なるほど、使い手が遠距離にいて、姿などが知られていない条件下ではほぼ無敵だな」

「厄介ですね」

「だが弱点がないわけじゃない……。サーモグラフィーが搭載されているということは、視界を共有していないということだ。スタンド周囲の状況が全くわからない、または正確な情報が得られない可能性が高い。行動に融通が利かず、ある一定のルールに則った攻撃や、大雑把な攻撃しかできないようだからな」

「感覚共有はしていないんでしょうか?」

「さあな……今んとここの辺りに爆弾魔はいねえようだから確かめようがない」

「フィードバックがあるなら毒性の強い植物を投げつけて液体まみれ

にすることも考えたんですが」

「スタンドのセオリーを考えるなら毒性は通るはずだがやってみるか？」

「植物に対して爆発しないなら拘束も可能ですからね、やってみましょう」

「さて、爆弾魔を探しに行くとするか」

「父さんが爆発事故に巻き込まれて入院したの」

しばらく泊まりたいと千帆に言われた琢馬は、即座に双葉輝彦が置かれている状況を察知した。

「二人でいるのは危ないから母さんのところに行くか、友達の家に行くように言われたの。母さんの家は社王町から離れたところにあつて、ぶどうヶ丘高校には通えそうにないから……」

ちゃんとした正当な理由があるのだと主張する千帆に、そうか、とだけ返した琢馬はどんな事故だと聞いた。連泊させてもらえる仲間になったと素直に受け止めた千帆は琢馬が父親を心配していると早合点して詳細に話し始める。

ジョルノにこの町に潜む爆弾魔について詳細は聞いていたが驚くほどに符合する点が多い。

爆弾魔に腕を爆破されて一人娘を人質にとられたために協力させられている。入院しているために屋敷に一人でいる娘に対する発言としては過保護がすぎるが無理もないだろう。

「二度お見舞いに行った方がいいか？」

すでに琢馬は千帆が愛人に誘拐されたとき、あるいは不審者に生き埋めにされそうになったとき、助けてくれたことがきっかけで仲良くなった先輩だと話したと聞いている。

千帆は顔を輝かせた。両親のことを心配してくれて、挨拶をしたいという意思表示をしてくれる人だと思ったようだ。

「あ……でも……」

「どうした？」

「琢馬先輩のこと、まだ男の人だっと思ってないです…… どうしよう」

「いってなかったのか」

「いってなかったんです…… じゃないと、泊まるの許してくれそうにないと思っ……」

通りで過保護な父親があっさり彼氏のところに宿泊を許したわけだ。琢馬の家はあたりまえだが両親はいない一人暮らしである。そこに娘が一人で泊まりに行くなど許すわけがない。縮こまってしまった千帆は申し訳なさそうに琢馬の様子をうかがっている。

「千帆のペースに任せる」

よかった、という安堵の笑みが浮かんだ。

「どれくらいだ？」

「全治1ヶ月らしいから……」

「そうか」

「大荷物になりますし…… 父さんのお見舞いもあるから…… その…… お邪魔するの…… 夜になるかなって」

「わかった。出る前に連絡しろよ」

「はい」

すでに互いの自宅や携帯電話の番号は知っている仲なのだ。携帯電話の充電にさえ気をつければ時間は十分にあるだろう。そして一度別れた琢馬はそのまま帰宅した。

「ずっとついてきているな、お前」

ツバメが気高くのびやかに臯月の風に乗って舞い飛び、ぱちっ、ぱちっ、と空中で弾ける音は高らかに愉しげに、命をたたえるように力強く響く。それがずっと聞こえていたので気になっていたのだ。

こつこつと窓を叩くツバメを琢馬は注意深く観察する。そのツバメがこの辺りに生息しないはずの種類であり、足になにかが括りつけ

てあることに気がついた。

窓を開けてやるとツバメは啄馬のすぐ近くに止まる。おそらく久しぶりに帰ってきたボールペンなのだろうが、ジョルノが指示をしているのか姿を変えることはない。クシャクシャになった紙を広げた啄馬は目を見開いた。

住所と注意喚起。ジョルノらしくない雑でギリギリ解読できるレベルの走り書きなのはずいぶんと急いでいるからだろう。時計に目を走らせた啄馬は机の引き出しの奥底に隠されていたものを取り出す。そして、ネックレスのチェーンを分解して装飾のひとつをティッシュでくるんでチラシをやぶき、ツバメに結んでやった。

「ちやんと返せよ、ジョルノ。これがないと千帆に渡せないのだから」黒雲のようにツバメが舞い上がる。あつというまに見えなくなっってしまった。

啄馬の手元には分解されたネックレスだけが残されている。

それはジェットとよばれる黒い宝石だ。20世紀初頭、顕微鏡によつて、年輪が確認されるまで、琥珀のように樹脂の固まったものと考えられていた。大変軽く、木や絹の上でこすると静電気を帯びるといった性質も同じことから、古代ローマ人は、ジェットを「黒い琥珀」と呼んでいたという。

どちらも人工的に採掘できるようになるまで、主に海辺に打ち上げられたものを拾うといった方法で採取されていたのも、同一視された要因だ。

ジェットの硬度は琥珀や真珠とほぼ同等。重さは、オニキスの半分以下でいちばん軽い宝石である琥珀に次ぐくらいとても軽い。化学的分析によれば、ジェットは「瀝青炭(れきせいたん)」という炭素物質に分類され、燃やすと石炭特有の匂いを発する。

ジェットは真珠と同じく、人類が発見した最古の宝石のひとつだ。紀元前1万年の石器時代から装飾品として加工され、南ドイツやスイスの遺跡から、「魔除け」として使われたジェットが発見されている。古代の人々にとって、摩擦すると帯電するジェットの性質は神秘的で魔力を秘めたものだったのだ。

古代ローマ人がイギリスを占領していた時代、ジェットは先住民族であるケルト人からローマ人へと伝えられ、「黒い琥珀」と呼ばれて珍重された。

リング・ブレスレット・ネックレス・ペンダントなどの装身具をはじめ、髪留めや短剣の柄、サイコロなどが、イギリス国内の古代ローマ遺跡から発見されている。その後、古代ローマ帝国が衰退し、4世紀にローマ人がイギリスから去ると、ローマ人に愛されたジェットは次第に姿を消していった。

7世紀にキリスト教がイギリスに伝来して以来10世紀にわたり、ジェットは主に教会に関連した装身具として、ロザリオ・クロス・リングなどに加工されていた。また、中世においてもジェットの超自然的な力が人々を惹きつけ、魔除けや護符として身につけられていた。

ヴィクトリア女王の夫君アルバート公の死によって、モーニングジュエリー、喪に服する期間に身につけられる装身具、と定められたジェットは、イギリスを中心にヨーロッパで大流行し、最盛期には街のすべてのショーウィンドーがジェットで黒一色に埋め尽くされるほどだった。

今でも喪服の装飾として人気があるジェットを千帆への初めてのプレゼントとするのはあまりにも不自然だったが、琢馬は千帆と出会ってからずっと決めていたのだ。

この黒い琥珀はかつて双葉照彦が大神だった時代に飛来明里、琢馬の母親に渡したものだからだ。なお琢馬はこのペンダントが双葉照彦のスタンドの名前の由来であることをまだ知らない。

アトム・ハート・フアーザー

吉良吉廣、かつてD I Oの協力者だったこの男は、写真家だったのかもしれないと康一は思った。2階のどの部屋をみても壁一面に写真がかざられており、仕事道具と趣味を兼ねていたのか撮影機材がたくさんコレクションのように陳列されていたのである。

それら写真は、海にいった際の海水浴場でのひとコマだったり、山でキャンプをしながらバーベキューをしていたりする。まるでタロットカードを並べるみたいに均一のスペースを開けながら飾られている。

写真で見る吉良家はどこにでもある裕福な普通家庭に見える。

古い写真は古い写真で、変色こそしていないものの、まるで水がにじんだみたいに全体に淡い膜が一枚かかっているものもある。目鼻立ちどころか、性別さえ不明なほど小さく写っている集合写真があったり、特殊メイクレベルの写真写りのものもある。写真をアートみたいに奇抜に飾るのが好きだったのだろうか。

お菓子のパッケージを思い出させるほど、ものすごくカラフルなのだ。赤、黄、青、緑、色分けされずらりと並べられた写真は、肉眼ではただ並んでいるだけなのに、遠くからみるとそれなりのインテリアになる。オモチャの王国の城壁みたいに、チャチでなければしくて、おもしろい。

気になることと言えば映る夫妻はいずれもまったく同じ顔をしていることくらいだろうか。他に手持ちの表情がないのだろうか。

過去であるぶんにはすべて変わりが無いのに、そこに漂う空間の色は、生きているかのように迫ってくる。

「家族写真たくさん撮る人だったんだね」

「仲良いみてーだなア……俺んちみたいにD I Oの協力者やってる悪いやつでも家族がいたんだ……」

「億泰君……」

「あ、わりいわりい、そういうつもりじゃあないんだぜえ。ついな……考えちゃってよオ」

「気持ちにはわかるぜ、億泰」

「んー、と仗助は1番近い写真を食い入るように見つめながら考えるのだ。」

「どうしたの、仗助君。なにか気になるものでもあった？」

「仲良い家族だったのは確かだろうぜエ、たくさん写真があるんだからよオ。ただなア…… にしちやあ、写ってるはずの息子の姿が1枚も残ってねえけどよおー」

仗助から不思議そうに呟かれた疑問に康一と億泰はハツとなる。あわててそれぞれが一番近くにある写真を見るのだ。やっぱりなあ、と仗助は引きつった顔のまま、唇をつりあげるのだ。

「ご丁寧に切り取られてやがるぜ。ここまでくるとストーカーじみてんなあ」

「それによー、康一。カメラマンてのは写真に自信持つてるもんだろー？それ1本で食ってんだからよオー。でもこの写真、セロテープで直接貼ってあるぜえ？」

「言われて見りやあ額縁にひとつも飾ってないのは変な話だなア」

「…………… そう、だね。まるで僕達に息子の顔を知らせたくないみたいだ」

「ビンゴかア…………？」

「承太郎さんがいつてた罫って、これのこと？もしかして」
「もしかしなくてもそうだろうな…………！」

アングルや鮮明さは見事だが、よく見ればこの屋敷全体の写真やあちこちの部屋など室内を撮影したものばかりのようである。そして連射して等身大の部屋の風景を写し取っていることに気づいてしまった三人は。

承太郎から聞いていた吉良吉廣のスタンド能力が写真に入り込んでその空間に干渉することで実際の世界にも影響を及ぼすものだということを思い出してしまう。ゾゾツとした三人にはその瞬間から破いて、焼いて、捨ててしまいたいほど不快な写真まみれの部屋に変貌したのだ。

何百回と写真を通して見ていた風景を実際に目のあたりにすると

いうのは実に奇妙なものだ。奥行きがおそろしく人工的に感じられる。僕がそこに辿りついたというより、誰かが写真にあわせてそこに間にあわせの風景をあわてて作りあげたといった感じだった。

そちらにばかり気を取られているせいで、撮影機材の中にあるポラロイドカメラから現像したばかりのまだ濡れている写真があることに仗助たちは気づけない。

突然のシャッター音で三人はビクツと肩を震わせるなり金縛り状態に陥る。機関銃のように連続でシャッターを切る光に気づいて、どこだか特定しようとした瞬間に周りは真っ暗になった。壁に飾られている連射写真に飾られている電球が弾け飛んだのだ。そして上からガラスが四散する。康一たちは慌ててスタンドで破片をそれぞれの方法で薙ぎ払う。

フラッシュがひっきりなしに焚かれ、花火のような盛大さの中、ポルターガイスト現象としかいいようがない怪奇現象が仗助たちを襲った。脚立やカメラ、ケース、あるいは光を調整する板、そういったものがデタラメに空中に舞い上がったかと思うと襲い掛かってきたのである。

辺りを支配する沈黙を切り裂くように、シャッターの音だけが立て続けに響き渡る。

仗助のクレイジーダイヤモンドが襲い掛かってくる機材の仕込みを解除しようとするが、操作されているのは写真の中の撮影機材だ。本体はなにもない。億泰がザ・バンドで現実世界の撮影機材をガオンしたり、康一のACT2が弾き飛ばしたり重さを感じさせたりする擬音で無力化するしかない。場所の特定を諦めた仗助は撮影機材の徹底破壊を開始した。

「うわあッ!?!」

「康一ッ!?!」

血しぶきが飛ぶ。いきなり康一の手が切られたのだ。

「気をつけて、仗助君ッ！億泰君ッ！なにかへんだ！カメラに混じって、包丁が何本も空を飛んでいるッ!!」

「いゝいゝいゝいゝッ!?!」

「とんだホラーハウスじゃねえかよ——ッ！だああつ、こつちにくんじやねえッ!!」

億泰のザ・バンドが殺意にみなぎる包丁たちを根こそぎ亜空間に消滅させていく。

「ナイスだよ、億泰君！」

「助かったぜ！ポルターガイストだつて無くなりや意味ねえからなッ！」

ホツと息をするのもつかの間、今度はなんの脈絡もなく億泰の腕が弾け飛ぶ。

「なっ……なにいー?!俺の腕がッ！何が起こってんだアッ！」

ザ・ハンドが使えなくなってしまった億泰は腕をかばいながらダラダラ血を流す。

「大丈夫、億泰君ッ!」

「正直やべーかもしれねー量だぜっ!」

「くそっ……さっきの連射は俺たちを攻撃するための準備ってわけか！康一ッ、億泰ッ！写真を探すぞ！」

仗助の叫びに2人はうなずく。その間にも三人には正体不明の攻撃が襲いかかる。満身創痍になりながらも二階中の写真を探しまくっていた三人は、家族写真の部屋にたどり着く。そこには今にも写真に入りそうな吉良吉廣の姿があった。

「逃がさないよッ!!」

康一の怒りが頂点に達した瞬間、男の悲鳴があがる。なんとエコーズの姿が変わり、写真に入ろうとしていたもう一枚の写真が床に貼り付けられたのだ。めきめきめきとなっているあたり、すさまじい重力がかかっているらしい。

「くっ……くそオオオ！やめろ、やめろオッ！このままじゃ俺まで消えちまうじゃあねえかアッ！」

訳の分からないことを喚いている吉良吉廣に近づいていった康一は、なんだか偉そうになったエコーズに戸惑いながらもその写真を2つ折りにする。そしてACT2の擬音でぴつたりとはりつけてしまふ。仗助は億泰の手当に追われているので、また写真の中に逃げ込ま

ないようにそのまま2階のエントランスホールに移動することにした。

「さあ、大人しくスタンドの矢を渡すんだ、吉良吉廣ッ！なんでこんなことをしたのか、教えるんだ！」

完全に無力化している写真からは悲鳴が聞こえた。

杜王町に住みひそかに殺人を行い続けてきた爆弾魔の實の父親。それが吉良吉廣の正体だった。

そもそも爆弾魔がスタンド使いとなったのもこいつの所為であり、かつてエジプトでエンヤ婆から「弓と矢」を譲り受け、その矢で息子も自分もスタンド使いとなった。息子が殺人に手を染めているという事実も知っており、さらには息子が捕まらないように陰であれこれ手を打っているなど積極的なサポートすら行っている。

随分前に癌で亡くなったが、杉本鈴美と同じように幽霊としてまだこの世に居座っていたのだ。

歳をとってから授かった息子である吉影を周囲の人間から『とても仲の良い親子』と証言されるくらい溺愛していたが、実は生前から我が子の人を殺さずにはいられないサガについて知っており、『息子を守る』という意味の元、犯す殺人を黙認するどころか積極的に帮助していた。

その執念故に死後も幽霊と化し、息子を守り続けている。スタンド使いは幽霊を認識できるので、息子は既に父が自分の守護霊となったことを知っており、情報収集や今後のプランの検討等で密な連携を取り合っているようだ。

『振り向いてはいけない小道』についても知っているようだ。地縛霊の杉本鈴美と違い、写真に宿り宙を舞うようにしてどこにでも移動が可能で、幽霊故にある程度勝手が利くのか、パジャマを糸状に解いて狭い隙間を移動したりもできる。それを利用して仗助達に襲撃をかけたようだ。

そしてこの男のスタンドは死後変化していた。自分が映り込んだ

写真の中の空間を支配し、生物を映した場合はその対象の「魂」のエネルギーを写真の中へ封印することで現実世界から写真の中へ隔離する。

そのためこの能力で撮影された写真の中へ閉じ込められた場合は写真の縁の空間から外へは出られず、逆に写真の外にいる人物が写真に映った空間へ入ろうとするとその空間を飛び越えて反対側まで瞬間移動してしまう。その上写真をちぎれば写真内でちぎられた物品が現実世界でも破壊される。当然人間も例外ではない。

そして、吉廣に攻撃することは写っている自分自身への攻撃となるため、閉じ込められた者が直接吉廣を攻撃することはできないが、吉廣自身は例えば写真内でナイフを使って誰かを斬れば、写真内で斬られた人物は現実世界にて同様に斬られてしまう。一度斬られてしまえばあとからナイフや吉廣を攻撃したところで一切のダメージが通らず、その運命から逃れる方法はない。

また本体である吉廣は写真の外にある物を写真の中へ引き入れる事も可能。それでも身を乗り出して動くことは出来るが、写っている側を内側にして畳まれると何も出来なくなってしまう。

ザ・ハンドによりこの世界から消滅させられると気づいた吉良吉廣は命乞いをしながらあらゆる情報を吐き出した。

「じゃあ、僕達を閉じ込めてるヤツらのことも話してよ」

「ゴールド・エクスぺリエンス」

僕の手からツバメが舞い上がる。

「さあ、行きましよう空条さん」

「ああ」

豪邸をツバメが飛んでいく。時折旋回してこちらを待ってくれているツバメについて行くと、2階に向かっていく。倒壊した螺旋階段

に繋がるものはなにもないが、ジャックと豆の木の要領で押しあげれば問題は無い。先程までうんともすんとも言わなかった扉がツバメが肩に乗っている状態だとすんなり開いた。どうやらツバメと接触していれば通れる判定のようである。

「あ、承太郎さん！」

「ジヨルノも！」

「大丈夫だったつすかア？」

そこにはボコボコにしたデイジャに扉を開けるように強いている
仗助先輩たちの姿があった。

「この野郎、吉良吉廣のスタンド能力で写真の中に入ってやがったから引きずり出して能力を解除してやったんすよオ」

「それはよかった。あと10分でこいつを探すのはなかなか手間がかかりそうだからな。助かったぜ」

「んんー？10分？」

「ああ、そいつのスタンド能力でな、1時間この屋敷に閉じ込められたやつはこの世から消滅するんだ」

ゾワツとしたらしい仗助先輩たちはなんで言わなかったんだと恫喝しはじめる。おそろくのらりくらりして時間を稼ぎ、一網打尽にしようとしていたデイジャにイラついた億泰先輩あたりがボコボコにし始めたとみた。

そのうち気絶かなにかでスタンド能力が解除されてしまったんだろう。ちようどよかった、僕はいわばスタッフルームから脱出するという禁じ手をするところだったから根本的な解決にならないのだ。

「ずいぶんと酷い格好ですね、康一先輩」

「ジヨルノ君もね」

「大丈夫か？」

「仗助が治してくれたからダイジョーブすよオ、承太郎さん！」

「さあて、みんな揃ったし、どういう事が説明してもらおうかア！」

僕達はそれぞれ分断された先でなにかあったのか、情報共有をすることにした。そして、すっかり戦意喪失しているデイジャに空条さんが尋問をはじめめる。どうやら片言の日本語と流暢な英語しかこの男

は喋れないようで、億泰先輩はますますなにを言っているのかよくわからず、日本語で喋れとイラついたようである。

気持ちちは分かる。憤りの矛先が言語の壁に遮断されてしまうと、人間より怒りが助長してしまうのだ。元を辿れば空条さんたちにポコポコにされたくせにまた邪魔するために立ちふさがったデイジャが悪いのだから、同情の余地は微塵もないのだが。

「……手引きだと」

空条さんが舌打ちをする。

「DIOの協力者共が世界に散らばるスタンドの矢を収集して回っているらしいな。それで吉良吉廣がスタンドの矢を渡す条件として、俺たちを邪魔だてしたらしい」

僕らは息を呑む。僕個人に向けての警告はいくらでもあったが、空条さん、バツクにいるジョースター家、スピードワゴン財団に明確に敵対の意志をつたえてきたのはこれが初めてである。仗助先輩たちの息を呑む音が聞こえた。

空条さんはしつこく絡んで話を聞いている。早すぎて半分くらいしか聞き取れないが、冤罪を晴らすために奔走する男のような執拗さと嫌らしさで聞きたいことが山ほどあると詰め寄っている。相手の事情を訊き出したい時の前振りだろう。やがて事務的な口調の型どおりの質問から打ちかからんばかりに厳しく追及する恐喝に変化していく。

犯人を追いつめる刑事のような口調

内臓に手を入れて撫で回すようなしつこさで尋問する姿は音石に対するものと同じだと億泰先輩がボソリと呟いた。

問い質す調子にひどく差し迫った雰囲気がある。デイジャは圧倒されて答えは返ってこない。そのたびに胸ぐら掴まれてぶらぶらと体が宙を浮く。鬼の首を取ったように責め立てる空条さんの前では、のらりくらりとかわすデイジャの話術も形無しだ。

「どいつかはしらねえが、俺たちのスタンドなどをバラしてるやつがいるらしい」

なるほど、だから準備万端で迎撃してきたというわけか。

「ゴールド・エクスペリエンス」

僕は床に転がったデイジャの爪から無色透明の、見えざる触手、植物の長い蔓のようなものを伸ばす。頬や首筋を探るように蔦は伸びていく。本心を、心の中を見透かすために、撫でているのを見下ろしながら笑った。

「植物っていうのは、なにも人間を害するために毒を持つてる訳じゃない。激しい生存競争の中で敵から身を守り、生き残るためにエスカレートした結果、たまたま人間が触ったり口にしたりしたせいで死ぬ。いわば自業自得なんだ。まだ実験中なんだけれど、よかつたら協力してくれませんか？」

デイジャの顔がひきつる。

「たとえばこのジャイアント・ Hog ウィードはまさに悪夢のような植物だ。食中毒を起こす植物はたくさんあるけれどジャイアント・ Hog ウィードは、ほんのちよつとの皮膚に触れただけで人間に強烈なダメージを与える」

蔦からエイリアンが地球に送り込んだかのような外見を持つ植物が生えてくる。デイジャは悲鳴をあげた。太陽と手を組んで人間を痛めつけるジャイアント・ Hog ウィードは感光性で、触れると人間の皮膚を覆うドロドロした液体を出す。

その瞬間、液体は日光に反応し、皮膚や粘膜を経て炎症や、壊死、そして広範囲にわたってありえないような紫色の病変を作る化学反応を開始する。

しかもそれは数年間続く可能性があるのだ。さらに恐ろしいことに、その液体はほんのわずかな量でも目に触れると失明をもたらす。ほとんど凶鑑の受け売りだがデイジャは目の前にちらつく毒草にガタガタ震える。

「オーストラリアのギンピーギンピーは、トゲのある樹木の中で最も苦痛を与える木だ。ギンピーギンピーが与える激しい痛みは”酸をスプレーされたようだ”といわれていて、その苦痛から自殺に追いやられた患者もいる。最も痛ましい事例は、低木の茂みの中で誤ってこの植物の葉をトイレットパーパー代わりに使った後、銃で自殺した男性の

話だ。ここに銃はありませんが、どうします?」

「反対側の爪から生成したこの非常に恐ろしい木は、あらゆる毒の中でも最も持続性のある毒を持っていて、刺された後2年間以上も焼けつくような痛みが続く恐れがあると僕は警告する。これは接触した部分に送り込まれた毒針に毒が残るためだといわれている。」

ある研究者はその毒が20年以上も留まり続けること発見した。健康な人であつてもアナフィラキシー・ショックが誘発されるかもしれないという理由から、オーストラリアの森林局はこの植物がはびこっている場所にいる伐採作業員に、最高グレードの危険物用防備服の着用を義務付けている。

「もちろんそんなものここにはありません。さて、どうします? 歯や髪の毛に生やしてもいいんですよ、僕は。今すぐになでも」

嬉嬉として語りかける僕に康一先輩あたりがドン引きしている気配がする。僕からすればあと10分でみんな全滅したかもしれないのに、そいつに同情するなんてという気持ちなのだ賛成してくれそうなのは空条さんだけだった。

「なんでそんなに怯えているんです? あなた…… 覚悟して来てる人ですよね……? 人を始末するってことは、逆に始末されるかもしれない覚悟があるんですよ? まさかないとか言わないですよね?」

この時の僕は最高にいい笑顔をしていたとのちに仗助先輩は語っている。

ハウス・オブ・ホーリー

破壊力E

スピードB

射程距離C (建物全体)

持続力A

精密動作性D

成長性D

建物を支配し、あやつるスタンド。支配した建物に入ったものが一時間経過しても内部にとどまっていた場合、この世から消滅させることができる。建物自体は実体として存在し、スタンド使いでなくても見ることができが、壁、窓、床などへの物理攻撃は一切効果がない。

本体 デイジャ・メイカー

ジョジョの奇妙な館からの脱出より

DIOの元手下。ホテルマンに化けて承太郎一行を待ち受けていた。ジョンガリに雇われて、吉良吉影に協力していたようだ。34歳。さそり座。A型。身長174cm。

★趣味

ガウデイの写真集を眺めること ルービックキューブ集め

★好きな映画

ラビリンス魔王の迷宮

★好きな音楽

ブルックナー交響曲第7番ホ長調（聞き終わる頃には1時間経過しているため）

★好きな飲み物

チャールエ（パキスタンのミルクティー）

★性格

一見、物腰柔らかかで丁寧だが内面は陰険で狡猾。手を汚さずに人を殺せる自分のスタンド能力に誇りを持っている。時間に細かく、完璧主義で潔癖。他人には1m以内に近寄られたくない。子供の頃、かくれんぼ中に友達が帰ってしまい、見つけられるのを夜明けまで待っていたことがある。

「えっ…… テスト？」

一瞬仗助の時間が止まった。

「なんのだったけエ……？」

冷や汗をダラダラ流しながら仗助は康一に聞いた。

「やだなア…… 忘れてたの、仗助くん？ 理科だよ、理科。皆山先生、言つてたじゃないかア」

「げっ…… マジで！」

仗助の頭にはウケない変顔ばかりする冴えない中年が浮かんだ。理科の皆山は冒頭の15分を使つていつも小テストをしている。その点数と中間、期末の点数が理科の成績に直結すると常々言つていたはずだ。小テストからしか出題範囲はないとも聞いており、真面目にプリントをとつておいて丸暗記すればまず赤点は免れる。

「やべエ…… やべえぞ…… すっかり忘れてたア……！」

「あ…… そつかあ…… 頑張れ仗助くん」

康一から同情めいた眼差しを向けられ、代わつてくれと切実に仗助は思った。

なにせ仗助の家はこないだまで修羅場だったのである。仗助の父親、ジョセフ・ジョースターの浮気が18年目にしてバレてしまい、代理人として空条承太郎が来訪するはずだった。直前になって音石の件でジョセフ自身が社王町に来てしまい、しかも透明になるスタンド使いの赤ちゃんがジョセフにしか懐かず帰るに帰れなくなつてしまったのだ。孤児が確定した赤ちゃんの母親を殺した犯人を見つけなくてはならない。それに6ヶ月の赤ちゃんを連れて太平洋を横断するのはハードスケジュールすぎるということで、しばらくはいる、となつた。

仗助からすれば、まじかよオという話である。良平には承太郎が代理人である、と伝えてあつた。そのまま地獄の三者面談かと思つていたら、夜勤から帰つてきた良平がいつたのだ。

「ところで仗助、ジョースターさんはワサビ食えるのか？」

あ、終わったな、と仗助は思った。承太郎が泊まっているホテルはバレている。アメリカの不動産王が来訪したとあれば警備関係は相当ドタバタする。しかも上からの圧力で不審死が相次ぐ事件の捜査ができない、音石明に面会を求める空条承太郎と虹村億泰、スピードワゴン財団職員とくれば、相当地元はイラついているらしい。何隠してやがるんだ仗助え、と肩をばしばし叩かれて尋問する警察官の顔をされて囁かれた時には生きた心地がしなかった。

そしてせっかくの特上寿司だったのに全然味がしない4者面談がようやく終わったのである。なんというか、通訳の承太郎が言葉をだいぶ付度してくれたおかげでスムーズだった気がしてならない。表面上は淡々とした話し合いだった。遺産相続の件は東方家は関わらないという方針が一貫していたし、良平も娘が既婚者と知りながらジョセフと不倫関係になったことを鑑みて冷静に話していた。18年という歳月がだいぶん双方を冷静にしていた。

ただ、ひとつだけ。仗助は若い頃のジョセフに似ている、という笑い話になった時だけ、良平は修羅となった。東方仗助は東方家の長男として、杜王町に生まれて育ち、母親と祖父の影響を受けて育ってきた。じいちゃんみたいはこの町を守りたいといっけてくれる仗助の性格はそうやって育まれてきた。それだけは忘れてくれるな、それだけだった。

長い長い沈黙の後、承太郎はそうですねという言葉を通訳したがジョセフが零した英単語にそういう意味があるとは聞いたことがなかったのである。

そういうわけで前の授業なんてそっちのけで地獄の四者面談で頭がいっぱいだった仗助は、ヤバい状況におかれていた。

アンジェロの事件をはじめとして、なにかと学校をサボりがちな仗助はわりと危ないのだ。

「やべえ……マジでなんとかしねえと補習だ……こんなことしてる場合じゃねえってのによオ」

留年にはならないギリギリの救済措置だとは知っているが、この町に潜む殺人鬼を一刻も早く捕まえたい仗助からすれば余計なお世話

だった。ただ、良平にバレたらやばいし、朋子にバレてもお小遣い減らされるし、間違いなく補習も留年も避けなくてはならない。

「……んんー、どうすっかなア……」

理科の皆山はテストを使い回すタイプではなく、自分で1から全て作るタイプの教師だ。準備室には今の時期になると補習の生徒のために用意されたわら半紙の山があると仗助たちに恐れられているのだ。

「プリント、どっかいつちまったんだよなア……」

適当に置いていた仗助が悪いのだが、こないだから見当たらないのだ。ジョセフと承太郎にひとめ会いたいあまりに家中を掃除しまくった朋子がどうやらゴミと一緒に捨ててしまったのである。今からプリントをもらって最近成績急上昇中の康一に教えてもらおうという手もあるが、由花子との勉強会を邪魔しなければならぬというハードルがある。友達を捕まえて、という手もあるが、賄賂の居所があやしい。最近財布が緩みがちな仗助は気がついたら残高3桁の再来を非常に警戒していた。うーん、うーん、と必死で考えていた仗助は、ふとジャンプを回し読みする友達から聞いた噂話を思い出す。

「……. そういや、皆山先生ってテストを準備室で作ってるって噂があったよーな……」

邪な考えが仗助に過ぎる。にや、と笑った仗助をみた康一はこの上なく悪い顔をしていたとのちに語っている。

「失礼しまーす。ごみ捨てに来ましたア」

「東方が当番だったのか、ちゃんと捨てにいけよ。ぱんぱんだぞ」

「すいませーん」

仗助は掃除の時間、友達と場所を変わってもらった。掃除の時間、ごみ捨て担当がこないとき異臭がするゴミ箱は近寄り難いのだ。ジト目のクラスメイトをくぐり抜け、仗助は理科室のゴミを出し、袋を入れ替えた。そしてゴミが少ないはずの準備室のゴミを移し替える振りをして、ゴミ袋にいれる。1階の外れにあるゴミ捨て場に移動した仗助は、こここそ人通りが少ない中庭に下げた。

「さあて、入ってるかなア」

生徒が理科準備室にゴミを捨てることは掃除の時間以外はあまりない。仗助の予想通り紙ゴミがやけに多いのがわかる。

「オーブンツてなー!」

がさごそひっくり返しながら、ティッシュなどのゴミを避けつつ、わら半紙をさぐる。

「あつたあつた、俺の狙い通りだぜー!」

そこにはテストの問題を作るにあたって作成されるはずの書き損じや下書きがある。皆山はなぜか手書きで作ることにこだわる教師だった。今どきパソコンもつかわず、である。だからこそ可能な手段だった。ほかの教師だったらパソコンを盗まなくてはいけないからハードルがバカ上がりする。フロツピーを盗んでしまおうとさすがにバレて取り返しがつかない騒ぎになってしまふのだ。それは避けたかったのである。

「えーっと……. だーくそ、クシヤクシヤにしやがってエ……. 読めねえじゃねえか」

皆山は上下にスライドする黒板がどちらも真っ白になるくらい書く教師だ。びっちり書き込まれている。崩れ文字で非常に読みにくい。授業中は説明も聴きながらだから問題ないが、後からだと言非常に苦労するのだ。そういう意味ではわかつた気にさせる天才なのかもしれない。

「解読結構時間かかりそうだなア……. これはプリントもらって穴埋めを丸暗記した方がはやいか……. ?」

がしがし頭をかきながら仗助は考える。

「……. ん?」

脇に挟んでいたビニール袋が落ちてしまう。仗助は慌ててゴミを拾い集める。

「あれ……. ?なんだこれ?」

そこにはハサミで切られたと思われる髪の毛が落ちていた。

「うわっ、気持ちわりい」

少ないながらも三つ編み、いやミサンガみたいに輪っかになってるのがわかる。

「しかもひとつじゃねーし……」

仗助は直接さわりたくなくて、袋を手袋のように装着することにした。

ミサंगाといえば、手芸の色とりどりの刺繍糸を何本もあわせて編み、模様をつけて輪っかにしたものだ。仗助の周りでも恋人同士や友達同士で同じものをつけているのをよく見かける。

たしか、1993年にJリーグが開幕した際、ヴェルディ川崎に所属するラモス瑠偉や北澤豪がチームの勝利などを祈願してミサंगाを身につけていた事がきっかけとなり、Jリーグブームの高まりと共に国内に広まったはずだ。手首や足首などに巻きつけて使用し、紐が自然に切れたら願いごとがかなうという縁起担ぎの意味があったはず。

「やっぱあれミサंगाだよなア……」

気持ち悪いから見なかったことにして捨ててしまおうかとも思ったが、たくさんの髪の毛で出来ているのだ。どうみてもオカルトアイテムである。下手な扱いをして呪われたり祟られたりしたら困る。なにせスタンドや幽霊なんていう超常現象が普通に転がっている社王町なのだ。呪いのひとつやふたつ、あったっておかしくはないのである。

結局捨てるに捨てられず、仗助はロッカーにしまいっぱなしにしていた。今度の休みにでも近くの神社の神主さんにでも相談した方がいいかもしれない。

「クツソオ…… 気になりすぎて勉強に集中出来ねえぜ……」

人はそれを責任転嫁、もしくは現実逃避ともいう。

観念した仗助は解読に時間がかかりそうなテストの草案よりも今までの小テストのプリントを取りに行くことを選んだのだった。

「失礼しまあーすー！」

がらららら、と引き戸をあけたら勢いが良すぎて跳ね返る。仗助の体にぶつかるが幸い頑丈な体はその程度ではダメージが受けなかった。いきなりの音に驚いたのかまばらな視線が仗助にむく。

「皆山センサーいませんかア？」

近くにいた学年主任がここの席だよと教えてくれた。

「あれ、センサーは？」

「まだ帰ってきてきてないな。まだ片付けが終わってないんじゃないか？」

「あー、理科準備室つか？」

「そうそう」

「しつれーしましたア」

仗助はめんどくせえなあと思いつつ職員室から出て理科準備室に引き返した。なにやら生徒と話し込んでるのが見えたが、深刻そうではないので仗助はそのままドアをあけた。

「皆山センサー、ちよつといいっすかア」

「ん？ああ、東方か。……ちよつと待っててくれるか。なんだ、どうした？」

生徒は仗助に会釈すると奥の方で待っているようである。仗助も軽く挨拶した後皆山に視線を移した。

「実はア、小テストのプリント、お袋が間違つて捨てちまったみたいで……プリントもらつてもいいっすかア？」

「あー、はいはい、プリントな。毎年似たような事件が相次ぐからとつておいてあるんだよ。俺の机の右下の引き出し、上から3番目にあるから持つてつていいぜ」

「アハハ……ありがとうございまあす」

「俺はちよつと用があるから後よろしくな」

「リョーかいっす」

仗助は二度手間かよと思いつつも理科準備室をあとにして、また職員室に向かうことにする。一日にこう何回も職員室に行くなんてなかなかないんじゃないだろうか。やはり目をひくのはひくようで、好奇心にかられて聞いてきた先生に話をすると最近忙しかったもんながんばれよと返ってくる。どうやら仗助の家庭事情は職員室でも噂になっているらしくかった。居心地の悪さを感じながらも言われた引き出しを開けてみる。

「皆山センセにしちやきれーな机だな」

いつも適当に授業をしているイメージしかないが、綺麗に整理整頓された引き出しは仗助の目的のファイルをあっさりと見つけてくれた。

「あつたあつた……ん？あれ、なんか引つかかっている？」

でかいファイルだからだろうか、奥の方でひっかかっているのか取れそうにない。ガチャガチャ乱暴に触ってみたがどうにも上手くいかない。仗助はこっそりクレイジーダイヤモンドを起動した。長らく使われているせいでガタがきている引き出しの滑りがよくなる。

「よっしゃ、取れ……」

目的のファイルの取得に成功した仗助は笑みを浮かべたが、引つかかっていたファイルの角を見て絶句する。

髪だ。また髪の毛が大量に挟まっている。どうやら引き出しを直したことで上の段に張り付いていたクリアファイルが落ちてきたようだ。

(ゆ、由花子の仕業かア……？康一に皆山がなんかしたとか？いやでもなあ……)

山岸由花子の髪とは全く違うものが引き出しっぱいにひっくり返されている。

ちぢくれた髪の毛。長い縮れ毛。渦巻状の毛。パーマをかけたように巻き縮れている毛。縮れた薄い頭髪もじやもじやに縮れた髪が短く刈り込まれたような、火であぶったように縮れている髪。きれいなウェーブがかかっている癖のある髪。だいたい天パと呼ばれるいんな髪が散らばっている。

時間がたつとまるでワタアメのごとくフワフワと宙を舞い始めるのだった。

仗助はたまらず引き出しをしめる。

パーマも染め粉もとれかかっているせいか赤茶けて精気がなく、毛先から心意気が抜け散っていつてる感といい、むりくりミサンガにしようとしている根性は認めるが純粋に気持ち悪かった。

無言でお目当てのファイリングしてあるプリントを探そうとぱらぱらめくっていく。1枚2枚と抜けがないように回収していく。

「ひっ」

意味ありげに伸ばした長髪の塊がファイルに挟まっている。長々と後ろに伸ばした髪は脂気も無く手入れもしていない髪。一筋一筋が極めて細く、色素を含んでいないような細く短い髪。細くやや赤みを帯びたしなやかな白髪。

恐怖で頭の毛の全てが針のように強ばるのがわかる。

(おいおいマジかよ、皆山先生いろんな髪の毛集めてんのかア？変人じゃねーか……………)

どっかのドラマで髪の毛を結び上げた女性のうなじはエロいとか、髪を梳く動作はエロいとか、そんな話をしていた気がする。でもこれは明らかに一般的に見てもおかしいといえる性癖だ。

(…………… ぜんぶ根元から抜かれてやがるしイツ！)

普通なら髪の毛をぎくぎく切ったらないはずの根元の白いところが全部揃っている。ということは、ここにある髪の毛はすべて筆られたか抜かれたということだ。

(まさか…………… まさかなア)

ふと思いついてしまった仗助は怖いもの見たさで引き出しをまた開けてしまう。

(やつぱり全部引っこ抜いたやつじゃあねえかア…………… !!)

1人分なら白髪を抜いてあげたみたいなのは好意的な解釈ができるが、さすがにこれは擁護のしようがない。ここまでくると仗助は我慢できなくなり、引き出しを閉めるなり職員室をあとにした。

向かうは自分のロッカーである。

まばらな生徒たちとすれ違い、一目散に向かった仗助は、コンビニ袋を漁った。

(やつぱりこれも全部髪の毛根元から抜いてやがるううう!!)

怖いなんてもんじゃなかった。ここに今この瞬間髪の毛のミサングを手に持って見ている自分がいるという事実がただただ恐ろしかった。

(どうする…………… どうする…………… 捨てるか？見なかったことにするかア…………… ?!)

仗助は今まさに全力で頭をめぐらせていた。とりあえずビニール袋ごとポケットにしまい込み、仗助は歩き出す。じっとしていても発狂してしまいそうだったからだ。

気がつけば理科準備室に立っていた。

(開いてる……!)

いつもなら鍵がかかっているはずだがあつさり扉は仗助を招き入れた。薄暗い部屋に入り、明かりをつけ、仗助は机の下にある冷蔵庫を躊躇なく開く。いつもなら鍵がかかっているはずのそれはなぜか開いていた。

(うげエツ!?)

たまらずあげそうになった悲鳴を堪える。冷蔵庫の中にはたくさんの髪の毛が鉢植えに植えられていたのだ。

「みたな……見ちやったな、東方」

ビクツと肩が跳ねる。おそろおそろ振り返ると先生が立っていた。

「あ、あのよー、先生」

「バレちまったもんは仕方ない」

「ひっ」

「なんてなー!まさか同士と会えるとは思わなかったぜ、いいよな髪の毛!持ち主のこと想像するとゾクゾクするっつーかさー!いやあさか東方が同士だとはなー!先生やっててよかった!」

(あ、あれー?)

想像の斜め上をカツ飛んでいった現実に仗助は狼狽するが慌てて取り繕うのだ。

「わかってるよー、皆まで言わなくても。でもな、こういうのは自分で集めてこそだ。いいスポット教えてやるからそれで我慢しろ」

(なんかちげえー!)

チャイムがなるまでフェチ談義に付き合う羽目になった仗助は、帰る間にプリントの試作を入手することが出来たのだった。なんとか補習は回避したが、この日から先生の視線がやけに温かいのは気の所為ではない。

商店街のスピーカーの割れたアナウンスが響き渡る。S市駅から駅ビルの脇を抜け、道玄坂を登っていくと見えてくる古びた商店街。その商店街のはずれで恒例の福引大会が行われていた。は何十年もこぢんまりと店を構えていた。

風がアーケードの下を刺すように吹き抜ける。線路と直角に交わる格好で、商店街が東に伸びているシャッター商店街に東の間の喧騒が訪れていた、細い路地が商店街となって住宅地に延びている。食物の匂いのする商店が肩を擦り合うようにして並んでいる。そこに人だかりができていた。

狭い商店街の通りには天幕がずっと張り渡されて、昏くらい涼しい影をつくっている。夕方の商店街は西日のトーンで統一されていた。異国のバザールのように。「大安売り」と赤と白に染めぬかれたのぼりが次々にはためいて、道をふちどっていた。

「にひひひひ、オラは親孝行だど」

重ちーはチラシを握りしめながら笑っていた。ようやくネズミを媒介にした感染症から復帰できたばかりの彼は、久しぶりの学校の帰りである。

そこにはたくさんさんのチラシについているはずの抽選券が握られていた。ハーヴェストたちによる町中のゴミからの収集のたまものである。

「ちなみに何回分ですか？」

聞いてきたのはジョルノである。自分の不注意で重ちーが感染してしまったことを気にしていた。だから本調子ではないであろう重ちーになにかあつては困ると一緒に帰っているのだ。

「ええっとおく30回分だど」

「そんなに？さすがに怪しまれて怒られませんか？」

「大丈夫だど。ママがここの常連だから、ずうっと前からみんなこんな感じだど。買い物のレシートでもできるから」

「ああ、なるほど。みんなやってるってことは暗黙の了解ですか。切り取ってしまえばわからないパターンですね」

うんうんと勝ち誇ったように重ちーはいうのだ。

「最初に出ちや困るからって〜一等はわざと入れられてないんだ。だから夕方にきたんだ」

「不正操作もご愛嬌ってわけですね」

「あら〜いらいっしやい、重ちーくん。今回も来てくれたのねえ。こないだみたいになにか当たるといいわねえ」

「こないだはラジオだったかしら？」

「それは前のよ。こないだは牛肉1年分」

「なにかしら当たってるのよねえ！すごいわあ」

毎回一等が当たる訳じゃあないらしい。たんに重ちーが欲しいものが一等じゃないだけのようで、回す回数が回数だからか商店街スタッフもなんの疑問も抱いてはいないようだった。ジヨルノは腕まくりをしながら抽選券をさしだす重ちーにやる気を感じる。

(ハーヴェストによる不正操作はさすがだな……中にいる個体は目を回さないんだろうか)

群体型スタンドの利点を生かし、フィードバックを許さないとほさすがである。さすがに重ちーが意識してやっている気配はしないけれども。とにかく初めから約束された勝利である。カラカラカラ、と忙しなくがらぼんが回される。15回目くらいでからんから〜んとベルが鳴らされる。あたりの人だかりがざわついた。

「おめでとうございまあす！一等の海外旅行1週間！」

「ありがとうだ」

「はあい、こちらがパンフレットです！好きな方を選んでお母さんかお父さんと旅行会社さんに持って行ってねえ」

残り15回を回して可もなく不可もなくな品物を荒稼ぎした重ちーは大満足な様子だった。

「ジヨルノもやるど？」

「そうですね、ティッシュくらいならいくらあっても困らない」

「うんうん。オラはパパとママにプレゼントするどー！親孝行だなあ」

「うー！パパたちを心配させちゃったからうーこれがゴメンなさいの代わりだど！」

にしししと笑う重ちーの隣で近くで買い物したレシートの束が使えるのなら、1回分くらいならできそうだと、とジヨルノは財布を探る。ガラガラと回したジヨルノは落ちてくる玉の色を見ていた。

「おめでとうございます！2等の食器洗い乾燥機をさしあげます！こちらは引換券ですね。期日以内に電気屋さんまで取りに来てくださいーい」

「おー、すごいぞジヨルノ！たった1回であてるなんて！」

重ちーの反応を見て、ハーヴェストが気を利かせて手助けしてくれたわけじゃないらしいことに気づいたジヨルノは、リアルラックに驚くのだ。

「…… 食器洗い乾燥機か…… 置く場所あるかな」

最近建物移動したばかりでまだダンボールが山積みの官舎を思い出したのか、ジヨルノはためいきをついたのだった。

「んんー？嬉しくなさそうだと、ジヨルノ？」

「この前、水道管が破裂して部屋を移動したばかりなんですよ。保護者が入院したせいで僕一人じゃあなかなかダンボールの片付けが終わらないんだ」

「うわわわわ、それは大変だったとど」

「おかげで床に穴が開くし、水浸しになるしで酷い目にありました」

「そんなに!?ありやいや、だから神様がその分いいことをつて気を使ってくれたのかなあ〜?」

「もしそうならキッチンの広さに気づいてほしかったですね」

ジヨルノは苦笑いした。

私立S市公園は、大きな庄屋が所有していた広大な庭園を一般に公

開することから始まったとされる、丘の上にある公園だ。シダレザクラなど数百本あまりがこの地に植えられている。時を経て、戦後の荒廃や樹木の老衰によって木々の本数が少なくなったため、シダレザクラの名所として甦らせようという気運が高まり、植樹が行われた歴史がある。今では、サクラの名所として広く知られ、サクラの季節になると花を楽しむ多くの人たちが賑わいを見せている。この町だと5月半ばまで楽しむことができる。

サクラのほか、ウメ、ツバキ、フジ、ハギなども植えられ、季節ごとに彩りを添え、噴水彫刻は、夏になると涼しさを演出してくれる。クロマツの並木も美しく、四季を通して市民に広く親しまれ、市内有数の憩いの場になっている。

その主要な施設を通り過ぎ、クロバーの茂った丘の斜面を登っていき、丘の緑の縞に黒い影の糸が織り込まれるふつくらした大きな饅頭を並べたような柔らかい丘の起伏に到達する。丘が、三角の頂上から両足をふんばったように、二つの小尾根を左右に投げ落とす様子が一望できるその場所でちよつとした名所がある。

僕が来たときも初夏の兆しが見え始めた5月の丘が紺碧の空に女の脇腹のような線をひとしおくつきりと浮き出させる。丘の群れが、薄化粧した女のように、白く霞んで静まり返っていた。見晴るかす平原の中に、島のようにひとつ取り残されている丘陵の真上に、真っ白な電話ボックスがあるのだ。

溪間からは高く一日日の当るこの平地の眺めほど心を休めるものはなかった。僕にとってはその終日にあいた眺めが悲しいまでノスタルジックだった。

真っ白なペンキで塗装された木製の電話ボックスは、長年の風雨に晒されて老朽かしてしまっている。台風に見舞われるたびに転倒したり故障したりするトラブルに見舞われながらもその電話ボックスはこの公園の象徴的な存在として、我が物顔で陣取っているのだ。

軋んで開けにくいドアを開けてみると、そこには電話線が繋がっていない黒電話、そして一冊のノートとボールペンがある。

「……ほんとに電話線が切られているな……」

ちぎれたまま放置されている電話線を指で絡めながら僕はあたりを見渡す。倒産した施設からもらってきたという話は本当らしい。僕はボロボロのノートに手を取り、ぱらぱらとめくってみた。そこには老若男女様々な人間がさまざまな感情を抱いたままここに来たことがうかがえる。その文章に触れるだけで背筋が伸びる想いがした。この電話ボックスではルールがある。来訪者はどこにも繋がらない電話で今は亡き人、あるいは二度と会えない人に思いを伝えたり、ノートに気持ちを記載したりする。ただそれだけだ。ノートの最初にはこう書いてある。

この電話は心で話します。静かに目を閉じ、耳を澄ましてください。風の音が又は浪の音が、或いは小鳥のさえずりが聞こえたなら、あなたの想いを伝えて下さい。

この電話は、若くして亡くなった子供ともう一度話をしたいの思いかから、両親が設置したものだ。切なる願いから設置されているから、とても静かなところだ。

「…………… かかる、わけがない」

この電話を通して在りし日の人と会話するための場所がここなのだ。まかり間違ってもそんな噂がたつてはいけなだろう。亡くなった人と会話ができる、会いたい人と会話ができる、願いがひとつ叶うなどという興味本位や好奇心で慰霊の人を順番待ちにさせるような噂など。ただ出処が双葉千帆なのだ。あの無自覚のうちにスタンド使いの事件に巻き込まれたり、囲まれていたりするあの女子高生なのだ。それだけで信憑性が増してしまう。

琢馬はその話を聞いた瞬間にひどく不快な顔をして、聞かなかつた振りをした。双葉は双葉で父親の入院生活を支えなくてはならず取材にいけそうにない。だから調べてきて欲しいと頼まれてしまったのだ。いつもなら絶対にやらない。だが琢馬から借りているネットワークの一部は爆弾魔が捕まるまで返せそうにないと謝りにいったら協力しろと言われたのだ。仕方ない、等価交換である。

「……………」

試しに黒電話をとって見たが電話線すら繋がっていないのだ。無

音の受話器があるだけである。

「そもそも僕はかける相手がない……あの人もD I Oもドリム・シアターであっただけで充分だ……誰にかけるっていうんだ」
　　こういうとき、曰く付きの電話というのは置き去りにされた時限爆弾みたいに見える。利用されるのを待つばかりで、自分自身でコミュニケーションを取れないことに苛立っているようにも見えるからだろうか。ときどき電話機の方にちらつと目をやるが禿げた黒の電話があるだけだ。腹立ちまぎれに、叩きつけるように受話器をおいた。黒い電話が金属質の音を立てた、それきりだった。

「……………帰るか」

一応ノートを読んで内容だけは頭に入れておく。電話ボックスから出ようとした僕はけたたましくなり始めた黒電話に体が飛び跳ねた。慌てて振り返ると間違いなく黒電話がなっている。放置された携帯電話がじゃんじゃん鳴っているわけがない。電話のベルが鳴った。ベルの音が頭の中に進入してきて、緑色のギザギザした光を放つ。轟音に聞こえた。トンネルを抜けていく特急列車に乗っているみたいだ。

ベルの鳴り方から、相手が普通の人間じゃないことは容易に想像がついた。うまく説明できないのだが、スタンド使いになってからというものの遭遇する確率が高すぎるからか、いつだってそれとわかる。ベルの鳴り方が特殊なのだ。文章に文体があるように、今まきにかかっている電話は独特なベルの鳴り方をしている。せわしなく神経質な鳴り方をするのだ。まるで指先で机の表面をとんとんと執拗に叩き続けているみたいだ。

僕はおそろおそろ手にとった。受話器の向こうからエーデルワイスが聞こえてくる。保留音だ。汗が全身から吹き出すのがわかる。

まるで重力が均衡を失ってしまったような深い沈黙があたりをみちた。氷河にとじこめられてしまった五万年前の石のような深く冷たい沈黙だった。僕のまわりの空気の質をすっかり変えてしまったのだ。

コールが何度も何度も重なる。尋常じゃあない数だ。どれだけ中

継地点をすぎればいいのだろうか、と少し苛立ち始めたころ、ようやく誰かがいる気配がした。そしてコールがやんだ。

「Hello, Can you hear me?」

やけに幼い子供の拙い英語が聞こえてくる。僕は言葉がでてこない。

「Are you still there?」

僕はカラカラの口で辛うじて言葉を紡ぐことに成功した。

「May I ask who's calling?」

受話器の向こうの子供はくすくすと笑っているのがわかる。

「You ask for a wake-up call for

7:00AM, daddy」

「..... Haruno.....?」

「Yeah, funny daddy」

けらけらと幼い僕が無邪気に笑っているのが聞こえてくる。背筋が凍るっていうのはこんな感じなんだろうかと他人事のように考えている自分がいた。電話限定のドリーム・シアターだろうか。ならば周りにスタンド使いがいる可能性が高いだろうと周りを重点的に探してみたが見つからない。

（これは一体どういうことなんだ？）

赤ん坊に毛の生えた程度のぎゅっと抱きしめたいくらいあどけないところが自分にもあったのかと他人事のように僕は考えていた。ころころと転がる子犬のような態度で汐華初流乃は父親と勘違いしている僕に電話を続けている。世界は自分を中心に回っていて、誰もが優しくしてくれると本気で信じ込んでいるような態度だ。

ドリーム・シアターでみた目のくりくりした悪戯好きそうな小利口で生意気そうな子供を僕は思い出す。育ち盛りで買ったばかりの服がすぐに着れなくなるからか、ぶかぶかの服を着せられていた。西も東もわからない小鳥のような声をあげる子供が受話器のむこうにいる。

考えてみても、ただでさえ幼少期の記憶はあいまいだということにこ

んな電話をしたかどうかなんてなおさらわからなかった。探りを入れてみようとは僕は会話を続ける。いつもと口調が違うと汐華初流乃は不思議がっている。向こうはイギリス英語でこちらがアメリカ英語だからだろう。

母からの愛情をエネルギー源として動く、小動物のように汐華初流乃は話し続けている。

何事も心得ながら白々しうらしく無邪気を装っているらしいこの子供が敵の間諜のようにも思えた。さんざん脱線しまくった後で、汐華初流乃はなんのようだと聞いてくる。

僕はなんとなく、最近はなにをして遊んでいるのか聞いた。汐華初流乃は父親の日記に落書きするのが好きだと答えた。時々アメリカにいく父親に拗ねているようで、その罰なのだという。こうすれば父親はいつだって謝ってくれて遊んでくれるというのだから驚きだ。DIOが一体なにを思い、なにを考え、僕を扱っていたのかいまいちよくわからない。

僕はなんとなく父親の日記を読んだことがあるか尋ねた。汐華初流乃は今までクレヨンで塗りつぶすことしか考えたことがなかったようで素敵なイタズラを思いついたという声で笑った。

やがて電話するのも飽きたのか電話からはなにも聞こえなくなっていました。しばらく待ってみたがなにも聞こえない。僕は受話器をおいた。

まわりを見るとチラホラ人がこちらを伺っているのがわかる。僕はそのまま電話ボックスをあとにした。

ステイツ・ワーキング

破壊力：なし

スピード：なし

射程距離：なし

持続力：5分間

精密動作性：なし

成長性：なし

私立s市公園にある電話線が繋がっていない電話ボックス。スタンド使いが近くにいる場合ベルが鳴り、その人間の人生における分岐点にいる平行世界の自分と電話が繋がる。そこでの会話によっては歴史改変が行われるが電話ボックスの中にいる人間だけは助かる。

アンダーワールド1

アメリカ合衆国では毎年160万人もの未成年が家出をしており、その多くは短期間で家に帰るものの、三分の一は最初の四八時間のうちに売春させられる。はじめて売春を行う時点の平均年齢は13歳である、と聞いたことがある。だから13歳にして初めて家出をすることにしたドナテロ・ヴェルサスが家から持ち出すために心血を注いだのは現金でも通帳でもなく銃だった。

なにせアメリカ合衆国は行方不明事件が非常に多い国だ。年間の行方不明者は約90万人、そのほとんどが子供たち。状況から判断して自発的な家出でないと考えられるものは約3万件。失踪した人物が危険な状態にあると考えられるケースが約12万件あるらしい。こういった行方不明者の大部分が子供で、計算上、アメリカでは1日に2000人以上の子供が、行方不明になっていることになるそう
だ。

アメリカで子供の行方不明者が多発する原因は、誘拐、家出ばかりではなく、家族による誘拐も多く、離婚が多いアメリカでは、親権調停の前に、あるいは親権を持っていない側の親が自分の子供を連れ去ってしまうというケースが多いのだそうだ。

ほかに、チャイルドポルノのために誘拐される子供も多い。このように、行方不明事件が多発する背景には、家庭の崩壊、倫理が働かなくなった社会など、現代が抱える矛盾があるという。知ったような口を聞くコメンテーターの発言が不快でドナテロはテレビを見るのをやめた。

アメリカの映画やTVドラマで、牛乳パックに行方不明の子供たちを捜す広告が載っているのをみたことがある人は多いはずだ。

その広告には、行方不明になった子供の写真、氏名、生年月日、身長、体重、髪と目の色、性別、最後に目撃された場所と時間が書かれている。ヴェルサスは義理の父親もきつとこの牛乳パックの広告を考案し、アメリカ法務省の協力を得て行方児童の発見活動を行なう非営利団体NCMECに届けを出すと知っていた。

ドナテロ・ヴェルサスは生まれてこの方不幸の連続だった。エジプトのカイロで連続女性誘拐殺人事件に巻き込まれていた母親が死んで10年になる。たくさんの女性を囲い込み子供を産ませて気まぐれに殺していた男は、ドナテロが3歳になったころにその場で殺されたという。

エジプト政府に保護された彼は、母親がアメリカ合衆国オレンジ州オーランド出身だったためにアメリカ国籍を与えられてアメリカ人になった。エジプトを旅行中に突然失踪して警察に届けを出していた実家に戻されたのだが、母親が既婚者であり本来の旦那との間に娘がいた時点で彼の家庭環境が劣悪になることは運命づけられたのかもしれない。

愛する妻の血をひいている一方で、妻を誘拐して無理やり孕ませた畜生の血も流れている子供。突然できた忘れ形見。旦那と姉と母方の親戚の感情は複雑怪奇なものとなった。衣食住は保証され、学校にも通わせてもらい、なに不自由無い生活が送れたがそれだけだった。ドナテロには愛情というものが向けられたことが1度もなかった。

義理の父親、あるいは義理の姉と同じ苗字を名乗ることは許されなかった。養子縁組を母方の親戚も義理の父親もしなかったのだ。よってドナテロは戸籍上は家族が誰もいない、空白だらけの身の上となった。

養育はしてくれるが家族になつてくれる人間が誰もいなかった。それは3歳から10年間蓄積されてきたささやかなものから大規模なものまでドナテロの性根をねじ曲げるには十分な歳月だった。

いつそのこと施設か教会に預けられた方がまともな生活を送れただろうが、ドナテロの周りには誰一人そう提案する人間はいなかった。それは愛情ではなく世間体と莫大な金のためだと知ったのは、家出を決意して金庫なんかをひっくり返していたときだ。

スピードワゴン財団というところからの基金だった。国際的な犯罪により犠牲となった母親、あるいは孤児になったドナテロに支払われていた。つまり金により有無を言わさず養育されてきたのだ。ふざけるなと思った。

そしてドナテロ・ヴェルサスは家出を決意する。ドナテロがいなくなれば金が入らなくなる。そうすれば間違いなくヴェルサス家の人間、あるいは義理の父親たちは血眼になって探すだろう。それでは困るのだ、絶対に見つからない方法を探さなければならぬ。だからドナテロは家出にあたり用意周到な計画を行った。

まず、義務と世間体だけで親でいようとするやつらを家族と考えるのをやめた。あれこれ指図ばかり、すぐあれば暴力、気に入らないことがあればすぐ怒鳴る親がいる家にはなるべくいないようにしはじめた。自分の家は、ご飯と寝る、風呂だけの空間と割り切った。学校が終わったら、すぐに家には帰らず、友だちの家や図書館、喫茶店で時間を潰す。

義父への言い訳は「勉強に集中したい」「図書館でたくさん調べものをして将来就きたい仕事を考えている」などなんでもでっちあげた。たまに古本屋にでも行って、好きなマンガを立ち読みした。

夜家に帰ったら、ご飯を食べて風呂に入って、すぐ部屋に入って寝る。早ければ21時に寝た。そして4時5時と誰よりも早起きして、親が起きるまでは家で過ごす。親が起きそうな時間になれば、外へ出て行って、また友だちの家や図書館、喫茶店へ。朝早すぎてまだ開いていない場合は、公園へ行ったり、コンビニでマンガを立ち読みして時間を潰した。

何かと否定しかできない親元にいたら、疲れ切ってしまうからだ。かといって金も社会性もある親という存在は非常に立場が強いので、まったく無視した行動をしたら、「出ていけ」だのと言って子どもが無力であることを思い知らせようとしてくる。中学生であるドナテロは親に依存せざるを得ない立場だった。親の機嫌を伺わないといけないからめんどくさいことこの上なかった。

親というのは、偶然の元でくつつかされた存在であって、敵であることもある。ドナテロにとっては不運にもそうだった。自分の身は自分で守るしかなかった。本来、子を守るはずである親が敵であるという現実こそが非常に強い害悪だったのだ。

今後の人生を決める、大きな選択として新しい環境を求めて飛び出

す、今の環境に耐える、どちらの選択をとるかによって、その人の人生を大きく左右する。このまま飛び出さずに辛い環境に耐えていたら、弱い弱い自分で物事を考えられない情けない人間になっている予感があつた。

「中学生なんだから今は勉強しな。」とか「社会に出たことのない甘い考えしかできない子どもが。」など、自分より少し長生きして働いている人たちから説教を受けてきたがなんでこんな長い間、自分の時間を奪われないといけないのか。

一番大切なのは、自分がこう生きていきたいと思う意志で、そこから自分の人生が決まる。周りの意見に流されて、何も考えずに年を食って、いつしか自分自身も周りの意見に同調しているほうが、よほど考えが甘いと言わざるを得ない。

中学生で家出したい。それはドナテロにとって自我の芽生えだった。自分の人生は自分だけのものであり、自分の人生は自分だけが決めていい。誰も味方になつてくれないならば、自分だけが味方になればそれでいい。

「オレはこんなところで終わらない！オレだつて幸せになる権利はあるんだッ！」

それがドナテロ・ヴェルサスの宣言だった。

完璧な家出をするために、ドナテロは自分に3つの規則を課した。ひとつ、犯罪を犯さない。ふたつ、家出していると誰にも言わない。みつつ、誰も信用しない。

隣の州の都会に出奔したドナテロは

さいわい体格に恵まれている。ドナテロを中学生と判断できる人間はいなかった。予め調べていた格安ホテルに問題を起こして休学になったから家族の勧めで旅をしていると話した。

もともと親からの愛情を受けずスレた子どもに育つたドナテロが紳士的で育ちがいい少年を演じるのは反吐が出るほど嫌だったが、連れ戻される訳にはいかなかった。罪を犯しても連れ戻されてしまう。「大人」というものを全く信用しておらず、また誰かから命令されたり説教をされることも極端に嫌つていたドナテロだが、新たな生活をす

る上で仕事を探すのはホテル生活が長引いて精神的余裕を消費しないためには緊急の課題だったのだ。

今までの不幸な人生の分、ハングリーさ、世の中への恨みと憎しみ、幸せを掴もうとする向上願望はとても強いドナテロはタフな少年だった。ただ理不尽なほどに不幸で間の悪い少年だった。

「ちくしょう、オレがなにをしたってんだ！なんでオレが盗んだと疑われんだ！」

ようやく住み込みのアルバイト先とホテルを確保したと思ったら、ウォルマートに潜り込んで数日盗み食いを繰り返した悪がきの模倣犯だと疑われた。さいわいアルバイト仲間が冤罪だと証言してくれたから警察に突き出されずに済んだが、1度でも疑われることはドナテロにとってはその町にいられないも同然だった。

「オレは負けねえぞ……絶対に……絶対にだ！オレは幸せになるんだッ！」

幸せになりたいと願いながら具体的にどうしたらいいのかわからない哀れな少年は叫ぶしかないのだ。疑われてはもういられない、と庇ってくれたアルバイト仲間だけに明かして、ホテルを引き上げたドナテロは次の町に行くべく駅に向かった。

格安ホテルのメモを広げて公衆電話から予約をする。わけアリ達が集うホテルは案外気安くOKしてくれた。前金で一括払いしてくれる成人男性に見えるドナテロはこういったホテルにとっては上客なのだ、この上なく。

「よし、いくか」

頭に叩きこんだ乗り換えと徒歩を駆使してドナテロは新たな拠点に転がり込んだ。また新たな仕事を探さなければならない。また1からやり直しである。ドナテロは舌打ちをした。

人にぶつかつた。

「あ、申し訳ありません。考え事をしていました」

ドナテロはすぐさま紳士的に謝った。

「まちなあ〜」

「ごめんなさい」

「だーかーら待ちなつていつてんだよお。髭生やしてるし髪伸びてるしわかりにくいけど……おまえ、ドナテロ・ヴェルサスだな？」

「誰のことでしょうか？」

「しらばっくれんなよ俺はよく覚えてるぜえ、ドナテロ様よお。D I Oが死んでからこつちは散々な人生送つてるつーのに能天気の家出なんかしやがってえ！ムカつくんだよお！」

ドナテロは殴られた。

「うっかり事件に巻き込まれて死んでもいいよなアゝ生きてつれもどせとは言われてるけど五体満足でまともな状態ではひとつことも言われてないもんなあゝ！」

ドナテロは男の影が伸びるのを見た。

「フッフッフッフそろそろいいかな？弱い者いじめ……大イイイ——好きッ大きい声じゃあいえねーがな……おれは弱い者をイジめるとスカツとする性格なんだ……フへへへ自分でも変態な性格かなアと思うんだがね……D I Oに雇われたせいでオレの顔も人生もめっちゃくちゃなんだよお……だからお前の顔も人生もめっちゃくちゃにしているよなあ？」

「だれだ、おまえっ」

ドナテロの声は明らかに幼くなっていた。

ドナテロ・ヴェルサスは生まれ落ちた瞬間から空条承太郎のスタープラチナにより解放されるまで肉の芽の支配下にあつた。よつてアレツシーのセト神で3歳まで若返つた場合、そこにいるのは高熱にうなされながらスタンドを無意識に暴走させてしまう肉の芽を植え付けられた3歳の子供である。

髪の毛を變形させて生成し、相手の脳に食い込むように打ち込まれた肉の芽は、実の息子であろうともD I Oに対してカリスマを感じるようになり、彼に従うようになる。3歳の子供にとっては自由意志はあつてないようなもので、本来あるはずの自分中心がD I Oと自

分中心の世界となる。

D I O がなぜ裏切る可能性のある人間でも反抗してくる相手でもない赤ん坊にまで植え付けられたのかは謎のままだ。心から D I O に心酔して従っている者達と比べると子供はその無邪気さによって信頼できないと考えていたのかもしれない。

肉の芽自体の栄養源は寄生対象から得ているため、常に記憶はあいまいでぼんやりとしている。放っておくと対象は脳を肉の芽に食いつくされて死ぬ。

「んん〜な〜んか違うな〜！それに気づくって、オレってエライねええ！フラフラで今にも死にそうなくソガキなんて、ぜんっぜん面白くねえ！よーし、もうちよつとだけ戻すかあ」

アレツシーはそう言っちょつとだけドナテロの年齢を引き上げた。具体的には肉の芽が抜かれてすぐくらいのころである。

「おれ…… おれ……… なんて、わすれてたんだ………」

次第に若返るために思考はまだ正常であるドナテロは肉の芽の影響から解放されて自我を取り戻して笑うのだ。

「おやじは……… D I O は……… ただの殺人鬼なんかじゃあない……… 吸血鬼だ……… 時間を止められるスタンドだ……… 天国……… そうだ、いつもおれたちはベッドの上で子守唄を聞いていた……… ！」

そこには羨望してやまない愛情がたしかにあったことを自覚した子供の歓喜があった。

「あいつらとは違う……… おれは……… おれたちは……… たしかにあいされていた……… D I O に……… 父親に……… あいされてたんじゃねえか……… ！」

肉の芽による歪んだ認知を愛情と錯覚する。10年間飢えすぎたものが初めからあって、すでに失われていたものだったという事實は、ドナテロ・ヴェルサスには致死量の劇薬だったのだ。

我ながら浅ましく感じるほどの歓喜である。動物的なむき出しの卑しさ、餓鬼のような貪欲さ。全身欲望でぐりぐりになりながら、ドナテロはその天啓に酔った。

「おやじに出来て…… おれにできないことは…… ないはずだ…… !スタンド…… おれにも…… なにか…… かならず…… なにもかもオレのためにあるはずのものが…… !」

ドナテロは生まれながらに自らの欲望に貪欲だった。他者を利用してでも成し遂げようとする野心があった。

ドナテロの脳裏にはD I Oからの電話をうけて日記帳に落書きすることをやめてなんて書いてあるか読もうとする一歳年上の兄がいた。腹違いの兄だった。一緒に読んでいたらD I Oが帰ってきて無理やり取り上げようとしたものだから日記帳を蝶に変えてしまった。

その日からD I Oの態度は急変し、兄は居なくなってしまった。あれがもしスタンドだとするならば、兄を庇おうとして見て見ぬふりをしていた血濡れの女と血みどろの世界とD I Oを出現させたあれば、夢ではなくスタンドだったのではないだろうか。

思い出せ、あの時D I Oはなんと言っていた？ 高笑いしてドナテロと兄を、ハルノを見下ろして、なんと言っていた？ さすがは我が息子と言っていないかったか!? 必要だと言ってくれていなかったか？ 思い出せ思い出せ思い出せ、あの時ドナテロはなにを願っていた？

D I Oに恐怖して過去に戻りたいと願ったはずだ。それは間違はなく父親であるはずのD I Oが吸血鬼だと知ったあの瞬間、女を食料にしていると知ったあの瞬間に戻ればハルノとドナテロは助かるという根拠もない自信があったはずだ。

どろどろに溶けていく理性と本能がかつて意味もない全能感に満たされていた自分を思い出させていく。あの時のドナテロ・ヴェルサスの生命は吸血鬼に養われていた細胞と同じように豊富で、旺盛で、貪慾であった。野獣が鶏でも貪るような意地汚さがあった。

人は身に病があると、この病がなかったらと思う。その日その日の食がないと、食ってゆかれたらと思う。万一の時に備えるたくわえがないと、少しでもたくわえがあったらと思う。たくわえがあっても、またそのたくわえがもっと多かつたらと思う。

かくのごとくに先から先へと考えてみれば、人はどこまで行って踏み止まることができるものやらわからない。その果てしない欲望こ

そがドナテロ・ヴェルサスの原点だったのだ。

「やっぱりこれくらい生意気なほうがいいッ！オレってばえらいねエ
〜」

アレツシーはぶつぶつ呟いているガキに笑うのだ。 13歳の精神が弱体化し、3歳と同じになれば無力化も同然だ。あとはいい感じにボロカスに痛めつけて連れ戻せばいい。楽観的にそう考えていた。

ドナテロが一目散に走り出した時、にやあという嫌な笑みをたたえたままアレツシーは追いかけはじめた。

「どっ、どっ？おじさん、だれ？」

ドナテロ・ヴェルサスは混乱していた。いつもの宮殿ではなくなんでも僕はこの様な所にいるんだろう？何で、僕はあるおじさんに追いかけられないといけないんだろう？

ぶかぶかの服を引きずって必死に逃げる3歳の幼児の脳裏で走り抜けるのは戸惑いと困惑、そして絶望感だ。目の前にいたはずの緑の目をした髪と頭が一体化している男が訳の分からない透明な生命体とこちらを見下ろしていたのを覚えている。怖くなって逃げたのを覚えている。

何故そんな物を着ているのか思い出せないが、なんとなく自分で着ていたような気もする。裾を踏んづけて何度も転びそうになりながら、必死でドナテロは走る。助けてと叫んでも誰もいないのか誰ともすれ違わなかった。

ドナテロたちの世話役にたくさん女性や男性がいたはずなのにだ。あの宮殿とは似ても似つかない質素な作りの廊下を走る。途中で窓から逃げようとしたが高すぎて届かない。両脇に扉が並んでい

るが、鍵がかかっているのか重くて動かす事も出来ない。

ただただ、心臓は早鐘のように鳴り響き、それがあのおじさんに聞こえるのではないかと思ひ、さらに激しく心臓がうつ。

「はあーはあーはあー」

どれだけ走つただろうか、とうとう突き当たりまで来た。必死で隠れる所はないかと探す。わずかに開いた扉があつた。体を滑り込ませる。誰もいない。

置きっぱなしの旅行カバン、口笛をふく女の人の声、ドナテロはとつさにクローゼットの中に隠れた。嬉しさのあまり涙が出て来た。まだ中に入ったままの荷物をかき分け奥の方に潜り込む。もちろん閉める事も忘れない。完璧だ。絶対に見つかる筈が無い。そう思ひ、息を吐こうとした、瞬間。

「いやああああッ！」

女の人の声が聞こえてきた。心臓が大きく跳ねる。おじさんが部屋に入ってきたのだ。女の人が酷い目にあっているのだ。悲鳴が鳴り止まない。ドナテロは耳を塞いだ。おじさんにバレませんようにバレませんようにバレませんようにバレませんように！！

ドナテロは息を殺す。じつとうずくまる。早く行ってしまえ、そうしたら逃げてやる、絶対にここから逃げてやる。少年の決意を嘲笑うかのようにクローゼットがあいた。

「みいつけたぜ、ドナテロ様よお〜〜！」

クローゼットから引き摺り出されたドナテロはさつと青ざめた。恐怖に染まった眼差しで、ただ一点を見つめる。そこにはAXと文字の刻まれた斧を振り上げている男の姿があった。不自然なまでに広がっている髪なめちやくちやに凹んでいる顔は、殺人鬼と化したピエロのように滑稽故に恐怖を引き起こす。斧が振り下ろされ、ドナテロは咄嗟に足をひっこめた。

「フフフフフ、逃がさないよお〜〜かくれんぼはもうおしまいだぜえ、ドナテロさまア〜〜〜」

絶望的な、処刑宣言が下された。

アレツシーはにやにやとした笑いでドナテロを見下ろす。サングラスの向こう側に透けている両目はどこまでも冷ややかだまるで、屠殺寸前の豚を見る肉屋のように慈悲がない。

「ぼ、ぼくを、ころすの……?」

「んひつ、どうしよっかなあ〜〜やめとこっかなあ〜〜! どうしようつかなあ〜〜」

斧が振り下ろされる。ざくり、と真横のフローリングが両断された。どさり、と荷物が瓦礫に変わる。

「そうだあ、命乞いしろよお〜〜ドナテロ様よお! う〜ん、俺様ってばやーさーしーい〜えらいねえ〜」

絶望が全身を回る。身をよじる事さえ出来ない。

「逆らうんじゃ、ねえ。ガキのくせに、むかつくぜ!!」

アレツシーの持つ銃が火を噴いた。

アンダーワールド2

「おんやあ?」

蜂の巣になったドナテロを想像していたアレツシーだったが、忽然と姿を消したドナテロに目を剥く。

「どこかなあ〜!どこいったあ〜!かくれんぼかあ〜?!」

クローゼットだったはずの場所がなぜか壁になっており、辺りを見渡してみるとさっきまでと部屋の間取りが違うではないか。おかしい、おかしすぎる。一体なにがおこったのかわからずアレツシーは混乱した。

ドアを開ける。広間で繰り広げられる、深夜までの狂乱のカラオケ合戦の余波が、畳や壁のどこかから響いてくるような部屋がある。鮮やかな服を着て飛び回る少女のような明るさと新鮮さがあるホテルが出現した。さっきまでは格安ホテルだったというのだ。

「ドナテロのやつう〜くなにしやがったあ〜どこだこ〜く〜!」

制服がよく似合うスマートなドアボーイがいそうだ。暗い廊下の奥に羊の剥製やら、埃だらけの毛皮やら、黴臭い資料やら、茶色く変色した古い写真やらが積みかさねてある。果たされざる想いが乾いた泥のように隅々にしつかりとこびりついているようなホテルだ。

全ての家具は色褪せ、全てのテーブルは軋み、全ての鍵は上手く閉まらなかった。廊下は磨り減り、電球は暗かった。洗面台の栓は歪んでいて、水がうまくたまらなかった。

ロビーは体育館みたいに広く、天井は吹き抜けになっていた。ずっと上の方までガラスの壁が続き、そこから陽光が燦々と降り注いでいた。フロアには大きなサイズのいかにも高価そうなソファが並び、その間に観葉植物の鉢が気前よくたつぷりと配されていた。

人々の思いや時の残滓が、その床の軋みのひとつひとつに、壁のしみのひとつひとつに留まっている。

本館のロビーは広々として天井が高く、ほの暗く、巨大で上品な洞窟を思わせた。ソファに腰をおろして何ごとかを語り合っていたで

あろう人々の声すら聞こえてきそうだ。臓腑を抜かれた生き物のため息のようにうつろに響いた。

カーペットは厚く柔らかく、極北の島の太古の苔を思わせた。それはアレツシーの足音を、蓄積された時間の中に吸収していった。ホテル全体が何かしらの呪いで大昔からそこに縛りつけられ、与えられた役割をきりなく繰り返している一群の幽霊のように見えた。

広々とした廊下に人の気配はない。どこまでも静かで、どこまでも清潔だ。一流のホテルらしく、隅々にまで気が配られている。食べ終わったルームサービスの食器がそのまま長くドアの前に放置されているようなことはない。エレベーターの前の灰皿には吸い殻ひとつもない。花瓶に盛られた花はついさつき切られたばかりという新鮮な匂いを放っている。

「どーこーだー！でてこいー！」

叫んで回っていると、ようやく足音が聞こえた。アレツシーは斧を振り上げた。そして、後ろの部屋と廊下を隔てている壁を力任せにぶち壊す。煌煌とした光が部屋の中に飛び込む。

「あたりいい！逃がすかよ〜〜」

ドナテロは影から逃げるように走り出す。

「逃がさないぜ〜〜」

間髪入れず機関銃の乱射をかます。軽トラックが羊を追いやるように撃ちまくる。炸裂音と、葉莢の落ちる音、硝煙が視界を覆い隠し、感覚を麻痺させる。束の間の悦楽に酔い、目を開ける。硝煙の隙間から逃げるドナテロが見えた。

「お楽しみはこれからだねえ〜〜」

またかよ、とアレツシーは舌打ちをした。

ドナテロは追い立てられるように、その部屋へ入った。扉に鍵はかからない。通路が塞がれている。むやみやたらに銃弾がばら撒かれ、行手を阻まれてはほぼ選択の余地なく、追い込まれる。

「ようやく会えたねえ〜〜、ドナテロ様よお〜〜！かくれんぼは終わりがあ〜〜！」

にやにやにやとアレツシーは笑う。

恐怖の方が言葉よりも先にくる。ドナテロは一言も紡げない。震えるばかりだ。追い掛け回された記憶が、体を縛りつけ、それは心さえも束縛する。それでもドナテロはいった。

「おじさん……………にげたほうが……………がいいよ……………」

「あくん？」

「みなかった……………の……………？たぐさんの……………ばくだん……………」

「爆弾だあ？」

「……………まえの……………ほてるなんだ……………てれびでみた……………どおんて……………どおんて……………こわれるんだ……………おじさんも……………ぼくと……………ここでしぬの？」

しぬの？ドナテロの言葉がプレッシャーとなつてアレツシーを圧倒する。汗がどつと噴き出す。子供になる、若返る。それでも、何か変わらず残るものがあるのだろうか。それとも、この餓鬼はこの歳の時に既に、このプレッシャーを持つに足る体験をしていたと言うのだろうか？

「なあ、ドナテロ様よく。もう一度だけ言う。こつちに来い。そうしたら助けてやる。でなけりや、お仕置きだ。言ってる意味が分かるよな、ドナテロさまよおくく」

銃口が火を噴き、灼熱した銃弾が飛ぶ。床に落ちる、鉛の音をとても遠いものとして認識しながら、その光景をドナテロは見ていた。

「きこえないんだ？かちかちつて……………コチコチつて……………きこえるのに……………」

アレツシーはたらりと汗が流れる。そういえばコードや黒い機械がたくさん並んでいたような気がする。

「や、やめてくれくく、俺に近づくなあくく。なんてな」

怯えたアレツシーの声が嘲るものになる。

「お前は覚えているよな？俺がここで何をしていたのか。それとも餓鬼になつちまつて全部忘れたか？なあ、ドナテロ様」

「おじさん……………しぬんだね……………ぼくと……………ここで……………いっしょに……………」

にまり、とドナテロは笑う。ただでさえ、幼い顔が不自然に悟つた

ような顔をして笑うものだから歪んだように見える。本人に言わせれば、嬉しさのあまりの笑みが満面に零れた、とでも言う所だろうか、見る者には恐怖しか与えない。

「どこから撃つてやろうか？右足、左腕、手の平でもいいぜ。時間はまだまだたつぷり在るんだ」

愛用のマシンガン―通称サイドワインダー。1980年代にアクア社から製造されたものだ。連射速度は毎分約900発。セミオートとフルオート選択でき、銃身が短いため、楽に持ち運びが出来る。

その大きさからは考えられないほどの威力を持つ。黒い銃口がゆらゆらとさ迷うように揺れている。別段アレッシーが震えている訳ではなく、単に標的の恐怖を煽るためにしているだけのことだ。相手が無力な子供だからこそ、こんな鬨るような真似が出来る。

「反抗的、だねえ〜。だからと言って怯む俺じゃあないよ。餓鬼が大人に勝てると思ってるのかよ!!」

アレッシーがドナテロを蹴り飛ばそうとしたその刹那。

「ぼくと……おじさん……どつちがいきのこるか……しよ
うぶだね」

爆発で起こった熱気で焦げる。地響きがして、黒煙の柱が立ちのぼった。重々しい響きとともに、黒い煙が一すじ薄くなびいていく。炎を噴く。さらに巨大化して、天に向かって猛々しく咆えていた。

百のマグネシウムを瞬間眼の前でたかれたと思った。それと、そして1/500秒もちがわず、自分の身体が紙ツ片きれのように何処かへ飛び上ったと思った。ガスの圧力で、眼の前を空のマツチ箱よりも軽くフツ飛んで行った。それ切り分らなかつた。どの位経たったか、自分のうなつた声で眼が開いた。

ぐわうんと自身を破壊して、炎と猛炎が、割れた口から、一丈も噴騰した。火と、焼け土とが、滝となって、ざつと落ちてきた。

一瞬何が起こったのかわからなかつた。ちょうど雷のように、光と音がほんの少し違和感をなしてずれたような感じだった。向こうの角に見えるビルの上が明るくなり、急に火が出て、鈍い音と共にガラスの破片がスローモーションで闇に降りそそいだのだ。

ほんの数秒後に、眠っていた街のすみずみから人がわらわらとどび出して来てとたんににぎやかになり、遠くからパトカーや消防車のサイレンの音が近づいてきた。

不謹慎だけど、花火みたいだった。それがドナテロのみた最後の記憶だ。

「ああ、そうか…… オレは賭けに勝ったのか。へへ、ざまあみろ」
格安ホテルの通路でなぜか満身創痍、かつボロボロな状態でドナテロは目を覚ました。男が気絶したことで子供になってしまうスタン・ド能力は解除されたらしい。

おそらく肋骨をはじめとしたあらゆる骨や筋肉が傷ついているに違いない。どこか出血しているのか、どんだん血の水たまりは広がっていく一方だ。少し離れた場所には砕けた斧と暴発したマシンガンと共に転がっているアレツシー（なおドナテロは名前を知らない）がいる。

生きているのか死んでいるのかはわからないが、激痛を堪えながらもふらふらとドナテロは体を起こした。口を切っているのか生温かな鉄の味がする。そして壁をつたいながらエレベーターに向かって歩き出した。

「…… スタンド…… そうか…… これがオレのスタンドか…… オレだけのスタンドかアツ…… ! 手に入れてやったぜ、親父や兄貴が持ってたスタンドをツ…… オレは手にいれてやったんだッ！」

はつきりと自覚したからだろうか、その目にははつきりとスタンド像がうつっていた。目元にパイプのような器官が付いている以外は、鼻や口などの顔の部位が無い人型のスタンドだ。こちらを心配そうに見つめていると思ったら、口もないのにいきなり喋り始めたではないか。しかも本体に直接触れないのにこちらを気遣うような仕草をしてくるものだからドナテロは面食らった。

「大丈夫カイ、ドナテロ…… ハヤク救急車ヲ呼ボウ」

「—— ツてめえ、喋れるのかっ!？」

「そんなコト、些細ナコトダ…… ドナテロ…… 君がコンナトコロデ死ヌヨリ遙カニネ」

本来ならば気絶してもおかしくない重症なのだが10年間求めて止まなかったものを突然手にすることになった高揚感によるアドレナリンがドナテロから正常な判断を完全に奪っていた。

「笑えるぜ…… スタンドに心配されるだ」と

「イツダツテ心配シテイタ…… イツダツテ傍ニイタカラネ」

「バカ言うんじゃねえよ、この10年間の不運はだいたいてめえのせいじゃあねえか」

「ソレは違ウ…… ダンジテ違ウ…… 君ガキツカナカツタからだ」

「無茶いうんじゃねえよ…… あの気持ちわりい肉の芽? あんなん植え付けられて脳みそ吸われてたんだぞ。覚えてるわけねえだろうが」

「其れもソウカ」

「つうか喋れるなら教えやがれ、おせえんだよ」

「必要トシナカツタのは君ダロ?」

痛いところをつかれたドナテロはガシガシと頭をかいた。この10年間周りを求めるばかりで自分で自分を求めなかったのは事実だからだ。とりあえずあのおっさんには感謝しなければならぬ。

あの頃の自分にならなければ色んなことを思い出すことがないまま屈折した人生を歩んでいたに違いなかった。暗黒時代ともいうべきこれまでの不運たちは間違いなくスタンド能力の無意識の暴走であり、今この瞬間からドナテロは制御が可能となっているのだ。

ドナテロ・ヴェルサスがDIOのスタンド能力覚醒に伴い手に入れた能力は「地面の記憶を再生すること」。

地面が記録している過去の出来事を、地面から掘り起こして再現する。

再現された記憶は、毎回必ず同じ結末を辿り、変わることは決して

ない。例えば墜落した飛行機の場合は予定時刻を迎えると必ず墜落する。しかし、「墜落事故に生存者がいる」ような場合でも再現されるので、生存者がいた座席に座れば事故を回避できたりする。

また記憶から蘇った人々は、なぜか自分がどんな末路を辿るのかを知っているらしい。あくまで「再現するだけ」なので、本体自身にも操作が不可能という、自動操縦型に近い挙動を取る。通りで無意識に発動すると大惨事になるわけだ。

直接戦闘力は無いが、地面から呼び起こした空間から逃れようとする者がいると妨害をするようで、うっかり本体まで巻き込んでいたのかもしれない。

基本的に「再現された記憶」の結末は誰にも変えることはできないが、その記憶に何らかのアクションを取ることは可能だと今回よくわかった。

今回の場合は立替前のホテル爆破の記憶をこのスタンドが掘り起こしてくれたのだ、ドナテロを助けるために。

ついでに例えば冤罪事件の真相は無意識のうちに発動してしまったスタンドがウォルマートで3日不法滞在と万引き、無銭飲食をした事件を掘り起こして再現したのである。やはりだいたいこいつのせいだとドナテロはスタンドを睨んだ。

有効活用するためには滞在する予定の街や場所ので起こった出来事や発生した日時・時間を記憶しなければならない。再現したい内容を選んで地上へ具現化できるようにならなければならない。

「新聞が読みてえな」

「退院シテカラダ」

「入院は嫌だ、場所がアイツらにバレちまう」

「血みどろデ滞在スル気力」

「ちっ、めんどくせえ……！病院再現は出来ねえのかよ」

「無理ダ、ココにタツテイタ記憶はナイ」

「使えねえな」

「使いコナスのは君ノ仕事だ、ドナテロ」

ドナテロは舌打ちをした。宿泊予定の部屋にたどり着くと最後の

力を振り絞って電話をかける。

あの日、肉の芽をとつてくれた男が怯える自分に身分を明かしてくれたことを昨日の事のように覚えている。旅の目的、DIOを、自分の父親を殺さなければならぬ理由。

信用出来ないなら待つてると男はなんの躊躇もなくドナテロの前で電話をかけていきなり渡してきたのだ。向こうには今にも死にそうな女の声があった。日本語はてんでわからなかったが、英語はぎりぎりわかった。母親が死ぬのだという男の話は本当だった。

「繋がらなきや、それまでだなア」

ドナテロは電話が繋がるのを待った。あの時とは違うコール数と待機時間。祈りは通じた。

「MOSI MOSI」

あのとときから少し変わった女性の声がある。ドナテロは空条承太郎に変わってくれと口火を切った。

まさか数時間以内にドクターヘリが飛んできてこの国最高の医療を受けることが出来た上に連れ戻されるくらいなら死んでやると大暴れしたらテキサス州ダラスにある本部にまで連れて行ってもらえるとは思わなかったのだった。

「所デ名前ハそろそろ考エテクレタ？」

「うるせえよ、てめえのせいでオレがどんだけひでー目にあつたと思つてやがる。こっちはとんだ暗黒時代をだな」

「暗黒時代…… 時間ジャナイ空間ダ、暗黒空間ダ」

「は？なにいつてやがる、おいまで、まさかこれで決まりとかいうんじゃねえだろうな？やめろ、おいやめろ！やめろっつってんだろぅが！」

リキエルとウンガロ

リキエルは生まれてからずっと奇妙な飛蚊症に悩まされていた。視界をちらつく細長い棒状の体をもち、高速で空中を移動する生物たち。サシガメのような吻と眉間に顔みたいなのが生えた足の長いトカゲかサンショウウオのような見た目の生き物。誰も目視できないと知ってから、ずっとリキエルはこの正体不明の生物に振り回されてきた。

高速で動き回っており肉眼で捉えるのが難しいといつらは、一般的な飛蚊症でみえるものとは違うらしい。眼科で異常なしと出てからリキエルの地獄は始まった。

こいつはいつも人間のまわりを飛び回っている。温血動物の体温を奪い生体エネルギーとして活動する。奪う際は体に触れないので、体温を奪われた動物はその自覚はない。リキエルがそいつらの存在に気づいていると認識されてしまったようで、纏わりついてくるようになってしまったのだ。

人間、著しく体温が低下すると身体に支障をきたす。特定の部位の熱を集中的に奪わせる事で筋肉を操ったり、病気を引き起こす事が出来るようで、リキエルはその被害を被ってきた。

やつらからすれば、固まってしまいうりキエルは格好の獲物だった。目元の筋肉をやられるとまぶたが上がらない。体が震える。なんてことはよくあった。悲惨なときはうっかり口にいれるやつを見た事があった。腎臓や肺、甲状腺を食い荒らしたあげく脳幹をやられて即死もあったのだ。

それがスカイフィッシュ、通称「ロツズ」としたのはテレビからだ。

ロツズは未確認生物でありスタンドでは無い為普通に各地を飛び回っている。不幸にもロツズはリキエルの住んでいるところが分布域だった。

それは1995年、ビデオ編集者のホセ・エスカミラ が、仕事の中にビデオ映像をコマ送りすることによって発見した。ビデオカメラ

ラや写真には写るが、実際に捕獲された報告が無いことから話題となった。すでにリキエルは7歳になっていた。

ロッズの長さは数c mから2 m。たまに全長約30 mのやつを見た事もあった。

リキエルはロッズの生息域から逃れるため隣の州にうつるようになり、夜遅くまで帰らない日もでてきた。次第に素行が悪くなり、不良仲間ができた。

学校にもいつてはいたが、日によっては大群が押し寄せてくることもあり、生徒たちが平気な顔をして笑うのを信じられない顔をして見ていなくてはならなかった。集中力なんてあつてないようなものだった。

体に侵入されないよう気を張っていなければならぬテストの日なんか最悪だった。笑いもしない、緊張してばかりの生活はやがて学校、私生活にも及び、ろくに睡眠がとれなくなっていく。ますます周りはリキエルを遠ざけた。11歳だというのにリキエルは学校に行きたくなくなっていた。

ある日、不良仲間とバイクに乗っていたとき、ロッズが仲間の口に飛び込んで脳天を貫通する瞬間を見てしまったリキエルはどうとう気絶した。

パニック障害を発症した瞬間だった。人生に絶望しており、ネガティブな思考に支配されていた。

「なるほど、それが君のいうパニック障害のきっかけであり、原因だと」

ニルス・クローグ医師は聞いた。

「……はい」

なんの意味があつてカルテにある症状を復唱させるのかりキエルにはわからなかった。

この男はデンマーク出身の医者で精神科医。パニック障害について心因性という常識に脳の機能障害という説をぶちあげて薬物治療と心理教育を伴う療法で成果をあげてきた。スタンド開花にともなう精神疾患に対する経験がある。論文発表に熱心でよく自宅に引き

こもる欠点があるらしい。ちなみにこれは待ち時間中に看護師から聞いたことである。

「パニック障害……」

「そう、パニック障害」

「オレの心が弱いから……みんなそういつて薬をくれたんだ……よくならないからオレはダメなやつだとばかり」

クローグ医師は首を振った。

パニック障害の最初の症状は、突然の動悸や呼吸困難、発汗、めまいなどの身体症状とともに強い不安や恐怖感を伴うパニック発作。

パニック発作自体は、多くの場合20〜30分くらいでおさまるが、何回か繰り返すうちに、また発作を起こしたらどうしようという、パニック発作に対する強い恐怖感や不安感が生まれるようになる。

逃げ場のないような場所でのパニック発作や、発作を他人や大勢の人に見られることの恥ずかしさといった不安や恐怖を生み、大勢の人が集まる場所や、過去に発作を起こした場所を避ける行動をとるようになる。

「リキエル君はパニック発作と予期不安、広場恐怖という特徴的な症状がある。この3つの症状は、悪循環となってパニック障害をさらに悪化させる。そのさなかにあるんだ、君は」

このパニック発作は、死んでしまうのではないかと思うほど強く、自分ではコントロールできないと感じ、また発作が起きたらどうしようかと不安になり、発作が起きやすい場所や状況を避けるようになる。

とくに、電車やエレベーターの中など閉じられた空間では逃げられないと感じて、外出ができなくなってしまう。突然胸が苦しくなり、鼓動はまさに「早鐘を打つ」状態。冷や汗で背中はぐっしりする。

死んでしまうかも。そんな不安に襲われながら救急車で病院に運び込まれるけれども、どこを調べても体には異常はなく、そのうちに、あれほど苦しかった症状が溶けるように消えている。そんな発作を何度も繰り返し不安はつのるばかりなのに、誰もわかってくれない。

「パニックは死の危険から生き延びるために準備されている反応だ。火事や地震など、突発的な生命の危機に直面した時、多くの人はパニック状態に陥る。鼓動が早くなり、血の気がひいて冷静に物事が考えられなくなつて、大声で叫びだしたいような気分を襲われる。胃の中のものを吐いてしまうこともある。じつとしていられなくなり、やみくもに走りだすこともある。こうした反応はいずれも、敵や災害から逃げるために有利なもので、体に備わつた生き延びるためのプログラムだ。ところが人によつて、なんでもない時にパニック状態のような反応が起きることがある。命の危険がないのに、まるで命が脅かされているような不安や恐怖を感じ、体にもパニック状態でみられるような症状が起きるんだ。誤作動なのだ、脳の」

「脳の誤作動……？」

「脳が誤作動を起こすものだから、何度も繰り返す。はじめは心配していた家族や友人や職場の人たちも、どこにも異常がないとわかるとだんだん「またか」「気のせいなのに大騒ぎをする」といった顔をするようになる。まるで狼少年だ。本当はとても痛くて苦しくて不安なのに、誰からも理解されないことは、つらいことだ。だが、私に言わせれば100人に1人は一生のうちに発症するんだ。君は早かつただけだ」

100人に1人？リキエルは信じられなかった。

「まず、薬物による治療の目的は、パニック発作を起きなくさせることが第一目標で、次いで予期不安や広場恐怖もできるだけ軽減させることだ。完治じゃあない。それだけは頭に入れてくれ。ただ、薬に頼らず気持ちだけで治すというのは得策ではない」

リキエルは薬物治療を始めた。

「薬が効き始めて発作が起こらなくなつてきただろう？そろそろ苦手だった外出などに少しずつ挑戦することも治療の一環だ。ただ、無理は禁物だから医師やカウンセラーと相談しながら、一步一步ゆっくりと前進していくつもりでとりかかってくれ」

リキエルはにわかには信じがたかつた。処方されてきた薬がどんどん減らされ、目的を説明されるだけでなく、今まで以上に会話が多

くなつたのだ。調子が良くなつたのは認めるが、それはロツズがいな
いからにすぎない。生息域に入れば、またパニック障害は再発するだ
ろうとリキエルは思っていた。

「なにをあたりまえのことを言つとるのだね？わたしはパニック障害
は脳の不安機能の障害という立場の人間だ。療法がほかと違ってあ
たりまえだろう、わたしは心因性だとは微塵も考えてはおらんから
な。気に入らないなら変わつても構わんが、せっかくスピードワゴン
財団のおかげでタダなんだからやつてつたらどうだい？」

普通医者は確定口調で話さないものだが、病院勤務ではないからだ
ろうか。クローグ医師はおどろくほど決めてかかっていた。

「ほんとうに……ほんとうに治るんですか……先生」

「そりゃ君の努力次第だがね、できる限りのことはするよ。何度もい
うがパニック障害は勘違いと思ひ込みが悪化させるんだ。この病は
君自身の性質からくるものであり、奇妙な訳の分からない事件による
ものでは無いのだと認めることから始めなければならぬ」

「いきなり言われても……信じられない……」

「だから君の努力次第だと言つたんだ。君はまずその未確認生命体が
見えるという中途半端に覚醒している能力を自覚しなければならぬ
い」

「えっ」

「さあ、ロツズの生息域にいくぞ、リキエル君。とりあえず不安に立ち
向かう心理教育が完治の近道だ。だから君はスタンドを使いこなし
てスタンドのせいじゃなく自分が原因だと気づいて立ち向かうこと
が出来れば完治の糸口が掴めるはずなんだ。がんばりたまえよ」

円筒形状の細長い胴体の両側にひらひらとしたヒレ状の器官がつ
いており、高速で空を飛ぶ魚に例えられる未確認生命体、ロツズ、ス
カイフィッシュ もしくはフライング・ロツズ。

このスカイフィッシュを発見したのは、ビデオエンジニアのホセ・
エスカミラー 氏で、1994年からスカイフィッシュの研究を行つ
ていた。現在でも、スカイフィッシュといえばホセ・エスカミラー氏

で、スカイフィッシュ研究の第一人者だ。

スカイフィッシュのもつとも有名なビデオは、メキシコのサン・ルイス・ポトシ近くの熱帯雨林の中の世界中の冒険家を魅了する世界最大の豎穴にある。

それが「ゴロンドリナス洞窟」。世界中から多くのスカイダイバーが集うメツカにもなっている。別名を「The Cave Swallows」とも呼ばれており、ツバメの地下室と言われる通り、何千羽というツバメが群れを成し、朝には一斉に飛び出し、夕刻には再び戻ってくる光景が見られる。

アクセスには小さな田舎町アキスモンとなっていて、メキシコの田舎町としても楽しめ、お土産として広場で刺繍を施した民芸品が売られている。洞窟の高さ約370m、直径は55mという東京タワーがすっぽり入る大きさ。ここで撮影されたものだ。

地面にぽっかり口を開けたこのゴロンドリナス洞窟は、深さが370メートルもあり、多くのベースジャンパーが挑戦しており、その模様を多くの映像に残されている。そんなベースジャンプの映像の中にスカイフィッシュが写り込んでいるものがある。ただし、ふつうに再生しても、それはただのベースジャンプの映像にしか見えず、スカイフィッシュを確認するにはスローで再生する必要がある。

スカイフィッシュは肉眼で見る（捕らえる）ことが出来ないといい、それはあまりにスカイフィッシュの動きが速すぎるためだと説明される。ビデオをスロー再生にしないとスカイフィッシュが写り込んでいるかどうかさえ判断できないのはこのため。

スカイフィッシュの大きさは数センチから2メートル、飛行速度を時速300km。大きさはともかく、時速300kmという速度は、恐ろしく速いことは疑いようがない。仮にこの時速300kmが本当だとしても、肉眼で見えないというのはちよつと解せない説明だ。

また、ビデオを見る限り、ほとんど速度を変えず一定の速度を保っているようでしたので、この洞窟内もUターンするとき以外は時速300kmを保っていたことになる。

洞窟内の一番広い地点の直径が130メートルとなかなかの広さ。

時速300kmで飛ぶ生物が棲息するには恐ろしく狭い空間だ。というのも、時速300kmとは1分間に5キロメートル、たったの1秒間でも83メートル進む速さで、つまり、洞窟内の一番広いところでも1.5秒間隔でUターンしまくっているということになる。

スロー再生でもほとんど減速なしにヘアピンカーブを描きながらUターンしている。これは物理的に考えて不可能。だからこそその未確認生命体である。

高速移動中の人工構造物への衝突の場合は小鳥程度の大きさであつても非常に衝撃が大きく、大きな事故へと発展する可能性がある。飛行中に衝突することもあり、小型の鳥類であつても高速で飛行する航空機にとつて衝突時の衝撃は大きなものとなり、最悪の場合は墜落に至るケースもある。飛行機でこれなのだ、人間だつてダメージをうける。

「君はここまで独自にロッズについて調べあげているじゃないか、なぜ恐れる?」

「…… 知つたら知つたで恐ろしくなつた」

「今まで生き延びてきたのに?」

「あんたは見えないからそんなことがいえるんだよ、先生」

リキエルは苛立ちながら言った。

「危ない、伏せろ!言つてる傍から!」

弾丸のような勢いでタツクルを仕掛けてきたロッズから身をかわしたりリキエルは、ぼうつとしてしているクローグ医師の白衣を引っ張つた。

「心配には及ばん」

「…… ロツズが避けた……!?!」

なぜかロッズはクローグ医師を避けて通過しようとした。クローグ医師は一瞥するなり、背後からなにかの半透明ななにかが見えた。四肢を黒い拘束具でガチガチに固定された岩のような男だった。それはままたまならない腰を落としてがちちりと受け止める。そのまま豪快な振りぬきでロッズを地面に叩きつける。そこにいるのはバードストライクじみたロッズの遺体だ。

「あんた、一体なにを……. というかロッツズが見えてるのか」

「いや、見えたのはこれが初めてだ、リキエル君」

「うそだろ、あんな的確に躲すなんて」

「それはたんなる経験だ。あとはロッツズに対する君の知識によるところが大きい」

「……. つまり、なにがいたいんだ？」

「これは君のおかげであり、君のせいでもあるということだ。この一面のロッツズたちは君が肉眼で見ている範囲でしか視認出来ない。君は他人にもロッツズを見せることができるようになっていてということだ」

「そんな馬鹿な……. 」

「簡単なテストをしてみよう。リキエルくん、目を閉じたまえ」

リキエルは言われるがまま目を閉じた。

「目を開けたまえ」

目を開けたリキエルの前には先程撮影したばかりのポラロイドカメラがあつた。

「右が閉じた後、左が開けた後だ。ちなみにデジタルカメラの連射を見てみるといい。ロッツズはかわらず存在している」

「……. 本当だ。考えたこともなかった……. どうして」

「何度も言うが経験だ。スタンド能力とはいわば超能力だ。君は明らかにロッツズと波長があっているのだから、有効活用すべきだ。ちがうかね？」

殴りかからんばかりの勢いで突進してくるロッツズたちにわあわあと言いながらリキエルは避けた。暴れ馬の如く突っ込んでくるロッツズたちを医師は粉碎する。しかしなお傷を追った猪のように捨て身で突き進む。

「私になにかいうたびにこれだな……. ロッツズたちによるいやがらせかな？」

「いや、見えてるとわかったとたんにもこうなんです」

「君、無意識のうちに攻撃しろと命令でもしてるんじゃないかね？」
「えっ」

「ものは試しだ。止まれとか落ち着けとか傍に近寄るなどか言ってみたまえ」

「はあ」

リキエルはロツズたちを目視したまま止まれと命令してみた。隕石のような勢いで飛んでいた未確認生物はぴたりと止まった。絶句するリキエルに医師は笑うのだ。この日からリキエルはこの洞窟に何回もいき、ロツズたちに命令できるよう練習するようになり、並行してパニツク障害の治療も行うことになったのだった。

ウンガロの周りでは現実と空想の違いが理解できない子供が多かった。たとえばベランダで「僕は鳥ポケモンだ、空も飛べるんだ」と叫んで飛び降り、子供が死んだ。しかも同じ事件が5件も起きた。ベランダは立ち入り禁止になった。いずれも4歳〜7歳の子供だった。大怪我したものの、命に別状は無く、助かった子供もいた。

あるいはポケモンごっこと称して子供同士が喧嘩というにはあまにも野蛮な噛み付く、殴るはなんでもありの乱闘が度々起こるようになった。最終的には子供が子供を無理やりダンボールの中に入れてようとしていたり、あるいは自分から入ろうとしていたりして窒息死したあたりから周りからポケモンというコンテンツ自体が白い目で見られはじめた。

施設ではポケモンに関するあらゆるものが禁止になったが、いつの間にか破棄するまでにグッズが消失していた。職員の誰かがポケモンを敵視して捨てたんだろうということでも誰も気にしなかった。

ウンガロが小学校にあがっても同様の事件は連鎖的に続き、配給会社を訴える人間がではじめた。今度はポケモンカードのレアカード（生産数が少なく入手が困難なカード）、あるいはゲームソフトが無くなる事件が頻発した。

奪われたとして、奪われた子供の兄がカードを奪った子供を射殺したのだ。モンスターボールを模ったラバー製の玩具で遊んでいた所、

中に入ろうとするあまり誤って飲み込み、喉を詰らせて窒息死したこともあった。

世界各国でのポケモン人気が高まっていた頃の事件だったために注目を集め、ニュースで取り上げられた。ウンガ口の町は事件が頻発していたために大騒ぎになったのだった。

1番新しい事件は小学校の同級生が「オレはピカチュウだ。充電しないと電気ショックがうてない」と言って針金をコンセントの穴に入れて気絶したやつだ。命に別状は無かったが、同様の事件の発生を防ぐためアメリカ全土で報道された。

他にも似たような事件はあったのだが、アメリカ全体で見ればせいぜいよくある不運な事故である。それがその州のその町のウンガ口の生活圏内に限られて何十倍、何百倍となれば目につくのも当然といえた。

気づいたらポケモンという存在自体がウンガ口の周りから失われていた。魔女狩りが始まったのだ。ゲーム脳だとかいう世迷言を本気で信じている人々が必ず例にあげるほどの騒ぎになったものだから、町自体がポケモンというコンテンツから離れるようになってしまったのだ。

そして、ウンガ口の周りでアニメやゲーム、漫画が流行る度に現実と妄想の区別がつかない子供、大人が溢れかえった。

その度に町の人々はサブカルチャーを敵視して追い出しにかかった。施設で暮らしているためにそれらが気軽に手に入らないウンガ口はその度にざまあみろと思っていたのだった。

誰もが妄想と現実がつかなくなる精神障害になることを恐れて、引越したり、サブカルチャーや芸術といった分野を露骨に避けたりするようになった。映画館や本屋、ゲーム屋が潰れた。娯楽がなくなった町は若者が減り、年寄りばかりになり、露骨に過疎が進んだ。ウンガ口が小学校高学年に入る頃には、だいぶ周りはいかれた緊迫感があふれる息苦しい街になっていた。

ウンガ口は気にしなかった。人々に希望を与える絵画やコミック等のキャラクターを嫌悪していたからだ。もつとも決して保守的な

思想ではない。ただただ単純に気に食わなかったからだ。

ウンガロの世界は生まれた時からこんな感じだった。川と小舟にたとえていうならば、川に浮かぶ小舟は、上流から下流へ、やがて海へと流されていく。

それが、生きている時間だ。小舟は事故で難破して、川の淀みに入ってしまった。海へ向かうことも、もちろん川をさかのぼることもできず、浮かぶでも沈むでもなく、ずっと同じ場所にある。そこにあるのは慢性的な絶望だ。

親を知らず、友達を知らず、好意的に見てくれる人間と巡り合わなかったのは不運といえたが、ウンガロはそれに対して世界を憎んで下から引きずり落とすことに注力する性質だった。

ささいなことから頻繁に学校や施設、近所から存在を否定され続けた結果、少年は事実上息を引き取ったのだ。その存在の外様だけはおろして維持されたものの、それも半年近くをかけて大きく作り替えられていった。体型も顔つきも一変し、世界を見る目も変わった。

吹く風の感触や、流れる水音や、雲間から差す光の気配や、季節の花の色合いも、以前とは違ったものとして感じられる。あるいはまったく新規にこしらえられたもののように思える。ここにいるのは中身を入れ替えられた、ウンガロと便宜的に呼ばれている容器に過ぎない。

世界中が動きつづけ、この町だけが同じ場所に留まっている。殆んど何の意味もなかった。ぼんやりとして実体のない、生温かいゼリーのような月日だった。何かが変わったとはまるで思えなかったし、実際のところ、何ひとつ変わってはいなかったのだ。

朝七時に起きて朝食を食べてお祈りをして学校に出かけ、帰ってきたら聖書を読んで宿題をして夕飯を食べてシャワーを浴びてねた。

進化論が神の存在を否定しているからという理由で教科書から追放するような宗派がはびこり始めたあたりから、ウンガロはそちらにも敵意を向け始めた。土曜日と日曜日に学校に行く代わりにミサなどを強要する周りに辟易し始めたのだ。

そんな風にして、ちょうどある種の人々がカレンダーの数字をひとつずつ黒く塗りつぶしていくように、ウンガ口は人の笑顔を奪う怪奇現象に満足しながら生きてきた。

時計を眺めている限り、少くとも世界は動きつづけていた。たいした世界ではないにしても、とにかく動きつづけてはいた。そして世界が動きつづけていることを認識している限り、ウンガ口は存在していた。たいした存在ではないにしても存在していた。人が時計の針を通してしか自らの存在を確認できないというのは何かしら奇妙なことであるように思えた。

以来、どこからも人の声はしなくなった。いわゆるゴーストタウンになったのだ。

音はしなくなった。じりじりと砂をかむような時間がゆく。彼が部屋で感覚する日々は、昨夜も一昨夜もおそらくは明晩もない、病院の廊下のように長く続いた。

ただひたすらにつまらなかつた。

巨大な鯨に？まれ、その腹の中で生き延びた聖書中の人物のように、つくろは死の胃袋に落ち、暗く淀んだ空洞の中で日付を持たぬ日々を送つたのだ

死の入り口に生きていた。底なしの暗い穴の縁にささやかな居場所をこしらえ、そこで一人きりの生活を送つた。寝返りを打つたら、そのまま虚無の深淵に転落してしまいそうなぎりぎりの危うい場所だ。しかし彼はまったく恐怖を感じなかつた。落ちるといふのはなんと容易いことか、そう思っただけだ。

木の枝に張りついた虫の抜け殻のように、少し強い風が吹いたらどこかに永遠に飛ばされてしまいそうな状態で、辛うじてこの世界にしがみついて生きてきた

運命に叩き伏せられたその絶望を支えにしてじりじり下から逆に扱こき上げて行く気力はもはやなかつた。

絶望ということは、必ずしも死を選ませはしない。絶望の極死を選ぶということは、まだ、どこかに、それを敢行する意力が残っているときの事である。真の絶望というものは、ただ、人を痴呆状態に置く。脱力した状態のまま、ただ何となく口に希望らしいものを謔言のようにならざるだけだ。

今日まで為した無数の諸悪や業も、彼の弱味に、今こそつけ込んで、この土蔵の中の四角な闇に、げたげたと嘲笑っているかとも感じられた。

好転しない世界に絶望と倦怠の日々を過ごしており、日を浴びるときは太陽を憎むことばかり考えていた。結局はウンガ口を生かさなうであるう太陽。しかもうつとりとした生の幻影でだまそうとする太陽。だらしない愛情のように太陽が癩に触った。

そのままいけば薬にも手を出していただろう。死ぬまでの惰性的な日々はひたすらに暇だったのだ。

卑屈になつて、何の生甲斐もない自分の身の置き場が、妙にふわふわとして浮きあがつてゆく。胴体を荒縄でくくりあげて、空高く起重機で吊りさがりたような疲れを感じていた。

助からない。本人も、助かりたいとすら思わない。その考えはすわっている冷たいビニールのソファアーのようにまわりを離れず、まるで大声でくりかえしているように心に響き、空ろな心にこだましていた。

蟻地獄の砂丘の傾斜をあがきながらズルズルと落ちていくのは、足搔くの辞めさえすれば楽だった。

落ち目になつたら最後、人間は浮き上がるがめんどろになる。船でもが浸水し始めたら罫が明かない。

それを告げたとき、リキエルはただただ気味が悪い義弟だなど思つた。拒否する権限もない自己紹介だったが、彼が漠然と忌み嫌つていた考えばかりで、頭がそれを受けつけなかったともいう。

1ヶ月前まで似たような境遇だったというのに、漠然と抱いていた世界に4人しかいない血縁関係という希望が不安になるには十分だった。思考がまるで理解できなかったのだ。

目に光が点つたのは、世界に復讐できると知ったからだという、義弟。皮肉にもスタンドが生きる意志を得た瞬間だったというのだから、まるで真逆の覚醒なのが笑えない。

「かつては、お前もまともだったんじゃないか？希望に燃えたまともな人間」

ウンガロはせせら笑う。

「クラレンス・ダロウの伝記を読んで弁護士になろうとしてるてめーと同じにすんなよ、成績も悪くなかったみてーだし。いちばん大物になりそうな人投票でクラスの二位になったみたいないな顔しやがって。オレが世界で一番嫌いな人種だぜえ、アンタはな」

リキエルは肩を竦めた。感動的な再会とはほど遠かったのだ。

エジプト展覧を見に行こう！

エジプトの至高、ファラオの黄金のマスク、ついにS市へ！国立カイロ博物館所蔵黄金のファラオと大ピラミッド展。5月22日から6月26日まで。

エジプトの巨大なピラミッド群は、約4500年前のエジプト古王国時代のファラオたちによって建造されたもので、その美しい姿はいつの時代も人々を魅了してきました。

謎に包まれたピラミッドとファラオをテーマとする本展では、吉村作治氏の監修のもと、世界一のエジプト・コレクションを誇る国立カイロ博物館の至宝約100点を展示するとともに、高精細な映像も駆使してファラオや王家の女性、ピラミッド建設を支えた人々の暮らしなどを紹介します。

歴代ファラオの像や、3大黄金のマスクの一つと言われる「アメンエムオペト王の黄金のマスク」、美しい彩色がされた「アメンエムペルムウトの彩色木棺」など第一級のコレクションを展示します。

料金は以下の通り。一般1,500円、高校・大学生1,200円、小・中学生800円。10名以上の団体は、当日料金より各100円引きのほか各種割引があります。詳しくはお問い合わせください。

休館日は毎週月曜日（5月2日は開館）。

「なア？どーよ、ジョルノ。お前こういうの好きじゃねえか？」

にひ、と笑いながらツタンカーメンの黄金のマスクがでかどかど映っているチラシをさし出てきた仗助先輩。僕はそれを受け取ったまま首をかしげた。

「他に誰もいないなんて珍しいですね、仗助先輩」

「よくぞ聞いてくれましたア！聞いてくれよ、ジョルノ！康一も億泰も今日に限って予定があるとかいつて断られたんだよ！重ちーはまだ入院中だしー、承太郎さんは吉良ん家を調べるとか言ってでかけちまうし、ジョースターさんは静の面倒みるのに忙しいみてーだしー！こんな天気の良い日につまんねーぜー！」

「まさかそのためだけに僕を家に呼びつけたんですか？」

「そーだぜ、わりいかよ？最近ジヨルノ、バイトだバイトだって付き合
いわりーじゃねーかア。やっところ爆弾魔の居場所がわかったから
か、最近行方不明になる女の人ニユースにならなくなったわけだし、
少しは遊ぼうぜー。エジプトといやあお前の生まれたところなんだろ
？興味あるんじゃねえの？」

「まあ、ないと言えは嘘になりますけどね」

「だろー？」

「ちなみに露伴先生の所にいくつて選択肢はなかつたんです？」

「ばーかいえ、恐ろしいこと想像させんじゃねえッ！どうせ亀だらけ
にする気だろツツ！ジヨルノと違つて俺は絶対嫌な顔されんだから
なツツツ！」

ぶるりと体を震わせた仗助先輩は数日亀に埋もれる夢を見てうな
されたことを思い出したのか顔色が悪い。家に居ても特にする事が
無く、かといって買い物も予定も約束もなかったために、暇で暇で死
にそうでたまらないというのがホントのところのようだ。宿題をす
るという選択肢がないのが仗助先輩らしいのかもしれない。

「ゼイタクに美術カンシヨーに休日を一日使うのもありかと思つてな
！」

「そういうことならいいですよ。僕も気になっていたところなん
です」

「よっしや、じゃあ決まりだな！早速行こうぜ、ジヨルノ」

「いいですけど。途中で寝ないでくださいね、仗助先輩」

「俺を誰だと思つてんだよお前なア」

「だつて今とつてつけたように思いついたでしょう、仗助先輩。初め
からそのつもりなら電話でよかつたじゃあないですか」

「だつてよオ……仕方ないじゃあねえか、お前とゲームの趣味がこ
とごとく合わないなんて思わなかつたんだよッ！今時格ゲーした事
ないなんてお前ホントに男子ガクセーなのか？」

「無茶言わないでくださいよ。僕は半年前まで施設にいたんだから
やったことあるわけないじゃあないですか」

「友達ん家でやるとかア」

「ゲームより漫画や映画が好きなんんだ」

「まじかア………… マリパ………… うーん、NPCいるとシラケるんだよなア………… 仕方ねえ、やっぱエジプト展一択だな！ジヨルノ詳しそうだし、色々教えてくれよ」

「そんなことだろうと思いましたよ。わかりました、いきましよう」

やрийい、と仗助先輩は笑う。ここからS市美術館に行くには徒歩10分のS市駅に行くのが最寄りとなる。僕達はさっそくでかけることにしたのであった。

この美術館は広瀬川が近くを流れる文教地区の中にあり、本館とその西隣にこの町出身者の作品を展示する別館の記念館にわかれている。

地元であるM県および東北地方に縁の深い、明治維新以降の絵画、版画、彫刻、工芸作品を中心にコレクションしており、さらにカンディンスキーやクレーらの作品も収蔵している。このほか、具体美術協会の作品45点、随筆『気まぐれ美術館』で知られる画廊主・随筆家洲之内徹の洲之内コレクション、長岡現代美術館を運営していた旧大光相互銀行の大光コレクションも有名だ。

これらの作品を展示する常設展および年に数回の特別展が企画されるほか、併設されている県民ギャラリーにおける一般市民の展示発表も行われている。

また、館内の創作室や設備を開放して随時創作指導等を行ったり、ただ鑑賞するだけではない幅広い芸術活動を支援している。これは、開館時に掲げた理念の「見るだけでなく新しい自分を発見する美術館」を踏襲したものである。

年間総観覧者数は、都道府県立美術館基本調査票によると19・9万人となっており、全国の都道府県立美術館56館中9位か10位の集客力となっている。観覧者以外の利用客も含めた近年の年間入館者数は約25万人。

本館は2階に展示室、1階に本館エントランスホール、展示室、創

作室、造形遊戯室、講堂、図書室、映像室、レストラン「カフェモーツアルト　フィガロ」、ミュージアムショップ。地下1階に県民ギャラリー、佐藤忠良記念館がある。

別館には1階に展示室、コーヒーショップ「カフェモーツアルト　パペーノ」。地下1階にはアートホール。

美術館の内外には以下の四つの庭がある。中庭を除き、それぞれの庭には彫刻が置かれている。

前庭には美術館の導入部に当たり、本館、別館、県民ギャラリーそれぞれの入り口へと続く。中庭は列柱に囲まれた庭であり、作品の展示やワークショップ、コンサートがここで行われることもある。

北庭はケヤキなどの落葉樹に包まれた回遊式の庭で、広瀬川を望める。アリスの庭は本館と別館である佐藤忠良記念館の間に位置する庭で、前庭と北庭を結ぶ通り道でもある。この庭に対する佐藤忠良記念館の側面は弓なりのハーフミラーガラスでできており、独特の情景を描き出す。

入口に置かれているパンフレットを片っ端から読みあさっていた僕は、ようやくトイレから出てきた仗助先輩に声をかけられて立ち上がった。

「いやー、わりいわりい。まさかこんなに混んでは思わなくてさア」

「僕も初めて来ましたが、みんな考えることは同じなんです。平成に入ってからエジプト展が東北地方で行なわれるのは初めてみたいだ」

「まじかア！やっぱ初日だから混んでるんだな」

「そうですね。親子連れやカップルが多いみたいだ」

「げえツ……まじか……うわ、来るどころ間違えた？」

「なにを言ってるんです、仗助先輩。今の時期どこも行楽地は大混雑ですよ。わかりきってることじゃあないですか」

「そうだけどさア……すげー行列ね……」

「これでも読んで暇つぶししてましよう。整理券もらって立ってたら

そのうち回ってきますよ」

「それもそうだな！つて、パンフレットじゃねえか。ジヨルノつて映画とかで買うタイプ？」

「仗助先輩はかわないんですか？」

「いやだつて、ネタバレとかかまされたら損する気分にならねえ？」

「僕は先に原作読む方なのでよくわかりません」

「まじか。まあ、美術館ならネタバレもなにもないよな！世界ふしぎ発見のクイズする訳じゃあないんだし」

「そうですね。解説読まないと楽しくないですよ、こういうのは。退屈であくびばかりするよりずっといい」

「そりやそうだ……つてパンフレット高ッ！」

「そんなものですよ。いきましよう、仗助先輩」

実は俺より楽しむ気満々だなと仗助先輩が呟いた気がしたが、僕は気付かないふりをしたのだった。

エジプト展は大盛況だった。

石像は、今にも動き出しそうなほど生き生きと見える。生の哀愁を表象しているような、灰がかった肉づけで仕上げられた像だ。見事な色彩が施された壁画は、解剖学の教科書から写生したような精密な浮き彫りである。

「あ、これ見たことあるぜ」

「ミイラになりたい人がいましたね、そういえば」

「げえっ…… たしかにそうだ…… あれ、臓器を保管するためのものだったのかよ」

「いれます？」

「冗談でもやめろ、シャレにならねえよ」

針金で支えられたカーネーションをコップに投げ入れたみたいな、

女学生くさいリリズムがある。懇意な家の門口のような親しみを感ぜさせる絵もある。

古代エジプトの絵画は芸術というより絵描きが暇つぶしに書いた落書きみたいな気軽さがあった。みつばちハッチの死に損ないのよ
うな絵だが、生々しい絵具を投げつけたような、わけのわからない絵
でもある。美術館にあるということは何らかの価値があるのだろう。

先に進むと木造のレプリカが並ぶ。

この大胆な構図で彫刻刀をふるってラクダを木の塊の中から取り
出したらしい。木の塊の中に閉じこめられていた架空のラクダを解
放する。アートも宗教も似たようなものだ。

西洋にもたらされた影響としてヨーロッパの絵画もあった。オフ
セット版の裸婦像は艶消し珠玉のような、なまめかしい崇高美があ
り、作品を見るものすべてを魔法の渦のように自分の世界にひきず
りこむものもある。わけのわからない絵でさえ抽象画って言うのか、
木が木に見えない。馬は馬じゃない。これでいいらしい。

本物の画家が描く絵は祈りにも似ている。

パピルスの紙に金絵具で、右上から左下へ波紋を作って流れて行く
水が描いてあるが、非常に優雅な筆致に見えた。僕はその青暗い平面
に浮き出している夢のような、又は細い煙のような柔らかい金線の美
しい渦巻きに魅せられる。

それは周囲が白紙になっているために空間に浮いているように見
える。僕は一目見て驚かずにはいられなかった。少しの修練も経て
はいないし幼稚な技巧ではあつたけれども、その中には不思議に力が
こもっていてそれがすぐ僕を襲った。

僕の中のエジプト信仰がそうさせているのかもしれない。

それは明らかにほんとうの芸術家のみが見うる、そして描きうる深
刻な自然の肖像画だった。抽象画は悪くいえば誤魔化しが利く。た
しかかなデッサン力を持っていなくとも腕が分らない。でも芸術は運
命である。一度モチーフに絡まれたが最後、捨てようにも捨てられな
いのである。この作家はエジプトと出会うことで救われたのだろう。

「案外おもしろいもんだなあ」

「そうですね、テレビでしか見た事がないやつでも覚えているものだ」
「これなんかは珍しくねえか？」

「ここまでくると中世ですけどね」

仗助先輩が指さしたのは、シヤムシールという刀剣の一種だ。中近東に見られる、わずかに曲がった細身の片刃刀。シヤムシエール、シヤムセールとも呼ばれる。

シヤムシールとは英語のソードなどと同じく、本来ペルシア語で「刀剣」を意味する普通名詞であり、名称そのものに刀や剣、刀身の曲がりなどの形状についての意味は有しない。

アラビア語のサイフ、マフムード・カーシユガリーの『テュルク語集成』などに見られるセルジューク朝時代からイルハン朝時代にかけての中央アジアから中東一帯のテュルク語ではキリチヤ、チャガタイ語、オスマン語ではクルチも、本来は刀剣一般を、通常は曲刀を意味する。

エジプトやアラビアなどではシヤムシール、西洋ではシミターと呼ばれ、西洋のサーベルなどに影響を与えたといわれる。

これら曲刀を意味する各国語は、新月刀などと和訳されることがある。ただし、偃月刀は本来は中国の曲刀で、シヤムシール等とは形状もやや異なり頑丈なつくりをしている。

「…… ナイル川から見つかっただんですね、これ」

「うへー、こんなにバラバラなのに集めたのかよ。しかも川ん中から？ すげえなあ」

「500年前…… そんなに昔の刀がどうしてナイル川に？」

「さあ？」

「あ、ありましたね。盗難されたあげくに破壊…… これはひどい」

隣には盗難前の刀の写真がかざられており、レプリカも置かれている。今はほんの刃先しか残っていない、可哀想な骨董だ。

「あ、承太郎さんたちがエジプトにいったっていう年じゃねーか。まさかDIOの仕業か？」

「僕はもう社王町にいたころだな…… やはり物騒だったのかもしれませんね。ナイル川から引き上げられたなんてあまりにも意味深

だ。川に沈められるなんて穏やかじゃあない」

「たしかにな」

「今度会ったら聞いてみます?」

「そうだな、また新しい話が聞けるかもしれないねえ。こないだはほんのサラツとだったもんな」

さあ次は1階のフロアにいくとしよう。

「た…… 助けッ!ぎゃああああ」

「いきなりなにするのッ!いやあああッ!!」

心地よい静寂を破る断末魔が響き渡る。階段降りてすぐの所にいた僕らは、一目散に逃げ惑う人々に巻き込まれそうになる。阿鼻叫喚が2階から1階に広がっていく。誰もが一刻も早くここから逃げようと叫んでいた。

「何があつたんすかア?」

「早く逃げた方がいいッ!学芸員がいきなり小刀を持って暴れ始めたんだアッ!」

「怪我してる人もいるみたいなのッ!」

「あたしポケベルしか持ってない!誰か!誰か救急車と警察呼んでえええ!!」

僕達は顔を見合わせると迷うことなく階段を登っていった。

悲鳴を上げたのはやはり被害にあつた客だった。家族連れを襲つたらしく男の胸が横一文字に裂けて鮮血がほとばしる。零れ落ちた血液が廊下に広がっていく。

「うッ!ひでえッ!」

たまらず仗助先輩は顔をしかめる。駆け寄ってスタンドを発動させようとした僕達だったが、切りつけられた被害者の傷口は深く、致命傷だとわかる。

「…… ほぼ即死ですね」

「クソっ…… 犯人はどこに行きやがった!」

仗助先輩の怒りに充ちた声が響く。旦那が切りつけられ、妻が子供を庇い、子供もやられてしまったようだ。

「こ、こいつッ！おい、ジョルノ！あの刀がなくなってるぞッ！」

僕は目を見張った。盗難防止のブザーが鳴り響く中、シヨーケースは傷一つない。そして、近くにいたはずの案内や解説を兼ねていた男が消えて、血みどろの足跡が続いている。

「スタッフルームです！スタッフルーム！」

僕は無我夢中で叫んだ。仗助先輩が足跡を追いかけて走り出す。ドアをあけると、そこには返り血を浴びながら笑いを浮かべている男がいる。人を斬ってもなお笑うことに何のためらいもない、サイコパスじみた残虐な男が。

その異常な表情以上に目を引くのは、その男が手にした小さな刀だった。今は包丁ナイフになってしまった、かつては中世の人間が戦に使ったそれが、刃を妖しく光らせている。

男は右手でそのまま引き廻そうとしたが、刃先が腸にからまり、ともすると刀は柔らかい弾力で押し出されてきて、僕は眉を寄せた。

刀の先が胸に入る。先端が肋骨のあいだへ喰いこんだ。男は悲鳴をもものともせず力をこめた。数センチのめり込む。筋肉がシヨツクで縮み、刃先が前へ進まない。強引に突き続ける。

ここで断念するわけにはいかなないとばかりにねじり込むように体重をかけて数ミリずつの感じで進めた。不意に抵抗がゆるむ。相手の体内に、チーズに突き立てた果物ナイフのように、奥深くめり込んでいった。

人間の内部とは思えない遠い遠い深部で、地が裂けて熱い溶岩が流れ出したように、恐ろしい劇痛と共に血しぶきが飛ぶ。

次は咽喉元へ刃先をあてた。一つ突いた。浅かった。頭がひどく熱してきて、スタッフは抵抗して手がめちやくちやくに動いた。刃を横に強く引く。口のなかに温かいものが迸り、目先は吹き上げる血で真っ赤になった。

小刀が身に食い入るたびに、まりをたたくような、まるくこもった音が立つ。

鮮血が舞うよりも先にその臭いが鼻を刺激した。にたあと男は笑う。あたたかい、とつぶやく。ナイフを握り締めた手に伝わってきた、人の温かな肉を切り裂く感触は素晴らしいものだったと笑うのだ。目の前の男は今、人を殺めた。なんの躊躇もなく。

スタツフの腹部、臍の右上にナイフの切っ先が当たると。力を加えると、表皮に刃がめり込んでいく。腹直筋を切り、毛細血管、神経を割く。ナイフが肉を破り、穴を空ける。肝臓に到達したところで、一度止まる。

スタツフが涎混じりに、呻いた。ナイフが外に引き出されるのと同じ時に、刃先が離れた血管から、次々と血が漏れる。間を置かずして、次にスタツフの胸にナイフを向けた。左の乳房の膨らみから数センチ下に、力を込め、刃を突き出す。

ナイフは脂肪を通過し、肋骨の隙間を縫って、さらに奥に進み、心筋に突き刺さる。スタツフの目は見開かれている。ガスを吐き出すかのように、ひゅうつと口から息を出す。ナイフがもう一度、外に出ると、スタツフの顔から色が消え、尻から後ろへ倒れた。

「気をつけるよ、ジョルノ！い……異常者だぜ、こいつ！目つきがフツーじゃねー！」

「……ッ」

「くらえイッ！」

叫ぶと同時に通り魔の男が流れるような動作で男が最後のスタツフに斬りかかる。弧を描いて宙を滑った刀身がまた一人の命を刈り取った。

「この小刀…… どうやってショーケースを通り抜けたんだ!？」

「そーいや、割ったり鍵開けたりした形跡なかったな!？ま、まままさかスタンド使いかよっ!? こいつはやべーぜ、ジョルノ。扉を閉めてくれ！逃がしちやいけねーやつだッ！」

僕はすかさずゴールド・エクスペリエンスで壁を殴る。ドアやドアノブから木々を生やし、簡単に突破できないように溶接じみた嫌がらせをすることにした。仗助先輩は男の前に立ち塞がった。

エジプト展覧を見に行こう2

「お前たちに恨みはないがその命もらいうけるくくッ！」

学芸員の男はいきなり仗助先輩に斬りかかった。抜き払って、そのまま切り下ろす無造作な太刀筋。だがしかし、気合い充分の刀撃だ。殺意しか感じない。

「うおおっ?! やっぱ完全に正気を失ってるぜッ！」

仗助先輩は素早く飛びのいてこれをかわした。まさに紙一重だ。警戒して、距離を置いた位置で立ち止まっていたから避けることができたのだ。仗助の額から赤いしずくが垂れた。薄皮一枚分、かわしきれなかったようだ。

「あつぶねえー！」

「まずはお前だア！ しねえええい！」

ざくつと嫌な音がした。

「あ」

僕はこの瞬間に学芸員の冥福を祈ることにした。仗助先輩の自慢のリーゼントに深深とナイフが突き刺さり、硬い音を避けながら傷がはいったのだ。

「フフフフフ…… ちょこまかちょこまかとすばしっこい小僧だな…… そのハンバーグみたいな髪型に感謝するんだな…… 今度は切り落としてやろうかア！」

男は笑う。仗助先輩はその挑発に答えない。男はそれだけ怖がつているのだと勘違いして、舌先をチロリとのぞかせ、上唇をなぞった。「ガキのくせに堂々たる物腰、年齢以上のものがある…… これはあの男を思い出させる！」

嬉しそうにつぶやいて、にやあくど笑う姿に、僕はため息をついた。片手を腰に当てる。

「ジョルノ…… 手え出すんじゃあねえぞ。こいつは俺の敵だ」

「出しませんよ、心配しなくても」

じり、と仗助先輩が歩みを進める。

「気に入ったぞ、その冷静沈着さ……」

「それは冷静じゃあない……頭が怒りでいっぱいなだけだ……」
じりじりと仗助先輩はにじり寄って間合いを詰める。

「だが、それももう憶えたッ！」

言い放ちざまに男は身を躍らせた。フェイントも交えた白刃の連撃が風を切る！

「ドラアッ！」

仗助先輩のクレイジーダイヤモンドの繰り出したスタンドの手甲が、刀を弾き返した。

「ヌウツ！ 貴様ア、そいつは……まさか、スタンド使いかッ！」

男が驚きの声を上げる。どうやらDIOの協力者じゃあなさそうだ。もしあいかわらず行方がわからないスピードワゴン財団職員の手引きでここにいるのならこんな間抜けな言葉を吐かないはずである。

「ドララアアアッ！」

「うぎいっ!? なんとというパワーだッ！」

用心深く、後ずさりながら問い詰めていた男などものともせず仗助先輩は男を殴りつける。吹っ飛ばされたものの、持ちこたえた男はやや前傾姿勢で刀を構え、仗助先輩の動きに合わせて回りこむ。

「ククククク……その動き……当お然ッ……」

仗助先輩の肩が壁にぶつかった。いつの間にか壁際に追い込まれていたのだ。

「覚えたぞオオオッ！」

そう言つて大上段から下段に刀を振り下げると、男は下からすくいあげる一撃を仗助先輩目掛けて放った。仗助先輩もすかさず応戦の構えを取る。

「クレイジーダイヤモンドッ！」

「なにイツ!?!」

今度弾き飛ばされたのはクレイジーダイヤモンドのガードのほうだった。仗助の腰から肩にかけてが、ガラ空きになる。

「俺のスタンドは『冥界の神アヌビス』の名を持つこの刀！ 貴様のスタンドの動きとスピードは、さっきのでキツチリ取り込んだッ！」

アヌビス神の刀身が仗助先輩の体をまっぴたつに横断した。

「!?!」

体は何ともなかった。血も出ていなければ、かすり傷ひとつついていない。完全に殺られた、そう思ったのだが。仗助先輩は目の前の男を見やった。

「刀がスタンドだと……？　んだそりやあ！　んなのアリかよッ！」

「あっさり殺してはもつたいない。貴様の全てのパワー、スピード、能力……憶えさせてもらうぞ」

「相手の力を取り込んで憶える。それがてめーのスタンド能力か？」

「透明になってすり抜けることもできるみたいです、仗助先輩！」

仗助先輩はげ、という顔をする。こちらの力量を憶え、次からはそれを上回るスタンド。やっかいな相手だ。

「クックククク……ククク」

男が忍び笑いをもらし始めた。

「それだけじゃねえんだぜ、この刀」

「なんだって？」

「今、俺は斬ったと思うか？　それとも斬らなかつたと思うか？」

「なにを言ってるんだよ、てめー？」

「ちやあくと斬ってるんだぜえええッ！　ただしッ」

「!?!」

僕達は背後に不穏な気配を感じ取った。振り向くまでもなかった。それはすぐに僕達に向かって倒れ込んできたのだ。

「斬ったのはお前の体じゃあねええッ！　体を透かしてッ！　斬ったのはその後ろの柵だああッ！」

「ゴールド・エクスペリエンスッ！」

その機を逃さず男が仕掛けた。なぎ払う一閃！　だが仗助先輩は構わず男に殴りかかった。

「なにいつ!?!」

アヌビスの一撃は虚しく空を切った。頭上をたくさんの蝶が舞う。

柵が音を立てて倒れるはずが跡形もない。アヌビスは驚いて声を上げた。

「今のは一体……そうか、それがお前の能力かッ！上手くかわしたな！しかし、その動き憶えたぞッ！」

男のごたくにはつきあわず、仗助先輩は追撃をしかける。だが避けられてしまい、カウンターで制服が破かれてしまう。

「仗助先輩、こっちはです！」

「くっそー！めんどくせーなあー！」

仗助先輩は地をけって駆け出した。闘ったところで、こちらの手練手管を憶えられてしまうだけならば、そんな敵と闘っても無駄だ。僕は無駄なことが嫌いだ。それを汲み取ってくれたらいい。

そこへ壁が襲いかかってきた。

「!?」

「なんだと!?!」

咄嗟に見えた鏡の向こうに男の姿があった。その後ろの壁が切り取られている。向こう側から壁を斬って切り払ったのだ。

「クッ！」

「んなのありかよっ！」

進路を絶たれた。壁越しに、全ての面という面が倒壊してくる。クレイジーダイヤモンドが咄嗟にその壁を押し返し、元に戻っていく。僕らはその穴をくぐり抜けた瞬間に部屋は溶接されていた。

「ぐえっ！」

金属が弾かれる音がする。どうやら透過するにはタイムラグがあるようだ。

「ありがとうございます」

「それはいいけどよおー、どうする？早いとこ何とかしねーと騒ぎになっちゃうぜッ！」

相談しようとした矢先、近くの窓ガラスを割る音がした。男が建物の外のベランダを通じてこちらの通路に飛びだしたのだろう。

「ちったあ待てよ、早すぎッ！」

「このオレの勝ちだッ！逃げてても無駄だったな！死ね、小僧ッ！」
かけてくる学芸員。

「ゴールド・エクスペリエンスッ！生まれろ、新しい生命！」

僕はあたりに四散したガラス片を植物に変える。

「なにいいッ！樹を……蝶の次は……これはッ！お前が生やさせたのかッ！それが貴様の能力!?」

向こうから斬りつける体勢をとっていた男は目を丸くした。

「それがどうしたというのだッ！こんなものオオオ、すぐにいいッ！切断！ブツ倒してやるウウウウ！」

アヌビスの斬撃が美しい弧を描いた。樹の幹を右から左へと切り払う。

「うっ？」

切断面から静かにズレて、地面に転がったのは男自身の上半身だった。内臓がはみ出しもしない、鮮やかな切断面だった。

「ゲエエー！な……なにしやがっ……や、ガハッ！」

男の口から豪快に赤がぶちまけられる。

「クレイジーダイヤモンドッ！」

絶命せずに動きつづける男に危機感を感じたらしく、すさかず仗助先輩が刀をはじめ飛び出した。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアアアッ!!」

「ギエエエ——ッ」

刀が、男の体が、美術館の壁にめり込んでいく。元に戻っていく過程で、全てが融合していく。男の血さえもが壁に吸い込まれてしまった。

「逃げたのは無駄なんかじゃない……広い場所が必要だったただだけだ……そう、僕達が十分に戦えて、アンタが壁の中にいるために必要な、壁がね」

「あつ、あぶねえ……マジでどうなるかと思ったぜ」

「仗助先輩、急ぎませう。さすがにまずい！警備員がくる！」

「そうだったアー！面倒なこと巻き込まれる前に逃げようぜッ！」

遠くから足音が聞こえてくる。僕達は一目散に逃げ出したのだった。

「い………… 生命を生み出し、攻撃をそのまま跳ね返す能力………… 元に戻す力………… たしかに憶えたぞ…………」

男が断末魔のうめきを上げたのは、僕達がいそいで反対側の通路から逃げ出したあとだった。

「アヌビス神………… だと………… まさか本当にそうだったのか、そいつは！」

「そうなんすよ〜！」

公衆電話の向こう側で空条さんの驚きの声がする。

「ナイル川に沈めたはずなのに………… なんだ…………」

「………… え、まさかD I Oの手下だったんすか？」

「スタンドといっても、本体は500年前のキャラバン・サライというエジプトの刀鍛冶の男で、とうの昔に死亡している」

「ええッ!? 死んでるだって! マジっすか!」

「ああ、スタンドのみが彼の作った刀剣の中に宿っており、自らを握った者を剣士として操る妖刀だ。とある博物館の倉庫内に保管され続けていたところをD I Oに持ち出され、その恩義からD I Oに忠誠を誓っていた」

僕は息を飲んだ。

「戦闘では、戦うごとにパワー・スピード共に強さを増していくという驚異的な戦闘能力を持ち、策や術を使わない正統派のスタンドだ。しかも鞘がなかったんだな？」

「刀も先の方だけっすね。鞘も展示されてなかったし」

「そうか………… 奴は手にした人間の精神を支配することが出来る………… ! 壁に埋め込んだ程度では通りかかった人間が取り出すだろうな」

「や、ヤバくないっすか!? 今美術館警察が張ってて中は入れないっすよー!」

「ああ、まずいな………… 非常にまずい。今ニュース速報で流れ始めている………… ! こっちが警察署にいった話をつけてみるから待ってろ」

「まじでお願いします、承太郎さん!」

「よく知らせてくれた。ありがとう、二人とも。そのエジプト展でのもきな臭いな、調べてみるぜ。じゃあ後で連絡するから今回は帰れ」
ココで手を引くのは……と仗助先輩と僕は粘ったものの、警察案件になってしまった今となってはただの学生である僕達に出る幕はない。

残念だが僕達に出来るのはここまでのようだ。

壁にめり込んでいた本体の傍らで、妖刀アヌビス神の思念が立ち昇る。警備員、警察官、そして通報した1階フロアのスタッフ、館長たち。ものものしい雰囲気や黄色いテープがはられて行き、カメラのフラッシュや話し声が騒がしい。

新たなる剣の使い手を呼び寄せなくてはならない。あの小僧たちのパワーと動き、精神力はしっかりと取り込んだ。その能力も憶えた。使い手さえ誰でもいい。通りかかって我が刀身さえ手にすれば、次は負けない！

アヌビス神の横を通り過ぎようとした鑑識の男が不運にもその存在に気づいてしまう。血濡れのナイフが壁にくい込んでいる異様な光景に周囲がざわつく。

だが子供もあわせて12人も犠牲になった殺人事件のナイフが見つかからないとなれば、これしかない。一体どうすればコンクリートの壁にめり込むのかわからないが、大事な証拠品だ。トンカチやドリルを使って警官たちはそれを取り出し、しまいこんだ。

すぐさま精神を支配しようと考えたアヌビス神だったが、ふと考えたのだ。あの小僧たちはいずれもなかなかあなどれない能力だった。しかも連携されたら面倒だ。また挑むにしても、できれば使い手はスタンド使いが望ましいのではないだろうか。

そうそう都合良くこの辺りに他のスタンド使いがいるなど、無理な相談かも知れないが、チャンスはまだあるはずだ。アヌビス神は大人しくパトカーに運ばれていった。アヌビスの思念が目に見えぬ殺意は波紋となって、警察署の周囲に広がり始めた。

「……空条さん、アヌビス神を見つけられたかな……」

インターネットを調べてみるが、社王町の警察署で殺人事件があったというニュースはない。明日の新聞やテレビ待ちだろうか。今夜最後の更新を読み終えた僕はパソコンを閉じて自室に向かった。

ガチャガチャと鍵をあける音がする。彼が帰ってきたようだ。ずいぶんと遅かったからなにかあったのだろうか。話を聞けないだろうかと玄関に向かおうとした僕は。

「ッ———!?!」

右足に強烈な痛みが走る。僕のスリッパと靴下を貫通し、まるで植物の新芽のように刀が生えているではないか。とつさに抜こうとするが、先に抜かれる。ぐじやり、と捻られたせいでくたくたくと血がしたり、僕は悶絶した。刃先が海面にのぞくサメの背びれのように廊下を泳ぐ。

たまらず僕は転倒した。その先にも刃がある。ざしゅ、と足の甲が縦に切り裂かれた。部屋の床に転がった僕の周囲の壁や床を自由自在に刃が泳ぎ回る。床が揺れる。僕はなんとか避けようとするが先回りされてしまう。

「ゴールド・エクスペリエンスッ!」

反応したのは血だけだ。あたりに蛍が四散する。これはただの刃ではない。スタンドだ。スタンド能力の配下、あるいはこれそのものがスタンド能力!

次の瞬間、僕は足元が不自然に揺れた気がした。轟音をたてて部屋の床が抜け落ちる。僕は脚の痛みをこらえて跳躍した。ゴールド・エクスペリエンスで縄を作ろうとしたが、根付こうとした蔦の一体化するはずの場所まで刃が切り落としてしまう。

舌打ちをした僕はまた飛んだ。廊下にはぽっかりと穴があいてい

る。僕は目を見開いた。急遽変更した着地先まで脱落していくではないか！

「チツ、しまった！また先回りをツ！」

刀の主は脱出先を読んでいたのだ。僕の身体が宙に浮いた。一瞬の無重力感。そして絶望的な落下の衝撃が遅いかかる。

僕は悲鳴を残して下の階へと落下した。体が碎け散ってしまいそうな程の痛みにたまらずうめく。しかしすぐに身を起すしかない。頭をかばって、ゴールド・エクスペリエンスで真っ直ぐに向かつてきた殺意をはじき飛ばした。ゴールド・エクスペリエンスがまたはじき飛ばした。どうやら刃は生きているようだ。

「なるほど……今度は1人の時を狙ってきたってわけか、アヌビス神。実に懸命ですね」

真上だ。抜けた天井の闇の中を飛ぶ音がする。僕達が住んでいる階の穴から、アヌビス神の小刀を持った誰かが僕に襲いかかる。その頭上高くで白刃が青白くきらめく。なんの躊躇もなく振り下ろされた一撃は落下速度も加えて威力は充分だ。人を一刀両断できるのだから。

「無駄アツ！」

ゴールド・エクスペリエンスが拳を繰り出す。闇が裂け、僕の指が4本第1関節指から切り落とされた。繰り出した拳の先が無くなっていた。切り落とされたのだ。血が吹き出す。僕は痛みに耐える。

「ワハハハハハ！素拳で刀に挑むとは笑わせるなア！そんなに驚くなよ！家族だろオ！？」

床を転がる僕の前に降り立った襲撃者が刀を握りながらいうのだ。絶対にしないであろういやらしい笑みを浮かべて。

「その命……もらいうけるぞ、ジョルノ！その力を全て覚えるまで、精一杯あがくんだなあ！」

それから僕の防戦一方の戦いは始まった。同居人であり、僕の保護者でもある警察官に憑依しているアヌビス神は、あのとときの学芸員みたいに殺してみろよと笑うのだ。

「できるか？出来ないよなあ？大事な大事な家族だもんなあ？初めて

できた理解者だもんなあ?」

「知ったような口をツ」

「なんだよもう終わりかあ〜?ならもう用済みだア〜!死ねイッ!」

彼はうなりを上げながら床を走り、僕に遅いかかった。僕は床に飛び散っている血に生命エネルギーをそそぎ込む。すさまじい勢いで樹木が出現した。その上を蔦が幾重にも生えていき、より強固な盾となる。

「愚か愚か愚かものオオオツめがあッ!命を与えて攻撃反射その手はもう」

アヌビス神は僕の渾身の盾をいとも容易く透過した。

「憶えたのだアああ!俺には通用しないいいツ!!」

「愚か者はお前だ、アヌビス神」

「ぬ?」

僕は笑った。本体操作と透過は能力をきりかえる必要があり、一瞬ではあるがタイムラグがある。この時間差を僕は狙っていたのだ。

ぶしゃあああ、と水が吹き出す。

「ぬおおっ!」

空を斬った先に僕はいない。そこにあるのは洗面所、そして蛇口だ。切り落とされた水道が勢いよく辺りを水浸しにしていく。

「ゴールド・エクスペリエンスツ!」

「なんのつもりだああ〜?」

ギリギリ後ろへ飛び、僕の衣服が切り裂かれた。僕は歯を食いしばった。今の一撃はなんとか逃れることが出来たがさっきの手へのダメージは深刻だ。左手から血がしたたる。人差し指と親指しか残っていない。

「上手くかわしたな。フフ……しかし、いつまで避け切れるかな?」

上体を起した彼がにじり寄る。

「アアアアアアッ!」

刀が出た。一撃ごとにアヌビスの刀勢は鋭く激しくなっていく。

「ほおら、さつきみたいにやれよ〜こいつを真つ二つにしてみろよ〜」
「ジヨルノ〜ジヨルノ〜ぎやははははッ！」

空振りを繰り返しながら彼が警告を発した。

「俺様は精神を操り、使い手から使い手へ時を越えて生きるスタンド！そして」

アヌビスの剣先が僕の肩口をかすめた。

「戦った相手のパワーを取り込み、進化する！一度戦った相手には絶っ」

彼が腰を落とした。来る！僕は直感した。今までの攻撃を超えた最強の一撃だ。

「対に負けんのだあッ！」

突き！一直線のそのスピードを僕はかわせない。アヌビスが直撃した。僕の腹をつらぬいた刃が真つ赤に色を変えて、その背から突き出る。僕の吐いた血が彼の顔に落ちる。びしやりという音がした。

「仕留めたりイ〜イ！」

僕はそのまま後ろに倒れた。彼は剣を引きぬくため、その傍らに片膝をつくつと、ついでに僕の横顔に悪魔の形相の笑みを近づけた。

「ヒイヤハハハハーツ！」

目をカッ開き、発情した犬のように大口から舌をダラリと垂らしてあえぐ。

「ぎゃあああッ！」

アヌビス神は悲鳴を上げて床に転がる。僕は水を吐き出した。鉄サビの味がするからだ。いつしか床は赤褐色となっている。

「こいつは土壤中に普遍的に存在するバクテリアだ。水田の取水口付近、コンクリート構造物の漏水箇所など、湧水量及び移動量が少ない場所で大量に繁殖し、サビ色のドロドロとした沈殿物を生成する。水面に油状にみえる鉄の酸化被膜をつくることから油の流出事故と錯覚されることがある。鉄を食べて活動する鉄バクテリアだ」

「て、鉄を食べるだとおっ!？」

「ただし食べると言っても、直接鉄を捕食するという意味ではなく、鉄を酸化させ、そのエネルギーで代謝し活動しているという意味だ。つ

の連絡を受けてかけつけてくれた空条さんは、スピードワゴン財団職員と共に密封されたトランクの中にアヌビス神の1番大きな破片は回収した。スタンドの一部という判定になるらしく、ゴールド・エクスペリエンスで一気に回収が出来ないのは面倒だが仕方ない。

下手に人間を寄せ付けたらこの破片により人間の精神を支配しかねないので、全てが錆に覆われるまでは立ち入り禁止だ。出来る限りの生命エネルギーを注いでいるから、タイタニック号のように30年という途方もない時間がかかることはないだろう。水たまりほどの水がないと鉄バクテリアが生息できないため、わざと現場は水浸しなままだ。

「すごいですね、対応が早い」

「例の爆弾魔に手引きしてる奴がいることは判明してるからな。俺たちの仕事は増える一方だ」

「それはお気の毒に」

「今に始まった話じゃあない」

空条さんは肩を竦めた。そして僕は慌ただしくスピードワゴン財団職員の出入りする現場の近くで鉄バクテリアを繁殖させながら、アヌビス神から聞き出したことを空条さんに伝えるのだ。

「なるほど…… 発見は偶然だが、ここに来たのはD I Oの協力者の手引きか」

「電気漁なんて流行っているんですね」

「異常を感知して地引き網で引き上げてみたら発見か…… こいつはもともと盗品だったのを忘れていたぜ」

「まさか自らの意思で美術館に戻るだなんて」

「修繕や手入れは1級品の待遇が受けられるからな」

「なるほど……」

「誰が協力者なのかはこれからの調査が待たれるが…… ゾツとするぜ」

「そうですね。これからアヌビス神はどうするんですか？」

「そうだな…… 海に沈めてもレアメタルがなんだと掘り返されちゃ意味が無いからな。やはりコンクリートかなにかに幽閉して管

理していくしかないだろうな」

「下手に放置しても危険ですもんね」

「鉄サビはあくまでも応急処置にすぎねえからな。ちよつとした偶然で鉄の部分が出ちまえば意味は無い」

「そういうことだ」

スーパーシスター1

思いがほとぼしる感じであふれ出すのが勢いある字体から伝わってくる。じつと人の目を見つめ切々と縷々と思いの丈を訴えるのは、きつと喉からはらわたを引きずり出すような覚悟が必要に違いない。いくら言葉で打ち明けても、そこにあつたギリギリの心情は半分も伝わらないだろうと半ば諦めにも似た心境で言葉が綴られている。

彼女が求めているのは、自分の感情を僕にしつかり送り届けるという、ただそれだけのことだ。それは小さな固い箱に詰められ、清潔な包装紙にくるまれ、細い紐できつく結ばれている。そのようなパッケージを彼女は僕に手渡しした。そのパッケージを今ここで開く必要はない、と少女は無言のうちに語っていた。その時がくれば開けばいい。あなたは今これをただ受け取るだけでいい。

その綺麗な外装を外せば、ラブレターというにはあまりにも乱雑で、気持ちの排泄物のようになってしまったものがある。恋愛感情はこじらせすぎると吐瀉物になるのかもしれない。彼女は、ずっと、この感情を嘔吐したかったのかもしれない。彼女は、ずっと、こ

女心はシャワーのお湯みたいなものだと僕は認識している。あるときは冷たく、またある時は火傷をするくらい熱く、そしてそれは高いところから低いところへ自然の法則に任せて、待っているあの人のところへ流れて行く。

あるいはカメラのシャッター。姿が視界から消えても、脳裏には異性が鮮明に残る。全体像が克明に記憶されて、その肖像は、いつまでたってもぼやけそうにない。

ラブレターと呼ばれるだろう、その手紙には、翳りのない宝石のような瞳でわたしを見て欲しかったと書いてあつた。どうしてもそれを自分のものにしたかつた。宝石と、その台座をと。長いあいだずっとと変わることなく僕が意識の中心にいて、ひとつの大事なおもしろの役割を果たしているのだと。

僕にとつてクラスメイトにすぎない少女は、そばをたまたま行き過ぎていく淡い影に過ぎない。友達として始まった関係だ。それがど

こかの時点で彼女の中で性質を変えたのだろうか。

僕を見ているだけで、胸は重く厳しく締めつけられて、ふたつの壁のあいだに挟まれて身動きがとれなくなった人のように、そのまま進むことも退くこともできない。肺の動きが不規則でぎこちなくなり、生ぬるい突風の中に置かれたみたいひどく息苦しくなる。これまでに味わったことのない奇妙な気持ちはどうにかしたいとあがいているのが読み取れる。

僕の率直な視線は、少女から身体のあらゆる力をもぎ取り、持っていつてしまったようだった。なんとという視線だろう。それは研ぎ澄まされた鋼の長い針のように、彼の胸を一直線に刺し貫いていた。背中まで突き抜けそうなくらい深々と。

しわくちやになっているのは泣いたあとだろうか。指でなぞった僕は、そこにラブレターを強要された痕跡とそこに横たわる悪意を感じとった。こんな形であなたに想いを伝えたくなくなかなかたのにと書いてある気がした。僕がこの世界で一番忌み嫌う、たんなる余興や好奇心のためだけに攻撃して笑いものにしてしている有象無象の残酷な遊びを見出した。

「……そういえば重清君がいつてたな……最近タチの悪い遊びが流行っていると」

重ちーもラブレターをもらった時に気づいたらしくひどく憤慨していたのを思い出す。先生を誘導して現行犯が発覚し、ホームルームを潰して部活や放課後を生贄に捧げるほどの徒勞を強いた癖に主犯格の女はまだ懲りていないらしかった。

「……むりやり書かせておきながら振らせる。笑いものにする。胸糞悪くなる話もそうそう無いな」

ターゲットの少女か、呼び出された男子生徒か、どちらを笑いものにしてもいいようによくねられたシンプルながら悪意満点のシチュエーションだ。

「罰ゲーム……だったかな……僕を指定したのは……いや、させられたのかな」

少女がいつも威圧的な笑いの真ん中にいることを僕は知っていた。きつとこの文章そのものでさえ検閲が入っているに違いない。なんて屈辱的で卑劣なものだろうかと目眩がする。集団でなければトイレに行くことも意見をすることも出来ない癖になにをしているんだろうか、と呆れすら湧いてくる。

ルーズリーフを破ったやつじゃなくて、ちゃんとした便箋のたたみ方をしているルーズリーフ。ジョルノ君へと書いてある文面。前から思っていたが、少女は字が綺麗だ。

僕は体育館裏に向かった。

「志帆さん」

僕が呼びかけると、ずっと俯いていた彼女はとうとう死刑宣告を受けた冤罪の囚人のように絶望し切った顔をしていたのだが。弾かれたように顔を上げて僕を見た。明らかに混乱していた。有名人にいきなり名前と呼ばれたファンクラブ1桁のミーハーな女の子のような反応をしている。メガネがズレていて、ヘアピンが取れかかっていることすらわからないくらい、狼狽しているのがわかる。

「こんな所にいたのか、帰ろう」

有無を言わさず手を伸ばす。

「え……………え……………君……………」

「やっぱり忘れていた巻？ ジョルノでいいって言っただろ？ ほら、はやく。ドウ・マゴでお茶するって約束しただろ」

「あ、あの、えっ……………えっ……………!？」

即興の演技が出来る度胸があったらトイレの個室に閉じ込められて水をぶっかけられたりしないだろうな、と僕は他人事のように考えていた。重ちーが心配して時々話しかけている関係でたまに話す程度だった僕は、少なくとも焼却炉あとで隠れている女子生徒たちよりはずっとマシだと考えていたのだ。

僕はそのまま帆波志帆を体育館裏から連れ出し、本当にドウ・マゴに連れて行ったのだった。帆波は何度も何度も僕に頭を下げていた。

「ありがとう……………ほんとにありがとう…………… ジョルノ君……………」

「で、今度はなんの本を人質に取られてたんです、あんた？」

「万葉集の初版本なの。やっと大学から借りられたのに」

「だから、なんだって毎回そんなに大事な本を学校に持つてくるんです？ 無駄じゃあないか、やつらにつけ入る隙を与えるなんてバカのすることですよ。ほら」

「あ、あれっ、いつのまに!？」

「そんなことどうだっていいじゃあないか」

僕がため息をつくとき帆波は息を吹き返したような顔でありがとうございまずと頭を下げた。首は痛くならないんだろうかと心配になるレベルだ。

「あの…… ジョルノ君…… その……」

「ああ、これ？ 返した方がいいです？」

「うん、返して、ごめん、ありがとう」

「どういたしまして」

ラブレターを大切に大切にしまい込んだ帆波は涙を拭う。

「なにか奢るよ、なにがいい？」

「ひとつ？」

「お小遣いピンチなの、ひとつでお願い」

帆波に拜まれて僕は仕方なく期間限定のいちごのスイーツで妥協したのであった。

「ところでその返事、いります？」

「ううん、いらない」

「そうですか」

「うん、まだ恋する自分に酔っていたいから、まだいいよ。ジョルノ君のことちゃんと好きになつたら考える」

ある程度打ち解けた瞬間に饒舌になり、懐く性質がある帆波はなるほど重ちーと仲良くなるはずだと僕は思った。

「わたしね、自分の中に何か芽生えるのを感じてるの、今。たとえば、気持ちのいい春の夜、あまりよく知らないけれど好意を持っている男性と待ち合わせをしていて、どこに食事に行こうか、飲みに行こうかと考えながら電車に乗っているときのような浮かれた感じ？ 今晚やれるかやれないかとかまったく考えなくても、そのひとの

整った立ち居ふるまい、わたしのために装われた服の柄とかコーディネートコートとか笑顔とかをみていると、まるで遠くの美しい風景を見ているように、自分の心までもがきれいになったような気分になれる感じがするの。ずっと失われていたそういうきうきをするの」

「それはもはや妄想では？」

「それがいいの、面白いから」

「そうですね。よかったですね」

「うん」

僕はスタッフが持つてきてくれたケーキに集中することにしたのだった。

カセットテープとは、磁気テープをプラスチックケースに収めた、オーディオ用メディアのことである。フィリップス社が開発した。コンパクトカセットが正しい名称だ。

日本では、70年代から90年代初期にかけて録音ができるオーディオ用メディアの主流であった。レコードと共に音楽などのコンテンツの販売にも多く利用された。かつてはレコードに匹敵するダイナミックレンジを持つメタルテープやハイポジション、高級ノーマルテープなどが販売されていたが、CDなどのメディアに押されて現在ではノーマルポジションのベーシックなモデルのみが細々と製造・販売されているのみである。

僕が見たのもずいぶん久しぶりだった。保護者の警察官が愛用している車についているのがカセットテープに対応しているからかもしれない。音声は調子が悪くて雑音が大きかった。どうやら劣悪な環境で再生したらしい。

電池が切れかかっているカセットテープは音が細くなり、ツツン、ツーンと不細工な響きを残して何も聞こえなくなる。埃をふいてやると僅かながら復活して背景からは音楽が、泡のように浮かんで消えていく。DJはノンストップでポップソングを流しているようだ。

やがて鳴っていたラジオを止めて、音声の流れ始める。ラジオが与えてくれる音楽や笑いやスポーツがもつとも身近で安価な娯楽だ。

昼間のラジオ番組は主婦と高齢者を主なリスナーと設定して作られている。出演している人々は気の抜けた冗談を口にし、意味のない馬鹿笑いをし、月並みで愚かしい意見を述べ、耳を覆いたくなる音楽をかけた。そして誰も欲しがらないような商品を声高に宣伝した。まるで嘔き井戸から無限に溢れる音のように、ラジオはよくお喋りしている。

「…… いったいなんだ？」

カセットテープには延々とラジオがやかましく煎りつくように鳴っている。メカニズム化したセレナーデが活字のように唸っている。騒音化した夜の曲だ。ザワザワするのは僕の心がせいしているからだろうか。

「…… 4月16日、ジョルノ君と初めて話した」

声が怯えきつている。青ざめた声だ。

「…… 4月17日、日直を京ちゃんに変わってもらって、またジョルノ君と話した」

彼女は歯を鳴らすような声で言った。その声には追い詰められた者が発する独特の響きがあった。不安にせき立てられるように、思い出すのも恐ろしいように首を埋めて言うようなくぐもりがある。言葉がかすかに震えて、自信がなさそうに響く。

「助けてよ」

口がわなわなと震えている。おびえた、犬のような悲鳴に似た哀れな声が日付と僕と会話したり見かけたりしたささやかな日常のページを語っている。不安をひたすらに弱々しい声を出して訴えている。

しゃべるといっているのではなく、喉の奥にある乾いた空気をとりあえず言葉に出してみたといった風だった四音節以上の言葉はうまくしゃべれないらしかった。

言葉が急に固い木片にでもなったかのように咽喉につっかかる。声が、氷を頬張ったように咽喉につかえた。断水になっていた水道の

水が久しぶりに空気をおしのけて出てくるときのように、言葉がうまく出てくれないらしい。喋る言葉がぎこちなく、沈黙の中からそのつどどきまぎと投げ出すようだ。

「終わった、のか？」

1週間分だった。

それから毎朝1週間分の日記もどきのカセットテープが届いた。口が感電したように痺れ、先の言葉が続けられないのか、思いの切実さを嘲笑うようにして、するすると言葉が先滑りしてしまう。彼女は時折泣き出してしまった。

7つ溜まったところで僕は帆波に尋ねた。

「最近、カセットテープ使わなかった？」

「なんのこと？放送部にリクエストでもあるの？」

不思議そうに聞いてくる帆波に僕は肩を竦めた。一応ゴールド・エクスペリエンスで調べてみたがどこにも行かずふらふらしてしまう。「スタンドか？」

どんどん近づいてくる日付のカセットテープ。なんの意味があるのだろうか。気持ちの悪い心地しかないのだが。舌が膨らんでもつれて、口の中を塞いでいるような感覚で言葉が出てこない彼女は、喉が引きつって声が出ないとすすり泣く。

口を開いてもかすかに声帯が震えてひいーという掠れた音がするだけだ。声は舌の上で止まり、別人のように聞こえる。顎は震え、歯と歯はうまくかみ合わず言葉にならない。

無理やり言わされているのはわかる。

「やはり帆波の声だな……」

あの日から恋人だと早合点した女子生徒たちはちよっかいをかけるのをやめているようだから、僕は樽を放置しているのだが。

その声は、痰に絡まれたようになって二三度上ったり下ったりしたまま、咽喉のどの奥の方へ落ち込んで行った。

すっかりカセットテープの彼女はノイローゼになっている。しゃべれたときとまったく同じ思考をしていた。

たとえば、足を踏まれれば、「痛い」とはつきり言葉でいう。TVに

知っている場所が映ればまるで口に出しているようにいう。それを音声にしたことで、微妙な変化が起こってきた。言葉の後ろに広がる色が見えてきたのだ、と電波じみたことを少女はいい始めた。

僕が（てんで記憶はないが）優しく接しているとき、ピンクの明るい光のイメージでとらえた。（やはり覚えがないが）言葉やまなざしは、落ち着いた金色、道端で猫を撫でれば、手のひらを通して山吹色の喜びが伝わってきた。そう感じて生きていると、言葉の持つ強烈な限定性が押しつけがましく思えた。

まだ幼かったから、肌身で知ったのだろう、そのときはじめて表現するはしから逃げてゆく言葉というものに、深い興味を持ったのだ。瞬間と永遠を同時に含む道具。伝えたい言葉は心の回転とはうらはらに、体はどんどんマヒしてゆき、届かなかった。それがもどかしくてたまらないというのだ。わけがわからなかった。

「……重清君、帆波さん、最近変わったことはないかな？たとえば、そうだな、スタンドの矢でいられた、みたいな」

「ううーん、知らないぞ？帆波さんになにかあった？」

「いや、思い過ぎかもしれない」

「そっかあ。もともと帆波さんは、図書室や保健室でよく本を読んでいるぞ？最近はおもつと色々読んでるぞ。なんか、怖い話とかみすてりーが好きだったっていったぞ」

今の時期によくある麻疹みたいなものだと思っていたのだが、どうやら違うらしい。

「引越してくる前からそんな感じだったぞ」

「ひっこして？」

「そうそう。お父さんがケープヨーク発掘からやっと帰ってきたって喜んでたぞ」

これがカイロなら警戒のひとつでもしたがグリーンランドだ。国の名前を聞いた瞬間に僕は興味をなくした。

「そういうえば、どうして帆波さんはいじめられているか知ってる？」

「……チラッと聞いた話だと、帆波志帆って人が昔もいたらしいぞ。ママが言ってた……引越していった友達にいたって」

「たまたまでは？」

「よく似てるっていったけど。ママのママの友達にもよく似た人がいたって」

「親子なら似るのでは？」

「名前まで一緒はおかしいぞ」

「噂が本当なら確かにそうだな……根も葉もない噂なら可哀想だな。とんだとぼっちりじゃあないか」

「ママの友達の帆波さんは怖い人だったらしいぞ」

「どんなふうによ？」

「好きな人に恋人が出来たら怒って夜中に押しかけてきて、鍵もチェーンもかかっていたのにぶち破って、家族までみんな半殺しにしたらしいぞ」

「なかなかアグレッシブな人だったんですね」

「もともと妄想入りがちで嘘つきな人だったらしいぞ」

僕の脳裏には山岸由花子先輩がどういうわけかチラついた。

「でも！オラたちの友達の帆波さんは、そんなことする人には見えな
いぞ」

「そうですね。それについては同感です」

帆波志帆について奇妙な噂があるとわかった僕は、それが本当かどうか調べることにした。生徒会室にある卒業アルバムを確認しに行くため、職員室に向かうことにしたのだった。

「……ここまでそっくりだと不気味だな」

僕の前には重ちーの母親、そして祖母の卒業アルバムが並んでいる。目を皿にして探し回った結果、たしかにいずれの年にも帆波志帆は存在していた。

「メガネ、ヘアピンに違いはあっても髪型なんかは同じだな……ただよく似てる親子にすぎない可能性もある」

ただしくは20年前に帆波という苗字の女子生徒は二人いて、そのうちのどちらかが母親の可能性が高い。

「ああ、それはね、お姉さんの方ね」

「！」

「私、妹さんと同級生だったのよ」

弾かれたように顔を上げると、そこに居たのは内密に頼むわねときさやく生徒会室顧問の先生がいる。どうやら双葉に付き合つてこの町の怪奇について調べて回っている僕を覚えてくれたようで、特別にと教えてくれた。

「帆波さんは双子で、姉がアグレッシブで妹が大人しい性格だったの。恋人でもない好きな人の家を持定したり、傷害事件を起こして周りを振り回したりしていたのは姉の方ね。妹さんはペットに農薬を混ぜて殺せと言われて出来ないと罵られたり自殺ごっこを強要されたり可哀想な子だったわ。ただ似すぎていたものだから話しかけるまでどちらかわからない。そのせいで遠巻きにされたのよ。でも、姉は事故で死んだわ」

「!？」

「よく自殺の振りをして驚かせていたから、ある意味自業自得ね。自殺の練習をよくここでしていたわ。事故はここじゃあないけど紐が絡まって死んでいたのよ」

僕は今いる柵の前で先生をみる。

「そうよ、そこで」

「妹はどうなったんです?」

「可哀想にお姉ちゃんが、お姉ちゃんが、って発狂していたわ。先生が何人も押さえ込んでむりやり病院に担ぎ込まれたのよ。すっかり正気を失ってしまつてね。少しでも逃れるためにわざわざ左利きになったのに、やっぱり姉のことが吹っ切れなかったみたい。彼女は転校してしまつてそれきりよ」

「……………だから、帆波さんはいじめられているんですか。姉に似ているから」

「子供は親のいうことが真実だと盲目的になるものよ。いくら私達が論じたとしても学校に躰を押し付けている時点ですくなく人生送れないわ」

もちろんオフレコでねと先生はいう。僕は帆波姉妹について調べて回ることにした。

「そんなに気になるなら記事を見たらいいわ、図書室の。アーカイブにあるから」

先生は帆波妹に相当入れ込んでいるような臭いをかんじとった。

帆波姉はだいぶ頭をやられた電波だったようだ。惚れっぽくて尽くすタイプだったようで、男をダメにする女性だったらしい。勝手に好きになった人間を恋人呼ばわりして、その扱いをしろと要求していた。これに対しやめてくれと断ると無視する。

頼まれてもいない旅行を予約しきそいをかけ、拒否し続けると住所を的確に言い当てた。そして真夜中にいくと宣言する。

身の危険を感じた男は断りのメールを送信すると同時に警察に連絡、0時に出勤できるように待機してもらい、自身もアパートの自室を監視できる位置へと隠れた。そして同日深夜、帆波姉は本当に訪れたのだ。さらにバッグから取り出した警棒でドアを殴打、破壊。男は警察に通報し、飛び出して武器を取り上げようとするが反撃を受ける。そして繰り広げられる破壊・暴行行為。

「ほんとに新聞沙汰になってるのか……」

未成年だから伏せられてこそいるが、20年前の事件ゆえによく調べれば容易に特定出来てしまうガバガバっぷりである。さすがは芸能人の住所が平気でのつていただけはある。

「これが帆波夏帆…… 帆波志帆の姉か」

まだ未成年の色恋沙汰のもつれ軽く見られていた時代である。男の方が非難される論調が散見する記事を見ていくと、そのうち姉が事故死したと書いてある。住所が載っていた。

「…… 波止場……」

それは倉庫街。僕がかつて億泰先輩の父親に連れていかれて肉の芽を植え付けられるはずが失敗し、家政婦である彼女を義父に殴り殺されたときに連れてこられた場所だ。ドリーム・シアターで支配人の息子にころされかけた舞台でもある。なんとなく因果を感じながら僕は下駄箱に向かう。

「……」

調べたばかりの住所が書かれた紙が書いてある。筆跡は覚えがない。左手でかかれたものようだ。

スーパーシスター2

倉庫のひとつひとつはかなり古びていて、煉瓦と煉瓦の間には深い緑色の滑らかな苔がしっかりと貼りついている。高く暗い窓には頑丈そうな鉄格子がはめられ、重く錆びついた扉のそれぞれには貿易会社の表札がかかっていた。

のっぺりとしたコンクリートの壁には冷凍倉庫に使われていたころの名残りの配線や鉛管がもぎり取られたままところどころにぶら下がっていた。様々な機械やメーターやジャンクション・ボックス、スイッチのあとには、それらがまるで巨大な力でむりやりむしりとられたかのように、ぽっかりと穴があいていた。

頭の上に、びつくりするほど巨大なガスタンクが青白い照明を浴びて、気球のように浮かんでいる。

「……ゴールド・エクスぺリエンス」

僕は下駄箱に入っていた紙切れを案内人の犬に変える。迷うことなく走っていく後ろ姿を追いかけていくと、蔦だらけの放棄されたと思われる倉庫にたどり着く。

「くうーん」

中に入りたいよう、とがりがりシャツターを悲しげにひっつかいている犬においついた。がしやんがしやんと飛びかかろうとしては失敗し、慈悲をこうように僕を見上げる。

「ゴールド・エクスぺリエンス」

ぶわつと蝶が舞い上がった。

「ッ」

ひどい腐臭が頭をおかしくしそうだった。それはまさしく陰惨な殺人現場だった。アンジェロが死刑囚となるきつかけとなった3人目の少年の末路を彷彿とさせる。

錆び付いたナイフからは鉄と血の臭いがした。顎の下に差し込み、下腹部まで真一文字に分厚い筋肉を引き裂いていった形跡がある。死後十二時間を経た屍体内部から体温は完全に抜け切っている。カッターで肋骨を折り、一本一本除去して左右の臓器を取り出し、並

べられていたのが見えた。

頭に切れ目を入れ、後頭部から額へと頭皮を剥いでいったようだ。顔の表面、目や鼻や口の部分に、ゴワゴワとした剛毛がかぶさり、頭皮の白い裏側が無影灯にさらされる格好だった。皮一枚で顔が作られているのがよくわかる。

僕は吐き気がした。

明らかに後は縫合するだけだった。空になった胸腹部に、折りたたんで丸めて新聞紙を入れてポリウムを持たせ、縫い合わせてある。頭部も同様に縫うと、全身をきれいに洗って浴衣を着せる手筈だったのだろう。はらわたが抜かれた分、解剖前より痩せて見える。空洞のブリキの人形のような。死のかたまりみたいなもの。

近くには山盛りのカセットテープとラジカセが置かれている。

人と呼ぶにはあまりにも変わり果てた姿だった。座ったままの死体は、ボタンで蓋の開く電気ポットのようだった。首の端の皮一枚で？がり、まるで頭部そのものが、首から出る血液の柔らかい蓋であるかのように。

身体から力が抜けていた。魂が蒸発してしまったかのようにだった。

この遺体そのものより、誰かが殺したという事実が怖い。そこにある意思や感覚が怖い。犬が悲しげに遺体の前で鎮座しているのがいたたまれなかった。

「…………… どういう、ことだ？ 帆波さん…………… いや、違うな、あの筆跡は帆波さんじゃあない」

腐爛した子供の死骸が裸のまま、捨ててある。変色した皮膚のところどころが、べつとりと紫がかかった肉を出して、その上にはまたあおばえが、何匹も止まっている。そればかりではない。一人の子供のうつむけた顔の下には、もう足の早い蟻がついた。

うじが湧き、堪らなく臭い。それでいて水晶のような液をたらたらとたらしめている。死んでから幾日も経ち、内臓なども乾きついてしまった蠅がよく埃ほこりにまみれて転がっているにしては、ずいぶんと活きがいい遺体だ。

置かれたままの制服にある生徒手帳を開くと、それは帆波をいじめ

ていた女子生徒のものだった。

「……っ！」

思わず固まる。足元が滑る。こけてしまった僕はつい遺体に手をつけてしまった。ずるり、と嫌なヌメリがある。

「……なんだこれ、抜け殻みたいだな」

そこには薄い薄い膜がはっていた。

その音は僕に、ねじれに似た奇妙な感覚をもたらした。痛みや不快さはそこにはない。ただ身体のすべての組成がじわじわと物理的に絞り上げられているような感じがあるだけだ。雑巾みたいに絞り上げられていく感触がそこにはあった。

「ゴールド・エクスペリエンス」

構えをとかないまま距離をとる。

忘れられないくらい奇妙で怖いえないの知れない思い出が湧いて来る。

それは不思議な光景だった。細分化された遺体のパーツが、そこにじつとりとこびり付いた粘着質の膜が、じつと中をのぞきこんでいるように感じたのだ。あきらかにそこだけがなにか人間ではないなにかがいて、別の時間性が流れているように感じられたのだ。そして自分たちを巻きこまんとしている。あるいはもう既に一部を巻きこんでいる。その新しい体系に喜んで身を委ねているように僕には思えた。

そのときまた、ふいにさっきの感じが襲って来た。いいしれぬ圧迫感、ゆがむ空気、苦しい呼吸。ただただみじめな胸の苦しみだけが満ちてくる。ものがちやんと手につきそうもない。

「スタンド攻撃なのかッ……?!」

ゴールド・エクスペリエンスは僕の困惑を強調するようにおぼつかない。

「…… あれはッ！」

膜が立ち上がっていた。かつて女子中学生だった皮膚から剥がれ

落ちた膜のようなものが人の形になっていく。浮遊し始めた制服やらなんやらがひとつにまとまっていく。

「……!?!」

えぐい光景と音だった。人形が、顔が汚れ鼻が欠けするうちにオバケのように気味悪くなる。紐を引くと同じセリフを話す人形のようになっていく。気づけば胸の蓋を開けると銀色の電池が入っていて、話すとき目が光るように作られた人形のような、雲母の皮膚を持つマネキン人形がそこにいた。

「あんたは……」

「きてくれたのね、ジョルノ君」

「帆波さん……」

帆波の声だった。つい、と右手が向けられる。にたあ、と遺体から生成されたマネキンが笑う。側だけはどうみても帆波志帆だが僕は首を振った。

「いや、違うな」

「じゃあ誰かしら」

「帆波夏帆だな、あんたは。帆波さんはこんなとき、きてくれたのね、なんて言わない。来ちゃったんだ、というはずだ。悲しげな顔をして。それに彼女は左利きだ。右利きじゃあない」

「ふふふ、ずいぶんと志帆のことをわかってるふうな口を利くじゃない。あたってるのがムカつくわ」

「亡霊がスタンドを使うなんて、本当になんでもありだな。どうして帆波志帆に害を与えるんです？あんたのせいであきらかに彼女は孤独だ」

「そんなこと些細な問題じゃないの。わたしがいないとあの子はすぐいじめられる。いくつになってもそう。わたしがいないと暴力を振るわれるようになる。何度言っても男を好きになる」

「それはあんたがそういう男を育てる天才なだけじゃあないのか」

「知ったふうな口を利くじゃない」

帆波夏帆の周りに四角い物体がいくつも出現する。1. 2. 3.

4. 5. 6と数字が割り振られていく。まるでこの世に角度は90

度しか存在しないかのように視界一面に四角い物体が出現した。

「志帆は、わたしの妹は弱い子なのよ。あなたになにがわかるのよ」

「ごうつと箱がとんでくる。そしていきなり広がった。」

「ゴールド・エクスペリエンスッ」

とつさに殴り返すと軌道が変わり、近くにあつた鉄くずが中に入ってしまった。その箱が消えた瞬間に均等に6つにわかれてしまった。がしやがしやんとコンクリートに転がっていく。

「植物が根付かない…… それもすべてスタンドってわけか。そうやって勝手に帆波志帆に敵対する人間をバラしてきたってわけですか」

「そうだとしたら何か問題あるのかしら」

「帆波志帆は無事なんでしょうね？」

「わたしが志帆を害するわけじゃないじゃないの」

猟奇的な笑顔を浮かべて帆波夏帆がいった。

頭上には100面ダイスがある。ここまでくるともはや球体だが、僕目掛けて飛んできたそれは、展開して平面になり襲いかかってくる。なんとかかわして逃げると、コンクリートを飲み込んだそれがまた浮遊した。100もの均一な鉄の塊と化したそれらがこちらに向かつて降りかかる。僕はゴールド・エクスペリエンスのラッシュでなんとか防ぎきる。全てがオオカバマダラに姿を変えて飛んでいく。帆波夏帆に近づこうとするが浮遊する大小様々なダイスが邪魔をした。

「ちィッ！」

進行方向を変えた僕は跳躍して樹木の足場をリアルタイムで生成し、一気に移動する。樹木を飲み込んで裁断しようとしてきたダイスは内側から崩れて霧散した。

天井を支える鉄骨を分解し始めたダイスにギョツとした僕は、降り注ぐであろうドーナツ型の鉄の雨から逃れるべく移動した。落下速度と重さを考えたら樹木でカバーするのは無理だ、貫通してこっちが怪我をする。

「ゴールド・エクスペリエンスッ！」

ラッシュにより僕の近くのはオオカバマダラとなり、距離があるものは足元から生成された群生植物に飲み込まれて幹の中に閉じ込められていった。

「どうしたの、ジヨルノ君。逃げてばかりじゃ何も出来ないわよ？植物園にでもするつもり？」

くすくす帆波夏帆は笑っている。出入り口を塞ぐような形で立ち尽くす彼女目掛けて僕はゴールド・エキスペリエンスを発動する。足に絡みつく草のつるが進行を邪魔する。

「へえ」

「いいですね、それ。少なくとも鼻がつぶれる悪臭は誤魔化せそうだ」
「いろんな可能性を潰され、いくつかの行動を制限されることになった隙を狙って本体であろう彼女を攻撃する。彼女はなんの躊躇もなく葛を引きちぎり、その攻撃をかわした。カウンターが発動して一瞬体がズタズタになって吹き飛ぶが笑い声は止まらない。

「びっくりするじゃないの。せつかく用意した体が無くなるじゃない、やめてよね」

また膜だ。膜がちぎれ飛んだ腐乱死体を回収してひとつの肉体を生成していく。

「こ、これはッ!?!」

帆波夏帆を作り上げていくはずのパーツたちが様々な生物に変化していく。蛇に噛まれ、葛に全身を拘束され、クワガタに指先を挟まれている。

「無駄ア！」

僕は雄叫びと共にパワーで吹き飛ばした。夏帆は宙を舞い、不自然な格好で壁に激突して崩れ落ちる。

慌てて立ち上がるうとしたが、それよりも僕の行動が素早かった。支えの「手首ごと」弾き飛ばす。

「うぎやああああ！」

一瞬にして両手首を切断された夏帆はその迸る鮮血によって襲い来る恐怖と、灼熱感にも似た激痛に悲鳴を高らかに奏でる。

「悲鳴を上げてても無駄だ、誰も来ないからな」

僕は冷ややかな瞳で夏帆を見下ろして続ける。箱が僕を分解しようとして襲ってくるが、夏帆を盾にすれば静止した。

「帆波志帆はどこですか？」

「ううう……。こ、こんなことが……。ゆ、許されると、おおお……。思っているの!?!」

「許されない? 誰にですか? 決して許されることのない罪はあなたにあるんだツ! 無駄無駄無駄無駄無駄アー!」

ゴールド・エクスペリエンスの集中砲火により弾き飛ばされる。また帆波夏帆はバラバラになって吹き飛ばされる。

「痛いじゃないの」

「……」

本来なら致命傷となるはずの毒を打ち込んだのに帆波夏帆の精神は傷つきもしていないようだ。やはりこの女は人間ではないらしい。

「まさか、あなた……」

朽ち木を打つが如く何の手答えもない。手ごたえのなさに苛立ちが募る。自分の発した言葉が水に落ちた油のようにぎらぎらと浮いてるだけなのに気がついた。

「あなた……。まさか、本体がないスタンドか?」

「だとしたら?」

「帆波志帆は無事なのか?」

「だから言ってるじゃないの。あの子が望む限りわたしは生き続けるのよ」

にたあ、と帆波夏帆は笑う。

「そうか」

僕はゴールド・エクスペリエンスを発現した。

「じゃあ、どれくらい生命に変えれば死ぬんです?」

僕の目の前には小学生くらいの少女がいる。彼女の容姿にはもともと物語風なところがあつた。それがさらに若くなったことで物語

に出てくる恋する乙女そのままの風情だった。

日かげの花のように誰に知られずこっそりと小さくなった少女となった。より不気味な美しさが増した。

若々しい生命の力に悩まされているようにさえ見える。月明かりに照らされたつるつるした笑顔は日常に見せるそれとは全く違って、本当に時間をこえてここにいるように若く、希望に満ちていた。

「あーあ」

幼い姿になった帆波夏帆は残念そうにためいきをついた。倉庫の中は決して枯れることのない植物園と化している。ようやくだ。ようやく自分を維持するので精一杯になるまで弱体化するのに成功した。なかなか骨が折れる作業だった。思い込みの強さがスタンドの強さに繋がるという特性上、自我に目覚めてしまったスタンドほど厄介なものはないのだ。

「いいかげん、帆波志帆を解放しろ。どこにいるんです?」

「仕方ないわね、そこまで言うなら案内してあげるわよ」

どこまでも尊大な姉だ。

時代の移り変わりと共に、大型で老朽化した倉庫の建物が利用されることがなくなってきた。建替えもされずそのまま、治安も悪くなる、人が寄り付かなくなる、そんな建物に目をつけたのはアーティストの人達だ。

高い天井や古くて味のある建物に惹かれ、アトリエにしたり、改装して住居にしたりする人が増えて、町も魅力と活気を取り戻したという例がたくさんある。古い建物を取り壊さなくてもそんな素敵な利用方法があるのだ。

日本では観光地になっているところもある。古い大型の倉庫街は、その建物の美しさと立地で多くの人を惹きつけることに成功している。海の近くや運河沿いに立ち並ぶ倉庫は、その景色の良さを利用して、ショッピングセンターやレストランなどが入る商業施設に変貌を遂げている。

様々なイベントなども行われている。一時は老朽化に悩まされて

利用方法や解体するかどうか困ってしまったこともあるかもしれないが、今では立派な観光地になっている古い倉庫街はたくさんある。

昔の倉庫はとても大きな建物であることが多いので、解体費用を捻出するだけでとても大変なことだ。それでも、建物の外観が美しく、ある程度の改装費をかけてでも保存したいという地元の要望がある古い倉庫は、美術館や博物館などに転用されている。広いスペースをうまく使った転用方法だ。

そう、帆波夏帆は言う。

「わたし達の母はこのあたりの設計を任された建築家であり、母の実家は不動産屋なの。帆波家の所有するものもあるわ」
「ああ、なるほど。そもそもここは君たちが自由に立ち入れる場所なのか」

「この町からの依頼で、この倉庫街の再生を任されているから実質責任者ね」

「だから、平気で犯行を重ねられたってわけか」

「そうね。否定はしないわ」

帆波夏帆は薄暗い倉庫街を歩く。だいぶ歩いてくると雰囲気が変わってきた。

「この辺りはクリエイターが集まりだいぶ活気を取り戻してきたエリアよ」

都市再生の成功事例として予算委員会で挙げられる予定だという、以前は鉄道の操車場と倉庫街だった場所がここらしい。車社会の到来で貨物輸送からトラック輸送にとって代わるのに応じて、見捨てられた都心部の空洞エリアだという。

1980年代に使われなくなった倉庫が貸倉庫として活用されるようになり、次いでニューヨークなどを参考に倉庫がロフト物件として活用されるようになった。

すると、東北地方の中心都市近くに住居兼ギャラリーとなる広いスペースが低賃料で借りられることに着目した、若いアーティストたちが集まるようになる。それに行政機関が注目するようになり、鉄道会社から地区一帯の広大な土地を取得し、共同で開発したことで本格的

な再開発が始まったらしい。

具体的には、公共交通機関をここまで延伸させて町への交通利便性を高めるとともに、建築条件を緩和するなどして、多様性のある街づくりを推進していく途中的らしい。

古い倉庫などがレンガ造りの外観を活かしながら、ギャラリィやカフェ、ブティックなどにコンバージョンされる一方で、建築家がデザインした新築の複合ビルも建つなど、異なる事業者が異なるデザインの建物を提供し、個性的な町になってきている。

「……たしかにずいぶんと賑やかなエリアだ」

住居やオフィス、商業施設を別々にゾーニングするのではなく混在させることで、多様な目的で訪れる人が行き交い、町が活気づく。ショップやギャラリィ、カフェやレストランが建物の1階に店舗を構え、華やかな街並みをつくり出し、建物の上層階はオフィスや住宅などを混在させる。

また、住宅についても、低中所得者から富裕層向けまで、古い倉庫を改修したロフトやアパートメントから高級高層コンドミニアムまでと多様性を持たせている。倉庫ほどの広さで蔵書の多さでも有名だが、同じ棚に新書と古書、ハードカバーとペーパーバックを並べる書店としても知られているチェーン店も出店予定とのこと。

こうして若いクリエーターからエリート層、リタイア層まで多様性に富んだ居住者が移り住むようになり、独自のコミュニティが生まれる。毎月第一木曜日は、ギャラリィを夜遅くまで営業してイベントが実施され、観光客も集めている。

「古い建物を持たない街は、思い出を持たない人間と同じなのよ。だからわたし達はここに住んでいる」

取り壊そうとされる古い建物を買取り、リノベーションするだけでなく、建物周辺の活性化も促す活動をしている帆波姉妹の母親。そのアトリエ兼自宅の巨大な敷地に通された僕は、大きな車庫にたどり着く。あの倉庫街からここまでだいぶ距離がある。ハーヴェスト並に射程範囲が広いスタンドだ、帆波夏帆は。思った以上に驚異的なステータスである。

「……これはなんの冗談です？」

そこには帆波志帆の等身大の石像があった。精巧な彫刻が掘られている。墓が、うずくまった獣のように、黒い地肌だけを見せて、ひっそりと静まりかえっていた。

「なにを言っているの？こころでもしないと、志帆は潮風にさらされて粉を吹いたように風化してしまうのよ。可哀想じゃない」

帆波夏帆は鼻で笑う。

「手伝いなさいよ、あんたがわたしをこの姿にしたせいで志帆の世話がやけないじゃあないの」

墓石の手入れとは思えない、少女がお風呂に使うと思われるものが入ったバケツが渡される。どうやら帆波夏帆はこの石像が帆波志帆だといいたいらしい。どうやら頭まで電波だったようだ。

「あんたには珍しく察しが悪いのねジョルノ君。しかたないわね、スタンドを使ってごらんなさいな」

「……？」

よくわからないままゴールド・エクスペリエンスを使おうとした僕は、植物が根付かないことに気づく。

「……ッ?!」

僕は今生命エネルギーを石に注ぎ込んだ。僕は生きている人間に意図的に生命エネルギーを注ぎ込んだことがある。億泰先輩の父親はたしか精神と肉体が乖離し、精神だけがみなぎり肉体が置き去りにされてしまっていたはずだ。それは自律神経とみやくの矛盾から判定することが可能だが、全く同じ現象がこの石に起きているのだ。僕は帆波夏帆を見た。

「だから何度もいつてるじゃあないの。志帆が望む限りわたしはわたしであり続けるのよ。ほら、手伝いなさいよ、ジョルノ君」

僕はそれに応じた。墓を掃き清め、墓石をせっせと洗い、ピカピカに磨く。人間の毛髪の一本一本を忠実に再現している石像を前にすると冷めたい風が吹いて来るように感じる。この石像は生きているのだ。石の不揃いな様子が、普段着をきた人のようで自然な表情が感じられる。僕は石を前にして、しばらく突っ立っていた。黒光りした

固そうな石には帆波志帆の面影がたしかにあったのだ。

「スタンド能力にまきこまれたのか？」

真っ先に思いついたのがこれだった。仗助先輩のクレイジーダイヤモンドのごとく石と人間が融合してしまったならありえる話ではないか。

「スタンド能力じゃあないわ。これは呪いよ」

「呪い……誰かにされたってことですね？誰の仕業だ？」

僕は帆波夏帆に詰め寄った。彼女は鼻で笑う。

「帆波志帆よ。彼女自身の呪いなのよ」

「意味がわからない。どういうことですか？」

「そもそもアンタは致命的な勘違いをしているわ、ジヨルノ君。志帆はこれが普通なのよ」

「なんだって？」

「これは1978年から今に至るまで帆波家を巣食う呪いなの。奇病なのよ。そのせいでわたし達はあんたとは致命的に何もかもが違う」

帆波夏帆は語り始めた。ある帆波家の男が奇病にかかったのは1978年ケープヨークのクレーター跡を調査していたときだった。発病から48時間以内に発症した同僚はトマトケチャップになり、男もまた同じ運命になると緊急搬送されたグリーンランドの救急医療センターの誰もがそう考えていた。石になっていく奇病だった。

進行性骨化性線維異形成症という全身が骨化していく難病は既に存在していたが、男の症例は明らかに異なっていた。真正正銘の石になるのだ。しかも年齢分入る亀裂から皮膚呼吸していることがわかっていて。つまり生きていくということだ。

未知のウイルスによる感染症にかかった哀れな犠牲予定者として男は医学会に貢献するモルモットとして生かされるはずだった。30日を経過したころ、なんと男は脱皮したのだ。そして僅かに歳をとっていた。その日から男は30日間一睡も取らず覚醒状態となる。あまりにも異質な奇病である。

男は日本に帰りたいという思いつきだけでグリーンランドの権威ある病院の全ての人間に同じ病を感染させた。その病に感染すると

高確率でスタンド能力に目覚める。グリーンランドと日本は秘密裏に男の治療を行うという名目で帰国を実現させた。

不幸にも見舞いに来ていた帆波家の人間も感染した。その中に帆波家当主である母親と双子の姉妹もいたのだ。全員がスタンド能力に目覚めてしまった。

「あなたにわかる？14歳から人間によく似た姿なのに人間とは全く異なる性質・成長過程を持つ異種族になってしまう呪いにかかったわたし達の絶望が」

帆波夏帆は笑うのだ。

「あなたは致命的な勘違いをしているわ。わたしは志帆のスタンドなのよ。わたしは絶望に包まれている上に強靱な肉体を手に入れてしまったために変質した精神から生まれいでたスタンドなのよ」「なんだって？」

「わたしが再生するのはこの奇病の特性が反映しているからよ」

帆波夏帆はいう。スタンドたる彼女はもう出来ないが、帆波志帆は皮膚を岩のように硬化化させることができる。これは、水分を一気に内部へと移動させ乾燥させる細胞システムによるものである。推定寿命は240歳。

あまりに変異しすぎたために同じ感染者間の性行為によって生殖が可能。まれに人間と恋に落ちる者もいるが、破局する運命にあり、また遺伝学上、人間との間に子供はできない。

姿は次第に変化するのではなく、6年ごとに変態し、脱皮して一気に姿を変えて成長する。不定期かつ数カ月にも渡る睡眠期があるため、勤務時間の決められている職業には就けない。そのため、非正規の短期雇用や、芸術性の高い職業に就く者が多い。

「まさか、帆波さんは……」

「そうよ。だからわたしは生まれたのよ、休眠期に帆波志帆をするためにね」

帆波夏帆は自嘲する。

「わたし達は死んだら風に吹かれた砂のようになり短時間で崩壊するため、なにも残らないわ。文字どおりね。だから死んでないわよ」

「……君たちは本来なら35さいってことですか」

「そうね」

「……… 休眠期はいきなり来るんですか？」

「そうよ。ある日突然休眠期が来て、一度眠ると30〜90日は眠り続けるのよ。覚醒期は2カ月ほど眠らない」

麻薬みたいだな、と僕は思った。

殺人鬼の家

晩春から初夏へ移り変わる山里の、新緑の美しさは目を見張るものがある。神社の境内のくすのきが、若葉の季節には、緑という黄金色に輝いて、初夏の空の蒼によく映える。

春はどんどん深まっていった。風の匂いが変わっていった。夜の色合いも変化した。音も違った響きを帯びるようになっていった。そして季節は初夏に変わった。

夏の盛りを思わせるような暑い日のこと。梅雨が明けるにはまだ早すぎたが、こここのところ何日か真夏を思わせる日が続いていた。蝉の声が庭の木立の中から聞こえた。その声はまだそれほど大きくはない。どちらかといえば遠慮がちなものだ。

六月半ばだというのに青嵐が街路樹の枝を揺らし、白いシャツの胸元をはためかせた。秋から冬にかけて曇天しか見せない空もいまは力強く晴れ渡り、直線の陽射しを舗道やビルに注いでいる。

川に沿って植えられた樹々の若い葉の匂いがした。その緑色があたりの空気の中にしつくりとにじみこんでいるようだった。

目に映る何もかもが初夏のまぶしさをたたえて、勢いづいていた。人々のむきだしの腕、風に揺れる木々の緑。葉先に光る陽光、空気の匂い、何もかもがもう止まらない。

夏の勢いにあふれた、すごい青空だった。まぶしくて、そこいらじゆう光って見えた。こういう日が何日も続いて、本当の暑さがやって来る。好きな季節だ。

ゴールド・エクスぺリエンスのスタンド能力がもつとも生き生きとし始める季節の到来である。

待ちわびた日が訪れたのは、6月29日のことだった。
空条さんから連絡があったのだ。

「DIOが何故スタンド能力に目覚めたのか。それを調査してきた俺達は致命的なミスを犯していたらしい。人間の欲望するのは底知れねえ闇そのものだってことをいつしか忘れていたようだ」

帆波家について説明した僕に空条さんはどかりと椅子にすわると

深深とためいきをついた。思考をめぐらせたいのかもが少ない天井を眺めている。

「スピードワゴン財団はたしかに俺達に協力的だが、既に最大の脅威であったDIOはいない。協力者たちとの小競り合いはあるにしろ、世界の脅威はすでに去っている。むしろスタンドの矢という私利私欲に走る者ほどスタンド能力を得やすい厄介な爆弾が存在してやがる。こいつだけでも厄介だつてのに、奇病にかかるだけでスタンド能力に目覚めるだど？そのうえ不老？通りで政府側が隠すわけだぜ。人類の長年の夢じゃねえか」

なんと帆波夏帆、志帆姉妹の父親についてはすでに調査が終わっていたという。

空条さんたちが調べた結果はこうだ。グリーンランドにケープヨークというイヌイット以外人が住まない土地がある。そこは隕石で出来たクレーター跡で有名なところだ。いつ落下したのか？それはわかっていないが 数万年前だろうと言われている。

1978年、そのクレーター内で鉱物資源調査をしていた作業員11名。うち2名が原因不明の病気に感染し死亡したことがある。原因を調査した政府医師団は2名の調査員が共にクレーター内でころぶかなにかして、手足にすり傷などの 岩でこすったような 小さな負傷をしている共通点を見つけた。そして医師団はひとつの事を断定した。

このクレーター内のある隕石の中には数万年前のウイルスが閉じ込められて眠っており、それが傷口から血液に入り感染したものとしか考えられないというのだ。そのウイルスは隕石に付着して飛来したのかもしれない。

しかも 2名中1名の発病後の症状に常識では考えられない肉体的変化の事実が記録として残されている。ベッドの上ですでに彼は意識はなかったが、突然自分の指先からスタンガンのような火花を放電し、治療する医師の指を焼き切ってしまったという。

「まさか、その変化っていうのは」

「ああ、そのまさかだ。世界で最初にスタンド能力に目覚めたのがそ

の2名だ。スタンドの矢の材質は、ケープヨークのクレーターで採れる岩石と同じ物質だ」

空条さんはやられたぜとぼやいた。

「たしかに最初の調査では死んでいたんだろう、その作業員は。実際は休眠期だったようだが……。しかもそいつは奇病にかかっただけだ、目につくような能力に目覚めちゃいない。報告書に嘘はない。周囲に感染させるっていうスタンド能力に目覚めたとしても、未知のウイルスによるパンデミックで済んじゃまう。しかも病院まるごと感染源だと……？手術した医者まで感染しちまったら調査の整合性もクソもねえじゃねえか」

その医者がその国で一番権威がある人間だったことが災いした。奇病とはいえ環境さえ許せばそれは不老となり、新たな新人類として高みにいけることが確約された存在だ。いくらスピードワゴン財団が潤沢な資金源を持つ組織だとしても所詮は民間組織である。政府が2カ国も全力で隠匿に走ればいとも簡単に欺瞞情報だらけとなってしまう。

「もう一度洗い直しだな……」

「それならTG大学病院を重点的に洗った方がいいですよ、空条さん」
「あ？」

「僕が保護されて2回も入院した病院なんだ。頭の上からつま先まで僕は調べ尽くされている。世界で一番DIOの息子のことについてくわしいのはあの病院だ」

「…… やれやれだぜ。7年振りに煙草が吸いたくなくなってきた。DIOがためーをここに送り込んだのはそのせいじゃねえかと勘ぐりたくなっちゃうぜ」

悪霊の住む家とはこのことか、と空条さんが言った言葉がやけに残っている。

「さあて、そろそろ行くか、ジョルノ。この様子だと双葉照彦の身柄すら安全とは言いがたくなってきたが、やつを割るには娘の安全を確保するためにも吉良吉影の捕獲は絶対条件だ」

長い長い沈黙の後、空条さんは立ち上がる。受付から仗助先輩たち

が来たという電話がかかってきたからだ。僕は空条さんの後に続いた。

琢馬から借りている双葉照彦の私物があれば、爆弾魔の拠点が判明するのだ。ネックレスのたつたひとつの装飾でもゴールド・エクスペリエンスの手にかかれればあのスタンドの対象外である人間以外の生命体に行うことができる。いくらスタンド使いから見つけられない効果でもその生命体は双葉照彦自身である。自分を効果の例外から外することはできないのだ。

僕達は吉良吉影の家の前にいた。悪霊の住む家は初夏の眩しい青空の下で成仏をまちわびているようにさえ思えてしまう

「ここか」

「ここが爆弾魔、吉良吉影の家……」

「いくぞ」

「意外と普通の家っすね」

「豪邸だとは思うけどね」

「俺んちよりはちつちええな」

「そりや億泰君の家と比べたらなんだって小さいよ」

いわば家宅捜索である。ここが静・ジョースターや杉本鈴美一家を惨殺した恐るべき連続殺人および爆弾魔の拠点なのだ。僕はごくりと唾を飲む。空条さんに続いて、僕達は吉良吉影の家に侵入したのだった。

今思えば吉良吉影の邸宅に向かうカーブにはたしかに不吉なところがあった。まず体が漠然とした不吉さを感じ取り、その漠然とした不吉さが頭のどこかを叩いて警告を発していた。川を渡っている時に急に温度の違う淀みに足をつっこんでしまったような感じだった。

人間は、自分が棲息する家の空気に対して、獣が巢の安全、或は近づいた危険を本能的に嗅ぎ分けると同じような直覚を持っている。僕は部屋部屋の鎮まりかえった調子、何処から流れ出て、廊下にさ

え感じられる冷やかさに、用心を感じた。

別荘地帯にあるその家は明らかに住人の不在を伝えていた。新聞などが入らないようにガムテープがはられたポスト、全てのライフラインがとめられているメーター。郵便物は最寄りの郵便局でとめてもらい、自分で取りに行く手続きが完了していた。

カメラはすでに吉良吉影という男が転職のために退職したことが知らされており、様々な書類が渡った後だった。何もかもが僕らの家宅捜索を予見していたかのように動いていて、完璧に吉良吉影は行方不明になっていた。

「この程度で僕のゴールド・エキスペリエンスから逃げられるとでも思っているのか？」

「そうだけ。爪なんて気持ちわりいもん残しやがってよオー！」

僕達がスタンドを発動させるのはほぼ同時だった。

「……なんだと？」

「動かねえ……なんでだ!？」

「どういうことだ……まさか2人のスタンドの射程範囲外に？」

「いや、それはありませんよ。僕も仗助先輩も、能力的な距離を感じたことは今まで1度たりともなかったはずだ！」

「そうだよね?じゃあなんで……?」

「どういうことだよ、こりゃあ」

その意味がわかった瞬間に僕らは、無数のソーダの泡粒のようなものが、全身の皮膚を逆撫でに走り抜け戦慄させる。膝のあたりに水をかけられるような不気味さがそこにはあった。全身がひきつるように痙攣する。

まるで氷の中にいるようだ。間断なく戦慄がおり、がちがちと歯と歯がぶつかりあう。自分ではしっかり歩いているつもりなのに、まるで水に浮かべた板の上を歩いているような震えが伝わってくる。襟元えりもとに凍った針でも刺されるように、ぞくぞくとわけのわからない身ぶるいをした。

眼の前の現実を襲って来た無形の大磐石のような圧迫にはなお恐怖を覚えて慄え上った。

身じろぎもできない。全身に汗が流れるような血も凍るような事実がそこにある。

吉良吉影という人間がこの世界のどこにもいないという事実が。どつと汗が吹き出すのがわかる。

何かしら底意地の悪いものが秘められているようでもあった。まるで靴の中の小石のようにはつきりとそれを感じ取ることができた。不吉な悪魔の仕業でもあるように嫌な予感にゆすぶられる。

「ありえねえ……」

仗助先輩のから笑いがきこえる。

「そんなことありえるの……？」

康一先輩の疑問が宙ぶらりんだ。

「嘘だろお……」

億泰先輩の不安な予感が隙間風のように吹き込んでくる。

「面倒なことになってきやがったぜ」

嫌な予感が背筋を冷たく流れる。西の空が黒い。ひどく嫌な予感がした。心臓が喉もとまでせりあがってきた。何かが間違っている。何かまずいことが持ちあがろうとしている。

「そんなはずはない…… なにか、なにかありませんか、人間がなんの痕跡も残さず消え去るなんてありえない！」

「そうだぜ！んなことが許されるのは振り返ってはいけない小道だけだ！」

「鈴美さん、そんなこと言ってなかったもんね！」

「まさか、もう逃げられねえって思って、自分でスタンド使ったとか…… ねえよなあ？」

「おいおい何言ってるんだよ、億泰ウ！DIOの手下まで使ってる俺たちの邪魔してる奴がんな簡単に死ぬわけねーだろオ！」

「ああ、ジョルノと俺を襲った新手のスタンドは、間違いなく爆弾魔のものだった」

「ええ、明確な殺意の塊でした」

「だからよォー、渾身の一手を突破されちゃったからパニックになつてえー！」

「追い詰められていたのは確かなようだがな…… やつは追い詰められれば追い詰められるほど頭が回るらしい」

空条さんの言葉には不吉な響きが含まれていた。僕の耳はその微かな響きを、遠くの雷鳴を聞くときのように感知することができた。あたりの空気にはどことなくあぶなつかしい気配が漂っている。その一瞬、暴力的な思念が強烈な電流のように僕の肌を貫いた。

「ッ!？」

手がさつと伸びて、僕の右腕をつかもうとした。そういう生々しい一瞬の気配がそこにはあった。誰かが僕が何かをおこなったことを感じ取っている。この部屋の中で何かがちあがったことを直感的に認知している。何かはわからないが、ひどく不適切なことが。

「あの、空条さん。吉良吉廣はどうしていますか？」

「心配しなくても両面を裏にしてホッチキスで止めた後、アタツシユケースにいられてすでに回収してあるぜ」

「そう、ですか」

「どーした、ジョルノ。さつきからキョロキョロしちやつてよオ」

「誰かが僕らを見ているような気がして」

「はあ?」

「…… いや、誰もいねえのはわかってるだろ? 畳もなにもかもひっくり返しまくったんだからよオ」

「だといいんですが」

僕の本能は「吉良吉影を捕らえなくてはならない」と告げている。確証はない。単なる思い違いであった場合には、ひどく面倒な立場に置かれることになる。僕は激しく迷い、そして気配があつた窓を開けた。意識がその一秒か二秒のあいだに通過した一連の段階を、ありありと感知することができた。

やけに大きなカラスが出し抜けにベランダにやってきて、手すりにとまり、よく通る声で何度か短く鳴いた。状況が状況だ、僕らはゾワツとした。カラスはしばらくのあいだ、

ガラス窓越しにこちらの様子を観察していた。カラスは顔の横についた大きなきらきらした目を動かしながら、部屋の中のこちらの動

きをうかがっていた。それからカラスはやってきたときと同じように、唐突に羽を広げてどこかに飛び立っていった。見るべきものは見たという感じで。

「あんな大きさのカラス日本にいたかな……」

そのカラスが吉良吉影のまわしものでないことを祈った。

「なあんだ、ビックリさせんなよ、ただのカラスじゃねえかあ」

「状況が状況だからビビったよね…… あはは」

「どここのホラーだよオ…… こえーなーもう！」

「…… おい、ジヨルノ。カラスであの大きさは不自然じゃあねえか？」

「そうですね…… 少し思いました」

「しかもやつは三本足だったぜ」

嫌な胸騒ぎがする。吉良吉影の家はこんなにも静かなのに、木々が、砂利が、微かな風までが、意志をもっているように感じる。悪意で何かを期待してるみたいに。

頭上の外灯が突然、ばちつと音を立て、切れかかり、それがますます穏やかさを失わせる。空に目をやれば、空が雲で霞んでいた。何もかもが凶兆に見える。

空は雲でいちように覆われている。不吉な未来を思わせる黒々としたものではない。銀行強盗たちの仕事ぶりをにやにやしながら見下ろしている、そんな空だった。

「三本足ってサッカーのあれか？」

「なんだっけ、ヤタガラス？」

「まさかアイツ、スタンドじゃねーだろうなア!？」

「鳥のスタンド使いか…… 嫌なことを思い出させやがるぜ」

「まじっすか、戦ったことあるんだ……」

僕は遠ざかるカラスから目を離すことが出来ないでいる。

ちやうど夢でうなされる時のような重くるしい感じで周囲の空気が急に固形体になって四方から身を締めつける。

いやな予感はずますます高まり、僕はなんだか動悸がしてきた。僕が目にはおぼろげながら気味悪い不幸の雲がおおいかかろうとしてい

た。

「あの、あのカラス…… おかしくありませんでしたか？背中に気味の悪いザラザラとした塊があったような……」

「いや、そこまでは見えなかったな」

「たしかに色が黒かったからカラスと思ったけれど、よくよく考えてみればおかしくありませんでしたか？腹に真っ黒な背びれが生えていたような……」

「やっぱスタンドか！」

「まじかよ、鳥が敵とか厄介な……」

やつの登場はおそらく何かの前ぶれに違いない。僕のまわりでは確実に何かが進行しつつあるのだ。あたりがはききよめられ、何かが起ころうとしている。

夕陽が山の向こうに落ちかけており、まるでこれからの僕の将来を暗示しているような気がした。

なにか手がかりが残っていないかとゴミ箱からなにかを探し回っていた僕は一通の封書が目にとまった。

こんな時でもなければひとの手紙なんて見やしないが緊急事態だった。何かひっかかる宛名の書きかただった。だから、反射的に中身を見てしまった。そんなことは生まれて初めてすることなのに、なぜか後ろめたさはなく、見なくてはという確信だけがあった。

「…… わざわざ置いていくなんて、挑発のつもりか？」

この町にいるスタンド使いのリストを見つけたとき、全てはこのためにあつたのだと僕は確信した。僕の悲鳴にも似た声に誰もがかけよってくる。

「…… やはり、吉良吉影に俺たちの情報を渡しているやつがいるらしいな」

帽子の唾をさげ、空条さんはいった。

「この町のスタンド使いをだいたい把握してるのか、厄介だぜ……」

「どおりで見当たらないはずだよ」

「バレバレってか！気に入らねえぜ！」

「…… 待つて、これはっ！ちよつと電話していいかなあ！」

康一先輩が慌て始めた。いきなりリストを手にするや電話をかける始める。

「……よ、よかった……早とちりだった。あ、いえ、なんでもないです、ハハハ」

「はあ、とあんどのため息をついた康一先輩はリストの一人を見せてきた。」

「シンデレラ?」

「メルヘンチックなスタンドだな」

「顔が変えられるんだ」

「!？」

「あ、大丈夫だよ。無事だったみたいだし。後で気をつけるように言わなきゃね」

スタンドの詳細を見てみる。

シンデレラは機械的な姿の人型スタンド。人間の外見上のパーツを取り替え、「肉体のイメージを変換する」ことで、運を呼び込む相に変える能力を持つ。施術したパーツは完全に記憶しており、任意で施術前に戻すことも可能。

この運勢を変える能力には制限時間があり、30分で元に戻る。それ以上の維持には30分ごとに彩が指定した口紅を塗らなければならぬ。「運勢を定着させるには、それなりに時間がかかるから」との事。これを怠ると取り替えたパーツが徐々に崩壊していく。手相や指紋もなくなり、運勢のエネルギー自体がどこかへ飛んで行ってしまふという恐ろしい末路が待っている。

ただしこれらの制限は前述の『魔法使い』として彩本人が課したルールとの区別が難しい。能力の底が見えないスタンドである。

「スタンドの名前が店の名前なのか」

僕には縁遠い場所だ。杜王町でエステ「シンデレラ」を営むエステティシャンが本体らしい。世界各国のエステティシャンコンクールで優勝した実力派で「魔法使い」を自称する。ため息をつきながらの、低血圧っぽいしゃべり方が特徴。

童話「シンデレラ」に登場する魔法使いに憧れており、彼女のように

に他人を望む姿に変えて幸運を与える助力をしたいと思っているが、一方で特別な力にはそれ相応の制限があるべきだとも考えているらしく「シンデレラ」劇中の時間制限を模したような独自のルールを相手に課す。

横から覗き込んでいた仗助先輩が唸った。

「たしかにこれなら俺のクレイジーダイヤモンドじゃ追跡は無理だな」

「この場合なら僕のゴールド・エクスペリエンスで何とかあります。全身整形したところでDIOみたいに首だけすげ替えたわけじゃない。遺伝子まで変えられない。いずれは吉良吉影の遺伝子のあがる爪が作られる日がくる。体は代謝つてものがありますからね」

「うーん……じゃあなんでツバメ飛んでいかないんだろう？」

「……他のやつのは作業か……？」

「リストをもっと読んでみようぜ、なんかあるかもしれないし」

忽然と姿を消した吉良吉影。万が一、シンデレラによる全身整形があつた場合に備えて爪は回収した方がよさそうだ。どうやら空条さんもかんがえることは同じようで、護衛をつけるよう電話をしながら。

ふと僕は目に付いた名前をみる。

「二礁一（いしはじめ）……帆波帆乃香の元旦那……？こいつが

帆波さんの父親か……」

シャドウギヤラリー

梅雨期の、雨の晴れ間特有の、あぶらっこい陽射しに、みずみずしい花の色がそのまま黒土にしたたるように、紫陽花の花が咲き誇る。梅雨どき特有の風を伴わないまっすぐな雨にしとどに濡れたあとがのこっている。照ったり降ったりしている天気のせいで、アヤメが雨に洗われて紫の色を増す。大粒の茹だった雨が屋根瓦を強く叩いていたのをすっかり忘れたような夏の陽気である。

蒸し暑さが一挙に霧散するような豪快な雨は、すべての表面も根も腐らせてしまうほど陰湿な梅雨を蹴散らしていった。雨が卯の花を腐した後すぐ梅雨に続き、そのまま惰性のように降り続けていたのが嘘みたいだ。

すり硝子のような半透明な光線。梅雨明けの公式な宣言はまだ出ていなかったが、空は真っ青に晴れ上がり、真夏の太陽が留保なく地上に照りつけていた。

その雨が上がって、やっと本当の夏が来たようだった。突然、暑くて晴れた日々が始まった。以来雨は全く降らず、今に至っている。

敷石の面は霧でしっとり、滑りそうに濡れていて、電燈の光が憂鬱に反映している。床はざらツとしたコンクリートで底の厚い靴を穿きながら歩けば忽ち足の裏が痛くなる程凸凹した敷石をいく。石畳が湿っていて、ひたひたと脚に吸い付くようで、旭の照り返しに眼がチクチクとしみるような石だたみの道である。

掃き清めたように綺麗な石畳だ。古びた絨毯がどっしりと光を吸いこむ。ほっておけばそのうちにセメントの床が、乾ききった砂地のように白々とざらつくだろう。

午後の強い日差しが幻想的なしぶきのようにリノリウムの床に降り注いでいた。

カフエの床板はやわらかい部分から波形に擦り減っていて、通路を歩くと体が左右に揺れた。浅緑のリノリウムが、室の二方を張った硝子窓から射さし入る初夏近い日光を吸っている。

今日は天気の良い平日の放課後を少し回ったところだ。杜王町の駅前にはカフェ、ドウ・マゴがある。ここは学生やサラリーマンを始めとした杜王町の住人にひろく愛されているけっこうおシャレな喫茶店だ。その大通りに面したテラスの席に、億泰先輩たちは座っていた。

「吉良吉影、見つかんねえなあ……」

ため息が出るのは1度目ではない。吉良吉影が行方不明になってから数日が経過していた。

「ホントだよ」

「承太郎さんがリストから怪しい人を探すっていったね」

「連絡待ちですね」

「くそー、どこにいるんだよ!」

もちろん宿題のノートを見せて欲しいと頼まれたり、金をたかられていたりと、週番が変わってくれと頼まれたりしている。子犬か子猫をもらってくれとかいう話がまわってきたりもした。いわば暇つぶしである。

空条さんからの連絡待ちだった。つまり僕達は急に現実世界に引き戻されてしまったのである。気づけば7月に入り、世間は夏が到来しているのだ。学生の誰もが梅雨よりも憂鬱な季節がもうすぐ側まで近づいてきているのである。

「あーあ…… もうすぐ夏休みだったのによオ…… なんでもいいって俺たちの前に立ちはだかりやがるんだ、テストの野郎は!」

「いけないですよ、仗助君。テンション下がるじゃないかあ……」

「考えねーようにしてたつてのによオ」

「はああ、と高校生組はため息をついている。

「何だか腹減ったなあ、 なにか食うか?」

カフェ・ドウ・マゴはいかんせん喫茶店なのでたいしたものはないかった。レストラン・トラサルディーとはほど遠い、うまくもないが、まずくもないレトルト丸出しのミートスパゲティーをすすりながら、ぐだぐだと雑談が続く。ようやく僕の注文していたチョコレートプリンが届いた。先にハムカツサンドを食べていた重清君が聞いてく

る。

「ジヨルノはテスト自信あるど?」

「中間テストはいい線いきましたからね、あまり心配はしていませんよ」

「いいなあ…… オラは補習だけは回避したいど…… 夏休みを補習で潰したくなあい」

「なら、頑張るしかないですね。中間テストで傾向は掴めているわけだから」

「ううう…… テストどこやったかなあ…… 見たくないからほつといいたらどつかいっちゃったど……」

「なるほど、このままではまずいと。ノート1冊につき5000円でどうです?」

「高い!もうちよつとまけて欲しいど、ジヨルノ!」

「これでもです?」

「うわ、わかりやすい!」

「別に見せなくてもいいんだよ。みんな似たようなことを考えるものだ。君だけじゃあないからな」

「ううーん…… 考えとくど」

「あと数週間だつてのにずいぶんと余裕ですね、あんた」

僕はノートをカバンにしまい込んだ。

「ん?」

ころころ、となにかが転がってくる。サッカーボールだ。あたりを見渡すと手を振る小学生がいる。向こうの公園で遊んでいたようだ。

僕はサッカーボールを手取る。

「あ」

億泰先輩が豪快に蹴りあげたのだ。

「大人げねーなあ、億泰」

「へへ、ちつとはスカツとしたぜえ!」

僕はまたドウマゴに戻った。

それから数時間後。

「きゃあああ！」

「誰か助けてえ！」

数人の子供の悲鳴が聞こえてくる。僕らがそちらに注意を向けると、さっきの小学生達が走ってくるのではないか。

「どうしたんです？」

「わかんない！」

「わかんないけど、やばいの！」

「じゅんちゃんがあつ！じゅんちゃんがあつ！」

たすけてください！小学生にとっては大人に見えるらしい億泰先輩たちが手をひかれる。ぐいぐいひっぱられ、僕達は訳の分からないまま公園に向かった。

「うわああああ！」

そこには影に囚われた小学生がいた。まるで溺れているようだ。あつという間に体が見えなくなってしまふ。

「ヤベえぜ、こいつ完全にイカれてやがる！」

「離れてろ、お前ら！コイツはオレがブチのめして警察に突き出す！」

ドグシヤア!!言うが早いか億泰先輩はスタスタと影の塊に歩み寄り、キツイ鉄拳を叩き込んだ。殴られた影のようならめきはひしやげ、グズグズに崩れていく。鼻が陥没し目玉が反転し、顎は千切れかけている。もはや人間の顔ではない。

「！なんだあコイツは!?!」

「テメエは！」

ふと、さつき男を殴った拳に違和感を感じる。おぞましい粘着質の液体が拳に食いついている。

「んだこれ、気持ちわりい！」

ズオンと億泰先輩のスタンド、ザ・ハンドが姿を現す。その右手が小さな弧を描くと、ギャオン、という響きと共に液体は跡形もなく消え失せた。

「スタンド使いかよ！ガキどもどこにやりやがった！返しやがれこのダボがアーツ!!」

ガオン！ガオン！ ガオオオン！！

ザ・ハンドの右手が立って続けに空間を切り裂く。億泰先輩に飛びかかったはずの液体はズタズタに削られ、消え去った。

「そして空間をも削り取ったッ！するとオ」

瞬間、影は空間を跳び億泰先輩の眼前にきた。

「喰らいやがれ！ダボがアーッ！」

ザ・ハンドの鋭い回し蹴りが影を狙う。

「削って削って削りまくってやるッ！速攻でこの野郎をブチのめすしかねえ！」

ザ・ハンドが右手を振りかざす。

「うだらアッー！くたばりやがれッ！！」

液体が平面になり、影になってしまった。

「んだとオ？？こんなモンさっきのよーに削っちまえば何でも」

ガオンとザ・ハンドの右手が一閃、空間を跳んだ。ガオン！ガオン！

！ガオン！ガオオン、と瞬間移動でそのままとめて削り取る。

「あつれえ……？」

そこにはなにもいない。

「億泰先輩、足元を見てください！影が笑っている！」

「なにイツ!?こいつ、普通の影にもなれるのかよっ！」

大きな口をあけて笑っていた平面の影がいきなり走り出す。

「まてこらあー！」

億泰先輩とおいかけるが、通り過ぎたトラックの影に飛び込んだ。それはそのままいなくなってしまったのだった。

「じゅんちゃんが…… じゅんちゃん…… だから、じゅんちゃんだっば」

「じゅんちゃん…… ううん、知らない。初めて会ったから」

「僕もしらない。一緒にあそぼーっていったから混ぜてあげただけだもん」

「ねー」

「ねー」

「じゅんちゃん、どこの子か知らないよ。聞かなかったから知らないもん」

それは異様の一言につきた。僕達が小学生の所に帰って事情を聞くと、口々に彼らはたまたま混ぜてあげたからどこの子なのかすら知らないというのだから。どこから来たのか聞いたら、このあたり、と言われたものだから引越してきた子なのかと勝手に脳内補完をしながら遊んでいたらしかった。あの影に溺れていなくなってしまう小学生は、じゅんちゃんということしかわからない。

「どう思うよ？」

「どうもこうも行方不明になっちゃったんだから警察行こうよ、警察！」

「そりゃそーだけだよオ……なんて説明するんだア？」

「余計なこと言わなくていいですよ、こういうときは。事実だけ言えばいいんですよ」

「ならジョルノ頼むぜ！俺こーいうの苦手だからよオ」

「億泰先輩」

「いいからいいから。こーいうのはジョルノのが向いてるって」

「仕方ないですね……」

ざわついている小学生たちの対応を仗助先輩たちに任せて、僕達は近くの交番に行くことにしたのだった。

「こんにちは」

ひとり、書類を書いている警察官がいた。座席は他にもあるが見回りをしているようでパトカーが見当たらない。どうしたんだい、と聞いてくる。

「実は子供が一人いなくなっただって小学生が騒いでいるんですが、話を聞いてもらえませんか？」

代表としてきてくれた子供に大体を喋らせて、時々僕が補足してやると警察官が笑顔で対応してくれた。紙に何やら書いている。誘拐事件とも取れるはずなのに彼は深入りしてこない。疑問に思ってい

ると、小学生を帰したあとで警察官がこっそりと教えてくれた。

「君たちもご苦労さま」

訳が分からないという顔をしていると、彼は笑った。

「ここにはよく出るんだよ、座敷わらし」

「はあ？」

「座敷わらし？」

馬鹿にしているのかと思ったが彼は本気でそう考えているらしかった。

「ここに赴任したばかりのころは、振り回されたものだよ聞いたことがあるだろ？雪山の1人足りないってやつ。あれがよく起こるんだよ。じゅんちゃんて子がいつもいなくなる」

僕と億泰先輩は顔を見合わせた。

それは都市伝説として有名な話だ。ある山岳部の5人の学生達が雪山へ出かけた。山に着いた当初は晴れていたものの、昼頃から雪が降り始め、夕方には猛吹雪となって学生達は遭難してしまった。途中、5人のうち1人が落石で頭を割られ死亡し、仲間の1人が死んだ仲間を背負って歩いていった。

やがて4人は山小屋を見つけ、助かったとばかりに中に入るがそこは無人で暖房も壊れていた。死んだ仲間を床に寝かせた後、「このまま寝たら死ぬ」と考えた4人は知恵を絞り、吹雪が止むまで凌ぐ方法を考え出した。

その方法とは、4人が部屋の四隅に1人ずつ座り、最初の1人が壁に手を当てつつ2人目の場所まで歩き2人目の肩を叩く。1人目は2人目が居た場所に座り、2人目は1人目同様、壁に手を当てつつ3人目の場所まで歩き肩を叩く。2人目は3人目がいた場所に座り、3人目は4人目を、4人目が1人目の肩を叩くことで一周し、それを繰り返すというもの。

自分の番が来たら寝ずに済むし、次の仲間に回すという使命感で頑張れるという理由から考え出されたものだった。この方法で学生達は何とか吹雪が止むまで持ちこたえ、無事に下山できたのだった。

しかし仲間の1人が、「この方法だと1人目は2人目の場所へと移

動しているの、4人目は2人分移動しないと1人目の肩を叩ける事は在り得ないため、4人では出来ない」と気付く。

話の結末としては、死んだ仲間が5人目として密かに加わり、仲間を助けた、というものである。

この「スクエア」は降霊術の一種として使われているという説もある。

「ちなみにこのスクエアは、1人目、もしくは4人目となる人物が2人分を移動することを意図すれば4人でのプレイも可能らしいね」

警察官はいうのだ。昔、この辺りに土地を持つていた庄屋の古い屋敷があった。座敷わらしがいたが、無人の空き家になり取り壊されて公園になった。行き場を無くした座敷わらしが公園にいるという。

遊びはなんでもいい。鬼ごっこでも、かくれんぼでも、ゲームでも。いつの間にか一人混じって、いつの間にか一人消える。

「かれこれ20年になるかな、毎年あるんだよ。似たような話がね。だから真に受けない方がいいよ」

僕らはぞぞつとした。警察署からの帰り道、どう思います？と億泰先輩に聞いてみた。

「ううん……でもよオ……あのガキ、助けてっていったよなア……」

「そうなんですよね。影がいきなり実体化して男の子を飲み込んで、溺れさせて、取り込んだ。僕達はそれを見ているんだ。小学生たちの話だけなら警察の話もありかなとは思いますが、僕達はこの目で見てる」

「やっぱ見間違いじゃねくよなアあれはやっぱ小学生だよなく今風の服着てるもんなア」

「最近よりはちよつとセンスが古いけど、座敷わらしってほど昔には見えませんでしたね。着物やみすぼらしい格好じゃあないし、髪型も古臭くはない」

「それ、仗助の前でいうなよ」

「言いませんよ、殴られたくはないですからね」

「ならいいけどよ。どうするっ」

「どうするもこうするも。空条さんに報告するのと、東方巡査に話を聞いてみるのと、実際に実験してみるのと、どれにしようか考えているんですよ」

「はえーな」

「20年前からなんて意外と最近ですからね。なにもかもがここところ20年前から起こっている気がしてならないんですよ僕は」

「そーかあ?」

「そうなんですよ。少し神経質になりすぎているのかもしれないかもしりませんが」

ふうむ、と億泰先輩は考える。

「じゃあさ、調べてみるかあ?なんでもいいんだろ、遊びつてのはよく。1人でやったらどうなるのかな」

そして仗助先輩たちとのじゃんけんに負けた僕はしぶしぶ1人で公園の遊具で遊ぶことになってしまったのだった。

「なにしてるの?」

学校から5時の放送が鳴り響くころ、とうとう人はいなくなり僕だけになってしまった。さてどうするかと考えていると、さつき食べられたはずの少年が現れた。

「お兄ちゃん、わざとここで1人で遊んでるでしょう。ダメだよ。警察の人に言われたでしょ?遊んじゃダメだって思わなかった?」

咎めるような眼差しだ。

「君がじゅんちゃん?」

「やっぱりそうだ。時々いるんだ。ぼくのことからかってくる人。大人の人」

「僕はまだ中学生ですよ」

「えっ、そうなの?金髪なの?」

「金髪だし緑目だけど中学生だよ」

「そうなんだ…… 知らなかった……。ってそうじゃないよ
じゅんちゃんと言われた少年はむくれるのだ。

「君は幽霊ですか?」

「んー、ちよっと違うけど似たようなものだよ」

「違うのか」

「うん」

「いつも影みたいなのやつに食べられてるみたいだけど、大丈夫なのかい？」

「あは、心配してくれるんだね、お兄ちゃん」

「まあね」

「大丈夫だよ。食べられてるんじゃない、食べられてやってるんだ」

「うん？ どういうことですか？」

「あいつさー、ずっと狙ってるんだ。人の影の中に隠れてさ、1人になつたところをばりばりするのを待ってるんだよ」

「君とは関係ない感じ？」

「んー、最初に食べられたのは僕だと思うよ、僕以外にここにいる人見たことないし。だから、みんながそうならないように見張ってるんだ」

「食べられたらどうなるんだい？」

「さあ？ わかんないや。僕人間だったのずいぶん昔だからさあ、生きてたらなにかあるんじゃない？」

「あの影はいつ現れたか覚えてるかい？」

「ううーん……… いったったかなあ……… 最近だよ？ もともと人がいなくなる公園だったけどさあ、あいつが来てから困ってるんだ。気軽に遊べないからさ、誰か一人になりやしないかひやひやしくつちやいけないからね」

「いなくなる？」

「うん、そう。それぼく。暇だから混ぜてもらってるんだあ。いいよねえ、ゲームとかさ。ぼくが生きてた頃はあんなにすごい無かったのにさあ」

「………」

目の前の少年は一体なものなのか迷ったが、僕は深入りしないことにした。今の本題はそうではない。

「どうやって現れたかわかるかい？」

「ううーん……… なんだろうねえ。お兄ちゃんみたいに変な人おん

ぶしてる人が出入りするようになってからな気がするよ?」

「もしかして、」

僕は吉良吉影について聞いてみた。彼は首をふる。

「どっちかっていうと、そうだなあ……」

少年は顔を上げた。

「またいる」

「?」

「あいつだよ、あいつ。あいつが現れたらあの影が出始める合図なんだ」

「!？」

指さす先にはいつぞやの不気味なカラスが羽を落としながら飛んでいった。泣き方が下手くそなカラスである。

シャドウギヤラリー2

僕はゴールド・エクスぺリエンスでまだカラスを作ったことはない。理由はいくらでもあるが、あえて言うならば知能が高すぎるために忠実に動いてくれないのだ。

それはカラスが嫌われる原因でもある。主な理由は「ズル賢さ」と「人に対する攻撃」だろう。カラスは賢い採食活動を行っており、「レバー式の水道の蛇口を、クチバシで開けて水を飲む」こともあれば、「木の枝を使って倒れた幹の奥深くにいる虫を捕獲する」こともあれば、「クルミを道路におき、車に踏ませて割らせる」こともある。なんとも賢い鳥なのだ。

人に対する攻撃は理由があり、なにも無差別に攻撃してくるわけではない。人を襲うのは「巣に興味を持たれた」と判断した場合のみ。ヒナの近くや、巣より高い場所から巣を覗き込んでいると誤解されなければ襲われることはない。ゴミ箱をあさっている最中のカラスと目が合うと襲ってくる、というような勝手なイメージも先行するが、そこまで好戦的な鳥ではない。

平和の象徴とされるハトの死骸を食べる光景(時として生きたハトを襲う事も)が残酷な鳥とのイメージを高めさせてしまうが、動物が動物を食べるといふ食物連鎖をカラスの場合にのみ嫌悪するのは酷だ。カラスが嫌われるのは、セールスポイントが無いから。「ココがキュート」と売り出すポイントを持たずに、人間の生活にずけずけと踏み込んでくるから、どこまでも嫌われてしまうカラスはむしろ「カラスは現代人の写し鏡」だ。

カラスは理由がないと人を襲わない。

カラスは、繁殖時期に巣を作る。巣を作るときは、天敵から身を隠せるような高い場所へ巣を作る。僕たちが普段何気なく通っている歩道橋や階段にカラスが巣を作っていることもある。そうになると、カラスにとっては巣を脅かす天敵に見えている。カラスが人間のことを「巣を脅かす敵」だと認識してしまったときは、襲われてしまうおそれがある。

カラスを昔攻撃した場合、カラスは大変頭のいい鳥だ。そのため、一度自分を攻撃した人間を少なくとも約5年は忘れないといわれている。

カラスに敵と認識されるような行動をとったことがある場合、その人はカラスから攻撃をされるおそれがある。

カラス同士でも「この人間には前に攻撃された」と伝達することもあるため、カラスに何回か襲われたことがある場合は自分の行動を見返すことも大切だ。

光物を身に着けていた場合、カラスは光物を集めることで有名だから、光るバレッタなどを頭に着けていると太陽が反射してカラスの目にも止まりやすくなる。カラスが巣に光物を持ち帰ろうと襲ってくるおそれがあるので、カラスが近くににいるのなら光るものを頭につけることは避けたほうがいい。

カラスが特に襲ってくる時期があり、カラスに攻撃されやすいのは、2月～8月くらいの繁殖時期だ。カラスは繁殖ができる大人のカラスになるまで、3～4年かかるため、若いカラスには繁殖時期がない？そのため、私たち人間を襲ってくるのは大人の親ガラスであることが圧倒的に多いといわれている。

せっかく産まれた雛を守ろうと、親のカラスは繁殖の時期に警戒心をむき出しにしているため、攻撃性も高くなる。

カラスは自分たちの巣にとっても敏感な生き物だ。警戒心がピークに達する繁殖期にカラスを見かけたときは、警戒心を刺激しないようしなければならぬ。また、カラスの巣を見かけたり雛を見かけたりしても、近寄らないようにした方がいい。

カラスの攻撃から身を守るために、まずは私たち人間がカラスから発せられる警告のサインを知っておくことが大切だ。

カラスは、威嚇しているときには鳴き方が変わり、威嚇しているときには、「カアア……カアア……」という鳴き方で警告して、鳴き声を4回に分けて発する。

それでも威嚇対象が立ち去らない場合には、鳴く感覚を徐々に短く早くしていく。カラスが「ガアツ！ガアツ！」と鳴いたら「襲うぞ！」

という合図なので、この鳴き方をされる前に立ち去った方がいい。

また、カラスは血の気が多い鳥だ。エサをほかのカラスや生き物に取られたりすると怒って態度が変化する。タイミング悪くそのときに通りがかかってしまうと、襲われてしまうかもしれない。怒ったカラスは、濁った鳴き声を出し、木の枝でつついたり葉をくわえていたりしている。

カラスは普段慎重に行動をする鳥だが、何がきっかけで過激な行動をとるかわからない。いつもと様子が違うカラスを見かけたら、攻撃される前にそつと傍を離れた方がいいだろう。

なお、僕とじゆんを見下ろしているカラスの声はいずれでもなく、勇ましきはない。まるで好奇心の旺盛な考古学の学生のような。暗い押しつけるような声を出す鳥だ。

くちばしの大きなカラスが一羽、水銀灯の上にとまって、あたりを用心深く見回しながら、さてこれから何をしようかと思案していた。輪を描いてまわりを啼きながら、飛びまわっている。そのうち電柱のてっぺんに止まる。クレジット・カードのようにつるつるとした翼をぱたぱたと上下に振っていた。

「あれがカラスに見えるの、お兄ちゃん？それとも最近のカラスってみんなああなの？」

「そんなわけないでしょう。カラスみたことないんですか？」

「ぼくここしか知らないし、誰もいない時は寝てるからね。わかんないよ」

「なら違いますね。便宜上カラスとは呼んでいますが、あれはカラスじゃあない。もつとおぞましいにかだ」

「そつかあ、よかった。じゃああいつさえいなくなれば大丈夫なんだね？」

「そうですね。できれば、だけれど」

僕は慎重に距離をとりながら、あの奇妙なカラスから落ちたと思われるカラスの羽を拾い上げた。

「ぼく、いつもみたいに食べられてあげようか？」

「いや、いいよ。君にはこの羽を億泰先輩…… ああ、これからくる

学ランのお兄さん達に渡す大事な仕事を頼みたいんだ。いいかい？」
「うん、いいよ。いいけどさ、ぼく公園から出る気ないからね」

「わかってる、わかってるさ。時間稼ぎをしなくちゃあいけないな」

公園に街灯がつく。影が伸び始める。まずいな、影が幾重にも重なり始める。

「お兄ちゃん、食べられないでね」

「もちろん」

カラスがカラスとは思えない気持ち悪い声を出す。僕が気付いた時には既に周りは影がたくさんある。ベンチや街灯、遊具、置き忘れのおもちや、放棄された自転車、ゴミ、小さなものがより集まり、スタンドが実体化させた影が僕の周りを取り囲んでいた。

公園を覆う程の影の大量だ。暗闇なんてものは人工灯の前には無力だ、どう足掻いたって影ができる。面倒なことこの上ない。

「なるほど…… じゅんくん、君はこいつら相手にみんなを守ってたってわけですか。座敷わらしも大変だな」

影が融合し、肥大化していく。折り曲げたナイフのような姿勢でプールに飛び込みたい気分になるのは、このスタンドの効果だろうか。たぶん水を滑るように進むことなく沈む。ターンもなく、距離表示もない泥沼のような液体を全力で泳ぎきるといふ作業は救いのない暗黒の地獄であるに違いない。

僕は足元に転がっていた石を魚に変えてみた。魚が、規則正しく水面に出る。その周囲を不規則な形の水の輪が取り囲む。手足で水をかき始めたはいいが、水に落ちるアリののように、ばらばらと水底に落下する。

水面すれすれに蝶の羽のように美しく動いた。無駄のない美しい泳ぎだった。しづきも立てないし、無駄な音も立てない。美しくすらしと宙を持ち上がり、静かに入水する。決して急いではいない。求心的な静けさを保つことがその泳ぎの基本的なテーマになっている。

それがいきなりめちやくちやになった。どうやら深いところにかかっているようだ。滅茶苦茶に体をゆらめかしたが、パタリと音がなくなった。まるで海月が漂っていると言った方が当たっている残骸がう

ちあがる。

別の水中生物を作ってみる。まっさかさまに水にとび込んで、青白いらつこのような形をして底へもぐっていったそいつは、行き倒れたみたいに寝転ぶと身体は少しだけ浮き、耳は海にある洞窟みたいに波のリズムに合わせて穴の水位が上がったり下がったりした。どうやら死んだらしく、石に戻って沈んでいく。

こぼぼ、と泡ぶくがのぼった。

その間にも公園は影に侵食されていく。砂ではなく、やわらかくあたたかい泥だ。波に圧されるたびに踵が泥の海底を掘り、碇を下ろしたみたいなる。僕は同じ場所に停まり続けるわけにもいかず、ジャングルジムによじ登る。進んでいるのか退いているのか、ただ無限の中に手足を動かしている気がし出した。

ひたすら泥が進み入ろうとするその世界は、果てしも知らぬ濁流が砕けては返す波の彼方かなたの渾沌未分の世界である。どこまでもどこまでも白濁無限の波に向って抜き手を切って行く。蛇じやのように荒れ狂う影のかさはまましていく一方だった。

「……まるで洪水だな」

まさか陸上で溺れる恐怖と対面するハメになるとは思わなかった。ジャングルジムの中ほどまで泥があがってきたのだ。

「ゴールド・エクスペリエンス」

木を生やして足場を増強し、高さをかせぐ。一心不乱に動かす手足と同じほどの忙しきで、押し迫った死からのがれ出る道を考える。

「参ったな、個体が襲って来ると思ってたのに…… まさか人海戦術ならぬ物理でくるとは思わなかった……」

よみちがえたな、と僕ははつきりと自覚せざるをえなくなる。冷や汗が浮かぶ。きつとこのスタンドに飲まれた生物の大部分は溺死するか、深いところで待ち受けるなにかに食われて死ぬのだろう。そんな予感がある。世界でも一二を争う醜い最期だけはごめんこうむりたい。

溺死体の爪は残酷なことにはみな剥がれている事がよくあるらしい。それは岩へだけついては波に持ってゆかれた恐ろしい努力を語

るものだからだろう。

僕はごくりと息を飲んだ。

「ゴールド・エクスペリエンス！」

僕は木々を伸ばして足場を増強し、移動を始める。生い茂り始めた木々から葉っぱをたくさんちぎり、ばらまいた瞬間に様々なカラスの天敵が出現する。

猛禽類のフクロウもカラスの天敵だ。夜行性のフクロウに対して、カラスは昼行性。夜になって周りが見えにくくなり、周囲への警戒が鈍くなったときにフクロウに捕食されてしまうことがある。あいつがさつきから動かないのはスタンドに任せているんじゃないかと僕は考えているのだ。

そしてスズメバチ。これはあくまで説だが、「スズメバチもカラスの天敵ではないか」という説がある。スズメバチは黒いものを激しく攻撃する習性があり、全身真っ黒のカラスはスズメバチにとって絶好の的なのではないかといわれている。

果実にハチが群がっているときはカラスが寄つてこないという話を聞いたことがあった僕は試してみようと思ったわけだ。世界は広いもので、夜行性のスズメバチも東南アジアにいたのである。

僕の予想通り、不気味な声をあげながらカラスが飛んだ。スタンドのヴィジョンは見えないが、あの影の沼と一体化しているやつがそうなのかもしれない。

警戒を渗ませた鳴き声と共に己の影を放つ。タカは避けたがスズメバチの大軍は飲み込まれて静かになってしまう。僕は後衛部隊を生成しにかかる。

「……まずいな、億泰先輩たちまだ気づいてくれないのか……いや、ここままでこれないのか……下手に近づけないから……？ しまったな」

じゅんと会うために公園から離れてしまったのが露骨に裏目に出ている。

すっかり公園は影の池となつて、街灯に照らされている。池の水は泥のようだから、死んだように青い水をたたえるわけもなく、ただた

だ底なしだ。酷薄な女の目のように冷たそうに黒く光る。溶けた小倉アイスのように雪混じりの泥水にも似た波を出す。水が濁りに濁り、公衆便所に生じたかびの色になる。湖のような広い池の面が黒く鉛のように輝いた、どぶだめのような池だ。

だいぶ水位があがってきたが公園からでる気配がない。どうやらある程度の平地が必要らしい。

漆のような黒い水に、枯れた木々の茎や葉が一層くろくろと水面に伏さっているのが窺きはじめる。曲った茎だけが、水上の形さながらに水面に落す影もろとも、いろいろに歪みを見せた。いろんな字の姿を池に並べ重ねている。

僕はさらに木々を伸ばした。

「これじゃあ埒が明かないな…… どうするか」

カラスはなかなかしぶといようで、まだ天敵相手に粘っている。

「……ん？」

攻撃される瞬間、カラスの表面が岩のように硬化した瞬間を僕は見逃さなかった。

「まさか…… まさかあのカラスも奇病に感染しているのか？…… !?どおりで頭がいいわけだ！」

「エコーズACT2ツ!!」

康一先輩の叫びが聞こえた気がした。

発光体のように眩しい発光体が凄まじい勢いでこちらに飛んできくる。ピカアアアアという特大の擬音がこちらに向かって滑り込んできくではないか。さながらモーゼの海渡りさながらの光景だった。底なしの特大沼が2つにわれていく。接触したところから本来の影が分離してじゅわじゅわと溶けていくのが見えた。

ギラギラギラというさらに特大の擬音がさっきの擬音の上から出現する。目がチカチカしてしまふほどの怪しい光が飛ぶ。強い光によって、くらんだ目の網膜には閃光と点滅する星が飛び交った。たまらず目を閉じたときに視野を満たす灰色の薄暗い光が残る。

ピカピカという擬音がまた追加された。いきなり目の前で白い爆発を起こしたみたいに明るくなる。まぶしくて何も見えない。目に

沁みるほどの強烈な光だ。輝きの色艶はたまらなく眩しい。下手をしたらその閃光は太陽のコロナほど眩しかった。

「がああああっ！」

カラスが何かに襲われる鳴き声でした。

「康一先輩が影すら出来ないくらい照らしてくれているんだろうが…… 参ったな、僕まで見えなくなっちゃった」

いきなりの光源を得た植物がいきなり元気になる。そうだ、目隠しが必要だ。僕は木の幹にゴールド・エキスペリエンスから生命エネルギーを注ぎ込む。少しずつ瞼の向こう側に影がさしていく。

乱反射している水面みたいに眩しい

急な眩しさで、頭を思いきり殴られたみたいに目の前が真っ白になり何も見えなくなっていたのが、だいぶマシになってきた。

康一先輩たちの声が近くから聞こえてくる。

「エコーズACT3ッ!!」

ドジャア、という音とカラスの断末魔が響き渡る。康一先輩が能力を解除したのか、さっきまでの強烈な光は一瞬にしてなくなってしまった。

僕はようやく目を開ける。やはり人工的な光ってのはすごい。いきなり眼の前がぱつと明るくなった。もし僕が再現するならば、まるで億万の蛍烏賊の火をいっぺんに出現させる必要がある。

今までに見たどの光よりも 凄烈だった。想像して言うなら、苦しみのうちに胎道を通りぬけて、初めてこの世に生まれ出る瞬間のまぶしさのようだった。それくらい美しく、清らかで、くりかえせない発光だった。

ようするに影ができる余地すらない強烈な光だったってことだ。

「ジョルノー、大丈夫かあ？」

億泰先輩の声が聞こえてくる。

「はい、大丈夫です。まだちよつと目が残像に邪魔されて見えませんがね」

「治してやるから来いよ」

「ハハ、さすがに満遍なく万能なゴールド・エキスペリエンスも今回は

かりは危なかったね」

「さすがに広範囲攻撃は無理ですよ。それは仗助先輩だって、億泰先輩だって同じはずだ。助かりました、康一先輩。ありがとうございます」

「いやあ、それほどでも。間に合って良かったよ」

僕は足場を緩やかに自壊させながら、久しぶりの地面に足をつけたのだった。

「カラスはどうなりました？」

「それがよオ……」

「見てみるよ、これ」

「……これは」

そこには岩になったカラスが堂々と鎮座していたのである。

「えっ、このカラスがペットってまじかよ」

「スタンドの矢でいられたんじゃないやなくて？」

「野生じゃあない。僕らの吉良吉影の家の動向を追っていたじゃあないですか。それにこれ……」

「ん？」

「なんか機械みたいだね」

「仗助先輩、これだけ戻せませんか？」

「ああ、いいぜ」

クレイジー・ダイヤモンドが岩とかしていた機械を復元していく。

「これは……」

「カメラかな？」

「発信機にも見えますね」

「あ、電池式だけこれ」

「……なにかはいつてますね、チップかな？」

「監視カメラ？もしかして」

「こんなちっちゃいのかあ？」

「ほら、コナンの映画で出てこなかった？鳩の足についてたカメラ」

「あー、みたみた！やべー、まじであんのかよ、すげえ！」

「泥棒に飼われてるって訳じゃあなさそうですね」

「何が写ってんのかな」

「調べてみないとわかりませんが、高いところから落ちたり岩になったりしてる。壊れてるかもしれないですね」

「じゃあ承太郎さん待ちだな」

「つーかよオ、ジヨルノ。そもそもカラスって飼えるような鳥なのかア？」

「飼えるみたいですよ。実はゴールド・エクスペリエンスで作るために飼おうか本気で考えたことがありまして、調べてたんですが」

NP O 札幌カラス研究会によると、カラスを含める野生動物をペットとして飼育することはできないそう。ただ、傷ついたカラスを「傷病鳥獣」として保護した場合、元気になるまで飼育することは仕方がないとの見解を示している。という事は、やはりカラスをペットにするなんて貴重な経験なのだ。誰も飼おうと思わないだろうから、うらやましく思うこともないだろうけれど。

カラスがいかにかにペットに向かないかは調べれば調べただけがよくわかったから断念したと僕はいつた。スズメの巣の下がフンだらけであることからわかるように、鳥類はよくフンをする。空を飛ぶときに身を軽くするため、ひんぱんに排泄を繰り返すのだ。

カラスも例外ではなく、処理に日々明け暮れるハメになる。鳥の特徴である尿と便が一緒になったものを所構わずべちゃつと落とす。

さらに、きれいな好きのため、寒い冬でも天気が良い日にはベランダで水浴びをするそうだが、それでもスパイシーで野性的なおいが消えないという。そもそもカラスは墨汁とキュウリを足して2で割つたようなニオイがするそう。

残念ながら、とても飼おうとは思えない。

「変わった人が飼い主なんだね、きつと」

「スタンド使いで岩になるカラスだもんな」

「ネズミじゃないだけマシだぜ」

「うわあ……嫌なこと思い出させないでよ……」

「スタンドに目覚めて賢くなったから、飼えているのかもしれないね」

僕は補足する。もともとカラスはとても頭がいい。ある研究によれば犬よりも賢いそうだ。だから僕が作り出したカラスはまだ忠実にゃあないんだ。

言うことを聞くようになれば大好物の生肉をちらつかせると、すかさず甘えてくるまで愛着を持って育てられるかもしれない。エサの器や小屋の床を壊すほどの破壊力を持つくちばしで、手をつんつんと優しくつついて肉をおねだりする。そして、幸せそうな声を発しながらガツガツと食べる。そんな生態を本じゃなく実際に見られるかもしれないが無理そうだ。

従順な犬よりも独立心の強い猫よりも、怒ったり喜んだり感受性がとても豊かで、害鳥として凶暴性ばかりが目立ち、実は心をもった生き物であるこいつを忠実な下僕として作り出すのは今の僕には無理というものである。

「じゃあ、飼い主を探せばいいってわけだ。こいつ、俺たちを監視してたもんなー！」

「で、どうやって飼うんだ？カラスなんてよ。手に入れる方法から考えた方が早そうだぜ？」

僕はまだ記憶に新しいカラスの雛の入手先について話し始めた。まずは里親募集を探すことだ。最も簡単にカラスを入手することができるのは、やはり里親募集を探すことだ。

雛を保護したけど飼育しきれない人や、雛が大きくなって飼育が困難になった人などが無料で里親を探していることがわりとある。ホームページやペットショップ、動物病院、里親募集サイトあたりを調べればスグに数件がヒットするはず。

それまで飼育されていた方に個体の特徴や性格などを聞くこともできますので、個人的には最もオススメしたい入手ルートだと本には書いてあった。

「犬や猫と変わらねーんだな」

次はペットショップに取り寄せてもらう。

「えっ、売ってんの？」

「大手チェーン店のペットショップ等であれば難しいかもしれませんが

が、ペットショップで取り寄せてもらうのもひとつの方法らしいですよ」

個人経営を行っているようなペットショップが近くにある場合には、一度カラスの入荷が望めるか確認してみても良いらしい。もしも取り寄せが可能と言う場合には、値段が「一羽20,000円〜30,000円」と言うのが相場となっており、比較的手の伸ばしやすい価格帯。

「でも…… 高くね？」

「カラスだもんね、うーん」

ペットショップからの購入であれば、ある程度飼育方法についても教えてもらうことができるし、今後何かあれば質問ができる体制が整うのは助かるという。

「他にカラスの飼育を始めたキツカケとして意外と多いのが、巣から落下したカラスを保護したと言うものですね。カラスの巣がある場所を意識して探し、その周辺にカラスの雛が落下していれば保護すると言うのも、命を助けることにも繋がる感じみたいですね」

「もしそうならいい人だね」

「たぶんな」

「もちろん保護だからお金はかかりませんが、落下の際に骨折などの怪我をしている可能性もありますので、病院代はかかってしまいます。もしこいつが拾われたなら言うこと聞くまで懐くかもしれないですね」

「じゃあ、そのあたりを中心に行きやあいってことだな」

「カラスを飼うなんて珍しいですからね、話を聞いて回れば何かわかるかもしれません」

「とりあえずこいつは…… 回収だな」

「どこに？」

一瞬沈黙が訪れた。

とりあえず康一先輩が公衆電話を探しに行くのを見届けて、僕はカラスの石像をみる。

あえて黙っていたのだが、カラスの巣は太い木の枝や、送電線の鉄

塔などに作ることが多いため、普段の通り道も確認しながら歩いてみると良いのだが、もつといい入手先があるのだ。それは電力会社にもらうことである。

近所の電信柱に作られたカラスの巣を撤去してもらうには、電力会社に連絡しなければならぬ。よくCMでやっている。だからその人に雛を譲ってもらえばいいのだ。

電力会社の人も停電の可能性があるために駆除しているだけであって、カラスの雛をみすみす殺処分してしまうのは心が傷むらしいから。

どのみち『鳥獣保護管理法』により野生カラスの飼育・保護には届けが必要なので、その確認はされるかもしれないが、作業員が勝手に見つけて持ち帰った場合はその限りではない。

こんな奇妙なカラス、飼えるのは限られているだろう。明日、きつと町中を探し回らなきゃいけなくなる。帆波夏帆に声をかけなければならぬ、と僕は考えていた。彼女の父親は電柱で作業する職業についているのだ。

スタンド名：シャドウ・ギャラリー

本体：奇病にかかったカラス

破壊力 — E

スピード — C

射程距離 — A

持続力 — A

精密動作性 — C

成長性 — C

能力：自分の影がスタンド。スタンドに触れた影は、吸収されてだんだん大きな池、あるいは沼となる。生き物を襲って捕食しようと目論むも、座敷わらしに邪魔されて飢える寸前だった。強烈な光で影すら出来ない空間を作らなければ復活する。

座敷わらしのいる公園

カフエ、ドウマゴ近くの公園。雪山山荘の都市伝説に似た現象がよく起こり、最後まで1人になるとどこかに連れていかれるから、1人になってはいけないといわれる。実際は赤い服を来た小学生が遊びに誘うので1人にはなれない。昔庄屋があつたがその座敷わらしが今も住んでいる。その昔臼殺（うすごろ）といって、口減らしのために間引く子を石臼の下敷きにして殺し、墓ではなく土間や台所などに埋める風習があつた。その時の犠牲者が座敷わらしになると格は高くない。赤い衣着たら庄屋が傾いて潰れたはいいが、引越し先まで再開発で潰れたため行くところがなくなり公園にいる。なお公園の管理者は社王町であり、座敷わらしがいなくなるとどうなるかは不明。

行き方…… 交番に聞いてみると教えてくれる。ゆるキャラブームが到来したら公募でだい2位になり惜しくも宣伝キャラになる機会を逃すことになる。

マネキンヴェイツジ

殺人事件により封鎖されていた駅ビルがリニューアルオープンしたからか、駅前の交差点では大勢の人が行き交っている。一秒たりとも風景がじつとじていることがない。まるで街が生きているように見える。

人間の身体で例えれば社王駅は心臓だ。文化村通りやセンター街など、あちこちに延びた道路は血管で、道行く人たちは血液にあたる。心臓は今日も大量の血液を街の隅々にまで送り出す。

人々が忙しげに行き交う駅前の広場

は人波で埋まる。アーケードが並ぶ北口に比べれば、南口はまだ街の整備が進んでいない分、再開発の余地が残されている。少し奥に入れば、そこには古い・狭い・低い of 三拍子揃った雑居ビルが肩を並べる空間だ。

流れる音が激突しては混合し、それに押し潰されないよう道を行く一人一人が引き連れている音もまた巨大なため、大声で叫んでいるように感じられた。

待ち合わせであちこちに立っている人々。文庫本を読んだり、道行く人を眺めたり、待ち合わせの相手を発見して駆け寄りたりしている。ロータリーに並ぶタクシーの色とりどりの行列が、人を乗せては羽ばたくように駅を離れて行く。

その一角を陣取って熱心にスケッチをしているのは岸辺露伴先生だ。声をかけた僕に露伴先生は構えていたカメラをおろしたのだった。空条さんからの呼び出しに来なかったのは何故か聞いた僕に、やりたいことがあるからさと答えた。

「なんですってッ!?それ本当なんですか?もう現れたッ!?」

「ああそうさ、僕も驚いたよ汐華君。もうジョースターさんから話はいってると思ってたんだが、まだみたいだな。注意した方がいい。話は早い方がいいからね」

なんと露伴先生はスタンドの矢でいられたと思われる少年と交戦したというのだ。

吉良吉廣が明かした矢の隠された効果を空条さんから聞いたばかりの僕は驚くしかなかった。スタンドの矢が選んだ人間は必ず心の中に潜む特殊な能力、スタンドを発現し、決して死なないのだという。そして矢に選ばれた人間はという訳かいった人間の味方になりたくなるらしい。

吉良吉影は僕達の存在に気づいているのだ。

間違いなく仲間、あるいは手を組む人間を増やすに決まっている。すでにDIOの協力者たちがいまままで僕達の敵となってきたのだから間違いない。困るのは奇病とスタンドをふりまく人間とスタンドを発現させる矢をもつ吉良吉影が協力体制にあるという事実だ。普通に考えたら敵の増殖は2倍だ。しかもスタンドの矢を吉良吉影が必ずいる訳では無い。

今まで僕らを観察していたと思われるカラス、岩になるカラスが戻って来ない、しかもカメラ越しに僕らが再起不能にしたのはわかっているはずだ。新たな脅威を差し向けてくるに違いなかった。まさかすでに現れていたなんて驚きである。

「ああくそ……なんだって僕はその場になかったんだッ！影を操る上に岩になる奇病にかかったカラスだと……？なんて怪奇現象だ！妖怪じゃあないだろうなッ？！最近流行りのジャパニーズホラーや世にも奇妙な物語にありそうなゾクゾク感がたまらないじゃあないかッ！！汐華くん、君のゴールド・エクスペリエンスで再現出来ないのかい？」

勝手に熱くなっている露伴先生に僕はため息をついた。呆れ気味に首を振るとやって見なくちゃわからないじゃあないかと露伴先生は詰め寄ってくる。僕は1歩下がった。近い。

「無茶を云うもんじゃあないですよ、露伴先生。未確認生物を作れっ
ていつてるようなもんじゃあないか。岩になる奇病がどうい
うものか理解できなきやあ無理だ。未知のウイルスなんだから」

「そりゃあそうだが……ッ！！ああくそ、どこかに未知のウイルス作
れるスタンド使いはいないのかッ！！」

「露伴先生……本末転倒ですよ。敵増やしてどうするんです」

「そんなの決まってるじゃあないか！しかる機関に送り付けて報告書を君に読んでもらうんだ。理解できるってヘブンス・ドアで書いてもいい。それで完璧だ！」

「…… あんたね……」

「ああくそ、吉良吉影のやつ、ウイルスの研究者をうつかりスタンドの矢でいったりしないだろうか！」

「それ絶対空条さんに言わないでくださいよ」

まるで聞いちやいない露伴先生に僕はためいきをついた。岩人間がもしかしたら医者ひとりやふたりいて大学病院に蔓延ついてもかもしれない。明らかに黙っていた方がよさそうだなと僕は判断して口を貝のように閉ざす。そうやって指示を出した空条さんは実に賢明な判断をしたと思つたのだつた。

「しかしだな、吉良吉影の外見がわかつたのはデカイな。見つからないのは不可解だが、平穩無事な生き方に執拗に固執しているようだから、転職はしていると僕は見ている。だからここで粘ってみるよ」

スケッチの振りをしながら盗撮を繰り返している露伴先生をみて、わかりました、と僕はうなずいたのだつた。

「あーだが！また岩になる動物や人間を見つけたら必ず知らせてくれ！すぐにでも飛んでいくからなっ！いいね？」

「ああ、はい、わかりましたよ露伴先生」

「必ずだぞー！」

もう見つけているやつは対象にならないから僕は帆波一家については黙っていることにしたのだつた。どのみち空条さんからの調査待ちなのだから同じである。恨むならハウレンソウをきちんとするよう指導してきた空条さんについて欲しいものである。

「…… しかし遅いなあ……」

「誰を待っているんだ？」

「仗助先輩ですよ。じゃんけんで一緒に回ることが決まったんだけどなア……」

じゃんけんの言葉になぜか露伴先生は冷や汗を浮かべていた。

「昨日ならわかるんだがなア…… ジョースターさんと静の離乳食

を買いに行くのを見かけたから」

「こんなことなら仗助先輩の私物なにかもらっておけばよかつたな」

「……ふむ、そういうやそうだな。君に預けておけば連絡がとれるんだな」

「携帯電話の利便性には負けますがね……僕もはやく契約できる年になりたい」

「はは、14で孤児じゃあさすがに無理だな」

「残念ですよ、とてもね」

「じゃあこれ君にやるよ」

「……なんですこれ、サイコロ？」

「引き出しをひっくり返した犯人なんだ。無理やり出したから角が傷ついちゃまった。これじゃあ4しか出ない」

「それはダメですね」

「だろう？」

「ありがとうございます」

「なんだ、不満そうだな。ケチだとも思ってるんだろう？そりやサイコロ型のネックレスなんだぞ、ほらチェーンもやるよ」

「なんだってそんなものバラしてるんですか」

「ホワイトゴールドのサイコロチャームが凶器だったもんだからモデルにしたまま戻すのを忘れていたんだ。思い出したはいいが傷がついてイラついたから捨ててやろうと思ってたんだよ」

「やっぱりゴミじゃあないですか」

「なに、サイコロとしては使えないがネックレスとしては充分だろ？税別24800円したんだからな、大事にしてくれよ」

「……はあ」

「東方仗助に直してもらえばいいじゃあないか」

「いや、それくらいなら修理に出しますよ。クレイジー・ダイヤモンドは無くなったものは直せない」

「あー、そういうやそうだったな。それなら今度保証書もってくるでしょうか」

「あ、あるんですね」

「多分どっかにあるはずだ」

「期待しないで待ってますね」

それじゃあ、と僕は露伴先生と別れを告げたのだった。仗助先輩どこにいるんだろう？

「やあ、どうしたんだい？君は確か美術の林先生んどこにいつもいる…… ええとたしか汐華初流乃君だったかな？」

「あなたは？林先生を知ってるってことは、あなたもぶどうヶ丘高校の先生ですか？」

「うん、そうそう、私は倫理を教えている柚木（そまぎ）って言うんだが」

「柚木先生が僕に何のようですか？」

「君は東方を探しているようだから」

「…… 僕はここで1度も口に出てないんですが、どうして知っているんです？」

「どうしてってそりゃあ、東方が君を探していたからさ。課外授業をほっぽいてね」

「東方先輩、補習があるなんて言ってなかったけどな……」

「ああ、そりゃ言わないだろうね。ついさっき私が思いついたわけだから」

僕は柚木先生から距離をとる。さつきから言ってることが支離滅裂だ。高校だから今日が休みの日だからってかならず休みになる訳じゃないことくらいわかるが、東方先輩が補習をほっぽいてくるなんて思えない。

あの人は進学するためにあらゆる学習の遅れを取り戻すために必死なのだから。万が一留年になったら説教してくる人間が警察官の祖父、教師の母親、こないだからは不動産王の実父まで加わってしまったのだ。吉良吉影の行方を探すなら拘束時間が短くなるよう努力するはずである。なお正攻法はさておいて。

僕の疑問を置いてきぼりにしながら柚木先生は語り始める。

「思考実験で知ってるかい？中学生には早いかもしれないが」

「タイトルは忘れましたが、本を読んだことがあります。頭の中で想像するだけの実験ですよね」

「そう、それだ。すごいな、君はまだ14歳だろう？よく知ってるね。思考実験てのは科学の基礎原理に反しない限りで、極度に単純・理想化された前提、例えば摩擦のない運動、収差のないレンズなど、により遂行される実験のことだ」

「それで？」

「まあまあ聞きたまえよ」

柚木先生は知識をひけらかすのが好きな先生のように、聞いてもいないのに話し始めた。

思考実験という言葉自体は、エルンスト・マツハによって初めて用いられた。

思考実験の例としては、古代ギリシャの「アキレスと亀」やガリレオといった古典から、サンデル講義で有名になった「トロツコ問題」、映画『マトリックス』のモチーフとなった「水槽の中の脳」、アインシュタインと量子力学の闘いといった先端科学までわたる。

有名な例としては、アインシュタインが光の速度と慣性系の関係についての洞察から特殊相対性理論に達した考察が挙げられる。

実際に実験器具を用いて測定を行うことなく、ある状況で理論から導かれるはずの現象を思考のみによって演繹すること。いわゆるシミュレーションも実際の対象を使わない点で共通するが、シミュレーションはモデルを使って行うものであり、少なくとも具体的な数値や数式を用いて詳細な結果を得る。これに対して、思考実験はよりあいまいで概念的な結果を求めるものを指す。

とりわけ科学史上、特殊な状況に理論を当てはめることによる帰結と、実験を必要としない日常的経験とを比較することによって、理論のより深い洞察に達してきた考察や、元の理論を端的に反駁し、新たな理論の必要性を示すとともに、それを発展させるのに利用されてきた考察を指すことが多い。

「こないだ授業で取り上げたはいいいんだが、この前提条件を理解しないで第3の答えを出したがる生徒が多すぎてね。おかげで完全に大喜利大会になってしまったんだ」

思い出したただけだろうに、イラついたような雰囲気をただよわせはじめた柚木先生。僕は息を飲んで見つめていた。

「やれ、脱線するだの、作業員はどんなやつか教えるだの、どうでもいいことばかり質問や答えを考えやがって。それが死を忌避する正常な思考回路だとは理解できるんだが、さすがに貴重な50分間のためにこちらがどれだけ準備してきたかと思うと少々イラついてね。私は考えたんだよ。くだらない雑談や例外の余地がない完璧な前提条件を提示してやったらみんなちゃんと授業をうけるんじゃないかと」

なあ、マネキンヴィレッジ。

柚木先生が虚空に視線をなげかけて呟くやいなや、周りが突然白い空間に変貌した。

「!?」

「トロッコ問題あるいはトロリー問題って知ってるかい？ある人を助けるために他の人を犠牲にするのは許されるか？という倫理学の思考実験。フィリップ・フットが提起し、ジュデイス・ジャーヴィス・トムソン、ピーター・アングラーなどが考察を行った。人間がどのように道徳的ジレンマを解決するかの手がかりとなると考えられており、道徳心理学、神経倫理学では重要な論題として扱われている有名な思考実験だ」

柚木先生の発言に従うように様々なものが僕の前に構築されていく。

「まず前提として、以下のようなトラブルが発生したものとす。線路を走っていたトロッコの制御が不能になった。このままでは前方で作業中だった5人が猛スピードのトロッコに避ける間もなく轢き殺されてしまう。そしてA氏が以下の状況に置かれているものとする」

数字やローマ字が宛てがわれたマネキンやトロッコや線路が現れ

た。

「この時たまたまA氏は線路の分岐器のすぐ側にいた。A氏がトロツコの進路を切り替えれば5人は確実に助かる。しかしその別路線でもB氏が1人で作業しており、5人の代わりにB氏がトロツコに轢かれて確実に死ぬ。A氏はトロツコを別路線に引き込むべきか？」

どうなるか具体的にトロツコが動いて説明してくれる。マネキンがボーリングのピンみたいにコミカルに飛んだ。

「なお、A氏は上述の手段以外では助けることができないものとする。また法的な責任は問われず、道徳的な見解だけが問題にされている。あなたは道徳的に見て「許される」か、「許されない」かで答えるものとする」

「つまり単純に5人を助ける為に他の1人を殺してもよいかという問題ってことですね」

「そう、まさにそうだ。理解が早くて助かるよ。みんな汐華初流乃くんみたいにまともな生徒なら授業も楽なんだが。功利主義に基づくなら一人を犠牲にして五人を助けるべきである。しかし義務論に従えば、誰かを他の目的のために利用すべきではなく、何もするべきではないというわけだ」

さて、と柚木先生はいうのだ。

「君ならどうする、汐華初流乃くん」

突然僕の前に線路がどんどん構築され、トロツコが現れたかと思うと僕は乗せられていた。

「レバーをひくだけで方向の切り替えが可能だ。やってみてくれるかい」

「ええ、いいですよ」

僕は動き出したトロツコに捕まりながら前を見つめる。

足元はグレーチング(格子状の鋼材)で線路が見える状態のようで、列車の鼓動が伝わってくる。まるでその場でトロツコに乗っているようだ。スピードは、平均時速25kmとメーターが教えてくれる。自転車並みの速度は風を切る爽快感と景色の両方が楽しめるくらいだ。いいスピードだ。白の空間でなければよっぽどよかっただろう。

僕は5人の作業員とされているマネキンを轢き殺した。

「なるほど、君はそちらを選んだんだね」

「はい」

「いやあ、ありがとうがとう。まともに答えてくれたのは君が初めてだよ。そうかそうか、やはりマネキンでやらなくつちやあならなかったんだな。感情バイアスはやはり強力だ」

「…… マネキンでやらなきゃいけなかった…… ? 柚木先生、そのまえは何でやってたんです?」

「ああ、そうだな。このさい感情バイアスの影響も実験していいかもしれないな」

トロツコが戻っていく。

「さつきまでは授業の理解を深めるために生徒達でやってたんだよ」

僕の前には助けてくれと叫ぶ仗助先輩たちがいた。

感情バイアスとは、感情的要因による認知と意思決定の歪みである。

すなわち、人間は一般に以下のようにする傾向がある。

たとえ相反する証拠があっても、心地よい感覚をもたらす肯定的な感情効果のあることを信じたがる。好ましくない、精神的苦痛を与えるような厳しい事実を受け入れたがらない。

これらの要因は個人的かつ自己中心的（自己中心性）であるか、対人関係や集団の影響（同調、同調圧力）に結びついている。

その効果は認知バイアスと似ており、認知バイアスの一種と見なされることもある。通常の認知バイアスと比較して特殊なのは、その原因に個人の欲望や恐怖があり、その人の推論を妨げる効果がある点である。

神経科学の実験によって、人間の脳内の異なる領域にあると考えられている感情と認知が、意思決定プロセスでどのように相互作用し、感情が推論に勝ってしまうかが示された。

人間は時としてより理性的な結論を想定することが可能であるにも関わらず、過度に楽天的、あるいは過度に悲観的な結論を導きだす傾向にあるのだ。

「これが直に見せてもらえるなんていいねえ」

僕の前にはトロツコがあり、5人の作業員の姿をしたぶどうヶ丘高校の生徒がいた。僕を見て怯えている。

「仗助先輩まで……何をしたんです？」

「どういう訳かどいつもこいつもちゃんと言えを出さないままだったんだ。何もしないっていう答えならよかったんだが、止めようとしたり自分が引かれようとしたり、スタンドを使ったりしてね」

「どうやらスタンドは物理攻撃やスタンド攻撃が無効らしい」

「だから言ってるだろう。前提条件や第3の答えはおよびじゃあないんだ」

「なるほど……鬱憤バラシには最適だったんですね」

「心外だな、私はちゃあんと思考実験について理解して欲しいだけだよ」

「生徒に学問のトラウマ植え付けてどうするんですか」

「大丈夫さ、悪い夢から覚めたと思うだけだ」

「どうやらもう試したあとらしい。」

「さあ、汐華初流乃君。もう一度聞くと。5人を救うために1人を犠牲にすることは許されるだろうか」

トロツコが動き出す。

「気をつけて、ジヨルノ君！」

「ソマちゃんのヤロー！俺達が授業台無しにしたからって逆恨みしやがってえー！」

「何したんです、先輩たち」

「そりやどつちも助けようとするだろ、普通よオツ！」

「仗助君とクラスメイトなんてどつちが大事か選べるわけないじゃないかッ！」

「ああ、要するに時間切れだったわけですね。ところで君たちのスタンドでも脱出は無理なんですか？」

「無理！」

「ダメだぜ、ぜんっぜん動けねえ！」

「そうですか」

「雑談はいいけれどちゃんと実験に参加してくれよ、汐華初流乃君」

「だあくそー！こっからだしやがれ！」

「ほ、ほんとにひいちやうのオツ！」

「恨むならちゃんと質問に答えなかった自分を恨むんだね、広瀬、東方」

「こんのやろー、ソマちゃんめ！覚えてろツ！」

「往生際が悪いよ、東方」

雑談に興じながら僕はレバーをずっと握っていた。仗助先輩たちがどこか余裕なのは心のどこかで僕が助けてくれると考えているからなのかもしれない。

僕はたんたん前を見すえていた。

「え？マジで？」

「ジヨルノ君……もしかしてよそ見してる？ねえ、もうすぐ来ちゃうよ切り替える場所ッ！」

「聞こえてるよな、ジヨルノ！」

「え、嘘だろジヨルノ君ッ！」

トロツコは無慈悲に迫り来る。

交通事故っていうのは大抵はヒヤリとする程度で終わるが、時には大きな事故に巻き込まれることもある。それでも赤の他人でいられるのは関係ないと思っっているからだ。そりゃ柚木先生だって怒るだろう。

トロツコに跳ね飛ばされて、仗助先輩たちはひかれた。即死だった。

倒れた車輪はゆっくりと回っていて、エンジン部から流れ出した黒いオイルが路面に伝わって下水の中に滴り落ちている。

ボンネットは山形に盛り上がり、バンパーもヘッドライトもぐしゃりと押し潰されている。フロントガラスも粉々だったが、センターピラーはひしゃげてなく、大破といっても衝撃はリアシートにまでは及

ばなかったと想像できる。

はじめはブレーキ音だった。タイヤが滑った。ずいぶん長い間タイヤが鳴っている気がした。僕の身体が勢いよく浮いた。そして、どんと衝突音がした。なすすべもない。

バンパーが潰れる感触があった。シートベルトが肩に食い込む。浮いた身体はバウンドして、座席に跳ね返った。あつという間のことだった。頭の中が揺れる。突然の痛みと驚きが瞬時に湧いた。気を失うほどではなかったが、言葉も出なかった。しばらくしてから、僕は顔を上げた。

轢き殺されたはずの遺体はない。消失している。おそらく柚木先生の言う前提条件でやつには必要ないからだろう。僕はため息をついた。

「そうそうこれこれ！これでいいんだよ、汐華初流乃君。やつと答えてくれる生徒が現れて助かった」

柚木先生はいうのだ。

人の道徳的判断は理性と理論よりも、直観と感情の影響を受けていると言うことを柚木先生は教えたかったらしい。そしてどのような要因が非道徳的と判断されるのか身をもって考えさせたかったらしい。

行動の原理は、行動による害（例えば誰かが死ぬような出来事）は行動しなかったことによる危害よりも、非道徳的だと判断される。

意図の原理は、意図を持つてとつた行動は、意図を持たずにとつた行動よりも非道徳的だと判断される。

接触の原理は、肉体的な接触を伴う危害は、肉体的な接触のない危害よりも非道徳的だと判断される。

神経哲学者ジョシユア・グリーンによれば、人を直接死に追いやるとき、人は強く否定的な反応を示すようである。

米Time誌の記事によれば調査対象の実に85パーセントが5人を救うためでも1人を突き落とさないとした、とのことである。また現実では殺人の理由は多岐にわたるが、犯罪や事故が進行中であるという理由で殺人が行われることは皆無である。したがって実際に

このような場面に遭遇した場合、人は五人を見殺しにする可能性が高いようである。

「案外多いんですね」

「そうだね、そうだと。感情に振り回されるのは人間の特権だからな。東方たちも大人しく質問に答えなかったから悪いんだ、まったく。できたら他の派生問題にも答えて欲しいんだが……ダメかい？」

「これから用事があるので」

「そうかあ、それは残念だな」

「今回に限って言えばですけど。僕は仗助先輩と康一先輩しか知りませんからね……感情バイアスはあまり関係なかった気がしますけど」

「いやー、てつきり最初と違う方を選ぶかと思ったよ。ひねくれてわざと判断したかと思ったがちがうようだしね、よかったよかった。だが君の意見も最もだな。参考にさせてもらおうよ」

「ご協力ありがとうございます、と柚木先生はスタンド能力を解除した。そこには第3の答えを出してしまったと思われる仗助先輩たちが汗だくで転がっている。

「ひ、酷いじゃあないか、ジョルノ……！」

「なんの躊躇もなかったね……なんか落ち込んじゃうよ」

僕はため息をついた。

「よく話を聞かなきやあダメですよ、先輩たち。柚木先生は言ってるじゃあないですか、思考するのが実験だって。今回は轢き殺すかどうかが主題じゃあない、むしろノイズになるからやるわけない」

「そーいうところがたまらなく怖い時があるぜ、ジョルノ……」

「なにがですか？質問には答えなきやあダメじゃあないですか。国語の問題答える時自分の心情なんか考慮しないでしょ」

マネキンヴィレツジ

破壊力 — C

スピード — C

射程距離 | A (実験中に限る)

持続力 | A

精密動作性 | C

成長性 | C

思考実験の前提条件を完璧に再現できる。第3の答えや前提条件を邪魔する被験者を思考実験の犠牲者とすることが出来るが現実世界にフィードバックは一切ない。精神的ダメージはあるかもしれない。

本体 | 杉木 樹 (そまぎ いつき)

愛称はソマちゃん。吉良吉影にスタンドの矢でいられたブドウヶ丘高校の倫理講師。生徒が第3の答えを用意したせいで授業が出来ずイライラしていたらいられた。

作業員を探そう

その青年はヌ・ミキタカゾ・ンシと名乗った。オールバックの長髪にとんがり耳、宇宙モチーフのアクセサリーがついた長ランが特徴的だ。チエーン付きの鼻ピアスをしている。

薄い色の長髪に長身、彫りの深い容姿という特徴はいわゆる北欧系の血が入っているか、ノルディック型の宇宙人を思わせる。

自称『マゼラン星雲からやって来た宇宙人で、年齢は216歳、職業は宇宙船のパイロット』とのこと。趣味は動物を飼うこと。学生靴の中でハツカネズミを飼っている。

宇宙船に置いてきたので所持していないが光線銃も使えるらしい。

ぶどうヶ丘で見つけたミステリーサークルのド真ん中で僕達が起こした彼は、掴み所のない性格をしており、非常に世間知らずというか度の過ぎた天然というか一般常識に欠けているように見えた。言動は礼儀正しく紳士的でとても温厚。とりあえず悪い人ではない。はじめは新しいスタンド使いかと警戒していたが、敵意は感じられないから僕達は警戒をといていた。

彼はスタンド使いだった。宇宙人の証拠だと見せてくれたのだ。体の一部もしくは全身を変身させる能力を持つスタンドで、様々な道具に変身することが可能。仗助先輩のアクセサリーを再現したり、複数に分裂することもでき、中々多芸だが、本人曰く人間の顔はどれも同じに見えるので人の姿を真似ることは出来ない。

構造が複雑な機械や、自分以上の力を持つものにも変身できない。

「面白いですね」

「オイオイ……マジで信じちまうのか？」

「吸血鬼が居て、幽霊が居て、岩になる人間が居て、完全生物が居るならそりゃ宇宙人だって居ますよ、仗助先輩」

「マジで言ってるの？ ジョルノらしくねえぞ」

「なにを言ってるんです？ スタンドは隕石にくっついてたウイルスが原因なんでしょう？ 宇宙人は生まれながらにスタンドを使える進化

した人間で、ウィルスを紹介してその遺伝子変異が地球人に与えられると解釈すれば矛盾はないじゃあないですか」

「生まれながらのスタンド使いはどうなんだよ…… 承太郎さんがいるって言ってたじゃねえか」

「そうですね、それについては突然変異ということだ」

「適当なこと言ってんじゃねえの、お前」

「いないって思うより楽しいじゃあないですか」

「宇宙人はいるかもしれないねーけどこいつが宇宙人かはまた別の話だろオ。どう見たってスタンド使いだ」

「スタンドを発現するウィルスが付着した隕石に宇宙人が隕石と融合した事で意志とスタンド能力を得て彼になったとかでも良いわけで」

僕はミキタカに声をかけた。

「あなたが宇宙人なら僕らは話しちゃいけませんね。この星の代表じゃあないから下手なこといえません。仲間が呼べるなら国立天文台が窓口だそうですから仲介ならできますが」

「それなら心配ありません。わたしはこの星がどんなところか調査に来ただけなので」

「勝手に調査されるのもこの星の代表は困ると思いますよ」

「うーん、まいりました。今宇宙船は大気圏付近で待機しているんですよ。ちなみにこの星の代表はどなたなんです?」

「国連ですね」

「国連?」

「1945年10月24日、51カ国の加盟国で設立された国際機関ですね。主たる活動目的は、国際平和と安全の維持(安全保障)、経済・社会・文化などに関する国際協力の実現」

「ああ、なるほど。国が沢山あつまって会議する場所なんですな」

「そういうことです」

「この星の代表と話がしたかったら国立天文台に連絡して、国連に聞いたらいいってことですね」

「はい」

「…… ジョルノなんでそこまで全力になれんだよ…… ちよつと

お前のことよくわかんなくなってきたせ」

後ろで仗助先輩が失礼なことを言っている気がするが、あえて気付かないふりをした。

「それはいいことを聞きました。仲間にあとで連絡をとってみますね。教えてくれてありがとうございます。なにかお礼をしたいんですが、なにかありますか?」

「お礼ですか…… そうだな…… 僕は生命をつくるスタンドがあるんですが未知の生物をまだ作ったことがないですよ。なにか生命体を連れてくることがあったら見せてもらってもいいですか?」

「そんなことですか! いいですよ、もちろん。残念ながら今はハツカネズミくらいしかいませんが」

「ハツカネズミ…… ドブネズミじゃなあないですよね?」

「なんのことですか? ただのハツカネズミですよ? ほら、可愛いでしょう?」

「…… よかった、ほんとうにただのハツカネズミですね」

「はい」

「どうしよう、つつこんだ方がいいのかこれ? ボケがボケ被せてツツコミ不在なせいで話の方向性が明後日にいつちまってるぜ……」

「ところでミキタカさん、カラスって見たことあります? こういう変な姿したやつなんです」

「あ、そうそう、そーだった! こーいうおっさん見たことねーか?」

「うーん、カラスってやつは見たことないですね。あと人間はみんな同じ顔に見えてしまうので会ってるかもしれないがわかりません、ごめんなさい」

「じゃあ、なにかで刺されたことはありませんか? こういう矢じりで」

「あ、これですか? みたことあります。どこかから飛んできてわたしにかすりしました」

「なんだって?!」

「かすった…… スタンドの矢が貫通し損ねた…… ? そんなことありうるのか?」

「誰かが拾ってどこかに行きました。わたしは体調が悪くなってここ

「でずっと寝ていたので顔は見えていないのです」

「なにか聞いていませんか？」

「ううーん……」

ミキタカさんはわからないと首を振った。

「この写真の人達を探しているんですね？」

「ええ」

「わかりました。もしどこかでみかけたらお伝えします」

「ありがとうございます、ミキタカさん」

「ところでお礼をしたいんですが、なにかないですか？」

「お礼ですか…… そうだな……」

僕はしばし考え込む。

「そうだ、君を紹介したい人がいるんですが今から来てもらえませんか？」

「今からですか？」

「社王駅なんですが」

「社王駅」

「ああ、その前にコンビニでジャンプを買った方がいいな？」

「漫画というものを描いている作家さんがいるんですがね、君のこときつと気に入ってくれると思うんだ」

「あつ」

仗助先輩が慌てたように近寄ってくる。

「まてまてまてちよつと待ってくれよオ、ジヨルノ君」

「なんですいきなり」

「お前が露伴センサーにミキタカ紹介しちまったらオレがたつたいま考えたグレートな計画が台無しになつちまうじゃねーか。お前ミキタカを宇宙人として紹介してアルバイト稼ぐつもりだなア？」

「そこまでわかってるならパクればいいのに律儀ですね、仗助先輩」

「うるせえよ、これならちやちな金額よりよっぽど稼げるって寸法なをんだよオ」

「僕の場合はこちらの方が未知の生物までゴールド・エキスペリエン

スの創造範囲が広がるかもしれないからよっぽど稼げるんですよ」「ゴノヤロー、こないだトロツコでひきやがったお詫びとかねーのかわよ?」

「ちゃんと授業受けなかったのは仗助先輩じゃあないですか、実害はなにもなかったのに勝手に帰ってしまったのは君ですよ仗助先輩」

「こっちはひいたりひかれたり散々だったんだよツ!!ここんとこ夢見がわりーんだぞ、ジヨルノのせいで!ソマちゃん殴りたかったのに単位を人質にとられちゃなにも出来ねーしよオツ!!なんであんなやつが学年主任なんだっ!」

「何言ってるんです、アンタ。知りませんよそんなこと」

はあと呆れ顔の僕に仗助先輩は怒り心頭と言った様子でくっつかかる。ミキタカさんは困ったように僕と仗助先輩を交互に見ながら視線をさ迷わせていた。

あるバクチ打ちの男。誰か夜中に訪ねてきたので開けてみると、何と子狸。昼間、悪童たちにいじめられているのを男に助けられたので、その恩返しに来たのだという。

何でもお役に立つからしばらく置いてくれというので、家に入れて試してみると、何にでも化けられるので、なるほどこれは便利。小僧に化けて家事一切をやってくれたり、葉書を札に化けさせて、米をかすり取ってきたり。

そこで男が思いついたのが今夜の「ご開帳」。チョボーチだから、狸をサイコロに化けさせて持っていけば、自分の好きな目が出放題、というわけ。さっそく訓練してみると、あまり転がすと目が回るなどと、頼りないが、何とか仕込んで、勇躍賭場へ。

強引に胴を取ると男が張る目張る目がみんな大当たりで、たちまち男の前には札束の山。

ところが、やたら「今度は一だ」「三だよツ、三だ三だ三だ」などと、いちいちしつこく指示を出すので、一同眉に唾をつけ始める。儲けるだけ儲けて退散しようとする、最後の勝負というので先に張られ

てしまい、てめえが変なことを言うとその通りの目が出るから、もう目を読むなど釘をさされる。

開いた目は五。五と言えないので、

「うーん、今度は何だ、梅鉢だ。えー、まーるくなって、一つ真ん中になるだろ。加賀さまだ。加賀さまの紋が梅鉢で、梅鉢は天神さま。なッ。天神さまだよ、頼むぜッ」。

勝負ッ、と転がすと、狸が冠かぶって、笏（しやく）持ってふんぞりかえってた。

「この野郎！」

原話は宝暦13年（1763）刊の笑話本「軽口太平楽」中の「狸」だ。本来軽く短い噺なので、「狸の札」「狸の釜」「狸の鯉」などの同類の狸噺とオムニバスで続ける場合があり、「狸賽」を入れた四話をまとめて、五代目志ん生のように「狸」と題することもある。

それぞれ、狸が恩返しに来るといふ発端は共通していて、化けて失敗するものが違うだけ。「狸の鯉」は、狸を鯉に化けさせ、親方の家に持っていくと料理されそうになり、「鯉」が積んだ薪を伝わって窓から逃げたので「あれが鯉の薪（＝滝）のぼりです」と地口で落とすもの。「狸の札」は、札に化けさせられ、相手のガマ口に入れられた狸が苦しくなって逃げ帰り、「ついでにガマ口の銭も持ってきました」というもの。

「狸の釜」は、釜に化けて和尚に売られた狸が火にかけられて逃げ出し、小坊主があれば狸だったと報告すると、「道理で半金かたられた」「包んだ風呂敷が八丈でございます」とサゲるもので、ぶんぶく茶釜伝説のパロディだ。狸の鞆丸が八畳敷きというのと、布地の八丈縞を掛けたもの。今はあまり演じられない。

「……まんまじゃあないですか。露伴先生だつて馬鹿じゃあないんだから気づきますよ」

「やってみなきやわかんねーだろ！それにオレが考えたのはチンチロリンだ、全然ちげーじゃねーかッ！」

「というかよく落語なんて知ってましたね。なんというか意外です」

「じいちゃんが好きだからな。小さい頃、よくラジカセで聞かせてくれたんだよ」

「へえ。子守唄代わりだったってわけですね」

「おう。お袋が遅い時は代わりに一緒に寝てくれたからな」

「なるほど」

「ちよーつとまで、ジョルノオ。人が昔話している間にゴールド・エクスペリエンス出して何しようとしやがった」

「バレましたか」

「当たり前だろ！どさくさに紛れて何してんだア！」

「だって落語そのまんまなんて捻りが無さすぎる。それならミキタカさんを宇宙人かどうか賭けをしてせしめた方がいいに決まってるじゃあないですか」

「それだとジョルノの一人勝ちじゃねーかつ！上手いこと宇宙人だったら再現だなんだで継続的なアルバイト見込めるのはお前の方だろーッ！」

「それが分かるならもうちよつと捻った方がいいですよ、仗助先輩」

「あーいえばこういいやがってコノヤロー！少しは敬えよッ！オレの方が2つも年上なんだぜ、ジョルノッ!!」

「充分敬ってるじゃあないですか、敬語に先輩呼び、頼りにだっしてして。何が不満なんです？」

「顔だけ外国人で育ちは日本だし日本語しかしゃべれねーんだから日本人だろ！ちったあ気遣いを覚えろっていつてんだよ！」

僕は肩を竦めた。そして何か言い返そうとした時、空気の読めない人に声をかけられたのだ。スピードワゴン財団の職員からだった。空条さんが呼んでいる。詳しいことは電話を試してみようと言われる。僕達は目を丸くした。

それから数時間前に遡る。

空条承太郎は7年前にタバコをすっぱりやめた。結婚して妊娠したと妻に告げられたとき、受動喫煙がどうたらという話をされる前にタバコとライターをゴミ箱に捨てていた。分別してくれと口ぶりでは呆れながら、妻の顔は間違いなくタバコより子供をとってくれた夫を喜んでいた。

それきりやめたはずのだが、今、ホテルの売店で久しぶりに買い求めたのは妻子がいないからではない。無性に吸いたくなつたからだ。衝動だった。

タバコを尖った口先に咥えると、まるで窒息しそうな魚のようにエラ骨から喉仏までぐびぐび動かして、最初の一服を忙しげに吸い込む。ミニサイズの百円ライターで火をつけると、久しぶりにメンソールの刺激がツンと鼻の奥に突き刺さった。

かつて承太郎にとってタバコは思考を巡らせるのに最適なトリガーだった。起爆剤だった。タバコを口に装填し、導火線に火をつける。大きく煙を吸い込むと、途端に集中力が増してきた。しばらくして承太郎はため息とともに煙を吐き出した。へこんだときのタバコほどまずいものはない。

ホテルの屋上に上がり、タバコの吹かした。小さな白い煙が青い空に向かってゆらゆらと伸びていく。煙の動きをぼんやり目で追っていると、かつての思い出が次々と浮かんできた。

煙草に火をつけた。もう風はやんでいた。煙はまっすぐ上に立ちのぼって空に消えていった。気がつくとき空には雲ひとつない空が広がっている。

物足りなくて、もう一本火をつけた。ほぼ無意識だ。指先には火の点いていない煙草がはさまれ、その先端は空中に幾つかの複雑な、そして意味のないもようを描きつつづけている。頭の中を整理するように煙を吐いた。

ニコチンやヤニなど、身体に有害なツケがたまっていくのは知っている。でも最終的にどれだけ莫大なツケを払わされるとしても、一服のその瞬間には、煙草は絶対に裏切らない。一つ吸い込むごとにニコチンが身体のすみずみまでゆきわたって、指の先がちりちりふるえる

ほどの快感は抗いがたかった。指元まで吸いつくした煙草を唾と一緒に捨てた。

集中しなければならぬほどの強敵がいるわけではない。空条承太郎のスタープラチナは最強のスタンドだからだ。これは自惚れでも自信過剰でもなく紛れもない事実であり、冷静に分析した結果、自他ともに認める最強のスタンドなのである。

単独での近接戦闘で時を止められるスタープラチナは無類の強さを誇る。遠距離からの狙撃や広範囲の高火力などには対応できないし、近距離であろうと不意を突かれれば戦闘での強さなど無意味だ。だが、そうした弱点を踏まえた上で落ち着いて事態に対処できる本体、空条承太郎も含めて最強なのだ。

それでも、そんな承太郎が喫煙しなければならない理由があった。

再度、承太郎は煙草を啜える。タールを思いつきり肺に吸い込ませながら、緑がかかった瞳を閉じる。白い息を吐きだすと、今度は新鮮な空気を取り込む。7年ぶりだが体は覚えているようで、慣れた動作で煙草を指で弾いて灰が落とす。その間も脳みそはすさまじい勢いで回転し続けている。承太郎はゆっくりとまぶたを開けると、煙草を口元に運んだ。

「スタープラチナ」

紫煙を細く長く初夏の空になびかせながら、承太郎は静かに呟く。呼びかけに呼応して、半透明な古代の戦士が背後に出現した。その鍛え抜かれた肉体は、二メートル越えの承太郎よりもさらに大きい。それこそがスタープラチナ、空条承太郎のスタンドのヴィジョンである。

承太郎は社王町を見渡す。社王グランドホテルの屋上は、この町を一望できた。他にもいいところはあるだろうが、安全圏からという枕詞がつけばここが最適だ。すると、傍らにいたスタープラチナが凄みをまといながら一歩前に出た。

そもそも、承太郎は煙草を吸うために屋上に出て来たわけではない。社王グランドホテルはまだ禁煙ではなかった。隣部屋に生後7ヶ月の義理の叔母がいるとしても、喫煙だけなら室内ですればいい

い。祖父はなかなか進まない論文に修羅場中の承太郎の部屋に静をつれてはこないからだ。わざわざ屋上まで来たのには、それなりの理由があるのだ。

承太郎はスタンドの視界をリアルタイムで自分の視界に共有させて、ぐるりと屋上を一周する。そしてスタープラチナを戻した。

「奇病に感染したカラスは……これで全部か……」

煙草を捨てたあと、ポケットのペンをかちりと押して手元の社王町の地図に丸をつけて行く。承太郎が屋上まで出て来たのは、周囲の景色を確認するためだったのだ。

「監視体制は万全でわけか」

いつの間にか口のなかに溜まっていた唾液を、承太郎は飲み込む。

誰も気付かぬうちに包囲網はすでに完成していた。いや土足で入ってきたのは承太郎たちの方なのかもしれない。奇病の感染源たる男は21年前からずっとここでこの町の出来事を観察し続けてきたのだ。きつとこの町のスタンドの矢をめぐる一連の事件も把握しているに違いない。

どこまでがスタンド能力で、どれがスタンドを用いずに行ったことなのかは分からない。相手は何人のスタンド使いを擁しているのかも不明だ。未だ知らない能力の持ち主だって、いるかもしれない。

そこまで考えたところで、承太郎は意図せず拳を握っていた。

「カラスの活動範囲を考えるなら……」

新たな丸が書かれる。

「繁殖はできない個体群だから巢はない。よってねぐらは……」

それはひとつのエリアを黒く塗りつぶしていく。

承太郎は息を吐いた。敵はあまりにも強大だ。ここ数年、連絡が取れなくなったジャン・ピエール・ポルナレフが脳裏をよぎる。承太郎が結婚して一時的にDIOの協力者たちの起こす事件から離脱しているうちに彼は行方不明になってしまっている。

好んで喫煙していたころの承太郎ならば、この事実気づいた瞬間にもっと冷静に立ち回ることができただろう。スタープラチナのずば抜けた視力でカラスたちの反応を観察し、なにをたくらんでいるか

さえ読み取れた。そのはずなのに、今の承太郎にはできなかった。

一人で行動することにひどく躊躇を感じていた。

誰にも見せられない。祖父に対してもだ。

誰かを強く愛することを知ってしまったために、かつて行えたはずのことができなくなっている。いかなる非常事態であろうとも、動じずクールに解決してきたはずなのに、それができない。この世界で唯一愛している女も、同じくらい大切な一人娘も、この町にはいないから危機などあるはずもないのだ。

死ぬかもしれない。なんとなく浮かんだけそれだけが承太郎から持ち前のクールさを失わせた。そのせいでこの町にはスタンドの矢が2本あるかもしれないという可能性を初めから見落とすという致命的なミスを犯した。その結果、スタンドの矢は吉良吉影の手にあり、やつは行方不明、しかも岩人間によるこの町の危機は続行中である。

だから承太郎は久しぶりに煙草を吸っているのだ。かつての感覚を取り戻すために。それが親になるということじやよと笑う祖父からそっぽ向きながら。承太郎は未だに己の変化についていけないところがあつた。

DIOと戦ったときの承太郎は、まだ未成年だった。学生だったし、何も知らないくらい若く、鋭く尖っていた。あのころならば死ぬかもしれないという事実に躊躇してしまうことなどなかったはずだ。

許せないと思いつつも怒りを心で静かに燃やして、表面上はあくまでクールに振る舞っただろう。現在の承太郎は、かつての自分となろうとしているのだ。

ある女を心から愛し、ともに暮らしていきたいと強く願う。そんな感情をまったく知らない、時を五秒間も止めることのできた、全盛期の空条承太郎に。ならなければならぬ、と暗示をかけるために。この上なくらしくない行動だ。だから一人になりたかったのである。

煙草の火がフィルター部まで到達し、承太郎はタバコを取り出す。このペースだとすぐ無くなりそうだ。もう1箱買うべきだった。舌打ちをした承太郎は、火を点ける寸前で動きを止めて、屋内に繋がる

ドアへと振り返った。

足音が近付いてきたのだ。

承太郎は咄嗟に戦闘態勢に入ろうとしたが、無駄だと悟ってすぐに警戒をといた。接近してきている足音は敵ではない。気配を隠そうとしてもしていないし、かといつて殺気を振り撒いているわけでもないからだ。もしもまで思考を放棄するつもりは無いので、あくまでスタープラチナをすぐにでも出せるようにする程度にとどめる。

この一瞬で導き出せるこの判断力は間違はなくこの10年で培ってきたものだ。かつての自分ならば戦闘臨態勢を解かず、ぶつとばしてから考える位のことのはしたかもしれない。そこまで考えてから、まだ火の点いてない煙草がぐにやりとまがっていることに承太郎はようやく気がついた。

「早かったな」

「…… 来いって言ったのはアンタだ、空条承太郎」

声変わりしたばかりのアメリカ人は不満タラタラな様子で承太郎を見上げた。

「なんで呼びつけたアンタが迎えにこねえんだよ。こっちはまだ肋骨治りきってねえんだぞ」

「すまないな、君に頼むための準備に追われていた」

「ハッ、どうだか」

「来てくれてありがとう。これから世話になる。すまないが、一本吸わせてもらってからでいいか。これから一服して気合を入れておきたい。それだけの大仕事だからな」

「へエ、アンタも緊張することがあるんだな」

「そうだな」

承太郎は肺をニコチンで満たした。

「タバコ消さねえのかよ、子供いる癖に」

承太郎は指輪を隠さなかった。

「俺は娘の前で吸ったことはない」

「ふん……… 見た目と違って、結構やさしいんだな、アンタ。」

いや、それは昔からか。身内には優しいもんな」

承太郎はその言葉には返さず、煙草を啜え直す。視線を合わせていないのに、ガキがこちらを見て笑っているのが分かったからだ。

承太郎はやれやれだと呟く。ここにきてようやく実感したのだ。どんなに煙草を吸ったところで、かつての全盛期の空条承太郎に戻ることはできないのだと。いくらあのときの精神を取り戻そうと足掻いても、さつきから承太郎自身がすでに当時考えもしなかったことを考え、やろうとしている。

いつだったかスピードワゴン財団の精神科医が感情に振り回されるのは人類に許された特権だといっていた。生きることとは変わり続けることだと。戻るなんて無理な話だ。人間である以上、時は止められても、歳を重ねることを止めることは出来ない。

「オレはなにをすればいいんだ、空条承太郎」

「まずは移動する。俺の部屋に来てくれ。話はそこでするとしよう。どこで聞かれてるかわかったもんじゃあないからな」

カラスが空を飛んでいる。承太郎は一度だけ少年を見た。10年の歳月を実感するのは充分だった。

「期待しているからな、ドナテロ・ヴェルサス」

作業員を探そう2

承太郎がドナテロを伴ってやってきたのは、吉良という表札がかかった邸宅である。

「アンダーワールド、この家の記憶を掘り返せ」

ドナテロの呼びかけに応じて、アンダーワールドが姿を現した。

「イツ位の記憶ダ？」

スタンドが話しかけてくる様子に承太郎は驚く。どいつもこいつも似たような反応するなア、と呑気に考えながら、ドナテロは会話を続ける。

「6月から7月までの期間だつてよ」

「ほぼ1ヶ月ジャアナイカ……随分ナ量にナルけどイイのかナ？」

「仕方ねえだろ、吉良吉影ってやつがいつから居なくなつたかわかんねえんだからよ」

「ナラ、探すノハ君の仕事ダ、ドナテロ」

「めんどくせえな……なんかこう、写真と同じやつがいたら自動的に調べられたり出来ねえのかよ」

「無茶言ワナイデ欲しイナ……便利にシタカツたら、君が成長スベきだよ。君の仕事ダ、ドナテロ」

「何でもかんでもそれ言えば、いつてやったみたいな面すんのやめやがれ、ムカつくんだよ」

ドナテロの手元にはたぐさんの文字が浮かび上がっている。適当に抜き出したドナテロは、この家の記憶を再生し始めた。

朝、不在

昼、不在

夜、不在

「ダメだなこりゃ、もういねえ」

すぐに再生をやめて、その日から1週間ほど前を選択する。

朝、不在

昼、不在

夜、男が訪問

「1度見せてくれ」

「お？見つけたか？」

「いや、吉良吉影ではない男が来訪したようだ」

「そりや気になるな、アンダーワールド、再生しろ」

「ヤレヤレ…… スタンドづかいが荒イナア……」

「いいから黙ってやれ」

アンダーワールドは部屋全体を当時のものに再現していく。そこにいた男をみて、承太郎は眉を寄せた。

「どうした？」

「写真は撮れるか？」

「ああ、大丈夫だぜ。もう試したからな」

「そいつは助かる。どうやら俺が知らねえD I Oの手下だ」

「へえ…… こいつがねエ」

まじまじとドナテロは吉良吉影と話している男を見た。

「会話の内容からするに、なんども会ってるみてーだな」

「…… ドナテロ、君のスタンドの掘り起こせる記憶に限界はあるのか？」

「ナイな、ドナテロ」

「先に答えるんじゃねえよ、馬鹿野郎。明らかに重労働の気配がするじゃあねえかッ！」

「エッ」

「そいつは朗報だな、吉良吉影とこの男の取引をつぶさに追いかけることが出来るってのは」

「ほらア…… いやな笑い方だ…… スピードワゴン財団の諜報部共のあくどい顔そっくりじゃねえかよ……」

「君の治療費と相殺でどうだ」

「何度も言われるけどよ、高すぎじゃねえか？」

「保険に入っていない君がアメリカ最高の医療を受けたんだ。まだ払いきれないらしいぞ」

「マジかよ…… 救急車呼ばなくてよかったぜ……」

「君が望むなら学費や生活費をそのスタンドの仕事で相殺してやれる

んだがな」

「それも何度も聞いてる。でも俺に支払われてる基金をまずは使わせるべきだろ」

「ヴェルサス家に訴訟を起こしたところだからな、まだ時間はかかる」

「……へ、ざまあ見ろ」

「じゃあ、このホテルに滞在して観光する間にかかる費用は全部相殺でどうだ」

「それもいいけどよオ、まずは肋骨とか治してーんだけど」

「ああ、それなら心配いらないな」

「まじかよ、すげえなスピードワゴン財団」

ドナテロは感心しきりである。

「ところで義理の兄に麻酔なしで直されるか、痛みなしでまた折れる可能性を秘めながら治療されるのとどっちがいい」

「エエエ……なんだよその嫌な2択は」

「事実だからな、仕方ない」

「まじかア……」

雑談をしている間に、吉良吉影と男の会話は終了し、男は出ていった。

「こつから虱潰しかよ、めんどくせえな」

「いや、先にこの1週間のうちに吉良吉影がいなくなる直前を探してくれ。今回はそれが目当てだからな」

げ、とドナテロはうめいた。

そこからは気が遠くなる作業だった。まとめて借りたレンタルビデオをひたすら鑑賞する作業だった。それもチラ見して違う場合はすぐにリセット、次に行くという面白みが微塵もないものだ。さすがに途中から飽きてきたのかドナテロはあくび混じりである。

承太郎は寝ないよう釘を刺しながら食い入るように部屋中を眺めては、何かを考えているようだった。何十回目か考えるのも億劫になってきたころ、ようやく承太郎からこれにしようと指示がでた。そこにいたのは作業員の男だった。

「よかった」

「は？よかった？よかっただと？アンタ何言ってるんだ、殺人鬼が岩になっちまったんだぞ」

「俺はジジイから最悪の事態を聞かされていたからな、安心したってわけだけ。教えてやる、最悪は回避されたからな」

承太郎は語り始めるのだ。岩人間の存在を知ってから、ジョセフを初めとした古参のスピードワゴン財団職員が一様に危惧していたであろう最悪の事態を。

かつて人類とは違った進化を遂げた、「闇の種族」と呼ばれる存在がいたという。個々の頭部に備わった、己の地位や力を示す角（触角）が特徴で、古代において鬼や悪魔、あるいは神と認知されてきた者たちであり、人とは比較にならないほどの寿命・知性・肉体を兼ね備えている。DIOが吸血鬼になったきっかけでもある「石仮面」も彼らの発明した物。

「まさか、このおっさんが？」

承太郎は首を振った。

一度の睡眠で2千年も眠り、その際に柱と一体化して眠るため「柱の男」と名付けられた。かつては女性もいたようだが『究極生命体』へと至る野望を抱いたカーズを抹殺しようとして逆に滅ぼされ、カーズ、エシデイシ、そして当時はまだ赤子だったワムウとサンタナの4人のみが生き残った。そもそも食物連鎖の頂点に座す存在であった故、繁殖力自体は低かったらしい。

そして時は流れ、エイジャの赤石と呼ばれる宝石を巡って、ジョセフ・ジョースターら波紋戦士たちと死闘を繰り広げることとなる。

普通の生物と同じように口から食べ物を取ることもあるが、彼らは全身が消化器官であり、相手に触れるだけでその部分を削り取って「食べて」しまう。特に強い力を宿す吸血鬼を好み、石仮面で吸血鬼を量産して捕食していた。

腕の関節を外して回転させて竜巻を起こしたり、顔を粘土のように潰して曲げてみせたり、ダイナマイトを飲み込んで腹の中で爆発させても平然としていたり、もはや常識というものが無意味に思えるほどの身体能力を持つ。彼らの前では、武器はおろか生半可な波紋

さえ意味を成さない。

一応、吸血鬼と同様に紫外線に弱いのが、即死するわけではなく石化してしまうのみ。また、弱い波紋程度ならばその皮膚で易々と弾いてしまうが、エシデイン曰く「強い波紋を受けると死ぬ」らしい。人間が通常の静電気で死ぬことはなくとも、電流が大きいと死ぬのに似たようなものである。

しかし、彼らが石仮面を被った場合はその限りではなく、人間とは逆に紫外線を完全克服してしまうために波紋攻撃が全く通用しなくなるばかりかその気になれば波紋をも練れるというチート性能を得る。

戦士としての誇りや同族への思いやりを忘れない気高い一面を持ち、敵ながら彼ら4人それぞれが非常に魅力的な奴らだったという。「俺は直前まで柱の男が隕石とぶつかって岩になる奇病が生まれたのかと思っていた。その場合、感染源の男は柱の男に食われた形になる。復活さえありえただろうが……こいつはどうみてもただの人間だ」

承太郎から吉良邸にくるよう言われた仗助とジョルノは、ミキタカと別れを告げてやってきた。結局、絶対にミキタカのスタンドがバレないようにするという条件のもとジョルノは仗助に譲る形となった。バレた場合はスタンドか宇宙人かを調べるためにヘブンズ・ドアを使ってくれと頼むことになった。上手く行けばジョルノのアルバイト先が増えるし、仗助も紹介料を折半してもらうことになったのだ。双方不満はたらたらだったが、承太郎からの呼び出しはお小遣い稼ぎよりも急務である。

「なんだか物々しい雰囲気ですね」

「完全にヤーさんの集会じゃねえか……」

黒服の男達が空を見上げているのは異質と聞いていい緊迫感が

あった。ジヨルノたちの到着に気づいたらしく、彼らは一礼して奥に促してくる。

吉良邸に入ると、空条承太郎と仗助もジヨルノも見覚えがない外国人の少年がいた。

「待ってたぞ、二人とも」

「いきなりどうしたんですか、空条さん」

「誰っすか、そいつ」

「吉良吉影の行方を調べられるスタンド使いだ。アメリカから緊急来日してもらった」

「まじで？こんなにかいせえのに？」

日本語は喋ることが出来ないようで、生意気そうな双眸が細められ、仗助を見上げてくる。どうやら半笑いだったために馬鹿にされていることがニュアンスでわかったようだ。

ジャパニーズアニメや漫画で見たことがある不良はほんとにいるんだなという言葉が理解出来たのはジヨルノと承太郎だけだ。仗助は吐き捨てるように紡がれた英語がネイティブすぎて聞き取れなかったようだ。

「その礼としてしばらく観光してもらおうことになったんだが、こいつはまだ肋骨が2、3本折れてるらしくてな、治してやってくれねえか」

「えっ、肋骨だあ?!重症じゃねーか、大丈夫なのかよ!」

「よく見たらコルセットしてますね…… 空条さん、なんのつもりなんですか?」

「吉良吉影の行方はそれだけ緊急ってことだ。それに」

「それに?」

「ここに来るのはこいつのたつての希望だ。10年振りに生き別れになった義理の兄貴に会いたいかと聞いたら即答だった」

その言葉に僕は目を見開いた。仗助先輩はキョトンとしている。

「DIOはたくさんの女を誘拐して屋敷で飼っていたんだが、生き残った母親は一人もいねえ。子供は世界に4人だけだ。4人しか生き残らなかつた」

「えっ、じゃあまさか、こいつはジヨルノの……」
「ハルノ？」

つぶやきに真つ先に反応したのはジヨルノだった。ジヨルノと認識している仗助と承太郎は反応が遅れる。呟いた本人はジヨルノをハルノと認識出来ないのか、不審そうな目をし始めた。

イギリス人とアメリカ人のハーフだからか、食生活や環境の違いか、ジヨルノより頭一つ大きい少年。腹違いの弟だと言われても、まづは逆じゃないのかと言われそうな組み合わせである。

「まじか、まじかあ！言われてみりや、俺や承太郎さんと同じ目の色してるし、なんとなく面影似てるぜこいつ！へー、こっちは黒髪なんだな！」

よかつたじやねえか、と仗助がジヨルノの肩をばしばし叩く。ジヨルノは迷惑そうな顔をしてやめて下さいと承太郎のところに逃げてしまった。

承太郎は英語で仗助と少年がジヨースター一族においてどういう繋がりになるのか、そして仗助とジヨルノの関係について説明する。途中で訳が分からなくなってきたのか、それはもはや赤の他人じゃねーかと少年は英語で返した。所々拾える英単語を繋ぎ合わせて、ニュアンスでなんとなく理解したジヨルノは少年をみる。

「久しぶり？いや、初めましての方がいいかな？僕は汐華初流乃、日本に母親と送られてからだから…… 10年振りだね」

「英語が下手くそになったな、兄貴」

「無茶言わないでくれ、僕はずっと日本育ちなんだ。英語を話す機会は二度となかった。もう覚えてない」

「忘れた…… 忘れただつて？あんだだけ強烈な体験しといてか？アスタはスタンドのおかげで肉の芽なかったじゃねえか。ずいぶんと薄情なんだな、それだけこっちの生活がよかつたのかよ？」

「残念ながらそれは違う。DIOの血の発露で50日間の高熱に襲われたのは君と同じだ。違うのはジヨースターの精神の開花を恐れた手下たちにネグレクトと暴力に晒されたことだ。防衛本能が働いてなにも覚えちゃいないんだ」

ジョルノの発言に少年は目を丸くした。心なし声が震えている。

「覚えてないってまさか、オレのことも？」

「悪いけど…… 本当にすまないとは思ってるんだけど…… ごめんよ」

「はは、まじか、まじかよ。オレはアンタが承太郎にした警告のおかげでここにいてるつてのに、そのお礼をしたくてここに来たつてのに、赤の他人の反応しかされねえつてのか!? そんなのありかよ! どこまでふざけたことしてんだ、DIOは！」

アメリカ人はやはり感情の起伏が激しい人種らしい。

ジョルノはテープレコーダーに吹き込んだ声が自分の声に聞こえないように、目の前の義弟が捉えている汐華初流乃像が、歪んで認識され都合よくつくりかえられているのではないかと無性に不安になった。

ドナテロ・ヴェルサスと名乗った義弟にとっても慕われていることはわかったものの、自己紹介する度人前で自分について語らなくてはならない気苦労を感じる。まるで成績表を勝手に書き直しているような気分になった。

明確な図形を描くための、より多くの点が要求されると、何の回答も出てこない。それはわかっていたのだが、こうもグイグイこられると面食らってしまう。

ドナテロ曰く、ジョルノと自分は相違点より共通点のほうが多いらしい。ジョルノの感覚からしたら、ライターと詩人のような従兄弟のまた従兄弟くらいの間柄だ。だが、ドナテロがいうには、向かいあわせの鏡のように実像と虚像くらいの差しかないらしい。ジョルノは困惑するしかない。

「アンタは知らないだろうけど、いつも同じ夢を見るんだ。もちろんどの夢もまるつきり同じっていうんじやあない。細かいところはそのときどきによってひとつひとつ違う。状況も違うし、役柄も違う。でも基本的なパターンは同じなんだ。登場人物も同じだし、結末も同じだ。シリーズものの低予算映画みたいにさ。それがようやくまともな予算がついてスタッフや映画が始まったみたいに、色々思い出し

たんだよ、オレは。なのにそれを教えてくれた兄貴がなんにも覚えてねーってのは、あんまりじゃねえのか？」

泣きそうな顔でドナテロはいうのだ。

頭の中に残っている三つばかりの幼児の面影から、今のジョルノの印象をたぐり出そうとしてもできない。どうにもつなぎ合せようのないはめ絵のように、ぴったりしない。それは金髪と緑の目のせいだ。

それでも、今みたいに昔みたいな表情で笑ったりすると、だぶることがある。その分長い時間の重みを感じる。まるで旗がひらひらとはためくように、過去と未来がいれこになって、まぶしく混じりあうことがある。おそらく気持ちが湧きたっているから喜ばしい感情に違いない。

目に映る映像とドナテロの知っている、捜していた汐華初流乃のイメージとのずれがシンクロした瞬間、妙な爽快感がある。ものすごい速度の判断でバチっとはまる。間違いがしの答えが見つかった瞬間みたいだと。

ジョルノは困ったような顔をして、とうとう泣き出してしまったドナテロを見上げる。承太郎から通訳されていたらしい仗助もつられて潤んでいるものだから、ジョルノは肩を竦めるしかない。

「こんなにもどかしい気持ちは初めてだ…… ありがとう、ドナテロ」

切ないほどの緊張に何もかも忘れている自分を生まれて初めてジョルノはやりきれなくなった。それでも思い出せないのだ。ジョルノの頭にはつぶつぶのような空白が生じている。脳になんらかの病的な障害が起こっているわけではない。そういうものだと思ってきたのだ。ドリーム・シアターなどで補完したところで所詮は継ぎ接ぎの記憶でしかない。

きつと最初は五秒あれば思い出せたのだ。それが十秒になり三十秒になり一分になった。まるで夕暮の影のようにそれはどんどん長くなり、そしてやがては夕闇の中に吸いこまれてしまった。どんなに意識を集中しても擦りガラスを通したように曖昧な輪郭しか浮かん

でこない。まるで遠くでゆらめく蜃気楼のようにつかみ所がないのだ。

思い出は、もう夢よりも淡い過去の水沫の中に消えている。遠い日の夢のように印象が淡くなる。確実に記憶の棚に入っていてその棚がどこにあるのか分かつている。しかし引き出しが引つかかかって開かない。出てきそうに出てこないもどかしさに頭の中身を引っかき回したくなる。

ジョルノにとって時間薬は劇薬と同じだった。時間は記憶の中からまりあい、もつれた糸のようになって、まつすぐな軸が失われ、前後左右が乱れていった。位置が入れ替わった。思い出せるはずのことがなぜか思い出せなくなり、急速にその実体を失っていった。

年号をプリントされた白いカードが、強風の中で四方八方にばらばら散っていく光景が目には浮かぶ。それを一枚でも多く拾い集めようとしても、風が強すぎて、失われていくカードの数も多すぎた。年号が次々に吹き飛ばされて、系統が失われ、知識が消滅し、思考の階段が足元で崩れ落ちていったのだ。

ドナテロ・ヴェルサスと目の前の義弟はいった。

反芻していくうちにその名前にはつきり聞き覚えがある気がしてきた。しかし記憶はなぜかひどく漠然としてとりとめがなかった。ジョルノが手で探りとれるのは、事実らしきもののいくつかのあやふやな断片だけだった。

その詳細を思い出すことができない。ものごとの前後が入り乱れている。無理に思い出そうとすると、身体全体を強くねじられるような感覚があった。まるで上半身と下半身がそれぞれ逆の方向に曲げられているみたいだ。

頭の芯が鈍くうずき、まわりの空気が急速に希薄になっていった。水の中にいる時のように音がぐももった。それほどまでに汐華初流乃にとって、エジプトと日本での幼少期の記憶は落差がありすぎたのだ、絶望的なまでに。忘れなければ死んでしまうと本能が結論づけるレベルで。

理由も経緯も思い出せないし、かつて見た光景の断片と、考えてい

たことの内容も全部忘れてしまったが、輪郭というか抜け殻のよ
うなものは残っている。

ジョルノは思うのだ。

もはや忘れたことすら気づいていない記憶がたくさんあるに違
いない。忘れてはいないのだが、もう死ぬまで思い出さな
いかもしれない記憶もあって、考えようによつたら忘れる
よりもその方が残酷だ。

だから口を開く。

「僕は思うんだ。それほどまでに必死で君たちとの記憶を頭
の中に閉じ込めようとしていたんだ、あの時の僕は。それすら
忘れてしまったら、いよいよ心が死んでしまうから。人は何
かを覚えるために忘れる。忘却は前進のためにある。僕にと
っては生き抜くために必要だったんだ」

ジョルノはもう一度考えてみた。今度はほんの少しではあ
るけれど、ドナテロ・ヴェルサスという腹違いの弟がいた記
憶の片隅に何かがひっかかっているのが感じられた。

「多分その方が楽だからさ」

すべてが見覚えのある風景だった。もう会うこともないと思
っていた義弟と、この懐かしい風景の中を一緒に生きていたこ
とが不思議だった。かつてが水彩絵の具のように滑らかに混
じり合っていた。

「そのうち思い出すと思うから、それまで介護よろしく」

「まだ14だろ。もうボケたのかよ、兄貴」

ジョルノは笑った。

さて、記憶とはあやふやなものだ。脳の中にノートブックが
あり、中を覗いてみると、思い出すべきことが日本語で丁寧
に描かれている。大事なところにはマーカーまで引かれてい
る。記憶というのはしよせんは脳の中のシナプスの伝達活
動によって生じるものだ。シナプスの電位変化が記憶とな
る。

何年経っても同じ形状で残っている保証はどこにもない。そ
れこそ記憶とは、思い出そうとしている今この瞬間の自分によ
つて新たに創り出された、記憶と思われるものにすぎない。創
造物だ。まさに、

歴史が、権力者によつて捏造された共通認識であるのと似ている。記憶は生のまま氷温保存されるわけではない。

だから、いくらでも上書き保存が可能なのだ。今のドナテロ・ヴェルサスがジョルノにとつての「いつかのだれか」に似ている気がしたとしても、それは嘘をついていることにはならないのである。

「ところで、ドニーって呼んでなかつた？」

「覚えてんじやねーかッ！」

作業員を探そう3

長年体にくっついていたために、そいつは今では男の皮膚の一部のように感じられる。指をポケットから出した拍子に、指先にコトリと触れて、するすると逃げて行くものがある。指輪だ。水晶の念珠が真ん中から二つに切れ、珠が霰のように四方へ飛び散る。

それを拾い上げた男は、宝石の光彩が虹のように輝くそれらを集めていった。新しいチェーンを出す。にぶく光って美しさが遠くからやってくるような奥ゆかしい感じの首飾りのように、チェーンが伸びていた。

細い革ベルトの華奢な時計は太い手首にめり込んで今にもはじけそうだ。細い金メッキのブレスが腕に何本も巻かれていて、日に焼けた肌に映えている。紺色の丸い石がついたちやちなピアスがあり、小指に一本だけ小さな指輪がはまっていた。飾り気のない、ごく当たり前の銀の指輪だった。キラキラと眩しくて思わず目を背けたくなるロレックス、胸に下がっている金の鎖、天井のライトで左手の指輪が時々光る。カットされたそれぞれの面に同じ大きさの灯りが光る。

彼の身につけた小ぶりではあるけれど高価なアクセサリーは、血を求めめる吸血鳥よろしく、反射のための微かな光を希求している。

青い宇宙、浮かぶ星座、煌めく銀河。空想の夜空をモチーフに透きとおったアクセサリー。思わず覗き込みたくなるような小さな世界が不似合いな男だ。

その胸には金いろの輪つなぎの重々しいネックレスが揺れており、それがあたかも、神輿のように威のある胸の七五三縄を思わせた。

繊細な下着でも綿の小さなタンクトップでも細い鎖の上品なネックレスでもなんでもいいけれど、何もつけていない体の表面に何かひとつのしるしのようなものがあるのは素敵だ。そういうのはベッドのなかとか薄闇のなかとか体温の延長上なんかで、目にとっても注意をさせる。この男のようにごちゃごちゃし過ぎていると下品にしか見えな

いくつかの金色のアクセサリーが肌の魅力を注意深く封印するみたいに配置されている。

フェイクパールのロングネックレスがまだ首にかかっていた。ファッションの縦ラインを強調するために長いのを買ったのか、ずつとつけていると肩がこるとばかりに首を回している。

「ゴールド・エクスペリエンス」

ジョルノがスタンドを発動させても男は吉良吉影と熱心に会話をしたままである。

金色のヴィジョンが男のつけているアクセサリーに触れた瞬間、いきなりツバメが生まれた。ツバメは男の肩に止まった。

「思った通りだ」

「これは？」

「僕が生み出した生命は、本来の持ち主のところに戻る習性があるんだ。手に入りさえすればどうにでもなる。吉良吉影は新たな自分となりここにあるものは全て自分のものじゃないと考えているから使えなかったんだな。でもこの男は違う」

「なるほど、アンダーワールドで掘り起こした物品を生命に変えやがったのか！」

「そういうことだ。ありがとう、ドナテロ。君のおかげでようやく吉良吉影を匿っているであろう男の正体が明らかになりそうだ」

ドナテロは嬉しそうに笑った。

「調べてみたんだけど、高所作業員かもしれない」

「なんだそれ」

「あそこで作業する人のことだよ」

ジョルノが指さす先には山間部などでよく目にする鉄塔がある。発電所から各地へと電気を送るための電線を張るための建物だ。吉良吉影の家に訪れていた謎の男は、主にこの鉄塔に電線の設置、張り替え工事を行っている会社の社員だとわかったのだ。

工事センターは独身寮も兼ねており、ここから資材や道具を持ち出

して各地の工事現場へ向かうのだ。

鉄塔間に張られる電線は架空送電線と呼ばれ、発電所から変電所へ、もしくは変電所間を結んでいる。この会社では東北地方を中心に、さらに北海道や九州の現場での作業も行っている。

電線は大体30〜40年くらいで張り替えをする。1km以上の張り替えをする場合は40日間ほど工期がかかり、今は夏だから張り替えは少ない。

この工事に不可欠な「電工」と呼ばれる高所作業員は、日本国内に約5700人ほどいるそうだ。建設や採掘に従事する技能労働者は、全国で266万人。専門職とはいえ、その数は全体の0.2%に過ぎず、一人一人の存在が貴重だという。

工事は、張り替える電線を鉄塔まで運ぶことから始まる。鉄塔間に張ったワイヤロープと、延線車と呼ばれる大型機械に巻き付けた電線を接続し、逆側から引つ張りながら電線を張り変えていく。

電線自体は大型機械を使って張り替えていくが、張った後にこそ多くの作業が待っている。電線のゆるみの調整、がいしの設置、接触や振動、着雪を防止する機器の取り付けなど、これらは実際に作業員が鉄塔、電線の位置まで上って作業をしなければならない。電線工事の現場は、地上100mを超えるのもザラなのだそうだ。

電線を張り替える際、一時的につるしておくための器具、金車。標準的なもので10〜15kgもの重量があり、これらも全て作業員が高所まで持っていく地上での準備が高所作業の質につながる。

「100m超……怖いな」

「落下しないようにするのはもちろん、ボルト一つ落とすことも許されない仕事だからね」

電工は、胴綱と呼ばれる命綱を体に装着しており、さらにボルトやナット、工具類一つ一つにもひもを結び付けて自分につないでいる。

多くの工具を扱う高所作業では、たった一度、手元が滑るだけでも大事故につながる可能性がある。技術の向上を目指すことは当然だが、それ以上に安全配慮を徹底することが重要なのだそうだ。

高所作業の際は命綱を装着するほか、工具類にいたるまで全てひも

につないで落下を防止する。

工事現場へ行く前に行う作業の一つ。電線を装着したカムアロングを引っ張る際に使う「セミ組み」。ウインチで引く張力を調整できる。危険なのは高さだけではない。電線工事の現場は高電圧にさらされており、高いところで50万ボルトにもなるのだという。

鉄塔上ではビリビリするため、電気を逃がす回路が組み込まれた作業着や、電気を通しやすい靴を履いて作業をしている。

作業中は体に電荷がたまって感電しないよう、導電性服と呼ばれる電荷を逃がす作業服などを着用する。また、高電圧の電線は空中放電するため、直接触れなくても感電してしまう。現場では区画対策を行って隔離し、近付かないようにしているのだ。

だから、すぐにわかったのだ、とジョルノはドナテロにいう。

こういった感電対策をはじめ、配電盤のチェック、使用する器具の組み立てなど、事前の準備作業は多い。これらを取り仕切るのも大事な仕事の一つなのだ。

電線を伝って移動するための器具、「宙乗り機」。電線につるし、木材の部分に座って使用する。電線がたわんでいる部分を通ると結構なスピードが出るとか高所と高電圧、現場は常に危険と隣り合わせ。

1回の工事で25〜40人の作業員が携わる。

「この業界では、自分の仕事だけしつかりやればそれでいい、という風潮があるらしい。今はそれでは現場を回せなくなってきているようだけど、古い体質は変えられない。よく知らないらしいよ」

上と下、上司と部下、高所と地上それぞれで作業する人、という両方の意味で、双方で活発に意見交換ができるようコミュニケーションをとることが重要だろうに。その方が効率的かつ安全に作業が進められるのだから。

「ってことは、会社に聞いても無駄なのか」

ジョルノはうなずいた。

「だから、アンダーワールドは必要不可欠なんだ」

血の繋がった兄弟同士、色々話すものもあるだろうという気遣いもあって仗助とドナテロが入れ替わり、ジヨルノは作業員の男を探すとになった。

「新聞が欲しいなんて意外だね」

「兄貴がいなきや買わねえよ、日本語は読めない」

「読めって？」

「オレのスタンドは説明した通りだぜ。その土地の記憶を引っ張り出すにはピンポイントで知つてないと効率悪いんだよ。昨日はそれがよく分かった」

「ああ、空条さんのいつてたあれか」

「何時間かかったと思う？5時間だぞ、5時間！ステーキハウスに連れてってもらえたけど、日本人て歯が弱いのか？あんなに柔らかい肉は始めて食った。フライドポテトはうまかったけど量がすくねエ…………詐欺だろれ」

「日本人は赤身より脂身を重宝するからね。それにアメリカ人の食生活に合わせてたらあつという間に病気になるって死ぬから仕方ない」

「ふうん…………。うまかったけど、やっぱりアメリカの肉の好きだな」

「肉を焼くことに命をかけてる人と一緒にしちやあいけない。日本人はご飯と食べるために全てのおかずが存在しているんだ」

「ご飯………… ああ、承太郎が食ってたあれか………… 箸っていうんだっけ？棒切れ2本でナイフとフォークとスプーン兼ねるとかやっぱ日本人は器用だな」

「だろうね」

ドナテロはニヤニヤ笑う。

「あん時は普通に食べてたよな、エジプトの飯。今じゃ無理だろ」

「何食べてたかな、よく覚えてない」

「アエーシだよ、アエーシ」

「アエーシ……………」

平たく成形した生地を高温のかまどに入れて瞬時に表面を焼くた

め、中の蒸気が逃げずに膨らみ、中に空洞ができるパンらしい。

「ピタパンみたいなものかな」

「ピタパンのがわかんねえよ」

アエーシは2つの食べ方ができる。1つはちぎってディップやピューレをすくって食べるもの。ディップにはフル（ゆでたソラマメを潰したもの）、タヒーニ（練りごまとレモンとにんにくを混ぜたもの）、ババガヌーシュ（焼きナスのピューレ）がある。

アエーシのもう1つの食べ方は、半分に切ってポケット部分に具を入れるサンドイッチ風にする。

「やっぱりピタパンじゃあないか」

「だからわかんねえよ」

ドナテロは肩を竦めた。

「兄貴はトルシー挟むの好きだったよな、大根やにんじんの漬物。コシヤリもよく食ってた」

「よく覚えてるね」

「思い出せるまでよろしくつつたのはアンタだ。オレはゼイトウーんに、コフタやターメイヤ入れた方が好きだったからよく覚えてる。肉食えってよく言われてただろ」

「呪文みたいだな……」

「上からオリーブ、ひき肉団子、そら豆コロッケ」

「よくわかるな、材料」

「料理に使われてる食材当てるのが得意なんだ、昔からな」

「へえ」

「兄貴はそれを利用して嫌いなやつをオレに押し付けようとした。特にハمام・マシユイ。鳥の丸焼き。鳩が多いけどたまに鴨にしたやつはこの世の終わりみたいな顔してたな」

「…… そんなに小さい頃から嫌いだったのか、僕」

「そういう時は決まってオレが食べるからラツキーだったな」

ジョルノは不思議そうな顔をしている。ドナテロの方がよく知っているのが不思議でならないらしい。

「代わりにオレは豆料理が嫌いだったから助かった。エジプト料理

といえば、豆ってレベルだからな。保存がきくタンパク源とはいえ、しよつちゆう出されたら嫌になる」

「たとえばどんな？」

「嫌いな料理を聞くのかよ、普通」

「僕は好きな料理なんだろう？」

ドナテロはやっぱり覚えてんじやねえのか、とジョルノに疑惑の目を向ける。ドナテロがわかりやすいだけだとジョルノは涼しい顔だ。

エジプトを代表する豆料理はフール。フール自体が豆という意味だが単にフールといえば、主にソラマメを蒸気を封入しながら水煮にし、刻んだ玉ねぎや白チーズを薬味にふりかけ、たっぷりの油をかけて食べるものを指す。

この料理は、エジプトの朝食時にはアエーシをセットで出てきたからドナテロは嫌という程覚えていたらしいかった。

あとはフール・メダンメス。古代エジプト時代から食されている伝統的な料理で、ソラマメをメインとした煮込み料理で、レモン汁やクミン、オリーブオイルをかけて食べる。ゆで卵をスライスしたものがよく乗っていた。

「デザートはよく横取りされてたしよ……」

「甘いものは今でも好きだよ」

「兄貴と食いに行く時はぜってー頼まねえ」

ドナテロは遠い目をしている。

「そこまで食い意地はもうはってないと思うんだけどな……何年前の話をしてるんだ」

「かわんねえだろ、4歳だろうが14歳だろうが」

バスブーサはパスタなどに使われる小麦で作って焼いた生地にはチミツやレモン汁、ローズウオーターなどで作ったシロップに漬けたケーキ。とても甘く、とろけるような食感でだったはず。

オマーリはココナツツのスライス、ピスタチオ、レーズンなどのドライフルーツに砂糖、パンをミルクに入れてオーブンで焼いたデザート。一見、グラタンのようにも見えるが、とろけるような甘いパンが最高においしかったはず。

フティールは古代エジプト時代から食べられていたとされるイーストを使わないパン生地を重ねて焼いたパイのような特徴のある伝統的な食べ物。これが月型に形成されるようになってフランスに伝わったものがクロワッサンになったともいわれ、フティール・メシヤルテットはシロップをかけて食べる庶民的デザート。

「疑問形ばかりだな」

「だから兄貴に横取りされたっつってんだろ」

「覚えてないことを怒るなんて無駄だと思わないか？」

「終いにやはっ倒すぞ、テメー」

ジョルノは笑った。今日の搜索が終わったらスーパーに寄ってみようかなんていうものだから、ドナテロはデザートだけじゃないだろうなど疑いの眼差しを向けた。

「この町レンタサイクルないのかよ」

ドナテロに言われて始めてそんなサービスがあることにジョルノはきがついた。

ジョルノは知らなかったのだが、自転車を有料で貸し出す事業のうち、数か月にわたるなど長期の賃貸借ではなく、数時間くらいの短期の賃貸借のサービスをレンタサイクルというらしい。

数分くらいのごく短時間の賃貸借で自転車を共有するシステムの場合は、一般的に、自転車シェアリング、バイクシェアリング、シェア自転車などと呼ばれ区別されているようだ。

環境の保護や、都市での渋滞や騒音、大気汚染の緩和を目指すために、市民の交通機関の選択肢として、都心部において安価または無料で自転車を提供するコミュニティ自転車プログラムを実施する動きが各国で見られているようだ。

この町では、自治体などが主体になり、自治体の各所にステーション（自転車貸出返却所）を設けて行う「コミュニティサイクル」と呼ばれるシステムがあった。このシステムでは、多くの場合、自転車を

どのステーションにも乗り捨てで返却することができる。盗難や転売を防止するため、明るい色で塗装したり、単一の設計のものを使用するなどの工夫がされている。

ドナテロ曰く、アメリカではライト兄弟が1890年代にはまだ目新しかった自転車を販売する店を経営していた。また自転車を体験してもらったため貸し出しも行っていた。このビジネスが成功したことで飛行機の開発資金を調達することが可能となったというのだから驚きである。アメリカではそんな昔から馴染みがあるサービスだとは知らなかった。

そういうわけで、ジョルノとドナテロはレンタサイクルに駆け込んだ。さすがにツバメをずっとおいかけるのは大変だからだ。

1時間103円(以後30分ごとに103円)、1日パス1,029円。そこそこな出費だが仕方ない。

S市は他の観光名所と比べ極端にレンタサイクルのサービスが少なく、最近サービスを開始しなんとか他の都市並みになったらしい。暫定的らしいが外国人を含めた観光客の増加に伴い規模が拡大され2000年以降もサービスの提供が行われることが決定したという。

もともとS市はレンタサイクルのサービスが普及していない街だったようだ。その理由としてはメインとなる街の中心部がアーケードで自転車の通行に向かないことや郊外のS城跡周辺などは意外と急な坂道が多いことなどがあげられる。とはいえ定禅寺通りをはじめとした街路が美しいSタウンでは歩道と車道の間にちゃんと自転車専用道路が整備されている区間も多数有り、レンタサイクルならではの楽しみ方が隠れているのも事実。

ちやうど良かったといっているだろうか。

こうしてジョルノとドナテロはひたすら自転車でゴールド・エクスプレスで生成した作業員の探知機を追い回し始めたのだった。

「電動自転車導入しろって要望出した方がいいんじゃないの?」

「アメリカ進んでるんだね……考えもしなかった」

「知らなきゃ気づかぬえだろ」

「たしかに」

徒歩よりはだいぶん楽になったが、やはり自転車でもきついものはきつい。この町の行政にはてんで興味はなかつたが要望書未満の意見を受け付ける場所はあつたはずなので、なんとなく提出しようかという気になった。

「英語で連投すればインパクトがあるかもしれないな」

「そりゃいい。あとでやろうぜ」

「5時までには作業員を見つけられたら話だけど」

「全くだー！」

ずいぶんな時間をかけて2人がやってきたのは鉄塔近くの公園だ。昼休みだからだろうか、似たよう人々がたくさんいるのがわかる。ビジネス街からは離れているからよくいるサラリーマンはみかけない。「どつかに作業員の男がいるってことか？」

「おそらく…… だがおかし…… なんだこれは」

「どうした、兄貴」

「ジョルノは顔を開けた。血相変えて叫ぶのだ。」

「あいつは只者じゃあない！」

「はっ」

ドナテロもつられて見上げる。そこにはジョルノとここまで追いかけてきたツバメがカラスに襲われていた。

「なんだよ、ただのカラスじゃねえか」

「カラスはツバメの巣は狙うが、親鳥は狙わないものだ。飛翔力が違いすぎるからなー！」

「じゃあカラスの巣が近くにあるんじゃないやねえのか？」

「あの鳴き方は若鳥だ。番がまだいない時の鳴き方なんだ」

「ほんとかよ、という顔をするドナテロにジョルノはうなずく。」

「ほら、見てくれ」

「ジョルノは視線をなげた。」

「普通のカラスが遊具を浮かせるか？」

「ドナテロとジョルノの間を作業員たちがあわてて走り抜けていく。」

「ぎゃあー！」

人間がミンチになるのは案外簡単なんだとドナテロは他人事の

ように思った。生温かな血しぶきが顔にかかったことでようやく目の前のひっくり返ったジャングルジムに何人か作業員たちが押しつぶされてぺしやんこになったことを知る。

「ドナテロー」

突き飛ばされる衝撃と同時に重力に逆らいきれずジャングルジムが横倒しになったことを知る。

「いってえなあ！もつと優しく投げろよ、こっちはさっきまで肋骨折れてたんだぞー！」

「無茶言わないでくれ、悠長なことしてたらジャムになったかもしれないじゃあないか」

「嫌な想像させんなよ」

「ドナテロー、どれくらい戦える？」

「無理だ！ヴィジョンはあるけど攻撃力はてんでない！フオークすらもてない！」

引っこ抜かれたシーソーの片割れがひしやげた状態で飛んできた。ドナテローの目の前にさつきまであったはずのジャングルジムが正常な状態で復元され、弾き返してくれた。

「……訂正するぜ、自分くらいは守れるらしい」

「シツカリシロヨ、ドナテロー……わたしに何時マデ頼るツモリダ……」

「馬鹿言え、そもそもわかりづれーんだよ、アンダーワールド!!」

「酷いナア……イマノわたしヲ望んだのは君のクセシテ」

「その調子なら大丈夫そうだね」

「兄貴は大丈夫かよ」

「ジョルノは笑った。」

「大丈夫だよ、弟に無様な格好は見せられないからな」

ポルターガイスト現象あるいはポルターガイストは、特定の場所において、誰一人として手を触れていないのに、物体の移動、物をたたく音の発生、発光、発火などが繰り返し起こるとされる、通常では説

明のつかない現象。いわゆる超常現象、心霊現象の一種ともされているやつだ。

物体の移動としては、主として建物内部に設置された家具や、家具内に収納された日用雑貨などが挙げられる。発生する状況は一貫性が無く、住人が就寝中に移動し、起床後いつのまにか移動しているのを確認されるものもあれば、住民が起きている時に移動し、移動している状況を直接目撃されるものもある。動き方にも一貫性は無く、激しく飛ぶこともあれば、ゆっくりと移動することもある。

ドイツ語で、*poltern* (騒々しい音を立てる) + *Geist* (霊)、すなわち「騒がしい霊」という意味の合成語である。日本では心霊科学研究会の浅野和三郎が「ポルターガイスト＝騒々しい幽霊」と和訳、幽霊屋敷に起きる現象として紹介した。

思春期の少年少女といった心理的に不安定な人物の周辺で起きるケースが多いとされており、その人物が無意識的に用いてしまう念力(反復性偶発性念力)によるものとする説もある。

つまり、そういった能力を有する者が無意識的に物を動かし「ポルターガイスト現象」を発生させてしまう、とする考え方である。

例えば岐阜県富加町のポルターガイストでは、超心理学研究者の小久保秀之は「地磁気の異常が脳に作用して」無意識的な念力現象が起こっているのではないかと、その仮説をあらかじめ抱き調査用の測定器を準備した(但しその仮説は調査後に見直すことになった)。

「カラスって思春期があるのか?」

ふと思った疑問を口にしたところで返ってくるとは思えないが、ジョルノは飛んでくる遊具をゴールド・エクスペリエンスで蝶に変えた。

科学の法則では説明できない現象もスタンドなら説明することができる。ごつい男が投げつけて来ているのだ。木馬が鈍い音を立ててチェストの上に落ちた。まるで地球に重力があることを突然思い出したみたいに。

「ああくそ、近づくな!」

ジョルノは大男のヴィジョンを振り払う。空中に放り投げられる

はずだったジヨルノの代わりに、近くにあったベンチが宙を舞った。記念碑が投げられてものすごい音がしたり、街灯がふいに舞い上がった。手当たり次第と言った様子である。

ジヨルノはドナテロのところにもまで飛んでくる障害物を蝶にかえつづけた。

石がひとりでに飛び出してこなごなに壊れたりする程度ならジャングルジムが防波堤になってくれるから助かる。もつとも空から雨のように石ころが落ちてくるのは防ぎようがないのだが。放り投げられた遊具たちは地面に落ちつぶれて形が崩れた。

力を失ったガラクタはステンレスから剥がれるように転がっていった。

あるいは数回の大円を描きながら、太陽の光にきらきらと輝きつつ沈黙した緑の中へ落下していった。

「ゴールド・エクスペリエンスッ！」

ジヨルノは拾った石を投げつける。岩から成長し始めた蔦が大男をぐるりと回して締め付け始めた。

「たたみ掛けるんだ！」

足元から伸びてきた巨木が噴水のオブジェに大男を押しやり、転倒させる。そして大蛇のごとく木の幹の中にスタンドを丸ごと飲み込んでしまった。内側から突き破ったそいつは、次の瞬間に自身を破壊していく。

「なんだあれ」

「僕が生み出した生命はカウンター能力があるんだ。ダメージがそのまま返ってくる」

「うわっ、こええ」

ドナテロはカラスが断末魔を上げるのを聞いていた。

「無駄なことばかりして……諦めたらどうだ」

自転車が浮遊する。

「あ」

ゴールド・エクスペリエンスで見事にひしやげた自転車2台。そし

て、絶命する瞬間に岩に変わることによって免れようとしたカラスの銅像が出現した。

「まずいな…… 非常にまずいな…… なんて説明すればいい？」

「…… 兄貴」

「僕の名前はわれてるからバックレるわけには……」

「兄貴」

「ううーむ」

「だから兄貴」

「なんだい、ドナテロ」

「アンダーワールドで過去の自転車掘り起こしてさ、持って行きやいいんじゃねえか？」

ジョルノは瞬き数回顔が輝いた。

「それだ！」

ジョルノたちは遊具を過去から持ってきて、もとのやつを動物にしてごみ捨て場を持っていくことにする。そのあと作業員探しは続行されるのだ。

スタンド名：ジャイアントマン

本体：奇病にかかったカラス

破壊力：A

スピード：A

射程距離：C

持続力：B

精密動作性：C

成長性：D

能力：ポルターガイスト現象を起こすスタンド。シンプルゆえに強力。ラップ現象も起こせると思われる。

作業員を探そう4

ジョルノとドナテロのすぐ横の道路をサイレンの音がけたたましく走り抜ける。パトカーや救急車のサイレンが近づき、周囲はあつという間に騒音の渦となっていく。面倒なことになる前に逃げ出してよかった、とうしろをチラチラと振り向きながらジョルノは思った。

何人も遊具の下敷きになったものだから、対向車線からまた来た救急車のサイレンの音が、ドップラー効果で奇妙に歪みながら高まって来る。パトカーのサイレンの音が、獲物を追いつめていく勢子の掛け声のように響く。

迷宮入り間違いなしの連続殺人事件だ。スタンドによるバトルだったから指紋すら残らないに違いない。サイレンが町じゅうを震わさんばかりに響かせながらすれ違うパトカーの東方巡査には悪い気しかしないのだった。

あまりのサイレンの連鎖に犬の遠吠えが止まない。家族の死を告げる死神の泣き声のような、長く尾をひく吠え方だ。日本中のパトカーが集まってきたのではと思われるほど、凄まじいサイレンの音が夜空にこだまする。あの時の惨状を思えば当然といえば当然といえた。

「なあ、持って来てよかったのかよ、それ？」

ドナテロは自転車のカゴに置かれたカラスの銅像をみていうのだ。不気味すぎて置いて行きたそうだったから説き伏せて運んでいるのだ。

「あたりまえだろ。もし目を覚ましてみる、ポルターガイスト現象で野次馬もろとも大惨事だ」

「そりゃそうだけどき……どこに持っていくんだ？」

「社王グランドホテルだよ。知っての通り、スピードワゴン財団職員達が詰めてるからな。スタンドの扱い方はよく知ってるみたいだからこういうのはプロに任せる」

「ぜってえ帰りたくない……」

「ドナテロの宿泊先だろう？」

「知らなかったんだよ、んなやべーやつらと一緒に過ごす羽目になるなんて！」

「それについてはご愁傷さまだな。はやく正気を捨てた方がいいんじゃないか？」

「諜報部のヤツらと同じこと言うんじゃないよ！」

ドナテロはパトカーのサイレンに負けないくらいの声を上げる。赤く上がったようなランプとためをはるくらい真っ赤になって怒るのだ。ジヨルノは声を上げて笑った。

「しかし、パトカー来すぎじゃねーか？」

「きつと他の場所でも未解決確定の事件が起こったのさ。調べているのは僕達だけじゃあないからな」

「あー、兄貴といた仗助つてやつ？」

「他にもいるよ、たくさんね」

「なるほど…… そりゃパトカー何台あっても足りないな」

四方八方から湧き上がって、波のように押し寄せるパトカーの連鎖である。病院を横切ると、病院に到着した救急車が見えた。赤色灯の赤い斑模様を病院の壁面にぐるりと投げかけ、サイレンだけがやんだ。直後、晴れた空から静寂が降りてきて、スポットライトのように救急車の回りに無音の空間を作りあげた。

けたたましいサイレンとともに近寄ってきたパトカーが、我に返ったかのように音を止め、停車する。赤色灯が、逮捕劇を盛り上げる照明装置に見えた。慌ただしいことである。

交差点の赤信号が、先ほどまで僕たちを照らしていたパトカーの灯りを彷彿させる。ジヨルノたちは渋滞を横目にすすいと自転車を走らせる。案内人はツバメだ。

「日本のパトカーはあれだな、白黒の」

「パンダみたいなの？」

「そうそれだ。POLICEって書いてあるからわかるけど」

「パンダの群れに見える？」

「ずいぶんうるせえパンダだな」

一台ではない。めったにない大事件に勇んでやってくるパトカー

の群れだ。またすれ違った。サイレン音がそのまま和音を作っているようにも聞こえた。三台のパトカーが縦に並んで、次々に走っていった。

スピーカーから、耳をつんざく暴力的な音量でそれは響く。巨人の悲鳴のようなその不吉な音は、山々に反響してぐるぐると町を取り囲んでいく。ピーピーと消防車がサイレンを鳴らして走っていった。

「火事まであったのか？」

「さあね」

ジョルノたちは途中でまた警察のパトロール車と出会った。一台は無線でなにかを会話しており、もう一台は比較的ゆっくりとした速度で背後からジョルノたちを追い越していった。

「曲がるよ、ドナテロ」

「ほんとに坂多いな、この町は！」

「日本は山ばかりだからな」

「そんなんだから地震がよく起こるんだ」

「当たってるよ」

ジョルノは軽口を叩きながら坂を一気に駆け上がった。

ツバメはジョルノがまだ行ったことがない古集落のエリアに入ってきた。昔ながらの日本家屋が並び、路地が次第に細くなり、路上駐車しているために自転車でなければ苦労しそうなところである。自転車で正解だったといっているだろうか。

「……戻ってこい」

ジョルノはツバメに命じた。ある家の真上を軽く旋回したあとでツバメはジョルノの所にもどってくる。

「どうしたんだよ」

「まだ早い。空条さんに深入りしないで帰ってこいって言われているんだ。前科があるから」

「ふうん、そうなのか。兄貴がいうなら今日の任務は終了？」

「ああ、そうだよ。ありがとう、ドナテロ」

ドナテロはどこか得意気だ。ちら、とジョルノは1度だけ振り返る。そこには町の電器屋さんがあった。

ジヨルノとドナテロは社王グランドホテルに帰ることを決めた。ツバメを元のアクセサリーに戻して、ジヨルノはカバンにしまい込む。

「やばかったよな、あのカラス。しかし、なんだって直ぐにおかしいってわかったんだ？」

「前に作ろうとしたことがあったんだ。今の僕にはまだ出来ないけれど」

ついでだからとジヨルノは話し始める。日本で日常的に見られるカラス属のカラスは、留鳥のハシブトガラスとハシボソガラスの2種である。日常語ではこれらの全身が黒いカラスを通常は区別することはない。

産卵数はハシブトガラスが2から5羽、ハシボソガラスが3から5羽程度。巣立ち後も2、3ヶ月程度は家族で群れを組んで生活する。成鳥はつがいではほぼ一年中固定された縄張りを持つが、若鳥は群れで行動する。

「この時点でおかしいだろう?」

「言われてみりやたしかな」

「今まで遭遇したカラスはいずれも若鳥だ。群れで暮らしていないってことは、空条さんの言う通り命令されて縄張りを決めてるみたいだな。おそらく、ひとつの巣から巣立ったやつらだ」

「多くて5羽もいんのかよ」

「違うよ、ドナテロ。親がいるから最大7羽だ」

「2羽岩になってんだろ? まだ5羽もいんのかよ、こんなのが? 冗談だろ?」

「冗談じゃないから困ってるんじゃないか」

自転車を走らせながらジヨルノたちは会話を続ける。英語で会話する彼らを物珍しげに通行人は見つめていた。

今頃立ち入り禁止になっていであろう公園。おそらくこれからカラスのねぐらであろう神社や公園は被害にあったりカラスの銅像を回収して回ったりするために封鎖になっていくと思われる。

ジヨルノたちはツバメを追いかけている。えらく低い位置を滑空

し始めた。もしかしたら雨が近づいているのかもしれない。

ドナテロはさつきから沈黙を守っている。追いかけるジヨルノは言葉を選んでいたが、舌をかみそうになって辞めてしまった。

「まずいな」

「なにが？」

「遠くの街は雨かな、霧がかかっている」

「げっ、雨かよ」

「こんなことでもなきや、ね。天気の間を指して出かけてみるのもたまにはいいだろうって思うんだけどな」

「オレは嫌だぜ、日本の夏はジメジメしていて余計暑く感じてんだからよ」

「雨上がりの匂いは好きだけどね」

「晴れてた方がいいに決まっている」

「毎日何を悩んでいたのか、迷っていたのか、馬鹿らしくなるから雨は好きだ。僕は」

「ふうん」

興味なさげにドナテロは返した。

「げ」

「あ」

ジヨルノは嬉しそうな顔をする。ドナテロは嫌そうな顔をする。雨がポツンと降ってきたのだ。ポツンと。そのうち本降りになりそうな勢いで強まっていく。街中を洗い流してくれそうな勢いになるにちがいない。また後日。始まるであろう本格的な調査を前にジヨルノたちは一旦ホテルに戻ることにしたのだった。

部屋というより広めの廊下といった感じの狭い台所とは程遠い。

「長居客向けのキッチンは充実してるんだな」

流しの中には無秩序に食器が放り込まれている。

流しの排水孔には角切りの小さなじゃがいもが詰まっていて、表面

に油が渦を巻く汚い水が溜まっていた。そのヌルヌルして糸を引くじやがいもを爪で挟んで取り出すと、水がようやく減り始め、鳥肉の屑は円を描いて穴に吸い込まれていった。

丸いガラスのポットの水が沸騰するのを待っている。しばらくすると、ガラスの表面が白く濁り湯気が昇り始めた。小さな蛍光灯に照らされて、しんと出番を待つ食器類、光るガラスが浮いている。

台所は、天火を使うとストーブをたいたごとく熱気につつまれていた。

料理をあまりしない人間の後片付けはこんなものだ。

エジプト料理の歴史は古代エジプトまでさかのぼることができると言われ、古代ギリシア・古代ローマ・トルコとの交流の中で食の文化が進化してきた。

豊富なナイル川の水源のおかげで、穀物や野菜、果物などの農作物が豊富に栽培されている。地中海やナイル川から摂れる魚介類も豊富で料理にもよく使われ、肉類ではイスラム教の影響で豚肉は食わず、羊肉・牛肉・鶏肉を使った料理が食べられている。

エジプト料理では食事はサラダとスープから始まり、肉料理や魚料理と一緒にパンや米が添えられる。米がよく使われ、ご飯を炊くときに短いパスタを入れることがある。

肉料理を食べる時は白いご飯で、魚料理の時は揚げ玉ねぎで味付けしたご飯と一緒に食べる。ゴマペーストのタヒーナはエジプト料理にはかかせない調味料で、パンはもちろん肉料理などの主菜にもつけて食べ、豆料理が多く、ソラマメやひよこ豆がよく使われる。

米とパンとどちらがいいか、という問題がまず持ち上がったのだが無難にパンに落ち着いた。ホテルに備え付けの設備ではパンが焼けないからだ。

カメユーにあつた冷凍ピタパンを活用することで落ち着いた。

鶏肉は一口大に、玉ねぎは皮をむいて、ざく切りにする。鍋にバターを溶かし、にんにくを加え、にんにくがきつね色になったら鶏肉

と玉ねぎを入れ、表面に焼き色を付ける。

300cc ぐらいの水を加え、沸騰したら弱火にし、40〜60分、柔らかくなるまで茹で、その間にモロヘイヤの葉を摘み、ざつくりと切っておく。モロヘイヤを加え、1、2分茹で、塩こしょうで味付けする。モロヘイヤと鶏肉の炒め物完成である。

胡瓜は縦十字に切り、1cm幅のいちよう切りにする。トマトは洗ってそのまま胡瓜と同じ大きさの角切りにする。皮はむかず、種もとらない。紫玉ねぎは5mmの角切り、青唐辛子は縦半分に分けて入れてから小口切り。にんにくと日本の調味料もボウルに入れる。

青唐辛子がうりきれていたため、しし唐辛子を代用した。ボウルにレモンしぼり汁と塩を加えて和える。器に盛り付ければ出来上がり。冷蔵庫で少し冷やして味をなじませて完成。こちらはエジプト料理風のサラダだ。

ドナテロはコリアンダーリーフかイタリアンパセリを欲しがったが見つけれなかったので泣く泣く諦めた。

茄子はガクを除いて、竹串などで4〜5か所穴を開ける。焼いているときに爆発しないように穴を開けるのだ。茄子3本を魚焼きグリルの強めの中火で25分間グリルする。茄子が焼けたら、ラップやホイルでふわっと包むか、蓋付き容器に入れて15分間蒸らす。

茄子の皮をむき、包丁で細かくたたく。しっかりと細かく刻む。小さなフライパンにオリーブオイルとにんにくを入れ、弱火でにんにくの香りがほわっと立つまで炒める。次に刻んだ茄子を加え、オリーブオイルとなじませるように炒めて、茄子の水分を少し飛ばす。2分間ぐらい。

火を止め、玉ねぎ、塩、練りごまペースト、レモンしぼり汁、調味料を加えて混ぜる。味見をして塩が足りないようなら塩を加えて調整し、粗熱が取れるまで置く。または器に入れかえて冷蔵庫で冷やす。オリーブオイルをまわしかける。出来上がり。ババガンヌージは鶏肉が嫌いなジヨルノのメイン料理である。

フムス（ひよこ豆ペースト）は頑としてドナテロが嫌がったため却下された。

冷凍そら豆は解凍し皮をむく。フードプロセッサーはないので頑張って潰した。エジプト塩は手に入らなかったからそれっぽい調味料で代用した。

パン粉、にんにく、小麦粉、塩コショウを加えて混ぜ小さいコロツケ状に丸め、表面にごまをまぶす。揚げ油でカラッと揚げる。タネが柔らかめだが揚げるとしつかりする。コロツケのように衣をつけないので簡単だった。

本来はたまねぎと大量のパセリのみじん切りが入ったりソースもアラブ特有の練りゴマを使ったりするようだが手に入らなかった。

これでそら豆のコロツケ、ターメイヤの完成だ。ドナテロはたぶん食べないだろう。

ピタパンに好きな材料を詰め込んで食べるわけである。ようはサンドイッチのようなものだ、不味いわげがない。ドナテロはあの時食べたものには遠く及ばないと残念がっていたが、DIOが雇ったプロの料理と比べるべきではないだろう。

「バミヤも作ってたかったのよ……」

「オクラが入ったトマトの煮込みならいいけど、また鶏肉が入ってるじゃあないか。ダメだね」

「どんだけ嫌いなんだよ」

「僕が記憶を失う前からきらいなら筋金入りなんだ、諦めてくれ」

ドナテロは肩を竦めた。

「やっぱなんちゃって料理になっちまうな」

「だからプロと同じ味は無理だ」

「そうじゃあない。環境とか現地でしか手に入らない食材とか結構あるだろう？」

「ああ、言われてみれば確かに」

「今回は予算たりねーからデザートできなかつたし」

「香辛料が軒並み足りないね」

「エジプトいつてみてーな」

「D I Oの館はもうないだろうけどね」

「なくてもアンダーワールドで掘り起こせばいい」

「その発言だけ聞いたら空条さんあたりが飛んできそうだな」

「スピードワゴン財団の連中と一緒に行けばいいんだよ、料理なんてたくさん一気に作った方がうまいに決まってるんだ。ここにある料理がなんか足りねえと思ったら、やっぱそれもある」

「大量につくれば味が均一化するからな、家庭料理は特においしくなるのかもしれない」

「あーあ、どつかにD I Oに雇われてた料理人再雇用されてねーかなあ」

「スピードワゴン財団にいそうだけれど」

「わかんねえ……」

「聞いてみたら？」

「そうだな」

「しかし、作りすぎたね」

「次いつかわかんねーし、別にいいんじゃないやねーの？好きに食ってもらえば」

「たしかにそうだ。きつと驚くだろうけどね」

 ジオルノは笑いながらドアを開ける。

「なにやってんだよ、じいさん」

「い、いやあ、美味そうな匂いがしてたからのお」

 ジヨセフはきやつきやと笑う静を免罪符に入る気満々だったよう
で慌てて抱き上げた。

「いやあ、こういう料理は10年振りじゃのう」

「やっぱり旅の途中で食べたんですか？」

「聞きたいか？お前さんの父親を殺す旅の道中話になるがのう」

「ええ、ぜひ」

「D I Oの手下に襲われたオレとしちや是非とも聞きてえな」

ハイウェイスター1

ブドウヶ丘中学校、および高校の美術室は、美術部の顧問を担当している先生たちの方針でだいぶ个性的な部屋となっている。中学校の副顧問にして高校の顧問でもある林倫子は、美術室をラボ（実験室）にしたいと本気で思っている教師だった。

ここで発想や構想を広げ、外に発信していくような場にしたい。だから、生徒たちが自発的に、「こんな表現してみたい」「この道具を使ってみてみたい」と思えるような工夫をしているのだ。それから、生徒たちと一緒に美術室づくりをすることも心がけていると公言してやまない。

たとえば、一緒に机をペンキで塗ったり、生徒作品を随所に飾ったり。美術室づくりに参加することで、生徒たちは、ここが「みんなのラボ」だということを感じることができると思うと。

2年に一度、美術室は新学期に机の色を塗り替えられる。「机の色が変わると、美術室の印象がガラッと変わる」と林倫子は本気で信じていた。生徒たちに何色にしたいか聞き、一緒にペンキで塗るそうだ。

授業内容によって美術室全体の掲示物も変えることもある。このときは、「17歳の存在証明」という、「今の自分を見つめて絵や立体であらわす」授業をしていたので、ゴッホの自画像の変遷を掲示した。もちろん全て彼女が用意したものだ。またある時は天井からシエルフ（棚）が吊り下げられていることもある。フィンランドの学校を訪れたとき、こういう吊り棚を見かけていいなと思えば真似したらいい。生徒作品や参考作品をディスプレイすることも多い。

美術室入ってすぐの棚は、生徒の目に留まりやすい場所。生徒作品や田中先生が展覧会で買った図録など、「今見てほしい資料」を置くようにしている。美術室の後ろにある実験コーナーは大きな机にさまざまな道具が置かれており、自分の机ではできないことを試す場所だ。

ワゴンには制作に使う用具を学年ごとにまとめている。生徒たち

は自分で必要なものをワゴンから見つけて使う。

こうした工夫によって、生徒は多くの用具に触れ、自分で使いこなす力を身につけられるというわけだ。ちなみに使用頻度の高いはさみやのり、カッターなどはワゴンの一番上に置いている。授業前に必要な用具を取りに行くことが習慣化されているため、授業中に用具を配る時間を節約できるのだ。

図書コーナーには、美術関連の書籍や、授業に関連する雑誌などが置かれており、椅子に座って自由に閲覧することができる。画材はケースなどにまとめ、生徒たちの目に留まるところに置いておく。授業中、自由に取り出して使えるように。

後ろの壁には、実物大の「風神雷神図?風」、マグリットの「ピレネーの城」と一緒に生徒作品が飾られている。

アイデアが生まれる美術室を目ざしているのだ。生徒の発想が広がるように、使ってみたくなるような素材や用具、資料を手に取りやすい場所に置いている。

林倫子自身、何もない真っ白な壁を眺めていると、いいアイデアが思い浮ぶので、美術室の壁は白くしている。雑然とした空間よりもシンプルで整理された場所の方が、ひらめきが生まれると信じているからだ。生徒には真っ白な壁をキャンバスに見立てて、自由に発想してほしいと思っているのだ。

赴任した年にちょうど校舎の改修工事があったのも渡りに船だった。美術室を一からデザインし直すことができたからだ。縦に長かった教室を、黒板を移動して横長の教室にした。生徒の顔がよく見えて、一体感をもって授業ができるようになった。

おかげで錯視を説明するために、マスキングテープを貼っている今はまさにその衝撃を生徒に与えることができたのだから。

美術部の生徒にとって、美術室は夢の国だった。先生が知識を教える普通の教室とは違って、生徒が自ら創造することが許される場所。こうした美術室のあり方は、夢の国という言葉がぴったりだと思うんだと、美大を目指して夏休み返上で林倫子に教えるこうしている生徒はいう。

その豊かな発想に応えられる「夢の国」にするために、林倫子は時にはさまざまな用具や資料、撮影機材を自費でそろえていた。

そんな夢の国には本日珍しくもない部外者がいた。最近林倫子のデッサンなどのモデルに呼ばれている汐華初流乃だ。女性だらけの部室ではモデルを頼める男子生徒は限られている。イギリス人の血が入っている、金髪緑目という the 外国人という風貌で目鼻立ちが整った男子生徒だ。

しかも日本語が通じる上に甘いものを献上すればいくらでも付き合ってくれる男子生徒なんて漫画にしかないと思っていたと彼女たちは色めきたった。

夏休みが終われば文化祭という文化部が一番忙しいイベントが待ち受けている。だというのに美術室の救世主たる汐華初流乃少年は二学期には転校してしまうというではないか。ならばせめてデッサンをたくさん書くしかない。そういうわけでジヨルノは最近林倫子以外のモデルも請け負っている状態だった。

「ひとつ疑問なんですが」

「なに？ 汐華君」

今日も今日とて献上されたチョコレートケーキとコーヒーを本日の報酬として食べているジヨルノは聞いたのだ。

「僕が林先生に頼まれる前にも、何人か生徒はいたわけですよ？ モデルになってた人は。先輩たちはお願いしなかったんですか、モデル？ これが毎回の恒例行事じゃあなさそうだ」

「それ聞いちやうんだ、汐華君」

「気になる？ なっちやうやつ？」

「タブーでしたか？」

「そういう訳じゃあないんだけどねえ……」

一様に歯切れが悪い美術部員たちにジヨルノは疑問符を飛ばした。
「ちよーつとアタシらとは気が合わない人種っていうか……」

「描いてる時って案外モデルにそんな興味ないもんなのよ、私は」

「この学校の美術部だけかもしれないけどね、顧問の先生の影響も大きいでしょ？ 林先生ってダビデが初恋だけあってリアルには微塵も

興味なくて美術に人生ささげるといふタイプの人だからほんとに気楽なのよ、創作する人間にとつては」

「その雰囲気をちよーっと読めてない人が多いんだよね……」

「林先生、モデルに微塵も興味無いもんね」

「正しく顔にしか興味が無いってやつ。あそこまで行くといつその事尊敬するわ」

うんうんと彼女たちはうなずいている。どうやら彼女たちは林先生の奇妙な性癖までは把握していない模様である。よくわからないがモデルと林先生との間にはなんらかのすれ違いがいつも生じている、としか思っていない。

いい指導者とは思っていないようで、彼女たちは一様に林先生派のようだ。それゆえにそのトラブルに巻き込まれがちな彼女たちは辟易しているようだった。

「そこに現れたのが汐華君でわけよ」

「毎回美術館いって一日デッサンしなくてもいいとか最高じゃない？」

「しかも報酬が甘いものでいいなんて健全すぎて嬉しい」

「あーあ、なんで行っちゃうのかなあ、汐華君。お姉さん寂しいぞ!!」
そういうものなのだろうか、とジヨルノは思った。はあ、としかいえな。施設に戻ればこの報酬とお別れだから余計なことをいうつもりは微塵もないのだが。

「おれってよーっ、やっぱりカッコよくて……美しいよなあーっ、ひかえめに言ってもミケランジェロの彫刻のようによおっ」

ジヨルノは準備室にまで響いてくる大声に目を向けた。

「うわ…… また来てるよ……」

「懲りないねエ、噴上裕也」

「林先生が呼ばないってことはインスピレーションがわかないだけだろうから大人しく待ってあげばいいね」

「たしかにイケメン…… イケメンなんだけど、今林先生が描いている絵とは方向性が違うよね」

「あれは私も汐華君選ぶわ……」

「そうじゃなかったら選択肢に入るんだけどねエ……」

「なんでわかんないかな？」

「さあ……」

「誰です？」

「噂をすればなんとやら、ってやつね。汐華君の前によくウチに来てた噴上裕也。モデルもやってたのよ」

美術部員たちは教えてくれた。噴上裕也、暴走族の高校生。どうやらブドウヶ丘高校の生徒ではないらしい。自分の容姿に絶対の自信を持つナルシストな男であり、行動基準も自身のカツコよさ・美しさを優先する傾向にあるが、時にはそれがカツコ悪い事を許さない誇り高さとして表れる事もある。

外見は、本人いわくミケランジェロの彫刻の以上にカツコよくて美しい容姿。彫刻に似てるジョルノと比べるとどつちがイケメンかは美術部員たちの間で意見がわかれるようだ。

ちら、とドア越しに見えたかぎりでは、髪型は側面と後頭部を刈り上げており、あごに「H☆S」という刺青をいれている。学生なので常に学ランを着ているという。例に漏れずあまり学生服とは思えない改造しまくりのものを身につけているようだ。首にはS P E E D★K I N Gと刺繍されたスカーフを巻いているのが見えた。

どうやらナルシストなので身だしなみに気を使っているようだ。

奥で林先生を非難する女性の声がある。取り巻きに「アケミ」「ヨシエ」「レイコ」という女3人をはべらせているようだ。一応ジョルノは同じ敷地内の中学生だが、完全に部外者であるはずの噴上裕也たちがよくここまで入ってこれたなどジョルノは他人事のように思う。

「えっ…… あれ!?ここは引き止めてくれる場面じゃねーのかよ!? そうあっさり引き下がんのかよ…… 先生、林先生、ま、待てよ、おい!せめてもうちよつと慰めてくれよ…… いくらおれだつて傷つくぜエ……」

立場ねーなあも……」

自分が好きな人は人一倍傷つきやすいとよくいうが、噴上裕也も例に漏れないらしい。しかし、モデルに対しては誠意として人形しか愛

せないと公言しているはずの林先生の性癖は把握しているだろうに食い下がっているのがジョルノには不思議でならない。

アーティストのように自意識が過剰なのだろうか、だとしたらナルシズム全開である。毎日自分の姿に見とれながら鏡のぞきこんでるのだろうか、花になってしまった美少年のように。鏡の前を通るごとに自己の影を写して見なければ気が済まないほど、瞬時も自己を忘れる事の出来ない人なのかもしれない。

またやつてるよ、という顔で美術部員達は呆れ顔だ。

「まあいいや。これ食べたら今日のデッサン付き合ってね」

部長からの問いかけにももちろん、とジョルノは頷いたのだった。

いつもなら一緒に帰る取り巻きの少女達と別れを告げた噴上裕也はこの上なくイラついていた。このイライラを払拭するためにはバイクをかつ飛ばすしかないと考えて、ぶどうヶ丘高校の校門を爆音を立てながら走り出した。

林倫子から絵のモデルをしてくれないかと頼まれたのは彼女がまだ噴上の高校にいた頃だった。新しい学校に赴任してもモデルをしてくれと言われた時には正直舞い上がったところはあるのだ、個人的な連絡先までもらったのだから。

もちろん林倫子から人形しか愛せないから期待するなど散々釘をさされてこそいたのだが、今まで沢山いたモデルを引き続き出来たのは噴上のだけである。期待しない方が無理と言えた。

「それをあのやろオ~~~~ツ!!なあにが汐華初流乃君の方がミケランジエロのダビデッぽいだア!馬鹿にしやがってエ~~~~ツ!!」

重ねて言うが林倫子はピグマリオンコンプレクス、人形しか性的に愛せない異常性癖がある美術教師である。だから、その言葉には単純にミケランジエロのダビデの彫刻のように石像っぽくない、という意味しかない。

たしかにミケランジエロのダビデが初恋だと公言こそしているが、

汐華初流乃が初恋の人に似ているから今日から君来なくていいよといった訳では無い。

林倫子個人が汐華初流乃が人形であったなら完璧だったのにとボヤクくらしいの失言をしていたとしてもだ。動かない物体だからこそ恋愛の対象であり、奇跡が起きて人間になつたら理不尽な程に冷めてしまうのがかの美術部教師であると知っていたはずだ。

しかし、噴上裕也は日頃自分の恵まれた容姿を形容するのにミケランジェロのダビデよりイケメンだと評価していたものだから、早合点してぷつつんしてしまったのだ。その時点でよく話が聞こえなくなってしまうのだ。

よく考えればミケランジェロのダビデとイコールの汐華初流乃より、以上であると自称する噴上裕也の方がうえだし、林倫子も否定しなかった。そこまで考えが及ばないくらいに気が動転していたともいう。

もし、このときどういう意味だと聞いていたのなら、林倫子はこう答えていたはずだ。

「何度もいうように、私が今描いているテーマと君は合わないのよ。その自体共に認める美しさに裏打ちされた自信にあふれる君の表情や仕草よりも、いつもなにか憂いや緊張を帯びていなければならぬが故に表情が陰っている汐華初流乃君の方が向いているのよ」

と。噴上裕也なら汐華初流乃というやつはイケメンかもしれないが方向性が違うし、なんか暗いやつなんだろう、と考えて機嫌を直したかもしれない。双方の行き違いによる勘違いの連鎖だったと気づけただろうが、上手くいかなかったというわけだ。

そういうわけで、噴上裕也は、バイクを運転をするとき一番抱いてはいけない感情は、怒りだということも完全に失念していたのだった。

トットツというバイクの単調な爆音が乾いた轟音に切り替わる。噴上裕也のバイクが暴走族仕様である。ほとんどマフラーがついていないようなヤクザなバイクなのだ。80年台のバイクブームから現在まで続く暴走族は、かなりのカスタムパーツが流通しており、

それなりの出費さえ覚悟すればイジるパーツには困らないため、購入費の段取りさえつけば意外に維持しやすい面もある。

そういうのが朝から晩までバタバタバタバタバタという、子供がトタン屋根を棒きれで思い切り叩いて回るようなけたたましい音を立てて走り回っているような音を出す。

独特の不規則な、はりつめた皮の太鼓の上に豆をばらばらと撒き落としたような排気音が響いていた。バイクが宙を飛ぶようにグイグイと加速し、猛禽類に似た鋭い叫びを残して次々と車を追い抜く。

地鳴りのようなバイクの音、激しい排気音が鳴り響く。走りに集中していれば色んなことを忘れられた。いつもの道、いつものカーブ、いつもの交差点だった。いつもの違いはありえない所から強烈な光が入って来たことである。

「ッ!?!」

クラクションは地面すれすれに響いて空へ舞い上がる。低音を下げながら歪んで伸びるクラクションが噴上裕也に届いた。

バイクがかすれて錆びついたような、悲鳴のような音を上げる。四肢がもげてしまうような衝撃と鋭い音があたりの空気をつんぎく。地獄のような痛みの連続だった。大型トラック特有の、霧笛のような深い音がずっと響いていた。

大型トラックが路上をバックするとき発する短い断続的な警告音が、豚の鳴くようなホーンが響く。

道路の流れはまだ滞っていた。苛立ったのか、前方の車からクラクションが鳴った。遠吠えに反応する犬のように、別の車からもクラクションが発せられる。

逆走のトラックがつつ込んできたのだと気づいた時には、噴上裕也のバイクは空を飛んでいた。

倒れたバイクの車輪はゆっくりと回っていて、エンジン部から流れ出した黒いオイルが路面に伝わって下水の中に滴り落ちている。バイクのエンジン音が、拷問機械のうなりを部屋に響かせ、地面に膝が触れそうなほど、車体が傾く。

車が横から飛び出してくるのを噴上裕也は確認した。左手の小さ

な小道から、それこそ示し合わせたように、出現した。巨大猪のような顔に見えた。野蛮な凶体が事故つて転がっている噴上に向かってきた。悲鳴をあげる間もなかった。足を引いてから、車がスピンする。

気が動転したはブレーキを踏み込んだ。ハンドルを回す。車がそれに従い回転する。どうにか停めようと必死だった。衝突した様子はない。早く停車させないと、とそればかりが気になった。遠心力に引っ張られるように車は回転していた。壁や電柱がすぐ脇に見えたが、ぶつかりはしないと高をくくっていた。スピンが永久につづくような気がした。

傍から見ていた噴上は生きて心地すらしなかった。

車は向かいの街路樹に左半分を乗りあげる形で激突し、弾かれた。前脚を上げた暴れ馬みたいに、ほぼ垂直に大きく跳ねあがる。

これで終わりかと思いきや、予期しないことが起こった。おそらく脇見運転だ。派手に事故つた車に気を取られ、脚をやられた噴上裕也にその運転手は気づかなかつたのだ。

ブレーキを踏んだが間に合わなかった。叫んだとき、噴上裕也は空を飛んだ。不幸な運転士からは人影が躍るように消えた。彼は車体の下に鈍い衝撃を感じた。

運転士が車を下りたとき、外灯の光の当たった三メートルばかり向うの道路の上に人間の黒い姿が横たわっているのが見えた。桑木は膝頭から力がぬけて、そこまで行くのに水の中を歩くようだった。

彼は寝ている人の傍に寄って声をかけたが返事がなかった。暴走族の若者だ。抱きあげるつもりで頭に手をやると、その頭から真黒い水がこぼれた。外灯や、ほかの車のヘッドライトでそれが血だと知ったとき、桑木は自分を失い、何をしてもいいかわからなくなった。

「き、救急車、救急車つ、何番だ!?!ええと、くそつ、思い出せない!」

運転士が110やら119やらかけまくっていると、その街路樹から誰かが覗いていた。そして街灯にきらりと矢じりが光る。スタン드의矢がこの悲惨な交通事故の現場で欲しがる人間目掛けて飛んでいく。

しばらくすると救急車やらパトカーやらが道いっぱいになった。数日前から迷宮入りすることになる事件や事故でてんてこ舞いな警察は、逆走してきた車の運転士が極度の栄養失調になっていると知り、2度聞くハメになるのである。

「仗助先輩じゃあないですか」

ぶどうヶ丘高校から出てきたジョルノは、下駄箱からでてきたばかりの仗助と鉢合わせした。ニコニコというよりはニヤニヤ、ソワソワといった様子で立っていたから自分を待っていたのだろうとジョルノは直ぐに気づくのだ。見つけるなり今までにないほどの親密さで近づいてきたのだから。

「どうせあれからミキタカさん連れて、露伴先生のところに行っただしょう？ どうでした？」

「聞いてくれよ、ジョルノ…… ひでー目にあっただぜ……」

言葉の割にずっとニヤニヤしているから、たんなるフリなのだろうと察してジョルノは先を促すのだ。

「やっぱりバレたんです？」

「いんや……」

仗助はなんだよノリ悪いなど、ちよつと残念そうな顔をした。ジョルノはお構い無しで相槌をうつ。無駄な世間話に興じる気は微塵もないのだという態度を示せば観念したように仗助は肩を竦めた。

「バレはしなかったんだけどよ、訳のわかんねえ宇宙人談義に巻き込まれたんだ」

タコがどうかか時間跳躍はどうか、魔術を使う種族に滅ぼされたのに魔術を使うのはおかしいとか、科学が発達し過ぎると魔法にしか見えないとか。超能力はありなのかとか。それはもう一般人の仗助が完璧に置き去りにされるレベルのスピードで2人は話し続けたというのだ。余程気があつたのか握手すらする雰囲気だったのだが、あの発言から雰囲気は一転した。

それはジョルノも知っているアメリカで捕獲された宇宙人を運ぶ写真の話題だ。実はエイプリルフールのネタとして掲載された記事が別の国で勘違いされたのが発端だと岸辺露伴が口にした途端、ミキタカが静かに怒り始めたらしい。

瞬く間に2人の雰囲気は険悪になっていったという。

「なるほど、なるほど、よくわかったぞ、東方仗助。君がこいつを僕のところに入れてきた訳が。今まさに僕が抱いているこの感情の鬱憤を晴らすためにまんまと僕は乗せられたってわけだな。それは少しばかり気に食わないが、今回ばかりはお前の気持ちがよくわかる。この嘘つきやろうの鼻をあかしてやろうってわけだな、いいだろう。この岸辺露伴が直々にその正体を暴いてやろうじゃあないかッ!!」

なにが逆鱗に触れたのかはよくわからないが、そう宣言して岸辺露伴はヘブンス・ドアを発動した。

「そこまではよかったんだよ、そこまでは。使った途端に露伴先生が倒れやがってさア……………ひでー目にあったぜ……………賭けが有耶無耶になっちまうしよ……………」

「倒れただつて？ミキタカさんの頭の中を見ただけで？」

驚くジョルノに仗助はいうのだ。笑いをこらえているせいで、声は震えている。

「そうそう、なんか読めねえとかなんとか言い出したと思ったら、いきなり発狂したように叫び出してびっくりしたぜ」

盛大にため息をついた仗助は首をすくめるのだ。

「ミキタカの設定はたしかに充実してるけどよオ……………それだけ練り込まれてるからって想像力だけで怖がってちゃ世話ないよなア……………」

読むだけで思い込んでしまい、時には死に至らしめることがある本。どこかで聞いたことがある話である。

「ええと……………つまり、チンチロリンを挑む前に話が脱線しちゃったってことですか？」

「そーいうことだ。スタンド使いだってバレてはねーぜ、使わないよと言ったしさア……………」

「露伴先生は大丈夫だったんです?」

「おう、クレイジーダイヤモンドを使うまでもなく、しばらくしたら目を覚ましたぜ。すげえインスピレーションが湧いたとか何とかで追い出されちゃったけどよ」

「そうですか…… 無事ならいいんですけど。でも、それまじいんじゃないですか? 頭の中を読まれたなら、意味が無いんじゃない?」

「俺も咄嗟に気づいて止めさせようとしたらああなっちゃってよ、めんどくせえ。ミキタカの頭ん中はこの世界には存在しない言葉で埋め尽くされてたらしいぜ」

「エスペラント語でも使ってたのかな」

「さあ? でもまあ、紹介料はきっちり預かってきてやったからさ! ほら」

どういう意味での紹介料なのかはわからないが仗助はちゃんともらってきたらしい。仗助から封筒を受け取ったジオルノはホツキキスなどがそのままの確認したものの、クレイジーダイヤモンドの使い手は微塵も信用ならないという顔をして封をあけた。

「仗助先輩」

「ん?」

「ピンハネしましたね、あんた」

「はあく? 何言ってるんだよ、ジオルノ。さすがにんなことしねえってば」

「そんなこといったって誤魔化されませんよ、新札の連番が飛んでるじゃあないか。いくらクレイジーダイヤモンドで直したって、お札の数は直せないだろ」

「ゲゲツ…… マジかよ、銀行から下ろしてきたばっかだったのか! テキトーに抜いたのモロバレじゃねーか……!」

「仗助先輩?」

「ま、まあまあ落ち着けて、ジオルノ。チンチロリンまだ出来るんだからよオ、ちゃあーんと返してやるから待ってくれ!」

「信じられない! 昨日の今日なのにもう使っちゃったんですか!」

「仕方ねーだろ! お袋に秘密の口座バレて通帳取り上げられちゃう

し、テストの成績悪くなったのはサボってるからだって先生ネットワークからバレて小遣いカットされちまうし、マジでカツカツなんだってば!」

「だからって苦学生からピンハネするとか何処の鬼悪魔畜生ですか、あんた」

「だからごめんって言ってるだろ!頼むから露伴先生にチクらないでくれよ!な?な?」

ジョルノは呆れた様子で歩き出してしまふ。仗助は慌てて追いかけたのだった。

ハイウェイスター2

ジョルノが仗助と乗車したバスが停留所に到着した。

「それじゃあ、約束のお金、利子つけてキチンと返してくださいよ。期限までに話が行かなかつたら露伴先生と東方巡査にバラしますからね」

「わーったわーった、必ず返すよ！だから心配すんなって、な？な？だからこの通り！」

「これ以上なにを譲歩しろっていうんです？まさか利子つけるなって凶々しいこと言うんじゃあないだろうな？」

「まあまあ、そこんとこをなんとかさ！頼むよ、ジョルノ〜！」

「約束破ってピンハネするあんたが悪いんですよ、仗助先輩」

「おっしゃる通りです、マジでごめん！」

「土下座はいらないますよ。パフォーマンスにしかならないですからね」

「手厳しーなあ……………」

「じゃあ、僕はここで降りるので失礼しますね」

「おう、またな」

「ええ、仗助先輩もね」

ジョルノは手を振る仗助ごと走り去っていくバスを見つめていた。角を曲がり見えなくなったところで手を下ろして歩き出す。

「……………」

何かに見られているような気がして振り返るがなにもいない。

「……………」

上を見るがカラスがいる訳でもない。

「……………」 考えすぎかな」

ジョルノは通学路を歩き始めた。ただいまジョルノは一人暮らし状態である。アヌビス神に憑依されて四肢の複雑骨折という重症を負った保護者は病院に入院中だ。

奇病に関して隠匿の疑惑があるTG大学病院ではなく別の病院に入院できたのは空条さんのおかげだから感謝である。面会謝絶状態

であり、妻だったことがある女性が介抱に足繁く通っていたりするものだから面会にはあまり行かないでいた。たまに電話するくらいである。

「……………」

ちらちらとジョルノは頻繁に後ろを気にしていた。誰かに見られているような気配が消えないのだ。肩を竦めては不思議そうな顔をして歩き出す。走り出す。また歩き出す。ちがう道に入ってみても、一定の距離の間隔を保ったままおっついてきている。近づくでもなく遠ざかるでもなく、なんとも微妙な距離感だ。落ち着かなくてソワソワしてしまう。

その足跡はさながらなめくじが通路に残す粘液のようだった。ナメクジの歩いた痕のように、うっすらと赤い線が延びている。無数のグミ状の足跡のような形がジョルノを追跡してきたのだ。

ジョルノは目を丸くしてあっけにと取られた。

「なっ、なんだあれは!?!」

「…………お前を追い詰めるには、これで充分だよなあ〜ッ!ガチンコ対決だぜ、コラア〜ッ!」

「ゴールド・エクスペリエンスッ!生まれろ、新しい生命ッ!!」

ジョルノは咄嗟に足場を生成して上に逃げる。

「なんだと〜ッ!?!お前も能力が使えるのかア!」

足跡から人型のスタンドが生まれる。そいつはいきなり蔦を驚掴みした。

「なんだって!?!」

急激に蔦が枯れ始めたてはないか。ジョルノはギョツとしてぐらつき始めた足場から離れる。あつという間にしおしおになり、元の石ころに戻ってしまった。ジョルノは距離を取りながら走り始める。

「逃がすかよ〜ッ!!」

また人型のスタンドが足跡に変形した。そして、圧倒されるようなスピードでぐんぐん追ってくる。ジョルノは死に物狂いで逃げるが、スタンドは小刻みに路地を折れながら走ってくる?そのスピードは

まったく緩まない。行き交う人は不思議そうにジヨルノを見ていた。ぐんぐんとスタンドの足跡が近づいてきた。ジヨルノは犬がよくやる走り方のように、一生懸命に駆け出しては後ろを見るが、スタンドは追い払っても追い払ってもついてくる。

餓え疲れた旅人の後をつける狼のように、執念深く追ってくる。

やがてジヨルノもばててきてしまう。スタンドは一向に衰える様子はない。

「……まいたのか？」

いつの間にかいなくなっていた足跡。ほつと息を吐いた瞬間、反対側の壁に足跡が張り付いていたものだからジヨルノは呼吸を忘れた。

逃げる間など与えないとばかりに正体不明のスタンドは一瞬でジヨルノを捕らえた。ジヨルノに身を守る術は残されていなかった。「搾り取ってやるよオ〜！お前の養分を一滴残らずよオ〜！」

ジヨルノは顔がひきつるのがわかった。体内の栄養が根こそぎ吸い取られていく。立っていられない。ジヨルノは崩れ落ちた。意識が遠のいていく。下手をしなくたって死に至るような攻撃だった。

遠隔自動操縦型のスタンドのようだった。なんらかの方法で標的をどこまでも追跡し、体内に侵入して養分を吸い取る。追跡対象にある程度引き離されると、大体の位置を臭いから予測してテレポートすることもできる。

自動操縦型のスタンドとしては、あの爆弾戦車と違ってかなり融通が効くタイプであり、近距離攻撃においても相手の養分を吸う事での効果の効果を発揮する強力な万能型スタンドのようだ。

ただし、対象のエネルギーを吸収するのが目的であるためか、スタンドそのもののパワーは低いようで、ジヨルノを轢き殺す気配はない。

ジヨルノがゴールド・エクスペリエンスで攻撃した際、分裂した足跡一体のみにしか効果が及ばなかったため、足跡型の形態が本来の姿であり、群体型のスタンドであるという可能性もある。だが、群体型スタンドだとしても、有効な攻撃があることをすでにジヨルノは知っているのだ。

突然攻撃が止んだ。ジオルノは眼を開けた。スタンドはジオルノを見つめている。

「な、何をしやがったア〜!!」

正体不明のスタンドは悶絶する。ありとあらゆる匂いがある。猟犬をも超える尋常ならざる嗅覚がその猛毒を感知したのだ。

息も絶え絶えになる中、ジオルノは自我があり、意思疎通が出来るとわかったスタンドに声をかけるのだ。

「かかったな……今すぐに、僕の養分を吸うのを止めろ……でない……死ぬぞ」

それは最初の警告にして、最後の通告だった。

「よ、養分……? バカなツ!? お前…… お前…… なにを……」

「繰り返し……養分を……養分を吸うのを……止めるんだ……」

「な、なにしやがったんだア——!!」

掴みかかってくるスタンドだが、パワーはないのか宙ぶらりんになることはなかった。ジオルノに触れていると猛毒を吸収してしまうと学んだからなのかもしれない。

「簡単なことさ…… 僕自身に…… 毒を打ち込んだだけだ……」

さあ…… やめろ…… 僕もろとも…… 死ぬぞ……」

スタンドはギョツとした様子でジオルノを見る。ジオルノの爪には毒性の植物が生えている。自分の身を犠牲にしてまで一撃喰らわせようとしてくることに明らかに衝撃を受けているようだった。

「ぐええええっ!!」

正体不明のスタンドは悶絶する。

そしてぐったりとしたままその場に崩れ落ちたジオルノを置き去りにして走り去っていく。朦朧とした意識の中でジオルノは公衆電話がなにやりごちやごちやうるさい音がしているきがした。

「勘違いするんじゃないやあねーぜ! おれは…… おれはっ、おれがかっこ悪いと思うことがしたくねーだけなんだからなツ!! ちよびつとばかしイラついて懲らしめたかっただけでエ…… その、エーツト…… こ、殺すつもりはねーんだからなツツツ!!」

よくわからない啖呵をきりながら、スタンドは去っていった。しば

らくして救急車のサイレンが響いてきたとき、ジヨルノは助かったのだと悟ることになる。公衆電話の緊急ボタンがほんのちよつぴり歪んでいたとあとからジヨルノは知るのだった。

海岸から道路をひとつ隔てた広い敷地に、その病院は建っていた。もともとは財閥関係者の別荘だったものが、生命保険会社の厚生施設として買い取られ、それがまた近年になって病院の分院として建て替えられた。だから古い趣のある木造の建物と、新しい三階建ての鉄筋の建物が混在して、見るものにくぶんちぐはぐな印象を与える。窓の外には防風の役目を果たす松林が広がっている。密に茂った松林はその療養所を、活気のある現実の世界と隔てる大きな仕切り壁のようにも見えた。

今週に入って入院する人間が多すぎて、大型病院から満室になっていった結果、ジヨルノはこの病院にところてん方式で担ぎ込まれたというわけだ。

病院に到着した救急車のハッチが勢いよく開き、弾けるように救急車の外に転がり出る救急隊員。車内に残った救急隊員との連携により、手際よく担架が降ろされたジヨルノはそのまま赤いランプが眩しい部屋に担ぎ込まれた。

翌日には、車輪のついたベッドでジヨルノはお見舞いの桃を食べていた。ベッドの下にジャツキがついていて、ちょうど腰のあたりで曲がり、上半身が寝たまま30度の角度まで起こせるのだ。

綺麗な絵が飾られている。じっと見つめっていると、いかにもこの病室へ優しい使者たちによる迎えが来そうに思えるほどだった。

病室に入ったのはジヨルノだけだった。白い壁の部屋がいつそう真っ白に見えた。白紙に戻す、の「白紙」にふさわしい白さだった。

ジヨルノは緊急搬送されてから処置室の暗い部屋から出て本館二階の普通病室に移された。個室だったが窓から溢れている外光が眼に痛かった。

その窓枠の下には届けられた花がいくつもならんでいた。知り合

いの人たちの見舞だが、赤い、華やかな色はこれまでの灰色の壁だけの部屋とは別世界だった。ジヨルノは地獄から帰還したような気持ちになった。

「やっぱり急ぐしらえの策なんて弄するもんじゃあないな……」

ジヨルノは軽く落ち込んでいた。いつもならありえないミスだったのだ。なにせ正体不明のスタンドによる極度の栄養失調より、カウスターとして仕掛けた自分の自爆が原因の入院なのだから。栄養失調により急激に免疫が落ちたことに気づけなかったジヨルノのポカミスだ。そのせいで重度化した植物の毒性の方がダメージが大きかった。

「…… ちょっと浮かれていたんだな…… 僕としたことが……」

真つ向勝負でスタンドバトルを仕掛ければよかったのだ。たとえば公衆電話を植物に変えれば枯れた瞬間に電気ショックなり与えられたかもしれないのだ。生物から栄養を吸収していたのは確認したが、無機物からそれが可能なのか検証すれば良かった。あるいはカウスターダメージを狙って生物を当て続ければ、群体スタンドかどうかわかったかもしれない。

「ダメだ…… 無駄なことばかり考えてしまっている…… 落ち着け、落ち着くんだけ」

とりとめのないことばかり考えてしまうのは、恐ろしい時は過ぎ去った証でもある。面会が可能になった瞬間からいろいろな人々がジヨルノの寝台の周囲に出入りしはじめた。笑い声もした。茶器が運び込まれる。

最も恐怖や不安や必要に満ちていた時は自分から遠のき、鳴りを鎮めていた世間が、再びさり気なく姿を現したのを見る。一種の清新さと皮肉とを、日常生活の復帰から感じた命拾い、もしくは九死に一生を得るとはこういうことをいうのだろう。

病院特有の強い消毒液のにおいは実に9カ月ぶりである。重ちーの例をかながみて、病院が行政側に報告しなくちゃいけない珍しい植

物を避けたのは功を奏した。

そのかわりに道端の草をカレーに入れたせいで食中毒になったというかなり間抜けな診断をされてしまったが仕方ない。誤診なのだ。がスピードワゴン財団のカバーストーリーに頼るまでもないからお間抜けな笑い話は受け入れるしかないだろう。

病院内は外来受付が終わり、靴音が響くぐらい静かだったコの字になったこの病院の中庭には、木々の間を縫うように遊歩道が設けられており、パジャマ姿の入院患者やその家族が、何日ぶりかで降り注ぐ柔らかな陽射しを楽しんでいる。

消毒液と見舞いの花束と小便と布団の匂いがひとつになって病院をすつぽり覆って、看護婦がコツコツと乾いた靴音を立ててその中を歩きまわっていた。

「……僕で3人目か」

看護師がいつていたから間違いない。吉良吉影、あのスタンドの使い手、そしてジヨルノ。同じ症例で病院に運ばれたのはこの県でたったの3人。これから調査は容易だろう。

「これで暫く動けないなりに頑張ったはずだ」

病院の広い中庭では、浴衣を着た十数人の患者が看護婦の指導で体操をしているのが見える。車椅子に座った子供達が黄色いボールを投げ合って中庭で遊んでいる。三人、みんな首がとても細い。

捕球しそこなうと一人の看護婦がボールを拾う。一人よく見ると手首から先がツルンとして何も無い子供がいて、彼は看護婦がそつと浮かせたボールを腕で打ってゲームに参加している。打ったボールは必ずよそへ逸れるが、子供は歯を見せて笑っていた。

今日一日安静にしている、というお達しだった。胃を洗浄して抗生物質を飲み、点滴をうったらそのうち治る、というかそれ以外にできないと言われた。著しく免疫が下がっているために下手に薬を処方できないらしい。

いつもならさっさとゴールド・エクスペリエンスで抗体を作って治すのだが、そういわれてしまうと重症化という現実を知ってしまった精神状態ではやめた方がいいだろう。

スタンドは思い込みの力だ。ジョルノは理論を組み立てながらも若いゆえの勢いでスタンド能力を成立させているところがあつた。今の状況でゴールド・エクスペリエンスを使えばどうなるかわかったもんじやない。ただでさえ意図しない暴走という前科があるのだから。

「……TG 大学病院が一番いいんだけどな、カルテがあるから……今となっては恐ろしくて行けやしないが」

ジョルノはため息だ。考え事をしながら食べていたら、とうとう桃がなくなってしまった。名残惜しそうに指を濡れティッシュで拭き取り、皮ごとゴミ箱に捨てる。あたりが桃の芳香剤をばらまいたような華やかな香りが立ち込めていた。

「……さてどうするかな、いきなり暇になってしまった」

こういう時携帯電話がないとやるのが一気になくなってしまふから困りものだ。誰かしら見舞いに来てくれたら色々と捗るのだがままならないものである。なにせ今日は平日だ。

学生達はみんな学校に行っているし、空条さんたちだって奇病に侵されたカラスによる二次被害を被った人達に流布するカバーストリーで大わらわに違いない。ドナテロあたりが来てくれたらいいんだが、ミステリの根幹を揺るがすような規格外のスタンド使いは可哀想に朝からこき使われているだろう。

「……寝るしかないんだな」

暇で暇でたまらないと案外睡魔は直ぐにやってくる。ジョルノは久しぶりに惰眠をむさぼることにしたようだった。

ハイウエイスター3

仗助が双葉千帆を見つけたのはたまたまだった。ジヨルノのお見舞いかねて病院にやってきたはいいが、手ぶらはさすがにまずいだろうと直前で気づいて売店に駆け込んだとき見えたのだ。

メモリー・オブ・ジェットという凶悪なスタンド使いである双葉照彦の一人娘にして、吉良吉影に人質にとられている仗助の同級生。由花子の小学生からの友達で近所に住んでいる一般人。

そしてジヨルノの友達で同じ施設出身の一年先輩と両片思い中、とここまで思い出してから隣にいる男子生徒がそいつだと仗助は気がついた。ジヨルノがいていた表情筋が完全に死んでいる無表情な青年だったからだ。

(へええ〜なんだよなんだよ2人してジヨルノのお見舞いかア？)

キョロキョロしているものだから、迷子になっているのだろうと考えた仗助は親切心から声をかけようとかがえた。仗助も始めてくる場所だったが承太郎から話は聞いているのでこの病室にいるか知っているのだ。

(ジヨルノの言った通りじゃねーか、上手くいったんだな)

億泰が隣にいたらまたジェラシー感じて勝手に号泣してしまいそうな流れだが、億泰と康一はすでにジヨルノの所にお見舞いに行っているはずだ。これ幸いと声をかけると双葉千帆は驚いたように顔を上げた。身長差的に見上げるほどだから驚いたようだ。

「ええと、あなたは…… 由花子さんとの前お茶してた…… ええと、広瀬君の友達の……」

「東方仗助、だったな。ジヨルノから話は聞いている。人間の言葉がわかるからって、人の話にわりこむのはマナー違反なんじゃあないのか」

仗助は思わず口笛を吹きたくなった。ジヨルノが施設での思い出を語る時によく出てくるこの先輩は、言っていた通り極めてクールな性格で、感情表現も滅多に行わないのは間違いなさそうだ。

見下し気味に挑発する面がみられるが、この状況では仗助を警戒するのは恋人をほかの男に近づけたくない彼氏として正常な働きである。由花子がいたら次第点をつけていたに違いない。だから気にしなかった。

「あつ、思い出した！ 汐華君の友達のもの！」

「刈りあげた髪に、太い首……まるで、トータルポールみたいだな」
ビキツときたが仗助はこらえた。我慢した。イラアツとしてその仏頂面に1発ぶちかましたくなつたが仗助はこらえた。仗助のハーフゆえのタツパのよさとリーゼント、改造制服とくれば筋金入りの不良だと思われても無理はないと仗助は自覚しているのた。これはたんなる彼女を守るためのムーブであり他意はない。

「琢馬先輩」

咎めるような声に琢馬と呼ばれた先輩は無表情のまま双葉を見返した。

（やつぱ思つた通りだ、ジョルノのダチのセンパイじゃねーか。そつかそつかア〜）

ちよつと気分が落ち着いてきた仗助はまあまあと手を開き、なにもしない気は無いのだとアピールしながら話しかけた。

「初対面なのにいきなり声掛けてスイマセン！ 迷つてるみてーだから声をかけたんすよ。センパイたちジョルノのお見舞いに来てるんすよね？」

2人は顔を見合わせた。

（いいなあ〜いちいち見つめあつちやつて〜キラツキラしてんなア〜青春だなア〜）

仗助はにやにやしながら待った。

「……そんなところだ」

「やつぱり！ そうだと思つたんですよ。よかつたら案内しますよ、俺！ ジョルノがどこに入院してるか知ってるんで！」

仗助の発言を聞いてちよつかいをかけるような不屈き者ではないと思つてくれたのか、蓮見琢馬は頼むと言つてきた。よかつたと仗助は一安心である。

「了解つす」

あとは赤い矢印をひたすら追いかけていくだけである。

「汐華君入院しているの？」

双葉は驚いたのか、目を瞬かせる。心配そうな顔になる。

「道端の草をカレーに入れたせいで食中毒になったらしい」

「えっ、どうして？」

「スイセンとニラを間違えたらしい」

「……普通、カレーにニラって……？」

「施設では入れなかったな」

「葉っぱの形も匂いも味も全然ちがうと思うんだけどなあ……汐華君……」

双葉のなんとも言えない表情と蓮見の呆れを含んだ言葉に、仗助は笑いを堪えるので必死だった。実際は最初の嘔吐で全て吐き出してしまいう食中毒事故と違って、直接致死量の毒を体内にぶち込むわけだから訳が違うのだ。

「保護者が入院した途端にこれだ、いきなり一人暮らしはハードルが高かったのかもしれない」

「……人って見かけによらないんだ……汐華君、なんでもできそうな雰囲気あるのに」

人って見かけによらない、のあたりで双葉の視線は一瞬仗助に向いた。腹筋が割れそうなくらい笑いたくてたまらない仗助はそれどころではなくて気づかなかった。

「意外だな……調理学習の時は誰よりもきちんとしていたのに」

「まあ、猿も木から落ちるっていいいますからね！」

仗助は蓮見から何を考えているんだかよくわからない視線を向けたが、仗助は案内役のために前を向いたためかち合わなかった。

エレベーターと階段を使って仗助は2人をジョルノの入院部屋に案内する。ただの食中毒のわりに個室のジョルノはすでに回復しているようで、康一達と話をしていた。

「よオ、遅れてわりい。ジョルノ、お客さんだぜ」

ジョルノは目を丸くした。

「琢馬！まさかあんたまで来るとは思わなかった」

「食中毒って聞いたけど、大丈夫なの？汐華君」

「…… ああ、うん、もう大丈夫です。二度と馬鹿な真似はしない」
「ジヨルノはうんざりという顔をした。」

「まさかあんたまで野次馬に来たんですか？」

蓮見は首を振った。

「千帆」

「はい？」

「ジヨルノに見舞いの品を持って来るのを忘れたから、売店に行つてきてくれ」

「あつ、そういえば！ごめんね、汐華君！」

双葉は蓮見から無理やりお札を握らされると、あわてて元来た道を引き返していった。ドアを閉めた蓮見はジヨルノを見た。

「ジヨルノ、いつまで待っていていけばいいんだ？殺人鬼が見つかるまで千帆の安全が保証されないじゃあないか」

少し苛立ちを伴った声色に、仗助たちは驚いて蓮見を見た。ジヨルノは申し訳なさそうな顔をする。

「思っていた以上に事態が込み入ってきてまして……」

「お、おいおい、ジヨルノ、話していいのかよ？」

「心配いりません、みなさん。琢馬は僕がスタンド使いだって知ってるんだ。ゴールド・エクスペリエンスをコントロールできないせいで毎日起こった怪奇現象をまじかで見えてきたのだから」

その言葉に誰もがジヨルノのスタンドが視認可能だということを感じ出す。仗助だって祖父の怪我を治してあげたことがあるから覚えがある話だ。

「それに双葉千帆は琢馬と暮らしてるんだ。注意喚起するくらい構わないでしょう？」

同棲までしてるのか、と仗助達は驚いたが、吉良吉影の潜在的な人質となっている双葉が彼氏という強力な拠り所があるとするなら喜ばしいことのように思えた。なるほどだからあそこまで敵対心を剥き出しにしていたのかと仗助は考えた。

「帆波家と一磯家には近づかないようにしてください。吉良吉影を匿っている可能性がある。あと変な泣き方をする若いカラスにも」

「随分と多いな」

「仕方ないじゃあないか」

「わかった。じゃあ電気製品のトラブルは注意しなきゃいけないな。一磯電器店はアフターサービスがいいから評判がいいんだが」

「そうなんです?」

「ああ。あそこの老夫婦が引退後、息子が継いだんだがアフターサービスが充実してるんだ。そのかわりしょっちゅう旅行に行くから予約がいる」

「作業員がいませんか? 電工の」

「電工? ああ、養子に入った甥かなんかだな。鉄塔管理する会社で働いてるからほとんど家に帰らない。たまに休みがあると趣味のために山に行く」

「山?」

「山だ。施設からみえる鉄塔だらけの山があるだろう? ああの山だ。あの鉄塔、トランシーバーのために自分で立てたらしいぜ」

「その話、本当ですか?」

「ああ。こないだ、施設のクーラーが壊れて一磯電器に頼んだ時、甥が継いだらあの山に電話した方がはやく予約が出来るって笑い話を院長がしていたのを聞いた」

「ジョルノ達は目を丸くしたのだった。そして、しばらく話し込んだ後、双葉が帰ってくるのといれ違いで彼らは帰っていった。」

「…… 双葉の調子は大丈夫なんです?」

「ジョルノの問いかけに双葉はぎくりとして蓮見を見た。蓮見はバレていたのかと悪びれもせずという。」

「塚馬が僕の見舞いなんて来るわけがないと思っただ。それだけ情があるなら9か月前来てるはずだからな。仗助先輩が勘違いしたみたいだが」

「ああ、その通りだな」

「…… 体温を測ってまた来てくれと言われたの」

「そうですか。なんと行っていいのかわからないけれど、体に気をつけて」

双葉はうなずいた。仗助は縁遠いから気づかなかつたのだろうが、この病院の売店の先には小児科、内科、そして産婦人科があるのだ。

ジョルノは仗助たちが持ってきてくれた新聞を見ていたのだが、気になる記事をみつけた。直ぐにテレビ欄を確認してテレビをつける。主婦向けのワイドショーがニュースを読上げている。たまらずジョルノは体の違和感を堪えて病室を出ると、ニュースステーション横の公衆電話のコーナーに行く。そしてぶどうヶ丘高校に電話をかけた。林先生に繋いでもらうためだ。

しばらくして、林先生に取り次いでもらえた。

「ええ、そうよ。その新聞に出てる事故に巻き込まれた少年Aは噴上裕也君ね」

普通ならばなんの接点もないはずの噴上裕也について、なぜ知りたのか疑問に抱くだろう。なのに林倫子は気にする素振りすら見せない。ブレない女性である。

「ええ、ニュースで詳しくやっていたわね。大型トラックが逆走してきて、それにまきこまれた玉突き事故、よそ見による事故が重なって、結構な事故だったみたいよ」

一時は意識不明の重体だったようなのだが、今は意識を取り戻して命に別状はなくなったという。全身打撲、粉碎骨折、全治に何ヶ月かかるかわかったものではない大怪我だそうである。

「ニュースだと今の状況までは言ってますでしたね。どうして知っているんです?」

「どうしてもなにも噴上裕也君から電話があつたのよ。お見舞いに来てくれてね」

「いったんです?」

「どうして?」

「どうしてって」

「彼には3人も世話を焼いてくれる取り巻きの女の子がいるじゃないの。3人平等に愛情を振りまけるならば問題ないわ」

「ジヨルノは沈黙した。」

「ところでその電話はいつありました?」

「そうねえ…… 3時間ほど前ね」

「3時間……」

「よほど暇なのか知らないけれど、お腹が痛いと言っていたわ」

「なんですって?」

「君と同じ食中毒みたいなのよ。何故か手料理が食べたいと言っていたわね、私は彼に手料理を食べさせたことなんてないのだけれど。1度も」

「なんですって?」

「スイセンによる食中毒なんですって。なに、美しさの秘訣は毒の摂取なの君たち」

「知りませんよ、そんなこと」

「そうよね…… 病院も違うみたいだから。やっぱり噴上裕也君は病院の食中毒かしら。スイセンをニラと間違えて出荷するなんて事故、去年もどこかの農家がやらかしていたわね」

「…… あの、林先生」

「なにかしら」

「噴上裕也さんがどこに入院しているか知りませんか?」

「ええとたしか、ぶどうヶ丘病院だったかしら。5階の525号室」

「ぶどうヶ丘病院…… わかりました。ありがとうございます」

「ところで汐華君」

「はい」

「雑草じゃあなくて、スーパーでちゃんとした野菜を買うべきよ。少なくとも自己責任にはならないから」

「…… わかりました、気をつけます」

「耳タコが出来るほど聞かされた言葉に辟易しながら、ジヨルノは受話器を置いたのだった。」

すぐに10円を入れて康一の家には電話をかける。母親が出てくれたがまだ返っていないようだ。一人暮らして大変だろうけれどお大事にねと苦笑いされた。次は億泰。何回鳴らしても出ないので諦めた。今度は仗助。何度掛け直しても留守電になってしまう。帰っていないようだ。

社王グランドホテルにかけたが、承太郎はドナテロを連れて出かけたきりまだ帰っていないそうである。双葉と居るはずの琢馬は論外として、ジヨルノは祈るような思いで露伴に電話をかけたのだが何度コールしても出ない。固定電話も携帯電話もダメだ。

「ああくソツッ!どうしたら……!」

ジヨルノはふとカバンの中に入っているネックレスに目をやった。

「そうだ、これを使えば!」

ゴールド・エクスペリエンスを呼び出したジヨルノは、グッチのダイヤモンド型ネックレスをツバメに変えた。

ジヨルノはツバメに公衆電話の番号を託してはひたすら談話室で待ちわびていた。あまりにも掛からないので少しでも苛立ちを抑えようと、近くの自販機でお茶を買った。

すると、いきなりコール音が響き渡った。コール音が深い底無し虚無の中におもりを垂らすようにいつまでもいつまでも鳴り響いている。

ジヨルノの心はどうしようもなく震え混乱した。強い横風を受けたときのよう、ジヨルノの体は揺らぎ、息をすることさえ困難になった。慌てすぎて落としそうになり、逆さまにかけそうになりしながら、なんとか受話器をとることに成功する。

受話器を耳に当て、コール音のくぐもった音を数える。肩と耳で受話器を挟み、会話を待った。

「もしもし、いきなりどうしたんだい、汐華君。僕は今作業員の男を探すためにスケッチと隠し撮りでいそがしいんだが」

少し遠くにあるその静かな声は、ケーブルを抜けて駆けてくる。ジヨルノは目を閉じて、なるべく冷静を装いながら声をだす。

機械の中で響きを変えた声だ。酸欠の金魚のように口を動かして、通話のふりをする。ものすごく遠くの方で露伴が尋常じゃなく慌てているジヨルノの気配を感じ取ったのか喋っている声が聞こえた。

気が動転しすぎて長い廊下の向こうの端から聞こえてくるような声だった。小さくて乾いていて、妙な響き方をした。内容までは聞き取れなかったのか、露伴が繰り返して聞いてくる。途切れ途切れに話し続けていた。

携帯電話を握る手に力が入る気配まで伝わってくる。手で受話器を囲って周囲の雑音が入らないようにしたのがわかった。

「康一君達が帰ったのは何時だ、汐華君ッ！」

記入するボールペンの音が聞こえた。筆圧が強い。

電話はいやに遠く、おまけに混線していたので、必要以上に大きな声でしゃべらねばならず、そのためお互いのことばから微妙なニュアンスが失われていた。

それでも、ジヨルノが康一達の危険を知らせて、スタンドの本体である噴上裕也の入院場所とスタンドの脅威について伝えるのは充分だった。

電話をかけすぎたせいで小銭がもうない。時間切れを知らせるアラームが鳴る。

「あなただけが頼りだ、露伴先生！」

途中で通話が切れてしまう。舌打ちをしたジヨルノは受話器を置いた。長いこと公衆電話を占領していたせいで談話室は人だかりが出来ていた。ジヨルノの殺気立っている様子に驚いたのか距離が明らかに置かれているのがわかる。ため息をついたジヨルノは病室に戻ることにした。

「…… またやらかした…… 僕としたことが……」

あのスタンドはジヨルノを何らかの方法で居場所を特定することが可能なようで、テレポートすることが出来ていたはずだ。遠隔操作ながら本体が何らかの方法で情報を共有できるのだ。普通に考えた

らジョルノが入院した以上、見舞い客の中に仲間がいるとわかればレポートから襲撃することなど明らかなことではないかと。

単純なことに気づかなかつた。願わくば仗助たちの誰かがレポートの能力を鑑みて上手く対処してくれることをいのるばかりである。

「ダメだな…… まだ本調子じゃあないみたいだ…… 休まなければ……」

そして数時間後。

大惨事だったと仗助に聞いたとき、ジョルノは申し訳なくてたまらなかつた。ジョルノの見立てどおり、ジョルノのいる病院までレポートしてきたスタンドは、帰ろうとした仗助たちに襲い掛かつてきたという。

病院がすぐ近くということもあって、自転車の康一が真っ先に捕まり栄養失調になった。仗助と億泰はそれぞれわかれてバイクで逃げた。1度はまいたかと思われたが、ガソリン切れを狙っていたように、億泰がやられた。仗助が逃げているさなかにジョルノから連絡を受けた露伴が康一を発見して本体探しを始めた。

ぶどうヶ丘総合病院の5階の525号室。いきなり入ってきた有名な人に驚いたものの、露伴のファンだった噴上裕也はサインを強請つた。露伴はくれてやる代わりに、今回の事故の怪我の回復をハイウェイスターと名づけられていたスタンドで行うことを禁止したのである。

ヘブンズ・ドアによりあらかたの人生を流し読みされてつまらない人生だと吐き捨てられた噴上裕也は露伴によるねちっこい嫌がらせを受けることになったのだった。

仗助はハイウェイスターがいなくなったことを確認して、億泰が行くはずだったルートを逆走してきて倒れている億泰を発見。近くの店で電話を借りて救急車を呼んだ。

残念ながら栄養失調は病気だからクレイジーダイヤモンドでは治

せなかったのだ。付き添いで救急車で運び込まれた先がジヨルノの入院している所であり、康一と同じ部屋で点滴を受ける羽目になったのは笑い話といえる。

露伴から帰ってきたツバメにくくりつけられた手紙により事態の収束を把握したジヨルノである。

「噴上裕也か……逆恨みやねーか、俺たち関係ないし……」

「僕も関係ないんですけどね……」

どこか疲れた様子でジヨルノはため息をついたのだった。退院することが出来たら、みんなで噴上裕也のところへ是非ともお礼参りにいかなくてはならないだろう。

エニグマー

その色黒な少年は、T.G.大学病院に来ていた。高そうなブランドものの帽子を目深にかぶり、顔の3分の2が隠れてしまいそうな大きさのサングラスをかけているだけで特に手荷物はない。大学病院の混雑する総合案内を前にしても、手ぶらである。

普通なら、誰かのお見舞いか自分の診察か、なにかと物入りになるのだ。手ぶらはおかしい。特に連れがいるようにも見えないし、待ち合わせをしているとは思えない。事務員は明らかに困惑していたし、不思議がっていた。

「なにかお困りでしょうか？」

「この病院には初めてくるんだ」

「はい、お見舞いでしょうか？診察？」

「診察…… 観察だからな…… 違うな…… 見舞いかな」

「はあ…… お見舞いですね？」

「ああ、そうだな」

「どなたかお伺いしてもよろしいですか？」

「双葉照彦」

「双葉照彦さん…… あつ、申し訳ありません。双葉照彦さんは、娘の双葉千帆さん以外には誰にもお会いにならないそうです。傷が痛むとかでまだ本調子じゃあないそうなんですよ」

「双葉照彦は、だろ？」

「はい、ですから…… 本人のご希望で……」

「一礁一から話が行ってないか？一礁一からこの医院長を通じて、ボクが来るって聞いてないのか？」

一礁一と医院長、その言葉に事務員の態度は露骨に豹変する。

「も、申し訳ございません！少々お待ちくださいッ！」

ぺこぺこ頭を下げた事務員は奥の部屋に引っ込んでいくと思っただけ顔だけ出して聞いてきた。

「あのおう…… 大変失礼をいたしました……。お名前をお伺いしてもよろしいですか？」

「ああ、いいぜ。宮本輝之輔だ。本当は一番最初に聞くべきだったな」
「宮本様ですね！しよ、少々お待ちください、本当に申し訳ございませんん！」

宮本輝之輔と名乗った少年は、ジャケットの裏ポケットから、折りたたまれた紙切れを一枚取り出す。それを開くと、どこからともなくミネラルウォーターが出現した。まるで手品である。もう一人の事務員が、まあ、という顔をした。手品師とでも思ったのか、驚いた顔をした。あまりにも近距離である。キョロキョロとあたりを見渡すのはドツキリを疑っているのか、顔が硬直していた。

宮本にはタネも仕掛けもある。ジャケットからズボンのポケットから、帽子の中から、あらゆる体の部分に「紙切れ」をたくさん隠し持っているのだ。

「！」

「ところで、あんた、何を想像した？お茶の間がお間抜けな顔をしているあんたを笑いものにするだけでも思っただけじゃないか？やたら緊張しいになつて、あたりをキョロキョロするだろう？しかも、口を半開きで。何度も唾を飲み込むのが癖だな……」

「そ、それが……それがどうかなさいましたか……？」

「いや、なにも。ボクに言えるのは種も仕掛けもないし、隠し撮りしているテレビクルーもいないってことだ」

次はペットボトルがなくなった。宮本はいつの間にか出した紙切れをポケットにしまった。その時、一瞬サングラスの奥の目が笑った。事務員が宮本を呆然とした様子で見ていると、奥からいかにも偉そうな看護師のおばさんが出てきた。

「お待ちしておりました、宮本様！どうぞこちらをおつけになつてください！」

手渡されたのは特別許可証だ。

「この青いテープの矢印をひたすら行っていたいただきますと、スタッフ専用のエレベーターがございますのでご利用ください。双葉照彦さんは3階の321号室におられます」

事務員たちがヒソヒソしているが宮本は気にしなかった。深深と

頭を下げる総合案内に見送られてエレベーターに向かう。

「ははは……やはり人間は面白い……。無くて七癖有つて四十八癖というくらいだ……。欠点のない人間はいない……。癖が無いように見えても、何かしらの癖はあるものだ……。癖があるといわれる人なら……。尚更多くの癖がある……。誰でも無意識に合図を送っている……。」

宮本の趣味は人間観察だった。病院はいろんな人間がいるから好きな場所だったが、こうやってVIP待遇をうけると尚更いい気分になる。ここのところ普通の相手じゃ、もう飽きてきてしまっていたから、スタンド使いの人間観察が出来るのは渡りに船だった。

「待っている……。双葉照彦……。お前の無意識のサインを観察してやる……。くくく……。」

エレベーターが閉まって、上昇を始めた。

宮本はスキヤンダルやゴシップが大好きな新聞部の人間ではないし、噂が大好きな近所のスピーカーおばさんでもない。心理学者だとか、医者でもない、ただの性格破たん者だった。わざわざ双葉照彦の人間観察のために病気でもなければお見舞いでもないのにTG大学病院にやってきたのである。

宮本曰く、この町の人間は日本人としてごくごく平均的な表情をする。関西人ほど豊かな方ではないが、無愛想でもない。この種の人間が大好きな「ほどほど」というやつだ。そこから宮本が大好きな恐怖という表情を引き出すにはどうしたらいいのか、手っ取り早い方法は脅すことである。

宮本が将来を心理学者か人類学者に定めて勉強するような性質だったなら、きつとその道で成功しただろう。逆にカウンセラーは向いていない。患者を悪化させてしまう。

残念ながら卓越した観察眼をもっている宮本はどちらも選ばず、手っ取り早い方法を躊躇なく実行するタイプの人間だった。人間を観察するということは、好奇心に駆り立てられることでもある。初めから倫理観などといったブレーキがぶっ壊れていた宮本の観察は、針で止めた昆虫の標本をつくる愛好家のように無慈悲で無機質でそれ

でいて容赦がなかった。

吉良吉影が味方になると確信したのも、スタンドの矢が向かったときかち合った瞬間だったのだ。

「目の奥が笑っていない」

それだけだった。宮本は吉良吉影のスタンドの矢に射抜かれ、スタンド使いになった時、二つ返事で味方になることを了承した。なぜなら宮本は人が恐怖する姿を観察するのが大好きというサイコパスじみた異常な趣味を持っていたからだ。協力することにしたのも、その邪な趣味を町で好き放題謳歌するのに、空条承太郎を始めとした正義の側に立つスタンド使いたちが邪魔だったからだ。

対象を恐怖させるためには、宮本は手段を選ばない。その時が一番人生において充実していると信じて疑わない。人質に罫をしかける・不法侵入・相手の食べかけの菓子を食べる・相手の下着を盗み見せるなど。軽犯罪で恐怖を煽りたてられるなら、と常習犯だった、ド変態のサイコパスがスタンドに目覚めてしまった結果。

発現したスタンドの名前はエニグマ。対象を紙にして封印する能力を持っている。封印のイメージとして、エッシャーの「昼と夜」や「空と水」といった作品のようなものが使われている。物質なら無条件で封印できるが、生物を封印したい場合、その生物特有の恐怖のサイン、恐怖した時に思わずしてしまう行動、を見抜かなければ封印できない。そのため彼は様々な手段を講じて敵対者を「恐怖」させようとする。

スタンド自体の力は弱く、単純な殴り合いの戦闘力も低いので人を殺すことさえも不可能らしい。だが一度能力が発動してしまえばもうどんな攻撃や妨害も通用しなくなり、封印から逃れることはできない。

何かを封印した紙は折りたたまれており、開くことで封印された中身を取り出せる。封印は本体しか出来ないが、取り出しに関しては本体でなくても可能。紙の中では時間の感覚がないため、ラーメンも温かいまま麺が伸びることなく封印でき、タクシーのような大きな物、炎や電気といったものも封印できる。

また、何かを封印した紙を破くなどして破壊してしまえば、その中身がなんであれ破壊することができる。

悪用するより日常生活で扱う方がよほど活用できるスタンドなのだが、善人だったらこんなスタンドは発現するわけがないのだ。

そして。

宮本はニヤリと笑った。3階についたのだ。吉良吉影と名乗った男から理想的な反応をみせてくれるであろう人間を紹介してもらったのだ。だから宮本はここにいる。

「ここに双葉照彦の入院している部屋があるわけか……」

宮本は戦力外通知と口封じの役割が与えられていた。その男は吉良吉影に協力したのに、空条承太郎たちにスタンドを攻略されてしまったせいでもう役に立たないという。鼻で笑いたくなるようなお間抜けな話だ。

「ボクが悪いんじゃない。無能なスタンドにしか目覚めなかった弱い自分を嘆いてくれよな、双葉照彦」

独り言のように呟いて、双葉照彦しかいないはずの病棟を歩く。ここではなにがあってもなにもなかったことになるのだ。念願の初戦はあまりにもお膳立てされた最高の環境だ。さっそく宮本は聞いた番号の部屋に行こうとしたのだが。

「……見つからない」

ためしに上から順番に探してみたが、やはり双葉照彦が入院しているはずの部屋にたどり着くことが出来ない。

「なるほど……普通の人しかはいれないのか。スタンド使いは入れないように設定しているんだ。だから吉良吉影はボクに頼んだんだな、ボクなら突破できるから」

宮本は談話室を我が物顔で占領して、テレビをつける。音量を上げたところで咎める人間は誰もいないのだ。特別許可証の威力たるや、である。そして宮本は時計を見た。双葉千帆という身の回りの世話をしているという一人娘が来るのを待つことにしたのだ。

双葉千帆は学校が終わると彼氏を1階に待たせて父親の世話をしにやってくる。その日の洗濯物を回収し、新しい服や下着を持ってきてロッカーにいれ、雑談をしながら父親を元気づける。隣に座って乞われるがまま、学校のことや友達のこと、ハマっているドラマや本、雑誌なんかの取り留めもない話をしゃべる。そして、お見舞いに貰ったはいいものの消費しきれないケーキやら果物やらを持って帰るのだ。宮本が聞いていた通り、時間通りに双葉千帆は現れた。エニグマの餌食にしてやりたいがターゲットたる双葉照彦の病室に入るのが先である。宮本はソファから立ち上がると双葉のところ近づいた。「ええと……どちらさまですか？」

「ああ、よかった……ようやく来てくれた……ずっと待っていたんだ。ボクは宮本っていうんだが、うちの家のリフォームをあなたの父親にお世話になってるんだ。そしたら爆発事故に巻き込まれたっていうじゃあないか。もっと早くにお見舞いに行くべきだったんだけど、なかなか時間が取れなくて……やっとなんかいいんだが、その……実は……迷子になってしまつて……」

高校生にもなつて迷子になったからナスステーションにまた部屋場所を聞くなんて恥ずかしくすぎるから待っていたのだ。宮本の主張に双葉千帆はすっかり打ち解けてくれたようだった。初めから弱みを見せると人間は案外あつさりと親近感を覚える生き物なのだ。笑つてはまずいからと抑え目にしながら視線を外すのはツボに入るのを防ぐためだろう。

「わざわざありがとうございます。父も喜びます。よかつたら一緒に行きましょう」

「ありがとう」

「ふふ。じゃあついて来てください、宮本さん」

双葉千帆の後ろを歩きながら宮本はニヤリと笑つた。

「父さん、お客様が来てくれたわ」

入るなり双葉は父親に声をかける。

「ええと、君は？」

双葉が先に説明してくれた。

お人よしなので、おめおめと騙されてしまう善人のお手本のような少女だ。一見愚鈍に見えるほど人がいい。馬鹿がつくほどお人よしなので何をされても眼をつぶってしまうタイプ。こういう人間はときどき品の良いごみ箱みたいに扱われる。

いろんな人間がいろんなものをそこに投げ込んでいく。投げ込みやすいのだ。勧めた物をすべておとなしく買う単純な女だから、どうとでも言いのがれができる。傷つけることを恐れて、「いい人」になってしまう。すぐに人の立場を考えて気を使い、自分を犠牲にしてしまうタイプ。

目尻には、お人好しの象徴とも見える皺が刻まれている。いつも痛みに耐えるだけのお人よしであり、腹の中は毒のない善人。

エニグマで紙にするのが一番簡単な人間だ。

甘すぎるくらい人情におぼれやすい痴呆のような甘いお人好しの観念が服を着て会話している。宮本が腹立たしい印象をうけるには充分だった。信じる人間の無智に馬鹿馬鹿しさを感じないわけにいかなかったのだ。

こんな善良そうな男に、芝居もどきのコンタンはあり得ない。普通に生きていくには人が良すぎる。優しいけれどとりたてて才のない女。いわばチューインガムのような女といえる。噛めば噛むほどつきあえばつきあうほど味がなくなる。

「そうか、わざわざありがとう」

そんな少女の父親とは思えないほど、宮本と同じで目が笑っていない双葉照彦は写真で見るより別人のようにやつれていた。

不安。悲しみ。恐れ。そうした押し隠すことのできない幾つもの感情が混ぜこぜになって、べったりと顔に張りついていていた。

数々の災難に向かっていくうちに、人相がかわったのだらう、そこに映っているのは確かにだれか見も知らない人の顔だ。苦痛にしいたげられ、悪意にゆがめられ、煩惱のために支離滅裂になった亡者の顔でもある。

「これ、よかったら」

紙を差し出されて双葉親子はキョトンとした顔をする。なんの冗談だ？という顔をする。その紙を開くといきなりフルーツバスケットがでてきた。

いきなりのマジック披露に双葉千帆は目を輝かせるが、双葉照彦は目を見開いた。エニグマのヴィジョンが見えたからだろう。

「千帆、千帆離れるんだ！」

「えっ」

「はやくここから逃げなさい！」

「な、えっ、なに」

次の瞬間、双葉は中に浮き上がってしまった。

「きやあああッ！」

「千帆！」

それは怪異としかいえない現象だった。双葉千帆は自分の体が原因不明の浮遊感に襲われたかと思うと、どんどん立体感が失われ、平面になっていくではないか。それはいいしれぬ恐怖を呼び起こす。

「助けっ……父さっ……いやあああッ！」

まだベットから起き上がることが出来ない双葉照彦は、必死で千帆と愛する娘の名前を呼びながら手を伸ばす。千帆も必死で手を伸ばすが、どんどん平面になっていった体はどうとうぺらぺらの紙になってしまった。目の前で紙になってしまった娘を見て愕然としたまま照彦は宮本を見た。

「約束が……約束が違うじゃあないかッ!!千帆には手を出さないでくれと私は何度も何度も君にお願いしたじゃあないかッ!!」

「なんのことだい？」

「ふっ……ふざけるなっ！君が私に脅迫してきたんじゃあないかッ！君が千帆に手は出さないといいから今まで私はッ!!」

宮本は笑いたくなくなった。

「なにがおかしいッ！」

「よっぼど追い詰められているんだな、双葉照彦。普通に考えて今まで1度も顔を見せたことがないやつが、わざわざ顔を見せるわけないじゃあないか」

「——ッ!!」

宮本はニヤリと笑った。

「お前は…… お前は一体なにものだ…… 私たちをどうする気だ……」

「さつき挨拶しただろ？宮本だよ。あんたを脅迫してきたやつ仲間だ」

「なんだと……」

「下手なこと考えるんじゃないぞ。ボクのスタンドはたしかにチャチだ。パワーもなけりや、スピードもない、紙にするだけっていう能力にすぎない。でも」

紙になった双葉千帆を拾い上げて宮本は破り捨てるふりをした。

「やめろオ——ッ!!」

「そう、御察しの通り紙を破つたり燃やしたり濡らしたりしたらそのかぎりじゃあないんだ」

「…… はあ…… はあ…… なにがしたいんだ……」

「なにつて？そうだな…… あえていうなら、今のあんたの顔がずっと見ていたっていったらどうする？その絶望感に苛まれた、どうしようもない現実うちのめされているその顔をだ」

「君は…… 悪魔かなにかか……？」

宮本は笑いたくてたまらなくなった。

「人を殺したことがあるアンタと一緒にするんじゃない」

その言葉に双葉照彦は息を呑むのだ。宮本を恐ろしい邪悪な心をもつ悪魔だと罵るには双葉照彦は罪を重ねすぎていた。ブーメランにしかならないと指摘されてようやく自覚するレベルだった。

心の一角に悪い衝動が、夏の雲のように立ち現れたかと思うと、みるみる心の空全体に広がっていく。それは宮本のようにふつと悪魔のような知恵が浮かび、物騒なことを考えるのとなにがちがうと言うのだろうか。すべてが自分の思い通りになるという不遜な考え方はどちらも同じはずである。心の中の濃密な闇は変わらない。

ふと心に芽生えた闇が徐々に大きくなって、その闇に導かれるままに不正を行う。心の中に悪魔を飼っていて自由奔放に生きている。

背筋に、黒く冷たい水のような感情が広がる。いずれもスタンドというヴィジョンで覚醒したにすぎない。

後戻り出来ないほどの膨みが双葉照彦の胸にもひろがった。この膨みは、ドブ川の底の泥のように黒い色をして粘っていた。全身を巡る濁った気持ちだが、血管からどろどろと滲み出てくる。どんどん部屋が広くなっているように感じる。思いついた悪智にうなずいて魔の笑いをもらした。

「なにがおかしいんだよ」

「いや、なんでもない」

「ちっ…… さあ、妙なことは考えるんじゃないぞ。イラついてうっかり破り捨てるかもしれないからな」

「ち、千帆に触るんじゃないっ!」

「へへ、いくら強がったって無駄だ…… あんたにはもう既に恐怖の

印が浮かんでるんだからなあッ!」

エニグマが発動する。双葉照彦までもが紙になってしまったのだった。

「さて、帰るか」

誰もいなくなった病室を出ようとして、宮本は扉があかないことに気づく。

「……?」

鍵はない。嫌な予感として窓を開けようとしたが、あかない。

「まさか…… この野郎ッ!」

宮本は叫ぶが返事はない。

「メモリー・オブ・ジェットをボクにかけやがったなあッ!!!」

衝動的に破り捨てようとしたが、万が一死んでも発動するタイプだと取り返しがつかなくなることに気がついて宮本は手を止めた。

「クソがっ!!!」

エニグマ2

いつまでたっても帰ってこない双葉千帆に嫌な予感がした琢馬は双葉照彦の入院している病室に向かう。行き交う人々はわざわざ1人の高校生が行くところなんて頓着しない。

何故か止まらないエレベーターがあるとしても、すぐ近くの階段を使って降りていくのだ。どうやら中庭を挟んで反対側の部屋に双葉照彦の部屋はあるようだった。太陽に照らされて病室がうかがえる。

琢馬は目を見開いた。そこには色黒の高校生に抱き抱えられている双葉千帆の姿があったからだ。どこかで見た事がある顔だった。

琢馬は視覚になる場所に移動するとThe Bookと名付けた革表紙の本を取り出す。パラパラとめくっていった。

「…… ジョルノの通学路ですれ違ったことがある。他校の生徒か。名前は宮本輝之輔」

本人と友人同士の会話からの又聞きだったが、名前さえわかれば暇さえあればあらゆる情報を蓄積しようと務めている琢馬には特定が可能だった。

「陰湿ないじめの首謀者として騒ぎをおこして被害者を転校させたことがある。趣味の人間観察、特に人が恐怖する瞬間がみたくて嫌がらせを不特定多数にしかけたせいでクラスの雰囲気が悪化、疑心暗鬼になり互いに不信感が募り、学級崩壊」

施設の仲間がその犠牲になったことがあるのを琢馬は思い出したのだ。普通じゃあないということはこの下だという状況だと恐ろしい程に弾圧の対象となるのだ。

「…… スタンド使いになるには充分な性質だ」

こぼれた言葉は驚く程に冷え冷えとしていた。

「…… 宮本、か」

呼んだところで返事はない。ジョルノが愚痴っていた噴上裕也のように特定の能力が異常発達していなければ問題は無いはずだ。病院の廊下のせい、やけに声だけ反響する。耳に伝わる音は、その張り詰めた空気のせいだろうか、やけに淀んで聞こえる。

「おい、その手を離せ。どうせ病院の入口にあるアルコールなんてしちやいない汚い手なんだろう？そんな手で千帆に触るんじやあない」
無機質な目が壁の向こう側の宮本に向けられる。

「千帆になにかあったら許さないからな」

琢馬もまた目が笑っていない人間である。

「双葉照彦になにかあってもだ」

琢馬は歩き始めた。

「俺の人生は復讐を遂げてから始まるのだ。邪魔をするやつは許さない。誰であってもだ」

覚悟なんてものはとつくの昔に完了しているのである。

「……俺が来るのがわかっていて、わざと挑発しているようだな。スタンド使いならば恐怖をかんじさせようとするはずだ……よく考えろ、蓮見琢馬。お前の復讐はこの程度のアクシデントで失敗するわけがないはずだ」

息を吐く。目を閉じる。やはりおかしいと琢馬は思った。誰かがいるのは確かなのに、気配がしない。病院の廊下に隠れられるような場所はないというのにだ。

つまりこれは初めから双葉照彦が誰もいないフロアで入院させられていたということだ。初めから始末されること前提でだ。何故今までできなかつたのか、それは双葉照彦のスタンドを突破できる人間がいなかったことを指している。双葉千帆を利用して突破したのがあの宮本であり、たまたまそれが今日だったと考えるならば増援はないはずだ。

なぜまだ双葉千帆は生きている？なぜ殺さない？簡単なことだ。宮本という男子生徒は人が恐怖するところを見るのが好きであり、琢馬が不審に思っただけのを待っているのだ。利用価値があるから殺せないのだ。死んだらただの肉塊だ。恐怖をはりつけていても変化がなければつまらない。

そして双葉照彦の溺愛ぶりを考えれば宮本自身があの病室から出られないと考えていいだろう。愛娘を守るためなら吉良吉影に協力するような男だ、命をなげうってでも守るような行動に出るはずだ。

交渉しようとするに違いない。それは勇氣ある行動だ。恐怖とはほど遠い。宮本が望む状況ではなくなっている可能性がある。

少しでも堪能しようとするれば、双葉照彦を無力化して、双葉千帆を人質にするはずだ。

ここまで考えて琢馬は体が沸騰するような怒りを覚えた。読書をつまらない雑談で潰されるのとは比較にならないレベルの怒りだった。双葉照彦への復讐のためだけに今まで生きてきた琢馬には許されざる悪行である。

琢馬はわざと止まった。宮本から見て、向こう側の廊下を通ることにしたのだ。宮本が笑うのが見えた。

突然、背後で音がした。発砲音だ。

びくつとなつて、一瞬凍った琢馬だったがおそるおそる振り返り、あたりを見渡す。なにもない。

「誰だ？いるのは分かってるんだが」

わざとらしく大声を出す。すると、今度は、別の方向から銃声がする。はつとして振り返るが、やはりなにもない。何がなんだが分からない。押し寄せる不気味さに琢馬は眉を寄せた。

「なんの真似だ？」

そして発砲音に追い立てられるように琢馬は歩く。どうやら宮本は銃の段数までは把握しきれていないようだ。リロードする気配はない。双葉千帆を見せつけるように抱き抱えているままだ。

双葉照彦の病室から声がした。

「君の恐怖を観察したい」

「観察」

「そうだ、観察だ。君は今、恐怖しているね？そうだろう？違うかい？」

あいにく感情を置き忘れたような無表情さは生まれつきだ。宮本は琢馬を知らない。琢馬はその異様な記憶力で知っている。得体の知れない千帆の彼氏に恐怖を抱くのが筋だろうにと琢馬は思った。

「千帆を離せ。何が目的だ、金か？」

「金なんていらぬよ。むしろ、今すぐ払いたいぐらいだ。今、君は、

とてもいい表情をしているはずだ。その押し殺した表情を見せてくれたら、もつといいんだがなあ」

「ドアを開けろってことか？」

「おっと、そんな怖い声をださないでくれよ。どうせ君にボクを殴りつけることはできっこないし、双葉千帆を救うこともできないんだから」

琢馬は眉を寄せた。勘違いされるのはいつものことだが甚だ不愉快である。琢馬が双葉千帆を大事にしているのは、双葉照彦への復讐における最重要人物にほかならないからである。琢馬は意を決して、ドアを開いた。

一瞬で宮本と双葉千帆は消えて、かわりに静寂があった。

琢馬はすかさずドアを閉めた。

「なアッ?!」

やはり出られなくて困っていたようだ。何が起きてるのか分からず、宮本は脂汗を流している。

「はあ…… はあ…… 何をしたあ!!おまえええ!!なぜボクが逃げようとしているとわかったア!」

「そんなに大きい声を出さなくてもいい。千帆を返せといっているんだ。双葉照彦もだ」

宮本はじりじりと距離をとる。琢馬が普通の人間じゃないと気づいたからだろう。だがドアを開けられるのは一般人だけだと思いついでいるから混乱しているのだ。

「また、しばらく、ボクは消えて君を観察しているよ…… しかし、どうして、ボクが逃げようとしていると尾気がついた？」

「あからさまに挑発されたら誰だって気づく」

「ぐう…… 頭は回るみたいだね…… たしかにそれじゃあ悪手だ」

「俺はジョルノのゴールド・エクスペリエンスは知っている」

「スタンドを知っている、だど？」

「東方仗助、広瀬康一、虹村億泰のスタンドもだ」

「…… なんてことだ、予想外だよ」

「それに、双葉照彦のスタンド、メモリー・オブ・ジェットだって知っている」

「……………なるほど、ボクがとじこめられてることがわかってたってわけだ」

「ああ」

「なら、話は早い。君がドアを開けたくなるようにすればいいってわけだね」

「やってみろよ、できるものならな」

双葉千帆と書かれた紙切れがよこされる。琢馬は拾った紙切れを確かめるために慎重に指先で確認する。

「これは紙だ。ただの紙だな。しかし万が一ということもある」

琢馬は折りたたまれた紙切れをあげずに、ゆっくりと耳元に近づけた。鼓動がある。紙切れが脈打っているのではないか。

「聞こえるじゃあないか。つまり人間がしまわれているのは確かだ、千帆じゃないかもしれないが」

突如、耳元で爆発が起き、狭い中に鳴り響いた。

「ぐツ」

いきなり病室のテレビが吹き飛ぶ。壁に穴が開く。琢馬はかろうじてガードしながらも、吹き飛ばされ、入り口の方へと飛ばされた。その爆音と衝撃はすごかったが、爆弾や発火装置ではない。何か圧縮された空気のようなものが爆発した感じだ。

琢馬は、頬から出血していて壁にもたれて座ったまま、立とうとしない。衝撃音が耳をつんざき、平衡感覚を少し失っていた。そして、手には、先ほどの紙切れがない。紙切れは、琢馬とは反対のベッドの方へと舞いながら消えていった。そして、そこから、宮本の声があった。「こんな面白い状況に巡りあえたなんて、僕は幸運だな。あんた、さつき、スタンドを知ってるっていったな。だが見えないんだろう。だから避けられなかった。紙切れが双葉千帆であるという可能性を捨て

きれなかったからだ」

宮本は紙切れを拾いあげる。

「その前に、あんたを観察させてもらうよ。あんたが何者かは知らないが、僕がスタンドを見せるのはそのあとだ、見えないだろうけれど」
「そう言い終わると、再び姿を消した。もちろん、姿は見えないのが気配を消した。」

「あんた、どうも耳がいいらしいんでね……ちよつと小細工をさせてもらおう……」

琢馬は黙って聞いていた。ほほの出血は既に止まっている。かすり傷だからだ、打撲の方が強い。

しかし、あくまでも、落ち着いて、ゆっくりと立ちあがり、服についたほこりを落とした。ただ、声の方向に神経は集中していた。あたかもそこに宮本が見えているかのように、眼を一点に向けている。

見えないが覚えているのだ。宮本がヴィジョンを出すタイミング、そして紙切れにするタイミング、紙切れを取り出す動作。あとは双葉千帆と双葉照彦の紙切れがどこか探すだけだ。どうやらあらゆるものを紙切れにするスタンド使用のようだから。

すると、室内のいたるところか、音が鳴り始めた。あらゆるものを無視して発生し始めたではないか。あまりの音のうるささに琢馬は眉を寄せた。

鼓膜が破れるほどのうるさいミュージック、騒音にしか聞こえない動物の鳴き声、最近すっかり聞き慣れてしまった救急車のサイレン。不動産がどうかという電話の会話、工事現場の喧騒じみた掘削機の音、連鎖的に発生する爆発音。さまざまな音が、室内にあふれ出した。

だからどうしたという顔をして琢馬は、静かにしゃべり出した。

「お前のスタンドは、なかなか面白い能力じゃあないか。紙の中に、物をしまい込む能力。音までしまえるとはな。きつと人間だつてしまいい込めるに違いない」

琢馬の反応を見て、恐怖が読み取れない苛立ちからか宮本はイライラとした様子で返した。

「それはアンタがスタンドのヴィジョンを見た瞬間に知ることだ」

宮本は現れた。手には紙切れがある。

「これは双葉千帆だ。ちぎったらどうなるか、賢いあんたならわかるはずだ」

破ろうとしたのだが、琢馬は動じない。さすがに宮本は逆に驚いた。

「な、なんで怖がらないんだよ…… 彼女が目の前で真つ二つの死体になるかもしれないんだぞ!」

「だからどうした」

「どうしたって……」

「さつきから執拗に俺を怖がらせようとしているだろう。B級のお化け屋敷やホラー映画だと初めからわかっただけで怖がるやつはなかなかいないぞ」

「あんた…… つまんないやつだな。一番製作会社に嫌がられるやつだ」

「だからどうしたといってる」

「さすがに今まさに彼女が殺されるって時に、ベルトコンベアに運ばれてく荷物の検品作業員みたいな顔する彼氏とは同情するね」

突然、琢馬のまわりに、紙切れが舞い落ちてきた。琢馬はただちに距離をとる。その紙の中から、弾丸の発射音がいくつもした。そして、琢馬の体をかすめて弾丸が飛んでいく。弾丸の発射が続く。

しかし、琢馬は微動だにせず、宮本を見ている。背後のドアにだけは近づけないようにするためだ。宮本は苛立ちながらポケットを探る。まさかここまで度胸がある無感動なやつが相手だとは思わなかった。おかげで足元が紙だらけである。

かすめた弾丸が琢馬の体に血の線を刻み込み、幾筋にも流れている。さらに、足元で爆発が起き、琢馬はよろめいた。よろめいた先でも、爆発が起き、さらに、後ろへと後退していく。それでも琢馬は宮本から目を離さない。見上げた根性だ。なにかしらの修羅場をくぐりぬけてきたのかもしれないと宮本は思う。

「グッ」

こんなことをされたら、普通の人間は、殺されるという恐怖で心臓

が爆発しそうになる。しかし、琢馬は、口をかたく結んだまま、耐えるように無抵抗でいる。

「あんた、よほど自分に自信があるんだな。恐怖で感覚が麻痺しちゃったわけじゃあなさそうだな」

宮本は面倒くさそうな顔をする。琢馬は眉をあげる。

「おい、なんだこの匂いは」

「お察しの通りだ。その紙切れたちにはガソリンがたっぷり含まれている。さあ、そろそろお遊びはやめにしようぜ。あんたはドアを開けなきゃあいけないんだ、そうじゃないとただちに火達磨になっちゃうぜ」

宮本の手にはライターがある。琢馬は仏頂面のまま目を細めた。

「人間てのは脆い」

「なんだって?」

「なにせ思い込みだけで人間は呆気なく死ぬからだ。ある患者は余命半年の末期ガンの告知後、がつくりと気落ちし、みるみる体力を失い、告知された余命すらまっとうできず死んだ。だが、実は医師の診断が間違っていたことがわかった、誤診だ。患者はがんなどにはかかっていなかった。彼は「自分はがんで死ぬ」と信じたせいで死ぬことになったんだ」

「恐ろしい話だな」

「自分が虚血性心疾患で死ぬだろうと見なしていたある女性グループはそうでない女性グループと比較して、実際に虚血性心疾患で亡くなる頻度が3.7倍にも及んでいた調査結果もある。プラシーボ効果っていうんだが、こう考えたことはないか?感情移入だってプラシーボ効果の一種だ。ならば、登場人物がおそろしい病気になるような本があるとして、それに感情移入して死ぬことがあるのだろうか」と

宮本はたらりと汗を流した。

「なにがいたい?」

「もし可能だとして、それは殺人になるのか?事故死か?」

「ツ!?!」

「偶然にもお前と同じ紙を媒体にするスタンド使いがいたとして、それがこの紙の山の中におそろしい殺人ウイルスの仕込まれた一枚をしこんでいて、うっかりお前が触れたことで発動したとしたら？」

宮本は体が震えていることに気がついた。ついてしまった。気になりはじめるとどんどん症状が悪化していくではないか。咳やのどの痛みなどの呼吸器の症状だけでなく、高熱、全身の倦怠感、食欲不振などの全身症状が強くなっていく。そして頭痛や関節痛・筋肉痛など呼吸器以外の症状が悪化していく。

「ま、まさか、あんたもスタンド使いかつ……？」

「だとしたらどうしたらいいか、あんたはわかっているはずだ。宮本輝之輔」

「クソっ……！」

ぜいぜい荒くなっていく息に苛立ちながら宮本は必死で考える。

「……まてよ」

「なんだ」

「あんた……口も回るみたいだが……そうはいかないぜ……」

「なにがいいたい」

「この症状には……覚えがあるんだよ……そうだ……忘れない……大事なテストのとき……ボクはかかっちゃまったんだ……なにが恐ろしい病だ……これはただの……インフルエンザじゃあないか……」

琢馬は肩を竦めた。事実だからだ。へ、と宮本は笑った。形勢逆転である。

「ほら……ドアを……ドアをあけるよ……火達磨になりたくないだろ……」

琢馬はなにもいわない。ただ宮本を見つめたまま後ろに下がり、ドアを開ける。宮本は笑った。

「そうだ……それでいい……命だけは助けてやる……今回は……！次は……ただじゃあ……おかないからな」

宮本は歩き出す。琢馬は口を開いた。

「俺がなぜわざわざインフルエンザなんてちやちな病気を選んだと思う、宮本輝之輔」

宮本は答えないで廊下にでる。そして目を見開いた。そこには紙が一枚、宮本からみて真正面の壁に貼り付けられていたからだ。

「人間てのは病気が悪化するにはいくつか条件があるんだ。プーラーボ効果もそうだが、著しい体調不良になっていた方がより効果があるからだ」

だからだと滝のような汗が噴き出してくる。宮本は悟る。これが本命なのだ。この目の前に張りつけられた紙切れがこの男の切り札なのだ。

なにせ今まで感じたことのない激痛が宮本を襲ったからだ。ただでさえインフルエンザが重症化しているこの体にはその激痛は耐えられそうになかった。宮本は相手に精神的、肉体的苦痛をあたえたことはあっても逆は全くといっていいほど経験がなかったからだ。

琢馬はドアを閉め、その場にのたうち回る宮本を見て言うのだ。

「死にたくなかったら双葉千帆と双葉照彦を返せ、宮本輝之輔。さいわいここは病院だ。返してくれたら、ナースステーションまで運んでやるよ」

「ぐうぐうぐう」

「睨みつけるのも結構だが、冗談じゃなくやばい状況だと思った方がいい。あんたもコブラ踊りつてのは見た事あるだろう？あのコブラは4大毒蛇っていうんだが、それくらいやばい毒だ。ただちに血清治療を受けないとかなりの確率で死亡するからな」

毒蛇！4大毒蛇！頭の中には恐ろしいコブラが焼き付いて離れなくなる。宮本は完全降伏したのだった。

「うっかりジヨルノに治してもらった記述を見せなかったからな。神経毒の後遺症がどれくらい残るのかは、おまえの運だぜ」

琢馬から連絡を受けたジヨルノはすぐにTG大学病院に飛んできた。タクシーに乗り込むなり、琢馬は紙切れを2枚ジヨルノに見せ

る。

「スピードワゴン財団てのは医療チームぐらいいるんだろう？二人分大至急頼む」

「ええ、いいですよ。でもなにがあつたんです？」

「待つのをやめたただけだ、埒が明かないからな」

そういつて琢馬は事の顛末を話し始めたのだ。社王グラウンドホテルに保護を願い出た琢馬にジヨルノは目を丸くした。

「なぜ驚くんんだ？また刺客を放たれちゃ守れないだろう。復讐を遂げる前に死なれちゃ困るんだ」

「あんた、変わったな」

「そうか？」

「ああ」

「俺に言わせればジヨルノの方がよっぽど変わってる。今のお前は最近の千帆みたいな顔してるからな。これでお前に預ける理由がなくなっただろうジヨルノ。返してくれないか、ペンダントの一部」

そういうわけでスピードワゴン財団の医療チームが双葉千帆と双葉照彦の様子を見ることになったのだった。

琢馬はアクセサリーを組みなおす。そして双葉のところに向かった。

「琢馬先輩……」

「大丈夫か、千帆」

ほろほろと涙を流しながら千帆は頷いた。

「いつも、いつも先輩には助けてもらってばかりです…… ありがとうございます、ありがとうございます」

「あんたに死なれちゃ困るんだ、千帆。今の千帆の体は1人のもんじゃないのだから」

「…… はい」

千帆はうれしそうに笑ってお腹をさする。琢馬が見ている目がとても冷めているとしても、いつものことだから気づきもしないのだ。

「千帆に渡したいものがある」

「えっ」

「これだ。渡すのはこれにしようって決めていた。母さんが唯一愛した人からもらったペンダントだ」

「琢馬先輩のお母さんが……じゃあ、形見じゃあ……そ、そんなに大切なものなのに、いいんですか」

「大切なものだからだ。千帆がもつてなくちゃあ意味が無い。今回それがよくわかったんだ」

千帆は顔が一気に赤くなるのがわかる。

「ありがとうございます……」

「つけても？」

「はい…… お願いします…… 指が震えて、ちゃんとつけられそうにないから……」

「ああ」

千帆は目を閉じた。黒い宝石が胸元にくるようデザインされている美しいものだった。できた、と言われて目を開ける。

「よく聞いてくれ。千帆も命を狙われているとなれば話は別だからな。実は君の父親は超能力者で、やばいやつに君を人質にとられたがために色んなことをさせられていたらしい。俺がこのホテルに2人を連れてきたのは、保護を求めためだ」

「保護？」

「スピードワゴン財団、聞いたことないか？」

千帆は目を丸くした。千帆だって知っている世界的な財団である。

「そこには超能力者たち専門の部署があるらしい。ここはそのやばいやつを捕まえるための拠点になっているのだ」

「ほんとうに？まるでジェームズ・ボンドみたいな話だわ」

「紙切れにされてしまったくせに寝言をいうなんて呑気だな、千帆は。俺が来なかつたら、今頃どちらかの手が切断されていたかもしれないぞ」

「えっ」

思い出したのか、遅ればせながら千帆は青ざめるのだ。

「信じられないなら、父親に聞いてみるといい。言っちゃあ悪いが全ては君の父親が招いたことだからな」

「…… はい」

「とりあえず、いこう」

「えっ」

千帆の目が輝いた。今や蓮見琢馬は自分だけじゃなく父親まで助けてくれた恩人となったのだ。それだけじゃなく保護してくれた。よくわからないがすごいことなのはたしかだ。そして千帆と父親のところに来てくれるという事実がなによりも幸福にしてくれる。

「わかりました」

「さあ、お願いしようじゃあないか、千帆。祝福してほしい、この俺を。あなたの家族の一員として、みとめてほしいと」

千帆は大きく大きくうなずいたのだった。

インスタント0 その1

黒いスーツに黒縁のメガネ、黒いストレートヘアのキツそうな女である。

「あなたが東方仗助さん？」

「そうっすけど……」

「私、S市港湾事務所の帆波奈帆子と申します。こちらの事務所は施設整備と管理を行っております。所在地

〒×××× S市社王町湊区×丁目×××。S港国際ビジネスサポートセンター5階」

渡された名刺には、組織についてや事務所の各班の担当業務が書かれている。総務班は経理会計事務、工事等の入札・契約、物品の出納・管理

、所内の連絡調整等。港政班は港湾施設使用のための調整、港湾施設等の使用許可・使用料の調定、水域占用・臨港地区内行為届出の許可、船舶の入港に関する事務処理、港湾統計調査等。工務班は工事・調査等の設計・積算及び監督、港湾施設・海岸施設等の維持管理許可に関わる技術的審査、災害の復旧等。

連絡先として電話番号やメールアドレスが書いてある。見た限りでは本物のようだ。

「えーっと……オレになんの用っすか？」

「実はですね、東方仗助さん。うちの事務所が管理する倉庫街に関する損害賠償請求についてお話がありました」

「へ？」

仗助は目が点になった。

「これ、あなたですよ、東方さん」

ずい、と渡されたのは監視カメラに写った東方仗助だ。バイクに乗ってしきりに後ろを気にしている。そして車を解体してガソリンだけ抜きとったり、倉庫という倉庫に穴をあけまくっている写真があった。

仗助はぶわっと汗が吹き出すのがわかった。

「ひ、ひひ人違いじゃないっすかねー?」

「いえ、あなたに間違いありません。その特徴的なシルエットの人間が他にこの町にいるとでもお思いで?」

「それはア…… えーつと…… つうかなんの損害賠償請求っすか。なんにもないんじや?」

「なんにもなくてわざわざ来ませんよ」

帆波と名乗った女性は笑いもしない。

「見ていただけませんか?」

「は、はあ……」

仗助はそのまま黒塗りの車に連れていかれた。

「な、な、なんでだよ、直しつむぐぐ」

「直し?今、直しつていいました?」

「いーや、なんでもないっす!」

仗助が驚くのも無理はない。そこにはバラバラに解体された車や穴だらけの倉庫、といった惨状が形成されていたのだ。クレイジーダイヤモンドでなおしたはずの場所やものが尽く元に戻っている。

たしかにこれは防犯カメラが設置されていれば仗助のところに話が行くのも無理はないだろう。

「ま、まじかよ…… えーつと、一応参考までにおいくらかかるんすか?これ直すのに」

帆波は冷徹に答えた。仗助は血が凍る。

「あなたは高校生のようだから御両親にお話が行くと思うのだけれど、今日いらつしゃいますか?」

「あーつとおー今日はダメっす。じいちゃん夜勤だしーお袋今日から1週間帰つてこねえしいー」

「なるほど、わかりました。なら1週間後にまたお会いしましょう」

「わ、わかりましたあー!」

威勢のいい返事に逃亡の可能性なしと踏んだのか、帆波はうなずいた。そして生きた心地がしないまま、仗助は黒塗りの車に乗り込み、通学路でまた下ろしてもらえたのだった。

さよーならーと黒塗りの車が見えなくなるまで一礼していた仗助

だったが、見えなくなるや否や大急ぎでいつもとは違うバスにのる。そして乗り継ぎと徒歩によりぶどうヶ丘総合病院の5階525号室にやってきた。

「おいこら、噴上裕也ア——ツ!!!」

いきなり大声で怒鳴りつけられた全身包帯でもはやミイラ状態の噴上裕也は仗助が犯人だと気づいて青ざめる。動けもしないのに壁にびったりくっつくこうとしてじたばたしていたが、仗助に首根つつかまれて宙ぶらりんとなる。ハイウェイスターの大暴走により多大な迷惑をかけられた仗助たちに苛烈なお礼参りをされてしまった噴上裕也は、また入院期間が伸びていたのだ。目の奥にまだ怯えが残っているのは、仗助の一撃が一番痛かったからだろう。

「おめーのせいで湾岸事務所から損害賠償請求が来ちまったじゃねーかアっ!!払えねーよ、どうしてくれるんだ!元はと言えばお前がオレを追いかけ回すのがいけないんだろー?」

「痛い痛いいたただだッ!!いきなりなんのことだよー!やめろーやめてくれー痛いっ!!ナースコールすんぞごらー!ナースステーションで説教くらいたくなかつたらやめるんだ!」

スイツチをおそうとした噴上に仗助は舌打ちをしながらも宙ぶらりんはやめてあげた。ベッドに戻すのも何だか雑だが無理もない。ぐおおとのたうち回っているが仗助は無視した。お礼参りの時にはジョルノがただちにナースコールを蝶に変えてしまったために噴上を助けてくれる人間がいなかったのだ。今ここにジョルノはいない。仗助は噴上を見下ろした。

「はああああああ、まじでどうしよう。1週間で払えるわけねーだろうが、お袋やじいちゃんにバレたらまじで終わりなんだよ!勘弁してくれよー」

「だから、さつきからなんの話だよ」

「ぜってーオレと噴上で折半だろ、それ以外みとめないからな」

「だからなんの話だつて聞いてるんだけど!?!人の話聞けよおー!!」

噴上の切実な叫びによくやく我に返った仗助は事情を説明するのだ。噴上は顎が割れんばかりに口を開いてから損害額を聞いて、ゼロ

がだいぶ書き間違えてねーかと震え声で聞いた。間違いない。実際に現場を見たから間違いない。業者は保険をかけているからそちらに損害はないが、湾岸事務所は保険を扱っているようだから話がいったに違いない。仗助の言葉に噴上は真っ青になるのだ。

「いやアーだつてあれは出来心つつーかアー……逆走してきたトラックに玉突きしやがった車、脇見運転しやがった車、みんな養分すいとっても意識回復するのが限界だったんだからアイツらが悪いっつーかア……」

「どーやつて説明すりやいいんだよ！写真に映らねえハイウェイスターをよオ！なあ、噴上裕也君よオー？」

「ま、マママジですまねえ、仗助！まさかなことになるとは思わなかったんだよ！仗助のスタンド、ちゃんと車とか倉庫とか直しながら逃げてたじゃねーか、だから大丈夫だろつて思い込んでたぜ……」

「すまねえですんだら警察は……てちよーつと待てよ……だよな？やっぱオレちゃんとは直してたよなあ？」

「ああ、匂いが遮断されてたから間違いないねーぜ」

「あ、判定方法それなのね」

「仕方ねえだろ、どういいうわけかスタンド使い始めてから尚更鼻が利くようになったんだからよ」

「へー……しつかし、よかつたぜ。黒塗りの車に連れてかれて、クロスーツの人らにかこまれてたらなんか自信なくなっちゃまってよオ……よかつた……オレの記憶は正しかったんだよな！」

「それやべー人らじゃねえのか……？」

「いや、名刺はちやあんともらつたぜ？」

受け取った噴上裕也は、げ、という顔をした。

「よりによつて帆波奈帆子かよ」

「あれ、知つてんのか？」

「俺がこないだ仲間と他の組に殴り込みにいって派手に暴れたらよー、全部洗い出しやがって損害賠償請求してきやがったババアじゃねーか」

「げえつ……暴力団にも屈さねえつて相当肝が座つてる人じゃ

ねーか……！なんだって直したやつが元に戻ってるのかは知らねーけど、なんとかしてオレがやったんじゃねーって言わなきゃやべーやつだ！」

「同情するぜ、仗助……このババア払えないってわかったら取立ての鬼になるからな」

「知ったふうな口聞くんじゃねーよ、噴上！お前も手伝うんだよ!!」

「や、やっぱりそうなるのね……頼むからクレイジーダイヤモンドで治してからにしてくれよ……」

「仕方ねえなあ」

ナースステーションを避けながらこっそり病院を脱出した仗助たちは倉庫街に来ていた。

「んん……こりやひどいなア」

噴上裕也は大惨事となっている周りを見渡す。

「一応これでも頑張った方なんだぜ……人がいねーで障害物が多いとこ選んだつもりなんだからよオ……」

「ありやすまんかったな、仗助。まさか俺もこんなことになると思わなかったんだよ……」

「だいたいワープってのが反則クセーんだよ！何キロ出してもガンガンおいてきやがって！……こうでもしなきゃ逃げらんねーと思ったんだよ！無理だったけど！」

「仕方ねーだろ！こっちはなんのルール違反もしてねーってのにあんだけ大事故に巻き込まれちゃ、法定速度守る方が馬鹿らしくなるっての！」

「それについては同情するけどよオ……それとこれとは話が別だぜ！」

「そりやそーだわな……」

「でも噴上にもいいところあるじゃあねーか。ジヨルノの匂いで見舞い客かどうか判断してたのに千帆達は襲わなかったみてーだしよ」

「そりやそうだろ。高校生カップルが病院から出てくるなんてそりや理由はひとつしかねーんだから。野暮ってもんだぜ」

「えっ、なんでだよ？」

「えっ」

「えっ」

「…… お前さー、そのモテっぷりでコウノトリが赤ちゃん運んでくるとかお花畑から連れてくるとかかんがえてんじゃねーだろうな？」

「え？なんで今その話になるんだよ？関係なくねーか？」

「いやだからお前…… まあいいや、そういうお年頃なんだな……」

「よくわかんねーがすげえ馬鹿にされた気がする…… やめろよその目」

噴上は生あたたかい目を仗助に向けたのだった。

「気を取り直して、早速探すか。頼むぜ噴上」

「わかったよ。俺だって数千万なんていくら折半でも限度があるからよオ」

噴上裕也はさっそく匂いを嗅ぎ始める。まずは仗助の匂いが残っているかどうかの確認だ。出入りが激しい場所ならばそもそも仗助だけを犯人と決めつけるのは早急すぎる。冤罪事件によくある証拠ありきなせいでもちゃんと監視カメラがない可能性もあるからだ。

匂いをかぎながら噴上裕也は歩いていく。ハイウェイスターにおいかけられながら逃げていた仗助はバイクに乗っていたのだ。それなのにわかるのだから犬以上の成果は期待すると言われたが、それ以上である。すげえなあと仗助は思っていた。

迷うことなく仗助の経路を辿っていく。

1時間ほど歩き回り、噴上裕也は首を振った。

「ダメだな、仗助とハイウェイスター、そもそももってあのババアの匂いしかしねえ。あんま人気がない場所選んだっていったよな、仗助。まさにその通りだぜ」

「つまり、目撃者は……」

「期待できないだろうな」

仗助はガツクリと肩を落とした。帆波奈帆子の匂いがしたって保険関係の業務に携わる職員なのだからいて当然だろう。

「警察に被害届出されないだけマシだな」

「まじか……」

「スタンドで触れたから指紋とかはでねーが、仗助しかいなかったのは科学捜査でわかつちまうだろうな。俺がわかるんだ、警察犬なら一発だろ」

「うげえ」

「ちよつと引つかかるといあるといやあ、こんだけの被害がでてんに警察に届けねえのと、帆波奈帆子の匂いしかしねえことだな」

仗助は目を瞬かせた。

「言われてみりやそうだ。普通なら色んな人間が出入りするよな」

「逆に怪しいぜ」

「お、いい感じじゃねーか。つまり」

「帆波奈帆子のが怪しい」

実際に言葉にしてみれば疑惑が頭の中に暗雲みたいに広がる。嘘と本当がごちゃごちゃになって、全てのものが疑わしく見える。

「俺ん時みてーにスタンド使いつて手はねーのか？」

「言われてみればそうかもしれねー…… 損害賠償請求で頭がいつ

ぱいでそこまで頭が回つてなかったぜ」

「おいおい大丈夫かあ？」

「しかたねーだろー！」

「気持ちはわかるけどよ」

噴上は苦笑いした。

視界がひらけた今、すべてのそれらしくないものたちが、実はこっそりと仗助を監視しているようにも思えてくる。

「これは巧妙に仕掛けられた罠かもしれない」

この名刺を信頼しないわけではない。事実はこのとおりであったに違いない。しかし、表通りから建築の正面を眺めるような感じが生きていた。この倉庫街のどこかに見えざる工作がほどこされているよな気がした。

「じゃあまずほ……ここで何があつたか調べねーとな」

コーヒーポットから噴きあがっている湯気が、低い天井に当たってゆっくり店内に拡がっている。真つ赤なテーブルクロス、ロシア製の木のスプーンやコーヒーカップなど、細かいところまで雰囲気ムムムの料理店である。ショーケースの中には可愛らしい自家製チョコレートや焼き菓子たちが、お行儀良く並べられて、穏やかな時間が流れる店内にて。

お店の中に入ると、お茶をしながら、ゆったりとした午後の時間を楽しむ女性たちの姿がある。外のざわめきは消えて、代わりに楽しそうな声が行き交う客席。空調と換気扇の音、時々コーヒーカップとソーサーがぶつかる音だけが聞こえた。

ジョルノとドナテロがいるのは、真上にエアコンがあり冷風が直撃する絶好のポジションである。コーヒーの残りを飲もうとしたが、カップが空になっていることに気づき、ソーサーに戻した。カップはソーサーに当たって、予想もしなかった大きな乾いた音を立てた。その音を聞きつけたようにウェイターがテーブルにやってきて、二人のグラスに氷の入った水を注いだ。

隣の席では太った一家が熱心に食事を頬張っている。

店の中には煙草とウイスキーとフライド・ポテトと腋の下と下水の匂いが、バウムクーヘンのようにきちんと重なりあって淀んでいる。

喫茶店の扉のカウベルが鳴る。ジョルノとドナテロは入口を見もしない。暑い日とあってどこも冷気を求めて人がごつた返しているのだ。

コーヒー一杯の値段は安くないが、席と席とのあいだに距離がとられていたので、他人の耳を気にせず話をすることができる。

ジョルノは腕きき弁護士が重要な契約書を読むときのようない目つきで、メニューに書かれている内容を隅々まで二回ずつ読んだ何か大事なことを見落としていないか、どこかに隠された巧妙な抜け穴があるのではないか。そこに書かれている様々な条件や条項を頭の

中で検討し、そのもたらす結果について熟考した。利益と損失を細かくはかりにかけた。

注文が決まったらメニューは閉じた方がいい。そうしないとウエイターは永遠にやってこないとドナテロは主張する。さすがに初めての日本でチップ制がないのは慣れないようだった。

味がわかる客がカウンターの向こうに座ると、マスターはびびっと電流を感じるのかもしれない。この薄汚れた壁の喫茶店は若者が好んで来るような店ではないが、いつ来ても席が空いていて、ジョルノ達を排除する雰囲気が無塵もなく、居心地がよかった。

「いつもよりコーヒーが美味しい……マスター気合い入ってるな」「そうか？」

不思議そうにドナテロはいった。

2人の席は隅近くではあったが、それだけ中央の喧騒から遠ざかり、別世界の感があった。外国人2人が英語を話しているとでも思っているのかもしれない。周りの客は批評的に見くらべて好き勝手食っちゃべっているのが聞こえたがジョルノは無視した。

ここでは孤独な客が他所のテーブルを眺めたりしながら時を費すことはそう不自由なことではない。お好きにどうぞというやつである。

「まだ決まんねーのかよ、ハルノ」

うんざりした様子でドナテロはいった。

「もう少し待ってくれ、2つに絞ったから」

「はあ？2つだと？ならどっちも頼めばいいじゃねーか。それだけで腹いっぱいになるとか頭おかしいと俺は思うけど」

「そういう訳にはいかないよ」

「なに兄貴ぶってんだよ、1歳しか変わらねえ癖に」

「空条さんにはステーキハウス奢ってもらったんだろ？僕はまだだ」

「何張り合ってるんだよ……退院祝いに奢るっていつてんのにまた今度でいいとかいいやがって。ぜってー毎回そうなるんだ、俺は知ってるぜ」

「だから譲ってあげたじゃあないか」

「うつせえな、さつさとメニュー決めろよ」

「はいはい」

ジョルノは笑い、ドナテロは面白くなさそうに鼻を鳴らした。ドナテロは弟というものになりたくてたまらないようだ、とジョルノは思っている。扇の骨のように離れてばらばらに成っていた腹違いの兄弟が不思議な邂逅を果たしてまだ日が浅いというのに、10年の歳月を埋めようとしているとさえ感じられる。

今まで一人っ子みたいなものだったジョルノは不思議でならない。兄ではなく弟という立場にドナテロは固執しているようだ。普通は自分が上がいいといいそうさ。アメリカは日本ほど上下関係を意識しないらしいから。だから余計不思議なのだ。

そんなジョルノの考えを知ってか知らずか、ドナテロはボソリというのだ。

「俺の中での家族のあり方ってのは、スピルバーグの映画に出てくる幸福な中流家庭のような明るい世界なんだ。もちろんDIOにんなもん無理だつて知ってるし、ヴェルサス家でも高望みだとは知ってるさ。でも望むのは自由だろ」

「たしかに自由だな」

「だろ」

ドナテロにとってジョルノはおもちゃの家のような存在らしい。育ちざかりの子供にとって、血液のように必要なものらしい父と母の揃っているごく普通の家庭。ことごとくその普通に恵まれなかったにしては、ドナテロもジョルノも自然な雰囲気があるからかもしれない。

父にとって、妻ほど愛した存在はかつてなく、この先もない。歳を重ねるにつれて妻に似ていく娘の姿が祝福である。そんなごく普通の家庭。ホームドラマの世界。

目の前で体験しているのが信じられないが、かなってしまおうとこうも呆気ないものだ、と、なあんだと思ってしまう。それが普通なのかもしれないが、完全に感覚が狂っているジョルノにはよくわからなかった。ただ、なつかしい風景の一つとして遠ざかってゆくことが、祝福

なのだろうとはぼんやり思う。

「その素っ気なさがいいんだよ」

「家族らしいそっけなさってやつ？」

「そうそれだ、俺がいいてーのはさ。友達と来る時とは違うだろ？
こーいうのは」

「そう？」

「そう。無関心だと平気で家に置いていきやがる。テストだって運動
だって俺のが優秀だったのに、マックにすら連れていきやがらねえ。
姉貴にはレストランその場で予約するくせに。俺ん時はいつもやる
気のねえアルバイトのベビーシッターへの電話だ」

「それは酷いな」

「それがおかしいって誰も言わねえのが一番いかれてる。孤児院でも
なんでも置き去りにしてくれりやいと何度思ったことか。それで
も、それなりに愛してくれてるとは思ってたんだぜ？俺への金を着
服してると知るまではな」

「…… ドナテロは偉いな、尊敬するよ」

「はあ？なにが？」

「よく殺さなかったな。僕なら殺してる」

「はは、日本人にしちやずいぶんと過激なこと言うな」

「こればかりは国や人種は関係ないよ、本人の資質だ。だから僕は義
父を殺そうとして川に突き落とし、ドナテロは瀕死の襲撃者から
逃げたし家出をした。僕よりよっぽど賢い。効率的だ。家出の時の
話なんて考えたこともなかった」

「なんだよなんだよ。いきなり褒め殺しとかやめろよ、こえーな。何
企んでやがる」

「何言ってるんだ、ドナテロ。素直に受け止めたら？」

「そのメニュー表から目を離してたら信じてたよ」

「あはは、バレたか。実は候補が3つに増えたんだ」

「いい加減にしろよ、馬鹿兄貴」

結局ジョルノは諦めてケーキをふたつ選んだ。

マシユマロのような口ざわりで適度の甘みにバナナの風味。甘さ

は強いがどこか控えめで、滑らかで繊細。個人的には一昔前のショートケーキのようにバタークリームが死ぬほど甘いのが好みだがここにはないので妥協したが、おいしいショートケーキは生クリームの香りが違う。

今まで何個もショートケーキを食べてきたが、これほど上品で、かつ、しっとりしたケーキは食べたことがないとジョルノは思うのだ。「毎月22日はショートケーキの日なんだから、食べ歩きするべきだな」

「はあ？」

「カレンダーを見ると上に15（いちご）が乗っているだろ？」

「日本だけじゃねーか」

ドナテロの呆れ顔も無視してジョルノはケーキを堪能する。

しつとりと焼き上げられたスポンジケーキと口当たりなめらかなホイップクリーム、それに真っ赤に熟れたイチゴの甘酸っぱさ。この三位一体のバランスの取れた味わいすばらしい。

ふわふわのスポンジケーキの間にたっぷりのホイップクリームとイチゴをサンドされ、さらにケーキの上にも柔らかくホイップした生クリームとイチゴが飾られている。

白いホイップクリームでデコレーションしたショートケーキには、いちごが欠かせない。そのあざやかな赤い彩りはもちろん、適度なすっぱさもぴったりのアクセントだ。

生クリームを最初に少しだけペロつとなめてみると、いちごの香りがほんのりする。良質でフレッシュな生クリームだからそこ、こういう自然な移り香がある気がする。

「よくもまあそこまで語り倒せるな…… 専門家になれよ」

「DIOの残党がこの世界から1人もいなくなれば、それもありかもしれないね」

「ほんとにな」

一方でドナテロはチーズケーキを食べていた。チーズそのままを食べているような濃厚さは、キメの細かいしっとりとした生地とよく合う。チーズのうまみが口の中で静かに広がる。

チーズケーキはアレンジの余地が広くて、作り手たちはいろんなことをしたくなる。それを抑えて、この店ではあえて、余計なことはいっさいしない潔さが、目の前のチーズケーキのおいしさの理由だ。残念ながらドナテロが選んだのはそこまで考え抜いてではない、もつと消極的な理由だ。目の前で生クリームたっぷりのショートケーキとごてごてのデコレーションがされたチョコレートプリン。この2つの甘さの権化を食べているジョルノを見ると胸焼けしそうというシンプルな理由だ。

コーヒード流し込みながら食べているのをジョルノは睨む。誰のせいだとドナテロはぼやいた。

「もう大丈夫なのか？」

「おかげさまでね、スイセンの悪夢は忘れられそうさだ」

「そーかい。そりやよかったな」

ようやくチョコレートプリンに取り掛かり始めたジョルノを見ながらドナテロは小さく笑った。

「モテる男は大変だな」

「完全なる八つ当たりだけれどね」

「とんだ災難だったな、兄貴」

「本当にそうだ…… 本当に」

ジョルノはうんざりという顔をした。

プレイボーイだった友達がいついたが、女に好かれる男というものはいつも心の奥に赤ん坊の皮膚のような柔らかいいたいたしいところを持つているという。蜜にたかる蟻みたいに女が寄ってくるらしいのだが、目の前の兄のどこら辺がそうなのか、ドナテロはさっぱりわからなかった。

たしかに外見だけ見れば女の矢印が集中する男の代表のような容姿をしていると思うが。どちらかといえば恋を向けられて、その囲みを手際よく繰りぬけながら、どこかにいってしまおうタイプ。

「我慢比べだよな、相手は」

「僕と？」

「兄貴じゃない、自分とだ」

「よくわからないな」

「そーいうところがだ」

「？」

ジヨルノは不思議そうにドナテロを見た。からららん、とベルが鳴る。こちらに近づいてくる足音に2人が視線を投げると、そこには仗助と噴上がいた。

なんでジヨルノがいるって前もって教えてくれなかったんだよ、と噴上裕也は呑気にしゃべりはじめた仗助を恨めしげに見た。病院近くの公衆電話からどこかに電話をかけていた仗助に連れてこられたのは最近できた小綺麗な喫茶店だった。

その店の奥にいる外国人を見た時点で、噴上はげげえとなった訳である。

宇宙がこの部屋ひとつになったような緊張が、部屋いっぱいにはりつめる。乾いた空気に扇を一振りしたような笑いが紛れこみ、無理矢理中断したような、おさまりの悪い空気が残る。

部屋の空気が湿気を吸ったように重たい。空気が濃く重くドロリと液体化して、生温かい糊のようにねばねばと皮膚にまといつく。とても空気が重い。まるで鉛の箱に押し込められて海の底に沈んでいくような気がする。

空気が重苦しくなった。立っている噴上たちが、それぞれ見えない綱を引っ張り合っているようだ。息苦しくなる。

もちろんこれは単なる噴上の被害妄想からくる勝手な苦手意識からだ。仗助たちの冤罪を晴らしてくれるのはアメリカ人であり、日本語が喋れないから誰かしら通訳はいるという話はあった。ただ赤ん坊をしているジョセフや吉良吉影やDIOの協力者の調査に追われる承太郎を頼れなかっただけだ。

ジヨルノはというと、約1名から発せられる気配により僅かながら大部屋の空気の変化に気づいていた。熱気が薄れた。ジヨルノは我関せずといったようすで奇妙なほど落ちつき払っている。喧騒は相変わらずだが、殺気立ったところがない。以前のようなヒリヒリとするような乾いた空気が、微かだが湿りけを含んでいるとは思えなかつ

たからだ。

強くこわばった人間がうろついているだけで、空気が張りつめて影響を受けるのだ。ジオルノは無言だった。それでますますまずい雰囲気になってきた。

仗助が冤罪により損害賠償請求をふっかけられているから助けてくれという頼みを通訳してくれと頼まれたジオルノはため息をつくのだ。

「あのですね、仗助先輩。物事には順序つてもんがあるでしょう。あなた、こないだ僕になんていいました？ピンはねした分必ず返すっていいましたよね？それをなんですか？舌が乾かないうちにお願いごとですか？この僕に？いい度胸してますね、あんた」

「そ、それはア…… うーん…… そうなんだけど！よ！まじで頼むよジオルノ！シャレになんねー事態なんだって!!」

「土下座なんてパフォーマンスはいりませんよ。辱められるのは僕だからな」

「ぐうー！仕方ねえ…… 今、これだけ…… 今これだけなんだよ！みろよこれ、すつからかんだろ?!今度必ず返すから……!」

「まったく…… 最近ジョースターさんと静のために買い物しすぎて金銭感覚おかしくなっちゃってやしませんか？ありがたく受け取りますかね…… あと2万5000円ですよ」

「高くね?!」

「まさか利子も付けないで返す気なんです？なんて誠意がない人なんだ、あんたは」

美形が凄むと迫力があるのは万国共通の認識らしい。ドナテロはなにをいつているのかはさっぱりかわからないが180もある仗助が165しかないジオルノに下手に出るのはなかなか面白いものがある。ニヤニヤしているドナテロにジオルノはため息をつくのだ。

「あれ、いいのかわよ?」

「まだだ、これを片付けてから」

たしかにエプスレッツソーヒーとチョコレートプリンを食べる仕事にジオルノには残っている。仗助はジオルノが無視して家族団欒

を再開したと思ったのか、絶望的な顔をしていた。

「仗助なんて？」

「あとで説明するよ」

「ついでに横で居心地悪そうにしてるやつは？」

「噴上裕也。さつきいつてたハイウェイスターの本体だ」

思わずドナテロは吹いた。

「兄貴面白すぎだろ、順番がおかしい」

「なにがだ、好きなことを優先して何が悪いって？だいたい頼み事をしてきたのはあつちだ。僕のタイミングをはかってなにがわるい？」

「兄貴も大概だなア……」

まあ、タイミングが悪いわなどドナテロは思った。退院祝いに水をさされてジヨルノは怒っているのだから。ドナテロがジヨルノの立場になっても怒るかもしれない。

「えーっと、ちよつとまっててくれ？」

「ウェイット？今ドナテロのやつ、ウェイットっていったか、噴上！」

「え？あ、おう、まあ、そうなんじゃねーの？汐華がケーキ食うの待ってるって俺には聞こえたぜ」

「オーケーオーケーいくらでも待つぜ！」

日本語訛りのオーケーしかわからないドナテロだったが浮かぶのは苦笑いだった。

そしてジヨルノが通訳をしたのはそれから30分後の話である。

「いつぐらいです？」

「エエエ……んなの覚えてねエよ……」

「だいたいでいいんだ」

「えつとお……たしか、たしかだ、ジヨルノんところにお見舞いについて帰ってる途中だったはずだから……」

「6時くらいですっけ」

「そうそう、放課後にこつち来て、長居したからそんなくらいだな」
ジヨルノは詳細を伝える。

「アンダーワールド」

ドナテロからスタンドのヴィジョンが発現する。

「おーすげえ」

「仗助がハイウェイスターに追っかけられてるぜ」

「こうしてみるとシニールだなおい」

たんたん時間だけがすぎて行き、ハイウェイスターは無力化されて姿を消した。仗助は億泰と合流すべく元の道に戻り始める。

「やっぱり直ってますね」

「すげえなクレイジーダイヤモンド」

「こっからが本番だぜ」

空がすっかり暗くなり始めたころ、近づいてくる影がある。

「ビンゴだ！」

「やっぱり帆波奈帆子じゃねーか、あのババア」

黒縁メガネに黒いスーツの女がヒールを鳴らしながら歩いてくる。手には防犯カメラの映像を引き伸ばしたと思われる紙がある。いや、写真だ。写真を拡大コピーしたものだ。

「インスタントO！」

帆波奈帆子が叫ぶと、突如倉庫街が一転する。

「なんだこりゃ」

「オレのクレイジーダイヤモンド解除しやがった！」

「これは一体……」

「あつという間に元通りだと……？まじかよ」

そこにはクレイジーダイヤモンドで再生されたはずの倉庫街が見るも無残な形となっていた。

「調査体制に移行します」

「ん？」

帆波奈帆子はそう宣言すると電話をかけた。

「見てください、みなさん。あれを！」

ジョルノが指さす先にはたくさんの人だかりがある。いや、同じ黒スーツの女がたくさんこちらに向かってくるではないか。

「なんだこりゃ気持ちわるい」

「ババアの行列行ってか？笑えねーぜ」

「これは……」

「さすがに偽物だろうけど、こんなに作るなんてスゲーな」

18から32歳までの帆波奈帆子その人だった。たくさんいる。誰もが黒いスーツを着ている。全て同じ顔の女性達が作業しているのは異様な光景だった。

「スタンドか？」

「だとしたら一体なんの能力だよこれ……」

「検討が付きませんね」

「俺とはちげーみてえだな……」

ジヨルノ達は息を呑む。

「何だかわかんねーけど、やっぱり帆波奈帆子さんのせいじゃねーかあっー！」

「でっち上げだでっち上げ！」

「えーと……よかったのかこれ？」

「一応デジカメで撮っておきましょうか」

「ナイスアイデアだぜ、ジヨルノ。ドナテロ、さっきのスタンド発動するところ撮りてーからまた再生してくれ！」

ジヨルノはまたドナテロに通訳する。いいぜとドナテロは頷くとアンダーワールドを再発動させた。

そして翌日、仗助は噴上と共に湾岸事務所に殴り込みをかけた。

(うわっみんな同じ顔じゃねえか……)

(知ってたけど気味悪いな……)

(っーか怖くね?)

(おい、早く話しかけるよ仗助がメインだろ)

(わわわわかってるよ!)

「誰かと思えば東方仗助さんじゃありませんか。どうされましたか

「？」

受け付けにいた帆波奈帆子が話かけてくる。

「どうもこうもないっすよ！あんた、オレが直した車や倉庫、わざと元に戻して損害賠償請求だなんだって因縁吹っかけてきてるじゃねーかつ！」

ぴくりと眉が動くのを2人は見逃さない。かかった！と仗助はニヤリと笑った。

「なんのことです？」

「言い逃れは出来ないっすよ！これ、あんたがやったって証拠があるだからな！動かぬ証拠ってやつがよ！」

デジカメの映像をプリントアウトした紙を仗助は帆波奈帆子に突きつけた。受け取った彼女はその紙をなめるように見つめる。

「あら、驚いたわ。時を止められるだけじゃなくて、巻き戻せるスタンダード使いのお仲間でもいらしたんですか？調査不足だったわ」

「んなつ、なんだとー！」

「まるでこつちのこと把握してるってやつぱりあんた、吉良吉影の間かつ！」

警戒態勢に入る仗助たちを見ても帆波奈帆子は平然としている。

「あら、調べるのは当然でしょう？密入国して不法移民を連れてくるような人のお仲間なんてマークされて当然だと思いなさいよ。10年前と同じような手口を使おうたってそうはいかないわ。今回もきっちり請求させていただきますからね」

「……ん？」

「んん？」

「あ、あれー？オレの想定してた流れと完全に違う流れなんだけどこれ」

「なんか勘違いされてる気配がプンプンするぜ、仗助」

仗助と噴上は顔を見合わせた。

「勘違いですってエ!?5月に入ってからアメリカの不動産王所有の船が無許可で停泊したり、スピードワゴン財団の船が無断で占領したりしてるもんだからこつちは苦情が殺到しているのよツ!!こちらが通

報してもなんでか行政は動いてくれないんだから、私たちが仕事をす
るしかないじゃないのツ!!」

いきなりヒステリックに叫び始めた帆波奈帆子に仗助はようやく
事態を把握したようで、あーといいながら視線を彷徨わせる。

「あのー、もしかしてオレに請求したのは……………」

「あなたがジョセフ・ジョースター氏の息子さんだからよ」

「やっぱいいいーンなことだろうと思ったぜチクショー! オレ関係
ないじゃねーかつ!」

仗助の叫びに帆波奈帆子は怒り狂う。

「ですって…………… 関係ないですってエエエツ?! 言うに事欠いてな
んてこと言うのこのクソガキはアツ!!」

「うをつ?!」

「あんたが、穴開けて、直した倉庫、完璧に、100パーセント、直せ
た保証は、誰が、してくれるって、いうのよオオオン!!」

ばしいつと紙が突きつけられる。

「ここらへんやっぱり引き伸ばされて壁が薄くなっちゃってるじゃな
いのオオオ!! 阪神・淡路大震災で改定された耐震基準ギリツギリで
やってるのよ、うちはアツ! おかげで貸倉庫として機能しなくなっ
ちゃってんのよ! どーしてくれんだこのクソガキいいいっ!!」

「やべえぞ仗助、言い返す要素が微塵もねえ」

「や、やっぱり噴上もそう思う?」

「思うっつーか…………… ド正論すぎてうっかり納得しちゃったぜ」

「クソつ…………… なんでよりによってんな倉庫に穴開けちゃったんだ、
オレツ!」

「わかっていただけましたか、東方仗助さん」

「は、はいっす……………」

「私が元に戻したのはですね、被害額を正確に算出するためです。そ
れともあれですか、半端に直したせいで全部立て替えなんて悪夢によ
り損害賠償額が2倍になっても払っていただけますの?」

ぶんぶんぶんと仗助は首を振った。

「あ、あのー…………… 買取とかで妥協出来ません?」

噴上の言葉に帆波奈帆子は笑顔のまま絶対零度の眼差しを向ける。
あ、やばい地雷踏んだと気づいたがもう遅い。

「今ですね、社王町においても建築基準法違反や耐震偽造がバンバンバレて建築業界は阿鼻叫喚ですの。ただでさえ負債扱いの倉庫をスピードワゴン財団に売り飛ばしたなんてバレたらどうなるかわかってていつてらっしゃいます?」

「すみませんでした」

帆波奈帆子はいうのだ。

「という訳です。お支払いいただけますよね、東方仗助さん」

仗助はなにもいえなかったのだった。

「私だっていたいけな高校生にこんなことはしたくないのよオウ！でもね、でもねエエエエ？耐震偽装スレスレの倉庫作った会社に訴訟しても支払われるかは不明だしー、トカゲのしっぽ切りになりそうな男がこないだから行方不明なのよオオオン！だ、か、ら、匿ってる分きちんと支払ってもらいますからねエエエツツ!!というわけです！スピードワゴン財団にはよろしく伝えてくださいなツツツ！」

帆波奈帆子の意味深な言葉の意味をといたただそうとした仗助たちだったが、そのまま事務所を追い出されてしまったのだった。

仗助から事情を聞いた承太郎はやれやれだぜとぼやいた。

「スピードワゴン財団はそういった手続きや交渉はちゃんとしてるはずなんだがな……」

「エツ……じゃあなんで帆波さん、あんなに切れてたんだろう?」

「スピードワゴン財団相手ですからね、行政が余計な手回しをしたもんだから現場が混乱してるのかもしれないよ」

「あー……お役所仕事ってやつか……」

「多分、10年前ってのはDIOの手下たちのことでしょうね。バカ正直に僕を日本に入国させるわけがない。しかも仗助先輩の監視や仲間を増やすために億泰先輩の父親や吉良吉廣を潜伏させていたん

だ。相当使ったはずですよ。しかも僕は3年前まで戸籍がなかった。不法移民てのはきつと僕のことだ」

「トラブルや犯罪は起こりまくってそうだな、治安の悪化に貢献か。20年前ならバブルだなんだでゴリ押せたかもしれないねーが、今の不景気じゃ無理か」

「あ、あ、あー！なるほど！そういうことか！やっぱ勘違いによる逆恨みじゃねーかッ！10年前はまだオレのことスピードワゴン財団は気づいてねえっての！」

「資金繰りが厳しいのかもしれないね。建築基準法違反の物件かかえこんでなくても、最近は貸倉庫ってのは流行らないのかもしれない。だからカフェだなんだとやっているのかも」

「へー、手広くやってるんだな」

「僕が聞いていたのは再開発の責任者って話だったんだけどな……」

「うげ、マジで何人いるんだよ、帆波さん」

「しかしDIOの手下からもきちんと徴収したらしいな、そいつ」

「うげっ…… すぐえ度胸……」

「度胸どころの話じゃありませんよ」

「全くだぜ……。DIOの手下だろうが取り立てするってことは、そりゃ暴力団だろうがオレだろうがあんな態度で来るよなあ……」

がつくりと仗助は肩を落とした。

「仗助の件はハイウェイスターが原因だからな、俺が掛け合っておいてやる。スピードワゴン財団が払ってくれるはずだ」

「まじすか！よかったアー！」

仗助は素直に喜んだ。

「帆波奈帆子の言っていた、匿ってるってのは、双葉照彦のことだろうな」

承太郎は難しい顔をする。

「何者なんすかね、あの人」

「帆波って名乗っていたなら、間違いなくこの町に20年前から住んでる岩人間ですよ」

「えっ」

「僕はその娘が彼女ってことになっているんだ。挨拶にいきましょうか」

茶化すジオルノに承太郎はやめとけと釘を刺す。承太郎に説明を丸投げしていたジオルノは、仗助とともに双葉親子が泊まっている部屋に向かった。

「この女性のこと知ってます?」

アンダーワールドで再現して撮影した帆波奈帆子の写真を見せると、さっと顔色が変わりやすいくらいに変わった。

「いつ……いつ、撮影されたものだい?」

「いつってそりゃ、昨日ですよ」

「きのう……昨日だとツ!?本当にかツ!?この女は……やはり化け物だ……餓死したはずなのに」

怯え切った顔で男は言う。餓死という言葉に愛人のオリカサハナエを思い出したジオルノは顔をゆがめる。仗助は初めてこの男が会社の不正がバレそうになるたびに、一般人をメモリー・オブ・ジェットに閉じ込めて殺していたことを知った。なによりも邪悪なのはその身勝手な動機で何人も屠って起きながら、自分は哀れな犠牲者だと被害者だと本気で信じている顔である。

「たしかにみた……私は見たんだ……雪の中で微動打にしない……帆波奈帆子を……脈だつてとつた……なのはどうして……」

ぶつぶつぶつと双葉照彦は罪を告白し続ける。悪いことをしている自覚が一切ない時点で懺悔にすらならないが。

「こんなことならあの男に頼めばよかった」

仗助はカツとなって胸ぐらをつかみそうになるが、ジオルノが制した。

「湾岸事務所の倉庫街はたしかに私がかつて担当していた物件だった。うちの会社の不正に気づいて損害賠償請求をするとやってきたんだ。あまりにもしつこいからメモリー・オブ・ジェットの餌食にしてやった……その矢先だ。私がこの怪我をして吉良吉影に脅迫さ

れたのは」

なるほど、双葉照彦が露骨に吉良吉影側に引き入れられるきっかけはその優秀なスタンド能力だけじゃなく、そういった因縁もあるらしい。

「生きているだと……？」

信じられないという顔をする男を見ながら、仗助はあの同じ顔をしたたくさんの女たちを思い出して身震いする。スタンド使いでなければなんだというのだ、妖怪じゃないか。

「湾岸事務所に行ったことはないんすか？」

いや、と双葉照彦は首を振った。

「本社に情報を持って帰られる前にスタンドを使うつもりだったのだ……」 口振りからして本人しか知らないようだったから」

「あー、そうっすか」

あの事務所を見る限り、情報共有ができるタイプのスタンド使用のようだから無駄だっただろうなと仗助はぼんやり思う。本当に目の前のおっさんは他にスタンド使いに会ったことがなかったのだ。初めてあったと認識したのが帆波奈帆子、そして吉良吉影。なんとも運が悪い男である。

（胸くそわりいけど…… 双葉さんの父親だし…… 何度も殺されかけてるみてーだし…… 今回は見逃してやるぜ）

もし次があつたらただじゃあおかないと胸に秘めながら仗助は帆波奈帆子についての情報を集めていく。とりあえず家族に連絡される悲劇は回避されたのだった。

交渉

陽のさしている明るい教室で熟睡すると、はっと目覚めたとき一瞬どこにいるのかわからない。さつきフェードアウトしていったのもまったく同じ音量で話し続ける教師の声に気づく。

一斉に動きだす空気がすでにそわそわしている。ペンケースに反射した光が天井に踊っていて、あと十分後のチャイムをみんなが心待ちにしている。

テストを一週間後に控え、すべての授業がテスト範囲を暗に伝えるまとめ期間となる。部活動や委員会が休みになり、最後の授業が終わったら先生は早く帰れと生徒に発破をかけるのだ。予鈴が鳴り響いた途端に、生徒達の廊下を歩く騒がしい音と声が、帆波の打たれた頬の火照りにひりつくようにひびいてくる。

「また派手にやられたな」

「ジヨルノ君……」

「帰ろう、志帆」

「あ、」

僕がカバンを取り上げてしまうと帆波は諦めたように笑うのだ。ありがたい、と小さな声で呟きながら。

ラッシュ時の駅のホームのように学生がひしめく廊下を通り、昼ご飯の時間がすぐですぐの並に浮かれている教室を横切り、誰かのお弁当の具だった酢豚の匂いと暖かい陽気がこもっている踊り場を抜ける。どの教室の中は、蜂の巣をつついたような騒音に満たされていた。話せるところを探しているのだが見当たらない。

開いた窓から飛び込んでくる子供たちの叫び声。サッカーボールが蹴られる音。野球のバットがソフトボールを打つ音。何かを訴える下級生の女の子の甲高い叫び声。リコーダーがたどたどしく『庭の千草』を合奏練習している。帰れと言われているのに素直に聞くのは小学生までである。よくあることだ。

理科室の水槽の磯臭いにおいを乗せた窓からの風に辟易としながら、僕は帆波と中庭に出た。

「またいじめられてやってるのか？」

帆波は凶暴な笑みを浮かべる。

「あの子ってば授業の合間の十分休憩が一番の苦痛で、喧騒の教室の中、肺の半分くらいしか空気を吸い込めない、肩から固まっていくような圧迫感にいるのが好きなのよ。自分の席に座ったまま、クラスの子たちがはしゃいで話をしている横で、まるで興味が無いのに、次の授業の教科書を開いてみたりして。この世で一番長い十分間の休憩。自分の席から動けずに、無表情のままちよつとずつ死んでいく自分を、とてもリアルに想像できるっていうの。死ぬもしいクセに」

「そんな環境に追いやってるのは、あんたの生前の噂と交代時にやってる報復だろ」

「あら、それこそ卵が先か鶏が先かって話になるわよ、ジヨルノ君」

帆波夏帆は鼻で笑うのだ。

こちらからは校舎がコンクリートの直方体をいくつか？げたような形で、その窓に学生服の生徒たちがうろついているのが見える。

鉄筋コンクリート三階建ての校舎と体育館、下駄箱とうさぎの飼育小屋がある、ありふれた中学校の中庭に中学二年生の男女が2人だけだった。

誰もが甘酸っぱい青い春を想像するだろうが、僕と帆波夏帆に関してはありえない関係性と断言出来る。

中庭というのはその位置関係上、さまざまな音の吹き溜まりだった。音楽室からは縦笛とオルガンの合奏、校庭からは駆け足とホイッスル、海からは微かな汽笛、あらゆる音が聞こえてくる。

ざわめきはまるで空間を埋めつくすように、学校中を満たしている。生徒たちはまるでその 30 分に1日中の自由が詰め込まれているみたいに、一生懸命楽しんでるように思えた。笑い声ははじけ、エネルギーが爆発していた。見上げるとはるかに青い夏空があった。光と影が街を渡ってゆくまぶしい放課後だ。

程遠い会話を僕は今まさにしようとしているのだ。

「そろそろだとは思っていたわ、お母さんがイライラしていたから」

平然と夏帆は僕の考えていることを看破する。20年間も14歳

を続けているのだ、誰よりも中学生が考えうる知識や思考は溜まりに溜まって直感にも似た確信を導き出しているらしい。

それは算盤で弾き出すようにきちんと計画を立てるよりも簡単なのだろう。だから僕はその惰性と虚無から脱却させるためにも、血が逆流して肉が痙攣を起こすほど、大冒険小説の魅力を感じさせるような世迷言話さなければならぬ。

僕は膳は急げとばかりに支度に取りかかる。ぼろを出さないだけの周到な用意はするだけ無駄だ。観察眼は誰よりも秀でているだろうし。成功が危ういほどずさんな計画の方が返って成功する。

帆波家はどのあたりまでが周到で、どのあたりからがやり過ぎになるかを心得ている。ジエイ・ギャツビーの図書室と同じだ。本物の書物は揃える。しかしペー지를切ることまではしない。自分の周囲のあらゆる隅ずみに腐蝕菌のように食いこみ工作し、味方を拡大してきたのだ。可能性と選択肢を頭の中で整理することにかけては一流だと言っている。

計画とも言えないような漠然としたやり方ではあるが、僕は話し始めた。時計の秒針を計っているように、計画的に時を図ってくると考えていたようで、夏帆は不思議そうな顔をしている。

「ずっと考えていたんだ。どうしてこの町でずっと身を隠すように暮らしてきたあんた達がいきなり吉良吉影に味方したのか。双葉照彦みたいに脅されてるわけでもなさそうだし、本体さえ守りきればあんた達は死なない。数で押せる。もしかしてあんた、吉良吉影が好きだったんじゃないか？」

「……は？なんですって？わたしが？吉良君を？」

「やっぱりそうだ。あんた、本当は35歳だっていうじゃあないか。中学生の時なら33歳の吉良吉影の2歳先輩だ。面識があつてもおかしくはない」

「……まっつて、まっつて頂戴よ、いきなり何。なんだっていきなり工藤新一から家族がかかわらないときの毛利小五郎になるのよ、シヨルノ君。熱中症にでもかかったの？」

「バレたからって誤魔化さなくてもいいんだぞ」

「あのねえ、どういふつもりか知らないけれど、わたしが男という生き物が虫唾が走るほど嫌いになっっている事実を無視するんじゃないわよ。からかっていいるのね？わたしがどんな男性遍歴があるか調べ尽くしているクセに」

睨みつける夏帆に僕はホツとした。

「いきなり何よ」

「いや、よかったと思って」

「だから何が」

「帆波志帆を人質に取られているんじゃないかと危惧していたんだ、僕は。もしそうなら君は心底吐き気がしたとしても好きだと嘘をつくはずだ。君じゃあ吉良吉影には勝てないからな」

「そうね、負けもしないけれど。死体を抹殺されちゃうから実体を保てなくなるだけで」

「でも帆波志帆を続けられなくなると困るから黙認している」

「そうね、否定しないわ」

あつけらかんと帆波夏帆はいい放つ。帆波志帆の連続した普通の人間としての生活を確保するために生まれたスタンドだけあって、帆波志帆にしか興味が無いとみえる。もちろん家族としての情もあることから、この交渉はタダでは終わらないだろうけれど。

「わたしから情報を引き出したいのなら、相応のものを持って来るべきよ」

「もちろん、持ってきたさ」

「ほんとうに？」

「それはあとで説明する。まずは僕からの要求を伝える」

「いいわよ。妥協点を見出すためにも戸口は拾いにこしたことはないものね」

僕は口火を切った。

僕達の目的はあくまでも吉良吉影の確保とスタンドの矢の回収もしくは破壊だ。帆波一家に手出しはしない。静の母親のこともあるし、杉本鈴美一家のこともあるし、この町に凶悪な殺人鬼を放置することは絶対に譲れない。スタンドの矢も吉良吉影がこちら側を妨害

するため仲間を増やしつづけているから、そちらに預けるといふ選択肢は初めからない。

夏帆はふうんとだけ言った。

「今の時点でなにひとつ譲渡できることは無いわね」

そしてせせら笑った。

「帆波志帆はいつ目覚めるんだ？」

「そうねエ……この姿になったのが6月下旬だったから、あと2、3週間でどこかしら」

「つまり夏休みに入ってしまう」

「そう。あなたがもう転校してしまった後に目覚めるのよ、可哀想に」

「そのあったかもしれない最後の邂逅を握りつぶしたのはあんだ、帆波夏帆」

「そうね、その通りだわ。あの子だったらいくら言ってもやめないものだから。カセットテープなんて嫌がらせもしてみたのにムキになったのか、珍しく折れないものだから久しぶりにイライラしちゃったのよ」

「相変わらず身勝手な女の子だな、あんだ」

「そうよ、それがなにか？」

帆波夏帆は笑うのだ。

「ああ、志帆にお願いするの？いい考えね、あの子なら吉良吉影なんて恐ろしいやつが家に入出入りするの耐えられないもの」

「いや、それはない」

「どうして？」

「志帆さんが起きている時、あんたは休眠期に入るんだろう？志帆さんは岩になれるし再生もできるが、不死じゃあない」

「それもそうね」

「男嫌いなあんたのことだ、とつくの昔に吉良吉影の排除にかかって失敗したんだろう？痛み分けてところか？」

「あのねエ……デリカシーがないって言われない？デート中にはあの男の話ばかりするなんてどうかしてるわ」

おかしそうに夏帆は笑うのだ。どうやら当たっているようだ。

「で？何がお望みなのかしら？お互いに譲るところはないから細かいところを調整して、話し合いはまとまったらって声明を発表しなくちゃあいけないわ」

「そうだな、埒が明かない。僕達は近々吉良吉影が匿われてると思われる電波塔の山に登ろうと思ってる。監視カメラや電子柵が張り巡らされているから、このままじゃ入れない。どちらか切ってくれないか」

瞬き数回、弾かれたように帆波夏帆は笑うのだ。

「ふふっ……ふふふっ……いつそのこと清々しいまでの死刑宣告じゃないのよ。あなたね……それが、あなたに惚れてる女への頼み事だなんてひどいわね。目が覚めたらきつとあの子は泣くわ。わたしがまた死んじやったってね。優しい子だから」

「わかってる。でも、あんたは僕の企みに乗るはずだ、帆波夏帆」

「あら。どうしてそう思うの？」

「僕があんた達の奇病を治すからだ」

「は？」

正気なのか、と帆波夏帆は聞いてくる。僕の発言の意味を捉えかねて戸惑っているようだ。本気で熱中症にでもかかったんじゃあないかと心配までし始めた。さつき柄にもなく冗談まで言うしとばかりに。失礼な話である。

僕の頭はおかしくなってるんじゃない。思考は新しい鉄釘のように硬く、冷徹でまっすぐだ。それは現実の芯に向けて正しい角度で的確に打ち込まれている。僕自身には何の問題もない。ちゃんと正気を保っている。

僕は事実を言っているのだ。実績はある。だからこそ言える未来もあるのだ。

「君は呪いと言ったが、隕石のウィルスに感染した奇病だとも言っていた。正真正銘の呪いなら僕にはどうにもならないが、君から聞く限り病だと僕は思った。だから治せる」

「根拠は？」

「僕のスタンドはこの9ヶ月で急成長している。理由は色々あるが特

に治癒力が飛躍的に向上している。スタンドを溶かす毒から抗体を、四大毒蛇の血清を、即座に生成しているんだ。その病を完全に理解できれば抗体を作ることが出来る」

帆波夏帆は目を見開いた。考えたこともなかったらしい。

「提案なんだが、スピードワゴン財団に診察してもらったらどうだろう？そしてそのカルテを僕が見る」

「まるで医者 of 真似事ね」

「正確に把握しないとんでもないことになるのは身をもって知ったからな」

「ああ…… スイセンとニラを間違えたっていうアレね」

「そう、アレだ」

「どうしてそこまでしてくれる訳？あなたにそこまでされる理由が見当たらないんだけど」

「気が変わったんだ。僕には腹違いの弟たちがアメリカにいるんだが、吉良吉影の行方を探すために一人来日した」

夏帆の眼光が鋭くなる。

「…… 姉の気持ちがあんの少しだけわかったってことかしら」

「そんなんじゃない。僕が気に入らないと思ったからだ。あんた達は諦めた目をしている。運命は乗り越えられないって顔をしている。帆波志帆のために吉良吉影を排除しようとかさえるあんたまでもがだ。神が運命を決めたってんなら神と等しく創られたはずの人間がなんだって乗り越えられないんだ？それは神への冒瀆だ。神が乗り越えられないも同じじゃないか」

「キリスト教系の児童養護施設で来月には暮らすことになる人間とは思えない発言ね」

「だから僕はゴールド・エクスペリエンスは発現したんだ」

「ふうん…… そう。わたしが嘘をつくって考えはないわけね？」

「ないね」

「でもそれはジョルノ君にとってデメリットが大きすぎやしないかしら。それはスピードワゴン財団と関わっていくと宣言したようなものよね。外部の人間に診察結果を見せるような不手際をするとは思

えないもの。これから不自由な生活が目に見えているというのに」

僕は心外だと睨め付けた。

「そんなこと些細な問題だ。僕は納得したいだけ……それだけだ。それ以上でもそれ以下でもない。時として納得は全てに優先する。少なくともあんたは、でないと前に進めない。前にも後ろにも、どこにもだ。これからの道さえ探す事ができない。僕は解決する力がある。ならば使うべきだと思っただけだ」

帆波夏帆はじいっと僕を見つめる。たしかにいつもなら手の内のカードを全部さらすのは僕のやり方ではない。小さな数の札はちらりと見せてもいい。しかし大きな数のカードはしっかり伏せておく。そして何ごとにも保険というものが必要になる。それでもたまには大勝負に出ないといけないこともあるのだ。

「口だけじゃあ、ないでしょうね？」

帆波夏帆は僕の真意を探ろうとしている。当然だ、僕は帆波夏帆に父親や母親、1度はその存在を黙認した吉良吉影を裏切れと唆しているのだ。万が一のことがあれば帆波志帆は残り数週間を非常に無防備な形で過ごすことになる。もちろん帆波志帆という存在さえ一時的になくなるのだから、スタンドとして生み出された理由の全否定だ。

「わたしがいなくなったら、誰が志帆を守るのよ」

「守るさ、僕が」

「ほんとうに？」

「ああ」

「一学期しかいないくせに？」

「充分だ。その3週間さえ守り切れれば社王町に平穏が訪れて帆波志帆は目覚めて、君は実体を取り戻し休眠期に入ることが出来る。治療のための診断が始まり、なんらかの影響を受けた君がまた30日後に目覚める」

「清々しいほどの仮定の嵐ね」

「出来るとわかっているなら願望じゃあない」

僕の言葉にふうんと夏帆はいう。

「2学期にはいなくなる癖にねえ」

「外の世界をいろいろいい機会だ」

「こいつって?」

「そう」

帆波夏帆は窓を見る。いじめっ子のひとりがいたからだ。

いつも休み時間は帆波志帆をちらちら見ながらいじめの主犯と大声で笑っていた少女が、今では、机の上で、シャープペンシルを必死に弄くりまわして、教室の音が届かない場所へ行こうとしているのを見たことがある。部活の中心的存在が突然行方不明になったらどうもなる。

僕と帆波夏帆を見て、目を見開いて数歩後ずさり、去っていった。

「ここを選んだのはこのため?」

「だとしたら?」

「だったら他の子に目撃してもらわなきゃあいけないわ。あの子のわたしに対する嫌がらせは、とても静かなものだった。口をきいてもらえないだけで、それ以上の嫌がらせをされることはないんだもの」

「それでもここだけの話が翌日には誰もが知っている」

「ああ、それもそうね」

帆波夏帆は明日からの予行練習を話し始めた。朝は、なるべくぎりに登校して、朝の会の直前に教室に入って席に座る。休み時間になると席を立ち、校舎の中を歩いて時間を潰す。授業の合間の十分休みは、新校舎を一周。

四十分ある昼休みは、新校舎と旧校舎を二周ずつ回って、トイレに三力所立ち寄ると終わる。規則正しくそうして歩き回りながら、休み時間を過ごす。弁当の時間は、誰もいない、屋上へ続く封鎖されたガラス戸の前の階段の踊り場で、すばやく終える。

それでも時折吐き捨てられる「死ぬ」「きもい」という言葉だけが、しんしんと、教室や廊下から降ってくる。

その言葉は帆波夏帆には微塵も振りかからない。その無駄な言葉たちと、無視という沈黙。されるのはそれだけで、何かとからかわれて標的にされているわけではない。

そう、夏帆は日常を口にした。

「外の世界を知るんだ。枠から外れてみると、学校は随分と静かな世界だってわかる。あんなに賑やかだった休み時間の騒ぎ声も、テレビの砂嵐のような意味のない雑音に変わる。騒がしくてあわたましい教室の中で、時間だけが、やけにゆっくりと流れていくんだ」

「だからそんなにつまらなさそうな顔をしているってわけ？」

「もともと僕はこんな顔だ」

「あなたってわたしに適当に調子をあわせてつきあっているけど、基本的に話は合わないわよね。同じ極の磁石が反発し合っているような距離感を感じるわ」

「君とに関しては確かにそう思う」

「失礼ね」

「事実だろ」

僕らの間には薄い膜が張られている。笑顔や絡まる視線などでちよつとずつ張られていく膜だ。膜は薄くて透けているのにゴム製で、恐る恐る手を伸ばすと、やさしい弾力で押し返す。多分無意識のうちに。そしてそんなふうに押し返された後の方が、誰ともしやべらなかつた時よりも、より完璧に距離がでる。何か紙一重距へだてたような、妙な心の触れ合いだ。

「でも今の方が楽だわ、志帆って呼ばれてる時の対応よりは」

「君たちが帆波志帆の連続性を望んでるんだから受け入れるべきじゃあないのか？」

「めんどくさくなっただけでしょう？」

「あんたにどうして志帆さんと同じ対応をしなくちゃいけないんだ？」

僕の言葉に帆波夏帆は笑うのだ。

「変わったわよね、ジヨルノ君」

前まで僕は居心地の悪さを抑制するために、自分の中のある種の領域をうまく囲い込んでいた。別の言い方をするなら、心の部屋のいくつかをしっかりと閉め切っていた。その努力をやめるといいいたいらしい。それをやめた方が楽で、それが出来る環境が出来上がって

るからだろう。

僕は何も知らなかったのだ。家族について何も知らないし、これからもきつと理解できない。大切なものを一つ、なくしたような気がようやくしているありさまだ。もう10年も前のことだ。説明のつかない喪失感に涙ぐむような年齢ではなくなった。それでも遠いと感じる。そして、ちよつぱり寂しいと思っている。

帆波夏帆に僕を見た気がしたってのが大きいのかもしれない。絶対に言わないが。

「ふふっ……ふふふっ……いいわよ。わかったわ。あなたがおかれてる立場がすこぶる悪化するかもしれないのに、わざわざわたしに頼ろうっていう賭け。悪い気はしないわね。その賭けに乗ってあげるわ。志帆を守るって約束、忘れないで頂戴よ」

茫然と僕は受話器の前で立ち尽くしていた。口の中はからからに乾き、胃の腑がひっくり返ってしまいそうな吐き気に襲われていたが、辛うじて声は出せた。

しかし、足が動かなかった。動こうとしてくれなかった。背負うものの中に、大事な人が増えた。その重みが、足を鈍らせていた。「……なにを混乱してるんだ、僕は」

何もかもを守るつもりなど無い。それほど強いと嘯けない。その青さは、遙か昔に失った。絶望することは簡単だ。投げ出すことはより容易い。信じがたい、信じたくない現実に、揺らぐ心は今にも折れそうに危うく傾いている。

「わかっていたことじゃあないか……わかっていながら……僕は帆波夏帆に頼んだんだ」

だが、こんな僕にも守りたいものがある。守りたいひとがいる。折れるわけにはいかない理由がある。

僕はどうかあがいても汐華初流乃でしかない。

帆波家の帆波志帆がいる倉庫に向かうと血だまりがあった。帆波

夏帆は遺体から生成されるスタンドだ。肉片がなくなれば実体がなくなる。踏み込んだ際に付着した血の足跡によるところもあつたが、何より彼女の死がそこにはあつた。

「ゴールド・エクスペリエンス」

僕はその血しぶきから肉体を生成する。腕、足、胴体、頭、色々とつくっていくと一定量を超えたあたりから見覚えがある膜が張っていることに気がついた。

彼女を殺害してこちらを苦しめようということなら、反吐を吐き捨てたいくらい苛立たしく頭にくるが、意図としては読める。

だから僕は帆波夏帆に実体たるものを提供してやるのだ。

「やはり慣れるもんじゃあないわね……内側から弾け飛ぶのは嫌いだわ」

彼女は怯える様子もなく言つてのけるのだ。

これから起こることが彼女にとっての絶望に他ならなくとも、僕はこの理不尽な殺人鬼たちによる攻撃を破壊をするために、一步を踏み出す決意を既に固めていた。

何が起こつたのかすら全く理解できていないだろう彼女は、黒目がちな目をさらにきゆうと丸くして、茫然と僕を見上げていた。

「どうやったの?」

「僕は体のパーツを作れる」

「ふはっ、はははっ! そんなのありなの? やんなっちゃうわね!」

絶句を通り過ぎて変な笑いが浮かんできたようだ。

「傍から見たら瞬間移動ね!」

帆波夏帆は猟奇的にいうのだ。

「残機があるなら言いなさいよ、初めから!」

「これから治すつてのにこれ以上人外化してどうするんだ」

「なによ、へんなどころで義理堅いのね、あんた」

ふは、と帆波夏帆は笑った。

そして僕は帆波夏帆と共にこっそり手配したスピードワゴン財団の車に帆波志帆の彫刻を運び込む。

「豪快な誘拐だこと。志帆も驚いて腰抜かすわね」

そして車は社王グランドホテルに運ばれる。待っていた空条さんたちに僕はこれまでの経緯を説明するのだった。

「君が帆波夏帆君か」

「そういうあなたが空条承太郎ね、初めまして」

「DIOの協力者の情報提供か？」

「だてに21年同じ姿で生きていないのよ。あなたが知らなかっただけで近くの中学にいたこともあったわ」

「そうか」

空条さんは冷やかな目で帆波夏帆を見据えている。さながら、実験動物でもみるような冷徹な視線だ。臆することなく彼女は笑う。

「類は友を呼ぶってのはどうやら本当らしいな」

ボソリと呟きながら僕を見るのはやめて欲しいものである。

たしかに帆波夏帆にはただ年を重ねただけとは到底思えない、熟練した戦士の凄味を感じさせる。何より、人を殺したことがある人間だけが持つ不穏な気配。ビリビリと肌を粟立たせる容赦のない殺気があるのだ。

「……君も無茶をする」

「ジョルノ君がそれだけ交渉上手だったのよ」

夏帆はあつけらかなといい放つのだ。空条さんはじつと僕を見つめていた。日本人らしからぬ深いエメラルドグリーンの、凧の海を思わせる眼差し。恐らく、不器用な男の精一杯の気遣いなのだろう。僕は笑うだけだ。空条さんは舌打ちした。

怒りの火が消えない。それどころか怒りの発作にとらわれ、激しい波のように全身に広がる。腹の底をぐらぐらさせる。あらゆる感情が体の中に突き上げてくるのを感じる。激しい憤りが頭の中で渦を巻き、言いようのない衝動で体が震えた。

すべてを忘れて怒りの青白い光に全身を染めたこの瞬間を決して忘れてはならない。全身の皮膚を破るような血が立った。怒りでもらだが膨張するような、この激高だけは決して。

「なんで相談しなかったんだよ、ジョルノ」

言葉を鞭のようにしならせ、興奮から怒っているような調子で仗助先輩は言う。露骨な議論口調で僕に切り込み、ナイフでも突き刺すような言葉の調子で言う。

「帆波夏帆との約束だからですよ。帆波志帆という人間の普通の生活を保証するためだ」

「どうみてもわかりきっていたことだろう！吉良吉影がどんな事しちまうのかなんて！」

激しい語調を浴びせる仗助先輩から叩きつける様な口調が飛んでくる。

きつい目をしている気の張った厳しい口ぶりだ。荒っぽい言葉遣いで感情をむき出しにして話す。咎めるような、まわりがしんとなつてしまふような荒々しい言い方だ。

「仗助」

静かだが、人に口を開かせないような厳しさのある言葉だ。言葉の調子が、槍の穂先のような鋭さで胸許を深く突き刺して来る。

「康一くん、億泰もだ。落ち着け」

空条さんが頭ごなしに話すに連れて、仗助先輩たちの顔が特殊な赤銅色の輝きを帯びていくのを僕は目にした。それに連れていつもの冷静で上品な印象は薄れ、どこかに消えていった。そこには単なる怒りや嫌悪感を超えた何かがかがえた。

それはおそらく精神のいちばん深いところにある、硬く小さく、そして名前を持たない核のようなものだ。今までの積み重なった不愉快が一時に爆発し、洪河の決潰する勢いをもって暗雲に喰つてかかった。

「すこし黙れ」

それはすこしも大声ではないのに、ぴしりと僕たちの声をせき止めてしまう。両手を腰にやって、子どもを叱りつけるように言うのだ。「わたしがやるっていったのよ、心配しないで頂戴。わたしは志帆さえ無事なら不死身なのよ」

夏帆は話し始める。監視カメラの時間、電子柵のサイクル。管理している人の名前。奇病を治してもらう条件として受け入れた本拠地

の内部事情。そして吉良吉影が潜伏していると思われる場所。今、電器屋の経理として紛れ込んでいる殺人鬼は、やはり鉄塔の山に住んでいるようだ。

「今、父さんは休眠期なのよ。わたしと違って代わりになる人間を何人も雇って「礁」と名乗らせているわ」

「なるほど」

「わけアリの連中を雇ってるってわけか」

僕達は気合をいれる。決戦は迫っていた。

ザ・ブック・オブ・ソウル

現在時刻は西暦1999年7月20日、7時00分39秒（日本時間）。

38秒前、ジヨルノたちが吉良吉影の家に向かった。社王グランドホテルにて待機。

37秒前、ジヨルノに声をかけると行ってきますと言われる。

36秒前、ジヨルノたちの話を聞く。

35秒前、——話を聞く。

34秒前、——聞く。

「ここが1番最初か」

琢馬は一気にページをめくった。そして。

1999年7月20日、7時59分38秒（日本時間）ジヨルノたちが吉良吉影の家に向かった。社王グランドホテルにて待機。

全く同じ記述を見つけた琢馬は冷や汗が浮かんだ。何度読み返しても、読み返しても、最初に見つけた記述から延々と同じ日の同じ出来事を繰り返している。異常だ。今まで見たことがないパターンである。

琢馬に自覚はない。なのにこのスタンドには記述がある。魂に刻まれた記憶を本は覚えている。精神たるスタンドは知覚できている。つまりここにある記述は間違いなく真実である。たたり、と汗が滲む。

「……なにが起こっているんだ？」

今、この瞬間にも間違いなく同じことをこのホテルにいる全ての間が繰り返しているのだ。気づいていないだけで、気づいてしまっただけで、琢馬のおかれている状況は一変した。知らないだけで瞬きをする暇もないその一瞬で、激変したのだ。

先に読むだことが起こる度に琢馬は未来を示す日記帳と化したことを悟るのだ。

胸ポケットに差した万年筆も、内ポケットに仕込んだスロージン

ナイフも、左手首に付けてあった腕時計も、なにもかもがいつもと同じだ。そのままだ。それなのに、それが今、無性に恐ろしくてたまらないのである。琢馬の長い人生を綴ったこの本には、本にだけは今回のような異常な事態はたしかに記録されている。あったのは間違いないのだ。

読み返すだけで、気分が悪くなりそうな記憶だ。最近比重が増えすぎてきた禁止区域に指定した方がいいかもしれない。誰かに読ませれば、立ち眩みを起こさせることくらいできるかもしれないと、琢馬は考えた。

辺りの景色を見渡す。いつもの社王グランドホテルだ。

「……」

法則があるとすれば、明日また同じ日がやってくるはずだ。琢馬は時計を見た。

異様に一日が長く感じた。本を手放したらおかしさが知覚できなくなることは明白で、ずっと出しっぱなしにしていた。結局その日、ジヨルノ達は今までの本の記述のように帰っては来なかった。

そして琢馬はジヨルノ達になにかあったかもしれないから双葉親子が心配だ、待ちたいとスタッフに申し出た。了解を得てホテルに泊まった。

翌日。

琢馬は一人暮らしをしているアパートで目を覚ました。本を開いたまま寝ていた。血の気が引いた。タクシーを呼んで社王グランドホテルに向かい、双葉親子が昨日と同じように朝食をとっているところに出くわした。同じような会話をして、ジヨルノ達が降りてくるのを待っていた。作戦会議をしているためだ。琢馬は望んで部外者でいたから入れないのである。

現在時刻は西暦1999年7月20日、8時00分39秒（日本時間）

1日繰り返す事に1分遅くなっている。

「こんな所にいたんですね、琢馬」

琢馬はぶわっと汗が吹き出すのを感じた。

「ジヨルノ……………」

琢馬は恐ろしくて本を手放すことが出来なかった。ジヨルノは何回目かわからない繰り返しを知覚できないらしい。

「どうしたんです？ひどい顔だ」

「……………」

汗が止まらない。

「ひとつ相談があるんだが」

「なんです？」

訝しげなジヨルノに琢馬は本のページを破いて渡した。説明するのが難しかったのだ。一寸の狂いもなく伝えるには今まさに更新中のページを読んでもらうに限る。

「……………」

自動生成されたページがなにこともなかったかのように補填される。ジヨルノは目を通す。

「……………?!」

目を見開く。

「これは一体……………」

琢馬と同じように汗をかき、青ざめている。

「俺は待っていたからな。こいつは蓮見琢馬の記憶しか記述しない。だから俺はお前がすでに60回帰って来なかったという事実しかわからない。今から行くってなら時間があまりにも足りない。こいつをやるからツバメにして寄越せ、ジヨルノ」

琢馬はメモ帳を渡した。

「……………ありがとうございます。このメモ帳、空条さんたちに見せても？」

「ああ」

琢馬はこちらの様子を伺っている人間を見つめる。いつも空条承太郎と岸边露伴とジヨルノしかいない。現地集合なのかと思ったが、1番最初と比べて1時間も遅くなっているのにどういうことか気になった。

「なぜほかの連中はいないんだ？」

「家族に捕まったとか、目覚ましが電池切れだったとかで遅れるそんな現地集合する予定なんですよ。ほんとは7時集合だったんだけど」

「……大丈夫なのか」

「うん、大丈夫だ。吉良吉影が一礫電器に出勤したあと侵入するからな。帆波夏帆の口利きで管理してる男が手引きする段取りなんですよ」

「信用できるのか、そいつは」

「さすがに初対面じゃあないですよ、こんな大事な時に。あの男は信用できます。僕が保証する。帆波家の奇病を治す約束があると言ったら喜んでくれた、いい人だったからな」

「帆波親子を可哀想に思っただけで雇われてたやつなのか」

「そういうことです」

「だが、お前は60回も帰ってこれなかったんだ。気をつけろよ。お前だけじゃあない。色んなやつが行ってるはずなのに、1回も帰って来ちゃあいないんだからな。はつきりいつて異常だ」

「……そうですね…… たしかにそうだ。教えてくれてありがとう、琢馬。なにが起こっているかはわかりませんが、用心するにこしたことはありませんよね」

琢馬は空条承太郎に呼ばれて走り去るジョルノを見届けた。その日もジョルノ達は帰って来なかった。

「…… 鉄塔に住む男、スーパーフライ、電波を食うサボテン、電波を食う虫、そして帆波奈帆子、休眠中の一礫…… 吉良吉影…… あと2日……」

何枚にも及ぶメモ帳を余すことなく見つめて記憶する。

「なにが2日なんだ……？ 一体なにが……」

最後のメモには「あと2日」とだけ書いてある。血がついているメモ用紙を握りしめ、琢馬は唇を噛んだ。命の危険が迫りながら、直前まで琢馬に情報提供をするためにジョルノが必死で繋いだスタンドが傍らにいるはずだった。琢馬がメモを受け取って送り返そうとしたら白紙に戻ってしまったのだ。スタンドが問答無用で解除された

ということとは、それはすなわちジョルノの死を意味する。ジョルノは琢馬に賭けたのだ。

丸一日をジョルノからメモをうけとることに費やした琢馬の心に起こった微妙な選択の波、幾千もの思いに満ちた決断の断層。それはこの手元にある本を読むことでしか他者は理解することは出来ない。琢馬の心の奥底に潜む嘆きや叫び、ひらめき、錯綜。乱れる親切と意地悪、それよりももっと深い親切と意地悪、いろんなものが混じり合って動きがたくなりひとつにかたむいた。

琢馬は息を吐いた。

「これは卒業試験のようなものだとかんがえておく。ジョルノたちが帰ってきた日は、母の復讐が終わる日だ。本来なら双葉照彦は交際すら反対する理由を千帆に話しているはずだからな。こんな状況だから言い出せないだけだ。本来なら明日から真の意味で俺の人生はスタートする。だが、その明日が来ないんじゃないか、まあいいだろう」

今ここではつきり決めた方が、時間や手間の無駄が省けるとばかりに琢馬は心を決めた。決意が固まり、その足取りはしっかりと地に着いている。無意識のうちにならずかに顎をあげて琢馬は微笑していたが、そこには決意した人間がみせる妙な冷たさがあった。

「これから戦いが始まる。準備はいいか、THE BOOK」

琢馬はスタンド使いたちの個人情報を手に入れるため立ち上がったのだった。

朝陽が昇りカーテンの隙間から部屋に向かって一筋の光が射した。琢馬は飛び起きる。いつもはないはずの本が手元にあることに驚き、最新のページを読むことから一日が始まる。自分が洞窟の突き当たりにある、ぬれた手触りのコンクリートの壁にタッチし、あとは来た道に戻るしかないことに気がつくのだ。そして来た道に戻る、全力で戻ろうと決心した。

ダークブラウンの表紙を持つ、古びた本のスタンドにはいつの間にかThe Bookというタイトルが示されていた。

この世に「自分」という存在が生まれる前から、本体が見たり聞い

たりした出来事を全て記録しているこの本は、本体が意識して聞く聞かないに関わらず、出来事は史実のように全てが自動的に記録される。厚さは文庫本程度だが、どれだけめくっても裏表紙に辿り着くとはなく、これから経験していく事柄のページがまっしろに続くのみである。

そして、本に書かれた記憶を他人に見せることで、その人物に本に書かれた経験と全く同じ状態に陥らせることができる。

交通事故に遭ったという記憶を読ませれば、相手は車に轢かれたように重傷を負い、インフルエンザにかかった記憶を読ませれば、相手は一瞬にしてその症状にかかる。

この能力にかかると記憶さえも改竄され、標的は自分の身体に現れた異変をその記憶のとおりに考えてしまう。

ただしこの能力は本体である琢馬にも及んでしまう。

だから琢馬は電話をかけるのだ。

「もしもし、東方仗助君のご自宅ですか。俺、いや僕は蓮見琢馬、高校の先輩なんですけど……」

電波虫1

明るい横日で山肌が紫色に輝く。若葉の山腹が陽の光を受けて、野の只中に金屏風を立てたように見える。何日かつづいたやわらかな雨に夏のあいだほこりをすっかり洗い流された山肌は深く鮮やかな青みをたたえ、細長い雲が凍りつくような青い天頂にぴたりとはりついていた。空は高く、じつと見ていると目が痛くなるほどだった。

周囲の山を包み込むように雲が垂れ込める。山に、鳥の翼のように影を落とす雲の流れだ。全山雲にかかった山の景観は夏のさかりである。煙のような雲が山々の狭間を去来するちぎれ雲の影が山の日向を後から後から忙しげに通り過ぎるような日和だった。

牛が寝ているように奥深く豊かな形をしている山だ。海に向かつて開いた奥深い谷の真ん中をめがけて、牛がのさばりてたような格好をしている峰がみえる。山も、川も、おぼろに霞んで、ひとつにとけ合っている風景が、夢のように美しい。影絵のように向こうの白い山はだに影が映る。

その中でも歩いて登れる高さの山がある。それが鉄塔の山、今回の目的地にして一礫一の別邸であり、文字通り山の上に土地を購入して建物と巨大なアンテナ、送電線を立てている家だ。無線機もいろいろなものを収集し、綺麗に展示しているという。

骨組みの外形が四角錐の形状となっている、最も広く使われている四角い鉄塔が目印である。他にもいろんな高さのアンテナがあり、まるで研究所のようだった。

「これが監視カメラに、電柵、鉄柵か」

「監視カメラは切ってくれているはずですね」

チエーンを乗り越えれば車用に整備された坂道が続いている。

以前、帆波夏帆の紹介で知り合ったばかりの鋼田一を名乗った男はチエーンを外してくれた。掴み処のない飄々とした態度で、一人称は「わたし」。鋼田一豊大という名前は偽名であるとわざわざ申告してくれた。犯罪者なのかと思ったが、どうやら単なる恥ずかしがり屋らしい。

紛らわしいと空条さんが苦い顔をしたのはここだけの話だ。どのみち一見素顔に見える顔もマスクであり、素性の多くが謎に包まれている奇妙な人間である。岩人間に雇われているんだからまともなわけないんだろうけれども。

見る限り長い鉄塔生活で手のひらにあるタコが異常に発達している様々な道具代わりに使うほか、カッターなどの道具も仕込んであったりと、完全に鉄塔生活に適応させていた。

なんでも憶病で引っ込み思案、人付き合いが嫌いな性格らしく、昔から計画通りに事を運んだためしがない、狭い鉄塔内でもこうなの以外の世界なんか恐ろしくて、このまま一生を鉄塔の中で過ごしたかったから格好の雇い先だったという。

鋼田一はもう3年はこの山に住んでいると自称した。山から下りてないだけなら1ヶ月。理由は「他人が嫌になったから」らしい。

人間社会をトランプのババ抜きに喩えており、「ババは自分以外の誰かに持たせればいい」という持論を持っている。どうやら対人関係で相当に嫌な思いをした過去があると思われる。

帆波家に雇われながら、鉄塔で暮らしていたら、スタンド使いになってしまったとのこと。吉良吉影のスタンドの矢にいられた訳では無いらしい。鉄塔自体が昔、帆波家が電気を引くために使っていたが、今は太陽光により補えるようになったから、鋼田一の所有となった経緯があるらしい。

鉄塔には外観はそのままにきちんと生活できるようリフォームされている。

「……悪いことは言わないから近づかない方がいい。今は」「今は？」

鋼田一はうなずいた。

鋼田一豊大の説明によると、地上38メートルの屋上にはアースしており、雷が落ちてても大丈夫。鳥を捕まえるための罠も設置してある。物を上げ下げするリフトも設置。ワイヤーは電線を再利用したものらしい。

地上30メートル付近 にはソーラーシステム、貯水タンクを設

置。これでお湯も沸かせるしテレビも見れる。ソーラーはどっかの家からかつぱらってきたらしい。下には充電用のバッテリーを設置してあるので、曇りの日や夜でも大丈夫。貯水タンクの上には水をろ過する装置も設置しており、近くの川からも水を汲めるので水に困ることはまずない。この辺でウサギや魚などを干して保存食にしている。

地上25メートル付近　ここが生活の拠点。上の階にリビングルーム、下の階が台所。上の階にはテレビ、本が読めるスペースがあり、シャワー、水洗トイレも完備。水洗トイレのウ○コなどの汚物は下で栽培している野菜などの肥料として撒けるように設置してある。寝るときもここだが、落ちないように体と布団を鉄柱に縛って寝る。起きたらそのまま干せる。寝る時ぐらい下に降りればいいじゃんとか言っちゃダメ。

下の階には薪のコンロの台所、キュウリ、ナス、トマトなどを栽培している空中野菜畑がある。魚はリールを付けて釣り竿に改造したフライパンで、近くの川から釣る。釣って余った魚は干すか漬けて込んで魚醤を作っている。

この上下階には、雨の日や寒い日の対策に防水・防風シートも完備。これで3年も過ごせている事から、張り巡らせると結構温かいらしい。

地上0メートル　には野菜や山菜、キノコを栽培している。薪もこの辺から調達する。山菜はツククサ、ヤマウド、ヒメジョオン、オランダガラシなど。薬草も育てているが、もれなくウ○コが。山菜を食べにやってくるウサギを捕まえる罠も設置してある。

などなど、足場が悪い事を除けば生活設備は充分。そして鉄塔での生活はというと本人曰く、自給自足なので仕事をする必要が無いし、塔の中を移動するだけで運動不足にはならないらしい。

「住んでたなら、なんでいないんですか？」

「それが雇われてる契約だからなんだ。あの鉄塔はおひとり様だからな」

「おひとり様？」

「うん。だから近づくくんじゃあないぞ、吉良吉影を捕まえるのがお前達の目的なんだろう？」

わかった、というほかない。

どうして電気を引くためにわざわざ鉄塔をたてたのにやめてしまったのか。鉄塔に住むためにわざわざ岩人間に雇われてるはずなのに、今こうして出ている理由が気になるが、僕たちは先をいくことにした。

（…… 琢馬が言っていた電波を食うサボテン、電波を食う虫つてのはここにかんけいがあるのか……？）

僕は鋼田一に発現したスタンドについて聞いてみた。

「大丈夫、鉄塔に入らなきゃ無害だからな」

スーパーフライという鉄塔と同化したスタンドには、鉄塔の内部に捕らえた人間一人を閉じ込める能力があるという。見た目はまんま送電鉄塔である。物に取り付くスタンドなのか、それとも鉄塔がそのままスタンドなのかは不明であり、鋼田一にも制御しきれない所謂『一人歩きしているスタンド』で、中に一人しか居ない時に外に出ようとすると外に出た部分から体が鉄になってしまう。鉄塔が攻撃されると攻撃されたエネルギーをそのまま跳ね返し、いずれ元の攻撃してきた人の位置へ帰ってくる。

恐らくは台風などの自然災害も「攻撃」と見なされるものと思われる。

なお、本体が死んでもアヌビス神のように永遠にこの世に残り続けるとの事。

人付き合いで相当な心の傷を負っているらしいから、それが「他人を拒絶する」能力発動のきっかけになったのかもしれない。琢馬みたいなものだろうか。

スーパーフライに閉じ込めの効果がある以上、彼が今後生活していく上では第三者の協力が必要になってしまったわけだから、豊大としては願ったり叶ったりだろう。他人が嫌で鉄塔生活をしていたのが、他人を拒絶する能力を得たおかげで結果的に他人との距離を縮め

ることができたのは、ある意味では皮肉と言える。

「じゃあ、誰がスーパーフライの中にいるの？君がいるってことは、誰かがスーパーフライにいるんだよね？」

「そういやそうだなア」

「だからやめとけつてば、ちかづくんじやあない。好奇心で好き勝手動くつてんなら約束と違う。出てつてもらうぞ」

「康一先輩、億泰先輩、気持ちはわかりますが余計な詮索はやめてくださいね。不法侵入で捕まるのは僕達の方なんだから」

「そうそう、蓮見君のモーニングコールで遅刻を免れたんだから反省したまえよ。特にその鉄塔ばつかみてる東方仗助」

「や、やだなあ〜見てただけじゃないっすか、露伴センセ」

僕はため息をついたまま歩き出す。60回も失敗しているという事実を考えれば、僕はより多くの警戒をしなければならないのだ。単語しか遺言を残せなかった前の僕のためにも。

「サボテン屋敷といった方がいいんじゃないか？」

露伴先生はそうごちた。

「しかし、ほんとうなのか？塚馬君のスタンドは思い込ませるスタンドなんだろう？」

「そうですよ。本人の意志にかかわらず記録するんだ、実体験を」

「うーむ……じゃあこのサボテンが電波を食うサボテンになるのか？この古墳の輪郭に沿って敷き詰められてるハニワのように並ぶサボテンたちは」

「そうなりますね」

訝しげな露伴先生を知り目に、僕はサボテンを調べてみる。

「こいつはセレウスサボテンな」

「ネットで流行つてる胡散臭いサボテンか」

なんだろうそれと至極真つ当な反応をする康一先輩たちに僕は説明するのだ。なんの本で読んだかは思い出せないが。

セレウスサボテンは電磁波が吸収されてパソコンやテレビの前な

どに置いておくと目の疲れや頭痛に効果があると言われ売られている事がある眉唾物のサボテンだ。実際の効果は不明で、外国からこの事が伝わって売られるようになったらしい。

コンパクトな樹形が面白い柱サボテンの仲間で、トゲは柔らかく毛のようで触っても痛くない。育て方は普通のサボテンと同じだが、凍りそうな寒さに当たると葉が赤くなってしまうので、暖かい所で冬を越させた方がよい。

別名にセレウス・ペルヴィアヌス、セレウス・ペルービアナス。

「室内が向いてるのになんだって外に？」

「たしかにな」

とても日当たりを好むが真夏は日差しが強過ぎるので、木漏れ日が当たるような明るい日陰で育てるとよい。また、過湿を嫌うので戸外のものには長雨に当たらない所に置くようにする。室内では電磁波を吸収させようとパソコンやテレビなどの近くであまり明るくない所に置いてある事がある。あまり暗い所に置きっぱなしではいけない。1日1回、日当りのよい窓辺などに2、3時間日光浴させて育てるとよい。

しかし、真夏は日差しが強過ぎるのでレースカーテン越しの日光ぐらいでよい。冬の寒さには氷点下にならないければ越冬するぐらい耐寒性はある。水が多く寒さに当たると赤っぽくなるので、冬は室内の最低温度5度以上の所で管理しなければならぬ。

いつも土が湿ったような過湿だと根腐れするので注意が必要。春から秋の生育期は月に2、3回たつぷりと与え、11月から3月中旬頃までは月に1回ぐらいの水やりで、ほとんど与えない方がよい。4月から徐々に成長してきますので水やりを開始する。

2年に1回ぐらいは植え替えをする。鉢から抜いたら古い根などを取り除き、1週間ぐらい明るい日陰で乾かして植え付ける。行う時期は4月から5月頃が理想的。用土は多湿を嫌い根が弱いので多肉植物専用の培養土が売られているので、それを使用した方が安全。サ

ポテンの仲間ですが鋭いトゲはなく毛のように細いので、触っても刺さる心配はない。

増やし方は柱に子株が沢山発生するため、子株を取って根元が完全に乾くまで日陰で数日間から1週間ぐらい乾かし、多肉植物の培養土や川砂のような水はけのよい土の上に乗せるように軽く挿す。時期は4月から5月頃が理想的。

「ああ、そいつは本物だ」

空条さんの言葉に僕は目を見開いた。

何年も前から気になっていたのだが、電磁波吸収サボテンなるトンデモ植物がネットで売られている。

検索すれば80件以上も出てくるので、長年に渡って売れ続けているのかも知れない。

景品表示法に引っかけからずいまだに普通に売っているのだから、とスピードワゴン財団が徹底的に調べ上げてみようとしたことがあったらしい。

「出回ってるのは品種改良されたやつだ。テレビやパソコンの傍においてやると人体への影響を軽減できる上に発育がいい。原種は海外協力隊が電気を通す事業で設置した鉄塔付近にあったサボテンが顕著な成長を遂げていたために発見されたものだ。いわば突然変異だな。電波との因果関係はまだ証明出来ちゃいないと粗悪品が出回っていることもあって普及はしちやいないようだな」

「本当にあるんですか、そんなサボテンが。もし悪意を持って持ち込んだら大惨事じゃあないか」

「だからエジプト政府は国外への持ち出しを禁止している」

「…… エジプト?」

「エジプトっていいました?」

「ああ」

「いうにことかいて、D I Oがいたつっーあのエジプトっすか承太郎さん」

「その通りだ」

「吉良吉影だかD I Oの協力者が持ち込んだな」

「絶対いやだ！なにかあるって書いてあるようなものじゃあないか！」

「近寄りたくない。誰だってそうです。正常な感情ですよ、康一先輩。まるでなにかを遠ざけるために植えられてるじゃあないですか、室内じゃないと上手く育たないはずのサボテンが。もうこの時点でこの上なく怪しいに決まってる」

サボテンたちを睨みつける僕はこの土地の所有者たる一礫一たちは何に怯えているのか特定しようと躍起になっていた。所有者の鉄塔、アンテナ、そして生活スペースにまるで結界のようにおかれているサボテンたちはネズミが横切れそうな隙間すらないのだ。あやしい、あやしすぎる。なにがあるというんだ、この山に。

「汐華君も心当たりが無さそうだな…… あいにく僕もだ。電波を食う虫だと？聞いたことも無いな」

「…… 電波を食うサボテンがあつたんだ、蓮見琢馬のスタンドの記述は正しいんだろう。俺もてんで思い当たらないんだが」

「空条さんでさえわからないなら仕方ありませんね…… なにかあるんでしょう、きつと。僕がなにもないのにメモを琢馬に託すわけがないのだから」

「こーいう時、頼りになるよなジオルノってさ」

僕は静かに口元を緩めた。

「ふむ…… 汐華くん、少しいいかい？」

「なんですか？」

「その琢馬君のスタンドが強力な切り札たり得るのはわかつたんだが、メモじゃあ時間が限られてくる。どうだ？僕に君の記憶を渡すつてのは」

「なんですって？」

僕がいう前に露伴先生はスタンドを発現させていた。そして僕目掛けてヘブンス・ドアをぶちかます。そして、先程の話題がかかれたページを破った。そして能力を解除する。

「ほら、補足したまえよ、君の記憶だ」

「…… ありがとうございます。せめて説明してくださいよ」

「時間が無いからな」

「はあ」

僕はそのページをメモから産んだツバメに括りつけて飛ばした。

ふと。不意に何かが鼓膜を揺らした。僕は弾かれたように顔をあげる。蜂？ハエ？いや、違う。今まで聞いたことがないパターンの羽音だと僕はすぐに分った。それは強くなったり弱くなったりせず、同じ波長で一直線に響いていた。

辛抱強く耳の奥に気持ちを集中させていると、羽がこすれ合う時のかすれるような音も確かに聞くことができた。雨の音はそれと交わることのない、ずっと底の方で淀んでいた。今僕の中で呼吸しているのは、その羽音だけだった。その平坦で終わりのない音を、学生寮がかもし出す音楽のように聞いた。

プーンともずーむとも書き表せるような音だった。空の上から聞こえてくるようでもあったし、床下から響いてくるようでもあった。なにかが震えて動いている、そんな感じの音だった。

どこからともなく羽音が聞こえてくる。すでに通り過ぎた羽音の名残りなのか、ただの耳鳴りなのか区別がつかない。しかしそれはどんなにか細く微かでも、それることなく真直ぐ鼓膜を突き抜けてゆく。

「あの、なにか聞こえませんか？」

振り返る誰もが不思議そうな、訝しげな顔をしていると気づいた時点で、僕はその羽音が僕にだけ聞こえているのだと気づいてしまう。

「どうした、ジヨルノ」

「動かないでください」

「は？」

「どうしたんだ？」

「ジヨルノ君？」

「やってしまったかもしれない……いつの間にか僕はサボテンを倒してしまったようだ」

僕の足元にはサボテンの鉢植えが転がっている。ひっくり返って

土がごぼれ、見るも無残なサボテンがある。

「うわあああつー！」

真つ先に声を上げたのは鋼田一だった。

「逃げる、早く逃げるんだっ！食われるぞっ！」

訳の分からないまま駆け出す鋼田一にぼかんとしていると、足を止めて彼は叫んだ。

「電波虫、わたしはそう呼んでるんだ。文字どおり電波を食う虫だ。いつもなら電波塔や監視カメラに集ってるが、このあたりで今電波を出すのはわたし達人間なんだツツツ!!」

ギョツとした僕はサボテンをまた開花させようと、仗助先輩は元に戻そうとするが、鋼田一がどうでもいいから早く来るようわめきたてるので走ることにした。

その間も耳鳴りが止まない。羽音がうるさい。ちら、と僕は振り返った。電波塔やアンテナに閉じ込めているはずのサボテンの境界のひとつを僕は壊してしまったらしい。あれだけ細心の注意を払っていたのにどうしてだろうか。

考え事をしていたからか、どん、と僕は仗助先輩にぶつかってしまった。

「ごめんなさい、前をちゃんと見ていなかったようで」

「俺もわりーわりー、後ろまで考えてなかったぜ」

距離をとり、走る。またぶつかった。

「悪い、大丈夫かい？」

「いえ、大丈夫です。ニワカには信じられませんが、嘘を言っているようには思えません。もしかしたら虫のスタンド使いかも」

「カラスの次は虫？趣味が悪いな全く」

「うわっ、ごめんジョルノ君大丈夫？」

「……なんなんです、さつきから。みんなして結託してぶつかってませんか？」

「だからごめんて」

「逃げてくれ、この中だ！」

こっちだ、と鋼田一が山小屋の前で叫んでいる。空条さんたちが

入っていく。僕も入ろうとしたのだが。

「ぐうっ」

すさまじい羽音が耳元で鳴り響く。サボテンを乗り越えて先にいけない。

「ジヨルノ、どうした。大丈夫か？」

「……ダメです、耳鳴りがひどい。その先に行くには鼓膜が破れそうだ」

ひい、と鋼田一がひきつった顔をする。

「電波虫だっ！もうきてたのかっ、こないでくれ！」

「電波虫？」

僕は振り返る。目視できる距離に耳元で延々うるさい羽音がたくさん重なって聞こえる。

「鋼田一さん、電波虫ってのは人間のどこから侵入するんです？」

「耳だ、耳から入って脳にいき、脳の電波信号を食べてしまうんだ」

「なるほど」

僕はゴールド・エクスペリエンスで胸ポケットのメモをツバメに変えた。

「露伴先生、あとは任せました」

「なっ、なにいつてんだよ、ジヨルノ！」

「そうだぜ、ジヨルノ！早く逃げろよ、死んじまうぞー！」

「もう時間がありませんッ！ヘブンス・ドアーは死者にまでは使えないんでしよう？僕のページをよろしくお願いしますッ！」

「—————ツずいぶんと買い被つてくれるじゃあないか！いいだろう、君の記憶、たしかに琢馬君に届けてやろうじゃあないかッ!!」
それきり僕の記憶は途切れてしまった。

そして僕は62回目の朝を迎えたと琢馬に教えてもらうことになる。
環境破壊による影響で、近年は世界中で気候変動や異常気象が続

ている。たしかに去年からは堤防が決壊するくらい特に雨が多かった。一部氾濫したほどだ。

因果関係は不明だが、新種の昆虫が大量発生しているという。それがこの電波虫らしかった。

「空条さん、この虫を発表したらいいのでは？」

「俺の専門は海洋生物なんぞでな」

それはまさしくデストラップだった。吉良吉影のいない間は無線機のためのアンテナや電波塔が止められるため、大量発生している電波虫たちはサボテンのせいでただでさえ少ない食いつ持が減り、飢えに飢える。だがぐるりと置かれたサボテンのせいでただでさえ餓死寸前の電波虫はその先にいけない。動けない。そんな中、サボテンが倒れることで飢える寸前の電波虫が侵入者目掛けて襲いかかるトラップ。

それが前の僕が仗助先輩たちの前で食い尽くされたと思われるトラップの正体だった。電波虫は本来健康な人間の電気信号は強すぎるから襲うことはなく、機械にしか反応しないが飢えた虫なら人間の電気信号にだって襲いかかるといいうわけだ。頭の中に侵入して電気信号を食うのはいいが、人間の電気信号は強すぎて自滅し、頭の中が電波虫の死骸のせいで血管が破裂し、死ぬらしい。

「趣味の悪いトラップだ……まるで蠱毒じゃあないか、ゾツとする」

露伴先生はそうごちた。

「……こいつが電波虫」

僕は空条さんのスタープラチナが仕留めた亡骸をみる。

露伴先生がヘブンズ・ドアで僕を本にしてくれたおかげで、直撃を免れ、全身が「本」になってバラバラペラペラになったおかげでダメージ無し。耳の中に電波虫がはいる悲劇は免れた。

「なんだって黙ってたんです、露伴先生。おかげで何が何だか」

「文句は琢馬君に言ってくれよ、君。他ならぬ彼の提案なんだから。どうやら吉良吉影は君の生体探知をえらく恐れているようだからとね」

「敵を欺くにはまず味方からってわけですか…… 今度は露伴先生が感染したのかと思いましたが」

ギリギリでサボテンの結界の中に逃げ込めた僕はため息をついた。「最初に言ってくれたら穴の中に耳を入れて対処したってのに」

「えっ、なにそれ気持ち悪い」

「まじで？ 入んのかよ、ジョルノ」

「あとでいくらでも見せてあげますよ、心配しなくても」

僕は肩を竦める。露伴先生がヘブンズ・ドアーの書き込んだ命令じゃなく、「本」にする事自体で僕の危機を回避してくれた機転のおかげで僕はここにいるようだった。

「本当に気持ち悪い虫だな、こいつ」

僕はサボテンの向こうで蚊柱ならぬ電波虫柱となっている気味の悪い蠢きを見つめた。得体の知れぬモノがアンテナから這い出てきた。

それは、細長く、ところどころ角ばった体を持ち、触覚や脚もあるキモい虫。この電子回路にも似た形状の虫は、きつと新種の昆虫だ。電子機器の集積回路の中に住み、卵もそこで産む。エサは「電磁波」で、少数なら電波塔周辺の電気をちよつと食うだけの無害な存在。

鋼田一日く、体内に「電磁波」を帯びており、たくさん集まると、時に外部生物に攻撃する事もある。その時、口からゼリー状物質を吐き出すとの事。特に、心臓が弱っている生物を探知して、集まろうとする。人体は脳も心臓も筋肉も「電気信号」で動くため、人々はこの虫の影響を無意識に受けてしまうだろう。

「岩人間は電気信号じゃあないんだ、だから無害なんだよ。優秀な警備員なんだ」

「…… こうして見ると、サメやエイの頭部にあるロレンチーニ器官に似ているな」

「なんすかそれ」

「その器官は感覚器が無数にある。ゼリー状の物質が詰まった小さな筒状の器官で、これによってごくごく僅かな電磁波をも敏感に感知できると知られているんだ。そのロレンチーニ器官そのものが独立し

て進化し、1個の生物になったような存在かもしれないな」

「なんだって海じゃなくて陸なんですか？」

「あのサボテンが天敵な虫なんだろうさ。いや、あの虫から生き残るためにサボテンが進化したのかもしれないな」

「なんつーはた迷惑な……」

「海中ではなく空気中で、しかも相当広い範囲の電磁波を感じ取っているなんて、すごい進化の仕方ですね」

「しかもこいつらは本来獲物をジワジワ弱らせ、頃合いを見て、体内に侵入する性質がありそうだ。恐らく、彼の体内に入った虫達は、残された彼の微弱な生命電気を喜んで喰らい尽くす」

「だが飢えすぎてそれどころじゃあない」

「そっかあ…… 虫に善悪なんて関係ないしね」

「つまり、電波塔やアンテナを起動させれば問題ないわけだ」

「目指すべき場所が見つかりましたね、生活スペースだ」

ただ山を歩いただけだった。次第に足が重くなり、なのに心はほぐれていく。大勢で歩いていながら、五感は一人、空に向かっていた。不思議な感覚に感った。だが確かに感じた。子供の頃からずっと消えることなく心に掛かっていた鬱屈の霧が、ふっと晴れる一瞬があったのだ。無心。それこそが霧を晴らす瞬間なのだと思っていた。

風に揺られる。さつきまで頬に心地好かったその風が、悪魔の使いのように感じられる。

ようやく山頂に着いた。視界が拓け、僕は声を上げた。草の緑に覆われた、天然の大広間がそこにはあった。

そこには人間の生活が感じられるログハウスが建っていた。丸太または角材を構造材として水平方向に井桁のように重ねて積み上げ、交差部にはノッチを使い組み上げた家屋である。

ログハウスは湿度の調整がとても優れており、また木の断熱性の高

さから夏は涼しくて冬は温かいということが挙げられる。また、コンクリートなどに比べて感触が良く、木の温もりを感じる事ができるなどの特徴もある。ログハウスによく使われる樹種としては、ベイシギ、ベイマツ、トウヒ、フィンランドパインなどが代表的である。

一礫一は電工の知識と経験により少年期からの趣味だったトランシーバーを楽しむためだけに山を買い、ログハウスをたて、たくさんの鉄塔やアンテナをたてたのだ。傍から見れば老後を見すえた気の長い趣味を持っている充実した男といえるが、殺人鬼をかくまっているとすれば途端に恐ろしいものとなる。

ログがそのまま見える状態にしてあったり、ログとログの間に漆喰を塗り込んであったり、ログの手前に板材をはってあったりと几帳面な仕事がかがえる。

岩人間となつてからは生活の拠点を大人の秘密基地たるここで過ごしているというのだから、車庫やポストなんかが普通においてあった。

「サボテンがあたりを埋めつくしていなかったら、いい雰囲気なんだけどなあ……」

「雑誌の表紙にありそうですよね」

「アウトドア系の雑誌な」

「キャンプグッズが通販で買えるやつだろ、見たことあるぜ」

僕はため息をついた。

「鋼田一さん、中には入れますか？」

「もちろん。鉄塔に入れない時はわたしはここに住んでるからな」
「なるほど」

鍵を取り出した鋼田一はにこりと笑った。

カラスの鳴き声がした。とっさに僕達は顔を上げる。

「うわっ！」

「あー！」

「あぁーっ！」

「かぎが！」

空条さんのスタンドが発現した時には遅かった。あつという間に

鉄塔目掛けてカラスが飛び立ってしまおう。

「いかなきゃあいけないみたいですね」
僕はため息をついた。

電波虫2

鉄塔に行かなくてはならない。カラスがおそらく近くにねぐらを構えているはずだからだ。約束と違う、と鋼田一は強硬に反対したが、カラスが持つていつてしまうとは想定外にも程がある。

そんなにならカラスを撃破して持つて帰ってきたくれと主張すると鋼田一は困ったようにほほをかいだ。スタンド使いではあるが鉄塔がスタンドで他人に貸し出している今、この男はそこらへんの人と変わらない程無力なのだ。

後日と悠長なこともいつてられない。僕らは鋼田一の反対を押し切つて鉄塔に向かった。

鉄塔の周り一面がサボテンだらけだった。

「……サボテンは普通ここまで増えねえもんだが……まさかここで育つてるのか？」

空条さんの驚きに満ちた声がする。

「ここだけ鉢植えじゃあないんだね」

「ほんとだ、そのまま植わってる」

「あの鉢植えはこっから持つて来たんすかね？」

「おそらくな」

「こうして見ると、実に壮観じゃあないか。一礁つて男はサボテン愛好家なんだろう」

「電波虫の対策として育て始めたのか、元々好きだったのか……」

「それこそ本人に聞かなきゃ卵が先かニワトリが先か問題になつちまうぜ、汐華君」

「それもそうですね」

「しかし、彫刻か？岩がいっぱいあるな」

草木が岩となり自生しているのがわかる。僕はためしにゴールドエクスペリエンスを試してみたが生命に変換できないため、こんな状態でも生きてるのがわかる。異様な光景だ。鉄塔以外が全て岩だらけなのだから。

「独自の生態系を築いているようですね」

鉄塔を中心に広がる岩の数々、奇形の草木。僕の説明に気味が悪いのか誰も気分悪そうな顔をしている。

「……まさか、ここにいるのか。一礫一が」

空条さんのつぶやきに僕らはごくりと唾を飲んだ。

鉄塔の真下に簡素なプレハブ小屋があった。スーパーフライの対象として鉄塔に住み着いている住人は、その小屋をあけ、沢から引いてきた水を組み上げてはシャワーのようにしている。そして、中にあ
る岩を丹精込めて磨き上げている。

その住人は、男とも女ともつかない姿だった。長年の固まりついて、紺とも紫とも茶ともいいいような奇妙な色合いに変化した上着。白いパッチといたんだアンダーシャツに毛糸のところどころほつれた服を着た住人。着たグレーの服には無数の細かいしわがよつていた。それは氷河に浸食された大地の光景を思わせた。

ただ単に着こなしがひどいだけではない。そこには服飾という概念そのものを意図的に冒瀆しているような印象さえうかがえた。

いつ作られたのかは見当もつかないが、いずれにせよそれが作られたときから既に流行遅れだったのではないかとおぼしきウールの服には、防虫剤の匂いが微かに漂っていた。

いかにも着なれてない。微妙にサイズがあっていない。まるで限られた在庫品の中から、急いで間に合わせに選ばれたみたいだ。

朝のゴミ出しにも恥ずかしい格好冴えないファッション。ドレスコードにズボラ。見た目に無頓着らしい。洗濯しすぎて毛糸がやせていたし、デニムも一目でデザインでなく自分で穿きつぶしたからだと分かる穴がひぎに空いていた。所々が薄くなつて日に透かして見ると裏からつぎを当てた針の目が見える。服装には師走も正月もない。ふだん着も余所もない。

どす黒い顔をした住人だ。どの指も硬くひび割れて、長く伸びた爪にまで黒い汚れが染みこんでいる。厳しい生活を送っている人間の
手だった。

ぎよつとしてしまう。

暮らしているのではなく、ただ生きているだけ、そんなみすぼらしい女性だ。

埃をかぶった人間が、岩を磨くためだけにスーパーフライにいる。鉄塔に囚われている。世話を焼くためにあつちにとつちにとつちとろしている。人間って、こんな姿をしてまでも生きていなくてはならないのかと思えてしまう。

身なりはぼろぼろで、がっちり固まり、異様な臭気を放っていた。おそらくシャワーはしているが、所詮生水だから清潔には程遠い。

「……」

女は無言のままこちらを見た。

「帆波奈帆子さん……」

ぼそりと仗助先輩が呟いたものだからようやく僕は思い出す。黒縁メガネに黒いスーツ、黒い髪と全身黒ずくめな印象が強すぎてホームレスのような姿とは一致しなかった。

「どうしてここにいいのかしら、あなた達」

帆波奈帆子は迷惑そうな顔をしている。

「どうやって入ってきたのかしら？ 警報は鳴らないし、電波虫たちは反応しないし……まさか自力……いえ、協力者がいるようね。わたしが吉良吉影に協力しているように。ねえ、わたしの気が変わらないうちに帰ってちょうだいな。わたしはハジメさんのお世話をしなくちゃあいけないのよ」

帆波夏帆が休眠期の帆波志帆の世話をやくように、帆波奈帆子は一確一の世話をやいているようだ。献身的である。なんだってスーパーフライの中にいるのかわからないが。不躰な視線に気づいたのか、彼女は薄笑いを浮かべるのだ。

「テロメアって知ってるかしら？ 細胞分裂を促す末端器官なのだけけれど。一般的にこのテロメアが若返れば人間の寿命は伸びると言われているわ。規則的かつ健康な生活を送れば劣化は遅くなるけれど若返る方法はないと言われているわね」

帆波奈帆子曰く、サプリはまだ実現していないという。若返り成分

が過剰になると害があるからだ。たしかにその成分は心臓病や認知症などの病気のリスクを低下させるが、残念ながら過剰になると特定のがんのリスクを高めてしまう。

このサプリ開発について、テロメア研究の第一人者であるブラックバーン博士は、懸念を示している。単純に外から取ればいい、そして増やせばいいというわけでもないからだ。

ブラックバーン博士が若返り成分を発見した後、もしかすると、これは何千年も人類が待ち望んでいた不老不死の薬かもしれないと、みんな騒いだ。

しかし、それを確かめるために、マウスを使って背中に人工的にたくさん作らせると、確かに皮膚は若返ったように見えるが、それと同時に、がんがたくさん出来るということがわかった。

このように人工的にテロメラーゼを無理やり多くするというのは、もろ刃の剣。悪い副作用が出る可能性が高い。

テロメラーゼがあり過ぎると、いろんな形の悪い染色体がたくさん出来ることが分かっており、それが原因になる。

「わたし達が感染したこの奇病は完全にそれを克服しているのよ。奇妙な体質にさえ目を瞑れば、今のところ240年はいきられるといわれているわ。だからよからぬ事を考える連中が後を絶たない」

泣きそうな顔で彼女はいう。

「帰ってちょうだいな、あなた達がたちいるべき場所じゃあないでしょう？放っておいて」

「そりや叶えてやりたいのは山々だがよー吉良吉影を捕まえりやすぐにでも出てつてやつてもいいぜ、帆波さん」

「それだけは出来ないわ」

「なんだって吉良吉影に協力するんです？」

「なぜって？決まっているじゃあないの。平穩に暮らしたいと願うのは十分共感するに値するんじゃないやあなくて？」

帆波は狂気を孕んだ目で笑うのだ。その視線とかち合った瞬間に僕は話し合いの余地はないと悟るのだ。

「久しぶりに肉が食べたいでしょう。ご飯の時間よ。存分に楽しみな

さい」

彼女の一言により、付近の木々から不気味なカラスの鳴き声がする。電波虫はカラスまで食べてしまう可能性があるからか、サボテンの円を崩す気はないらしい。僕らは身構えた。

止まり木が見える。おそらくあれがねぐらなのだ。ぎやあぎやあ騒がしい鳴き声でした。さつきも聞いた、鳥の声だ。

「気をつけてください、みなさん。こいつ、若い鳥じゃあない。親鳥だ」

僕の声にうんざりした様子の声があがる。そりやそうだ、社王町のあちこちを駆けずり回って岩になるカラスを捕獲すること5回。うんざりもする。これで終わりだと思っていたらまさかの親鳥登場である。もしかしたら、とぼんやり思っただけでも直視はみんな無意識のうちに避けていたのかもしれない。

「勘弁してくれよ、雛がいるとかいうんじゃあねえだろうなっ」

「そこまではわかりません。だがこの鳴き方は子供を守るための鳴き声だ」

「ほぼ確定じゃないかアッ！」

「まじかよー」

「やんなるね……」

康一先輩たちはもう一度木のとっぺんを目を凝らして見つめる。もちろん僕もだ。もう嫌な予感しかしないのだ。可愛い5羽の子供たちを捕まえる人間たちへの憎悪は高まる一方なはずの親鳥だ。ただ鍵を返してくれるとはとうてい思えなかった。

逆光を利用して白いカラスは己の不利な体を隠そうとする。やはり知能は高いようだ。

サツと僕らを影が走った。影の主は億泰先輩の真上だ。逆光がまぶしいのを我慢して見上げると、はるか上の空には影の主、獰猛な目を光らせた大きなカラスが、翼を広げて舞っていた。

「白いカラスじゃあないか、珍しいな」

「絵本で昔読んだ話に出てくるやつだ」

「アルビノってやつだろ？めずらしいな」

それがスツと翼をすぼめたかと思うと、億泰先輩目掛けて、そのすぐどいくちばしを突き出し、急降下してきた。

「億泰先輩！」

「言われなくてもわかってるぜ！ザ・ハンドツ！！」

空間が抉り取られ、カラスがこちらに飛来する瞬間を狙って一撃を浴びせようとした。のだが。

「なんだこの大きさはツ!?!」

視界が真っ白になる。カラスの大きさを認識できない僕らは一瞬混乱した。

「どわあっ!?!」

「億泰ツ！だあくそっ！億泰からはなれやがれツ!!」

仗助先輩のクレイジーダイヤモンドが億泰先輩に襲いかかるカラスをぶん殴って吹き飛ばす。翼からむしり取られた羽が舞う。僕はその何枚かを拾い上げる。

「いつてええええ！」

たまらず億泰先輩が左目を抑える。その指の間からダラダラと血が溢れてきた。まさにカラスの復讐である。宣戦布告といっている。

康一先輩がエコースで動きを止めようとするが動きが早すぎる、あるいは格闘する仗助先輩と距離が近すぎて上手くいかない。僕はゴールドエキスペリエンスを呼んだ。

カラスのくちばしは正確に億泰先輩の目を狙っていた。根拠はなかったが、僕はそれを直感していた。なぜなら高速で襲いかかってきたカラスはギラつく目をしている。それは人間の目の美味さを知ってしまった獲猛禽のそれだ。

身をかかさねば、目をピンポイントでえぐられることは確実だ。仗助先輩を支援しなくてはならない。

「そんなに欲しいならくれてやるよ！」

足元の石ころをつかみ、空に放り投げる。それが目玉に変貌した瞬間、目の色を変えたカラスが貪りにかかる。うわあ、グロだ……と

いう声は仗助先輩だ。石が喉に出現したのかカラスは悶え苦しみ始める。すかさず康一先輩はエコーズでカラスを地面に沈めた。

「ドララララララアッ!!」

すかさず仗助先輩がラッシュをかける。カラスは悲鳴をあげてのたうち回る。しかし、体が言うことをきいてくれない。翼が風を切る音が僕の耳に届いた。

「んなっ!?!」

「消えただと?!」

「一体どこに……」

「ちい…… 動けないように書いてやろうと思ったのに間に合わなかったか」

クレイジーダイヤモンドが空を切る。いきなりカラスは消失してしまった。僕は仗助先輩に警戒を僕に任せるようにいう。億泰先輩の失明を早く治してもらわなければならない。

「億泰大丈夫か?」

「ありがとよ、仗助。俺としたことがうっかりしてたぜ」

「仕方ないですよ、カラスの大きさが桁外れすぎます。目測を誤るのも無理はない」

「あれ、ほんとにカラスなのか?動きが明らかにハヤブサやタカのあれなんだが」

「見た目だけならカラスですね。あいつは親鳥だからスタンドも長いこと使っているはずですから、なおのこと賢くなっているのかもしれない」

「カラスがスタンドを学習?聞いただけでゾツとするぜ……。ぜつてーろくな使い方されてねーだろ……」

「1人の時に襲われなくてよかった」

「ほんとにな」

雑談など許さないとばかりにさっきのカラスが超低空飛行でかすめて通過した。

「あつぶねえ……」

「仗助先輩が回復させたと理解したみたいですね」

「まじかよ……」

空中で翼を広げて制動をかけると、カラスは再び僕達を見下ろした。今度は仗助先輩の正面から急襲する。間一髪でかわした仗助先輩は殴りつけようとするがまた透明になってしまった。

「だあああつめんどくせえなちよこまかとツ！どっかの剣みてーな能力しやがってえ!!」

続いて横殴りに飛来する。僕達はジグザグに駆け出した。カラスは攻撃の手を休めない。走って逃げる僕達に息もつかせず何度も何度も襲いかかってくる。

転がり、飛びさすり、身をかがめ、なんとかかわしてはいるが、ギリギリ危機一髪の連続だ。

「このカラスただもんじゃねーぞ！こっちの動きを見切り出して！このままじゃあジリ便だ！」

仗助先輩の叫びに僕達は血相を変えた。こんなわけのわからない所でカラスについばまれて死ぬなんて願い下げだ。

「ゴールド・エクスペリエンス……生まれろ、新しい生命ツ!!」
僕は叫んだ。

「今回は昼だからな、お前の天敵を呼んでやろうじやあないか」

僕はハヤブサを作り出し、カラスにけしかける。カラスの威嚇などもともせず、ハヤブサはカラスに襲いかかる。

「なっ!？」

僕は目を見開いた。そこには真っ黒になったカラスがいたからだ。

「色が変わった！」

「なんだなんだ、まだなんかあんのかよ？」

「気をつけて、みんな。なにかくるよ！」

「カラスのクセにいくつもスタンドがつかえるなんて卑怯じゃあないのか？」

「んなこといってもよー、しかたねえんじやねえのか？」

カラスの鳴き声は変わらない。たださっきのように執拗に目を攻撃してくるパターンから変わったのは、新たなる攻撃手段が確立して

いるからに違いない。真っ黒になったカラスの挙動を逐一追いながら、僕らは距離をとっていくのだ。

カラスの標的はまず僕が作り上げたハヤブサに向いたようである。するどい爪やくちばしを避けながら、威嚇を繰り返すカラス。ハヤブサが全てを無視して強引に襲いかかろうとした刹那、なにかがカラスから発射された。

ハヤブサの断末魔が響き渡った。

「なんだっ?!」

カラスにも全く同じダメージが反射される。みるみるうちにハヤブサもカラスも片方の翼が溶けていくのがわかる。いや溶けているというよりは壊死しているといった方がいいのかもしれない。どす黒いそれが翼に侵食しているのだ。ハヤブサは重力に逆らいきれず落下する。カラスは辛うじて耐える。耐性があるらしい。

「……これは……」

僕は目を見開いた。

「……腐ってる。壊死どころの話じゃあない。完全に腐っているじゃあないか」

露伴先生たちはギョツとした。黒いカラスが殺意を漲らせながら滑空している。僕達は発射される溶解液の雨から逃げ回るハメになった。

僕達はまた襲いかかってくるであろうこの非常事態に立ち向かうべく、上空に向かつて身構えた。溶解液はいつぞやのネズミのひではない。草木はもちろんだ地面までジュツツという嫌な音を立てて石ころや地面が溶け、穴が開く。岩と化している草木まで、被害がではじめているではないか。さすがに主人に歯向かう気は無いようで、サボテンや鉄塔には近づきもしない。

視線の先では、カラスが悠然と旋回をつづけている。獲物をどうやって仕留めるか思案をめぐらす冷静なハンターを気取っているよ

うにも見える。しとめ方は何通りでもあるだろうが、獲物の最終的な運命は死、あるのみだ。考えがまとまったのか、カラスは旋回をやめ、その体が一旦空に沈んだかと思うと次の瞬間、ペー一気に急上昇した。小さな黒い点になるまで舞い上がり、視界から消えてしまった。

「どうしたんだ？興味をなくしたのか？」

「今のうちに逃げようぜ、康一」

「そうだな、それがいいだろう。酸性雨じゃあさすがに対応しきれない」

「……」

いささか調子のよい期待を込めて呟く億泰先輩たちの代わりに僕は警戒を続ける。

「これも届けるんだろ？」

「なにワクワクしながら言ってるんだ、露伴先生……倒しきれないのに……まあいいか」

「だろうー」

ヘブンズ・ドアが僕に向かって突撃してくる。今日だけで何回するつもりなんだろうか、この人。栄養失調が疑われるくらい体重を減らされたらシャレにならないのだが。しばらくして、僕は目を覚まし、ツバメに新たななる情報を託して飛ばした。

しばらくの間、何もなくなつた空を見上げていたが、気を取り直して周囲をもっと調べてみることにした。とにかく、母屋の鍵が必要だ。取り返すのが先なのだからカラスばかりに気を取られているわけにもいかない。

その時、僕は自分の足元がチカツと揺らいだような気がした。じつと足元を見てみる。自分の影のまわりにボンヤリとした薄い影が広がっている。影というか、光の乱反射のようだ。まるで氷を透かした光の影のような。

僕が身をかがめてももっと良く調べようと口に出そうとしたときである。

露伴先生の叫び声がした。僕らの頭上に何か気配を感じるのとはほぼ同時だった。

「危ないッ！汐華君ッ！」

突き飛ばされていなくなったら、今度は巨大な溶解液の塊に潰されていただろう。

「何だ、いったいッ！」

「また来るぞ、今度は真横だ！」

「えッ！」

「また色が変わりやがった！今度は赤色だとッ?!」

宙に跳ねた僕らの体の下を猛スピードで溶解液の塊が突っ切った。着地した僕は、すかさず真正面に敵と向かい合う。

「ジョースターさんが言ってた鳥のスタンド使いみたいな戦い方をするな…… やっかいな」

「えっ、マジ？」

「ジョースターさんが言っていました。やつは氷を操ってたらしいが」「ディオの協力者が余計なことを教えた気がしてならないね」

地上スレスレの超低空飛行で、さきほどの黒からまた赤色に変化したカラスが迫っていた。獯猛に光る照準は仗助先輩に定められている。

「ただのカラスのクセに緻密な作戦で人を襲う……。でも軌道までに変えられないみたいだね！エコーズACT3！3FREEZE！」

康一先輩の声と共に溶解液の塊の落下速度が劇的に加速した。地響きを立てて着地した溶解液は自分の質量と重力、そして溶かしていく性質により沈んでいく。

スタンドにはスタンド。窮地を脱した僕らは安堵の吐息をつく間も惜しく、次なる攻撃にそなえた。カラスはふわりと舞いあがると、それきり近づいてこない。

「僕のACT3の能力見て警戒しているのか……。ああやって、空からスタンドの射程距離を見極めるつもりなのか？」

つくづくあなどれないカラスだ。鳥とは思えないほどの周到さを持った相手のこと、これ以後、むこうからACT3の射程5m内に都合良く入ってくれることは期待しないほうが良さそうだ。何か別の手を考えなくてはならない。

カラスが高度を上げ出した。大きく弧を描いて、ゆつくりと僕らの届かない高さまで昇ってゆく。その姿は、憎らしいほどに落ち着き払って見える。今度は上にばかり注意を払わず、油断なく周囲にも気を配る。

僕は気づいた。今度のチラつきはひとつだけではない。

足元だけではない。自分のまわりに広がる白い地面、そのあちこちにキラキラと輝く影が次々と現れている。

「露伴先生の予感が当たってしまったみたいだ。急ぎましょう、強酸性雨なんて冗談じゃあない」

「うわあああああああッ！」

「きやがったー！」

「ぎゃあー！」

一瞬、空が溶解液で埋め尽くされている錯覚をする。それほど大量の塊が、地上目指して落下してくるところだった。

「うわああ何だこの鳥イーツ!?手加減なしかあああああッ！」

「クツクレイジーな野郎だッ!ヤベエエエエーツ！」

情けも容赦もなく、溶解液の大墜落が始まった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

次々と地表に衝突する溶解液の塊をこれ以上ない集中力を発揮して的確に避けていく。恐ろしい音と地響きを立てて降り落ちた塊によって、周りを見る間に埋め尽くされた。

「ゴールド・エクスペリエンスッ」

「助かったぜ、ジヨルノ！」

「ありがとう！」

すぐに見るも無残な形になってしまいが、足場を作るのは充分だ。触れたら溶けてしまうからキリがないが逃げるならことたりる。みんなが逃げたことをかくにんして、僕も逃げた。安全な空間に逃げ込みながら、立ち止まるところは立ち止まって落ちてくる塊をやりすぞす。

「どくつてことなかったぜ、見たかコンチクショー」

ぜいぜいいいながら億泰先輩が笑う。残段数がないようだ。落ちてくるのは最後のひとつである。

「さっきのお返しだ！エコーズ、ACT2ツ!!」

ぼよよおおん、という擬音が地面に貼り付けられる。まるでトンポリンのようだった。自分の質量の分だけ沈みこんだ塊はその分反発して勢いよく発射される。

「いけえええッ!」

特大の溶解液の塊は再び空を舞う。勢いに耐えきれず空中で崩壊し、たくさんのかたまりとなる。それは無秩序に降り注いだ。僕達にも降り注ぐが、それはカラスの方が被弾の危険性が跳ね上がる。体に接触する度にカラスの悲鳴にも似た鳴き声があがり、とけかけの羽が落ちてくる。僕は追撃をすべくその羽根をハヤブサに変えてやった。

「しつけえなあ!」

「まだヤル気なのか…… しぶといな」

「くっそー、カラスのくせに!」

満身創痍ながら生きながらえたカラスがまた色を変える。ハヤブサたちが殺されていく。白いカラスは足場がズタズタで逃げる場所が少なくなってきたことを察知したらしい。億泰先輩が舌打ちをする。僕はまた透明になる瞬間から軌道を読むべく目を凝らしたのだが。

「また逃げた!」

「今度はなんだア?」

「なにか様子がおかしいですね…… 今まで木に逃げたことは無かつ…… んん?」

僕達は目を見張った。カラスのねぐらがぐらついているのだ。しみしみしという音を立ててその木は途中からポツキリと折れてしまったではないか。折れた木が鉄塔目掛けて落ちていく。ばきい、という音がした。ぶつかっただのと同じくらいの強さで反対側に弾き飛ばされていく。これがスーパーフライの威力なのか、恐ろしいことだ。

カラスは悲鳴をあげている。

「空条さん!？」

見晴らしが良くなった鉄塔の向かい側にはカラスの巣と思われる塊を持った空条さんがいるではないか。人質を取られたと悟ったらしいカラスが白に戻り大人しくなる。僕達はそちらに向かう。露伴先生にカラスを大人しくさせてもらうためだ。空条さんの手には鍵がしっかりと握られていた。

ログハウスに入り、僕達はアンテナや鉄塔のスイッチをいれた。電波虫が一斉に舞い上がる。おぞましい数だ。

「……スイッチを入れてしまったのね」

帆波奈帆子は笑うのだ。僕らはギョツとした。本体はあの鉄塔の中だというのに、声がするのだ。この無数の無線を並べたコレクションや無線を使うための機材の部屋から。

「ダメじゃあないの…… スイッチを入れてしまったら」

まるでミュージカルの主演女優のように歌うのだ。

「まだ早いわ。だから」

はらり、と彼女の声が落ちてくる。そこには、一礁一と出会う前に海外派遣協力隊として戦地の復興に尽力していた頃の、いつかの帆波奈帆子がいた。傍らには70円くらいで売っているくせに撤去に膨大な費用がかかる不発弾や地雷。僕らの目の前で彼女とわざと爆発させるための機械が不発弾や地雷の上を歩く音がした。

僕はゴールド・エクスペリエンスを起動しようとしたが遅かった。空条さんが時間を止めて窓の外に投げ捨てようとしたが、数が多すぎた。億泰先輩がザ・ハンドで爆発前に削り切ろうとしたが距離があまりすぎた。康一先輩が全てを吹き飛ばして距離を取ろうとしたが間に合わなかった。

仗助先輩はなんとかダメージを軽減させようとテーブルを手にしたが甚大な被害がでた。露伴先生が爆弾に爆破しないと記述するには時間が足りず、ひとつどでかいのが爆発して他のやつは吹き飛ばすとかくにもタイムロスがあった。

僕らの視界は爆発により埋め尽くされてしまったのである。

スタンド マグナムオプス

本体 奇病に感染したカラスの親鳥

破壊力：B

スピード：B

射程距離：D

持続力：C

精密動作性：E

成長性：C

白色↓透明になる。黒色↓なんでも溶かす液体を発射する。赤色↓液体を固体化する。色が変わる事にスタンドの内容が変わるカラス。子供たちをジョルノたちに倒されたことで一度ターゲットと定めた者をターミネーターのようにどこまでも執拗に猛追するようになった。自分がどれだけ負傷しても決して攻撃をやめない意志の強さがある。空条承太郎に巢の雛を人質にとられて敗北。

インスタント0 その2

トーストの焼ける匂いと、珈琲ポットからのたてたばかりのほろ苦い香りが、僕達の周りに生温かくたちこめていた。

隣ではご飯と味噌汁と漬物だけの簡素なものとはいえ、あつあつの炊きたてを食べる味はまた格別だとサラリーマンがもりもり食べている。

野菜も卵も豆腐も、納豆も醤油も焼きノリも、それぞれに個性的な香りを放ち、そうしたもろもろの食べ物朝の膳に渾然とした朝のムードをかもし出す。

どこの旅館でも出す朝食だがうまさげんぜん違ふ。何となれば、すべてが地のものだからだ。寒い時期だったら、一晩たつて味が染み込んだ豚汁もありだろうと同僚と談義している。

朝食を食べる時間があったら少しでも寝ていたいと思図る子供に、母親が朝食は眠っている脳を活動させるめざまし時計だ。何も食べないでいると勉強も仕事もはかどらないと励ましているのが見えた。

ホテルの朝食は一品一品の料理がおいしく、ボリウムも申し分なし。最初の頃に、アクセントで、デミタスカップ入り味噌汁が出てくるが、これもまた洒落てて美味だった。焼きたてのパンと自家製のバターやジャム、別に凝ったものではないが、栄養満点のメニュー。充実した一日が始まりそうなモーニングセットである。

僕はコーヒークップを持ち上げた。甘ったるい香りが、湯気と一緒にテールクロスの上を漂った。コーヒーにたつぷり生クリームと砂糖を入れるので、ケーキ屋のような匂いがする。琢馬はトーストの上で、バターナイフをカリカリいわせている。

サンドイッチとジュースと、サラダと卵料理とベーコンとコーヒーの、僕がこの世で一番好きなタイプの朝ごはんだった。

朝一番に執拗な電話で叩き起された僕は社王ブランドホテルにて、琢馬に呼び出されていた。朝食時間のようであらほら宿泊客が見える。僕は金を払って琢馬と共に朝食をとっていた。

「あと2日の意味をかんがえるべきじゃあないか？」

琢馬はそう言つてスタンドのページをやぶいて僕に渡してきた。

「これで丸丸一日が経過したわけだがどう思う」

「…… 1分ごとのズレがさらに大きくなってるのか」

「加速している。繰り返しごとに始まりが遅くなっていく。このページだと次は2日目まであつという間だぞ。君がいつてたあと2日がやってくる」

「……」

「そもそも、なんだって繰り返しているんだ？ 吉良吉影からすれば君らが死んだ方が好都合じゃあないのか？ リセットしてどうする。本末転倒じゃあないのか？」

「気づかなかつた…… 帆波奈帆子のスタンドかと思つていたんですよ。過去現在未来のものをもつてこれる、みたいな」

「君が最後に寄越した記録によれば写真を実体化するようだからで違ふ。あの場所に人がいないんなら、吉良吉影しかいないだろう」「たしかに…… たしかにそうですね。言われてみれば」

琢馬に言われたことはもつともだ。僕はもつと吉良吉影と帆波奈帆子が共闘する理由について考えなくてはならなかつたらしい。

行く先の違う二人が同じ馬に乗って道を進んでいる。あるポイントまでは道はひとつだが、その先のことはわからない。にもかかわらず彼らのチームワークは緊密で、隙がない。

無駄がない。とてもシステマチックだ。ダブルプレーをとることを生き甲斐にしている二塁手と遊撃手のコンビのように。距離はゼロになっている。問題に対して、一緒になって立ち向かおうとしている。

一人一人の気持ちや東や西や南へてんでに背を向けているのとはわけがちがう。皆、円陣をつくつて、こちらへ向いて下さいと願つても、一人一人が一国一城の主になりすぎているのはよくある話だが、空中分解はありえなさそうだった。

この一体感を薄気味悪く感じた。親兄弟のような血管や臓物すら共有しているかのような。

吉良吉影は平穩に暮らしたいという。帆波家にかくまわれて仕事を斡旋してもらい生活する現状はだいたい希望通りのはずだ。女性を絞殺して手首を切断するというものも、帆波奈帆子の写真を実体化させるスタンドがあればある程度は融通がきくのだ。吉良吉影は僕達を排除したがっているが、今のこの繰り返しはその願望とは背反する。その願望が叶う、なおかつ未だに不透明な帆波奈帆子の理由こそがキーのように思われた。

考えてみよう。

愛する夫が奇病に感染し、自分や娘まで感染した。国は本腰を入れて治してくれず、感染させろと強要までしてくる。平穩を手に入れるためにこの町の行政に食い込む事業者となり、行政を取り込み、医療関係者のトップを感染させてやる。

21年間で膨大な労力を払ってまで手に入れた平穩を殺人鬼ひとりを雇い、かくまう。あまりにも不釣り合いだ。なにか、なにかあるはずなのだ。21年間の努力をかなぐり捨ててもいいくらいのなにかが、悲願が。僕は奇病の治療しか思いうかばない。

「……だがスピードワゴン財団に治療をして欲しいなら、僕が帆波夏帆にかけてた約束の時点で吉良吉影と手を切るはずだ」

そうしなかったのは人間のドロドロしたところをしこたま見てきたからかもしれない。

「まさか、僕達を奇病に感染させる気なのか？」

なんとなく呟いた言葉だったが、驚くほどにしっくりとくる。あの女性が口走った言葉や感情を鑑みるに、僕の約束が信じられないと考えた方がよさそうだ。

「父さんが目覚める日？」

僕の電話に帆波夏帆は不思議そうに繰り返した。

「父さんは90日でサイクルを繰り返しているから、明日くらいじゃあないかしら」

僕は唾を飲む音がやけに大きく聞こえた。

「間違いない？」

「嘘言ってどうするのよ。それがどうかした？」

「いや……」

僕は言葉を濁す。

「君、僕との約束、話したか？」

「どうして？ 話すわけないじゃあないの。母さんは人間不信が極まっているのよ。そんなこというわけないわ」

「……そうか」

「ただ、その代わりに動物たちは嘘をつかないからって偏愛しているところがあるわね」

それは21年間、人間のエゴに振り回されたが故の行き着く果てのようだった。悪魔の背に乗っているように、いつ振り落とされるかわからない、嘘と虚飾にまみれた口のうまい人達に辟易としたらしい。

帆波夏帆は特に恐ろしい四つの敵として疑惑、恐怖、驕慢、欲望と云う言葉を並べていた。そのあたりに一層の反抗的な精神が起こったのだろうと感じた。それらが帆波一家にとって敵と呼ばれるものだったのだろう。心はおぞましくも苦々しい猜疑のために苦しんだに違いない。

「……もし、帆波奈帆さんが僕の話聞いていたとしたら、どうすると思う？」

帆波夏帆はしばらく考えた後、馬鹿げた発想だと前置きした上でいう。

「怒るでしょうね。わたし達の苦勞がこんな簡単にデウスエクスマキナの解決方法があつていいわけがない。つかみ取らなければ運命は近づかない。そう考えるはずよ」

さんざん騒がただけで、彼女たちをさんざん引つ掻き回したあげく、肝心なことにはなにもふれず頭上をすうつと通過してきた現実があつたらしい。あまりになめらかな通過で、答えが出る前の手数が、どこかにはぶかかっているような空隙を感じたという。

平穩を振り捨てようとするほどの、この懷疑は執拗にとりついてきたと帆波夏帆は他人事のようだというのだ。大人は背負うものが多すぎて、子供ほど簡単には全てを捨てられなかったらしい。

「…… 試している訳じゃあない。信じられない訳じゃあない。そんなものはとうに通り過ぎてきた過程なのよ。母さんが欲しいのは揺るぎない事実よ。確証なのよ。安心が欲しいのよ、きつとね」

「対等な立場を得るために？」

「そう、それよ。いつだって後ろ盾がないわたし達はなり上がりなきやあ誰も守ってくれなかったもの」

「覚えがある話だ」

「そりゃよかったわ。セーフティネットからすり抜けてしまう絶望感
は当事者でしか自覚しようがないもの」

「ここまで会話してから、僕はしばらく沈黙した。」

「わたしは何かしなくちゃあいけないかしら」

「いや、まだなにも起こっていないからいい。取り返しのつかない寸前だっということがわかっただけで充分だ。ありがとう」

「そう、ならいいわ。ところでいつまで学校休むつもり？」

「明日には学校にいくさ」

「わかったわ」

明日が来ればの話だが、といいかけた言葉は飲み込んだ。電話を切った僕は息を吐く。琢馬のモーニングコールにより強制的に叩き起されるであろう仗助先輩たちにどうやって説明しようか頭を巡らせる。とりあえず僕は今から琢馬のところに向かわなければならぬ。

「読んでるだけで頭が痛くなってくる…… 琢馬はよく正気を保つていられるな」

「僕は記憶できるが、そこから新たなる発想を生み出すことはできないからな。思い出すことに特化しているからこそだ」

「シャッター記憶法みたいに？」

「そうだ。おかげでわかりやすいだろう？」

「ええ、うんざりするほどに…… 琢馬…… ありがとう、ほんとうにありがとう」

「適材適所だ。僕は爆弾魔には勝てない」

僕はため息をついた。琢馬は感情を伝えることを完全に放棄して、

詳しくはその紙束を見ろとばかりにたんたんとしている。それがかえって堪える。

琢馬のスタンドの本に記された繰り返される同じ日。辞書並みの分厚さなのは、それだけ僕達がなんらかの原因で全滅してしまい、巻き戻っているからだろう。誰か一人でも生き残って一確一によるスタンド攻撃を受けることが帆波奈帆子の目的であり、最終地点なのだ。その時点で勝利が確定するのだ。

今のところ、僕達は吉良吉影を待ち受けるために帆波奈帆子を撃破し、カラスからログハウスの鍵を入手。電気をいれて鉄塔やアンテナを起動し、電波虫のデストラップを解除という一連の流れを夕方までにしなくてはならないのだ。

そのまま吉良吉影と交戦することになったただではすまない。不安の芽はつまなくてはならない。だが今回からは負けたら最後、次のループから全員奇病に感染する強制イベントが発動することになる。

何重にも張り巡らされた計略には舌を巻くばかりである。それだけ僕達を奇病に感染させることでスピードワゴン財団に本気で治療法を確立するよう圧力をかけるつもりなのだ、帆波奈帆子は。

それだけ普通の人間への未練が捨てきれないのだろう。昔の思い出が金貸しのように責めたてるのだろう。

蛇のような執拗さで、追究せずにはいられないという顔をして。そうやって帆波一家を浸し始めているのだ。

逆をいえばそうやらないと生きてこれなかったのだろう。これに關してだけは囚人のような執念さを持っているようだから。胸に歯を立ててその心臓をかみ破ってしまいたいような狂暴な意地を感じる。

執念深く何度も同じことを繰り返す帆波奈帆子の目的が果たされたら、おそらく吉良吉影どころの騒ぎではなくなる。報復としてこの町にパンデミックでもされてみる、町は一瞬にして沈黙の夏を迎えることになるのだ。しかも時が水泡の中を動くように同じことの繰り返し

返しの先には必ず起こる強制イベントとなる。

エサの出てくるボタンを何万回でも押し続ける猿のように繰り返しても、毎日同じ仕事、同じことの繰り返し先の先でも訪れる結末は同じになるのだ。これを自覚した瞬間に僕らはきつと吉良吉影という最終目標より奇病の治療法の確立が優先事項となるだろう。僕達が拒否してもスピードワゴン財団が許さない。

「琢馬がいてくれてよかった」

僕は不意に琢馬の記憶が記された本のページがもう一度読みたくなつた。何の前触れもなく、あの紙の感触や、文字の形や、夜の空気を思い出したくなつたのだ。四個のカタカナが全部とろとろに溶けてしまうくらいまで、何度も読みたいとたまらなく思った。焦燥感にも似た感情だ。

もうやり直しが効かないことがわかったからでもある。

地獄のパノラマ絵を、一方から一方へ見まわして行くように、おんなじ恐ろしさや気味悪さを、同じ順序で思い出しつつ、いつまでもいつまでも繰り返して行くばかり。突破できそうな隙間がどこにも見当たらないが、なにがなんでも見つけなくてはならないのだ。僕は。

僕は空条さんに声をかけられるまで、偏執狂のように読み返えし読み返すのをやめることは出来なかったのだ。ちなみに琢馬はいつの間にか双葉親子の所に行つてしまい、いなくなっていた。

「どうした、ジョルノ。えらく早いな」

僕は空条さんに紙束を渡すのだ。

「時間がありません、空条さん。お願いしたいことがあるんですが、いいですか?」

早朝、ドナテロはリュックを背負い、自転車にのりながら空を見上げる。

「アンダーワールド」

呼ばれたスタンドのヴィジョンは本体の命令に応じる。昨日スピードワゴン財団が電力会社から得た情報により電気を供給してい

るときに記憶を掘り起こす。それは奇妙な光景だった。タケノコのように伸びていくアンテナ、鉄塔、そして電線、付随する電子機器、電柱たち。同じものがすぐ隣に並んでいくのだ。片方は電気が通らず、片方は電気が通る。

あきれるくらい高いアンテナ、あるいは鉄塔は町の背後にそびえたつ山なみに挑むように、その銀色の触手を空中にはりめぐらしていた。風が吹くたびにゆらぎが反響して輪唱のように重なっていく。

それは羽音だった。耳をつんざく暴力的な音量でそれは響く。巨人の悲鳴のようなその不吉な音は、山々に反響してぐるぐるとまわりを取り囲んでいく。電波虫がアンテナや鉄塔に吸い寄せられていった。

電信柱につながれた街灯が昼だというのにあたりを照らし出す。蜘蛛の巣のように張り巡らされた、暗い臓物のように宙に垂れ下がった電線にも電波虫がうごめいている。黒々とした太い電線が空中で蛇のように絡み合い、変圧器が据えられているだけだが、もはや輪郭すらみえない。

「気持ちわりい」

ドナテロはぞわぞわする体をさする。北アメリカに分布するオオカバマダラを思い出してしまう。夏の間カナダなどで発生を繰り返したオオカバマダラは8月の下旬、蛹から羽化した成虫は交尾もせず、南へと移動を始める。花の蜜を吸いながら栄養を蓄え、ひたすら南へと飛び続ける。夜は木陰などで休みをとりながら、南へ移動するにつれその数がぐんぐん増え続けていく。

その数なんと、数千万から1億とも言われ、最終地点の南米メキシコまで、3000キロ以上もの空の旅を毎年繰り返すのだ。

やがて越冬地に到着した蝶たちは松などの木にとまり、越冬の準備を始める。オオカバマダラの越冬地はカリフォルニア州太平洋沿岸数カ所と、メキシコの主に2カ所に集中しており、ロッキー山脈西側の蝶たちはカリフォルニアに、東側の蝶たちはメキシコに集まるのだそうだ。

あれほど多くはないだろうが、気持ち悪い虫だけあって蝶より好

感度が低いのは無理もないだろう。

「こっから見えるくらいだ、成功したみたいだな」

安堵の息をはきながら、ドナテロは自転車に乗るのだ。

「でもまあ、これで兄貴の役にはたてたかな」

ドナテロは笑うと鉄塔の山から離れていった。視界の隅には手を振るジョルノが見えたからである。

インスタント0 その3

ドナテロは社王グランドホテルに向かう途中、十台くらいの車を一気に突破する車を見た。目を引くほどの全速力だ、まるきり暴れ出した象のようだった。道路はひどい埃で、前に行く自動車は黄色い土煙の中に隠れてしまつて見えない。一塊の黄煙が疾走して行くようだ。

始発はもうとうに終わっている。駅舎もホームも照明がいらなくらい明るい。駅周辺の商店も、住宅も、明かりの漏れている建物は増えていき、町全体が目覚めますのだ。林や畑は夜の闇そのものみたいに真っ暗、というか真っ黒に映っていた世界が光に追放されていく。そのなかを示す道は細く頼りなく曲がりくねり、やがて山の上まで続いていくのだ。

速いスピードで走り続ける車は、とうに町を出て、山間の地形に沿つて曲がりくねる国道をどんどん進んでいく。フロントガラス越しに車内はのぞめない。暗い、先は何も見えない闇があるだけだ。そこを切り裂くように太陽の光が一定の間隔で現れては過ぎていき、林に遮られ、木漏れ日を踏んづけていく。

車が私道に入り、さらに加速する。ギアが変わつていく。車重を支えたタイヤが砂利を踏みながら進み、押しつぶされた砂利同士が擦れあい鈍い音が鳴る。やがて後輪まで車道に出るとその音は止み、真新しいアスファルトとタイヤのたてる静かな摩擦音が時速数十キロの速さでどんどんドナテロから離れていった。

「日本にも朝から物騒な運転するやつがいるんだなア」

朝食のあとは何をしようかとドナテロは呑気に考えながら帰路に着いた。

彼が物騒と称した車がクラッチをつないで、アクセルに力を入れる。限界域までアクセルを踏み込んでいた。次々にシフトを上げていく。タイヤのまきあげる砂利がぱちぱちと乾いた音を立てた。

昼間でも鬱蒼とした樹々が左右から車道を覆つて薄気味が悪い上、どんなにスピードを上げて走つたとしても、まるで懐中電灯を頼りに山道をとぼとぼと歩いているような薄暗さになる。ものともしない

で車は進むのだ。

ハロゲンライトの青白い光の中だけにあつた山の道である。その光の中に突っ込むようにアクセルを踏み、後輪を滑らせてカーブを曲がる。前方を照らす青白い光塊は、追っても追っても先へ逃げた。

運転に不安は感じない。かなり際どいタイミングで車線を変えるのに、まるで磁石の同極が触れ合わないような、絶対にぶつからないという安心感がある。自動車は、底力のこもった爆音をたてながら、ひた押しに登って行く。そんなに飛ばすと事故するという声は風に紛れて届かないだろう。

その音が近づいてくるにつれ、タイヤと路面の摩擦音がどんどん小さくなり、減速しているのがわかる。

「ジョルノたちは身構えた。」

フットブレーキを踏むたびに小型のニワトリを絞め殺しているような悲痛な音がある。前につんのめるようにして急ブレーキの音を響かせて急停止する。だんだんしずかになって、いくつかのシグナルがゆるやかに止まる。ディーゼル・エンジンが最後の一息をしぼり出すように排出してしまおうと、そのあとには完全な沈黙がやってきた。

がちやり、とドアが空いた。あと2ヶ月もすれば黒づくめの女達をみた誰もがマトリックスのポスターやワイヤーアクションを思い浮かべただろうが、ジョルノたちが真つ先に思い浮かべたのはメン・イン・ブラックだった。

「随分と早いご到着ですね」

「わかつてたことだけどよくマジではえくなア」

「鉄塔やアンテナに電気が通るんだ。山頂で爆発音がしたからな、トランプが発動してログハウス自体が炎上したんだろう。にも関わらず監視カメラだけが停止しているとなれば、駆けつけもする」

「あの女全員帆波奈帆子のスタンドで生み出された偽物なんだよな？ 本体を捕まえなくちゃあいけないな」

「とりあえず、あの人らをとめねーと俺たちが捕まっちゃうけどなー」
「あ、あれが帆波奈帆子さん……」

「どういう意識共有をしているのかはしらないが……そうか。本

体同様のスペックがあるなら1人くらい本体と成り代わってやるという気概のあるやつが居ないか期待したんだがいなさそうだな」

「露伴先生のスタンドでやりますか？」

「再起不能になってるだろうから意味が無いがね。僕は色々話をしてくれる口さえあればいいんだよ」

「やれやれ…… まさかこの町でこれほどの死闘をする羽目になるとは来た時には夢にも思わなかったぜ。だが、これ以上はなしだ」

承太郎のつぶやきにジオルノ達は頷く。

「なあ、車に誰か乗ってねえか？」

億泰の言葉にジオルノ達は弾かれたように顔を上げて注意を向ける。軍隊の行進のように隊列を組んでこちらに向かって一矢乱れぬ動きで歩いてくる帆波奈帆子たちとの距離が縮んでくる。

「——アイツは！」

ジオルノは目を見張った。忘れもしない、スピードワゴン財団職員に成り済まし、音石からスタンドの矢と5億円相当の金品を横取りして消息不明になっているブラックウォーターパークのスタンド使用だ。

「気をつけてください、みなさん！車の中に奴がいるツ！行方不明だったブラックウォーターパークのツ!!」

複数の球体が上空に出現した時点でジオルノはやつがなにをしようとしているのか察した。最後まで言い終える前に傍らにいたはずの承太郎の気配が消え、数十メートル先に移動している。帆波たちがなにやらかまえたので、億泰がすかさず仕掛けた。

「承太郎さんの邪魔すんじゃあねーぞツ！このダボがアツツ!!」

ザ・バンドによる空間の消失により、彼女たちとの距離が一気に縮まる。交戦するかと思われたその刹那、真っ黒な液体に満たされた黒い球体がジオルノたち、そして帆波奈帆子たちもろとも飲み込んでしまう。

ちら、と振り返った承太郎は、ただちに状況を把握して、殺意にも似た衝動を男に向ける。朝の海風のように胸を吹き抜けるそれを財布のように胸のポケットに隠しながら、切羽詰まったなにもかもが爆

発的な殺意に変わるのを緩やかに自覚していた。終りなき鬼気の始まりである。

承太郎の目には明確な殺意がある。やっと正体を現しやがったな、と承太郎は口火を切る。

「どうやってアメリカギャングからスタンドを剥ぎ取ったのかは知らねーが…… 昏睡状態でろくに事情聴取も出来ねえんだ。てめーにそのスタンドをくれてやったやつについて、じっくり話を聞かせてもらおうじゃあねえか」

男はなにも言わない。不敵に笑うだけである。承太郎は静かに緑の瞳を細めた。

「本能で感じるほど近くにいちやいけない人間ってのは久しぶりだ。一緒にいると、性根がべとべとにくさってしまいそうだからな。特にテメーのような、心のなかでは何時でも気紛れな殺人を考えていて、赤の他人にそれを代行させて満足する反吐が出るようなヤローはなッ!!」

承太郎の傍らにスタープラチナが出現する。

「なるほど…… テメーをぶっ飛ばせば仗助達を助けられるってわけか…… 実に単純でわかりやすい。助かるぜ、手加減できそうもないし、ドナテロのおかげで手加減する必要もなくなったからなッ!!」

承太郎は殺意だとか憎みだとかいうものは、生活に暇があつて感情を反芻する贅沢者たちの取付いている感情だと知って10年になる。忙しい人間は横着にも感情さえ一過性で、収支決算をつけて、決して掛勘定にしない。感情さえ現金キャッシュ払いだ。いつだつて現実から現実へ飛び移って行くものだが、殺意だとか、憎みだとかいうものは、感情に前後の関係を考える上で大切なものだ。

今、この男は空条承太郎を怒らせた。戦う理由などそれくらいシンプルでいいのである。

(何かあるのか……?)

ジョルノが遠くを見ようとした時殺気が走った。

「ゴールド・エクスペリエンス!」

間一髪だった。ジョルノは背後からの一撃を受け止めた。襲撃者は闇に紛れて攻撃してきたのだ。気を取られた一瞬を狙っての不意打ちである。

「無駄ア!」

ゴールド・エクスペリエンスで受け止めた、背後から首筋を狙った敵の手刀を振り返りざまにグイツと引っ張る。バランスを崩して前方へとつんのめる襲撃者に向かって一歩踏み込み、その腹をスタンドの拳でブチ抜いた。

妙な違和感を覚えてジョルノは眉を寄せた。ゴールド・エクスペリエンスの一撃は命中したが、おかしな手ごたえにジョルノは戸惑った。そして気がつくのだ。2度目となる太陽から追放された世界にて、ジョルノと巻き込まれたはずの女ではないということに。

「な……に?……なんだこれは……」

そう、襲撃者はボクシングで使われるサンドバッグだった。そして、腹を貫通したゴールド・エクスペリエンスの腕は、腹をブチ抜いたのではなかった。サンドバッグがゴールド・エクスペリエンスの腕を腹を通して固定したのだ。

「マズイッ! 抜けないッ!」

ゴールド・エクスペリエンスがサンドバッグごと振り抜き、二撃目の攻撃にぶち当てる。サンドバッグが物凄い音をたてて切断され、ゴールド・エクスペリエンスの首元に鋭利な刃先がチラついた。

「なるほど…… スタンドで戦えないから、手段は別にあるってわけですか。ドナテロにも言うべきだな、無防備になるならスタンドより本体が強い方がいいに決まっている!」

刃物があるなら分が悪い、距離を取らなければ。だがジョルノは安堵した。もし相手が実戦経験が皆無な癖に百戦錬磨の投げナイフの名手とかいう意味のわからない性能をもっていたら、いつものようにジョルノの腹にナイフの二三本はふかぶかと突き刺さっているから

だ。

4 大毒蛇の実験体の報復はなかなか過激だったことを思い出す。ゴールド・エクスペリエンスですぐさま無力化できるとはいえ、仗助とは違って治療に時間がかかるジヨルノは内蔵までぐちゃぐちゃにされたらさすがにキツイ。

ジヨルノは前を見すえた。

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アアアツ!!」

ゴールド・エクスペリエンスが蹴りを放つ。連蹴りだ。飛びあがって両足でめちやくちやに真つ暗闇で輪郭しかわからない正体不明の相手を蹴りつけ、サンドバッグを押し付ける。強引に腕を引き抜く。そして引きぬいた勢いでそのまま後ろへ跳ね飛び、敵の射程から脱出する。

ジヨルノは慎重に体勢を整え直す。出来ることなど限られている。スタンドである写真を実体化できる能力が不発になるまで完膚なきまでに本体を叩くのみだ。

ゴールド・エクスペリエンスが両の拳を構えた。

「なかなか我慢強いですね。これでもパワーはそれなりに上がったつもりなんだけどな……。いや、違うか。何か着込んでますね、あなた」

だからといってブチ抜いて穴の開いていた腹がノーダメージなわけがないが普通の攻撃は通用しないのは間違いない。なにかトリックがあるに違いない。まずはそのナイフが邪魔だ。

ゴールド・エクスペリエンスの拳が黄金色のエネルギーを宿して本体に殺到する。ジヨルノが狙っているのは、その刃物を蔦に変えることだ。内側から絡めとるのだ。

「ッ!?!」

ゴールド・エクスペリエンスの拳から破裂音がした。フィードバックはすぐにジヨルノにもたらされる。放たれるはずだった生命エネルギーは奇妙にねじまげられ、まったく別のものを生み出した。頭の片隅で光源を求めているジヨルノのために蛍があたりにはワツと舞い始めた。ゆつくりと太陽が追放された世界は温度がさがっていく

ため、ホタルはただちに死んでしまおうが一瞬の煌めきが両者を照らした。ジヨルノもさすがにたじろいだ。

「……そうか、アンタたち岩人間は体を硬質化出来るんだったな……」

それはナイフではなく、手刀だった。恐ろしく硬質化している、人間の手だったのだ。

「ゴールド・エクスペリエンス！」

再び拳をふるう。

ジヨルノはこの状況を理解しようと思死で騒ぐ心を落ち着かせようとした。だが敵は待たない。その鋭いきつ先をジヨルノ目掛けて振りかぶる。

「防御しろッ！ゴールド・エクスペリエンス！」

ひっくり返したトマト・ジュースのようにまつかな血が吹き出す。

「……頭じゃあ……ないだど……？なんだって……腕を潰したんです……？」

「もって数分でしよう？」

初めてオンナは口を開いた。

「あなたが一番厄介なのよ、汐華初流乃君。吉良くんにはあなたの生体探知からして、1番厄介だと言われているから。悪く思わないでね、優秀すぎるのよ、あなたの索敵能力はね。吉良くんの私物すら優秀な探偵になるんですもの。だから、潰すなら念入りにね」

「無駄ア！」

女が鉄拳を発動する暇もなく、ゴールド・エクスペリエンスの右足が女の左脇腹に突き刺さる。ジヨルノの情け容赦のない一面が、その蹴りの重みに如実に現れていた。

「ぐうッ！かハッ！」

ゴールド・エクスペリエンスの全体重を乗せた前蹴りを喰らい、真っ黒な山道に蹴り飛ばされた。女の口から吐き出された生暖かい鮮血が霧のように漂う。その軌跡を視線で追ったジヨルノは、感情を発露させない無表情さで冷たく言い放った。

「今の蹴りで肋骨二本折れただろう……」

ジオルノは倒れている女へ歩み寄る。

「それがどうしたっていうのよ」

帆波奈帆子は脇腹を押さえ、内臓から吐き出された血を吐き捨てて、冷たい瞳の色を湛えて迫るジオルノを睨みつけた。眼光は鋭さを全く失わず、闇に閉ざされた世界においても凜として輝いていた。

「口から血を吐いたってことは、かなりダメージを受けたはずだ。肺に肋骨が刺さってるかも知れないな」

帆波は右手に重量を感じていた。薄闇の下、冷徹な表情で迫る少年の影。そのすぐ後ろに、ただ立っている人影。一瞬の猶予もないことは帆波自身が知っていた。だからこそ素早く行動しなくてはならない。

闇を割くように女の右腕がジオルノを目掛けてしなった。右手の確かな重量は、手斧に変質し、がジオルノを脳天から真つ二つにしようと暴威を振るう。

「グッ……」

「これでスタンドは使えないわね」

「そんなことをしても……」

ジオルノは眉一つ動かさずに女の攻撃に対処した。ゴールド・エクスペリエンスはジオルノから数メートルはなれた位置から出現し、無造作に蹴りを放つ。その腕を埃でも払うように簡単に打ち払う。

「無駄ア！」

音高く弾かれ、見間違いの方向へと吹き飛んだそれだったが、無理やり軌道を変えて殴り掛かる。

「チツ……」

軌跡を追うこともせず、ジオルノは舌打ちすると使い物にならない手をそのままにかわす。

帆波は長身を床に翻した。ジオルノの脇に飛び込み、柔道の受身の要領で一転する。その身のこなしの流れるような素早さは、脇腹に負った怪我を感じさせない。ジオルノは無言でゴールド・エクスペリエンスを発動させる。ゴールド・エクスペリエンスの右拳が暗闇に潜んだ標的を的確に殴り抜く。

「捕まえたわよ」

暗闇に慣れたジヨルノの瞳は大きく見開かれ、ゴールド・エクスペリエンスの動きすら停止する。驚愕の深さが冷静なジヨルノの顔にさえ浮かんでいた。

「殴ったのは……僕ツ!？」

ゴールド・エクスペリエンスが殴っていたのは帆波奈帆子ではなくジヨルノだった。生命エネルギーによりぶん殴られ、のたうち回っている。ジヨルノが凍りついた一瞬を帆波は見逃さなかった。今まで隠し続けていたスタンドを発動させる。

「娘と仲良くしてくれてありがとう、感謝するわ」

「…… 仗助先輩の時と同じ手ですか……」

監視カメラの映像を撮影したらしい。

「でもね、無断で娘の家に上がり込むのはどうかと思うのよ」

「帆波夏帆からの誘いでも?」

「普通は遠慮するわね」

「もう1人の僕に何をしたんです?」

「無機物に意志を与えることはできないのよ。操作はあくまで私」

「なるほど、フィードバックは互いにならないらしい」

「そうね」

ジリジリと二人の距離は詰まり、空気すらもジリジリと音を立てるような緊張が走った。その緊張で帯電したような空気が二人の瞳を照らすのか、互いの動きを手取るように察知していた。

どちらが先に動いたのか。それは分からない。偽物の腕とジヨルノの脚が素早く動いた。ほぼ同時の相打ちだ。全身に何箇所ものダメージを負ったが、それを予見していたジヨルノはすぐにゴールド・エクスペリエンスで部品を作ってそれを治療する。時間はかかるが止血くらいならすぐ終わる。痛みを堪え、そのまま偽物にラッシュを浴びせる。

「気分がいいもんじゃあないな、自分で自分を傷つけるってのは…… だが、成長しない僕に負けるほど僕は弱くはない」

偽物は膝を突いてその場に崩れ落ちた。全身を包み込むように悪

寒が走り、ガクガクと膝が震えて力が入らない。視界は狭窄してまぶたの裏で火花が散る。額には脂汗が滴り落ち、背中には冷や汗が流れる。

「頭痛がする……吐き気もだツ！なにをさせたんだツ!？」

帆波奈帆子の意思がジヨルノの声帯でしゃべる。

「あいにく僕のスタンドはタイムマンはるスタンドじゃあないんだ。搦手がいる。いつだってな」

偽物は目を見開いた。

「電波虫つてのは、頭に入ると体が言うこときかなくなるのは身をもって体験したが、僕が作ったらどうなるのか、試させてもらった」偽物とはいえ、普段のジヨルノなら避けることも可能だったかも知れないが、今のジヨルノは本物と絶望的なまでに経験値が足りなかった。具体的には電波虫に対する経験値が。動揺し、本体も、そしてスタンドさえも普段のキレを失い、精彩を欠く。

「クツ……」

偽物は鈍くなった身体を懸命に動かして立ち上がる。フラフラとしながらも瞳には未だ闘志が燃えている。しかし、その先には帆波奈帆子がいる。

「ゴールド・エクスペリエンスッ！」

偽物が精神力だけでスタンドを発動させた。朦朧とした意識ではスタンドも普段の能力を発揮しきれていない。スピードも遅い拳の乱打がとぶ。拳の乱打を帆波の鉄拳が簡単に弾き返すが、その隙にジヨルノは懐に飛び込んだ。

「近づくんじゃないわよ、クソガキが！」

ジヨルノは弾き飛ばされた。

帆波の右足が素早く偽物の左足に蹴り下ろされた。その容赦のない蹴りは偽物の足の甲の骨を粉砕するだけの力が込められていた。身体の動きが鈍くなった偽物では、それを避けることはできなかった。ひっくり返り、地に伏せる。

帆波はそれだけでは終わらない。更なるエゲツナイ攻撃が繰り出された。膝蹴りがジヨルノにヒットする。男にしか分からない苦し

みを受けたジヨルノは悶絶した。

ジヨルノが急所蹴りを受けて全身の力を脱力させた一瞬をつき、帆波がジヨルノを組み敷く。引きずり倒した。うつ伏せに倒したジヨルノの脚を固め、後少しでも持ち上げれば折れるところまで捻り上げている。

「ゴールド……」

「そんな鈍くなったスタンドで何をしようっていうの？両手はもうないじゃあないの」

ジヨルノがゴールド・エクスペリエンスを出した瞬間、帆波の背後からまがましい色をしたスタンドが羽交い絞めにした。スタンドも、そして本体さえも押さえつけられ、ジヨルノは最早抵抗することができない。

「一応聞くけれど、降伏する気は？」

「僕を…… 馬鹿にするな……」

ジヨルノの脚の骨は音高く折られた。

「もう一度聞いわ、リタイアする気は？」

「無駄なことを…… 何度も聞くなッ……」

ジヨルノの脚はもぎ取られた。

「勘違い…… してるのは…… アンタの方だ、帆波奈帆子ッ……」

「なんですって？」

人間の力で腕をもぎ取ることなどできるはずもない。もはや目の前の女は人間ではないのだ。引きちぎってしまったジヨルノの片足を捨てて、威圧的に問いかけてくる。ジヨルノの意思は揺るがない。

「…… たしかに…… 今…… 僕はヤバイ。この上なく、やばい…… だが…… 僕は、この瞬間を、待っていたんだッ…… !!」

ジヨルノは組み敷かれたまま、たんとんと言葉をつむぐ。

「強がりもたいがいね、流石はD I Oの息子ってところかしら」

ジヨルノは一笑した。

「…………… 僕が、D I O から継いだものは…………… 僕の明日のために…………… 使うべきものだ…………… 誰のためでもない…………… 僕自身の…………… これからのためにツ!!ゴールド・エクスペリエンスツ!!」

帆波がもぎ取ったジオルノの脚が樹木に変化し、帆波の体を一閃した。皮膚がさけ、肉や骨がくだけ、えぐられ、養分となる嫌な音が響き、少しの間を置いて鮮血が迸る。血は、その赤さを更に増していた。ぐしゃり、といやな音がした。口から、目から、耳から、枝が生え、幹となり、内側から破壊されていく。

「消化器官は全て繋がってるんだ。人間と同じ構造をしてる自分を恨むんだな」

帆波はうめき声を上げてジオルノを睨みつけた。その鋭い視線を受けてジオルノは応じる。人間と同じことを恨むわけないじゃあないのよ、と言っている気がした。帆波はそのまま絶命する。ジオルノは息を吐いた。

「まずいな…………… 意識が遠くなってきたぞ……………」

見上げても見えるのは、満天の星空だけである。

インスタント0 その4

「ドラアツ！」

クレイジー・ダイヤモンドが唸る。咄嗟の防御行動も、拳銃の弾より速い鉄拳の前には紙同然であった。そのパワーを突き破り、つぶてが次々と仗助に襲いかかる。

「ドラララララララララララララララララアーツ!!」

ラツシユを浴びせる事で、攻撃を弾こうとした仗助だったが、やはりすべてをさばききれずに、いくつかもらってしまった。

「ぐうつ……い！」

鮮血が迸る。転倒せずにどうにか耐えられたのはさいわいだった。地面に転がった瞬間に首と胴体は二度と会えなくなるだろう。

「……？」

攻撃が終わると、不自然なことに仗助の周囲は静寂に包まれた。ジヨルノが交戦したときの情報とたがわず、相変わらずあたりは薄暗く、そして寒い。女なのにガチガチの肉弾戦をしかけてきたために、犠牲になった山道周辺の木々が散乱している。

(なんだよ、なんだよ、やめてくれよア〜。なんで攻撃してこねえんだ……。不気味すぎるぜ、こいつはよお〜……。)

あたりを警戒しながら帆波奈帆子を探す。

「うをつ!!」

視界不良が気づくのを遅らせた。仗助は吹っ飛ばされ、木々を突き破りつつ地面に転がった。

「ぐツ……なかなか効いたぜ、この一撃ツ」

どうにか起き上がるものの、全身のダメージは限界に達しようとしている。そんな彼の前に、自信に満ちた影が立ちはだかった。だがものともせずに距離を詰めてくる仗助に、帆波はからかうような笑みを浮かべた。

「あら……向かってくるのね……逃げずに私に近づいてくるのね……」

「……女をぶん殴るってのは、ショージキ嫌なんだけどよオ……ん

な事言つてたら三途川渡つちまいそうだし……アンタを倒さなきゃあ、出られねーみてーだしイ……それに近づかなきゃあよオー……ブチのめせねーからなあーッ！」

「そう。なら近づいたらいいわ。わたしもその方が楽なもの」
「奇遇だな、俺もだぜッ！」

二人がほぼ同時に、スタンドの射程距離内に入った。強大なスタン
ドによる空気が張り裂けんばかりのラッシュの応酬が始まった。

「ドラララララララララララララララララララララララララララララララアーツ!!」

帆波は冷え冷えとした眼差しのまま、拳が拳を捉え、一進一退の攻防が繰り広げられる。ゲゲゲツと仗助は顔がひきつるのがわかった。(なあにが人間だよ、承太郎さん！生身の人間がスタンド攻撃に対応出来るとかおかしいだろオツ!!?やつべえ、あまつちよろいこと考えてたらこつちがダルマにされちまうッ!)

永久に続くかと思われた打ち合いも、予想外に早く終わろうとしていた。仗助の息が荒い。いままでの戦いで負ったダメージが響いてきているのだ。

「スピードが目に見えて衰えてきているわよ、東方仗助さん。……さっきの威勢はどうしたのかしら?」

「くっ……」

クレイジー・ダイヤモンドの胸板を貫こうと、帆波一撃が繰り出された。

「ドラアツ！」

帆波の拳はクレイジー・ダイヤモンドに打ち込まれた一撃に捉えられ……コンクリートのように砕け散った。

「ウグウ……」

バラバラに打ち砕かれ、鮮血が噴き出している右手を押さえつつ帆波はうめいた。クレイジー・ダイヤモンドはスタープラチナのガードを突破しかけた実績がある。負傷しているとはいえ、仗助が純粹なパワー比ベで遅れを取るわけがなかった。再び怒涛のラッシュが帆波を襲う。

「別に……。この銃であなたを殺そうと思っていないわよ。殺すのはわたし。わたし自身……」

「はああくツ？何だつて？ それはつまり、自殺つてことかよツ？」
「ええ、そうよその通りよ。もうあなたを殺せない。その体力すら残つてない……。でもね？わたしはいつだつて全てを自分の力だけでこなして来た。誰の力も受けず。それは死ぬ間際だつてそう。私は揺るがないツ！ 私は最期までやり遂げるツ！」

それ故に彼女は死を選ぶ。自ら笑顔で、自分自身に引き金を引く。仗助はやめろと叫んだ。クレイジーダイヤモンドで銃を弾き飛ばそうとした。だが硬質化した手が銃と一体化して離れない。そしてわざと岩にならない顔面掛けて彼女の拳銃は目から脳天を貫き、そのまま絶命した。

仗助は呆然と前を見つめていた。

くらやみの世界は、容赦なく仗助の体温を奪っていた。やべーな、こつから出る方法探さなきゃ、と頭は思うが体はピクリとも動かない。仗助は満身創痍だった。骨は至るところ折れているし、血が流れ出ていた。足の先から頭のとっぺんどころか心臓までつめたい。はやくジヨルノに直してもらわないといけない。とびきり痛いだろうが。

それ以上に仗助は精神的に限界だった。相手の体から血がとびちる嫌な音とかを目の当たりにしてもなお仗助はこの最悪の結末を否定していたが、帆波奈帆子の死体をぼんやりと見つめているうちに全てを受け入れた。

受け入れると同時に、その場に倒れてしまった。

そして黒い空を見て、どのくらいの時間が経ったのだろう。仗助は一度、ふう、と息を吐いてみた。冷たい息は白く凍り、宙に溶けていく。体は芯から冷え、もはや感覚もない。ちよつと横を向くと肌が引きつり、声を出せば肺いっぱい冷気が満ちた。

「……帆波さあん……」

相手は応えない。うつろな瞳は凍りついて、どの空間をさえも見えない。死が隣にある恐怖と、何ともいえぬ悲しみは、それを体験し

た人間にしかわからない。これから先一生埋めることのできない距離が死体と東方仗助の間に横たわっていた。

「偽物だからってよオ…… なにもしぬこたねーだろ…… ツ！」

理解される必要などないと帆波という女は思っているに違いない。コピー元とすん分たがわぬ人間だというのだから。それを寂しいと思うのは仗助の勝手だが、その勝手を聞き入れてくれる人間はもうどこにもいない。死人に口ナシどころかとうとう無になった。

仗助は一度、弱弱しく咳き込んだ。血の混じった唾きが闇に消える。

物言わぬ亡骸はゆつくりと風化していく。仗助を感傷にすら浸らせてはくれなかった。？

ブラックウオーターパークの世界から開放されたとき、1番の瀕死状態はジョルノだった。スタンドパワーが露骨に響いた形である。臆朧とする意識の中でパーツを組み上げ、まだ浮かない顔をしている仗助のクレイジーダイヤモンドで治療してもらった。真っ先に回復したジョルノは、仗助の治療に取り掛かるのである。

「麻酔はいりますか？」

「ぜってー嫌だぜ！重ちーから聞いているんだからなッ！毒蛇なんてゴメンだ」

ジョルノは肩を竦めた。

「そんなに口が回るなら大丈夫そうですね」

聴診器の先を睨みつけている医者のように眉間に深い皺が寄り始める。その皺は刻々と深くなっていく。

「あ、そんなにやべーの？」

「よく喋れますね、きみ」

「いだだだだだっ！」

患者をただの実験材料として扱うような浅はかな医者のような顔をして、ジオルノは無遠慮に仗助の往診をする。自己申告は早々に意味が無いと判断したのか聞く素振りすらない。

ジオルノは仗助を必要以上に喜ばせることを決して言わない。後のショックを小さくするためにも、期待を抱かせない。たんたんと行うのだ。クレイジーダイヤモンドと違うのは、治すのではなく、埋めるのだ。だから骨が折れたらそのパーツを作って埋め直す。埋めるために除去作業が必要になる。もちろん麻酔はなしで外科手術しているようなものである。想像を絶する痛みが仗助に襲いかかるのだ。ほかの人たちはクレイジーダイヤモンドかゴールドエクスペリエンスかの2択だが、仗助は初めからゴールドエクスペリエンスしかないのだ。理不尽だが仕方ない。

ジオルノがいいかげんだったら骨や臓器が異常をきたして急死したにちがいない。あるいは生命エネルギーにより不思議臓器が何故か稼働することになる。

「よかったですね、臓器にダメージはあるが損傷はない」

「あんまよくねーけど」

ジオルノは骨の下のあたりに手刀のような形に揃えた指先をぐいっとめり込ませる。

「いてえってー！わざとするな！」

手袋すらしない手術に康一たちは直視できないのか痛い痛い痛いとして見ぬふりをしている。ジオルノは表情ひとつかえない。

ジオルノ曰く本当に助けたかったらシンクロしたり、共鳴したりしてはいけならしい。強烈にただただ同調を求めてくる相手に波長を合わせないようにしないと手元が狂うと。仗助には腹ぺこのとき目の前にごちそうがあっても気にしないようにする、それと同じくらい難しい。向こうは命がけで望んでいるのだから。エネルギーのすべてをその一時しのぎに注いでくるのだ。そんな性質がクレイジーダイヤモンドを産んだ。

仗助とジオルノはスタンスは違えども自分が何をしたいのかを忘れないようにするという共通点がある。その基本に常に意識を合わ

せる。適当にでも何でも、合わせる。とりこまれないようにする。

自分が手伝おうとしているもののほうに協力体制がないことに時々ものすごく疲れるが、ジヨルノは顔に出ないし、仗助は出る。それだけの違いだ。

ジヨルノは仗助の体に真一文字に分厚い筋肉を引き裂いていった。粉碎している骨や折れている骨を一本一本除去して取り出し、すべてゴールドエキスperiエンスで作り替えては埋め直し、すっかり埋め直してしまう。グロ画像である。直視なんか出来るわけがない。

後は糸を使わない縫合をするだけだった。ゴールドエキスperiエンスによる生命エネルギーで満たされた箇所は、自然治癒力を高めるために過剰に投与されている。

「ジヨルノさ、医者になれよ。名医になれるぜ。特に外科のさ。すげーよな、細けー」

「君のスタンドみたいに万能じゃあないだけですよ。無理やり治療の真似ごとをしているだけです。僕のスタンドじゃあ、移植手術が基本ですからね。それにほかの人間に見られでもしたが最後、ブラックジャックになるしかありませんね」

「いーじゃん、ブラックジャック。めっちゃ治療費稼げるし。スピードワゴン財団から勧誘来てんだろ？」

「誰から聞いたんですか、まったく……。どのみち学校に行かなくてはならないんだから、僕はまだ働く気はありませんよ」

はい、おしまいです、とジヨルノは立ち上がった。すると露伴の焦った声が聞こえてくるではないか。

「吉良吉影の姿があるッ！いそげ、急ぐんだッ！承太郎さんはまだ帰ってこないのか！」

「マジかよオ、俺たちまだ治してもらってねーのに！」

「万全なのは俺とジヨルノだけかよ……いつもより随分早いご帰宅だな、吉良吉影！」

「なんて運がいい……偽物連行してる時に帰ってくるなんて」

「お、怖気付いたのかよ、ジヨルノ」

「まさか。ただ空条さんがいないから手間がかかると思っただけです

ダイヤモンドは砕けない

雨を含んだ薄墨色の空が広がる中、一人の男が鉄塔の山を訪れた。上を見れば一面にかき曇り、今にも雨になりそうなほどに空が崩れてきそうで、どんどん黒い雲が増えていく。みるみる空がまつ黒になる。たちまち墨のような重い空となった、人と別れた瞳のように水を含んだ灰色の空は影さえ薄れさせていく。

山の木々も変に白っぽくなり、山の草はしんしんとくらくなり、そこらはなんとも言われない恐ろしい景色にかわつていった。今日のように雲行きの怪しい日は、女性の手を手に入れたという誘惑にかけられることもなく集中して帰宅することができるので吉良吉影は気に入っていた。

タクシー越しでは窓を挟んでいると空が白くても雨が降っているかどうかはなかなか判別がつかないが、さいわい降ってはいなかった。念の為傘をさし、雲が湿気の重みに耐え切れなくなって雨を落とし始めたのだろう頃合いを見計らって歩き出す。

黒板から降る白墨の粉のような、暗い冷たい霧の粒が、そこら一面踊りまわり、あたりがにわかにはインとして、陰気に陰気になった。

さあつと雨がきて、かさがばらばらと大粒の音をたてる。潮がひいたようにしんとなって、むしむしと蒸しはじめ。滝にでも打つたかったか、氷囊でも打ち破ったかと思われるような狂的な夕立に遭った。

さつきまでの青空に、不吉なほどに黒々とした雨雲が波のように押し寄せてきたかと思うと、蛇口を捻ったかのような唐突さで、雨が降りはじめ。

ざあざあと降りしきる雨の中に、荒海の潮騒のようなものすごい響きがあった。何か変事でもわいて起こりそうに聞こえていた。

思えば昨日の夜も眠りにくかった。十二時頃夕立がした。その続きを吉良吉影は心待ちに寝ていた。しばらくするとそれが遠くからまた歩み寄せて来る音がした。虫の声が雨の音に変わった。ひ

としきりするとそれはまた過ぎて行った。

どうせ夕立ちだ。夕立ちが過ぎ去ると、あとには水浸しになった道路が残り、太陽が戻ってきて、その水を全力で蒸発させかけろうのよ
うな蒸気に覆われる。

この生活を初めて1ヶ月がたつ。15歳の少年が家出したあとに行われた父親の殺人容疑をかけられていたら、私立図書館の司書の別荘にかくまわれていた描写を思いだすくらい穏やかな日々だった。

帆波奈帆子は吉良吉影に一切興味が無い女だった。一礁一という男と背格好や体格が似ているという、ただそれだけの理由で衣食住やら職業やらを斡旋した。一礁一という男のライフサイクルを守るこそそがこの世で1番大切なことだと信じて疑わなかったのだ。

吉良吉影も娘の帆波姉妹のことは全く覚えていなかったが、自殺した中学生と言われたあたりで母親が散々近づいてはいけないお友達リストに載せていつてきかせていたことをようやく思い出したくらいだ。帆波夏帆は吉良吉影に敵意を示して殺しに来たが返り討ちにした。互いにトドメを指すには一歩足りず、どうあがいても倒せない
とわかった時点で帆波夏帆は鉄塔の山には立ち入らなくなった。

帆波奈帆子は一礁電器で90日のサイクルで1週間のうち1日一礁一として事務職を行うことだけを吉良吉影に求めた。本職たる電工は別の男に頼んでいるようで吉良吉影はあつたことがなかった。吉良吉影の本拠地となった鉄塔の山は奇病に感染したカラスに設置したカメラを監視するために使われた。

出かけるのは追跡者たちを襲撃するためにスタンドの矢をいるか、事務職をするか、帆波奈帆子が用意するための好みの女の写真撮影に費やされた。プライベートには一切口を出さない女だった。一礁一の世話をやくために鉄塔で寝泊まりするような女だから、身だしなみなどあつてないようなもので吉良吉影の好みからは外れていた。

「なぜここまで私に協力するんだ？」

一度だけ帆波奈帆子に聞いたことがあるが、興味なさげな顔をしていうのだ。

「あなたに協力すればスピードワゴン財団は私達を調べあげるわ。奇

病について危機意識を持ち、対策をねるでしょう。運が良ければ治療法が見つかるかもしれない」

「スピードワゴン財団に協力しても同じだろう」

「全く違うわ。人間、本気で相手のことを知ろうとするのはそれだけ相手を脅威と認識した時だけなのよ。協力関係になった時点で倫理観や人道的観点が邪魔をする。肉の芽に関する研究がどれだけ進んだと思うの？それだけ調べ尽くしたからよ。くだらない価値観なんてどうでもいい。生半可な研究なんていらぬのよ」

見せてもらった肉の芽の研究の時点でスピードワゴン財団にも内通者が何人も入り込んでいるのは明白だった。抜かりないことだと感心したのを思い出す。デンマークと日本の医者が共犯者なのは奇病に感染したのだろうと容易に想像出来た。

そして時間は経過し、カラスたちが帰ってこなくなり、スタンド使い達が倒され、この場所が特定されたようだ。帆波奈帆子から毎日報告があるたびにじりじりと吉良吉影は追い詰められていった。人間の頃のように爪を噛むと指が硬質化してしまい血は出なくなつた。歯も岩のように固くなるから金属のような音がするだけだった。そのたびに吉良吉影は人間ではなくなつた自分を自覚する。

そして、DIOの協力者に約束通りスタンドの矢を渡した吉良吉影は、お礼としてなにかの破片をもらった。忘れもしない。虫の彫刻の一部と思われる、スタンドの矢と同じ色、硬さ、をしたものだった。それがキラークイーンに勝手に刺さつたのだ。そして一体化した。この時、吉良吉影はキラークイーンがなにか変わったのだと自覚する。具体的になにかとはいえないが、なにかが変わつたのだと思つたのだ。

そして、吉良吉影が週に一度の一確電器での事務仕事を終えて鉄塔の山に帰る度にデジヤヴが増えていった。具体的になにかとはいえないが、なんとなく、なにかがあつたのだ。

それは例外なく、今日もであつた。

爆発で起こった熱気で焦げる。地響きがして、西北七八百メートル辺りのところに黒煙の柱が立ちのぼった。重々しい響きとともに、黒い煙が一すじ薄くなびいていく。

帆波奈帆子たちが乗り捨てた自動車のルーフがアルミ箔のように破れて炎を噴く。自動車の炎はさらに巨大化して、天に向かって猛々しく咆えていた。

吉良吉影は弾丸を装填された拳銃を手取るような仕草でキラークイーンを発動させる。そのたびに重みが増す。キラークイーンの弱点は一度発動すると爆発させないと次がうてないことだが、頻繁に爆発させればその限りではないのだ。

そこには間違いなく死の気配があつた。死そのもののように硬く冷ややかな感触だ。

キラークイーンが爆弾に変えたそれを発射する度に、吉良吉影は腕の神経に震えるような刺激を感じた。ふれている場所から、身体が緊張していく。自分を超えたもの、とふと思う。この機械は冷酷さにおいて、自分を超越している。

爆弾の飛び込んだ穴はめくれ返っている。

ジョルノは全身が燃えるように熱かつた。地面に接する頬と手のひらだけがひんやりと冷たい。何もできなかつた。ただ吉良吉影を見つめることしかできなかつた。

「ゴールド・エクスペリエンス」

「遅い」

ジョルノはミシンをかけられたみたいにならずたにされた。そこだけ萎んだ花卉のような形で、周りの皮膚より黒ずんで厚ぼったく変色していく。

爆弾がどこからともなく現われて、目の前に爆発、耳には爆音が遅れて鳴る。

「ジョルノッー！」

「早く逃げてください、仗助先輩ッー！これくらい、なんでもないッー！」銃声が響き、弾丸は金属音を伴って乱れ飛ぶ。重い金属的な衝撃音

が二度、山中に響いた。正体不明の弾丸が空間に穴をあけながら過ぎる。雨のごとく飛来するそれは、山上から雨のごとく注ぐ。

銃が花火のような音を立てて撃ち出されるたびに、豆を炒るような小銃を発散する音がした。思ったより軽くはじけるような銃声が響く。はずみをくらった小さな動物のように、弾倉が軽い音で回転する。掃くように弾着の水しぶきをくぐり抜けながら、ジヨルノたちは走った。

まるで機関銃である。撃った機関銃の反動で肩に衝撃が走ると同時に、乾いた音が響く。どん、と破裂するような音がしたのはその時だ。勢い良く、鉄の杭を壁に打ち込むような、瞬間的ながら激しい響きが、聞こえた。

すさまじい銃声が起こった。それはこつちからの掩護射撃と、敵からのと錯綜し、雹の降るように入り乱れた。

「ジヨルノ、何とかならねーのかよー！」

「ダメです、ゴールドエクスペリエンスにスタープラチナ程の緻密さはない。なにより着弾から爆発までの時間が短すぎる」
「くっそー」

ジヨルノ達は正体不明の爆弾から逃げの一途をたどる。

平地に出るとようやく一望に見わたせた。向こうからももうもうと黒煙が上がり、微風につれてこちらの方へ流れていた。きな臭い匂いが漂ってきた。煙は勢いよくなったかと思うと少し収まりというのをくりかえしていた。

深い疲労が海のように全身をおしつっむが、仗助たちは耐えた。木々の焼け落ちる轟きと、物のはぜ飛ぶつんぎくような響きが、怒涛のように揉み返す。焦がして燃え盛る火の帯がじわじわとジヨルノたちを追い詰めていく。火事の炎が午後を一樣の血の色に焦がし、煙と火の子が渦を巻きながら奔騰する。焼け跡から吹きつけてくるザラザラした異様な風は、まるで不快な固物の撫で回すような感触を持っていた。

「マジかよ、これじゃあ承太郎さん戻ってこれねーじゃねーかつ！」

運悪く承太郎はブラックウオーターパークの男を車に押し込めて

連行しているところだった。いつもなら吉良吉影はもつと遅くに帰宅すると聞いていたのだが、先程までのにわか雨により早く帰宅してしまつたらしい。

「…………… 仗助先輩、やるしかないですね」

「…………… グレートだぜ、こいつはよオ。やってやろうじやねーか」

「吉良吉影ツ……………」

ジヨルノたちの睨む先には男がひとり悠然と歩いてくるのが見えた。ここでは狭い。狭すぎる。戦略的撤退だとばかりに2人は走り出した。

「それにしたつて火の回りがはやくねーか？ さつきまで夕立ちだつたつてのによ」

「…………… もしかしたら、雨が降つたからかもしれない」

「えっ、なんでだよ。フツ―燃えないだろ」

いえ、とジヨルノは首を降るのだ。なにごとにも例外はつきものだと。

「普通電線は絶縁体で覆われていますが、雨で樹木などが接触すると、剥がれてしまうことがあるんですよ。そうすると樹木と電線が直接接触れることになります。一般家庭へ引き込まれている電線はライン、ニュートラルと2本ですが、このうちニュートラルは柱上変圧器で接地線に繋がっているので大地から生えている樹木と接触しても問題無いのですが、ライン側はAC100Vがまともに加わってますから樹木と接触した場合、樹木へ電流が流れます。この電流が雨などで増加し接触部の発熱で発火により火災になることがあるんですよ」

「うげっ…………… てーことは、さつきから爆発しまくってんのは、わざと火事を起こしてるってことかよ?!」

「そういうことですな」

足早に移動したかきがあつて、激しい火花を散らしながら落ちてくる電線などから逃れることに成功する。ミステリの最終章みたいな光景に仗助は顔を歪ませるのだ。吉良吉影に生きて返す気配が微塵

も感じられないから。

「仗助先輩、ちよつと」

「あ？なんだよ、こんなとき……うげっ、なんだよそれ。勝手にスタンド使うなよ、ブランドなんだぞこのアクセサリー！」

「火事だから焼けたら終わりですが、気休め程度のお守りをあげますよ。電波虫避けのサボテンです」

「忘れてたッ……電線焼けたら電波虫やばくねーかッ!？」

「漏電した時にもろとも焼け死んでくれたらいいんですけどね……あるいは飛んで火に入る夏の虫」

「うげえ、焼けてる焼けてる……さすがに高温じゃ死ぬから逃げて当然だよなッ！あーよかった、まじで良かった。下手したらカラスも相手にしなきゃいけないかったんだもんなあ……先に捕まえてよかったぜ」

ぱちぱち音を立てながら落ちてくる焼け焦げた電波虫たちを払いながら、ジヨルノたちは歩みを進める。

「しかしまずいな、だいぶ火の手がまわつてきましたね。これで僕はだいぶん手が封じられた。僕のスタンドは生物が生きられる環境じゃあないと生命を作り出せない」

「この熱さじゃあだいぶんキツイな……無理すんなよ？さつき俺庇って怪我してんだからよ」

「治してもらったから大丈夫ですよ。だいたい他のみんなは治療もままならないから隠れてもらっているんだ、君が倒れたら完全に詰むんです。最大戦力がヒーラーなんて笑えますね」

「パワーが貧弱なのがわりーんだろ、拗ねるなよ」
ジヨルノは肩を竦めた。

「これだけ派手な山火事だと通報されまくってるだろうな……さすがにスピードワゴン財団もみ消しは無理なはずですよ。救急車やら消防者やら野次馬が大挙して押し寄せて、奇病に集団感染なんてことにならないように急ぎましようね仗助先輩」

仗助はありありと想像してしまったよう度何度も頷いた。シャレにならない話である。

「あー！あの人が旦那とスーパーフライに引きこもってんのはそのせいかよっ！！なんだってあんなどこにいるのかずーっと不思議だったんだぜ！あのヤロー、ここまで初めから考えてやがったなあ！」

仗助の言葉に目を瞬かせたジヨルノは気づかなかったと呟いた。

「なるほど……満を持してのXデーが迫っているから、予行練習というわけですか。仗助先輩、なにがなんでも今日で終わらせませすよ」「おう。てんで自覚できてねーがな」

ジヨルノたちはまた弾け飛んだ火花を睨みつけたのだった。

弱点はないと信じていたシアーハートアタックの弱点を吉良吉影は既に知っている。吉良はキャタピラの回転する耳障りな音を聞きながら、ジヨルノと空条承太郎との闘いを心に思い描いた。

シアーハートアタックは自動追尾型スタンド。約三十七度前後の温度に反応し、それを爆破する。証拠は一切残さない。だが、体温よりも高い熱を発散する物があれば、それを優先して爆破する。それはいい。全ての体温よりも熱のある物を破壊し尽くせば、いずれは体温、つまり敵をターゲットにし、爆破するのだから。

しかし、ジヨルノのスタンド能力の前では無力だった。サーモグラフィ機能を看破された時点でデコイを用意されて、シアーハートアタック単体では、追撃爆破が不可能になることもある、と知った。しかも物理的には無敵でも毒などの搦手にも弱いと食中毒になって改めて気がついた。その弱点をカバーするために、吉良吉影自身もあえて前に進んでいるし、ジヨルノ対策は万全である。

キラークイーン的能力をシアーハートアタックに切り替える。不吉な音を響かせて、コンクリートの地面を走破する戦車。前面にドク口の顔が描かれたそれは、警戒心を煽るだけの何かを持っていた。

「コツチヲ見ロオオオオオオオ」

不気味な死者のような、抑揚のない言葉さえも発している。1台、また1台、と増えていく。虫の矢の破片をキラークイーンが取り込ん

でから、なぜか能力が飛躍的に向上したのだ。それに気づいたらしく、ジョルノたちはドクロ戦車に対する警戒の水位を高めて身構える。

彼らの行く場を極端に狭め、じりじりと追い詰めながら複数のシアーハートアタックに前進させる。それだけでも射程が短い彼らには脅威なのだ。ジョルノは苦々しい顔をしながら牽制にツバメを飛ばしてくるが、爆発をカウンターされてもダメージなどない。木々で邪魔されても灼熱の大地では育ちが悪く、シアーハートアタックに爆破されてしまう。クレイジーダイヤモンドの両腕で、シアーハートアタックの襲撃を受け止めた。

「何てすさまじいパワーだよ、こいつッ！」

仗助はクレイジーダイヤモンドの両腕で押さえつけながら叫ぶ。

見た目、人の拳くらいの大ささしかないシアーハートアタック。しかしその内包するパワー、そして想像よりも遥かに重いそれは、一度交戦した時よりパワーとスピードに秀でたスタンド、クレイジーダイヤモンドでさえも苦勞させられる程だ。

足場を邪魔されたところで、爆破と前進を繰り返せば数の暴力でなんとでもなる。真つ二つにすることができないまま、クレイジーダイヤモンドは重量とシアーハートアタック自身の持つパワーに負ける。余りに頑丈なのだ。これはジョルノと仗助にとって初めての経験であり、恐怖でもあった。

かちり、という音を聞いて、とっさにシアーハートアタックを投げ飛ばした。そしてゴールド・エクスペリエンスで自分たちの身体を護るようにして地に壁を作る。シアーハートアタックの爆発で生じた煙がもうもうと立ち込め、山全体を包み込むように広がった。

「今ノ爆発ハ人間ジャネエ〜〜〜」

自らの爆発でも傷一つ負っていないシアーハートアタック。高音域の非音楽的な異音を奏でて、シアーハートアタックたちが律義にも仗助たちを追い掛けてくる。

「これならどうだッ！」

ジョルノはシアーハートアタックが飛び掛かってくるタイミング

を見計らい、ゴールド・エクスペリエンスを発動する。シアーハートアタックは獯猛に襲い掛かる。樹木をひしゃげながら飛び交うシアーハートアタックたちは、電柱が倒れ、電線に絡まれて進行不能となる。衝突したシアーハートアタックたちは、一瞬だけ動きを止めた。仗助がその隙を見逃すはずもない。

「自動追尾の弱点は、本体からその動きをコントロールできないところにある。単純な動き程、利用しやすいものはない……」
「これならこっちのもんだぜ！」

破壊できないなら動きを止める。ただ、それだけのことだ。もつとも、あのパワーからして、時間稼ぎ程度にしかない可能性もあるが、その少しの時間だけで充分だ。シアーハートアタックは、動きを制限され、虚しくナメクジのように這いつづけている。戦車である以上、爆発で無理やり突破するにしても足場の悪さは足を引つ張った。仗助はシアーハートアタックから視線を外し、本体である男に目を向ける。

接近戦になる危険性を覚悟の上、本体ごと前に向かったのだが、吉良が仗助たちに迫るより早く、シアーハートアタックの攻撃が始まり、闘いの場から一人、取り残されたように見える吉良だが悠然としたものだ。

（あの異様な落ち着きっぷりはなんだよ、気持ちわりーなあ……）

吉良は不敵に笑う。シアーハートアタックと闘う仗助たちにゆっくりと近寄りながら、吉良はスーツのポケットから一本のピンを取り出した。

単純ながら、単純だからこそいいアイディアだ、とばかりにピンを眺める。この1ヶ月間、考える時間はたくさんあったのだ。吉良は、今、まさに単純ながら賞賛するに値するアイディアを試みようとしていた。右腕を振りかぶり、手にしたピンを投げつけようと構える。

シアーハートアタックの爆発が起こった。吉良は爆風から護るように、振りかぶっていた右腕で顔を覆う。爆煙が晴れると、吉良と仗助たちの距離はまたいつそう離れていた。爆風に煽られていたが、傷を負ってはいない。シアーハートアタックは仕留めそこなったが、ま

だまだシアーハートアタックはあるのだ。追い詰めるのが仕事なのだから構わないだろうと吉良は考えた。予想の範囲内だ。だまだシアーハートアタックは、続けざまに彼らに襲い掛かるのだから。「ん？」

電柱が倒れてきて、吉良は咄嗟によけた。砂煙が舞う。ハンカチを探っていた吉良吉影は、上からなにかが飛びかかってくることに気がついた。

「蛇？ああ、また同じ手か」

シアーハートアタックが破壊できないから本体たる吉良に攻撃する。電柱はフェイク、蛇が本命。前はスイセンだったからずいぶんと殺意が高いが無駄だ。

「だが、私の方が上なのだよ。大胆で緻密な行動を心掛け、常に犯罪を知られずに生きて来た私の方がね」

フッフ、と吉良は笑いを抑えられない。噛み付こうとした蛇を振り払っただけで蛇はすさまじい力に嫌な音をたてて弾き飛ばされる。硬質化した手に立てられる牙はない。

「汚れてしまったじゃあないか」

忌々しげに吉良はハンカチで執拗に手を拭く。明らかに人間では無い色合いに変化した手が見えたようで、ジヨルノは舌打ち、仗助は驚愕が浮かんでいる。

シアーハートアタックが電柱をあとかたもなく粉微塵にするまで吉良吉影は動かないし、絶対にジヨルノと仗助の射程範囲には入ってこない。シアーハートアタックによる前進が再開してしまい、2人の注意はまたそれる。防衛に走らざるをえなくなる。炎や黒い煙に阻まれ、静かに気配を消して近寄っていた吉良の右腕から、小さなビンが投じられた。その一瞬、シアーハートアタックが視界から全て消えるのを視界にとらえられるほどの余裕は2人にはない。

「なんだッ!？」

ジヨルノは自分に向かって飛んで来るビンを凝視する。

「これも爆弾……？どっちだ!？」

仗助はクレイジーダイヤモンドの拳をビンに向けて放とうとした

が、ギリギリのところその誘惑を押し留める。このビンが爆弾にさ
れているのならば、拳で叩き落とすことは余りに危険な賭けだ。仗助
はビンから逃げるように、身体を後ろへと投げ出す。一瞬でも拳をビ
ンに向けてしまった仗助には、なにかを盾にする暇はなかった。

「ゴールド・エクスペリエンスト」

凄まじい速さで木が成長し、木がその瓶ごと空に押し上げられる。
本当は地面を這うように成長させて吉良吉影にぶつけたかったのだ
が、地面が熱くなりすぎて距離を稼げないと踏んだ上での判断だっ
た。

カチリ、とその音をジョルノと仗助が耳にした瞬間と、山全体揺る
がす大爆発の瞬間はほとんど同時だった。

「フハハハハハハハハ」

吉良の高笑いが響く。勝った。自由になった。1ヶ月の間、延々
と睡眠の妨げとなっていた不安材料は今ここに消滅した。ジョルノ
の生体探知は非常に厄介だし、仗助の修復する能力は汎用性が高すぎ
る。銃の弾丸すら銃に返してしまうのならば、吉良の体の一部がとら
れたら最後せっかく人間の未練をかなぐり捨ててまで人外化したと
いうのに意味がなくなってしまう。吉良吉影にとってこの2人だけ
は絶対に殺さなくてはならない相手だったのである。

冷静に物事に対処しチャンスをものにする。吉良吉影はいつだっ
て強運と土壇場の集中力、機転によりトラブルを乗り越えて来た。一
度たりとも乗り越えられなかったトラブルはない。そう。冷静さだ。
石のように冷たい、気狂いじみた冷静さが必要なのだ。大胆にして緻
密な行動も、全てはその冷静さがあってこそのことだ。

実験段階だが、空気すらも爆弾に変えるキラークイーンだ。液体
だって爆弾にできるはず。液体であれば例え避けられようとも、その
飛沫を浴びせ、爆破することは容易い。そう思っていたのだが、シ
アハートアタックに注意を奪われた彼らには、そこまで警戒する必
要はなかったようだ。

吉良は自由に動き回っていたシアハートアタックたちを侍らせ
ながら自分を虎視眈々と狙っている不屈き者がいないか調べはじめ

る。温度さえあれば探知できる。そうやって風潰しに歩きながら、いまだ爆煙が立ち込める山道から、炎上してしまったログハウスに向けて歩き始めた。

「ぐうッー」

吉良は自分が叫んだ悲鳴の理由を正確に理解できなかった。背中に衝撃が走り、コンクリートに膝から崩れる。すさまじい爆発を横から感じたのだ。まるで玩具のように吉良吉影はふつとばされる。硬質化した体は体を保護してくれるが姿勢は崩れ、転がるしかない。

「こ、これは……ッー」

横腹をさすろうとした吉良の指先に脇腹がなかった。ぽつかりと空洞が空いている。慌てるようにして手を上下に動かし、ようやく背中に触る。

「ま、まさかッ!!」

吉良が振り返った先には爆煙がたゆたっている。その煙が空気に溶けるようにして消え去る毎に、吉良の焦りは反比例して増大する。煙を透かした先には仗助が立っていた。全身からおびただしい流血。弱々しい呼吸。腕の肘から下を失い、生きていることさえ不思議な男が立っている。

「爆破したはずではッ!？」

吉良は狼狽する。初めて狼狽した。

仗助は瞳にブラインドを掛けたように無表情で、一步一步近づいてくる。

「キラークイーンッ!!」

シアーハートアタックではこちらまで爆発にまきこまれてしまう。シアーハートアタックたちをひっこめて接近戦を得意としないキラークイーンに切り替える。爆発で腕を失った相手ならば、こちらが有利のはずだ。吉良は立て膝を突いたまま、近寄って来る仗助にキラークイーンの指先での乱打を浴びせた。

「助かりましたよ、スタンドはそれぞれ解除しなければ使えないようだ。温度で探知するシアーハートアタックも、僕のようにスタンドとしてはこの環境は相性最悪だったのだから」

「……！」

ジョルノが立っているその先に、鉄塔が見えた。吉良吉影は全てを悟る。

「数だ……数が多すぎたんだ、アンタの精鋭部隊は。だからスーパーフライに誘導されて突っ込むことになる」

その言葉に吉良吉影は青ざめるのだ。ジョルノを追いかけて何体のシアーハートアタックが追撃した？もしそいつらが巧みに誘導されて鉄塔に突っ込んだとしたら？攻撃エネルギーは全て反撃エネルギーとなつて反射されることは吉良も知っている。

鉄塔に与えた攻撃の位置・方向・力量がそっくりそのまま元の場所から反撃となつて返ってくるのだと。ジョルノはこれを利用して、攻撃する位置・角度を計算して攻撃を加えることでビリヤードのようにエネルギーを発射・鉄塔内で反射させ、吉良吉影への攻撃に転用したのだとしたら？

なにせシアーハートアタックにより辺りは火の海につつまれ、障害物はなにもないのだ。ジョルノではなくシアーハートアタックによる自爆の反射の先にいるのが吉良しかいないならば。

ドオン、という衝撃が連鎖的にやってくる。

「キラークイーンッ!!」

咄嗟に爆発で相殺しようとした吉良だったが、全ては防ぎきれない。いくら硬質化するにしても、連鎖的な爆発までは衝撃やダメージまでは軽減できない。

もちろんここまで誘導できたジョルノもただでは済まない。それなりに拡散した爆発で全身に大怪我を負い、あちこちダメージを負った状態では、避けるだけの余裕などない。

ジョルノは膝を折る。

「吉良吉影……やつとぶん殴れるぜ……！」

その隙を仗助が逃すわけがなかった。クレイジーダイヤモンドがキラークイーンの腕を捕らえた。

「なんだとッ!？」

仗助は腕を失っていたのではない。学生服の中に隠し、ジョルノが

作った偽物から血やらなんやらが滴っていただけなのだ。注意深く見れば、不自然な膨らみが分かったはずだ。

しかし、吉良は見落としていた。圧倒的有利な状況が彼を油断させたのだ。

「何ッ！」

「てめーみてーな殺人を何とも思わない人間には相応しい最期つてもんがあるよなアツ!!」

「こ……こんな事が……こんなヒドイ事が……この吉良吉影に……」

クレイジーダイヤモンドが唸りをあげる。

「いくぜえええええ！ドラララララアツ!!」

ダイヤモンドは砕けない2

「東方仗助ッ……」

吉良吉影は呪詛を吐く。

剃刀でも走らせたような痛みが走る。火傷痕のようだった。目を背けたくなる種類の傷だ。痛いというより痒いほどの浅い傷が、紫色に膨れ上がった二の腕に走る。跡が青あざのように広がり、鮮血に滲む隙もない深い傷からはザクロのように赤い肉をはみ出している。

ゼエゼエ息を吐きながら、延焼する大地に突っ込まれて、からがら逃げ出した体を見る。

焼け爛れた皮膚が乾き切るまでに二箇月以上要しそうな中々の重傷だ。皮膚が油紙の一枚のようにあちこちめくれている。体のところの皮膚がべろっと剥けているのだ。血は既に流れやんで肉の上にとどまっている。動脈のところポツリと腫れている。二の腕の赤い部分に水泡のようなものが点々としている。シャツの袖が裂かれ、腕に深く刻まれ、濃い血が滲み出ている。

「なぜ……なぜ私がこんな目にッ……」

血のしたたりは体から離れて宙に飛ぶ毎に虹色にキラキラ輝く。血まみれの腕はだらんとしている。肉が削がれて骨が見える、ちぎれた腕や足が人形の部品のように転がっていた。ねっとり布が傷に張りついている。ピンクのケロイドがふくらはぎのずっと上の方まで皮膚を引きつらせている。

ここまで追い詰められてなお、吉良吉影に反省の色は見られなかった。

体のあちこちがグレープフルーツの果粒のような、ぷちっとした肉が顔を覗かせていた。おかげでスーツが血だらけだ。傷は、スパツと浅くきれいに切れている。ぱっくり開いた傷口のようすは、たとえば地底旅行をしているようなもので、普段見慣れたおのれの顔の下にひそんでいる異界の光景だ。

血膿に汚れて重そうに垂れ下る布地を、そばでも食うような手つきで引っ張り上げる。鈍角が強引に引き裂いて行った傷は、石榴のよう

に赤い肉をはみ出していた。負傷した部分だけ、吉良吉影の皮と肉と骨は燃えあがり、まるで生命がそこで爆発したような感じだった。

だんだん呼吸困難の度を増して浅薄な呼吸を数多くしなければならなくなってきた。

スーツはずたずたに切り裂かれ、体のあちこちが狡猾な猿のようにひどく赤茶けて縮んでいた。

未だに闘志が尽きない吉良吉影に仗助は怒りが増大するのだ。

「静のお母さんはよオ……もつといてえ思いをしたんだぜッ……死にたくなかったのによオッ……」

仗助はパーンと頬を打つ。強くぶたれた頬の皮膚は、ぴりぴりと細かく震えるようだ。思ったより大きな音がした。吉良吉影は脳天に衝撃が走った。ぐらりと視界が回転して、平衡感覚がおかしくなる。一発くらい殴っても気分は晴れない。

「キラークイーンッ!!」

接近戦が得意ではないが、岩人間と化した吉良吉影にはなかなかダメージが通らない。ボロボロではあるが今だに消えない意思の炎がキラークイーンを焚き付ける。

キラークイーンの渾身の力を込めた右の正拳突きがとぶ。うなりを上げて腕が振られると仗助の顔が引きちぎれるほど横を向いた。歯が折れたのだろう。鮮血がゴボゴボと溢れ出ている。黒いマスクをしているように鼻から下は地に濡れてドロドロだ。

「ドラーアッー」

即座に反撃として仗助は振幅の短い一撃を左側の腎臓に送り込んだ。音のない、しかしおそろしく強烈な一撃だった。吉良は激痛が全身を貫いた。すべての臓器が縮み上がり、痛みが一段落するまでまとも息ができなかった。目の前で大きな火花が散った。電線の電気系統が故障したのだ、と最初は思った。見当外れだった。吉良個人の神経の信号が瞬間的に切れ、視界が暗くなったのだ。

キラークイーンはとっさに仗助の胸倉をつかんだまま、腹を殴りつけた。獲物をもてあそぶように力を加減しながら一発、二発、少し力を入れて三発目。仗助の体は「く」の字の形に折れ曲がり、殴られた

瞬間は足が地面から浮いた。

お返しとばかりに仗助は拳を下からえぐつてみぞおちに入れた。支えをなくした吉良の体は、前のめりになってその場に崩れ落ちる。

「ぐううっ…… まだだ…… まだ終わらない…… 終わらせない…… キラークイーンッ」

吉良吉影はスタンドを呼び出す。

「んだよ、そのスイッチは」

「これさえ、これさえ押せばお前達の負けだ……ッ」

「まさかそいつア…… 俺達が繰り返した原因かつ！」

「そうだとしたら？」

「やめろ」

「いやだね」

「やめろつつつてんだろ」

「いや！押すね！」

「やめろオオオオオツ!!!」

最後の力を振り絞り、吉良吉影がスイッチを押そうとしたその刹那、すさまじい勢いで落ちてきたなにかが吉良の腕を切断した。スイッチを持った手はただちに硬質化するがあまりの重量にそのまま潰されてしまう。

「…… なに？」

あまりにもいきなりすることに吉良も仗助も固まってしまった。たまたらず上を見た2人は、黒煙の向こう側に無数のなにかが空を覆い尽くしているのがわかった。

「蝶？」

そいつは黒煙にいぶされるたびに姿を変えていく。吉良は青ざめた。

黒と褐色の模様と、ステンドグラスを思わせる透けるような薄い浅葱色かの斑紋様の羽、胸にも特徴ある斑模様がある美しい蝶だった。新選組が着ているあの薄い青が目を引く。あまりにも不似合いな蝶だ。一匹ではない。二、三、四、それは数えられないほど瞬く間に仗助と吉良吉影の視界をおおっていく。

「なんだこいつはッ!？」

吉良吉影が叫んだのは蝶に気を取られたからではない。高温とかした地上により弱々しく飛んでいた蝶はあっさりと死ぬ。暑さに弱いようだ。そいつは死んだ途端に硬い鋼鉄のバルブやでかい部品にかわり、吉良吉影に襲いかかってきたのだ。

仗助もいるというのにピンポイントでどんどん落ちてくる鋼鉄のがらくたの山に吉良は慌てて避ける。キラークイーンで吹き飛ばそうにも雨のように降り注ぐそいつらは絶え間なく襲いかかるのだ。上ばかり見なければならなくなった吉良は、さっきまで黒煙の向こうにチラついていたはずの鉄塔がなくなっていることに気づく。

「まさかっ……………」

吉良はさつきからジョルノが追撃にこない理由をようやく悟るのだ。たしかにあの鉄塔、スーパーフライは強力なスタンドだ。だが、あの鉄塔そのものがスタンドではなく、もともと一礫一が趣味のために建てた鉄塔なのだ。

実体があり、あとからスタンドをみにつけたも同然なのである。つまり、ゴールド・エクスペリエンスによる生命を生み出す能力の範囲に入ってしまうのだ。あれだけ瀕死になっておきながら、あの巨大な鉄塔を膨大な数の蝶に変え、はるか上空にまで飛ばし、そのまま吉良目掛けて爆撃させているのだ。

それだけ飛翔できる蝶なのだ、あの美しい浅葱色の蝶は。

ジョルノの名を呪詛のように吐き散らかした吉良は、今なお降り続く鋼鉄の豪雨をキラークイーンにより弾き返し続ける。視界の隅に、ニヤリと笑った仗助がうつつたとき、顔がひきつるのがわかった。「やるじゃねーか、ジョルノッ。こいつはいいお膳立てだぜッ!」

キラークイーンは複数の能力をもつが、切り替えないと発動することができない。巻き戻しのスイッチを押そうとすれば、たちまち鋼鉄のガラクタに全身をたたき潰されて死ぬくらいの距離まで、鋼鉄は迫りきていた。

スイッチを押そうとしていた手ごと地面にぐしやりとしてしまったのだ。殺意を感じるほどの近距離で、吉良はその存在に気づいてし

まった。いくらキラークイーンがすべてを一瞬で粉微塵にできる爆発能力を持つていても、蝶と鋼鉄と2回も爆発させなくてはならない上に、蝶の群れ自体ははるか上空にあるのだ。あまりにも遠すぎた。

鋼鉄の雨から逃れるのに精一杯な吉良と周囲に散乱する無数の鉄塔の残骸。そして直す能力をもったクレイジーダイヤモンドの東方仗助。この瞬間にすべては決した。

「ド拉拉ララララララララララララララララア———!!!」

鋼鉄の山がたちまち元の姿を取り戻していく。あるべき場所にもどり、あるべき高さになっていく。仗助のラッシュを食らった吉良は鋼鉄の山につっこむがラッシュは止まらない。解体された部品たちが自動的に鉄塔を形成していくさなか、吉良も問答無用でその中に融合していく。アヌビス神を壁に閉じ込めようとした時とは違い、埋め直すのではなく、鉄塔そのものと一体化していく。

スタンドを使った殺人鬼は法では裁けない。唯一の殺人はすでに時効が成立している。普通のやり方でこの吉良吉影を裁く方法はこの世界に存在しないのだ。ならば、と仗助は考えたのだ。おれが裁いてやる、と。この町を守る大好きな祖父、東方良平のように、このおれが、吉良吉影を裁いてやると。

刑は執行された。

出来上がった鉄塔のどこかに吉良吉影が浮き上がっているはずだが、どこにいいのかまではわからない。精根尽き果てた仗助は、やり切った満足感をたしかに胸に抱きながら緩やかに意識を失ったのだった。

「こいつはアサギマダラっていうんだ」

ジヨルノの指もとに蝶が止まっている。

翅の内側が白っぽく、黒い翅脈が走る蝶だ。この白っぽい部分は厳密には半透明の水色で、鱗粉が少ない。翅の外側は前翅は黒、後翅は

褐色で、ここにも半透明水色の斑点が並ぶ。翅を閉じたときに、尾に当たる部分に濃い褐色斑がある場合がある美しい蝶だ。

アゲハチョウの様に細かく羽ばたかずにふわふわと飛翔し、人をあまり恐れずよく目にするため人気の蝶だという。

日本全土から朝鮮半島、中国、台湾、ヒマラヤ山脈まで広く分布し、標高の高い山地に多く生息する。九州以北で成虫が見られるのは5月から10月くらいまでだが、南西諸島では逆に秋から冬にかけて見られる。

アサギマダラの成虫は長年のマーキング調査で、秋に日本本土から南西諸島・台湾への渡り個体が多く発見され、または少数だが初夏から夏にその逆のコースで北上している個体が発見されている。日本本土の太平洋沿岸の暖地や中四国・九州では幼虫越冬するので、春から初夏に本州で観察される個体の多くは本土で羽化した個体と推測される。

直線距離で1,500 km以上移動した個体や、1日あたり200 km以上の速さで移動した個体もある、オオカバマダラのような大移動をする蝶だ。アサギマダラの不思議は、まず、渡り鳥のように季節によって長距離を移動する習性を持つことだ。しかも集団でそれを行う。何がこの「渡り現象」を誘引しているのかは研究でも特定されていない。定期的に国境と海を渡ることが標識調査で証明された蝶は、世界に1種、このアサギマダラしかない。

具体的な事例として、岐阜県下呂市で放蝶した人と兵庫県宝塚市でその個体を捕まえた人が、2年続けて双方とも同じ人物だった。なお、その個体は9月下旬に放蝶され、10月12日に捕まえられた。レッドリストで準絶滅危惧と評価されている。

「この蝶は、時期、空間、植物の状況に柔軟に対応して飛んでいる。台風を活用して移動したり、雨が降る前に一気に移動したりと気象を読む能力に優れている蝶です。僕に忠実じゃなけりやまずこの山から逃げていただろう」

蝶は熱さのあまり死んでしまい、ジョルノの手にはメモ蝶がのこされた。

「ちなみにアサギマダラは鳥などに捕食されることはほとんどない。それは体内に毒をもっているからだ。毒と言っても誤って食べた鳥が嘔吐する程度で、人がさわっても問題はない。この毒は、幼虫の時に食べるガガイモ科のキジヨランの葉や、成虫になって吸うキク科のヒヨドリバナの蜜に含まれるアルカロイドが体内に蓄積されたものとされている。だから、ほかの個体がいるとしても、カラスの心配はあんまりしていなかった」

ジョルノはゆつくりと歩みを進めていく。ジョルノ自身、決して無傷という訳では無い。スーパードライのカウンター能力を多少なりとも食らっている。ゴールド・エキスぺリエンスのパワーがクレイジーダイヤモンドより低かったことを喜ぶのは後にも先にもそれだけだった。

「これは一種の賭けでした」

なにかを書き始めたジョルノは、ゴールド・エキスぺリエンスで今度はツバメに変える。そしてツバメは空高く飛び去っていった。

「もし鉄塔がスーパードライ以外のスタンド能力を受け付けなかったら、その時点で詰みだ」

灰だらけになるのも構わないでジョルノは近づいていく。

「いや、正確には根元から掘り起こさなきゃいけないから手間がかかる。その分のタイムロス、スーパードライごと倒すには鉄塔は大きいからなお時間がかかるだろう。吉良吉影にスイッチを押されていたらまた巻き戻し。僕たちは負けていた」

その先にはスーパードライがたっていた四角い空間がぽかりとあいていた。燃えるものがないもないせいでじわじわ隅から燃えていた。

「火事のさなかに一確一が目覚めて僕達や救急車、パトカーあたりが奇病に集団感染することが確定する。覆すことはとても難しい。雨は降るし、吉良吉影ははやく帰ってくる。変わらないことは変わらないからな。そういう意味じゃあ、どっちが勝っても美味しいところ取りなあなたは初めからわかっていた事かもしれないが」

ジョルノの言葉に帆波奈帆子はなにも言わない。傍らにある旦那

の岩を愛おしげにさすりさすりしながら眺めている。

「わたしは賭けに負けたのよ。最後の最後に掴み取る事ができなかった。いつだってそう。アンタたちにこれからを委ねるしかない。今までと同じよ、何も変わらない」

吐き捨てるようにいう彼女にジオルノは首を振った。

「少なくとも、アンタの子供はアンタの思っている以上にいい子に育ってる。そのおかげでアンタはこれから助かるんだ。施しじゃない。僕は帆波夏帆と約束したんだ。だから守るさ」

き、と彼女は睨みつける。

「知ったような口をきかないでちょうだい。八つ裂きにしたくなる」

ジオルノはちいさく笑った。

「出来ないことは言わない方がいいぞ、無駄だからな。アンタは世界で一番大事な旦那から離れることなんて出来やしないんだ。そうじゃなきゃ21年前に感染させてきた加害者に甲斐甲斐しく世話なんてできない」

彼女は目を見開いた。まさかバレているとは思わなかったようだ。

「アンタは21年間、1度も一礁一に会ったことがないんだ。最後の一日を前にアンタはいつも休眠期に入る。そして、入れ替わりに一礁一が目を覚ます。アンタ達はお互いに休眠期のサイクルに入ってしまうんだ」

ジオルノは石になりつつある女を見つめた。

「なんだったって毎回アンタが執拗に僕を殺そうとしたかがわかった。僕がアンタたちのサイクルに気づいたら、来ないことがわかっていたからだ。途中で死んだら遺言が残せなくなる。良く考えればツバメならカラスの餌食になるのに妨害されたことが1度もないんだ」

胴体まで石になった帆波奈帆子は目を閉じてなにもいわない。

「安心してくれ、帆波奈帆子。僕は約束は必ず守る」

すでに返事はない。そこには岩がふたつ、鎮座しているだけだ。息を吐いたジオルノは、気力だけで立っていたためにゆっくりと座り込む。

サイコロのペンダントをツバメに変えて離れた。康一たちが助け

に来てくれることを期待しつつ、一酸化炭素に巻かれないよう最後の力を振り絞り、ゴールド・エキスペリエンスを発動する。いつまで持つかわからない草木のドームの中でジヨルノは意識を手放した。

最終話 汐華初流乃には夢がある

露伴先生たちに発見された僕は、仗助先輩と共に肩をかりたり背負われながら鉄塔の山を下り、すぐさま待機していた救急車に担ぎ込まれた。スピードワゴン財団が帆波家で唯一の証言者となった帆波夏帆と急ごしらえで作り上げたカバーストリーにより、不運にも整備不良の電柱から発生した火災に様々なものが引火した結果、連鎖的に起こった大爆発の巻き添えをくった形となった。

どうして僕達があの場合にいたのかという肝心の部分については、行政にまでくい込んでいる帆波家のコネクションをフル活用したことで可もなく不可もなくな内容に置き換わった。急いで駆けつけてくれた承太郎さんが教えてくれた。半泣きのドナテロがなんだってゴールド・エクスペリエンスで治さないんだと怒ったが、規模がでかくなりすぎてスピードワゴン財団では隠匿できないのだ。

そして帆波夏帆にはお見舞いと称して不吉な花言葉の植木鉢をもたらった。全治3週間をいいことに見舞いにくるであろう帆波志帆に余計なことを言うなという牽制のつもりなのだろう。

あちこち検査されて、血を取られて、いろんな科をたらい回しにされた結果、僕は全治3週間の診断をもらった。すっかり日は暮れていった。最悪だ、クレイジーダイヤモンドもゴールド・エクスペリエンスも禁止だなんて想定外すぎる。明らかにテストが間に合わない事態に僕は嘆くのだ。

看護婦が消灯の時間を告げる。早くもどるよう言われながら僕は歩き始めた。

トイレの入り口に「採尿後はよく洗って戻しておいてください」と書いたラベルが貼ってある。病院というところは、やたらに何にも貼り紙がしてある。

ついさっきまでいた診察室では、聴診器やピンセットや血圧計が無造作に置いてあった。その細くくねった管や、鈍い銀色の光や、洋梨型のゴム袋は、なまめかしい昆虫のようだった。カルテに書き込まれたアルファベットの続け文字には、ぞくぞくする秘密めいた美しさが

あつた。

検査は、ローリングするボードの上に寝て、さまざま角度からレントゲン写真を撮ったのだ。この、うねうねとグラインドする床部は、遊園地の機械仕掛けの装置のようでなかなか楽しい。ラブホテルの回転ベッドによく似ているらしいと仗助先輩はにやにやしながら教えてくれた。

仗助先輩は朋子さんと東方巡査になにをやらかしたんだと問い詰められながら連行されてしまったのもういかなかった。保護者にもただちに連絡がいくのが未成年の悲しさである。せつかく何十回も繰り返してようやく明日を手に入れた英雄になってことをしてくれるのだ。

ちら、と好奇心から真つ暗な診察室をのぞくことができた。先生も看護婦もいなかった。そこは放課後の理科室のように薄暗かった。心霊現象はなさそうなので旧劇に興味を失った僕は歩き出す。

革靴の底がりノリウムの床の上で神経質な音を立て、現代医学の力の凝縮されていそうな設備が沢山ある中を見舞い客があるいてくる。病院の待合室をサロン代わりのする老人たちに挨拶しながらやってきた。

病院には独特の、暗さが漂っていた。人の思いや感情が人工的な薬品で消されたかのような、無表情さがある。病院の窓々にはうるんだ灯がともり、港にはいる満艦飾の船のように見えた。

まだ八時前だというのに外来受付の明かりが消されてしまった待合ホールは、薄暗い蛍光灯の中、古びたベンチが並んでいる。昼間、ここで百人を超す人々が順番待ちをしていたとは思えないほど狭い。

人々の姿が消え、夜間の待合ホールに残されているのは、古びたベンチと、カラフルなペンキで床に示された各病棟への矢印だけだ。ピンク色の矢印は産婦人科へ。黄色い矢印は小児科へ。そら色の矢印は脳外科へ。薄暗い蛍光灯の下、カラフルな矢印だけが華やいで見える。カラフルな矢印だけが場違いに見える。

「こんな所にいたのか、探したよ。大丈夫かい、初流乃君」

自販機でココアを飲んでいた僕に保護者の彼が心配そうに声をかけてきた。

「退院そうそうすいません」

「いや、いいんだ。大変だったね」

僕は首をふる。仗助先輩と僕は仲良く入院、ほかの人たちは治療をしたあと帰されたらしいが通院が義務付けられたとのこと。退院した矢先に僕が入院してしまったのだからさぞ驚いたに違いない。

「結局僕はなにもできなかったな……」

保護者は心底申し訳なさそうにしているが、僕は首を降るのだ。なにもないことが一番いいに決まっている。一般人たる彼にはどうしようもない隔たりが僕達との間には存在しているのだ。

「先生から聞いたよ。課題と自習をこなしたら単位として認めると学校から言われたらしいね」

「よかったです。下手をしたら進学にかかわるところだった」

「ほんとにね、だからと言ってここで勉強はいただけじゃないな」

僕は肩を竦めた。保護者は親身になって世話をする気満々だと顔に書いてあるからだ。寝食を忘れてひたすら介護の手を尽くすつもりらしい。

たかが9ヶ月、されど9ヶ月、彼は彼なりに僕に対してそれなりに家族だと思ってくれているようだ。素直に受け取ることにする。最近、僕はようやく家族つてやつがわかってきたからだ。

「実は、またやり直すことになったんだ」

「昔、奥さんだった人とですか？」

「ああ。色々あって、久しぶりに話す機会が増えたから、結果としてそうなったんだ。まだ再婚するのか、恋人からやり直すのかは考えている途中で、お試しすることで同棲を考えてるところだった」

「おめでとうございます。よかったですね、2人で暮らせるじゃあないですか」

「まあまあ、待ってくれ。話はまだ終わってないよ。まさか初流乃君が入院するとは思わなかったんだ。3人で暮らす気満々だったから家具を新調しなきゃあならないと張り切っていた矢先だから驚いた

よ」

「……待つてください。今なんていいました？」

あまりにも唐突な申し出だったものだから、僕は驚いて聞き返してしまっただけだ。

仮説の上に築きあげた憶測があつたという間に崩れ落ちる感覚があつた。

あまりの意外さに、理不尽な仕方だ騙し討ちにあつたような気になる。

全ての想定を上回るくらい、僕は驚いている。

「本当ですか。本気でいつてるんですか、あなた」

永遠に降り止まないような豪雨が、瞬時に止まったかのような驚きがあつた。

世界がひっくり返ってしまったような気がした。終わってしまったと思つていたこととか、ほんのちよつぴりチリチリとしたこととか、そういうことが全て覆ってしまったようなそんな気がした。

僕の稚拙な予想をはるかに上回る意外なことを彼はいうのだ。

「まだ君の意見を聞かなくていいけどね。夏休みいっぱい通わなきゃいけないなら抛点はあるんだらう？それより先はお試しのあとでいいんじゃないかな。いきなり結論を出さなくても。少なくとも、9月までは君の保護者なんだから」

「たしかに、たしかにそうですね。まだ結論を出すのは早い。そもそも僕はあなたの奥さんだった人に数える程しかあつてないし、気が合うかはまた別の話だ」

僕は狼狽を隠すためにうなずいた。夏休みいっぱい単位をもらうために学校に通いつめなくてはならなくなつてしまったのは、まぎれもない事実だからだ。転校先からも課題が出されているのだ。まさかの二重である。互いに調整する気は微塵もないというのだから連携のレの字もない中学にはうんざりである。

「さあ、戻ろうか、初流乃君」

「わかりました。ところで1人来たんですか？」

僕は諦めてカバンを彼に持つてもらいながら歩き始めた。松葉杖

がなければつらいのだ。彼は笑いながらいった。

「まさか。君のベッドの前でソワソワしながら待つてるよ」

双葉千帆と琢馬が尋ねてきたのは、僕が入院してからちようど1週間たったころだった。

「私、二学期になったら母さんのところに行くの。再婚してるんだけど、事情を説明したら受け入れてくれるって聞いていたから」

「なるほど。よかったですね、あんたの父親はそれどころじゃあなさそうだ」

耐震偽装事件が地方の建築業界を揺るがしている。双葉照彦も建築士として勤め先が疑惑を向けられているため、連日多くの報道陣がお仕掛けてくるのが昼のワイドショーで取り上げられていた。逮捕されるかどうかはまだわからないが、トカゲの尻尾切りで双葉照彦の独断として処理されるかもしれないという。

「千帆たちによくない環境だからな」

琢馬の言葉に僕はうなずいた。

「よくアンタの父親が許しましたね」

「私達の関係を？」

「そう」

「私が許す代わりに、許してもらったの」

その言葉に僕は琢馬をみる。琢馬は無機質な顔をしたままにも言わない。どうやら双葉千帆はすべてを知った上でいつているらしい。どこの聖人君子だといいたくなかった。

近づいてきた男が実は異母兄弟で、父親が同じで、しかも琢馬の母親は父親に惨たらしい方法で殺されていて。母方の両親は失意のうちに死んでいて。

その復讐のために近づいてきた、しかも方法が恋人になって子供をつくることだなんて。復讐対象が幸せな家庭が夢で孫をだくことが夢だと知った上での計画だったなんて。琢馬は双葉千帆に刺されてもおかしくはない。だがその矛先は父親に向けられたようだ。

それだけ家出した先で襲われたところを、投げナイフで不良の耳を切断することで助けてくれた琢馬は、大切な初恋であり恩人だということなのかもしれない。たとえそれが母親の陰惨な遺体をメモリーオブジェクトから救い出した帰り道が理由だとしてもだ。

黒い琥珀のネックレスをつけている双葉ではなく、琢馬に僕は聞いた。

「アンタもか？」

「千帆は勝手に許しただけだ。でも、僕が許さないよう強いることはできない。千帆が許すよう強いるように」

「なるほど…… アンタたちの父親は孫を受け入れたわけだ。そのわりにまた入院したようだけど」

「ジヨルノみたいに火傷したみたいだな」

「…… とりあえず、おめでとうございます」

僕はその不自然さから目を逸らした。母親になろうとしている双葉千帆は誰よりも強くなろうとしているのだ。自分とひきかえに琢馬を産んだ女性のように。そのためならば父親にさえ牙をむく意思が今の双葉千帆にはあった。

琢馬はあいかかわらず能面をはりつけているものだからわかりにくい。双葉の方がしゃべっているあたり予想外だったのかもしれない。ややねじ曲がった復讐劇は双葉照彦にだけわたで首をしめつけるように続いていくのだ、きつと。今ここに琢馬がいるということは、一番近くで幸せと絶望を直視しつづけることにしたらしい。

変わったな、と僕は思った。

双葉のヒト絨毛性腺刺激ホルモン（妊娠初期に分泌され、黄体が維持されるのを助ける）は、子宮に対して終始同じ態度をとり続けるだろう。彼らは黄体を支え、月経の到来を阻止し、胎盤を形成しつつある。双葉千帆は妊娠しているのだ。

まだその存在を下腹部にピンポイントで感じ取ることができない月齢ではないだろう。今はまだ小さい。何かのしるしのようなものにはすぎない。でもそれはやがて胎盤を得て、大きく育っていくことだろう。それは双葉千帆から養分を受け取り、暗く重い水の中で徐々に、

しかし休みなく着実に成長していくだろう。

その小さなものはへその緒から滋養を吸い、刻一刻大きさを増していく。生ぬるい暗闇からの脱却を求め、彼女の子宮の壁を蹴っている。それは光と自由を欲している。

親が子を生むように思っているが、親なんてものは、ほんの仮の宿にすぎない。

「……………写真とかあるんです?」

「みたい?」

うれしそうな双葉に僕はうなずいた。怖いもの見たさだ。

その写真を見せられた時、凍りついた夜空に降る雨のようだと思った。夜空は深く清らかな黒色で、じっと見続けているとめまいがしそうだ。雨ははかない霧のように空を漂っていた。

そしてその霧の中に、ぽっかりそらまめ型の空洞が浮かんでいた。そらまめ型の空洞に目を凝らした。夜を濡らす霧雨の音が聞こえてきそうだった。その空洞のくびれた隅にひっかかっているのが赤ん坊だった。それはもろい影の塊で、風がふくと夜の底へはらはら舞い落ちていきそうだった。

「看護婦さんがやってきて、歯磨き粉よりもずっと大きいチューブから、ゲル状の透明な薬を絞り出してお腹に塗ってくれるの。その時の感触がとても好き。ゼラチンみたいに澄みきって滑らかな物質が、肌を撫でてくれるの。不思議な気持ちになれるわ。今度はお医者さんが、超音波装置と黒い管でつながったトランシーバーみたいな箱を、わたしのお腹に押しつけるの。さつき塗った薬のおかげで、それはとてもぴったりわたしに密着してくるわ。その時、モニターにわたしの身体の中が映し出されるの」

双葉はすでにつわりといわれる症状に見舞われているらしい。バターと脂と卵と豚のにおいが、家中にこもってて息ができない。朝目が覚めたら、そのすさまじいにおいが身体中に染み込んできた。

口も肺も胃もひっかき回されて、内臓がぐるぐる渦を巻いていた。どうしてうちには、こんなにおいがあふれているのか。なんでもかんでも気持ち悪いにおいを振りまくのか。あらゆるものがにおうの。

一つのおいがアメーバみたいにとろつと広がって、別のおいがそれを包み込んで膨張して、また別のおいがそれに溶けていって、……もうきりがない。

においがどんなに恐ろしいものか分るだろうか。逃げられないのだ。においのない場所へ行きたい。病院の無菌室みたいな所。そこで内臓を全部引っ張り出して、つるつるになるまで真水で洗い流したい。

つわりはずぶ濡れのブラウスのように、じつとり彼女に貼りついてる。彼女は今、神経もホルモンも感情もバラバラになっているのだ。

「私ね、転校するの。汐華君と同じ時期ね」

「転校ですか」

双葉はうなずいた。

学校に通えなくなり通信制高校に編入することになるらしい。妊娠中は生活ががらりと一変するので、精神的負担も大きいし正直学校に通う事すら困難になる。

どんな形でも良いから学校を卒業して欲しいと母親からいわれたらしい。学校に行かずに卒業資格も無いまま成人してしまう方が後で苦労すると。将来的に子供を食わせていかなきゃならないので、できるだけ条件の良い仕事に就くためにも最低限高卒資格は取らなければならぬ。

母親は双葉にいったという。

「お母さん、昔はパート先で採用面接に立ち会ったこととかあるから分かるんだけど、女の子で中卒なんてその時点でアルバイトでも不採用決定よ。あなたがお腹大きくなって学校行くの恥ずかしいと思う気持ちと、自分の子供が他所の子と比べてみすぼらしい服を着ているのを見ると、どっちが辛いかよく想像して考えてごらんなさい」

そういわれたそうさ。

「自分の子供にダサイ服なんか着せたくない。自分でアルバイトして買ってあげたいと思ってても採用してもらえないなんて悲しい。頑張って今学校に通う」

通信制高校は全日制高校とは違って基本が自宅学習なので、課題をする以外の時間を使つて病院に通いながらも単位を取ることができきる。

さらに出産をした後でもそのまま自宅学習を行うスタイルで子育てをしながら通うことが可能。

乳幼児期はとにかく睡眠時間すらまともに確保出来ない状態だから、先生に相談して半年間は休学することになる。

「たった1週間でそこまで決めたんですか、すごいな」

「未練じゃあないの。このこのために私は学校に行くの。それは私のためでもあるし、琢馬さんのためでもある」

琢馬さん、か。

「僕も学校に行かなくちゃあいけない。アルバイトもだ」

「母さんの再婚相手、牧場しているの」

「琢馬も手伝いに？」

「ああ」

琢馬はうなずいた。呪いは祝福に変わったのかもしれない。少なくとも、今この瞬間の二人を見て僕はそう思うのだ。

「汐華君も遊びに来てね」

「琢馬に聞きますよ」

「僕に聞くのか」

「僕も手探りなんだ。家族が増えるかもしれないから」

僕の言葉に琢馬は驚いたように目を見開く。

「僕を引き取りたい人がいるんですよ。念の為言いますけど」

毎日誰かしらお見舞いに来てくれるので僕は退屈しない日々をすごしていた。空き時間には仗助先輩が遊びに来いよというものだから、談話室でだべっているのだ。

普通はこれくらい時間がかかるんだなあと骨がくつつくまでギブ

スやらなんやらをしている仗助先輩は恐ろしいことをいつていた。人のこといえねーじゃねえかというジト目には気づかないフリをした。

そういえば鈴音さんに吉良吉影について説明するには鉄塔をもつていった方が早い訳だがバラして蝶に運ばせたらいいのか相談した方がいいのかもしれない。そんなことを話していると空条さんがやってきた。雑談している僕達をみて少し安心したようだ。そして世間話は脱線に脱線をかさねていくことになる。

「えっ、空条さん帰らないんですか？」

「帰れると思うのか？論文書く時間もろくに取れなかったんだが」

「…… ああ」

「秋までに提出すりや大目に見てやると言われたからな、付き合ってもらうぜジョルノ」

「あんたもですか、空条さん……。露伴先生も電波虫についてうるさくてたまらないつてのに」

電波虫という言葉に空条さんはうんざりという顔をした。首を傾げる僕達に空条さんがいうのだ。見舞いがてもつてきた話はふたつあるのだと。

いい話は帆波一家が苦しんできた奇病についてスピードワゴン財団が本腰入れて調べ始めたこと。前途多難だが大きな一歩だ。

悪い話は電波虫の一部が社王町に逃げ出してしまい、交通事故といった被害がはじめていること。もはやスピードワゴン財団の手にはおえず、新種の虫ということで連日メディアが取りあげている。駆除に行政は四苦八苦しているようだ。

「ニュースが最近防虫剤の売り切れがあいついでるってのはこのせいかな！バラエティばっか見てたから気づかなかったぜ」

「そうだったんですか、知らなかった。テレビつける暇もないくらい見舞いに人が来るので」

「お前らも退院したら手伝ってもらおうからな。今から覚悟しておけよ。ただでさえ人手が足りてねえんだからな」

「うげっ…… マジっすか…… おれ課題山ほど出てるんすけ

ど……」

「僕もなんですが……」

「安心しろ、俺もだ。やれやれだぜ…… 後始末の方が長引いちまうとは思わなかった……」

どこか疲れた様子の空条さんに僕はご愁傷さまですとだけいっておいたのだった。

「ところでドナテロは？」

「あー、やつは今頃現場検証に駆り出されてるだろうな」

「またですか」

「ああ、まただ。その分休みや特別報酬は出すから頑張つて欲しいもんだぜ。スタンドの矢が見つからねえもんでな」

不穏な空気を残しながらも、たしかに社王町に平和は訪れたのだとぼくらは実感したのだった。

「空条さん」

「なんだ」

「この前話したように、あの石化する奇病について、定期的な調査書見せてもらえるんですよね」

僕の言葉に空条さんはニヤリと笑った。

「それがお前からの条件だからな」

「えっ、なんか約束したのかジョルノ」

「ええまあ、そんなところです。新しいアルバイト先が見つかったんだ」

「まじで？ いーなあ…… ほんとゴールド・エクスペリエンスは使い勝手いいよな」

「クレイジーダイヤモンドもなかなかだと思えますよ」

「もっと楽な金稼ぐ方法が欲しいんだよ、おれさ……」

僕は笑った。仗助先輩のように明日の予定を呑気に話すような気軽さで語り合える友人や、雲を掴むような壮大な夢やふるさとにあげられるように堪えがたい希望なんてものは無縁だと思っていた。

甘い夢想が大きく破綻して10年になる。希望のあるところには必ず試練がある。それでも大きく広がる入道雲のような夢を描いて

みるのも悪くは無いのだと、今僕はたしかに考えているのだ。

当面の僕の望みは「石化する奇病を治す」という望みよりももつと果敢はかない空想だ。寝ても起きても祈りのようにこの一つの望みを胸の奥深く大事にかきいだいているのだ。

目標を凝視するあまり、あたかもそれが実景であるかのように幻視や幻覚に襲われることもあるが、スタンド能力において思い込みはなによりも大切な要素だからそれでいい。

望みというものは、意地になって詰め寄りもなければ、現実は応じて来もしないのだと学んだ。夢にみるほど恋いこがれてみたところで仕方がない、猫が汽車に乗りたいたいと思うようなものだと思っていた僕はもう世界のどこにもいやしない。

僕は今、夢がある。汐華初流乃には夢がある。それはもつとどろどろして、もつと強く、とてつもなく美しいはずの「人間」というものに対する夢だった。

「医者にでもなるのか？」

「さあ、まだわかりません。空条さんだつて14で将来の夢なんて決めてなかったでしょう？」

「なんで決めつけてんだ、ジヨルノ」

「だつてジヨースターさんが言っていましたよ。18のころはまだ趣味は船や飛行機に関する本を読むことくらいだつていつてましたよ。いつから海洋冒険家になろうと考えたんですか？」

空条さんは眉を寄せた。

「ジジイ、また俺に無断で勝手なこと吹き込みやがつて」

「えっ、なんの話つすか？」

「なんでもねえ」

「空条さんが帰れないなら、ジヨースターさんも帰れないはずですよ、仗助先輩。色々話を聞いてみたらどうですか？楽しい話をたくさん聞けますよ」

「へー」

「おい、ジヨルノ」

「特に空条さんたちがエジプトのカイ」

「これ以上いとうと入院が長引くぜ」

「……言ってる傍からスタープラチナで殴るのやめてくださいよ」

僕は一瞬意識がとんだ。

しばらくして大丈夫か？と心配そうにのぞき込む仗助先輩と不機嫌そうに睨みつける空条さんがみえた。

ここから先は誰にとっても未知の領域だ。地図はない。次の角を曲がったところに何が待ち受けているか、曲がってみなくてはわからないし、見当もつかない。

深い池に石を放り込むとどぼんと大きな音があたりに響き渡るように、このあと池から何が出てくるのか、僕たちは固唾を呑んで見守っている状態なのだ。

僕がこれから迎える未来も、迎えない未来もあるということだ。未来はいくつもの枝葉に分れている。過去と現在についてはこのとおり。未来については「おそらく」である。

ひたすら進み入ろうとするその世界は、果てしなく、はるかかなたの渾沌未分の世界である。

まだ起こっていないことを検討するのはむずかしいだろう。